

禁野本町遺跡 2

枚方市

禁野本町遺跡 2

公務員宿舎枚方住宅(1期)整備事業民活プロジェクトに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一二年七月

公益財団法人  
大阪府文化財センター

2012年7月

公益財団法人 大阪府文化財センター

枚方市

# 禁野本町遺跡 2

公務員宿舎枚方住宅(I期)整備事業民活プロジェクトに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書





カラー写真1 8区第1面(南西から)



カラー写真2 12区第2面(南東から)



カラー写真3 10区(A2棟)第5面(北西から)



カラー写真4 9区第6面(北から)

# 序 文

淀川は、大阪の地にとっては、景観としても資源としても欠くことのできない川である。その川を望む枚方市禁野本町の高台において、このたび公務員宿舎枚方住宅（I期）整備事業民活プロジェクトに伴う埋蔵文化財発掘調査が行われた。

先史時代の石鏃から近代の火薬庫までが調査の対象となり、幾多の遺構・遺物を取り上げ記録した。なかでも今回の発掘調査では、古代の集落と近代の火薬庫という、同じ土地における人間の営みの結果としてはある意味対照的なふたつの貌を見ることになった。

奈良時代を中心とした集落跡では、足の踏み場もないほど重複関係の著しい掘立柱建物群をはじめ多くの遺構が見つかった。遺物も豊富で、土師器や須恵器といった土器ばかりでなく、長岡京内の遺跡との同范関係にある軒瓦、遠くの地からもたらされた緑釉陶器や灰釉陶器なども出土した。

いわゆる禁野火薬庫については、火工場、倉庫、石組溝、土塁、軽便軌道、厠、貯水池といった諸施設が立体的に姿を現した。近隣にも多大な被害を及ぼした昭和14年の大爆発から70数年の星霜を経てはいるが、爆発の痕跡はそこかしこに見られた。被災した強固なコンクリート構造物、あるいは散乱する幾多の砲弾片や薬莢など。それでも時勢は、昭和20年の終戦まで火薬庫の稼動を求めた。そこに、軍事施設の冷徹な性格がうかがわれる。

禁野本町遺跡の発掘調査および整理作業では、財務省近畿財務局、株式会社浅沼組、大阪府教育委員会、枚方市教育委員会、公益財団法人枚方市文化財研究調査会をはじめとする諸機関や多くの方々に多大なご理解とご協力を賜った。衷心よりお礼申し上げますとともに、今後ともなおいっそうのご支援をお願いするものである。

平成24年7月

公益財団法人 大阪府文化財センター  
理 事 長 田 邊 征 夫

# 例 言

1. 本書は、大阪府枚方市禁野本町二丁目 1844 - 1 ほかに所在する禁野本町遺跡（調査名：禁野本町遺跡 10 - 1）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、株式会社 浅沼組が実施する「公務員宿舎枚方住宅（I 期）整備事業民活プロジェクトに伴う禁野本町遺跡発掘調査」で、財団法人（平成 23 年 4 月から公益財団法人）大阪府文化財センターは、平成 22 年 4 月 30 日に委託契約を締結し、平成 22 年 5 月 1 日から平成 23 年 4 月 30 日まで現地調査を行った。その後平成 23 年 5 月 1 日から平成 24 年 4 月 27 日まで遺物整理作業を行い、平成 24 年度本書刊行を以って完了した。
3. 調査・整理は以下の体制で実施した。

〔調査〕平成 22 年度

調査部長 福田英人、調整グループ長 江浦洋、同主幹 岡本茂史、調査グループ長 岡戸哲紀、中部総括主査 秋山浩三、主査 片山彰一〔写真〕、副主査 本間元樹（全期間）・島崎久恵（平成 22 年 11 月から）・市村慎太郎（全期間）、技師 奥和之（平成 23 年 2 月から 3 月まで）、専門調査員 水久保祥子（全期間）・村上智見（平成 22 年 8 月まで）・櫻田小百合（平成 22 年 6 月まで）  
・河本純一（平成 22 年 9 月）・前田俊雄（平成 22 年 10 月から平成 23 年 2 月まで）

〔調査〕平成 23 年度

調査課長 江浦洋、調整グループ長 岡本茂史、調査グループ長 岡戸哲紀、中部総括主査 秋山浩三、専門調査員 片山彰一〔写真〕、副主査 本間元樹・島崎久恵・市村慎太郎、専門調査員 水久保祥子

〔整理〕平成 23 年度

調査課長 江浦洋、調整グループ長 岡本茂史、調査グループ長 岡戸哲紀、中部総括主査 秋山浩三、専門調査員 片山彰一〔写真〕、主査 陣内暢子（平成 24 年 1 月まで）、副主査 本間元樹

〔整理〕平成 24 年度

調査部長 江浦洋、調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、主査（中部総括）秋山浩三、専門調査員 片山彰一〔写真〕、副主査 本間元樹

4. 石材については奥田尚氏、動物骨については安部みき子氏のご教示を得た。禁野火薬庫にかかわる調査成果や諸資料については、調査課主査 駒井正明から教示を受けた。遺物の保存処理・樹種鑑定等については、調査課主査 山口誠治が行った。
5. 調査・整理の実施にあたっては、地元である枚方市教育委員会、公益財団法人 枚方市文化財研究調査会、大阪府教育委員会をはじめとし、次の方々・機関にご指導、ご協力を賜った。記して謝意を表したい（五十音順・敬称略）。

安部みき子、井戸竜太、奥田尚、高橋照彦、竹原伸仁、西田敏秀、馬部隆弘

枚方市立中央図書館市史資料室、大阪府警察本部、大阪府枚方警察署、財務省近畿財務局、陸上自衛隊第 103 不発弾処理隊

6. 本書の執筆分担は目次に記すとおりである。整理作業は、遺物は陣内が、遺構その他は本間が担当した。ただし、遺構その他については、現地調査中に市村をはじめとする各担当者が作成した各種資料や、10 区の第 4・5 面については島崎による覚書も活用している。

7. 本書の編集は、本間が行った。
8. 本調査にかかわる写真・実測図などの記録類は、公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

## 凡 例

1. 遺構実測図の基準高は、東京湾平均海水位（T.P.）を基準とし、プラス値を記している。なお、T.P. 表記は省略する場合もある。また、使用単位はメートルを基本とし、小数点以下第1位までを記している。
2. 遺構平面図などに付す座標値はいずれも世界測地系（測地成果 2000）により、それに準拠した平面直角座標系第VI系の座標系を使用した。単位はメートルである。
3. 本書で使用した北は座標北を基準とし、磁北は西に $6^{\circ} 38'$ 、真北は東に $0^{\circ} 12'$  振っている。
4. 断面図の土色・土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。なお、その記載順序は、土層では記号・色名・土質、土器では記号・色名とする。
5. 遺構番号は、遺構の種類にかかわらず調査区ごとに1からの通し番号とした。その記載順序は、番号・遺構種類である。なお、検討の結果、遺構ではないと判断したものについては欠番とした。
6. 掲載図面の縮尺は、調査区平面図 150～400分の1、建物類 100分の1、個別の遺構 40分の1を基本とするが、対象物の大きさに応じて適宜縮尺を変更したものも多い。遺物は、土器・土製品・瓦・煉瓦 4分の1、便槽鉢・土管 8分の1、石製品 3分の2・3分の1、金属製品 2分の1・4分の1・6分の1、木製品 4分の1・6分の1・8分の1とした。個々の縮尺については各図のスケールバーを参照されたい。
7. 掘立柱建物を構成する個々のピットについては、柱根や柱痕跡を含む最も特徴的な位置の断面を図示した。また、より上層から掘り込まれたことが明らかなピットには、断面の上部に点線を加えた。掘立柱建物の平面図では、基本的にピットの完掘状況を図示した。
8. 遺物実測図において、土器類の断面は、須恵器をアミフセ 10%、その他を白抜きとした。口縁（又は底部）が 6分の1未満残存のものは、口縁（又は底部）の線を切っている。  
土器表面に付着した赤色顔料・炭化・灰釉はアミフセ 10%、緑釉陶器の釉の濃淡はアミフセ 10%と 20%で表現し、図の横にそれぞれ何を表すかを文字で示した。図上復元できない土器の小片は、「内面 - 断面 - 外面」と配置した。打製石器の新欠部分は黒塗りとした。
9. 本書における遺物番号は実測図、写真図版とも一致する通し番号とした。
10. 各報文作成者による見解の相違や、文章表現法、使用文字などについては必ずしも統一していない。
11. 写真掲載される土器類の縮尺は任意である。石製品・金属製品・近代遺物の一部については写真図版に縮尺を示した。
12. 現地調査および遺物整理は、財団法人大阪府文化財センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（2003年8月）、および、『遺跡調査基本マニュアル』（2010年12月）に可能な限り準拠して行った。



# 本文目次

カラー写真図版	巻頭
序文	i
例言	ii
凡例	iii
本文目次	iv
図目次	v
表目次	viii
写真目次	ix
第1章 調査にいたる経緯と経過	(市村慎太郎・本間元樹) 1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 発掘調査の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	(本間) 7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査・整理の方法	(本間) 13
第1節 調査の方法	13
第2節 整理の方法	17
第4章 遺構の調査成果	(本間) 18
第1節 基本層序	18
第2節 1区(道路・ガス管)の遺構	19
第3節 2区・2-2区・3区・4区(土壌)の遺構	25
第4節 5区(調整池)の遺構	28
第5節 6区(集会所)の遺構	42
第6節 7区(E棟)の遺構	43
第7節 8区(D棟)・8-2区(防火水槽D)の遺構	50
第8節 9区(C棟)・9-2区(防火水槽C)の遺構	77
第9節 10区(A棟)・10-2区(防火水槽A)の遺構	101
第10節 11区(B棟)の遺構	149
第11節 12区(立体駐車場)の遺構	176
第12節 13区・14区・15区(人孔・管路)の遺構	200

第5章 遺物の調査成果	(陣内暢子)	201
第1節 近代以降遺物		201
第2節 中世・古代遺物		226
第6章 禁野本町遺跡出土の動物遺存体	(安部みき子)	276
第7章 禁野本町遺跡の植物遺体	(山口誠治)	277
第8章 まとめ	(本間)	280
第1節 概要		280
第2節 古代集落の変遷		281
第3節 禁野火薬庫の変遷		287
掲載遺物観察表		305～332
遺構写真図版		写真図版1～74
遺物写真図版		写真図版75～108
報告書抄録		巻末

## 目 次

図1 遺跡位置	8	図15 5区第3面中央部	36
図2 調査区配置と地区割り	14	図16 5区第3面竪穴建物1	37
図3 地区割りの方法	15	図17 5区第3面竪穴建物2	38
図4 断面模式	18	図18 5区第3面掘立柱建物1	39
図5 1区西壁断面	20・21	図19 5区第3面掘立柱建物2	40
図6 1区第1面	22	図20 6区南西部断面模式	42
図7 1区第2面・第3面	23	図21 7区南壁断面	44
図8 2区・2-2区・3区・4区	25	図22 6区・7区第1面	45
図9 2区・2-2区・3区・4区断面	26・27	図23 6区・7区第2面	46
図10 5区南壁断面	29	図24 7区第2面3～16枕木土坑	47
図11 5区第1面	30	図25 7区第2面21石組溝	47
図12 5区第1面土塁基礎	31	図26 7区第3面	49
図13 5区第2面	34	図27 8区南壁断面	51
図14 5区第3面	35	図28 8区第1面	52

図 29	8区第1面7建物・8石組溝	53	図 65	10区第2面	108
図 30	8区第1面7建物・8石組溝 ・18土塁東辺東側断面	54	図 66	10区第2面熔填作業場(西)	109
図 31	8区第1面10職工厠	55	図 67	10区第2面250構造物	111
図 32	8区第1面19土塁	56・57	図 68	10区第3面	113
図 33	8区第1面20建物	58・59	図 69	10区第4面	115
図 34	8区第1面9貯水池	61	図 70	10区第4面掘立柱建物20	116
図 35	8区第2面	63	図 71	10区第5面	117
図 36	8区第3面	65	図 72	10区第5面掘立柱建物21	118
図 37	8区第4面	66	図 73	10区第5面776・781溝	119
図 38	8区第5面	68	図 74	10区(A2棟)第4面	123
図 39	8区第6面	70	図 75	10区(A2棟)第5面	124
図 40	8区第6面西半	71	図 76	10区(A2棟)第4・5面掘立柱建物 ・柱列配置	125
図 41	8区第6面掘立柱建物1	72	図 77	10区第4面353・357井戸 第5面630井戸	126
図 42	8区第6面249井戸	73	図 78	10区第4面353井戸	127
図 43	8区第6面92～94ピット ・110～112ピット	74	図 79	10区第4面掘立柱建物1	128・129
図 44	9区北壁断面	78	図 80	10区第4・5面掘立柱建物2	130
図 45	9区第1面	79	図 81	10区第4・5面掘立柱建物3	131
図 46	9区第2面	81	図 82	10区第4・5面掘立柱建物4	132
図 47	9区第2面55土塁基礎・軽便軌道	82	図 83	10区第4・5面柱列5	133
図 48	9区第2面56土塁基礎	83	図 84	10区第5面掘立柱建物6・柱列7	134
図 49	9区第2面57土塁基礎	84	図 85	10区第4・5面掘立柱建物8	135
図 50	9区第2面土塁基礎下部の石垣	85	図 86	10区第4・5面掘立柱建物9	136
図 51	9-2区第2面1建物基礎	86	図 87	10区第4面掘立柱建物10 第4・5面掘立柱建物11	137
図 52	9区第3面	89	図 88	10区第4・5面掘立柱建物12	138
図 53	9区第4面	90	図 89	10区第4・5面掘立柱建物13・14	139
図 54	9区第4面121土坑	91	図 90	10区第5面柱列15・16	140
図 55	9区第5面	92	図 91	10区第4・5面掘立柱建物17・18	141
図 56	9区第6面	94	図 92	10区第5面掘立柱建物19	142
図 57	9区第6面東部	95	図 93	10区第4面289土坑・297ピット ・298土器群・299ピット・351土器群 ・352土坑・356ピット	144
図 58	9区第6面掘立柱建物1	96・97	図 94	10区第5面504土坑・617ピット	145
図 59	9区第6面掘立柱建物2	98	図 95	11区南壁断面	150
図 60	10区南壁断面	102	図 96	11区第2面	151
図 61	10区第1面	103	図 97	11区第2面男休憩所	152
図 62	10区第1面1建物北出入口B周辺	105			
図 63	10区第1面2建物南辺東部	106			
図 64	10区第1面2建物西出入口	107			

図 98	11 区 第2面女休憩所	153	図 135	近代以降遺物 煉瓦 (2)	215
図 99	11 区 第2面男廁 (3~6 便槽)	154	図 136	近代以降遺物 金属製品 (2)	216
図 100	11 区 第3面	156・157	図 137	近代以降遺物 木製品 (1)	
図 101	11 区 第3面 8~45 枕木土坑	159		・金属製品 (3)	217
図 102	11 区 第3面 2・202 枘	161	図 138	近代以降遺物 金属製品 (4)	
図 103	11 区 第4面	164		・コンクリート製品 (1)	218
図 104	11 区 第4面 316~321 ピット	165	図 139	近代以降遺物 金属製品 (5)	219
図 105	11 区 第5面	166	図 140	近代以降遺物 金属製品 (6)	220
図 106	11 区 第6面	168・169	図 141	近代以降遺物 木製品 (2)	
図 107	11 区 第6面掘立柱建物 1	170		・金属製品 (7)・ベークライト製品	221
図 108	11 区 第6面掘立柱建物 2	171	図 142	近代以降遺物 木製品 (3)	222
図 109	11 区 第6面掘立柱建物 3	172	図 143	近代以降遺物 木製品 (4)	
図 110	11 区 第6面掘立柱建物 4	173		・金属製品(8)・コンクリート製品(2)	223
図 111	11 区 第6面 525・526 ピット	173	図 144	近代以降遺物 金属製品 (9)	
図 112	11 区 第6面 674 土坑	174		・コンクリート製品 (3)	224
図 113	12 区 東壁断面	178・179	図 145	近代以降遺物 コンクリート製品(4)	225
図 114	12 区 第1面	180	図 146	5 区 古代遺物	237
図 115	12 区 第1・2面 2 建物	182・183	図 147	8 区 古代遺物 (1)	238
図 116	12 区 第2面	184	図 148	8 区 古代遺物 (2)	239
図 117	12 区 第2面 18・25 土管列	185	図 149	8 区 古代遺物 (3)	240
図 118	12 区 第2面 3 土塁南辺	186	図 150	9 区 中世・古代遺物	241
図 119	12 区 第3面	188	図 151	9 区 古代遺物 (1)	242
図 120	12 区 第3面 28・29 杭列	189	図 152	9 区 古代遺物 (2)	243
図 121	12 区 第4面	191	図 153	9 区 古代遺物 (3)	244
図 122	12 区 第4面中央部	192	図 154	9 区 古代遺物 (4)	245
図 123	12 区 第4面掘立柱建物 2	193	図 155	9 区 古代遺物 (5)	246
図 124	12 区 第4面 85 土坑	194	図 156	9 区 古代遺物 (6)	247
図 125	12 区 第4面掘立柱建物 1	196	図 157	10 区 (A 1 棟) 古代遺物 (1)	248
図 126	12 区 第4面 89 竪穴建物	197	図 158	10 区 (A 1 棟) 古代遺物 (2)	249
図 127	12 区 第4面 78 土坑	198	図 159	10 区 (A 1 棟) 古代遺物 (3)	250
図 128	近代以降遺物 陶磁器・ガラス製品		図 160	10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (1)	251
	・金属製品 (1)	208	図 161	10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (2)	252
図 129	近代以降遺物 陶器 (1)	209	図 162	10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (3)	253
図 130	近代以降遺物 陶器 (2)	210	図 163	10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (4)	254
図 131	近代以降遺物 陶器 (3)・瓦 (1)	211	図 164	10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (5)	255
図 132	近代以降遺物 瓦 (2)	212	図 165	10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (6)	256
図 133	近代以降遺物 瓦 (3)	213	図 166	10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (7)	257
図 134	近代以降遺物 煉瓦 (1)	214	図 167	10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (8)	258

図 168	10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (9) ……	259	図 177	11 区 古代遺物 (1) ……	268
図 169	10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (10) ……	260	図 178	11 区 古代遺物 (2) ……	269
図 170	10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (11) ……	261	図 179	12 区 中世・古代遺物 (1) ……	270
図 171	10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (12) ……	262	図 180	12 区 中世・古代遺物 (2) ……	271
図 172	10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (13) ……	263	図 181	12 区 中世・古代遺物 (3) ……	272
図 173	10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (14) ……	264	図 182	12 区 古代遺物 (1) ……	273
図 174	10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (15) ……	265	図 183	12 区 古代遺物 (2) ……	274
図 175	10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (16) ……	266	図 184	12 区 古代遺物 (3) ……	275
図 176	11 区 中世・古代遺物 ……	267			
図 185	古代の主要遺構 ……	282			
図 186	古代の建物等の変遷 (全体) ……	283			
図 187	古代の建物等の変遷 [10 区 (A 2 棟)] ……	284			
図 188	禁野火薬庫の主要施設 ……	295			
図 189	明治 42 (1909) 年の大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫 ……	296			
図 190	大正 2 (1913) 年の大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫 ……	297			
図 191	昭和 8 (1933) 年の大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫 ……	298			
図 192	昭和 11 (1936) 年の大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫 ……	299			
図 193	昭和 12 (1937) 年の大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫 ……	300			
図 194	昭和 14 (1939) 年の爆発前の大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫 ……	301			
図 195	昭和 14 (1939) 年の爆発後の大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫 ……	302			
図 196	昭和 17 (1942) 年の大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠 ……	303			
図 197	昭和 20 (1945) 年の大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠 ……	304			

付図 1 禁野本町遺跡の最終遺構面

付図 2 禁野火薬庫の主要施設

## 表 目 次

表 1	各調査区遺跡面の対照 ……	16	表 7	禁野本町遺跡の動物遺存体 ……	276
表 2	煉瓦集計表 ……	207	表 8	イヌの下顎骨の計測値 ……	276
表 3	木ネジ集計表 ……	207	表 9	イヌの肩甲骨の計測値 ……	276
表 4	釘集計表 ……	207	表 10	古代の掘立柱建物・柱列 ……	286
表 5	薬莢・爆管刻印一覧 ……	207	表 11	禁野火薬庫の配置図等 ……	288
表 6	犬釘集計表 ……	207	表 12	禁野火薬庫の主要施設 ……	290・291

# 写真目次

## 巻頭カラー写真図版1 近代

カラー写真1 8区第1面(南西から)

カラー写真2 12区第2面(南東から)

## 巻頭カラー写真図版2 古代

カラー写真3 10区(A2棟)第5面(北西から)

カラー写真4 9区第6面(北から)

## 写真図版1 1区遺構

写真1 1区第1面(南から)

写真2 1区第1面(北から)

写真3 1区第3面(南から)

写真4 1区第3面(北から)

## 写真図版2 2区・3区・4区遺構

写真5 2区・3区・4区機械掘削状況(南西から)

写真6 2区(南から)

写真7 3区(東から)

## 写真図版3 5区遺構(1) 近代

写真8 5区第1面(南西から)

写真9 5区第1面(東から)

## 写真図版4 5区遺構(2) 中世～近代

写真10 5区第1面9土管溝(南西から)

写真11 5区第1面11土坑断面(南から)

写真12 5区第1面45土坑断面(南から)

写真13 5区第2面(南西から)

## 写真図版5 5区遺構(3) 古代

写真14 5区第3面(東から)

写真15 5区第3面中央部(北から)

## 写真図版6 5区遺構(4) 古代

写真16 5区第3面竪穴建物1(南から)

写真17 5区第3面竪穴建物1土器出土状況(北東から)

写真18 5区第3面竪穴建物1カマド被熱層除去状況  
(南から)

写真19 5区第3面竪穴建物1カマド炭層検出状況(南から)

写真20 5区第3面竪穴建物1完掘状況(南から)

## 写真図版7 5区遺構(5) 古代

写真21 5区第3面竪穴建物2(南から)

写真22 5区第3面竪穴建物2検出状況(南から)

写真23 5区第3面竪穴建物2カマド(南から)

写真24 5区第3面竪穴建物2カマド出土土器(南東から)

写真25 5区第3面竪穴建物2完掘状況(南から)

## 写真図版8 6区遺構 近代

写真26 6区第1面(東から)

写真27 6区第1面(南西から)

写真28 6区(・7区)第2面(東から)

## 写真図版9 7区遺構(1) 近代

写真29 7区第1面(北東から)

写真30 7区第1面(南西から)

写真31 7区第2面(西から)

写真32 7区第2面3～16枕木土坑(南から)

写真33 7区第2面21石組溝(南から)

## 写真図版10 7区遺構(2) 古代

写真34 7区第3面(東から)

写真35 7区第3面(西から)

写真36 7区第4面(西から)

## 写真図版11 8区遺構(1) 近代

写真37 8区第1面(東から)

写真38 8区第1面西部(南東から)

## 写真図版12 8区遺構(2) 近代

写真39 8区第1面7建物・8石組溝(南から)

写真40 8区第1面8石組溝検出状況(東から)

写真41 8区第1面8石組溝検出状況(西から)

写真図版 13 8区遺構(3) 近代

- 写真 42 8区第1面8石組溝完掘状況(東から)
- 写真 43 8区第1面8石組溝完掘状況(西から)
- 写真 44 8区第1面8石組溝・7建物断面(北から)
- 写真 45 8区第1面8石組溝断面(北から)

写真図版 14 8区遺構(4) 近代

- 写真 46 8区第1面10職工厠(南東から)
- 写真 47 8区第1面14便槽断面(東から)
- 写真 48 8区第1面17便槽断面(東から)
- 写真 49 8区第1面10職工厠・21軽便軌道(西から)

写真図版 15 8区遺構(5) 近代

- 写真 50 8区第1面19土塁・20建物(北東から)
- 写真 51 8区第1面20建物(南から)

写真図版 16 8区遺構(6) 近代

- 写真 52 8区第1面20建物床面(北東から)
- 写真 53 8区第1面20建物南面(南西から)
- 写真 54 8区第1面20建物南面中央部(南から)
- 写真 55 8区第1面20建物南面東端(南から)
- 写真 56 8区第1面19土塁西辺西側内面(北東から)
- 写真 57 8区第1面21軽便軌道(南から)
- 写真 58 8区第1面21軽便軌道断面(西から)

写真図版 17 8区遺構(7) 近代

- 写真 59 8区第1面9貯水池(北東から)
- 写真 60 8区第1面9貯水池(北西から)
- 写真 61 8区第1面9貯水池(西から)

写真図版 18 8区遺構(8) 中世～近代

- 写真 62 8区第2面東部(西から)
- 写真 63 8区第2面西部(東から)
- 写真 64 8区第2面西部(南西から)

写真図版 19 8区遺構(9) 古代～中世

- 写真 65 8区第3面東部(西から)
- 写真 66 8区第3面中央部(南西から)
- 写真 67 8区第3面西部(東から)

写真図版 20 8区遺構(10) 古代

- 写真 68 8区第4面東部(東から)
- 写真 69 8区第4面東部(西から)
- 写真 70 8区第4面西部(東から)

写真図版 21 8区遺構(11) 古代

- 写真 71 8区第5面東部(東から)
- 写真 72 8区第5面東部(西から)
- 写真 73 8区第5面西部(東から)

写真図版 22 8区遺構(12) 古代

- 写真 74 8区第6面東部(東から)
- 写真 75 8区第6面西部(北西から)

写真図版 23 8区遺構(13) 古代

- 写真 76 8区第6面掘立柱建物1(南から)
- 写真 77 8区第6面掘立柱建物1検出状況(西から)
- 写真 78 8区第6面123ピット断面(南西から)
- 写真 79 8区第6面125ピット断面(西から)
- 写真 80 8区第6面130ピット断面(西から)

写真図版 24 8区遺構(14) 古代

- 写真 81 8区第6面249井戸断面(北西から)
- 写真 82 8区第6面249井戸完掘状況(北東から)
- 写真 83 8区南壁中央部断面(北から)

写真図版 25 8-2区遺構

- 写真 84 8-2区第1面(東から)
- 写真 85 8-2区第2面(東から)
- 写真 86 8-2区第3面(北西から)

写真図版 26 9区遺構(1) 近代

- 写真 87 9区第1面(東から)
- 写真 88 9区第1面(西から)

写真図版 27 9区遺構(2) 近代

- 写真 89 9区第2面(東から)
- 写真 90 9区第2面(西から)

写真図版 28 9区遺構(3) 近代

- 写真 91 9区第2面55土塁基礎(南から)
- 写真 92 9区第2面55土塁基礎(北から)
- 写真 93 9区第2面55土塁基礎(北東から)
- 写真 94 9区第2面土塁基礎下部の石垣(北東から)

写真図版 29 9区遺構(4) 近代

- 写真 95 9区第2面軽便軌道(東から)
- 写真 96 9区第2面56土塁基礎(西から)
- 写真 97 9区第2面57土塁基礎(北西から)

写真図版 30 9区遺構(5) 古代～近世

写真 98 9区 第3面(西から)

写真 99 9区 第4面(西から)

写真 100 9区 第5面(南西から)

写真図版 31 9区遺構(6) 古代

写真 101 9区 第6面(東から)

写真 102 9区 第6面(西から)

写真図版 32 9区遺構(7) 古代

写真 103 9区 第6面掘立柱建物1柱穴段下げ状況(北から)

写真 104 9区 第6面掘立柱建物1柱痕跡半截状況(北から)

写真 105 9区 第6面掘立柱建物1柱穴半截状況(北から)

写真図版 33 9区遺構(8) 古代

写真 106 9区 第6面 323ピット断面(西から)

写真 107 9区 第6面 324ピット断面(西から)

写真 108 9区 第6面 325ピット断面(西から)

写真 109 9区 第6面 328ピット断面(北から)

写真 110 9区 第6面 332ピット断面(南西から)

写真 111 9区 第6面 333ピット断面(東から)

写真 112 9区 第6面 335ピット断面(東から)

写真 113 9区 第6面 336ピット柱根出土状況(西から)

写真図版 34 9区遺構(9) 古代

写真 114 9区 第6面 322ピット断面(南東から)

写真 115 9区 第6面 322ピット枕木出土状況(東から)

写真 116 9区 第6面 332ピット完掘状況(東から)

写真 117 9区 第6面掘立柱建物1完掘状況(北東から)

写真 118 9区 北壁断面(南東から)

写真図版 35 9-2区遺構

写真 119 9-2区 第1面(北東から)

写真 120 9-2区 第2面(南から)

写真 121 9-2区 第3面(北から)

写真図版 36 10区遺構(1) 近代

写真 122 10区(A2棟)第1面(北から)

写真 123 10-2区 第1面(東から)

写真図版 37 10区遺構(2) 近代

写真 124 10区(A2棟)第1面(東から)

写真 125 10区(A2棟)第1面(西から)

写真図版 38 10区遺構(3) 近代

写真 126 10区(A1棟)第1面1建物北出入口B(北から)

写真 127 10区(A1棟)第1面1建物軽便軌道(南から)

写真 128 10区(A1棟)第1面1建物北辺側溝(東から)

写真 129 10区(A1棟)第1面1建物北出入口C(東から)

写真 130 10区(A2棟)第1面2建物北出入口(北東から)

写真 131 10区(A1棟)第1面2建物西出入口(西から)

写真 132 10区(A1棟)第1面2建物軽便軌道(西から)

写真図版 39 10区遺構(4) 近代

写真 133 10区(A2棟)第2面(南東から)

写真 134 10区(A1棟)第2面(東から)

写真図版 40 10区遺構(5) 近代

写真 135 10区(A1棟)第2面北部(東から)

写真 136 10区(A1棟)第2面(西から)

写真図版 41 10区遺構(6) 近代

写真 137 10区(A1棟)第2面熔填作業場(西)(南から)

写真 138 10区(A1棟)第2面141ピット断面(西から)

写真 139 10区(A1棟)第2面164ピット断面(西から)

写真 140 10区(A1棟)第2面165ピット断面(西から)

写真 141 10区(A1棟)第2面166ピット断面(西から)

写真 142 10区(A1棟)第2面171ピット断面(西から)

写真 143 10区(A1棟)第2面219枕木群(南から)

写真 144 10区(A1棟)第2面250構造物(南西から)

写真図版 42 10区遺構(7) 中世～近世

写真 145 10区(A2棟)第3面(南東から)

写真 146 10区(A1棟)第3面(南東から)

写真 147 10区(A1棟)第3面西部(南東から)

写真図版 43 10区遺構(8) 古代～中世

写真 148 10区(A1棟)第4面(南東から)

写真 149 10区(A1棟)第4面(南から)

写真 150 10区(A1棟)第5面(東から)

写真 151 10区(A1棟)第5面(西から)

写真 152 10区(A1棟)第5面東部(北西から)

写真 153 10区(A1棟)第5面中央部(北から)

写真図版 44 10区遺構(9) 古代

写真 154 10区(A2棟)第4面(北から)

写真 155 10区(A2棟)第4面(東から)



写真図版 45 10区遺構(10) 古代

写真 156 10区(A2棟)第5面(西から)

写真 157 10区(A2棟)第5面(東から)

写真図版 46 10区遺構(11) 古代

写真 158 10区(A2棟)第4面353井戸井戸枠検出  
状況(西から)

写真 159 10区(A2棟)第4面353井戸断面(西から)

写真 160 10区(A2棟)第4面353井戸井戸枠内完  
掘状況(西から)

写真 161 10区(A2棟)第4面353井戸井戸枠内部(西から)

写真 162 10区(A2棟)第4面353井戸掘方四分状況  
(南東から)

写真図版 47 10区遺構(12) 古代

写真 163 10区(A2棟)第4面353井戸井戸枠外面  
(北西から)

写真 164 10区(A2棟)第4面353井戸井戸枠内面  
(北から)

写真 165 10区(A2棟)第4面353井戸井戸枠最下段  
(北から)

写真 166 10区(A2棟)第4面353井戸完掘状況(北から)

写真図版 48 10区遺構(13) 古代

写真 167 10区(A2棟)第4面掘立柱建物1(北から)

写真 168 10区(A2棟)第4面257ピット段下げ状況(北から)

写真 169 10区(A2棟)第4面257ピット断面(南西から)

写真 170 10区(A2棟)第4面259ピット断面(東から)

写真 171 10区(A2棟)第4面259ピット柱根出土状況  
(東から)

写真図版 49 10区遺構(14) 古代

写真 172 10区(A2棟)第4面260ピット断面(東から)

写真 173 10区(A2棟)第4面261ピット断面(南東から)

写真 174 10区(A2棟)第4面262ピット断面(北から)

写真 175 10区(A2棟)第4面263ピット断面(北から)

写真 176 10区(A2棟)第4面264ピット柱痕跡土器  
出土状況(東から)

写真 177 10区(A2棟)第4面266ピット断面(西から)

写真 178 10区(A2棟)第4面267ピット断面(西から)

写真 179 10区(A2棟)第4面268ピット断面(北東から)

写真図版 50 10区遺構(15) 古代

写真 180 10区(A2棟)第4面289土坑遺物出土状況  
(西から)

写真 181 10区(A2棟)第4面297ピット遺物出土状況  
(東から)

写真 182 10区(A2棟)第4面298土器群遺物出土状況  
(北東から)

写真 183 10区(A2棟)第4面299ピット遺物出土状況  
(北から)

写真 184 10区(A2棟)第4面308ピット(西から)

写真 185 10区(A2棟)第4面331ピット礎板出土状況  
(北から)

写真 186 10区(A2棟)第4面351土器群遺物出土状況  
(東から)

写真 187 10区(A2棟)第4面352土坑遺物出土状況  
(南から)

写真図版 51 10区遺構(16) 古代

写真 188 10区(A2棟)第4面356ピット遺物出土状況  
(北から)

写真 189 10区(A2棟)第4面370ピット遺物出土状況  
(西から)

写真 190 10区(A2棟)第5面504土坑遺物出土状況  
(南から)

写真 191 10区(A1棟)第5面781溝遺物出土状況  
(東から)

写真 192 10区(A2棟)第5面1007石群(東から)

写真 193 10区(A2棟)東壁断面(北西から)

写真 194 10区(A1棟)西壁断面(東から)

写真図版 52 11区遺構(1) 近代~現代

写真 195 11区第1面(西から)

写真 196 11区第2面(東から)

写真 197 11区第2面東部(北から)

写真図版 53 11区遺構(2) 近代

写真 198 11区第2面女休憩所(南から)

写真 199 11区第2面266ピット(東から)

写真 200 11区第2面267ピット(東から)

写真 201 11区第2面268ピット(南から)

写真 202 11区第2面269ピット(北から)

- 写真図版 54 11 区遺構 (3) 近代  
 写真 203 11 区 第2面 3～6 便槽 (北から)  
 写真 204 11 区 第2面 3 便槽断面 (西から)  
 写真 205 11 区 第2面 3 便槽完掘状況 (西から)  
 写真 206 11 区 第2面 4 便槽 (東から)  
 写真 207 11 区 第2面 4 便槽完掘状況 (西から)  
 写真 208 11 区 第2面 5 便槽 (東から)  
 写真 209 11 区 第2面 5 便槽完掘状況 (西から)
- 写真図版 55 11 区遺構 (4) 近代  
 写真 210 11 区 第3面 (東から)  
 写真 211 11 区 第3面 (北西から)
- 写真図版 56 11 区遺構 (5) 近代  
 写真 212 11 区 第3面西部 (北から)  
 写真 213 11 区 第3面 238 鉄管溝 (北から)  
 写真 214 11 区 第3面 238 鉄管溝の昭和 11 年銘 (1)  
 写真 215 11 区 第3面 238 鉄管溝の昭和 11 年銘 (2)
- 写真図版 57 11 区遺構 (6) 近代  
 写真 216 11 区 第3面 1 土管溝 (北東から)  
 写真 217 11 区 第3面 1 土管溝完掘状況 (北東から)  
 写真 218 11 区 第3面 240 土管溝 (北から)  
 写真 219 11 区 第3面 240 土管溝完掘状況 (北から)  
 写真 220 11 区 第3面 202 枡・244 土管溝 (南西から)  
 写真 221 11 区 第3面 202 枡 (東から)
- 写真図版 58 11 区遺構 (7) 近代  
 写真 222 11 区 第3面第2 荷造場 (北から)  
 写真 223 11 区 第3面第2 荷造場東出入口 (南から)  
 写真 224 11 区 第3面第2 荷造場西出入口 (北から)
- 写真図版 59 11 区遺構 (8) 中世～近世  
 写真 225 11 区 第4面 (東から)  
 写真 226 11 区 第4面中央部以西 (南東から)  
 写真 227 11 区 第4面北西部 (西から)
- 写真図版 60 11 区遺構 (9) 古代  
 写真 228 11 区 第5面 (北東から)  
 写真 229 11 区 第5面 (西から)  
 写真 230 11 区 第6面 337 ピット検出状況 (北から)  
 写真 231 11 区 第6面 337 ピット断面 (南から)
- 写真図版 61 11 区遺構 (10) 古代  
 写真 232 11 区 第6面 (東から)  
 写真 233 11 区 第6面 (北東から)
- 写真図版 62 11 区遺構 (11) 古代  
 写真 234 11 区 第6面東部 (北から)  
 写真 235 11 区 第6面西部 (北東から)  
 写真 236 11 区 第6面北西部 (北東から)
- 写真図版 63 11 区遺構 (12) 古代  
 写真 237 11 区 第6面掘立柱建物 1 (北から)  
 写真 238 11 区 第6面 578 ピット断面 (南から)  
 写真 239 11 区 第6面 580 ピット断面 (南から)  
 写真 240 11 区 第6面 582 ピット断面 (南から)  
 写真 241 11 区 第6面 525・526 ピット遺物出土状況 (南から)  
 写真 242 11 区 第6面 674 土坑断面 (北東から)  
 写真 243 11 区 第6面 674 土坑遺物出土状況 (東から)
- 写真図版 64 12 区遺構 (1) 近代  
 写真 244 12 区 第1面 (北東から)  
 写真 245 12 区 第2面 (南東から)
- 写真図版 65 12 区遺構 (2) 近代  
 写真 246 12 区 第2面 (北から)  
 写真 247 12 区 第2面 (東から)
- 写真図版 66 12 区遺構 (3) 近代  
 写真 248 12 区 第2面 1 建物・3 土塁南辺 (西から)  
 写真 249 12 区 第1・2面 2 建物 (南東から)  
 写真 250 12 区 第1・2面 2 建物 (南西から)
- 写真図版 67 12 区遺構 (4) 近代  
 写真 251 12 区 第1面 2 建物東出入口 (東から)  
 写真 252 12 区 第1面 2 建物南出入口 B (南東から)  
 写真 253 12 区 第1面 2 建物西出入口 (北西から)  
 写真 254 12 区 第1面 2 建物西辺床下換気口 (西から)  
 写真 255 12 区 第2面 2 建物南辺側溝 (南西から)  
 写真 256 12 区 第2面 2 建物断面 (北東から)  
 写真 257 12 区 第2面 4 土塁南辺外面 (南東から)  
 写真 258 12 区 第2面 4 土塁北辺 (北東から)

- 写真図版 68 12区遺構(5) 近代  
 写真 259 12区第2面5 軽便軌道・6 軽便軌道(東から)  
 写真 260 12区第2面5・6 軽便軌道(西から)  
 写真 261 12区第2面5・6 軽便軌道分岐部(南西から)  
 写真 262 12区第2面5・6 軽便軌道分岐部(東から)
- 写真図版 69 12区遺構(6) 中世～近世  
 写真 263 12区第3面(北東から)  
 写真 264 12区第3面(南東から)
- 写真図版 70 12区遺構(7) 古代～中世  
 写真 265 12区第4面(北東から)  
 写真 266 12区第4面(南東から)
- 写真図版 71 12区遺構(8) 古代  
 写真 267 12区第4面掘立柱建物1 柱穴段下げ状況(北から)  
 写真 268 12区第4面掘立柱建物1 柱穴半截状況(北から)  
 写真 269 12区第4面掘立柱建物1 完掘状況(北から)
- 写真図版 72 12区遺構(9) 古代  
 写真 270 12区第4面78 土坑断面(南西から)  
 写真 271 12区第4面78 土坑遺物・石出土状況(北東から)  
 写真 272 12区第4面78 土坑遺物・石出土状況(南西から)  
 写真 273 12区第4面78 土坑完掘状況(南西から)  
 写真 274 12区第4面85 土坑断面(南東から)  
 写真 275 12区第4面85 土坑遺物・石出土状況(南西から)  
 写真 276 12区第4面85 土坑遺物・石出土状況(南東から)  
 写真 277 12区第4面85 土坑完掘状況(南東から)
- 写真図版 73 12区遺構(10) 古代  
 写真 278 12区第4面89 竪穴建物断面(北西から)  
 写真 279 12区第4面89 竪穴建物(北東から)  
 写真 280 12区 東壁北部断面(西から)
- 写真図版 74 13区・14区・15区遺構  
 写真 281 13区(南から)  
 写真 282 14区(南から)  
 写真 283 15区(南から)
- 写真図版 75 近代以降遺物(1) 紙製品  
 写真図版 76 近代以降遺物(2) 便槽鉢・土管  
 写真図版 77 近代以降遺物(3) 瓦  
 写真図版 78 近代以降遺物(4) 煉瓦  
 写真図版 79 近代以降遺物(5) 金属製品(1)  
 写真図版 80 近代以降遺物(6) 金属製品(2)
- 写真図版 81 近代以降遺物(7) 金属製品(3)  
 ・スレート製品・コンクリート製品(1)
- 写真図版 82 近代以降遺物(8)  
 コンクリート製品(2)・金属製品(4)
- 写真図版 83 近代以降遺物(9) 金属製品(5)  
 写真図版 84 近代以降遺物(10) 金属製品(6)  
 写真図版 85 近代以降遺物(11)  
 布製品・金属製品(7)
- 写真図版 86 近代以降遺物(12) 金属製品(8)  
 写真図版 87 近代以降遺物(13)  
 コンクリート製品(3)・金属製品(9)
- 写真図版 88 近代以降遺物(14)  
 コンクリート製品(4)
- 写真図版 89 近代以降遺物(15)  
 コンクリート製品(5)
- 写真図版 90 中世・古代遺物(1) 土器(1)  
 写真図版 91 中世・古代遺物(2)  
 土器(2)・土製品(1)
- 写真図版 92 中世・古代遺物(3)  
 土器(3)・土製品(2)
- 写真図版 93 中世・古代遺物(4)  
 土器(4)・土製品(3)
- 写真図版 94 中世・古代遺物(5) 土器(5)  
 写真図版 95 中世・古代遺物(6) 土器(6)  
 写真図版 96 中世・古代遺物(7) 土器(7)  
 写真図版 97 中世・古代遺物(8) 土器(8)  
 写真図版 98 中世・古代遺物(9) 瓦(1)  
 写真図版 99 中世・古代遺物(10) 磚・瓦(2)
- 写真図版 100 中世・古代遺物(11) 瓦(3)  
 写真図版 101 中世・古代遺物(12) 石製品(1)  
 写真図版 102 中世・古代遺物(13)  
 石製品(2)・金属製品
- 写真図版 103 木製品(1) 近代以降  
 写真図版 104 木製品(2) 古代(1)  
 写真図版 105 木製品(3) 古代(2)  
 写真図版 106 木製品(4) 古代(3)  
 写真図版 107 木製品(5) 古代(4)  
 写真図版 108 木製品(6) 古代(5)

# 第1章 調査にいたる経緯と経過

## 第1節 調査にいたる経緯

今回の報告に関する事業は、公務員宿舍枚方住宅（I期）整備事業民活プロジェクトに伴う禁野本町遺跡発掘調査である。

公務員宿舍枚方住宅（I期）整備事業の実施方針は、民間資金等の活用による公共施設等の整備等の促進に関する法律（PFI法）（平成11年法律第117号）第5条第3項の規程により、平成21年7月28日に財務省近畿財務局長により公表された。

この事業目的は、国有財産の有効活用の観点から、京阪神地区に散在している土地の有効活用が図られていない公務員宿舍や老朽化などにより建替えが必要な公務員宿舍を、今回の整備の対象となる本事業の計画地に集約・立体化の上、早急に建替えを行う必要があり、その際、本事業をPFI法に基づき実施することにより、民間の資金、経営能力および技術的能力を活用し、財政資金の効率的な使用を図ろうとするものである。

平成22年3月23日に、PFI事業者選定結果が公表され、入札参加表明のあった7グループのうち、株式会社浅沼組を代表企業とし、株式会社アール・アイ・エー大阪支社と近鉄ビルサービス株式会社を構成企業とする、浅沼組グループが落札者として決定された。

上記の実施方針には、事業内容に「埋蔵文化財発掘調査」が盛り込まれ、また、「公共施設等の立地並びに規模及び配置に関する事項」の「立地に関する事項」や「土地に関する事項」の中にも、計画地は文化財保護法に規定される周知の埋蔵文化財包蔵地である禁野本町遺跡に指定されており埋蔵文化財の発掘調査が必要な旨が記されていた。

今回の調査地は、平成15・16年度に行われた公務員宿舍枚方住宅整備事業に伴う禁野本町遺跡発掘調査（以下、本書では、「平成15・16年度調査」とする）地の東側と北側に位置する。平成15・16年度調査では、旧日本陸軍の禁野火薬庫にかかわる遺構、遺物が良好に確認できたほか、弥生時代後期後葉から庄内式期や奈良時代後半から平安時代初頭などの遺構・遺物も確認された。同調査については、(財)大阪府文化財センター調査報告書第140集『禁野本町遺跡』として、平成18年3月に報告書が刊行されている。また、この際の調査地内には、火薬庫の土塁をモチーフにした公園が作られている。これは、土塁の裾にあった石組溝に使用されていた間知石や軽便軌道に使用されていたコンクリート製枕木を再利用し、平和の大切さを訴えるモニュメントとしたもので、調査の際の写真も盛り込んだ案内板も設置されている。

今回の調査に先立ち、財務省近畿財務局を委託機関とし、平成20年2月21日から3月27日まで、枚方合同宿舍埋蔵文化財発掘確認調査業務として、今回の調査地を含む公務員宿舍枚方住宅I期地区と北側の同II期地区内において、地下の埋蔵文化財の広がり、遺構面の深度等のデータ採取を行い、当該文化財の保存のために必要な資料を得ることを目的とした確認調査が行われた。その結果、調査対象地南側の主にI期地区では、禁野火薬庫にかかわる整地層や包含層が、比較的良好に残存していることが確認できた。

上記の平成15・16年度に行われた調査により禁野火薬庫に関係する遺構・遺物が良好に遺存する部

分もあることが判明していたことに加えて、この確認調査の結果、禁野本町遺跡の時代については「弥生～中世、その他（近代）」として近代が加えられ、発掘調査の対象となった。

## 第2節 発掘調査の経過

今回の事業について、平成22年4月30日に、財団法人大阪府文化財センターは、株式会社浅沼組との間で公務員宿舍枚方住宅（I期）整備事業民活プロジェクトに伴う禁野本町遺跡発掘調査委託業務の委託契約を締結した。委託期間は、平成22年5月1日～平成24年7月31日である。

また、実施にあたっては、文化財保護法第92条第1項の規定により、平成22年4月19日付け大文セ第4-1号で埋蔵文化財発掘調査の届出を行い、大阪府教育委員会は、平成21年5月19日付け教委文第12-11号により埋蔵文化財発掘調査の通知を行った。

今回の発掘調査は、調査部調査課調査グループが行った。調査の体制、期間等については、例言に記したとおりである。

現地における本格的な調査に先立ち、平成22年5月18日に、今回の調査区と既設の公務員宿舍住棟（以下、「旧住棟」と記す）のコンクリート基礎が重複する部分について、大阪府教育委員会による立会調査が行われた。また、同日から25日まで、最初に着手した11区（B棟）部分のアスファルトなど表層部分の機械掘削や既設住棟との重複部分の住棟基礎の撤去が行われた。

これらを経て、5月27日から11区の機械掘削に着手した。なお、各調査区とも発掘調査にかかる機械掘削以前に、アスファルトなど表層部分の機械掘削や既設住棟との重複部分の基礎撤去を行った。機械掘削後には人力掘削を行い、禁野火薬庫に関する遺構面を1ないし2面調査した後、禁野火薬庫に関する施設を撤去し、再び重機により禁野火薬庫造成に伴う盛土層やそれ以前の作土層、近世作土層や包含層等を掘削した。そして、人力掘削により、中世以前の遺構面を1ないし4面調査した。各調査区とも調査途中の禁野火薬庫にかかわる遺構面と最終遺構面については、大阪府教育委員会による立会（以下、「府教委立会」と記す）を受けた。

検出した各遺構面では、検出した遺構の図面（平面図・断面図・立面図等）作成をはじめ、遺構面の平面図、調査区の断面図などの作成、遺構・遺構面の写真撮影を行った。なかでも、禁野火薬庫にかかわる遺構面と地山層上面にて検出した最終遺構面については、クレーン撮影による図化作業と高所作業車による写真撮影も行った。

各調査区の機械掘削の開始から人力掘削の終了までの経緯は、調査着手順に次のとおりである（カッコ内は本体工事の構造物の名称）。各調査区の位置は図2（14頁）に掲げる。

### 11区（B棟）〔平成22年5月27日～10月15日調査〕

当区の禁野火薬庫に関する遺構面は、比較的遺存状況が良く、軽便軌道、荷造場などの諸施設を確認した。同面については7月20日に第2回府教委立会を受けた。

ただし、7月23日には、砲弾出土地点について砲弾に鉛成分が含有される可能性が考えられ、この場合土壌汚染が疑われるため当該部分については土壌汚染調査の結果を待たずして調査に着手してはならない、との通達が枚方市公害監視センターよりあった。これは、平成22年4月1日施行の改正土壌

汚染対策法に基づくものである。そのため、11区の北西部については禁野火薬庫に関する遺構面以下の調査を保留し、該当部分以外の調査を行った。

この部分以外の11区について先行して調査を進め、禁野火薬庫に関するコンクリート類の撤去後、禁野火薬庫以前の作土層などを重機で除去し、人力掘削を再開した。9月10日には最終遺構面について第4回府教委立会を受けた。

なお、上記の汚染土壌が疑われる箇所についての土壌採取作業は9月9日に行われ、9月22日に掘削可能となった旨の回答を得て、速やかに調査を行った。10月6日に最終遺構面について第5回府教委立会を受け、10月15日に調査を終了した。

#### **7区（E棟）**〔平成22年6月7日～8月10日調査〕

旧住棟および同撤去時の攪乱が調査区の広範囲におよび、遺構面が残存する部分はきわめて少なかった。

7月8日に禁野火薬庫にかかわる遺構面で第1回府教委立会を受け、その後8月10日の第3回府教委立会で最終状態を確認された。

#### **6区（集会所）**〔平成22年6月14日～7月8日調査〕

当初設計以降に形状変更が行われ、これに即して調査を行った。しかし、7区以上に旧住棟および同撤去時の攪乱の範囲が広く、遺構面の遺存状況は悪かった。

7月8日に第1回府教委立会を7区とともに受け、同日で調査を終了した。

#### **9区（C棟）**〔平成22年6月17日～10月26日調査〕

土塁の基礎や軽便軌道などが検出された禁野火薬庫にかかわる遺構面については、8月10日に第3回府教委立会を受けた。その後、11区と同様にコンクリート撤去等の作業を経て下層の調査を行った。

最終遺構面において調査区東側で多くの遺構が検出され、とくに9区東端で南北に並ぶ柱列が掘立柱建物を構成するものと推定されたため、10月6日の第5回府教委立会において東側へ調査区を拡張し柱穴の分布状況を確認するよう指示があった。これを受け調査区の拡張を行った結果、東側柱列が検出され、南北方向を主軸とする桁行5間・梁行2間の掘立柱建物と確定できた。この建物について、10月22日の第6回府教委立会では、遺構の養生と位置の明示を行った上で埋め戻すよう指示があり、これに従い埋め戻しを行った。この養生した上で埋め戻した部分については、11月5日の第7回府教委立会の際に確認を受けた。

#### **5区（調整池）**〔平成22年7月20日～11月26日調査〕

7月20日から開始した機械掘削は中断をさきつつ8月19日までで終了したが、9区と11区の人掘削を優先したため、5区の人掘削は10月13日の開始となった。10月22日には、禁野火薬庫に関する遺構面について第6回府教委立会を受けた。5区は掘削深度が設定されており、調査区東側については禁野火薬庫にかかわる遺構面の段階で掘削限界に達した。その後コンクリート類を撤去して下層の調査を行い、11月15日には最終遺構面について第8回府教委立会を受けた。

5区最終遺構面では、竪穴建物などの遺構が確認され、クレーン撮影後にも竪穴建物床面以下の記録作業等を続行し、最終的に11月26日までに調査を終了した。

#### **8区（D棟）**〔平成22年8月20日～23年1月28日調査〕

8区西側のD1棟部分については8月20日から機械掘削を開始した。この段階で、8区東側のD2棟部分は現地表面に残る貯水槽が撤去できなかったため、D1棟部分のみの機械掘削にとどまった。

貯水槽の撤去後の10月27日からD2棟部分の機械掘削を行った。8区は、今回の調査地内では禁野火薬庫に関する遺構が良好に遺存していた。11月15日には禁野火薬庫に関する遺構面について、第8回府教委立会を受けた。11月18日から25日まで、禁野火薬庫のコンクリート基礎などの解体撤去と機械掘削を行った。

その後、下層の調査を行い、地山面では総柱の掘立柱建物や井戸など、古代の遺構を多数検出した。同面については、平成23年1月19日に第10回府教委立会を受けた。遺構の完掘作業や記録作業等を継続し、最終的に1月28日までで調査を終了した。

#### **2区・2 - 2区・3区・4区（土壌）**〔平成22年11月5日～11月9日調査〕

これらの調査区は、水銀による汚染土壌が存在する箇所であったが、改正土壌汚染対策法に対応して、計画段階と調査実施段階で汚染土壌に対する方策が変化しており、明らかな汚染土壌の除去は当然ながら、その下部にある措置範囲土壌において当該層を対象とした発掘調査が行えるのか否かについて解釈の不一致があった。平成22年10月25日の枚方市公害監視センターと浅沼組との協議において、土壌汚染対策として汚染土壌およびその下部の措置範囲土壌は、ともに汚染深度内の土壌であるとの見解が示された。なお当初設計時よりも汚染土壌撤去箇所掘削深度が包含層まで達する調査対象部分が1箇所増え、この調査区については2 - 2区と呼称することとした。

これらの協議などを踏まえ、11月5日の第7回府教委立会で、汚染土壌を撤去した段階で包含層の途中もしくは地山層直上程度であった2 - 2区と3区については、汚染土壌撤去後の掘削底面の精査を行い、顕著な遺構が存在した場合のみクレーン撮影を実施し、これ以外の2区と4区も含め主要部分の断面図を作成するように指示があった。この指示を受け、2 - 2区・3区の平面精査を行ったが、顕著な遺構は存在しなかった。これらの各調査区は、断面図を作成し11月9日までで調査を終了した。

#### **10区（A棟）**〔平成22年11月15日～23年5月16日調査〕

10区は調査地場内へのゲートと進入路にあたるため、調査が先送りされていた。ようやく11月15日から数日間、一部で機械掘削を行った。この後、しばらく中断をはさみ、12月にも断続的に機械掘削が実施された。最終的に年が明けた平成23年1月25日のゲートの切り替えを待ち、全域の機械掘削を行い、27日までに機械掘削を終了した。

2月2日に禁野火薬庫に関する遺構面について第11回府教委立会を受け、同日に10区のA1棟部分についてクレーン撮影を行った。また、A2棟部分は2月4日にクレーン撮影を行った。10区は昭和14（1939）年の禁野火薬庫の爆発前後とも遺構面が良好に残存していたので、この爆発後の面をクレーン撮影の対象としたが、その後爆発時およびそれ以前の禁野火薬庫にかかわる遺構面の調査もこの後に行った。同面の調査はA2棟部分で2月18日まで、A1棟部分は25日までで調査を終了し、引き続き機械掘削を行った。ただし、A1棟の一部は、土壌汚染のため掘削できない箇所があった。この土壌汚染範囲については、3月18日の第13回府教委立会の際に、汚染土壌の撤去はやむをえないが、範囲周辺の調査で顕著な遺構が存在した場合には、可能な限り調査を行うよう指示を受けた。

土壌汚染範囲以外は、地山面までの調査を進め、A1棟部分は3月30日に第14回府教委立会を受け、4月7日にクレーン撮影を行い、翌日には一部を除き調査を終了した。

上記の汚染土壌範囲については、4月22日の第16回府教委立会の際に、対象箇所の周辺では顕著な遺構が検出されなかったことと、枚方市公害監視センターからの土壌撤去許可が下りるのが5月中旬以降という見通しを報告した。府教委からは、汚染土壌撤去の許可が下りた後に、この範囲については

できうる限り最終遺構面で汚染土壌の除去作業を中断し、記録を作成し、それをもって調査を終了してよい旨指示を受けた。

他方、A 2 棟部分は地山面より上面の第 4 面で古代の遺構が多数検出された。この遺構面については、3 月 5 日開催の現地説明会の対象としたため、3 月 2 日に同面について調査途中の検出面について府教委に確認を得て、現地説明会後の 3 月 18 日に第 13 回府教委立会を受けた。その後、地山面までの調査を行い、4 月 20 日にクレーン撮影を行い、22 日に第 16 回府教委立会を受け、27 日までに調査をおおむね終了した。

さらに、汚染土壌のため調査が保留されていた A 1 棟部分の一部を 5 月 16 日に補完調査し、現地での調査を完了した。

#### **1 区（道路・ガス管）**〔平成 22 年 12 月 1 日～23 年 3 月 2 日調査〕

道路部分については、掘削限界が設定されていた。この予定掘削深度までを重機にて掘削したが、盛土層中で掘削限界に達した。12 月 3 日に第 9 回府教委立会を受け、6 日までに掘削を完了した。

道路部分の調査が終盤に差し掛かった頃、その下層にガス管を埋設するための調査が追加された。ガス管部分の調査は、その敷設部分のみで幅約 0.4 m、深さ約 1 m、延長 151 m の細長いもので、大部分については平成 23 年 1 月 13 日までで調査を終了し、1 月 19 日に第 10 回府教委立会を受けた。

その後も、補完的な調査を行い、最終的に 3 月 2 日までで調査を終了した。

#### **8 - 2 区・9 - 2 区・10 - 2 区（防火水槽）**〔平成 23 年 1 月 5 日～3 月 30 日調査〕

設置位置が未確定だったもののうち、3 箇所の防火水槽の調査を平成 23 年正月明けから開始した。調査区名については、上記の住棟の調査区に隣接することからその近接する調査区に枝番をつけることとし、8 区の北西に接する防火水槽 D は 8 - 2 区、9 区の北西に位置する防火水槽 C は 9 - 2 区、10 区の南東に接する防火水槽 A は 10 - 2 区とそれぞれ呼称した。いずれの調査区も 1 月 6 日までで機械掘削を終了し、人力掘削に移行した。

8 - 2 区の最終遺構面と 9 - 2 区・10 - 2 区の禁野火薬庫に関する遺構面について、1 月 19 日に第 10 回府教委立会を受けた。8 - 2 区はこれで調査を終了した。

9 - 2 区・10 - 2 区は、いったん埋め戻しをした上で、H 鋼を打設し、調査終了部分を再度機械掘削しつつ横矢板を設置し、人力掘削を行った。両調査区は、3 月 30 日に第 14 回府教委立会を受け、調査を終了した。

#### **12 区（立体駐車場）**〔平成 23 年 1 月 31 日～4 月 20 日調査〕

12 区では、発掘調査に先行して既存の住棟基礎の撤去および表層掘削を平成 23 年 1 月 18 日までにを行った。1 月 31 日から 2 月 7 日までは、機械掘削を行った。12 区には禁野火薬庫に伴う遺構面が良好に残存していた。2 月 16 日にその面のクレーン撮影を行い、18 日に第 12 回府教委立会を受けた。同面の遺構の記録などを 23 日までに終え、コンクリート基礎類の解体や機械掘削へ移行した。

その後、人力掘削にて地山面までの調査を行い、4 月 13 日に第 15 回府教委立会を受け、15 日にクレーン撮影を行った。最終的に、20 日までに全ての調査を終了した。

#### **13 区・14 区・15 区（管路・人孔）**〔平成 23 年 4 月 13 日～4 月 15 日調査〕

調査地内に多数予定されていた人孔・管路については、平成 23 年 3 月 18 日の第 13 回府教委立会の際に、8 区と 12 区との間に予定されている人孔および 9 区西方に予定されている複数の人孔については、個々に調査するのは困難かつ非効率なので、一連の調査範囲として調査し、工事影響深度で調査



を終了してよい旨指示を受けた。

その後、4月中旬に管路と人孔の位置が確定した。調査箇所は結果的に3箇所、これらを13・14・15区とした。いずれも4月13日に機械掘削を行い、即日、第15回府教委立会を受け、攪乱のみの部分は現状で調査を終了してよいが、14区の禁野火薬庫にかかわる遺構が残存する部分については、これらの調査を行った上で調査を終了してよい旨指示を受けたので、15日に測量や写真撮影などの記録をし、調査を終了した。

以上のように、現地における発掘調査の実働期間は、平成22年5月27日から平成23年5月16日までであった。諸施設や住棟を建設する本体工事も平行して行われていたが、平成23年1月からは一層本格化し、7区（E棟）の住棟部分の杭打ちも開始された。

その後の発掘調査期間中には11区（B棟）、9区、（C棟）、8区（D棟）と建築工事も進展し、これに沿って遺跡調査に伴う通路や掘削土置場の変更についても、現地において随時連絡・調整が行われた。

また、発掘調査中には、平成22年6月11日の11区での出土を皮切りに、ほぼ原形を保つ砲弾が計237点（1区：1点、9区：1点、10区：224点、11区：11点）出土した。これらは、出土のたびに浅沼組から枚方警察署、大阪府警察本部、枚方市危機管理室など関係諸機関への連絡が行われ、速やかに警察へ引き取られた。多数の砲弾が出土した平成23年3月11日には、警察とともに陸上自衛隊第103不発弾処理隊の出動があり、自衛隊に引き取られた。

発掘の成果報告等として、調査中の平成23年1月30日には、当センター主催、枚方市教育委員会・財団法人枚方市文化財研究調査会共催の「発掘・復元・検証 いま、よみがえる枚方の20世紀」にて、調査成果のうちとくに禁野火薬庫についての発表を行った。次いで、2月19日には、枚方市教育委員会・財団法人枚方市文化財研究調査会主催、当センター共催の「歴史シンポジウム 交野ヶ原と平安貴族」にて、古代の調査成果について発表を行った。さらに、3月5日には枚方市教育委員会の百済寺跡調査と財団法人枚方市文化財研究調査会の禁野本町遺跡調査と合同で、「特別史跡百済寺跡・禁野本町遺跡発掘調査合同現地説明会」を行い、234名以上の参加を得た。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

禁野本町遺跡は、大阪府枚方市禁野本町一・二丁目、中宮北町、中宮本町に所在する（図1）。枚方市は、大阪府の北東部、淀川左岸、大阪市と京都市のほぼ中間地点に位置する。旧河内国の最北部にあたる。市域は、東西約12 km、南北約8.7 kmの広がりを持ち、面積65.08 km<sup>2</sup>、人口約41万人で、府内の市町村で面積は9番目、人口は4番目である。

枚方市域は、東側が生駒山地の北西端に接することから、巨視的に見ると、市域の南東部の山地が最も高く、北西の淀川左岸の沖積地へ向かって下がる地形である。北東から南西にかけて、男山丘陵、長尾丘陵、交野台地、枚方丘陵といった丘陵や段丘が占める。それらの間を生駒山地から流れ下る船橋川、穂谷川、天野川が開析し、市域の北西側を琵琶湖から大阪湾に流れ下る淀川に注いでいる。

禁野本町遺跡は、天野川北岸、交野台地の北西端部に位置する。今回の調査地の標高はおおよそT.P.+29～31 mで、南東から北西にゆるやかに傾斜している。一方、調査地の西方は、部分的に急傾斜地の危険箇所や被害地域に指定されるほどの段丘崖になっている。今でもその際に立ち西を望むと、手前に淀川を、その背後には摂津の山並みや大阪平野に広がる街並みを望むことができる。

#### 参考文献

- 井上正雄 1922『大阪府全誌 卷之四』清文堂出版株式会社（複製）  
高谷好一・市原実 1961「枚方丘陵の第四紀層」『地質学雑誌』第67巻第793号 日本地質学会  
枚方市史編纂委員会編 1967『枚方市史 第一巻』枚方市役所  
有限会社平凡社地方資料センター編 1986『日本歴史地名大系第28巻 大阪府の地名』平凡社

### 第2節 歴史的環境

図1に掲載した範囲の遺跡を中心に記述する。

**旧石器時代** 穂谷川流域の交北城の山遺跡や、禁野本町遺跡の南方に位置する星丘遺跡、星丘西遺跡、村野遺跡で、後世の包含層などに混入したナイフ形石器や舟底形（角錐状）石器が採集されているが、明確な遺構は検出されていない。枚方丘陵上の茄子作遺跡でも、国府型ナイフ形石器が確認されている。

**縄文時代** 交北城の山遺跡では、後・晩期の土器や石剣・石棒が出土したほか、晩期の大型深鉢を埋納した遺構が3箇所検出された。淀川に面した淀川河床遺跡（その2）からは、少量ながら各時期の土器などが採集されている。天野川流域の岡東遺跡や茄子作遺跡からも、晩期の土器が出土している。

**弥生時代** 弥生時代になると遺跡が増える。交野台地において弥生集落は前期に出現し、中期後半から後期にかけて枚方丘陵や長尾丘陵にも営まれるようになる。穂谷川流域の交北城の山遺跡では、中期の42基の方形周溝墓と9棟の竪穴建物が検出された。天野川流域の星丘西遺跡では、前期の土器が出土し、中・後期には集落や方形周溝墓が検出されている。集落の範囲は後期には東に接する星丘遺跡にも広がり、古墳時代前期まで存続する。村野遺跡や藤田山遺跡などでも中期の竪穴建物が確認されている。



図1 遺跡位置

後期には集落が急増する。天野川右岸の**禁野本町・星丘西・星丘・村野・村野南**、左岸の**鷹塚山・山之上天堂・藤田山・藤田土井山・茄子作**の各遺跡で竪穴建物が検出されている。鷹塚山遺跡では、竪穴建物の内部からベッド状遺構や二連竈と思われる遺構が検出され、小型重圏文仿製鏡や分銅形土製品なども出土した。山之上天堂遺跡では、平面形が六角形や隅丸方形の竪穴建物が検出されている。

後期後半の天野川流域では、**星丘西遺跡**に柳葉形鉄鏃を副葬する大型木棺墓、**鷹塚山遺跡**に楕円形のマウンドを持つ木棺墓、**茄子作遺跡**に墓前祭祀用大溝が付随する方形周溝墓などが築かれる。**中宮ドンバ遺跡**や**中宮・池之宮古墳群**では、弥生時代後期末から終末期の墳丘墓がみられる。

**禁野本町遺跡**では、第47次調査で後期の土器が出土し、第1・3次調査で終末期から古墳時代前期の竪穴建物などが、平成15・16年度調査でも円形の竪穴建物が検出された。

**古墳時代** 天野川流域の前期古墳としては、**万年寺山古墳**、**禁野車塚古墳**、**藤田山古墳**などがある。**禁野車塚古墳**は天野川右岸に築かれた全長120mの前方後円墳で、近年の測量調査によって奈良県桜井市の箸墓古墳と墳形が相似形であることが確認された。また、穂谷川左岸の台地上に立地する全長107.5mの前方後円墳である**牧野車塚古墳**は中期古墳とされていたが、前期に遡ることが判明した。

中期には、古墳分布の中心は穂谷川流域に移る。

後期には、禁野本町遺跡の南西に**禁野上野古墳**や**白雉塚古墳**が築かれる。後者は前方後円墳の可能性もあり、片袖式の畿内型横穴式石室を持つ。石室内壁に赤色顔料が塗布され、鉄刀・鉄鏃・馬具などが出土した。

後期末から飛鳥時代初頭には、**小倉東古墳群**のような木棺直葬主体の低墳丘墓が牧野車塚古墳の周辺部に群集して築かれるようになる。

集落遺跡は、弥生時代後期中頃から引き続き増加傾向にあり、古墳時代前期には天野川流域の**星丘遺跡**、穂谷川流域では**交北城の山遺跡**、**小倉東遺跡**、**田口中島遺跡**などで集落が営まれるようになる。中期の**交北城の山遺跡**や**茄子作遺跡**などからは、韓式系土器が出土している。後期の集落には**星丘遺跡**、**藤田町遺跡**、**中振ドウネンボウ遺跡**などがあり、柱穴や掘立柱建物などが検出されている。

**禁野本町遺跡**でも、第1次調査で後期の円墳の周濠、12次調査で後期の柱穴、平成15・16年度調査で掘立柱建物や竪穴建物が見つかった。

**古代** 禁野本町遺跡の周辺には、奈良時代から平安時代にかけての遺跡が比較的多く分布している。百済寺跡、百済寺下層寺院、**中山観音寺遺跡**には、建物基壇などからなる古代寺院跡がある。百済寺跡に隣接する**禁野本町・百済寺・中宮尼寺田・中宮ドンバ**の各遺跡では、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物の柱穴が比較的大きく、この一帯に百済王氏関連の集落が形成されていた状況が想定されている。**アゼクラ遺跡**、**田口中島遺跡**、**甲斐田新町遺跡**からも、古代の遺構・遺物が見つかった。

禁野本町遺跡の南に接する百済寺跡は、8世紀後半に創建されたと考えられている百済王氏の氏寺である。両遺跡は位置・遺構・遺物とも密接な関係を有する。ただし、百済寺遺跡第27・44・54次調査において百済寺創建以前と考えられる掘立柱建物が検出され、百済寺南遺跡第1・22次調査では白鳳期の複弁蓮華文軒丸瓦や須恵質の鷗尾片が出土していることから、百済寺に先行する寺院の存在も想定される。**禁野本町遺跡**でも、第103次調査の8世紀前半ないし中頃の井戸から「大領」銘木簡が出土し、当遺跡内に郡衙が存在した可能性が示唆される。すなわち、百済王氏が難波から移動してくる前から、当地の開発が進みつつあったと推定できる。

百済王氏は、斉明天皇6（660）年に百済が新羅と唐の連合軍により滅ぼされた際に、日本に亡命、

帰化した百済の王族で、亡命後朝廷に仕えた。『日本書紀』によると、天智天皇3（664）年に難波に居住地を賜り、持統天皇の時に百済王の氏族名を賜ったという。その後、百済王氏は交野の地に移住する。『続日本紀』に、百済王敬福が大仏造立に際して聖武天皇に陸奥の金を献上し、これにより天寶勝宝2（750）年に河内守に任ぜられたという記述があり、百済王氏が居所を難波から交野郡に移したのはこの頃と考えられる。

百済寺が初めて文献に見えるのは、『続日本紀』延暦2（783）年10月16日条である。桓武天皇の交野行幸に関連して、「百済王などの行在所に共奉せる者一兩人に階を進め爵を加う。百済寺に近江・播磨二国の正税各五千束を施す。」とある。正税が施入されていたこと、また出土瓦の中に、吹田市吉志部瓦窯から出土した平安京と同範の瓦が存在することから、この時期に百済寺が官寺的な扱いを受けていたことが考えられる。

発掘調査成果などからも、百済寺の創建は8世紀後半と考えられている。寺域は約140m四方で、伽藍主軸方位は座標北から約5度西に偏る。南門から発した築地大垣で囲まれ、中門から連なる回廊は東西両塔を囲んで金堂に取り付き、金堂の北側に講堂、食堂が配置される。このような双塔式伽藍配置は、朝鮮半島の統一新羅時代の感恩寺に類例があり、渡来氏族に相応しいものであるとされる。また、百済寺跡は、壇上積基壇を採用し、四面に築地大垣を巡らせ、中門・南門の他に北門も備え、東面回廊の東側に別院も設けられるという中央寺院と比較しても遜色のない整備が施されており、このような点からも百済寺が官寺に準じる寺院として重要視されていた様子が伺える。

禁野本町遺跡では、第1・5・6・12・69・71・100・103・129・148次および平成15・16年度調査などで、奈良時代から平安時代の掘立柱建物が見つまっている。これら掘立柱建物の中には、柱穴が一般の掘立柱建物に比べて大きいものがある。第69・103次調査では、南北方向の道路状遺構が確認され、この遺構が500m南に位置する百済寺跡の伽藍中軸線上に一致することが判明した。さらに、この南北道路に交差する東西道路や、南北道路に軸方位を揃えて配置された掘立柱建物、井戸、方形区画域などが検出された。方形区画域は一辺長100m余の溝を外郭としており、内側には一辺27mの溝で囲まれた内郭が存在し、内郭・外郭の四辺の各中央に出入り口を備えていたと想定されている。このような特殊な構造と規模から、『続日本紀』記載の延暦4（785）年と延暦6（787）年に桓武天皇が交野で行った天神を祭る祭祀「昊天祭祀」の関連遺構、あるいは同書に登場する交野行幸に関わる遺構の可能性が指摘されている。

出土遺物も豊富で、土師器・須恵器をはじめ、瓦、木簡、墨書土器、緑釉陶器、円面硯、折敷、木製品、馬骨などがある。平成15・16年度調査では、百済寺跡と同範の軒丸瓦が出土し、長岡京内の鞍岡庵寺との同範瓦も確認されている。第103次調査では、「大領」「池井里」「□冊東代□」「田三段」「□三段内」「阿□弥女」「字遅マ連秋□□」「肥人」「□麻呂」といった地名、人名、稲の収納、田畑経営などに関する内容が書かれた木簡や木簡削屑群が出土しており、記録文書作成が日常的に行われていたことを示唆する。墨書土器には「大領」「少家」「□家」「真山」「T」字状のものがある。

『続日本紀』や『日本後記』には、奈良時代後半から平安時代の初めにかけて、桓武天皇や嵯峨天皇がたびたび交野に行幸し、遊獵していたことが記されている。禁野本町遺跡の周辺には、文徳天皇の第一皇子惟喬親王の別荘である渚院があり、親王も遊獵や遊楽に訪れていたようである。また、藤原俊成の「またや見ん交野のみ野の桜がり花の雪ちる春のあけぼの」など多くの和歌にも詠まれている。

文献史学によれば、当遺跡周辺が一般の狩獵を禁ずる天皇の遊獵地であったことに由来する立ち入

りを禁ずる「禁野」となるのは10世紀前半代と推定されている。10世紀後半には百済王氏は没落し、その頃から禁野本町遺跡とその周辺では遺構・遺物が希薄になる。

**中世** 鎌倉時代以降、禁野本町遺跡周辺の遺跡では遺構が減少するが、**中宮尼寺田遺跡**で柱穴や溝状遺構、**中宮ドンバ遺跡**で溝、井戸、池状遺構、土坑などが検出されている。

鎌倉時代中期以降、農村において、農業や手工業の発展につれて農産物加工品や手工業生産物などの特産物が産出され、農民たちによって商品として売り出されるようになった。これにより、古代以降調庸物や年貢物の運送路として瀬戸内海と京都を結んできた淀川は、商品輸送路としての性格も強めた。流通経済が発展したことに伴い、淀川沿いにも船から関料（通行料）を徴収するための関所が設置された。禁野周辺にも、讃岐国善通寺や興福寺の修造費用を徴収するための関所などが設けられた。

**近世** 豊臣秀吉は大坂と伏見に築城の後、文禄5（1596）年、淀川の治水対策と伏見と大坂間の交通路を整備するために、いわゆる文禄堤を築造させた。この文禄堤をもとに京都と大坂を結ぶ京街道が整備され、禁野本町遺跡から天野川をはさんで西側には、岡新町・岡・三矢・泥町の4村から成る枚方宿が設けられた。**枚方宿遺跡**では、発掘調査により、文禄堤の両側に盛土をしてその上に枚方宿の町家を構築していた様子が確認されている。

商品経済の発展につれて、淀川の水運は物資流通の面からより一層重要性を増した。淀川は、大坂と京都という二大消費地を結ぶだけでなく、日本海側や東海地方の物資が琵琶湖の湖上交通を利用して大津へと運ばれた後、京都から大坂へと運搬される交通路でもあった。江戸時代の淀川には、物資を運搬する船はもとより、旅客を乗せて京都と大坂間を行き来する三十石船や、船の乗客や船頭に飲食物を売っていた茶船（くらわんか船）をはじめ多くの船が往来していた。

**近現代** 明治維新の後、現在の枚方市域の村の多くは大阪府、河内県、堺県の管轄となり、再び大阪府に属した。禁野本町遺跡を含む禁野村は、明治22（1889）年4月1日の町村制施行に際し、旧牧野郷に多くが属する周辺9村と合併し交野郡牧野村大字禁野となった。明治29（1896）年4月1日には茨田郡と交野郡と讃良郡が合併して北河内郡となり、昭和10（1935）年2月11日には牧野村と招提村が合併し殿山町になった。昭和13（1938）年、殿山町が枚方町など計6町村と合併し枚方町となり、昭和22（1947）年8月1日には市制が施行された。平成13（2001）年4月1日には特例市となり、今日の枚方市に至っている。

この禁野の地において、陸軍は火薬庫設置のために明治29（1896）年から土地の買収に着手し、明治30（1897）年4月、禁野本町一帯に砲兵第二方面本署禁野出張所を開設した。施設の名称は、同年9月に大阪陸軍兵器本廠禁野弾薬庫、明治36（1903）年に大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫、1936（昭和11）年頃に大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫、昭和15（1940）年には大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠へと変遷する。ただし、一般的に禁野火薬庫と通称されており、本報告でも基本的に禁野火薬庫と称する。

禁野の地に火薬庫が築かれた理由は、「禁野火薬庫ノ沿革」（1925年）には「記録ナキヲ以テ不明」とある。しかし、淀川上流の宇治火薬庫と下流の大阪城内にある砲兵第二方面本署との中間地点に位置することから、水運に便利で、かつ、高燥の地として選ばれたようである。

禁野火薬庫では、大きな爆発事故が2度発生している。一度目の爆発は、明治42（1909）年8月20日であった。2号清涼火薬庫内のダイナマイトに続き、隣接する1号乾燥火薬庫でも相次いで爆発し、施設の大半が倒壊した。幸い死者はなかったが、兵士4～5名と民間人10名が負傷し、周辺の約1500戸に被害がおよんだ。この爆発後、防爆対策のため大規模に土地買収が行われた。その目的は、「鉄

砲火薬類取締法施行細則」にうたわれた火薬庫と人家との間に 50 間以上の距離を確保するためであったようで、拡張された範囲に施設が築かれることは当面はなかった。今回の調査地の東部は、この時期に拡張された敷地内に相当する。

他方、明治時代末から大正時代初期には、それまでの水運に不都合が生じた模様である。大正 5 (1916) 年の「禁野弾薬庫道路拡張ノ件」によれば、その解決策として表門から京街道までの道路拡幅が行われ、京街道を経て淀川沿いの伊加賀（禁野火薬庫の南西約 3 km）に至りここからの水運を利用するようになった。昭和 5 (1930) 年には枚方大橋の完成により、東海道本線の高槻駅から鉄道を利用する方法に変化する。これに対応して、昭和 8 (1933) 年頃からは、さらに、大規模な用地買収と火薬庫内施設の新設工事が行われるようになる。さらに、昭和 11 (1936) 年には片町線の津田駅から火薬庫に至る専用線建設が完成し、火薬庫構内と鉄道線路が直結した。

二度目の大規模な爆発事故は、昭和 14 (1939) 年 3 月 1 日午後 2 時 45 分頃に発生した。砲弾の爆発をきっかけに計 29 回の大爆発が生じ、その爆発音は京阪一帯に響き渡った。炎は禁野、中宮、渚、磯島、三矢、岡などの近隣の集落にまで及び、翌 2 日午前 3 時ごろようやく鎮火した。爆風による倒壊や半壊も多く、死者 94 名、重軽傷者約 550 名を出す大事故となった。事故翌日の朝日新聞は「破れるような爆発音に耳をつんざく」などと伝えている。事故報告にある「事故発生直以前ニ於ケル弾薬調製作業班ノ配置及完成弾薬格納状況要図」には、敷地内で多数の爆発穴が生じたことが記されている。

陸軍は爆発後の復旧整備を昭和 16 (1941) 年まで行い、敷地の 3 分の 2 は枚方製作所に譲渡、残りは未填薬弾丸庫・薬莖類倉庫として使用した。太平洋戦争の戦況悪化につれて、禁野火薬庫に貯蔵する弾丸類の近隣への分散疎開も行われた。昭和 20 (1945) 年 8 月 15 日の終戦により施設の稼働は停止した。その後、しばらくは分散格納した薬弾・薬莖の処理が続けられた。

戦後の昭和 21 (1946) 年から昭和 42 (1967) 年まで、禁野火薬庫の一部と枚方製造所の西半は大阪大学工学部の枚方学舎として利用された。枚方製造所の東半は昭和 27 (1952) 年に小松製作所（現コマツ）に払い下げられ、以後工場用地として活用されている。

禁野本町遺跡では、第 1 次調査で防空壕や地下倉庫が検出された。その後の調査では、ピットや溝、井戸といった遺構が散見される程度であった。しかし、今回の調査地の西側に隣接する平成 15・16 年度調査地では、禁野火薬庫に関連するものとして、火薬試験場、1～4 号火工場、倉庫、乾燥火薬庫、石組溝、貯水池、軽便軌道などの遺構や、砲弾、煉瓦、枕木、犬釘、土管、ヒューム管、工具、道具類などの遺物が多数発見され、戦争遺跡として注目されることとなった。

#### 参考文献

- 竹内理三ほか編 1983『角川日本地名大辞典 27 大阪府』角川書店
- 財団法人大阪府文化財センター編集・発行 2006『禁野本町遺跡』（財）大阪文化財センター調査報告書第 140 集
- 財団法人大阪府文化財センター編集・発行 2011『シンポジウム 発掘・復元・検証 いま、よみがえる枚方の 20 世紀』
- 財団法人枚方市文化財研究調査会編集・発行 1988『図録・枚方の遺跡』
- 財団法人枚方市文化財研究調査会編集・発行 2009『図録 考古資料でみる枚方の歴史』
- 枚方市史編纂委員会編 1972『枚方市史 第二巻』枚方市
- 枚方市史編纂委員会編 1977『枚方市史 第三巻』枚方市
- 枚方市史編纂委員会編 1980『枚方市史 第四巻』枚方市
- 枚方市史編纂委員会編 1995『枚方市史 別巻』枚方市
- 枚方市教育委員会編集・発行 2004『楽しく学ぶ 枚方の歴史』
- 枚方市教育委員会・（財）枚方市文化財研究調査会編集・発行 2011『歴史シンポジウム 交野ヶ原と平安貴族』

## 第3章 調査・整理の方法

### 第1節 調査の方法

**調査区の位置** 禁野本町遺跡 10 - 1 調査区は、禁野本町遺跡範囲内の西部、大阪府枚方市禁野本町二丁目に位置する（図1）。

**調査区の呼称** 「禁野本町遺跡」の後の「10」は、受託契約初年度である2010（平成22）年度の下2桁、次の「- 1」はその年度の当遺跡内での工事発注の順を表す。

今回設定された調査区（図2）は、道路・ガス管部分（1区）、汚染土壌撤去部分4箇所（2区・2-2区・3区・4区）、調整池部分（5区）、集会所部分（6区）、住棟部分5箇所（7区：E棟、8区：D1棟・D2棟、9区：C棟、10区：A1棟・A2棟、11区：B棟）、住棟に隣接する防火水槽部分3箇所（10-2区：防火水槽A、9-2区：防火水槽C、8-2区：防火水槽D）、立体駐車場部分（12区）、人孔および管路部分3箇所（13区・14区・15区）である。これらは、上記の「10-1」に続けてそれぞれの調査区番号（たとえば、住棟E棟であれば7区なので「-7」）を付け、「禁野本町遺跡 10-1-7」のように表示する。

**方位** 国土座標軸の座標北を採用した。調査時、遺跡周辺の座標北は、磁北より東へ $6^{\circ} 38'$ 、真北より西へ $0^{\circ} 10'$  振れていた。

**高さ** 東京湾平均海面（T.P.）を適用した。T.P.と大阪湾最低潮位（O.P.）とは、 $T.P.+0.0\text{ m} = O.P.+1.3\text{ m}$ の関係にある。

**地区割り** 当センターの『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（2003年）に定められた方法で地区割りを行った（図3）。世界測地系（2002年4月以降）に準拠し、調査対象地にメッシュをかける方法である。

当センターが調査領域とする大阪府内は、平面直角座標系の第VI座標系の範囲内である。

大阪府の南西端は、第VI座標系の  $X=-192,000\text{ m}$ ・ $Y=-88,000\text{ m}$ にあたる。

第I区画は、そこを基点とし大阪府全域を南北（縦）6kmごとにA～Oに、東西（横）8kmごと0～8に分割したもので、1/10000地形図の範囲に相当する。今回の調査範囲は「K7」。

第II区画は、第I区画を南北（縦）1.5km、東西（横）2kmごとに各4分割、すなわち16等分したもので、1/2500地形図（都市計画図）の範囲に相当する。第II区画は、南西端を1とし、東へ4まで、1から順に北に5・9・13、北東端を16と平行式に表示する。今回の調査範囲は「1」。

第III区画は、第II区画内の北東端を基点とし、1辺100mの正方形に、南北（縦）をA～Oの15に、東西（横）を1～20に区画したもの。今回の調査範囲は「13A・13B・13C・14B・14C・15B」。

第IV区画は、第III区画内の北東端を基点に、南北（縦）をa～jの15に、東西（横）を1～20の1辺10mの正方形に区画したもの。表示は横・縦の順に「8d」等。

したがって、今回の調査範囲の内10×10mグリッドは、「K7（第I区画）-1（第II区画）-13B（第III区画）-8d（第IV区画）」等と表示される。第I・II区画の「K7-1」は全域共通なので、図2には第III・第IV区画名を表示した。第IV区画が、遺物取り上げ等の基本単位となる。

**面と層の呼称法** 調査区ごとに、最初に調査した面を第1面と呼び、以下調査順に面の番号を付した。



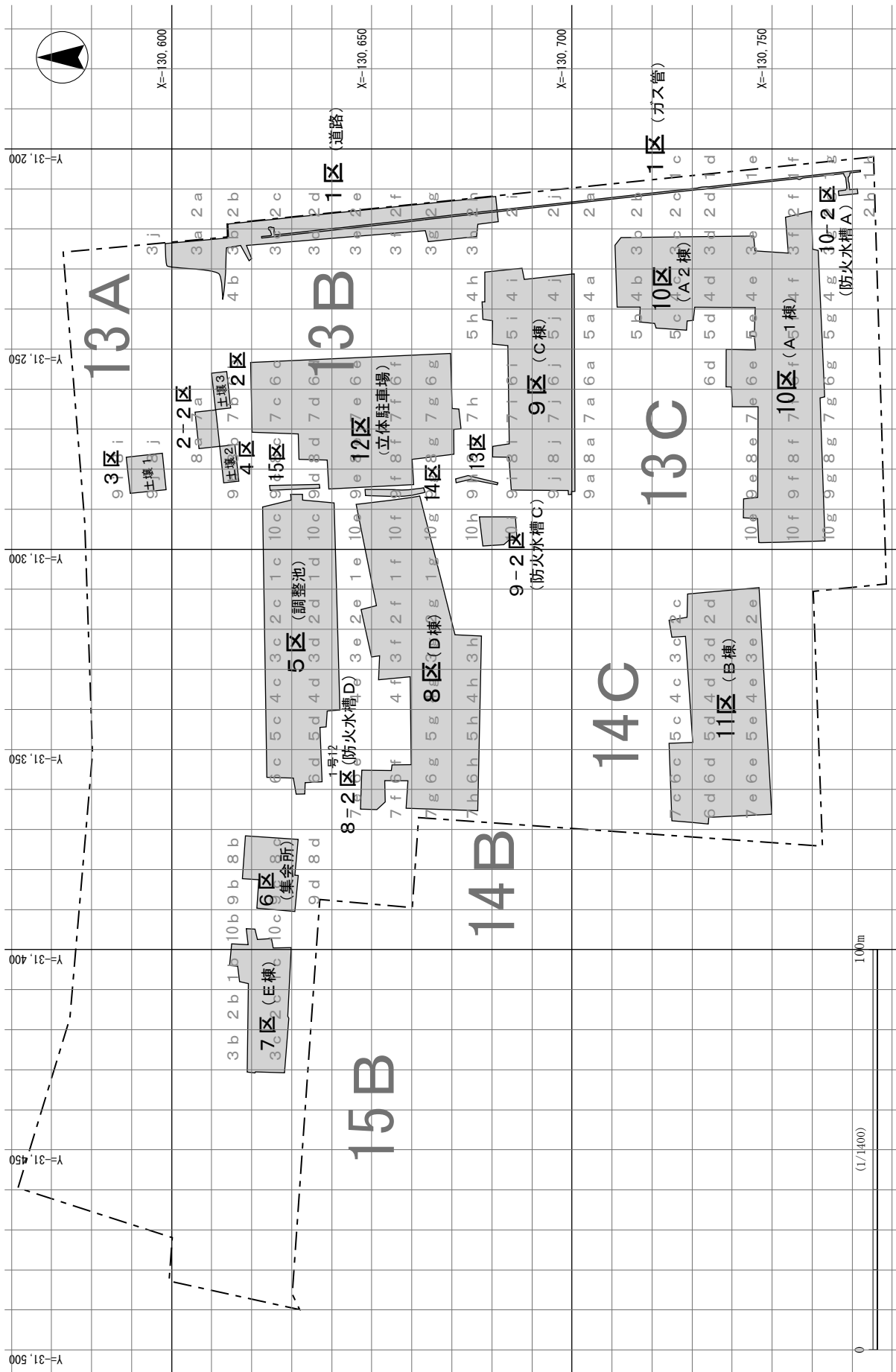


図2 調査区配置と地区割り

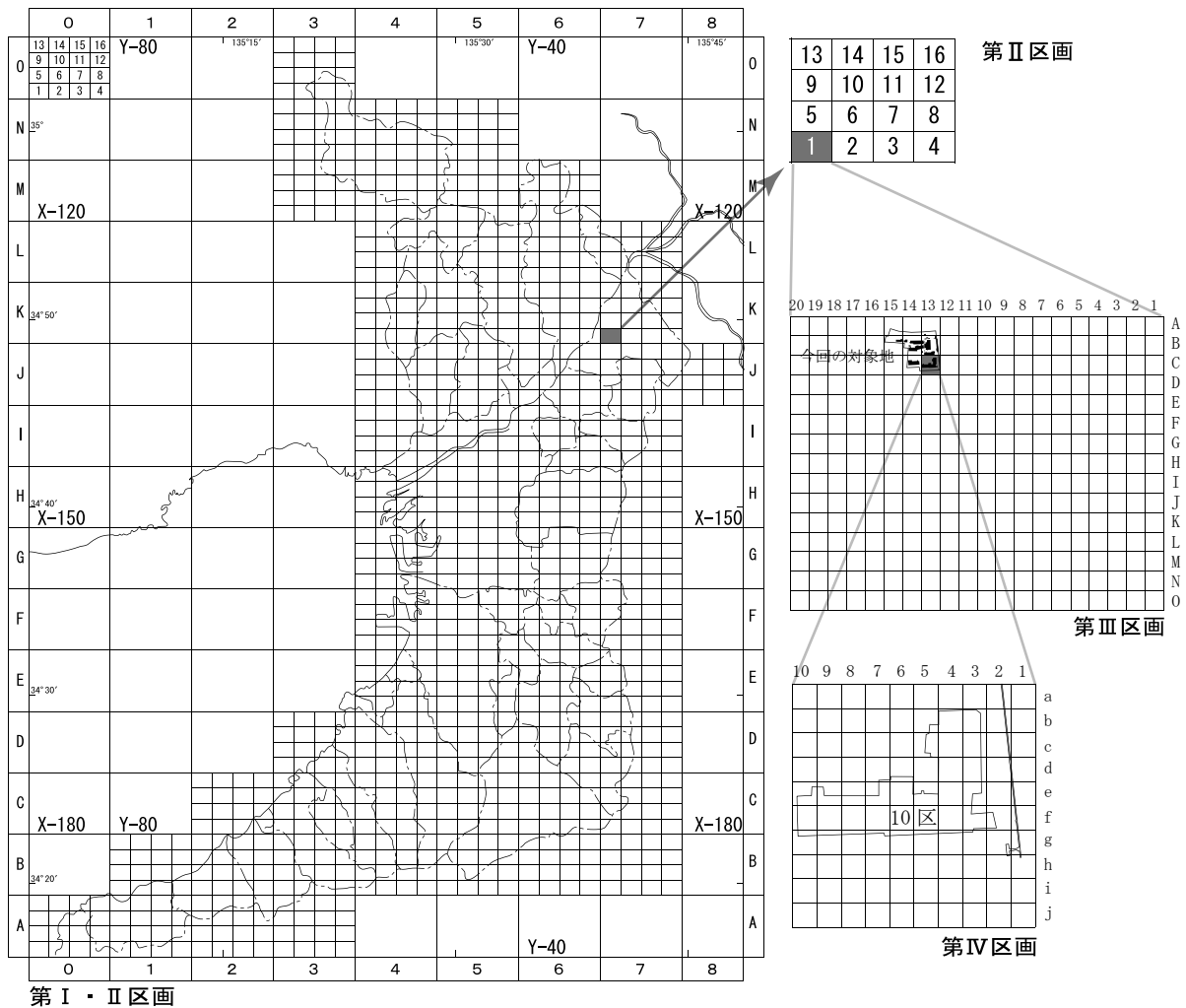


図3 地区割りの方法

層名は、機械掘削停止面から第1面までの層を第0層と呼び、第1面と第2面との間の層を第1層とし以下同様である。ここでいう「算用数字の層」はあくまでも掘削と遺物取り上げの単位であり、これは観察の結果、細分されることがある。したがって、同じ名称のたとえば「第4面」といっても、調査区によって異なる遺構面を指すことになる。そこで、今回の調査地全体を通した基本層序として、「ローマ数字の層」を設定した。それらについては、表1に整理した。

**遺構番号** 調査区ごとに、遺構種類にかかわらず通し番号とし、番号の後に遺構の種類を付けた。番号をつけた遺構は計約2900箇所であった。

**掘削方法** 基本的にオープンカット方式で調査区の壁面に法をつけて掘削を行った。地山面が高いため掘削深度の浅い調査区では壁面に法をつけずに掘削を行った。防火水槽部分のうち2箇所（9-2区・10-2区）は、掘削してから簡易矢板を設置するあて矢板工法を使用した。

旧住棟(昭和40年代の住宅団地)建設等に伴う盛土層やこれ以前の旧表土層等を機械掘削の対象とし、禁野火薬庫にかかわる近代の遺構面を検出した。それ以下は、人力掘削により調査した。ただし、確認調査等の結果から、上層の禁野火薬庫にかかわる近代の遺構面より下層の遺構面までの間に禁野火薬庫造成以前の盛土や旧作土層等の近世層が分厚く残っている調査区については、禁野火薬庫にかかわる調査の終了後それらを対象に第2次機械掘削を行い、中世ないしそれ以前の遺構面から再度人力掘削により調査を進めた。

表1 各調査区遺構面の対照

基本層序と遺構面の時期	1区	5区	6区	7区	8区	8-2区	9区	9-2区	10区 A1棟	10区 A2棟	10-2 区	11区	12区
旧住棟盛土層上面												第1面	
第0層(旧住棟盛土)	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第1層	第0層
昭和14年爆発関連層上面	第1面		第1面	第1面			第1面	第1面	第1面	第1面	第1面	第2面	第1面
第I層(昭和14年爆発関連層)	第1層	第0層	第1層	第1層	第0層	第0層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	第2層	第1層
昭和14年爆発関連層下面	第2面	第1面	第2面	第2面	第1面	第1面	第2面	第2面	第2面	第2面	(第2面)	第3面	第2面
第II層(火薬庫盛土・旧作土)	第2層	第1層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第3層	第2層
中世～近世の面		第2面			第2面	第2面	第3面		第3面	第3面		第4面	
第III層(古代～中世)	第2層	第2層		第2層	第2層	第2層	第3層	第2層	第3層	第3層		第4層	第2層
古代～中世の面					第3面	第3面							第3面
第IV層(古代～中世)					第3層								
古代の面					第4面		第4面	第4面				第5面	
第V層(古代)	第2層	第2層		第2層	第4層		第4層		第3層	第3層		第5面	第3層
古代の面					第5面		第5面		第4面	第4面			
第VI層(古墳時代後期～古代)	第2層	第2層		第2層	第5面		第5面		第4層	第4層		第5面	第3層
古墳時代後期～古代の面	第3面	第3面		第3面	第6面		第6面		第5面	第5面		第6面	第4面
第VII層(地山)				第3層									
				第4面									

**調査深度** 大阪府教育委員会からの指示により、住棟部分7箇所は無遺物層である地山層上面まで、それ以外は工事対象の深さまでとされた。

**記録作成** 検出した遺構・遺物等を対象に、調査区全体・遺構・遺物出土状況等の実測・観察所見・写真撮影等の記録作業を行った。

各区の禁野火薬庫関係面と古代遺構面については、基本的にクレーンによる空中写真測量を実施し縮尺50分の1の図化を行った。その他の遺構面については、平板測量または地区杭を基準とした測量で50分の1ないし100分の1の全体図を作成した。地層断面図は縮尺20分の1に統一して幅10mごとに1枚の図面に記録した。単独の遺構や遺物出土状況等は対象物に応じて10分の1ないし20分の1で適宜図化した。クレーン測量以外の図面は、当センター所定のA2判実測用紙に記録した。

**写真撮影** 写真媒体は、記録用として35mm白黒・リバーサルフィルム・6×7白黒フィルムを基本とし、さらに主要な対象は6×7リバーサルフィルムでも撮影した。台帳用にはデジタルカメラを使用した。現像後のフィルムは当センター所定のアルバムに収納し、各種フィルムの情報を盛り込んだ写真台帳を作成した。

**遺物の取り上げ** 遺構出土の遺物は検出遺構別に、包含層の遺物は層位的には「層」ごとに、平面的には10×10mの区画(第IV区画)ごとの取り上げを基本とした。さらに必要に応じて、トータルステーションを用いて、3次元で出土位置を特定して取り上げた遺物もある。

出土遺物には、遺跡名・地区名・層名・遺構名・出土年月日・登録番号等を記した当センター所定のマイラーベースのラベルを添付し、洗浄作業・注記作業・デジタル台帳作成作業を行った。

**現地での遺物整理** 調査現場でデジタル台帳への登録と洗浄を優先し、注記も行った。

**立会** 主要遺構面である禁野火薬庫関係面と最終遺構面については、基本的に調査区ごとにのべ16回、大阪府教育委員会の立会を受けた。

## 第2節 整理の方法

**遺物整理** 遺物は、調査の現地において出土後速やかに、洗浄、乾燥、注記作業を行った。注記は「調査名(カタカナ)・調査区名-登録番号」と定められており、たとえば5区の登録番号72の場合「キンヤホンマチ10-1-5-72」となる。その後、登録番号ごとに分類と集計を行い、報告書掲載のものを優先して実測や写真撮影等を進めた。それ以外の遺物は、登録番号ごとに収納袋に納めた。遺物量は内法54×34×15cmのコンテナ(セキスイTS-28等)に換算すると約270箱分である。

そのうち実測・掲載遺物は約1100点である。実測対象遺物は、一部について接合・復元作業を行い、当センター所定の実測用紙に原寸で実測し、ピックアップ台帳用にデジタルカメラで撮影を行った。一部の遺物では拓本も採った。実測後、レイアウトとトレースを行い、版下を作成した。遺物実測図はファイルに収納した。

**台帳作成等** 出土遺物については遺物登録台帳を、実測遺物についてはピックアップ台帳を、それぞれ作成した。台帳は、ファイルメーカー社のFile Maker Pro 8によるもので、デジタルカメラで撮影した写真をインポートし、遺物登録台帳には、出土遺物に添付したラベル内容・遺物の種類・遺物の処理(圧縮収納・ピックアップの有無等)・収納したコンテナ番号等の情報を、実測遺物台帳には、遺物の種別・器形・時期・残存率等の情報を、それぞれを入力した。

現地で作成した遺構実測図は、内容に応じて整理した上でA1判ファイルに収納し、登録番号・内容・縮尺・収納ファイル等を記入した図面台帳を作成した。これらの図面等をもとに報告書掲載用の遺構図版原図を作成し、トレースを行った。

**写真撮影** 現地で撮影したフィルムは、デジタルカメラ撮影以外は、現像の後、所定のアルバム類に収納した。デジタルカメラにより撮影した写真は、上記の登録・遺物台帳同様File Maker Pro 8による写真台帳にインポートし、写しこみラベルに記した情報や、他の撮影媒体各々のアルバム番号・シート番号・ネガ番号等の情報を入力した。これらの中から報告書掲載用写真を選択し、写真図版版下を作成した。

写真掲載遺物については、写真室にて撮影を行い、写真図版版下を作成した。

**遺物の編年観** 土器をはじめとする遺物の年代は、一般的な年代観に従った。なお、主要遺物の編年や用語については、主に次の文献を参考とした。

弥生土器：寺沢薫・森岡秀人編 1990 『弥生土器の様式と編年-近畿編Ⅱ-』木耳社

須恵器：田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ

中村浩 1978 「和泉陶邑出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』大阪府教育委員会

古代の土器：奈良国立文化財研究所 1974 『平城宮発掘調査報告Ⅵ』奈良国立文化財研究所

奈良国立文化財研究所 1976 『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所

奈良国立文化財研究所 1982 『平城宮発掘調査報告ⅩⅠ』奈良国立文化財研究所

奈良国立文化財研究所 1993 『平城宮発掘調査報告ⅩⅣ』奈良国立文化財研究所

古代の土器研究会編 1992～1994 『古代の土器1～3 都城の土器集成Ⅰ～Ⅲ』古代の土器研究会

緑釉陶器・灰釉陶器：平尾政幸 1994 「第四部平安京の遺物 第二章土器と陶磁器 4 緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」『平安京提要』角川書店

瓦器：中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

# 第4章 遺構の調査成果

## 第1節 基本層序

個々の調査区での土層断面も別掲するが、調査地全体の基本層序（図4）を概観すると次のようになる。

**第0層** 禁野火薬庫以降の層である。昭和40年代前半に建てられた旧住棟（アパート）建設に伴う盛土層などで、砂礫やコンクリート塊を含む砂混じりシルト層を主体とする。機械掘削の対象とした層である。

**第I層** 昭和14（1939）年3月1日の禁野火薬庫爆発に関連する層で、爆発時に形成された層や爆発後の整地層などに細分できる。細分が困難な場合は一括して、爆発関連層とする。

**第II層** 禁野火薬庫造成に伴う盛土層を主体とし、造成以前の旧作土層なども含む。盛土層には、第0層の盛土層と同様に包含層や地山層のブロックが多数混じる。旧作土層は、基本的に砂混じりシルト層である。

**第III層** 古代から中世の遺物を包含する層。5区中央部・8区東部・9区・11区東部・12区で比較的明瞭に確認できた。砂混じりシルト層を主体とする。

**第IV層** 主として古代、一部中世の遺物を包含する層。多くの調査区では第III層との分離が困難で、第IV層として分層できたのは8区のみである。シルト層を主体とする。

**第V層** 古代の遺物を包含する層。やや暗色を呈するシルト層を主体とする。

**第VI層** 古代以前の遺物を含む層。暗色を呈するシルト層を主体とする。

**第VII層** 地山層である。

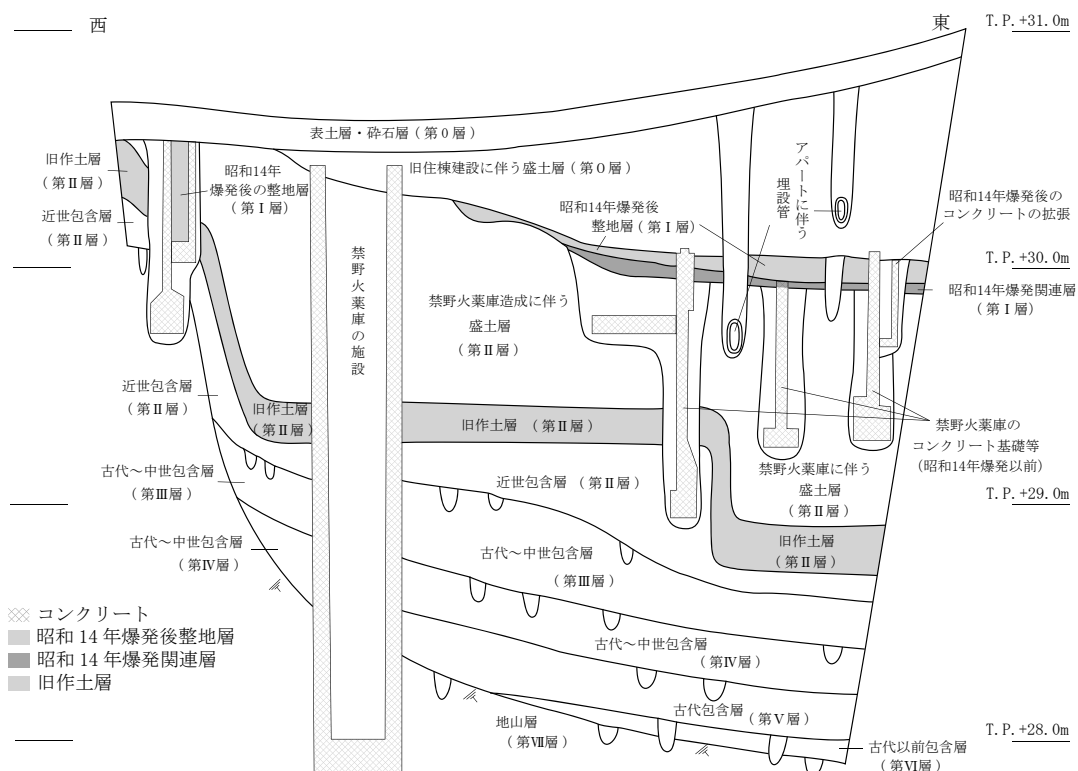


図4 断面模式

## 第2節 1区（道路・ガス管）の遺構

1区は調査地東辺に位置する。道路及びガス管理設に伴う調査である。

このうち、道路に伴う調査範囲は、およそ T.P.+30.9 m の現地表面から T.P.+30.4 m までの調査対象が昭和 40 年代に造成された旧住棟建設に伴う盛土層内で収まったため、機械掘削のみで終了した。

ガス管に伴う調査は当初設計にはなく、道路部分の機械掘削後に追加された。ガス管を埋設する範囲のみのため、東西幅約 0.4 m に対し南北の延長は 151 m と非常に細長く、工事との関係で数回に分けて調査した。調査深度は約 1 m、最終面での調査面積は 60 m<sup>2</sup> である。

### 層序（図5）

1区西壁の断面を掲げる。

**第0層**は、基本層序の第0層に該当する。1区中部以南では、基本的に昭和 14（1939）年の爆発後の倉庫建設に伴う造成層（1）である。直径 20 m と記録された爆発穴（4）も存在する。北部も爆発後の盛土層（2・8）が主体を占める。

**第1層**は、基本層序の第I層である昭和 14 年爆発層（12）に該当する。今回の調査では鍵層となるものだが、1区ではその分布範囲は狭い。

**第2層**は、基本層序の第II層・第III層・第V層・第VI層に該当するものと考えられる。そのうち他の調査区との対比がしやすいのは、第II層の火薬庫造成に伴う盛土層など（13～59）、火薬庫造成以前の旧作土層（58～62）である。それよりも下層の包含層（63～65）については、遺物の出土も僅少で、基本層序の第III層・第V層・第VI層のいずれに該当するものか判然としない。

### 第1面（図6 写真図版1-1・2） 昭和14年以後

第0層を除去し検出した面で、禁野火薬庫の昭和 14（1939）年爆発関連層（第I層）の上面である。一部で黒色層が複数確認できたが、幅約 0.4 m と狭い調査区であるため、攪乱部分などを利用して下層の状況を確認しながら昭和 14 年爆発関連層を探した。

第1面としたのは、1区中部から北部にかけてはおよそ T.P.+29.6 m に黒色層が存在した範囲の上面である。中部以南では黒色層が存在しないので、火薬庫造成に伴う盛土層の上面と考えられるおよそ T.P.+30.2 m の面を第1面とした。北端から南へ 30 数mの部分では、第1面がすでに失われていると判断した。

遺構として、1区南部で、コンクリート基礎を検出した。いずれも、西側に隣接する 10 区第1面で検出した基礎の延長部分である。心々距離 10.8 m の3組の基礎は、南から、昭和 17（1942）年の「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠新築増築概要図」記載の**第16号倉庫・第17号倉庫・第18号倉庫**（以下、禁野火薬庫の諸施設は付図2参照）に該当する。第17号倉庫の基礎の間に存在するコンクリート土間は上面の高さが T.P.+30.5 m で、10 区で検出した同倉庫のコンクリート土間の上面が T.P.+30.6 m であったこととおおむね符合する。

一方、1区北部では、同図に、南から第3号雨覆庫、第24号倉庫、第4号雨覆庫が描かれている。しかし、1区北部では第1面が攪乱されており、それらに相当する基礎が確定できない。さらに、第24号倉庫はともかく、雨覆庫はその名称が示すように屋根がけの簡便な施設であったと考えてよけれ

ば、重厚な基礎が設けられていなかった可能性もある。

### 第2面（図7） 昭和14年以前

昭和14年爆発関連層（第1層）を除去した面である。第1層の存在する範囲が限られていたため、新たに第2面として検出できたのは1区の中中部から北部にかけてのみであった。面の高さはおよそT.P.+29.5 m。

第2面とした範囲では、顕著な遺構は見られなかった。しかし、断面なども含めて禁野火薬庫の資料と対比すると、第1面で検出した第18号倉庫の下層にやや北方にずれて存在する基礎が、第3号雑器庫に該当すると考えられる。

北部では、北端に存在する側溝、心々距離10.0 mの基礎、基礎の抜き後の可能性のある攪乱などが、昭和12（1937）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」に（朱書ハ軍需動員ニ伴フ臨時構築物ヲ示ス）として追記された記載の南から第10号・第11号・第12号火工場の基礎の痕跡である可能性がある。とくに、心々距離10.0 mのひと組の基礎は、位置的には第11号火工場の該当する可能性がある。ただし、その場合、同じような構造と推定される第10号・第12号火工場の基礎が見当たらないことになる。また、他の建物の配置をみても、建物南北幅・建物間隔ともに10 m程度の場合があり、現状では建物を特定することは難しい。

1区は、明治43（1910）年頃から禁野火薬庫の敷地となるが、顕著な施設はない。昭和8（1933）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図」に填薬弾丸庫の土塁が描かれているものの、遺構としては検出できなかった。

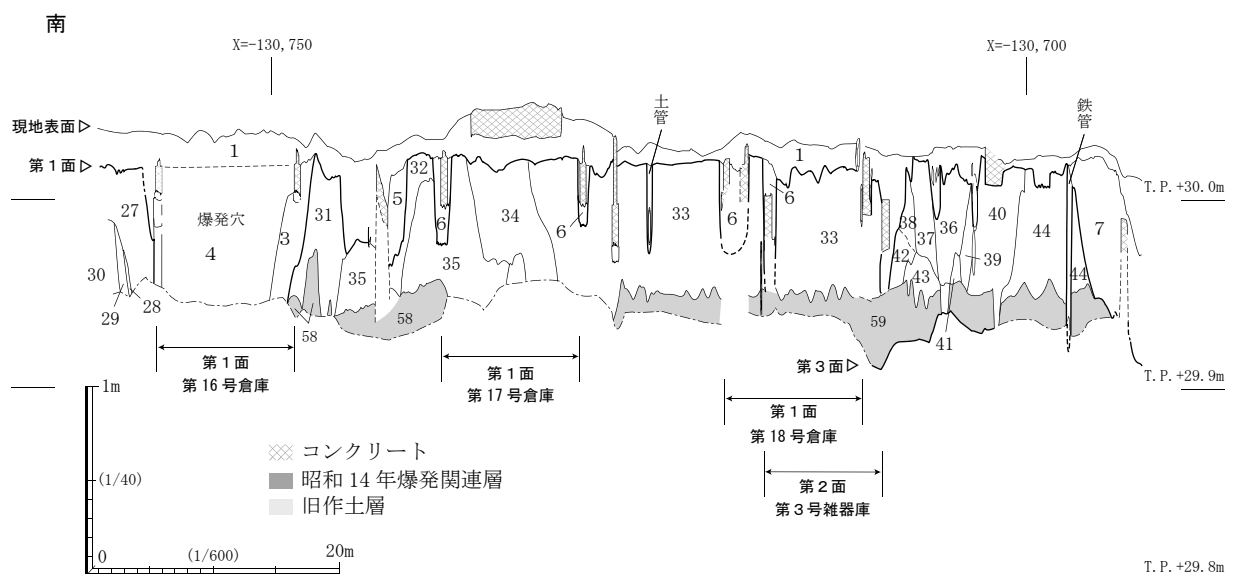
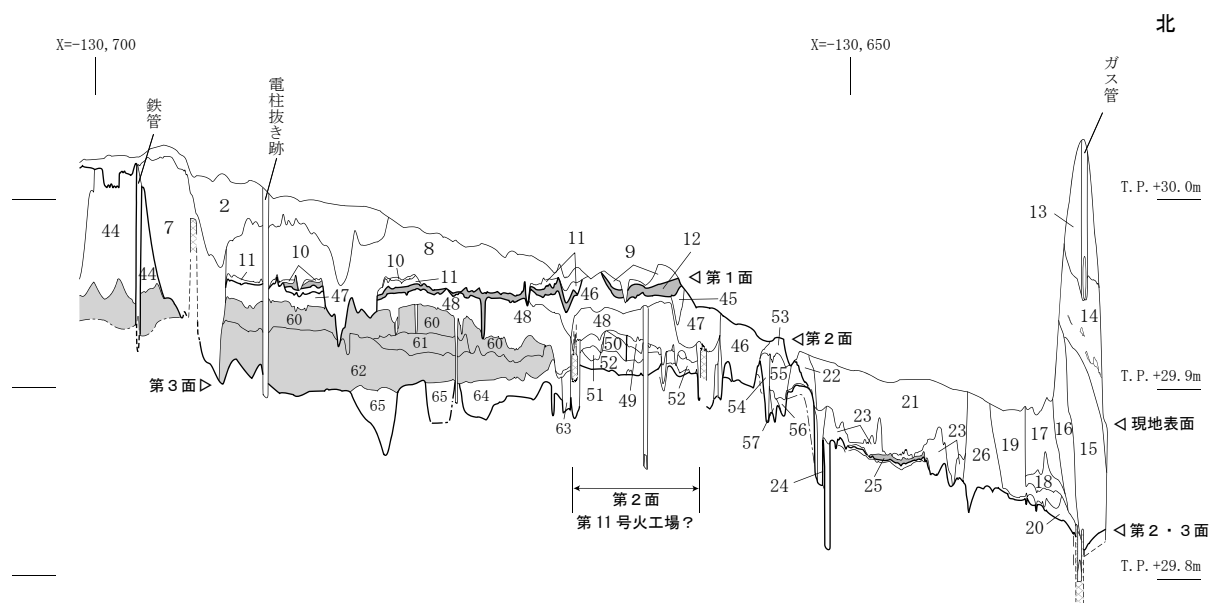


図5

- 1 7.5YR4/1 褐灰 礫混じり細砂～中砂 炭が混じる
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト～礫混じり細砂に2.5Y6/8 明黄褐 シルトブロックやN6/灰 シルトブロック等が混じる 径2～3mmの礫を含む
- 3 10YR5/8 黄褐 細砂～粗砂と10YR8/1 灰白 細砂～粗砂と2.5Y5/3 黄褐 細砂混じりシルトが斑に混じる
- 4 10YR5/3 にぶい黄褐 細砂～粗砂に径2～10cm程度の円礫や長径15～20cm程度の角礫が多量に混じる 煉瓦片・炭片を含む
- 5 10YR5/2 灰黄褐 粗砂混じりシルト 礫をきわめて多く含む
- 6 10YR3/2 黒褐 細砂～中砂
- 7 5Y5/1 灰 細砂～粗砂混じりシルトに7.5Y2/2 オリーブ黒 粗砂混じりシルトと5B6/1 青灰 シルト混じり細砂～粗砂が斑に混じる 径1～3cmの礫・煉瓦片を少量含む
- 8 2.5Y5/3 黄褐 シルト～細砂に2.5Y6/1 灰黄 シルトブロック等が混じる
- 9 10YR5/6 黄褐 シルト～粗砂 地山ブロックを含む
- 10 2.5Y5/3 黄褐 シルト混じり細砂～中砂
- 11 2.5Y5/3 黄褐 シルト混じり細砂～中砂
- 12 10YR2/1 黒 細砂～粗砂 径2～3mm以下の礫が混じる (昭和14年爆発関連層)
- 13 2.5Y8/1 灰白 礫混じりシルト～細砂に5Y6/1 灰 シルトと10YR5/8 黄褐シルトが混じる
- 14 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト～礫混じりシルトに筋状に黒色層が入る
- 15 2.5Y7/1 灰白 シルトブロックと2.5Y7/3 浅黄 中砂～粗砂と10BG7/1 明青灰シルトと5Y5/1 灰 細砂混じりシルトと径2～3cmの礫が混じる
- 16 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト～礫混じり細砂に2.5Y8/2 灰白 シルト10YR6/8 明黄褐 細砂混じりシルト5Y5/1 灰 細砂混じりシルトが混じる
- 17 2.5Y8/2 灰白 シルトに明黄褐2.5Y6/8 シルト～中砂が混じる
- 18 10YR6/4 にぶい黄 中砂～粗砂と10YR4/3 にぶい黄褐シルト混じり細砂～中砂が混じる
- 19 2.5Y6/4 にぶい黄 中砂～粗砂に2.5Y6/3 にぶい黄 シルトブロックが混じる
- 20 2.5Y4/4 浅黄 粗砂
- 21 10YR6/6 明黄褐 シルト～粗砂に2.5Y6/4 にぶい黄 シルトなどの小ブロックが大量に混じる
- 22 10YR4/3 にぶい黄褐 細砂混じりシルトにスレートを含む
- 23 10YR4/3 にぶい黄褐 細砂～礫混じりシルト 木片を多く含む
- 24 10YR5/8 黄褐 細砂混じりシルト 木片を多く含む
- 25 10YR2/1 黒 礫混じり粗砂
- 26 2.5Y6/4 にぶい黄 中砂～粗砂に5YR5/6 明褐 シルトブロックや10YR3/3 暗褐 細砂混じりシルトブロックが大量に混じる
- 27 10YR6/4 にぶい黄橙 中砂～粗砂混じりシルト ブロックと礫を含む
- 28 10YR5/1 褐灰 細砂～粗砂 植物の地下茎が多い
- 29 7.5YR6/6 橙 中砂～粗砂に10YR7/6 明黄褐 ブロックが混じる
- 30 5YR5/6 明赤灰 中砂～粗砂
- 31 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト混じり細砂～粗砂と2.5Y7/1 灰白 細砂混じりシルトと10YR6/8 明黄褐 細砂混じりシルトが斑に混じる
- 32 10YR7/8 黄橙 細砂混じりシルトブロック
- 33 10YR6/8 明黄褐 シルトブロックと10YR5/1 褐灰 シルト混じり細砂ブロックと10YR4/2 にぶい黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 34 10YR6/8 明黄褐 中砂～粗砂に2.5Y8/1 灰白 シルトブロックと5Y5/1 灰 シルト～細砂が混じる
- 35 10YR4/4 褐 細砂混じりシルトブロック
- 36 10YR5/6 黄褐 シルトブロック
- 37 5B6/1 青灰 シルトブロック
- 38 2.5Y5/4 黄褐 シルトブロック
- 39 7.5YR6/6 橙 礫混じりシルトブロック
- 40 5YR4/8 赤褐 粗砂と2.5Y6/3 にぶい黄 粗砂の互層に5YR4/8 赤褐 シルトブロックが混じる
- 41 5G6/1 緑灰 細砂～粗砂
- 42 10YR5/6 黄褐 シルトブロック
- 43 2.5Y7/6 明黄褐 礫混じりシルトブロック
- 44 5B6/1 青灰 細砂～粗砂混じりシルトと2.5Y5/6 黄褐細砂～粗砂混じりシルトと2.5Y5/2 暗灰黄 細砂～粗砂が斑に混じる
- 45 礫混じりシルト
- 46 2.5Y5/6 黄褐 粗砂～礫に10YR4/4 褐 シルトブロックが混じる
- 47 10YR5/4 にぶい黄褐 シルト～細砂に2.5Y5/3 黄褐 シルトブロックが大量に混じる
- 48 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト～粗砂に径2～5cm程度の円礫と長径5～20cm程度の角礫を大量に含む
- 49 10YR1.7/1 黒 シルト～細砂 炭化した植物の地下茎を大量に含む
- 50 7.5YR4/4 褐 シルト～細砂に径2～10mm程度の礫が混じる
- 51 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂～粗砂に径2～4cm程度の円礫が大量に混じる
- 52 10YR5/2 黄褐 シルトに10YR5/4 にぶい黄褐 シルトの小ブロックが混じる
- 53 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂混じりシルトに炭化粒を含むブロックが混じる
- 54 10YR5/8 黄褐 細砂～粗砂
- 55 53に似るがシルト質強い 木片やスレート片を含む
- 56 7.5YR4/4 褐 細砂～粗砂 微細な焼土や炭片を含む
- 57 10YR5/6 黄褐 細砂～粗砂
- 58 7.5YR4/1 褐灰 シルト混じり中砂～粗砂 (旧作土層)
- 59 5Y5/1 灰 細砂混じりシルト (旧作土層)
- 60 2.5Y5/1 黄灰 シルト混じり細砂～中砂 (旧作土層)
- 61 5Y6/1 灰 シルト混じり細砂 (旧作土層)
- 62 5Y5/1 灰 シルト混じり細砂に5Y5/3 灰オリーブ シルトが筋状に混じる (旧作土層)
- 63 10YR4/2 灰黄褐 シルト～粗砂
- 64 10YR5/3 にぶい黄褐 細砂混じりシルト
- 65 5Y5/2 灰オリーブ 細砂混じりシルト



1区 西壁断面



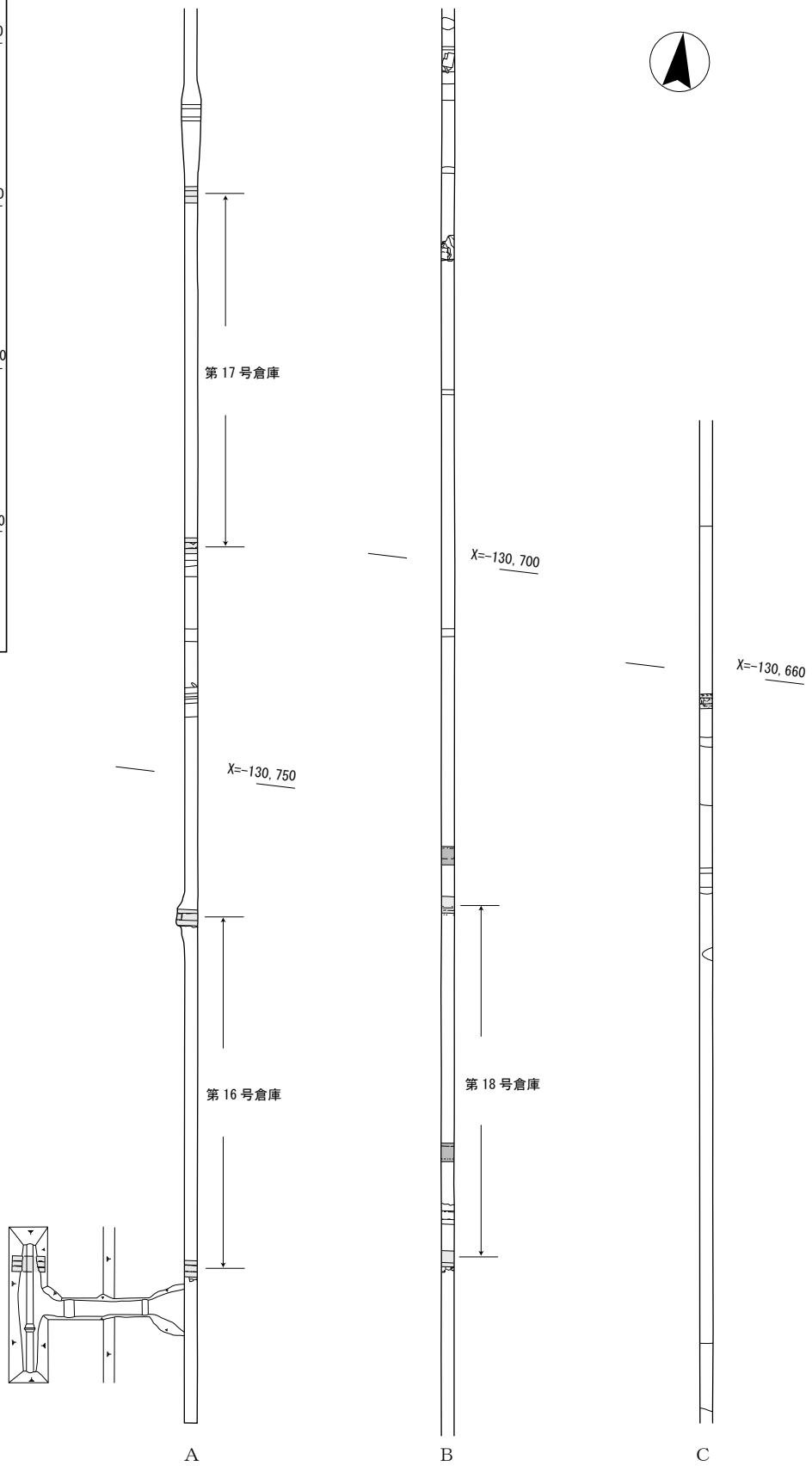
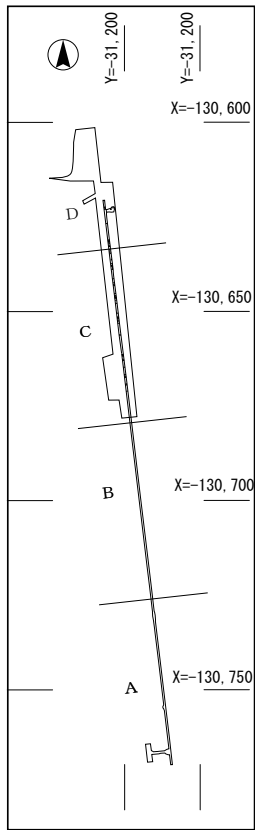


图6 1区第1面

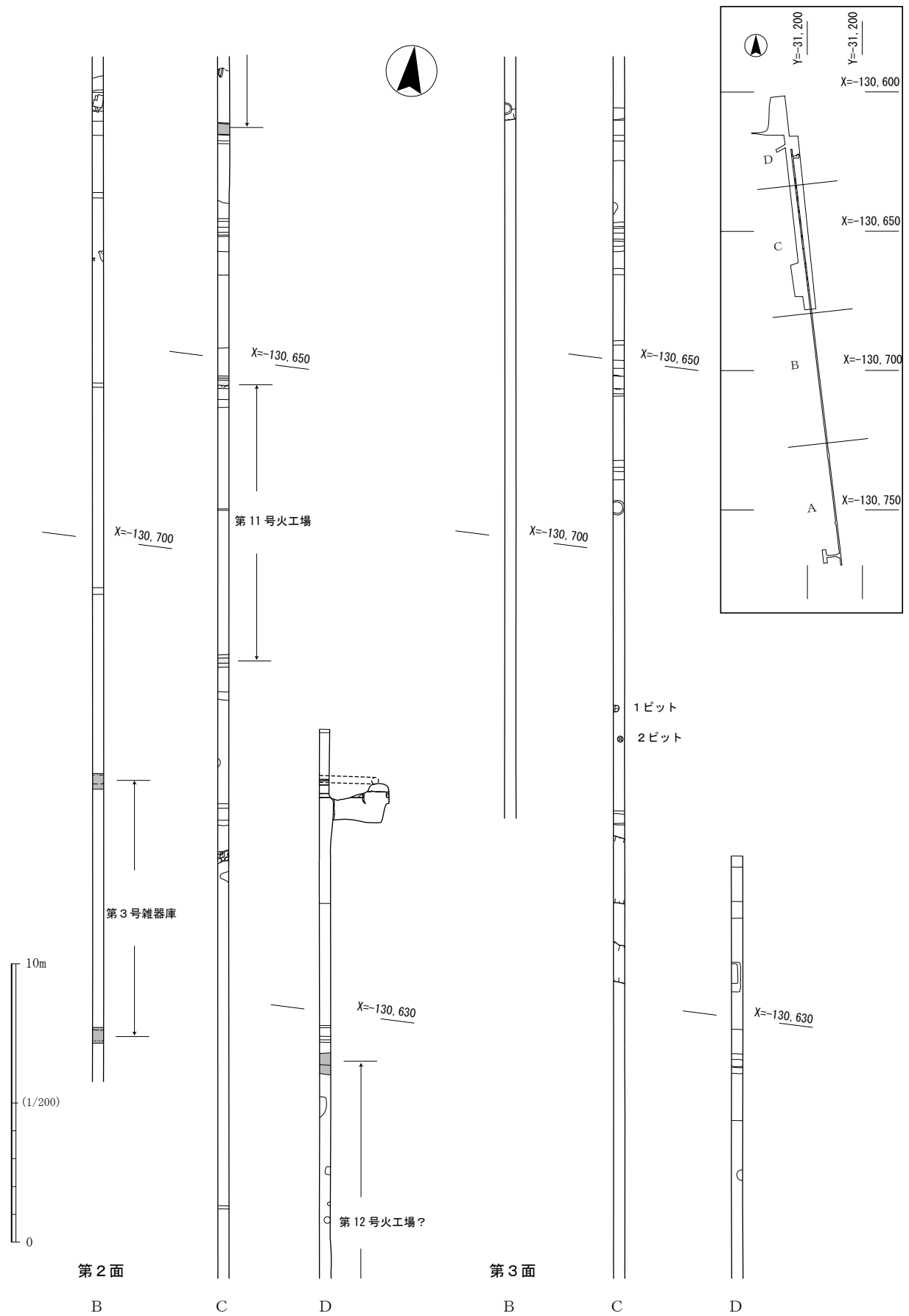


図7 1区 第2面・第3面

### 第3面 (図7 写真図版1 - 3・4) 古代か

禁野火薬庫の造成に伴う盛土層や旧作土層などの第Ⅱ層を除去した面である。1区南部では、禁野火薬庫造成に伴う盛土層や旧作土層(第Ⅱ層)中で、掘削限界であるT.P.+29.3～29.5 mに達した。一方、1区中部以北では地山層上面まで掘り下げ、ピットを2個検出できた。その高さは、1区中部でおよそT.P.+29.0 mだが、北部ではT.P.+28.2 mにまで下がる。

**1ピット** 平面はほぼ円形で、直径22 cm、深さ24 cm。埋土は、10YR4/3にぶい黄褐色シルト。土器細片が出土した。

**2ピット** 平面円形で、直径20 cm、深さ30 cm。埋土は、10YR4/3にぶい黄褐色シルト。出土遺物なし。

### 第3節 2区・2 - 2区・3区・4区（土壌）の遺構

2区・2 - 2区・3区・4区（図8 写真図版2 - 5）は、調査地北東部に位置する。汚染土壌の撤去に伴う調査である。2区・3区・4区は、計画段階では最終遺構面で10 m四方（100 m<sup>2</sup>）となるようにそれぞれ10 mの間隔をおいて設定され、調査中に2区と4区との間に2 - 2区が追加された。

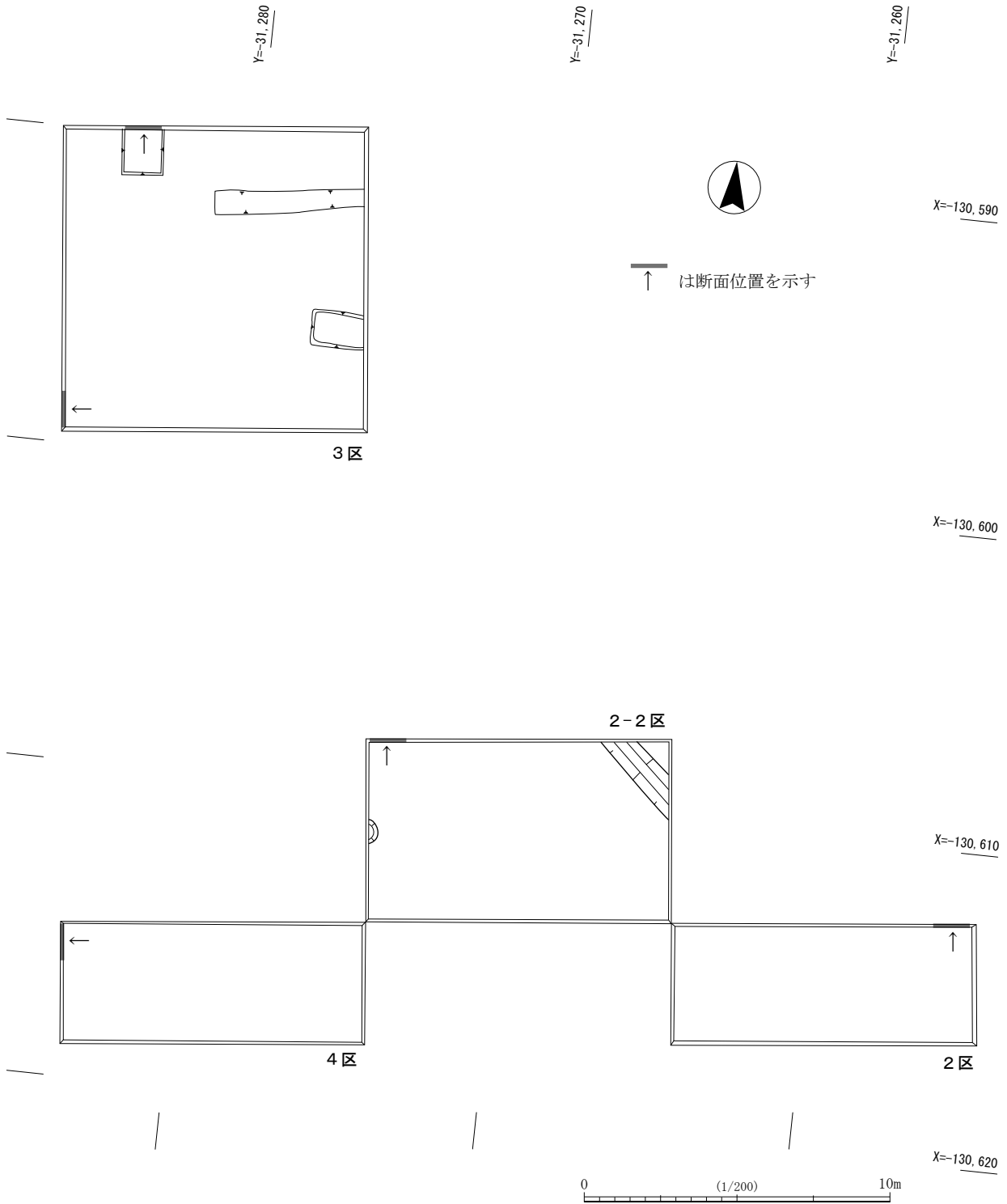


図8 2区・2 - 2区・3区・4区

各区の現地表面から調査を開始したが、機械掘削の途中で汚染土壌の存在により作業が一時中断された。最終面での調査面積は4つの調査区合わせて260㎡である。

## 2区（写真図版2-6）

現地表面がおよそT.P.+28.0mであり、盛土層を約20cm除去するとT.P.+27.8mの掘削深度に達した。さらに、南部において、南北4m・東西10mの範囲で汚染土壌をT.P.+26.7mまで除去し精査を行ったが、遺構・遺物ともになかった。

### 2-2区

南北6m、東西10mの範囲において、汚染土壌を撤去した掘削底面のT.P.+27.2mで精査を行った。その結果、北東部で北西-南東方向に延びる深さ5cm程度の溝状のくぼみと、西部で直径80cm、深さ3cmほどのピット状のくぼみがみられた。しかし、遺物は出土しなかった。

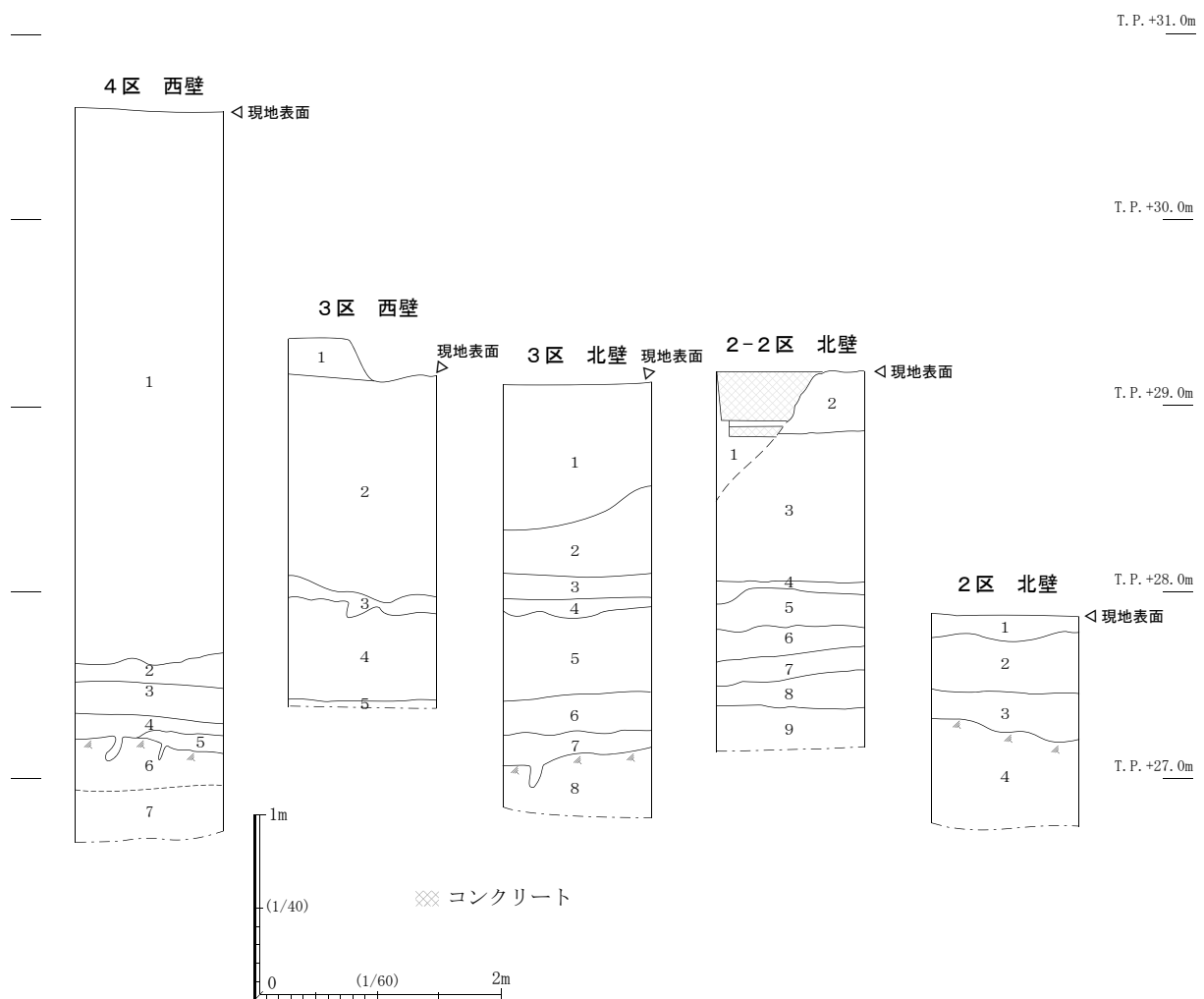


図9 2区・2-2区・3区・4区 断面

### 3区（写真図版2 - 7）

汚染土壌撤去を行った掘削底面の T.P.+27.3 m で精査を行ったが、遺構・遺物はなかった。さらに、3区北西部で下層確認を行い、T.P.+27.1 m で地山層上面を検出したが、遺構・遺物ともなかった。

### 4区

盛土層内で T.P.+27.8 m の掘削深度に達した。その後、南部において南北 4 m ・東西 10 m の範囲で汚染土壌を T.P.+26.7 m まで除去し精査を行ったが、遺構・遺物ともなかった。

禁野火薬庫の諸記録を参照しても、これら 2区・2 - 2区・3区・4区の範囲には、顕著な構造物はみられない。わずかに昭和 14（1939）年の爆発後、大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫の大部分が大阪工廠枚方製造所に移管されたことによって設置された境界施設の検出が予想されたが、それも見当たらなかった。

#### 4区 西壁

- 1 2.5Y5/4 黄褐 シルト混じり細砂～粗砂に径 2～5 cm の礫、コンクリート片が混じる
- 2 2.5Y5/1 黄灰 細砂混じりシルトに 10YR5/6 黄褐 細砂混じりシルトが混じる
- 3 2.5Y5/1 黄灰 細砂混じりシルトに 10YR4/3 にぶい黄褐 細砂混じりシルトが混じる
- 4 10YR5/1 褐灰 細砂混じりシルトに 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトが混じる
- 5 10YR5/1 褐灰 細砂混じりシルトに 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトが混じる
- 6 10YR5/8 黄褐 細砂～粗砂混じりシルト（地山層）
- 7 2.5Y6/1 黄灰 粗砂に 10YR6/6 明黄褐 粗砂混じりシルトと 10YR4/4 褐 細砂～粗砂が混じる（地山層）

#### 3区 西壁

- 1 2.5Y3/2 黒褐 細砂～礫混じりシルト
- 2 2.5Y5/4 黄褐 シルト混じり細砂～粗砂に径 2～10 cm の礫、煉瓦が多く混じる
- 3 5Y4/1 灰 細砂～礫混じりシルト
- 4 5Y5/1 灰 細砂～礫混じりシルト
- 5 7.5Y5/1 灰 細砂混じりシルトに 10YR5/6 黄褐細砂～中砂混じりシルトが混じる

#### 3区 北壁

- 1 2.5Y5/4 黄褐 シルト混じり細砂～粗砂に径 1～10 cm の礫が多く混じる
- 2 2.5GY4/1 暗オリーブ灰 細砂～粗砂混じりシルトに径 2～10 cm の礫が多く混じる
- 3 2.5GY5/1 暗オリーブ灰 細砂～礫混じりシルト
- 4 5Y4/1 灰 細砂～礫混じりシルト
- 5 5Y5/1 灰 細砂～礫混じりシルト
- 6 7.5Y5/1 灰 細砂混じりシルトに 10YR5/6 黄褐細砂～中砂混じりシルトが混じる
- 7 5Y5/1 灰 細砂混じりシルトに 10YR3/2 黒褐 細砂～中砂混じりシルトが混じる
- 8 N7/1 灰白 シルトに 10YR5/8 黄褐 細砂～粗砂混じりシルトが混じる（地山層）

#### 2-2区 北壁

- 1 礫層
- 2 5Y6/1 灰 細砂に径 4～5 cm 程度の礫が多く混じる
- 3 2.5Y4/6 オリーブ褐 細砂混じりシルトに径 5～10 cm の礫、煉瓦、木片、コンクリート片等が混じる
- 4 5Y5/1 灰 シルト～細砂
- 5 2.5Y5/1 黄灰 細砂混じりシルト
- 6 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂～中砂混じりシルト
- 7 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂～中砂混じりシルト
- 8 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混じりシルトに 10YR4/4 褐 細砂混じりシルトが混じる
- 9 2.5Y5/1 黄灰 細砂混じりシルトに 10YR3/4 暗褐 細砂混じりシルトが混じる

#### 2区 北壁

- 1 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 10YR4/4 褐 細砂～粗砂混じりシルト 径 5 mm～1 cm 程度の礫を含む
- 3 10YR5/6 黄褐 中砂～粗砂混じりシルトに 5Y5/1 灰 中砂～粗砂混じりシルトが混じる
- 4 10YR5/8 黄褐 細砂～粗砂と 5Y8/1 灰白 細砂～粗砂が混じり合う（地山層）

## 第4節 5区（調整池）の遺構

5区は調査地北部に位置する。調整池の設置に伴う調査である。およそ T.P.+31.2 mの現地表面から、T.P.+28.6～29.6 mの第3面まで調査した。最終面での調査面積は1300㎡。5区では、旧住棟建設などのため各遺構面とも攪乱により失われた範囲が広く、昭和14年（1939）爆発関連層も不明瞭であったため、機械掘削の段階で旧作土層や地山層まで掘り下げざるをえなかった。

**第1面**は昭和14年（1939）爆発関連層などを除去した面である。禁野火薬庫の土塁や建物の基礎、溝、土坑とそれ以前の溜池やピットなどを検出した。

**第2面**は中世～近世の面。溝やピットを検出した。

**第3面**は地山層上面。古代ないしそれ以前の竪穴建物、掘立柱建物、土坑、溝、ピットを検出した。

### 層序（図10）

5区では、南壁の断面を掲げる。ただし、南壁の東部は土塁基礎により破壊されているので、堆積状況が明らかなのは中央部以西のみである。また、5区南壁は階段状に屈折しているため、図10は北からみた3つの面を1枚につないである。

**第0層**は、基本層序の第0層と第I層に該当する。ただし、この5区では、今回の調査で禁野火薬庫についての鍵層として認識している昭和14（1939）年爆発関連層（第I層）が不明瞭であり、そのほとんどは昭和40年代の旧住棟建設に伴う盛土層（2）である。

**第1層**は、基本層序の第II層に該当する。昭和11（1936）年以降に造られた土塁の裾に巡らされた溝（3～11）、明治42（1909）年の爆発後に造られた建物の基礎跡（12～14）、火薬庫造成に伴う盛土層など（15～59）、火薬庫造成以前の旧作土層（61）、中世～近世の包含層（62～70）に分けられる。

**第2層**（71～74）は、基本層序の第III層・第V層・第VI層に該当する。遺物は少ないが、古代～中世の包含層である。この層を除去し、地山層上面である第3面に達した。

**地山層**（77～81）は、基本層序の第VII層に該当する。5区最終遺構面である第3面以下の下層にトレンチを設定し、無遺物・自然堆積であることを確認した。

### 第1面（図11 写真図版3-8・9） 昭和14年以前

昭和14年（1939）爆発関連層（第I層）を除去した面ないしそれよりも下層の面である。しかし、この5区では、今回の調査で禁野火薬庫についての鍵層として認識している爆発関連層（第I層）が不明瞭であり、また禁野火薬庫関係の遺構の遺存状況も悪い。攪乱などを除去した面の高さはT.P.+28.9～29.6 mで西側が高いが、断面観察からは本来の禁野火薬庫面の高さはT.P.+30.6～30.9 mであったと考えられる。遺構として、土塁や建物の基礎、溝、土坑、溜池、ピットなどを調査した。

**禁野火薬庫関係の遺構** 第1面検出の遺構のうちを、まず禁野火薬庫関係の遺構を報告する。

**土塁基礎**（図12） 5区南辺東部に位置するコンクリート基礎である。8区第1面20建物とした昭和11年授受の第4師団兵器部保管建物を囲む土塁のうち、建物北側の土塁の南辺基礎にあたる。基礎の上部は破壊されており、内部の鉄筋が露出している。表面には型枠の痕跡が比較的明瞭に残る。基礎の下方、フーチングよりも約20 cm上方には、直径4 cmほどの水抜き孔が0.7～1.2 m間隔に開けられて

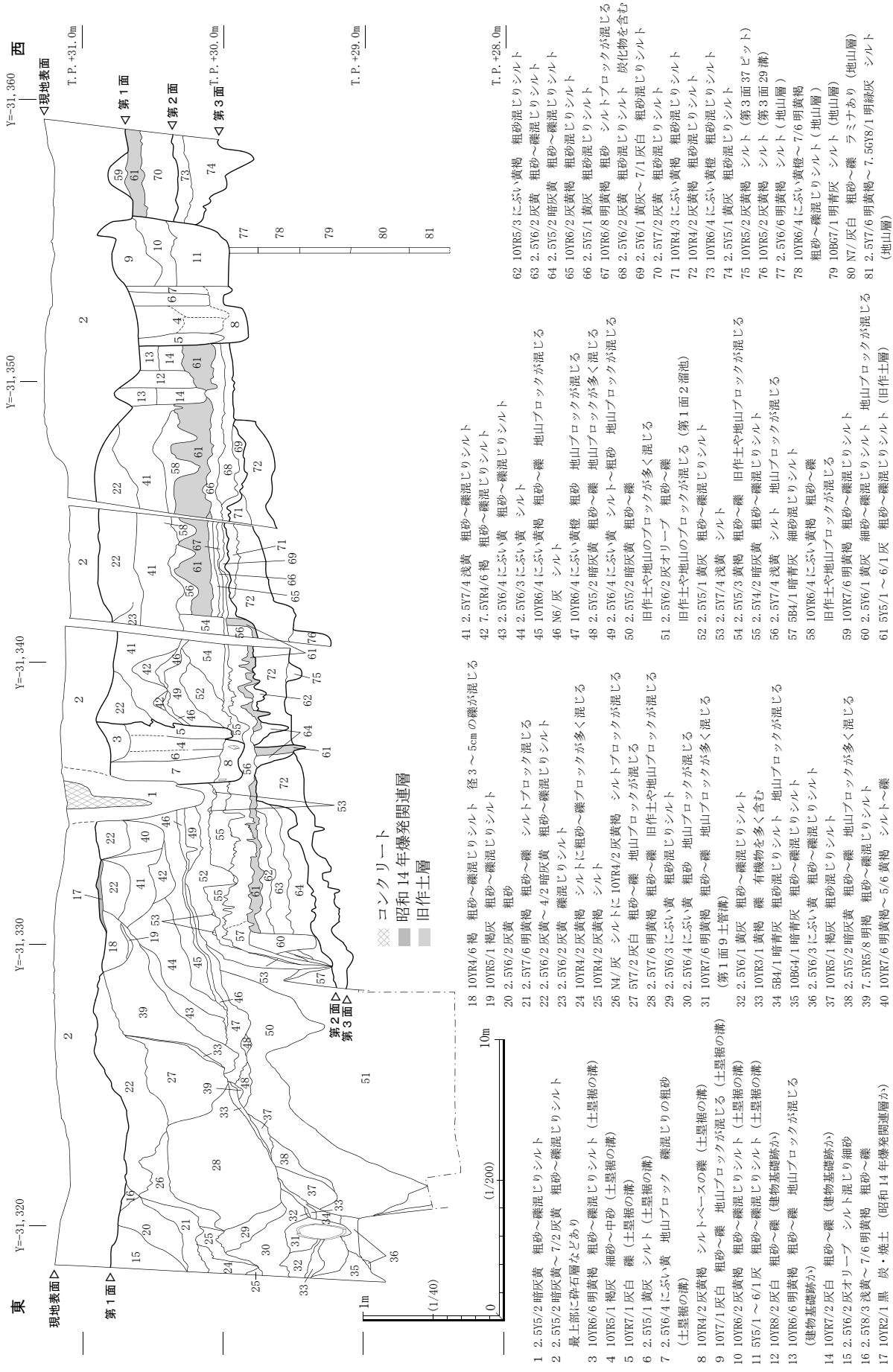


図10 5区 南壁断面



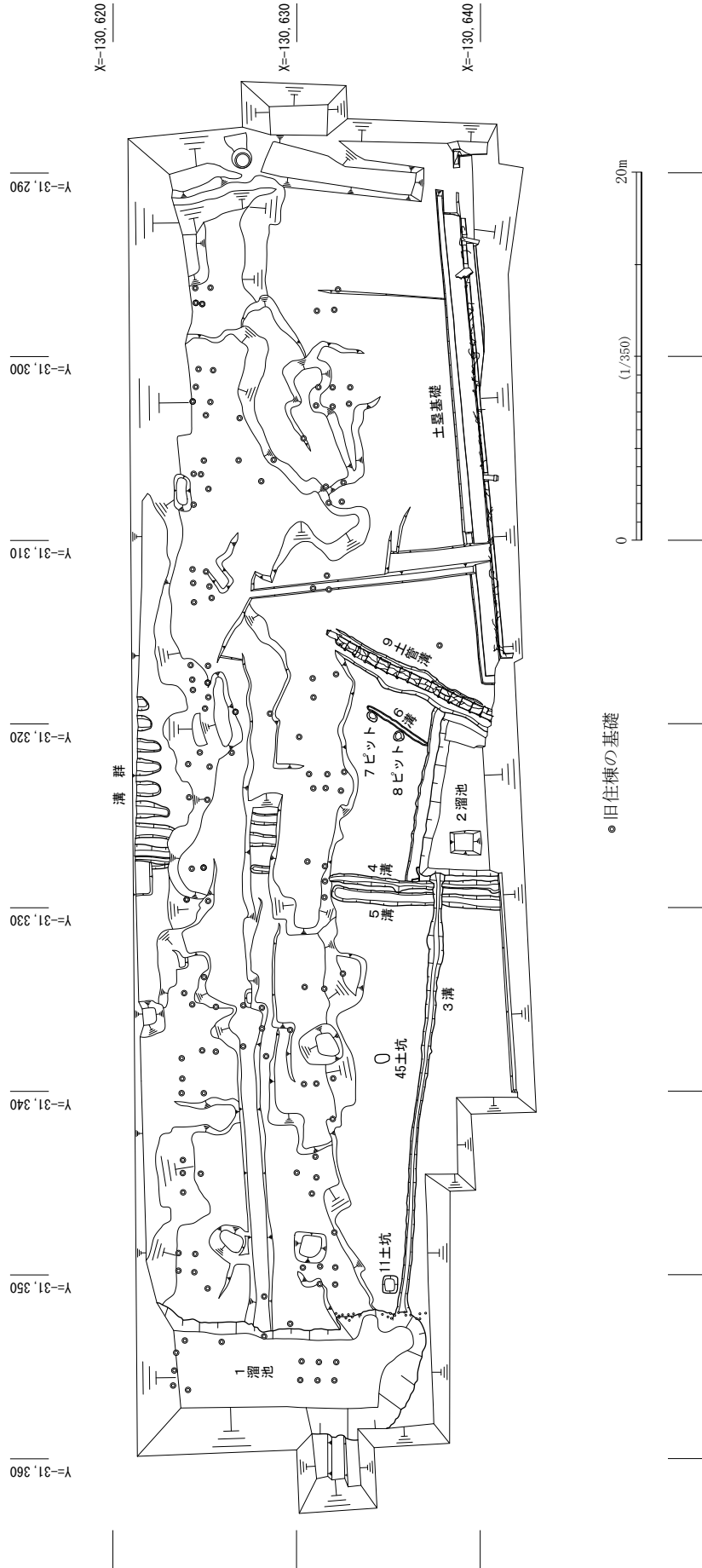


図 11 5区 第1面



图 12 5 区 第 1 面土墨基础

いる。

この土塁は、昭和 11（1936）～昭和 13（1938）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」には、他の土塁よりも小規模に表現されている。それが通常の土塁表現になるのが、昭和 14（1939）年の「事故発生直以前ニ於ケル弾薬調製作業班ノ配置及完成弾薬格納状況要図」である。一方調査では、このコンクリート製擁壁は、土塁を構築した後にその盛土を切りこんで打設されたことが判明した。これらの記録と検出状況とを考えあわせると、昭和 11 年から昭和 13 年頃までは擁壁が存在せず土塁のみ存在した時期があり、その後昭和 14 年初頭までに今回検出のコンクリート擁壁が構築されたと考えることもできる。爆発は昭和 14（1939）年 3 月 1 日に発生するが、今回検出のコンクリート基礎南側の側溝内から、この爆発に伴うと推定される黒色層と多数の瓦片が出土しており、この推定を補強する。

**建物基礎** 5 区南西部に位置する。明治 42（1909）年の爆発後に築かれ、当初は 7 号火工場（9 - 2 区第 1 面 1 コンクリート基礎として検出した昭和 10 年の第 7 号火工場とは別物）とされ、昭和 12（1937）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」に 6 号火工場として記されている建物の検出が予想された。しかし、これは断面での確認に止まった。

**9 土管溝**（写真図版 4 - 10） 5 区中央部南側に位置する。主軸方位は北北東 - 南南西で、検出長約 10 m、幅 1.0 ～ 1.6 m、深さ 30 cm 以上。検出できた土管は 17 本で、一部の土管には「アイチ 並管 トコナメ」という文字と山形に T 字の刻印がある（図 129 - 26）。

9 土管溝の位置は、上記の土塁の下層にあたる。5 区南壁断面（図 10）を観察すると、2 溜池（51）よりも新しく、昭和 11（1936）年築造の土塁盛土に覆われている。周辺施設の整備状況などから昭和 11 年に近い時期に設置された暗渠と推定できる。

**11 土坑**（写真図版 4 - 11） 昭和 8（1933）年前後の「大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図」などを参照すると、7 号火工場のすぐ西側、土塁との間の狭い部分に位置する。平面隅丸方形で、東西 1.0 m、南北 0.9 m、深さ 0.6 m 以上。埋土は、検出面から 20 cm ほどは 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂～粗砂混じりシルトだが、それよりも下層には炭が詰まっている。防湿を意図したものであろうか。

**45 土坑**（写真図版 4 - 12） 7 号火工場のすぐ東側に位置する。平面は南北に長い楕円形で、南北 0.8 m、東西 0.5 m、深さ 0.6 m。内部には炭が詰まっている。11 土坑と同様な機能を持つと推定される。

**禁野火薬庫よりも古い遺構** 次に、本来は第 1 面よりも下層の遺構であるが、攪乱を除去した結果露出してしまったものを報告する。

**1 溜池** 5 区西端に位置する。上記建物北西側の土塁の下層にあたる。深さ 1.5 m 以上。溜池の東辺南部には南北方向に杭が並んでおり、護岸的な施設と推定できる。断面観察から、明治時代末年の土塁構築時に埋められたと考えられる。土器細片が出土した。

**2 溜池** 5 区中央部南側、火工場周囲の土塁の下層に位置する。昭和 11（1936）年以降の土塁構築時に埋められた状況である。土器細片が出土した。

**3 溝** 5 区南西部で、1 溜池と 2 溜池を結び東西方向に延びる。長さ 24 m、幅 0.4 ～ 0.9 m、深さ 21 cm。埋土は、上層が 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト、中層は 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂混じりシルトに 10YR6/6 明黄褐色細砂～粗砂混じりシルトのブロックが混じる、下層が 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂～粗砂混じりシルトである。出土遺物なし。

**4 溝** 5 区中央部の南西寄り、2 溜池の西辺で南北に延びる。次の 5 溝とともに 3 溝よりも古い。検

出長 9.2 m、幅 0.4 ～ 0.6 m、深さ 19 cm。埋土は、2.5Y6/1 黄灰色細砂～粗砂混じりシルトに、2.5Y6/8 明黄褐色シルト～粗砂のブロックが混じる。土器細片が出土した。

**5 溝** 4 溝のすぐ西にそれと平行してある。検出長 9.2 m、幅はおよそ 0.7 m、深さ 26 cm。埋土は、2.5Y5/3 黄褐色粗砂混じりシルトに、10YR5/4 にぶい黄褐色シルトや 2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂混じりシルトが混じる。土器細片が出土した。

**6 溝** 5 区中央部に位置する。主軸方位は北東 - 南西で、長さ 3.9 m、幅 0.3 m、深さ 5 cm。埋土は、2.5Y7/1 灰白色、2.5Y7/4 浅黄色、10YR6/6 明黄褐色のシルトがブロック状に混じり合う。

**溝群** 5 区北部に位置し、さらに北方に延びる。旧作土層上面にみられ、耕作に伴うものと考えられる。埋土はいずれも、10YR6/4 にぶい黄褐色粗砂～礫。

**7 ピット** 6 溝の西側に位置する。平面は北東 - 南西に長い楕円形で、長径 58 cm、直径 46 cm、深さ 14 cm。埋土は、2.5Y7/1 灰白色細砂～粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**8 ピット** 平面はややいびつな円形で、直径約 50 cm、深さ 14 cm。埋土は 7 ピットと同じ。土器細片が出土した。

## 第 2 面 (図 13 写真図版 4 - 13) 中世～近世

禁野火薬庫に関する第 1 面の調査後、禁野火薬庫に伴う盛土層と旧作土層 (第 II 層) を重機で除去した。5 区東側では、盛土層や旧作土層の途中で、設計掘削限界深度の T.P.+28.64 m に達した。

5 区中央部よりも西側では、第 2 面として、旧作土層など (第 II 層) を除去し検出した第 III 層上面を調査した。面の高さは T.P.+28.7 ～ 29.6 m で西側が高いが、断面観察からは本来の遺構面の高さは T.P.+29.2 ～ 30.4 m であったと考えられる。第 2 面では、溝やピットを検出した。

**溝群** 5 区中央部に集中する。主軸方位は、東西のものも数本あるが南北のものが主体で、個々の溝は、幅 0.1 ～ 0.4 m、深さはごく浅い。埋土は、第 II 層下部と同じ灰白色などの砂質シルトである。耕作に伴う素掘り溝であろう。出土遺物なし。

**ピット** 以下の 5 個のピットは、いずれも 5 区南西部に位置する。出土遺物なし。

**10 ピット** 平面円形で、直径 22 ～ 26 cm、深さ 14 cm。埋土は、2.5Y6/2 灰黄色粗砂混じりシルト。

**24 ピット** 平面円形で、直径 50 ～ 54 cm、深さ 16 cm。埋土は、上層が 2.5Y6/2 灰黄色粗砂混じりシルト、下層が 10YR4/1 褐灰色粗砂混じりシルト。

**30 ピット** 平面はややいびつな円形で、直径 38 ～ 42 cm、深さ 10 cm。埋土は、2.5Y6/3 にぶい黄橙色粗砂混じりシルト。

**33 ピット** 平面は南北に長い楕円形で、長径 42 cm、短径 30 cm、深さ 4 cm。埋土は、2.5Y6/3 にぶい黄橙色粗砂混じりシルト。

**34 ピット** 平面は南北に長い隅丸方形で、長径 68 cm、短径 58 cm、深さ 10 cm。埋土は、2.5Y6/3 にぶい黄橙色粗砂混じりシルト。

## 第 3 面 (図 14・15 写真図版 5 - 14・15) 古代以前

地山層上面である。5 区の一部には、古代の包含層と考えられる第 IV 層もしくは第 V 層と考えられる黒褐・褐灰色のシルト層が残る部分があった。第 3 面はこれらを除去して検出した。面の高さは T.P.+28.6 ～ 29.6 m で、西が高く、東が低い。遺構として、竪穴建物、掘立柱建物、土坑、溝、ピット



图 13 5 区 第 2 面

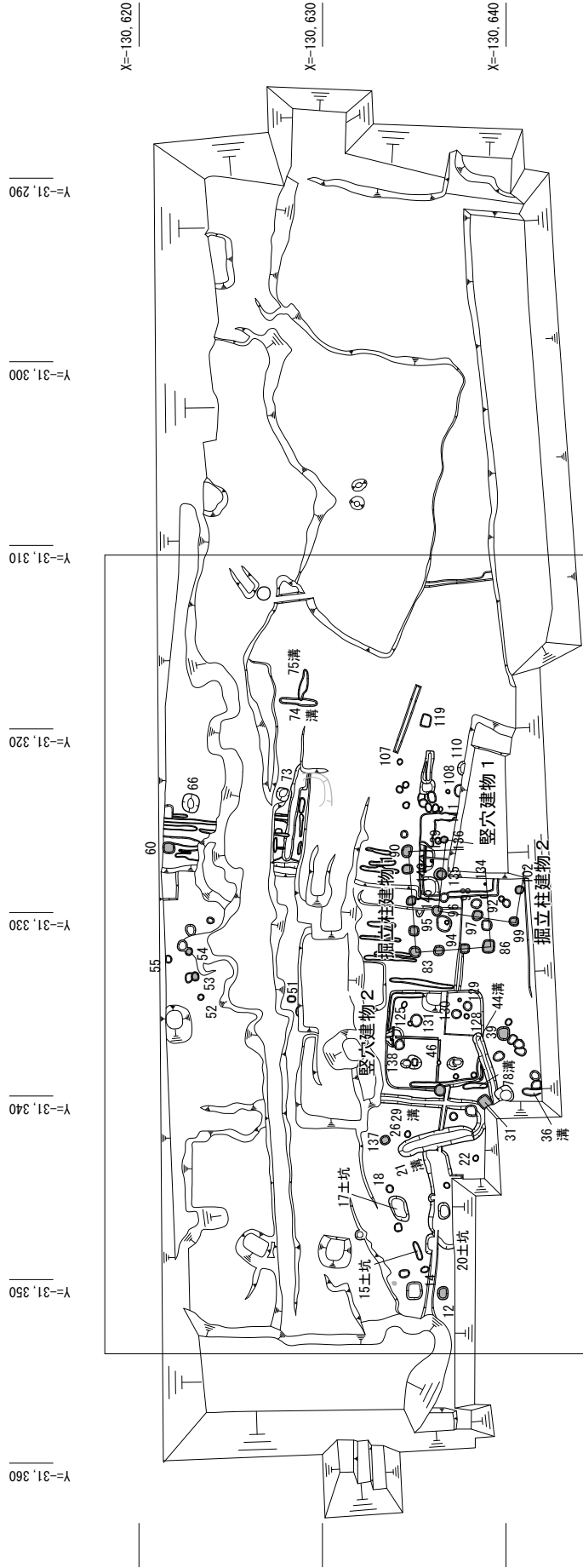


図15に拡大

遺構番号のみはピット  
● 柱痕跡あり

図 14 5区 第3面

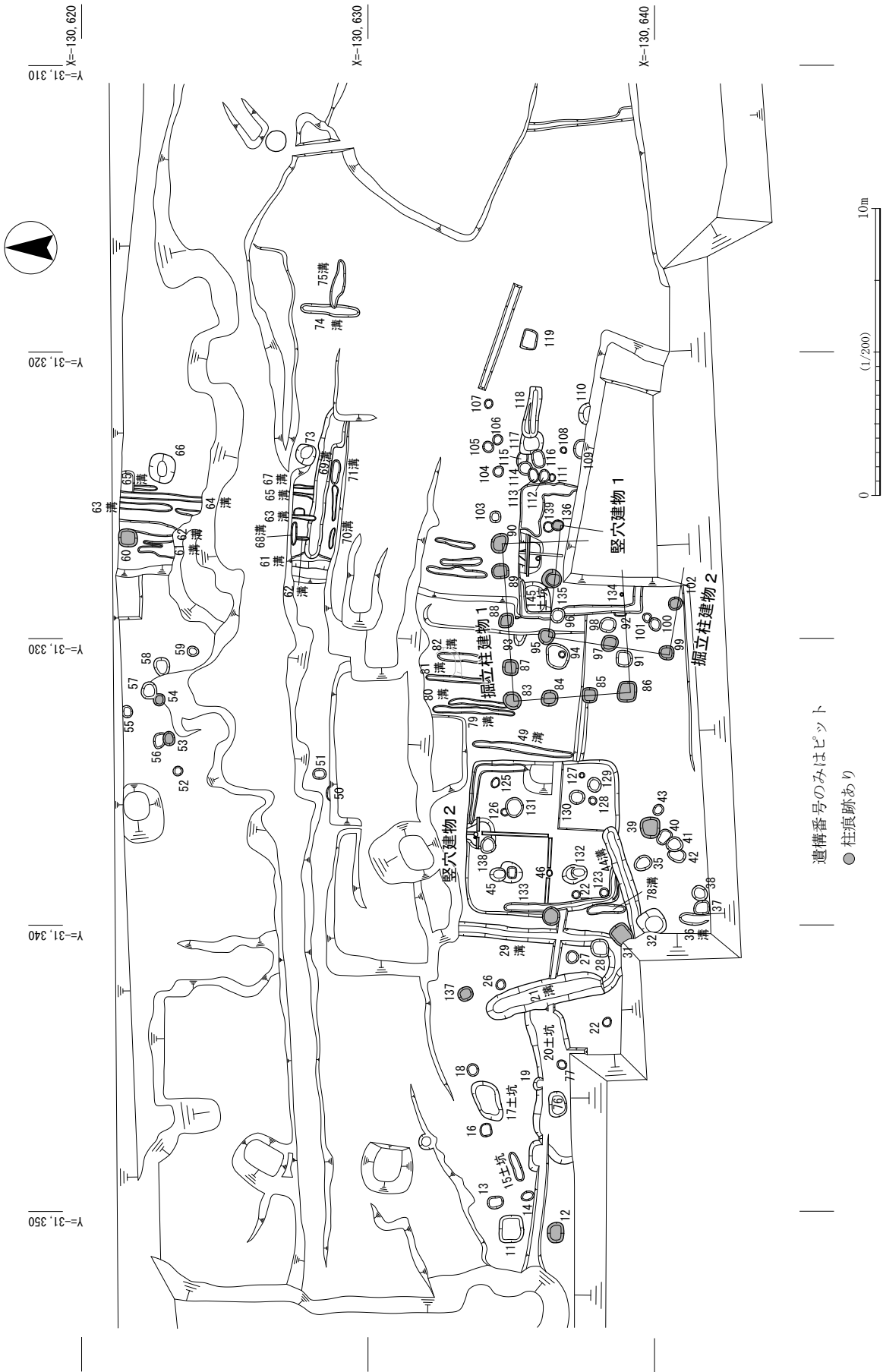
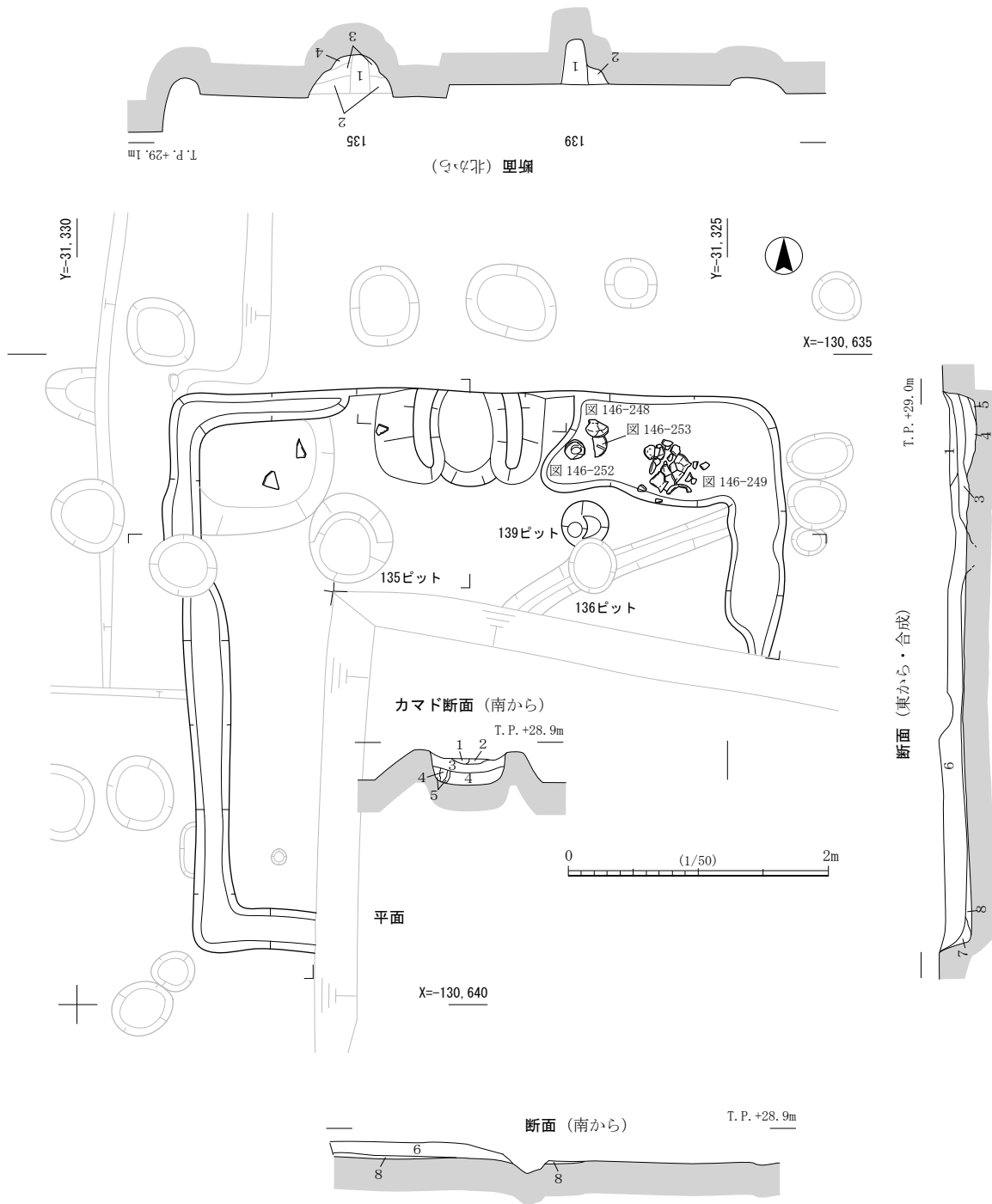


図15 5区 第3面中央部



**139 ピット**

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂混じりシルト
  - 2 2.5Y5/4 黄褐 粗砂混じりシルト 炭を含む
- (掘立柱建物2 135 ピット)**
- 1 10YR5/2 灰黄褐 粗砂～礫混じりシルト
  - 2 10YR5/5 灰黄褐 シルトブロックに 5Y6/1 灰 シルトが混じる
  - 3 5Y6/1 灰 シルト
  - 4 10YR6/4 にぶい黄褐 シルト

**カマド・埋土・貼床**

- 1 2.5Y7/2 灰黄 粗砂～礫混じりシルト
- 2 2.5Y8/2 灰白 粗砂～礫混じりシルトに 10YR4/3 にぶい黄褐 焼土ブロックが少量混じる
- 3 7.5YR5/3 にぶい褐～7.5YR6/6 橙 焼土、炭を含む
- 4 2.5Y6/3 にぶい黄 シルトに 10YR7/6 明黄褐 シルトブロックが混じる
- 5 7.5Y6/1 灰 シルト
- 6 2.5Y6/3 にぶい黄 粗砂混じりシルト
- 7 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂～礫混じりシルト
- 8 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂混じりシルト (貼床)

図16 5区 第3面竪穴建物1



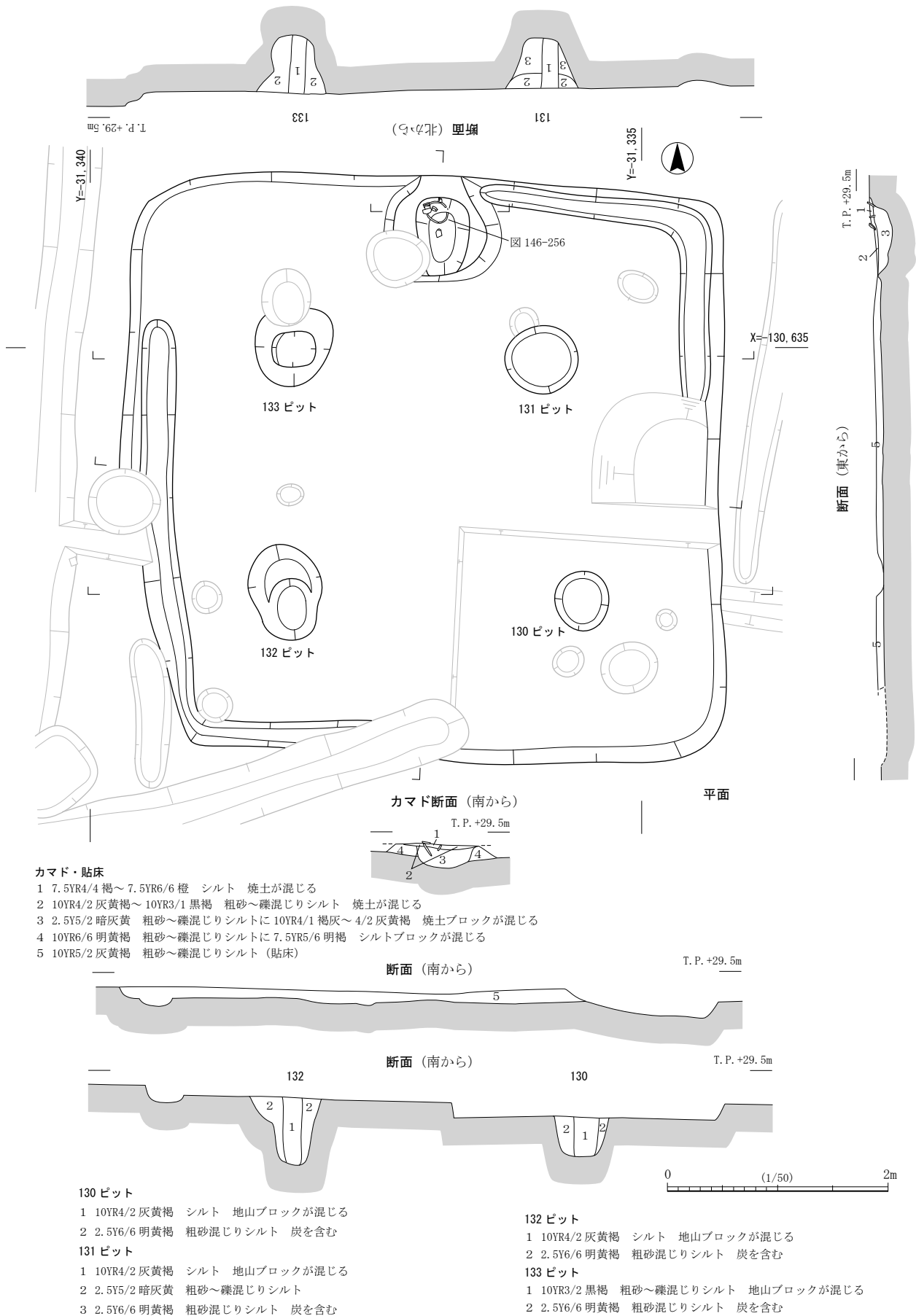
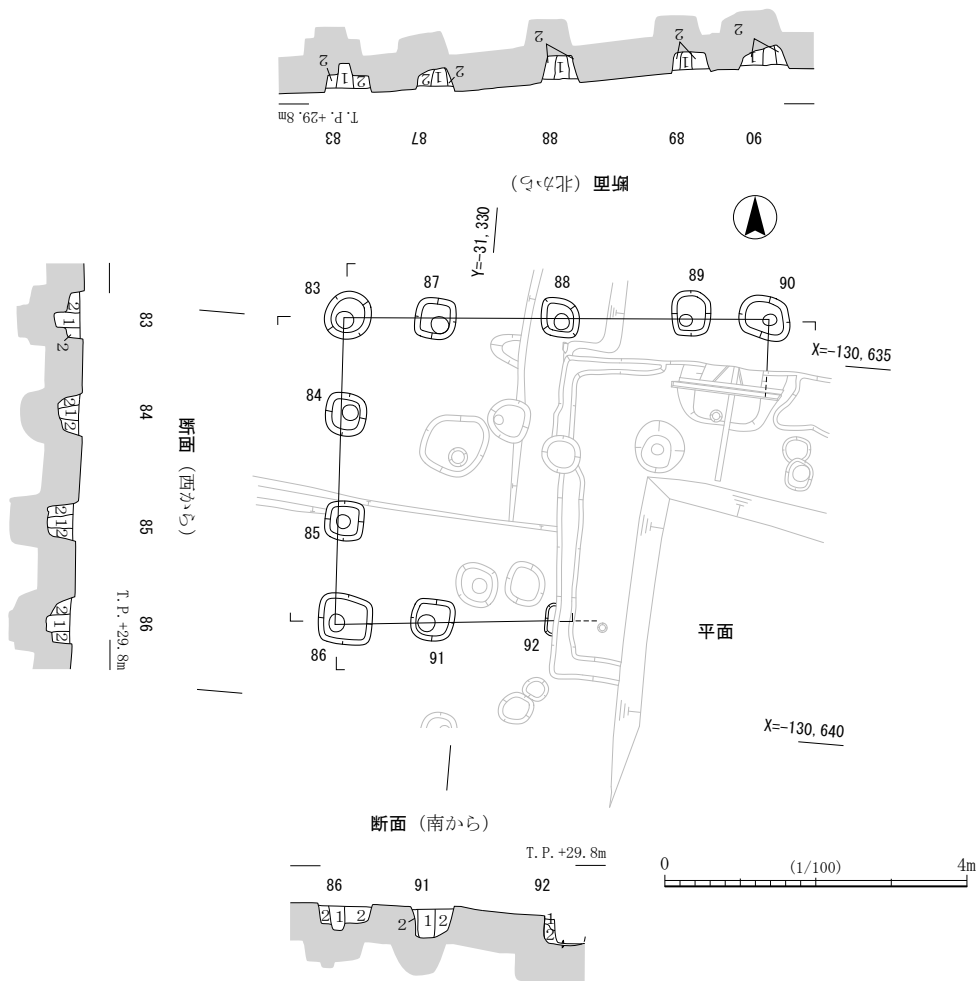


図17 5区 第3面竪穴建物2

を検出した。

**竪穴建物 1** (図 16 写真図版 6 - 16・20) 5区中央部南西側に位置する。南東部が近代の溜池により攪乱を受け全体の3分の1程しか遺存しない。東西 4.7 m、南北 4.3 m、検出面からの深さは 0.2 m。建物北東部の床面で支柱穴と考えられる **139ピット**を検出した。

建物北辺中央部では第3面検出段階から、焼土や炭層が認められた。これらの状況に加え、比較的精良な白色の粘土を使用した袖と考えられる施設の存在からカマドと判断した(写真図版 6 - 18・19)。竪穴建物 1 北東部の埋土から、8世紀前半の土師器甕(図 146 - 248・249)、須恵器鉢(図 146 - 252)・平瓶(図 146 - 253)などが出土(写真図版 6 - 17)し、他にも、8世紀前半の土師器(図 146 - 247)・須恵器(図 146 - 251)や8世紀後半の土師器(図 146 - 254・255)が含まれていた。調査時には、これらの土器は竪穴建物 1 に伴うものと考えていた。また、西壁際溝が掘立柱建物 1 南辺の 92ピットと重複関係にあり、現地では西壁際溝の方が新しいと判断していた。



**83ピット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～礫混じりシルト
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐 粗砂～礫混じりシルト

**84ピット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～礫混じりシルト
- 2 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～礫

**85ピット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～礫混じりシルト
- 2 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～礫

**86ピット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～礫混じりシルト
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐 粗砂～礫混じりシルト

**87ピット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～礫混じりシルト
- 2 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～礫

**88ピット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～礫混じりシルト
- 2 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～礫

**89ピット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～礫混じりシルト
- 2 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～礫

**90ピット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～礫混じりシルト
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐 粗砂～礫混じりシルト

**91ピット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐 シルト
- 2 10YR4/1 褐灰 粗砂混じりシルトに地山ブロックが多く混じる

**92ピット**

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト混じり細砂～中砂
- 2 10YR6/6 明黄褐 細砂～中砂混じりシルト

図18 5区 第3面掘立柱建物 1

しかし、土器の出土した範囲が西壁際溝に比べて形がくずれた幅広の溝状にくぼんでおり、さらに後述の奈良～平安時代と推定される掘立柱建物が重複していることから、8世紀の土器は掘立柱建物あるいはそれに関係する土坑状のくぼみの遺物とも推定できる。また、西壁際溝と掘立柱建物1の92ピットとの切り合い関係は誤認であったかもしれない。

竪穴という形状で、東壁際溝から6世紀後半の須恵器杯（図146-250）が出土し、さらには西方約5mに同時期の土器が出土した竪穴建物2が存在するというを考えあわせ、ここでは竪穴建物1も6世紀後半の所産と判断しておきたい。

**竪穴建物2**（図17 写真図版7-21・22・25） 5区中央部南西側、竪穴建物1の西約5mに位置する。上部が削平され、遺存状態は悪い。東西約5.5m、南北約5.3m。建物南東部についてはやや掘りすぎたが、それ以外の部分では床面と考えられる遺構面を確認し、主柱穴である130～133ピットを検出した。これらのピットからは遺物は出土しなかった。

建物北辺中央部にはカマドがあり、焼土などが認められるとともに、支脚に転用された6世紀後半の

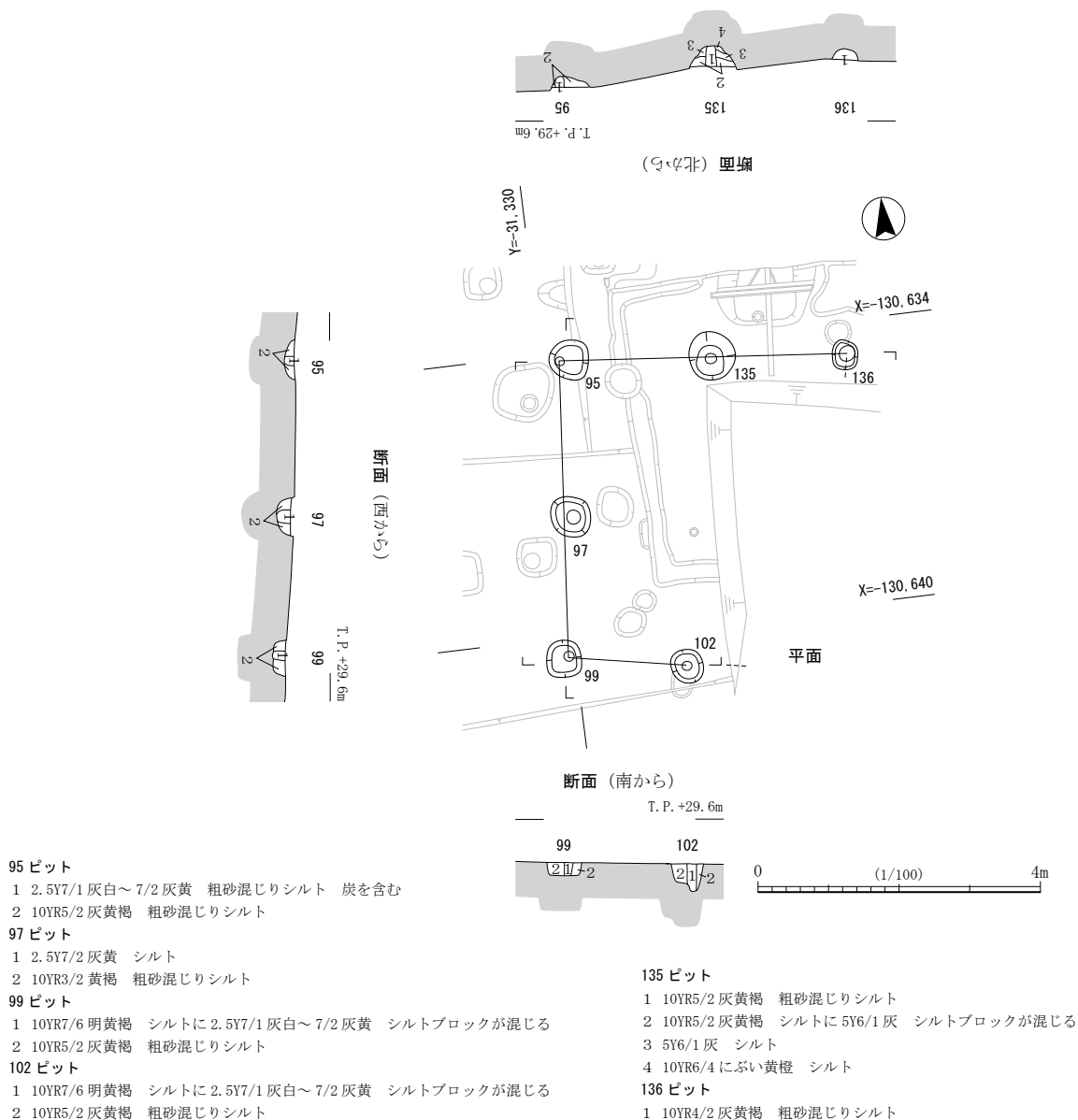


図19 5区 第3面掘立柱建物2

土師器甕（図 146 - 256）も検出できた（写真図版 7 - 23・24）。

竪穴建物 2 の埋土からも、6 世紀後半の土師器・須恵器（図 146 - 257・258）などが出土した。

**掘立柱建物 1**（図 18） 5 区中央部南側に位置する。主軸方位は N 86° E で、桁行 4 間（5.6 m）・梁行 3 間（4.0 m）、面積 22.4 m<sup>2</sup> の側柱建物である。

西辺の 84 ピットから古代の土器細片が出土したが、他のピットからは遺物は出土しなかった。

**掘立柱建物 2**（図 19） 掘立柱建物 1 の南部に重複する。竪穴建物 1 と同様に南東部が攪乱されている。主軸方位 N 8° E、桁行 2 間（4.2 m）・梁行 2 間（3.9 m）、面積 16.4 m<sup>2</sup> の建物と考えられる。中央の柱の存否は明確ではない。

北辺の 135 ピットから 8 世紀末～9 世紀初頭の須恵器杯（図 146 - 261）、136 ピットから 8 世紀末～9 世紀初頭の須恵器杯（図 146 - 262）、南辺の 102 ピットから 8 世紀末～9 世紀初頭の土師器（図 146 - 259）・須恵器（図 146 - 260）などが出土した。

**15 土坑** 5 区南西部位置する。平面は東北東 - 西南西を主軸方位とする長楕円形で、長径 1.1 m、短径 0.3 m、深さ 4 cm。埋土は、10YR4/1 褐灰色粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**17 土坑** 15 土坑の東北東 1.1 m に位置する。平面は北東 - 南西に長い楕円形で、長径 1.1 m、短径 0.3 m、深さ 9 cm。埋土は、10YR5/2 灰黄褐色粗砂混じりシルト。7 世紀後半の土師器甕（図 146 - 270）などが出土した。

**20 土坑** 15 土坑の南 1.2 m に位置する。溝状の規模の大きな土坑で、東北東 - 西南西を主軸方位とする。長径 5.6 m、短径 1.3 m 以上、深さ 21 cm。埋土は、10YR5/2 灰黄褐色粗砂混じりシルト。7 世紀初頭の須恵器（図 146 - 272）、8 世紀中頃の土師器・須恵器（図 146 - 271・273）などが出土した。

**145 土坑** 竪穴建物 1 の北西部に位置し、それよりも古い。平面は隅丸方形で、東西 1.2 m、南北 1.0 m、深さ 24 cm。埋土は、上層が 2.5Y7/6 明黄褐色細砂混じりシルトに 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂～粗砂ブロックが混じる、下層が 10YR5/2 灰黄褐色シルト混じり細砂～中砂に 10YR6/6 明黄褐色シルトブロックが混じる。古代の土器細片が出土した。

**21 溝** 20 土坑の東端と重複関係にあり、それよりも新しい。20 溝とほぼ直交し、北北西 - 南南東を主軸方位とする。長さ 4.2 m、幅 1.0 m、深さ 25 cm。埋土は、上層が 10YR6/1 褐灰色粗砂混じりシルト、下層が 10YR4/1 褐灰色粗砂混じりシルトと似た層相であるが、その層境に 2.5Y7/2 灰黄色細砂が薄くはさまる。8 世紀中頃の須恵器（図 146 - 274～277）などが出土した。

**その他の溝** 地山層上面であるこの第 3 面にも、第 IV 層・第 V 層が存在しない範囲では、第 2 面と同様な耕作に伴う溝がみられた。それらの溝のうち、44 溝から 8 世紀中頃の須恵器（図 146 - 278・279）、146 溝から古代の土器細片などが出土した。

**ピット** 柱根の残っていたピットはない。柱痕跡は、掘立柱建物や竪穴建物の柱穴となるものの他にも、12・31・39・53・54・60・96・98・121・123・137 ピットで認められた。平面分布をみると、柱痕跡のある 137 ピットから 2.1～2.5 m 間隔でほぼ一直線に西に並ぶ 18・16・13 ピットのような例もあるが、それら 3 個のピットは浅く埋土も単層で、柱穴と断定するには根拠が弱い。その他のピットは単層のものが多く、建物などの復元には至らなかった。

それらのピットからは、6 世紀後半～8 世紀の土師器（図 146 - 265）・須恵器（図 146 - 263・264・266～269）が出土した。

## 第5節 6区（集会所）の遺構

6区は調査地北西部に位置する。集会所の建設に伴う調査である。T.P.+30.8～31.2 mの現地表面から、T.P.+29.8～30.0 mの第2面まで調査した。最終面での調査面積は268 m<sup>2</sup>。

6区の大部分は旧住棟の基礎および基礎解体時の攪乱を、また南部は水道管理設による攪乱を受けており、遺構面を検出できたのは6区南西部のごく狭い範囲に限られた。平面は7区とともに掲げる（図22・23）。

### 層序（図20）

6区ではそのほとんどが攪乱のため、層序を観察できる調査区壁面がほとんどなかった。そこで、かろうじて堆積状況の手がかりが得られる6区南西部をもとに、断面模式図を作成した。

**第0層（1）**は、基本層序の第0層に該当する。昭和40年代の旧住棟の建設や撤去に伴う攪乱層である。

**第1層（2）**は、基本層序の第I層〔昭和14（1939）年爆発関連層〕に該当する。

**第2層（3）**は基本層序の第II層以下に該当するが、遺存状況が悪く遺物も全く出土しなかった。

### 第1面（図22 写真図版8-26・27） 昭和14年以後

禁野火薬庫に伴う昭和14（1939）年爆発関連層（第I層）上面である。面の高さはT.P.+29.8～30.0 m。顕著な遺構は検出できなかった。

### 第2面（図23 写真図版8-28） 昭和14年以前

昭和14年爆発関連層（第I層）を除去した面で、地山層上面である。面の高さは、部分的に第1面よりもわずかに低いが第1面とほぼ同様のT.P.+29.8～30.0 m。この面でも顕著な遺構は検出できなかった。

6区は地山層が高いため、中世以前の包含層（第III層以下）は確認できなかった。

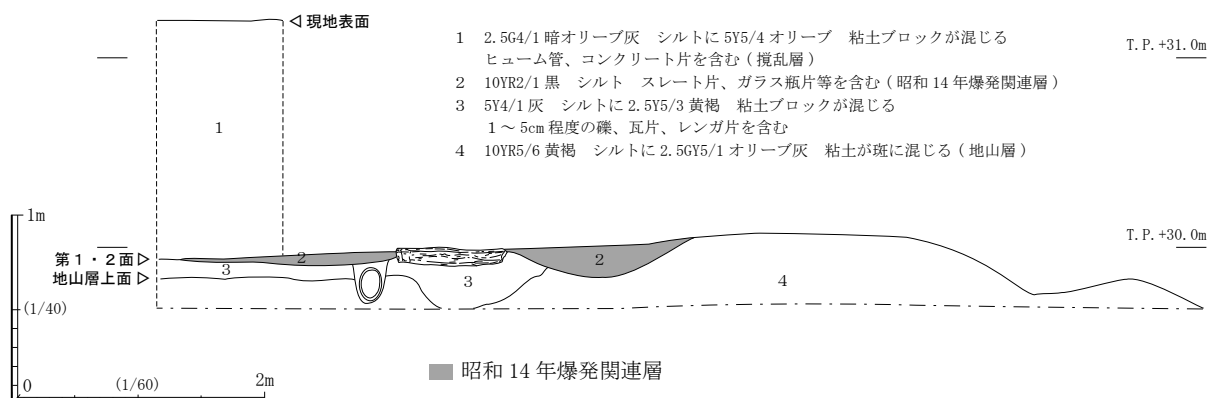


図20 6区 南西部断面模式

## 第6節 7区（E棟）の遺構

7区は調査地北西部、6区の西側に位置する。住宅E棟の建設に伴う調査である。T.P.+31.0～31.2 mの現地表面から、最深部でT.P.+29.6 mの第4面まで調査した。最終面での調査面積は471 m<sup>2</sup>。

7区中央部は旧住棟の基礎および基礎解体時の攪乱を、北端と南東部は旧住棟に伴う埋設管による攪乱を受ける。そのため、遺構面を検出できたのは7区の北東部と南側の一部であった。

### 層序（図21）

7区で堆積状況が比較的良く分かるのは、南壁西半部のみである。

**第0層（1～8）**は、基本層序の第0層に該当する。昭和40年代の旧住棟建設時の盛土層などが主体を占める。

**第1層（9～11）**は、基本層序の第I層〔昭和14（1939）年爆発関連層〕に該当する。

**第2層（15～26）**は基本層序の第II層・第III層・第V層・第VI層に該当する。ただし、この7区は今回の調査地の中では現地表面や地山層上面が最も高い地点ということもあってか、他の調査区に広く分布している火薬庫造成以前の旧作土層やそれ以前の包含層はほとんど残っていない。第II層のなかでも禁野火薬庫造成のための盛土層が主体となっている。

7区では、第3面が地山層（第VII層）上面となる。

### 第1面（図22 写真図版9-29・30） 昭和14年以後

禁野火薬庫に伴う昭和14（1939）年爆発関連層（第I層）の上面である。面の高さはT.P.+29.7～30.2 mで、南西部が高く、北東部が低い。第1面の顕著な遺構は検出できなかったが、第2面の遺構が頭を出していた。

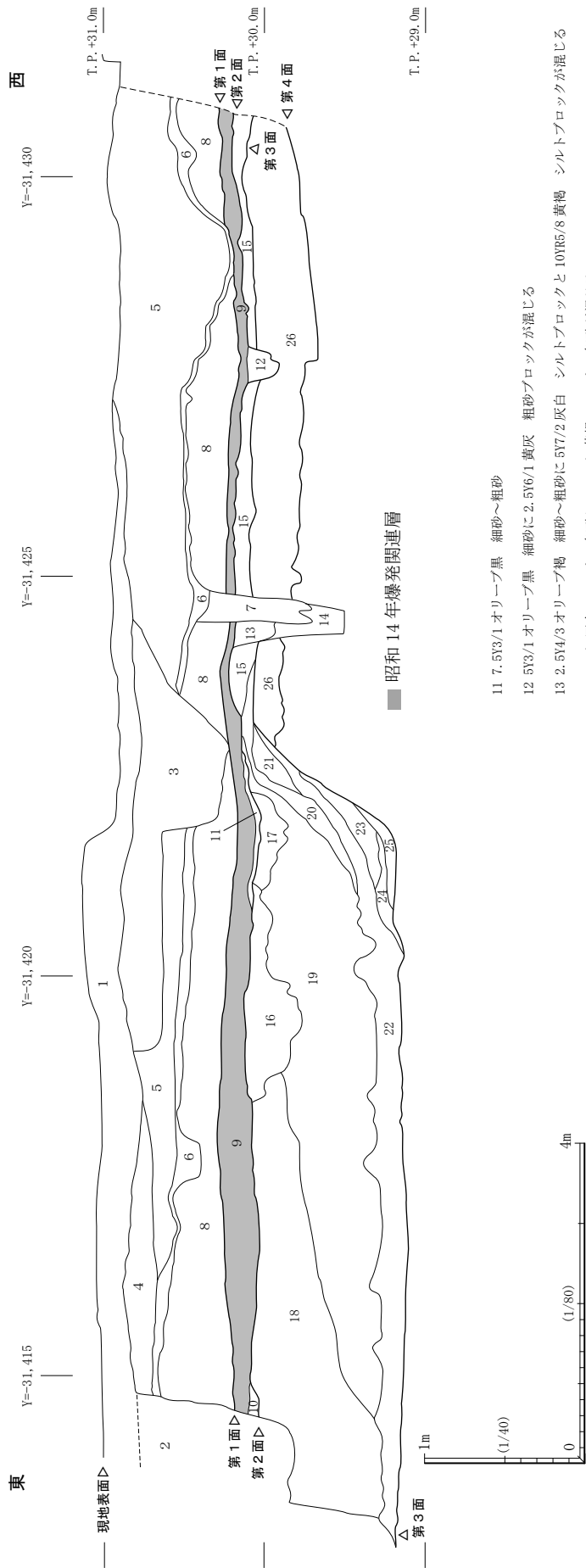
### 第2面（図23 写真図版9-31） 昭和14年以前

昭和14年爆発関連層（第I層）を除去した面で、禁野火薬庫造成に伴う盛土層（第II層）上面である。面の高さはT.P.+29.6～30.1 mで、第1面と同様に、南西部が高く、北東部が低い。遺構として、枕木土坑、石組溝、溝、ピット、土坑を調査した。

**3～16 枕木土坑（軽便軌道）**（図24 写真図版9-32） 7区北東部に位置し、東西方向に延びる。個々の枕木土坑は、南側が攪乱されているので長さが不明だが最も残りの良い6枕木土坑からみて0.95 m以上、幅約0.3 m、検出面からの深さは17～24 cm。埋土は、10YR3/2 黒褐色シルト混じり礫。枕木の間隔はおよそ0.7 mだが、6・7枕木土坑間が他と比べて0.1 mほど狭く、そこから5 m西の13・14枕木土坑間も他よりもわずかに間隔が狭いので、その間がレールの継ぎ目とすれば、後述する11区第3面8～45枕木土坑と同様にレールの長さが5 mであったと推定できる。この軽便軌道は、明治42（1909）年の「大阪兵器支廠禁野弾薬庫一般配置図」にはみられるので、これ以前の竣工であろう。廃絶は、昭和14年の爆発によると考えられる。

6枕木土坑から砲弾関連品（図141-200）、14枕木土坑から磁器が出土した。

**17～20 枕木土坑（軽便軌道）** 7区西端に位置し、南北方向に延びる。3～16枕木土坑よりもさらに残りが悪い。この軌道は、大正13（1924）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図」にはみられるの



- 昭和14年爆発関連層
- 1 10YR4/4 褐 細砂～粗砂が混じる 径5～10cmの礫含む 表面に砂利を敷く
  - 2 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト～細砂に10YR6/6明黄褐 シルトブロックと10CB青灰 シルトブロックと5Y4/1灰 シルトブロックが混じる
  - 3 5Y4/1 灰 シルト～細砂に10YR5/8黄褐 シルト～細砂と10YR7/1灰白 シルト～細砂ブロックが混じる 径1～5cmの礫を多く含む (水道管による擾乱)
  - 4 10YR4/3 にぶい黄褐 細砂～粗砂に2.5Y5/6黄褐 細砂が混じる 径2～5cmの礫、コンクリート塊を含む
  - 5 2.5Y3/2 黒褐 細砂～粗砂に2.5Y6/6明黄褐 シルト～細砂ブロックが混じる 径1～7cmの礫、コンクリート塊を含む
  - 6 2.5Y2/1 黒 シルト～細砂 径1～2cmの礫、煉瓦片を含む
  - 7 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂～細砂と10YR5/8黄褐 細砂と5Y7/2灰白 シルトと10YR5/8黄褐 シルトが斑に混じる
  - 8 10YR5/8黄褐 シルト～粗砂に5B66/1青灰 シルトブロックと2.5Y5/1黄灰 細砂～粗砂と5Y7/2灰白 シルトと10YR5/8黄褐 シルトが斑に混じる
  - 9 7.5Y3/1オリーブ黒 シルト～細砂 径1～5cmの礫含む 上部に5YR2/1黒 焼土、煉瓦、木片等を含む (昭和14年爆発関連層)
  - 10 10YR4/4 褐～2.5Y4/3オリーブ褐 粗砂～礫
  - 11 7.5Y3/1オリーブ黒 細砂～粗砂
  - 12 5Y3/1オリーブ黒 細砂に2.5Y6/1黄灰 粗砂ブロックが混じる
  - 13 2.5Y4/3オリーブ褐 細砂～粗砂に5Y7/2灰白 シルトブロックと10YR5/8黄褐 シルトブロックが混じる
  - 14 5Y7/2灰白 シルト～細砂に10YR5/8黄褐 シルト～細砂が混じる
  - 15 2.5Y5/2暗灰黄 シルト
  - 16 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト～粗砂 径3～10cmの礫を多く含む
  - 17 7.5Y6/1灰 シルトに10YR5/8黄褐 シルト～粗砂が混じる
  - 18 2.5Y5/1黄灰 シルト～細砂に10YR5/8黄褐 シルト～細砂ブロックと2.5Y7/2灰黄 シルトブロックが混じる
  - 19 2.5Y5/1黄灰 シルト～細砂に10YR5/8黄褐 シルト～粗砂ブロックが混じる
  - 20 2.5Y5/1黄灰 シルト～粗砂 マンガン斑あり
  - 21 10YR5/6黄褐 シルト～粗砂
  - 22 5Y4/1灰 シルト マンガン斑あり
  - 23 5Y5/1灰 シルト～細砂に10YR4/6褐 細砂～粗砂が混じる
  - 24 N4/灰 シルト
  - 25 N5/灰 シルト～細砂に10YR5/8黄褐 シルト～細砂が混じる
  - 26 5Y7/1灰白 シルト～粗砂と10YR5/8黄褐 シルト～粗砂と10B67/1明青灰 細砂のラミナが混じる

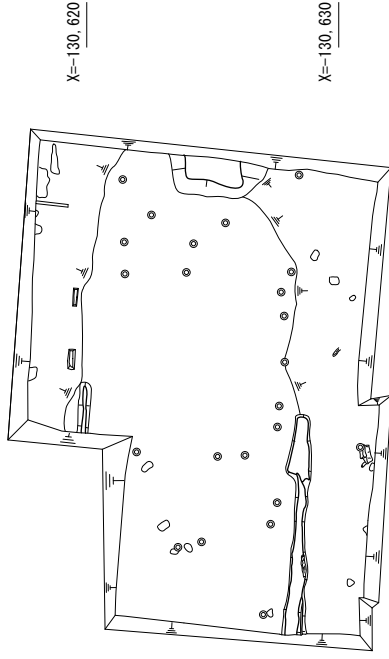
図 21 7 区 南壁断面



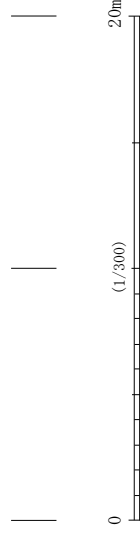
Y=31,370

Y=31,380

Y=31,390



6区



● 旧住棟の基礎

Y=31,400

Y=31,410

Y=31,420

Y=31,430

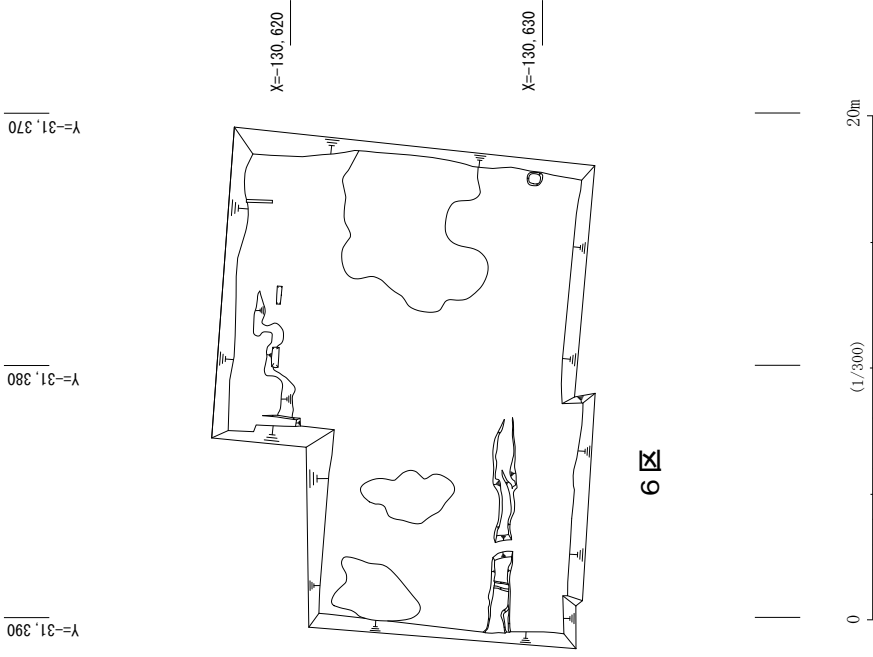


7区

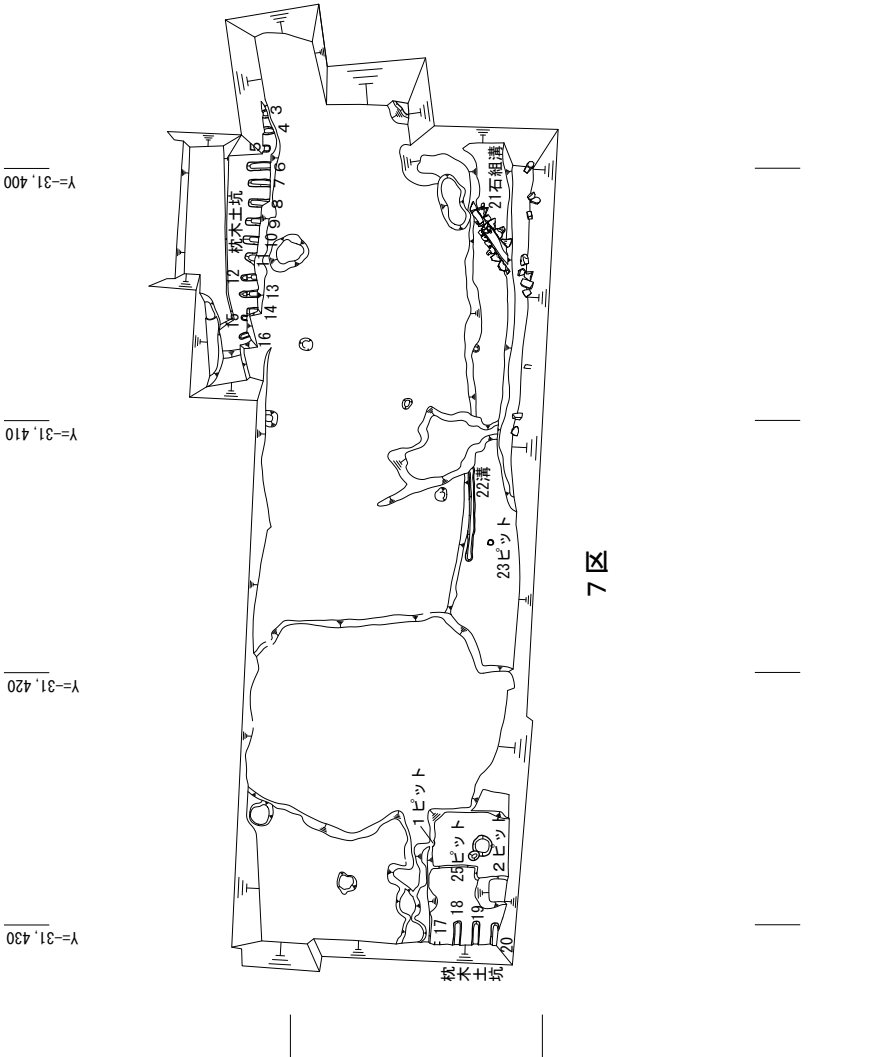


図 22 6区・7区 第1面





6区



7区

图 23 6区・7区 第2面

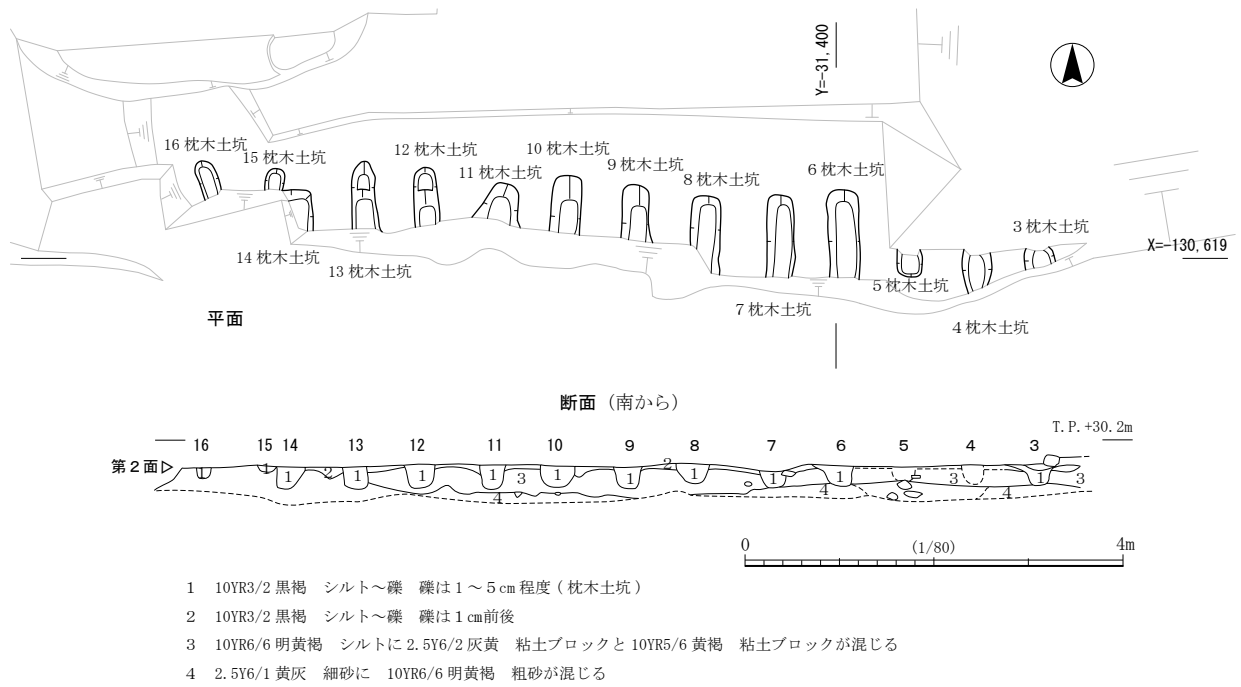


図24 7区 第2面3～16 枕木土坑

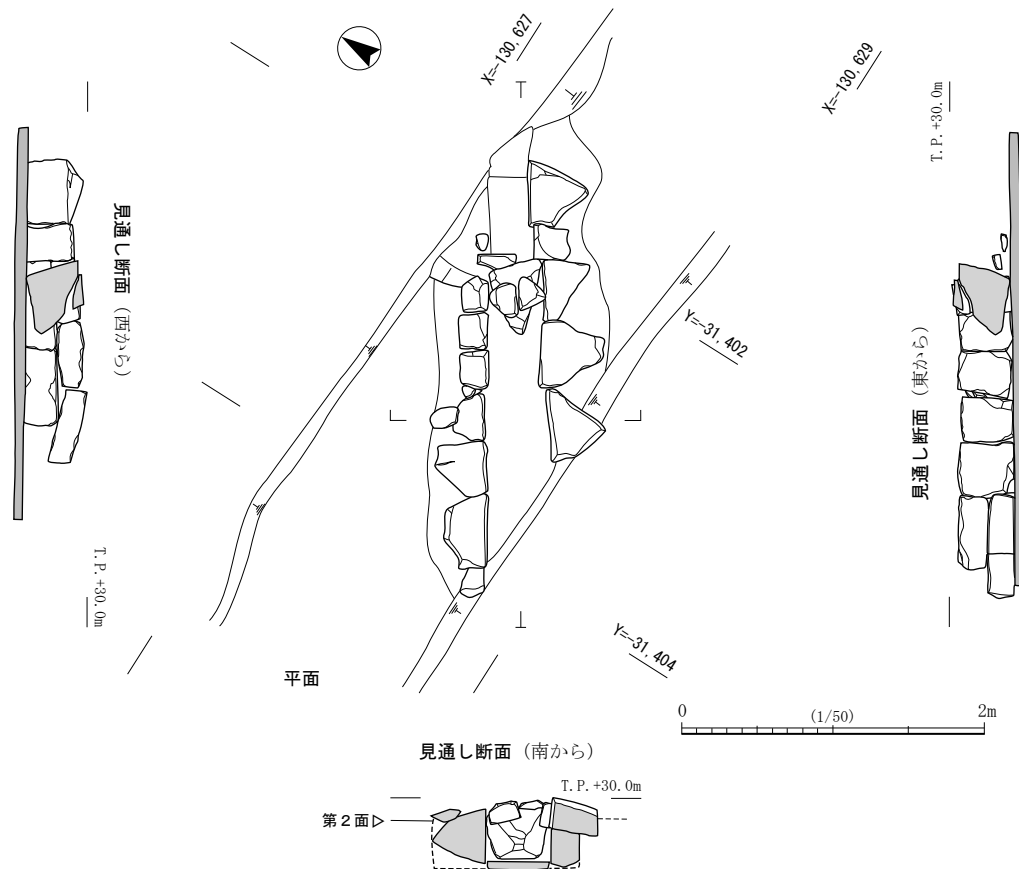


図25 7区 第2面21石組溝

で、これ以前の竣工であろう。3～16 枕木土坑と同様に、昭和 14 年の爆発で廃絶したものであろうか。

**21 石組溝** (図 25 写真図版 9 - 33) 7 区南東部に位置する。主軸方位は北東 - 南西。溝の内法は幅 40～45 cm。深さは現存する間知石からみると 40 cm 以上だが、周辺から出土した笠石 (長さ 114～116 cm、幅 15 cm、高さ 13～14 cm) を加味すると、55 cm 程度はあったものと推定できる。間知石・笠石ともに花崗岩である。溝の底には、モルタルが厚さ約 6 cm に敷かれている。この石組溝も 3～16 枕木土坑と同じく明治 42 年の「大阪兵器支廠禁野弾薬庫一般配置図」に記載されている。石組溝は軽便軌道の両側あるものようで、今回の検出の石組溝の西側では軌道が検出されなかったことから、溝の東側である 6 区と 7 区との間に北東 - 南西方向の軌道が存在したと推定できる。

**1 ピット** 7 区南西部、17 枕木土坑の東約 3 m に位置する。ピットの中部以北は攪乱され、南部のみを検出した。平面円形と仮定すれば推定直径約 30 cm、深さ 30 cm。埋土は、上層が 10YR3/3 暗褐色シルト、下層が 2.5Y 暗灰黄色シルトに炭化物が少量混じる。

**2 ピット** 1 ピットの南約 1.5 m に位置する。第 2 面調査時には、平面円形で、直径 78 cm、深さ 12 cm。埋土は、10YR4/3 にぶい黄褐色シルトに炭化物が少量混じっていた。第 3 面でこの直下にさらに、10YR1.7/1 黒色の細砂～粗砂に 10YR5/8 黄褐色シルトブロックが混じるものに砲弾片や煉瓦を含むピットを検出したが、これは 2 ピットの掘り残しであり、深さは合わせて 32 cm であったと判明した。砲弾片、鏝 (図 136 - 79・86)、金属製品 (図 137 - 132・133) などが出土した。

**22 溝** 12 区中央部南側部に位置する。主軸方位は東西で、検出長約 3.7 m、幅 0.2～0.3 m、深さは 6 cm と浅い。埋土は、5YR3/4 暗赤褐色シルトにマンガン斑が混じる。

**23 ピット** 22 溝の南約 1 m に位置する。平面円形で、直径 21～24 cm、深さ 17 cm。埋土は、10YR4/4 褐色シルトにマンガン斑が混じる。

**25 ピット** 2 土坑の北西部にあり、重複関係にある 2 土坑よりも新しい。平面円形で、直径 21～24 cm、深さ 17 cm。埋土は、10YR4/4 褐色シルトにマンガン斑が混じる。

### 第 3 面 (図 26 写真図版 10 - 34・35) 古代か

地山層である砂層 (第 VII 層) の上面である。面の高さは T.P.+29.6～29.9 m。ピットを 2 個検出した。

**24 ピット** 7 区中央部南西側に位置する。平面不整形円形で、南北 55 cm、東西 48 cm、深さ 11 cm。埋土は、5Y4/1 灰色シルト。

**27 ピット** 7 区南西部に位置する。平面楕円形で、北西 - 南東に長い。長径 30 cm、短径 22 cm、深さ 5 cm。埋土は、5Y5/1 灰色シルト～細砂に 10YR6/8 明黄褐色粗砂が混じる。

### 第 4 面 (写真図版 10 - 36)

地山層の確認のため、7 区の西部でのみ第 3 層を掘り下げて検出した。第 3 層中から遺物は出土せず、T.P.+29.5～29.8 m の第 4 面では遺構はみられなかった。これらの状況から、第 4 面ではなく第 3 面が地山層上面であると判断した。

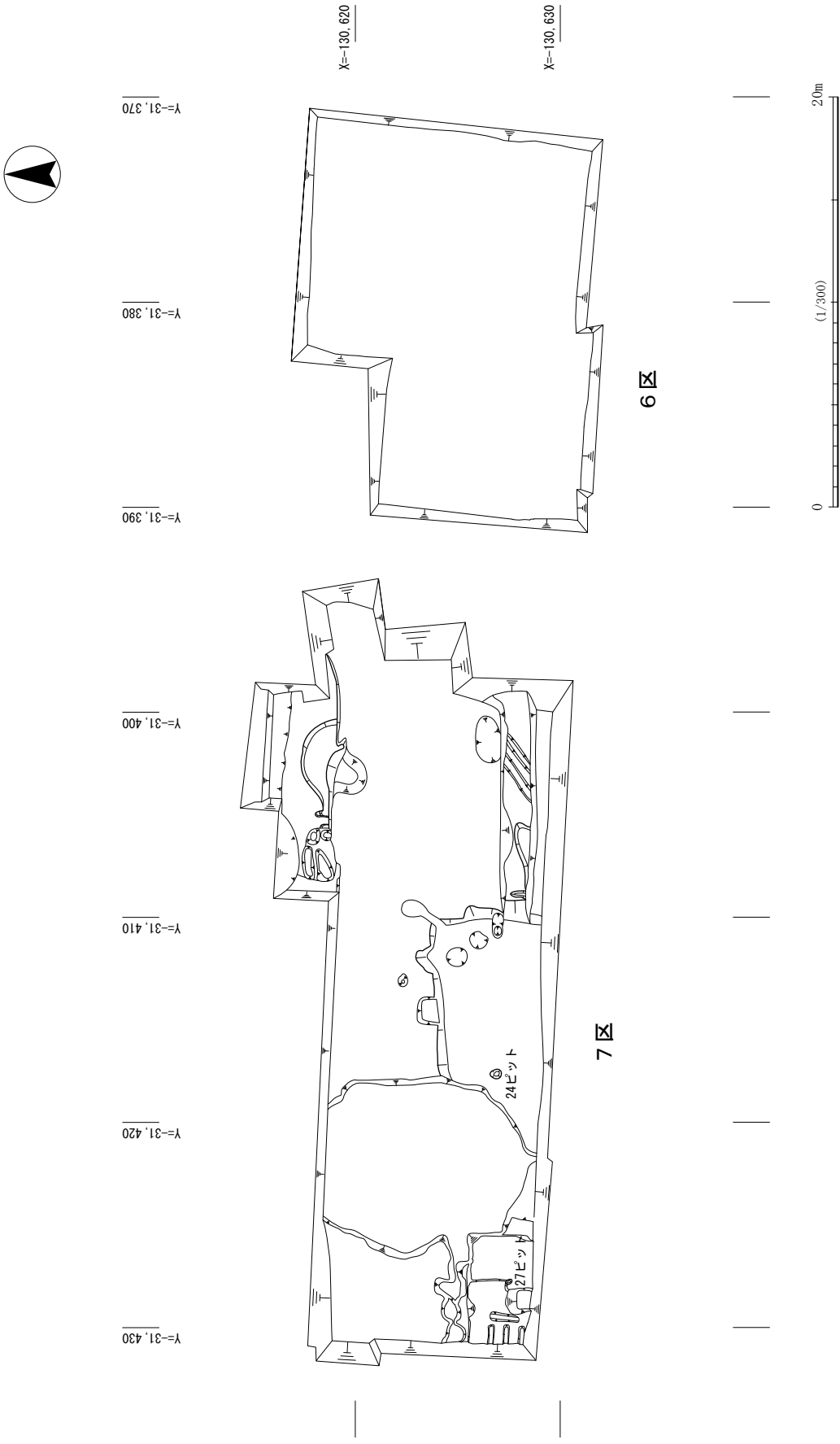


図 26 7 区 第 3 面

## 第7節 8区(D棟)・8-2区(防火水槽D)の遺構

8区は調査地中央部に位置する。住宅D棟の建設に伴う調査である。8-2区は8区の北西側に接する防火水槽Dの設置に伴う調査である。以下、とくに区別する必要がない場合は両者を合わせて「8区」と記述する。T.P.+30.4～31.3 mの現地表面から、T.P.+27.7～30.1 mの第6面まで調査した。最終面での調査面積は、8区と8-2区を合わせて1419 m<sup>2</sup>である。

**第1面**は禁野火薬庫の面。攪乱部分も多かったが、8区西半では明治・大正時代の建物、土坑、石組溝、土塁、職工厠が、8区東半では昭和時代の土塁、建物、軽便軌道、貯水池、溝、ピットが良く残っていた。

**第2面**は中世～近世の面。土坑、ピット、溝を検出した。

**第3面**は古代～中世の面。土坑、溝、鋤溝群を検出した。

**第4面**は古代の面。溝とピットを検出した。

**第5面**も古代の面。溝、土坑、ピットを検出した。

**第6面**は地山層上面。古代ないしそれ以前の掘立柱建物、井戸、溝、土坑、多くのピットを検出した。

### 層序(図27 写真図版24-83)

8区では最も残りの良い南壁の断面を掲げる。

**第0層**は、基本層序の第0層と第I層に該当する。第0層は、今回の工事に伴う碎石層(3)ならびに昭和40年代の旧住棟建設時の盛土層(11)や各種埋設管など(4～8)を主とする。第I層[昭和14(1939)年爆発関連層]は残りが悪いが、禁野火薬庫関係の土塁基礎(12・14～18)や溝(13)は確認できる。

**第1層**は、基本層序の第II層に該当し、昭和11(1936)年以降に造られた19土塁の盛土(19～27)、明治42(1909)年の爆発後に造られた18土塁の盛土(28～37)、火薬庫造成以前の旧作土層(38・39)、中世～近世の包含層(40～49)に分けられる。火薬庫造成直前の旧作土層は、段状に設えられている。

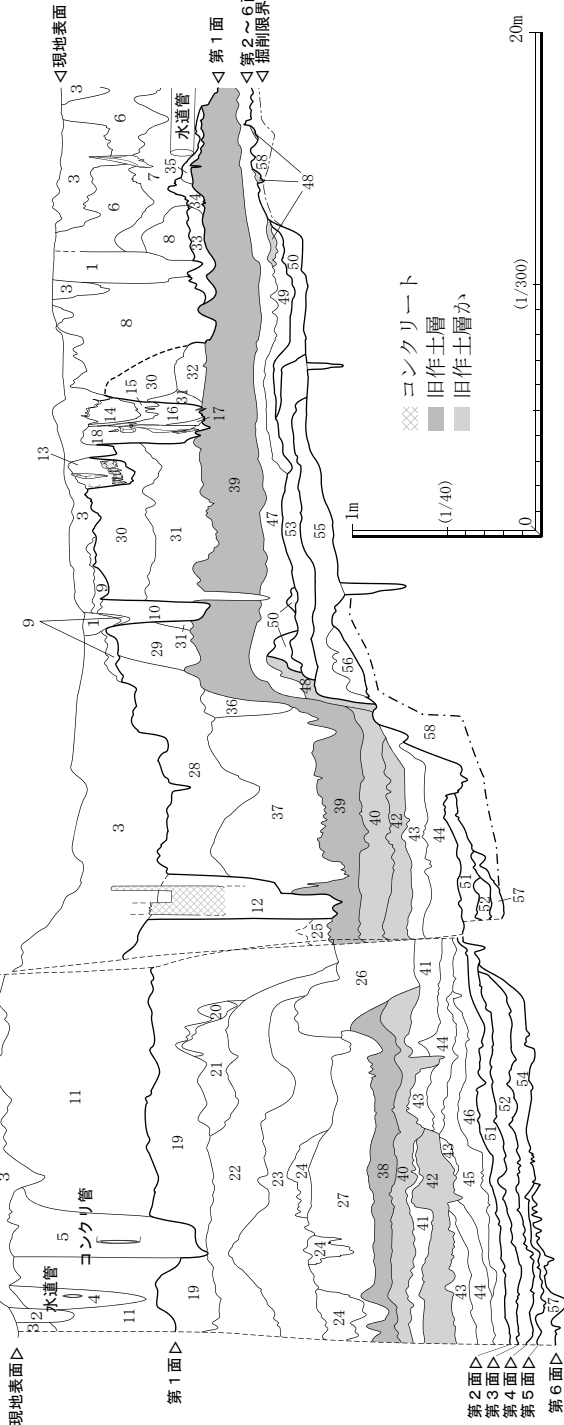
以下、**第2層**(50・51)は基本層序の第III層、**第3層**(52・53)は基本層序の第IV層、**第4層**(54～56)は基本層序の第V層、**第5層**(57)は基本層序の第VI層にそれぞれ該当する。第IV層が明瞭に認められたのはこの8区だけであった。第6面が地山層(58・第VII層)上面で、西が高く東に向かって下がる。

### 第1面(図28 カラー写真図版1-1 写真図版11-37・38、25-84) 昭和14年前後

8区では、第I層は遺構埋土などでは確認できたが面的には良好に遺存しなかったため、第II層上面を第1面とした。面の高さは、8区西部ではT.P.+30.4 mで、そこから東に向かって緩やかに下がる。遺構として、禁野火薬庫に関する諸施設を検出した。

8区の西部と8-2区は、明治29(1896)年に用地買収され明治40年代に火工場や土塁が築かれた部分である。大正2(1913)年の「大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図」などによると、8区周辺では旧地表面が西に向かって下がっているが、調査でもそれが追認できた。

Y=-31,310 Y=-31,320 Y=-31,330 Y=-31,340 Y=-31,350  
 T.P.+31.0m  
 T.P.+30.0m  
 T.P.+29.0m  
 T.P.+28.0m



- |   |  |                                       |
|---|--|---------------------------------------|
| 1 構乱  | 22 10YR3/2 黒褐 粗砂～礫混じりシルトに38のブロックが混じる       | 42 2.5Y5/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルト (旧作土層か)      |
| 2 会所  | 23 2.5Y8/4 淡黄～7/6 明黄褐 粗砂～礫混じりシルトブロック       | 43 2.5Y5/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルトに             |
| 3 砕石  | 24 N4/ 灰 粗砂～礫混じりシルト                        | 44 2.5Y5/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルトに             |
| 4 水道管   | 25 2.5Y8/2 灰白 粗砂～礫に39のブロックが混じる             | 45 2.5Y5/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルトに             |
| 5 コンクリート管   | 26 2.5Y3/1～3/2 黒褐 粗砂シルト                    | 46 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～礫混じりシルト             |
| 6 10YR4/4 褐 細砂～礫混じりシルト (水道管敷設に伴う攪乱)                       | 27 7.5Y8/1～7/1 灰白 粗砂～礫混じりシルトブロック           | 47 10YR4/6 褐 粗砂～礫混じりシルト               |
| 7 2.5Y8/3 淡黄～6/3 にぶい黄 粗砂～礫 (水道管敷設に伴う攪乱)                   | 28 2.5Y5/2～4/2 暗灰黄 粗砂～礫に39のブロックが混じる        | 48 2.5Y5/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルト (旧作土層か)      |
| 8 10YR4/4 褐 細砂～粗砂混じりシルト (水道管敷設に伴う攪乱)                      | 29 2.5Y6/2 灰黄～5/2 暗灰黄 粗砂～礫混じりシルトに          | 49 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂～礫混じりシルト             |
| 9 5Y5/1 灰 シルトに10GY7/1 明緑灰 シルトブロックが混じる                     | 30 5Y5/2 灰オリーブ 粗砂～礫混じりシルト                  | 50 2.5Y4/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルト              |
| 10 2.5Y5/1 黄灰 シルトに10GY7/1 明緑灰 シルトブロックが混じる                 | 31 10YR6/6 明黄褐～2.5Y8/2 灰白 粗砂～礫に39のブロックが混じる | 51 10YR5/4 にぶい黄褐 粗砂～礫混じりシルト           |
| 11 10YR6/2 灰黄褐(ほか 礫混じりシルト (住棟建設時の盛土)                      | 32 7.5Y7/2 灰白 粗砂～礫混じりシルトブロック               | 52 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～礫混じりシルトに            |
| 12 コンクリート基礎 (第1面19 土塁西面西側の基礎)                             | 33 2.5Y7/4 残黄～6/4 にぶい黄 礫混じりシルトブロック         | 53 10YR4/4 褐～4/3 にぶい黄褐 粗砂混じりシルト       |
| 13 煉瓦、花崗岩、コンクリートが混在 (第1面18 土塁東面東側外面の溝)                    | 34 10YR7/6 明黄褐～7.5GY7/1 明緑灰 粗砂～礫混じりシルトブロック | 54 10YR4/4～4/6 褐 粗砂混じりシルトに            |
| 14 10YR4/1 褐灰～4/2 灰黄褐 粗砂～礫混じりシルトに                         | 35 10YR7/2 灰黄褐 粗砂混じりシルト                    | 55 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト                    |
| 15 2.5Y8/3 淡黄 粗砂～礫 (第1面18 土塁東面東側の基礎跡)                     | 36 2.5Y5/3 黄褐 粗砂～礫混じりシルト                   | 56 2.5Y5/2 暗灰黄～5/3 黄褐 粗砂混じりシルト        |
| 16 10YR4/1 褐灰 粗砂～礫混じりシルト (第1面18 土塁東面東側の基礎跡)               | 37 2.5Y5/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルト                   | 57 10YR4/1 褐灰～3/1 黒褐 粗砂混じりシルト         |
| 17 2.5Y3/1 黒褐～2/1 黒 砂礫混じりシルト (第1面18 土塁東面東側の基礎跡)           | 38 10YR3/1 黒褐 粗砂～礫混じりシルト (旧作土層)            | 58 10YR6/6 明黄褐・2.5Y7/2 灰白・2.5GY8/1 灰白 |
| 18 2.5Y4/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルト (第1面18 土塁東面東側の基礎跡)               | 39 5Y5/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルト (旧作土層)              | 粗砂混じりシルト (地山層)                        |
| 19 10YR7/6 明黄褐 シルトに10GY6/1 緑灰 粗砂～礫混じりシルトブロックが混じる          | 40 2.5Y4/1～5/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルト (旧作土層か)       |                                       |
| 20 10YR3/2 明黄褐～4/2 灰黄褐 粗砂～礫混じりシルトに10YR6/6 明黄褐 シルトブロックが混じる | 41 2.5Y6/2 暗灰黄 粗砂混じりシルト                    |                                       |
| 21 10YR7/6 明黄褐 シルトに10GY6/1 緑灰 粗砂～礫混じりシルトブロックが混じる          |  |                                       |

図 27 8 区 南壁断面

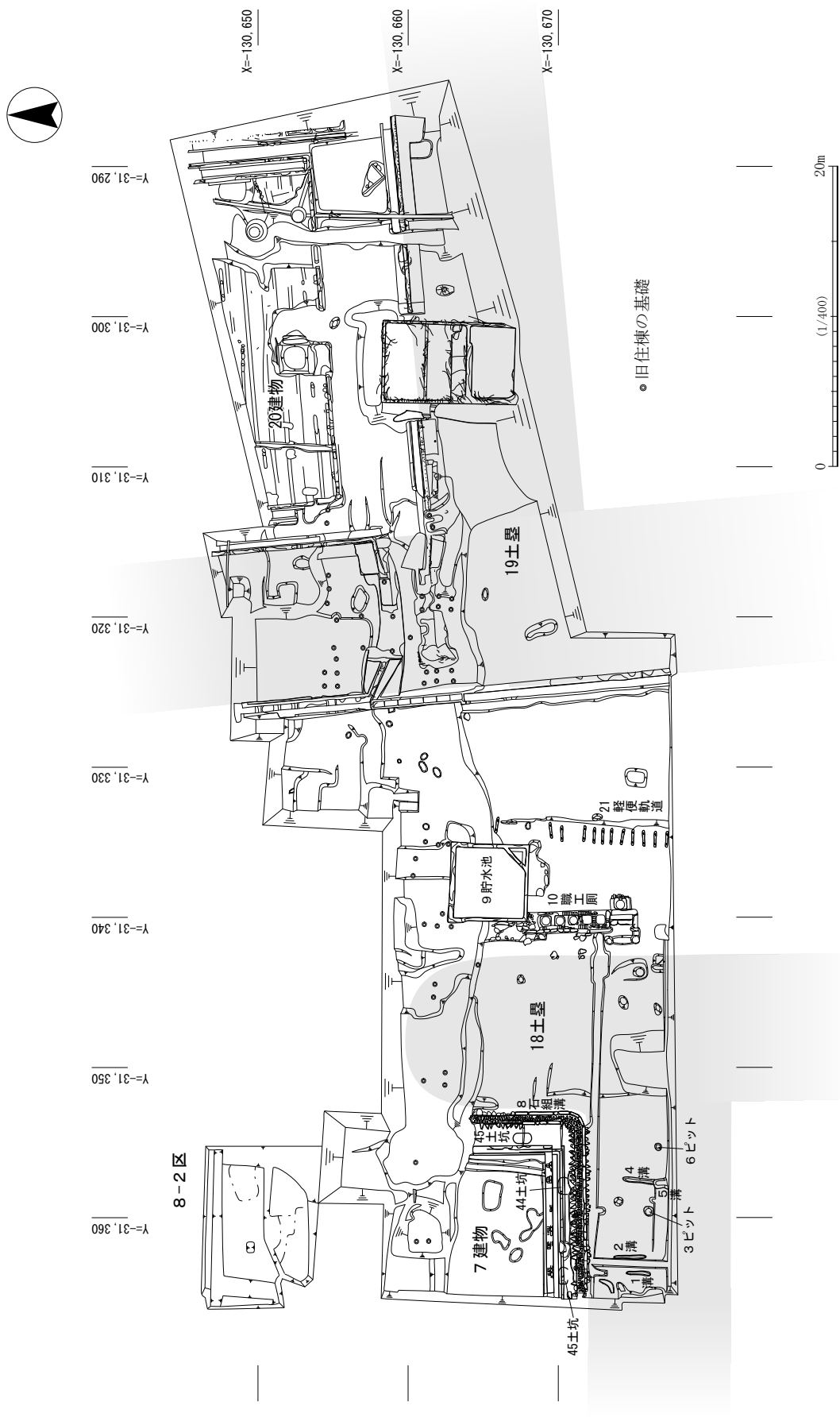
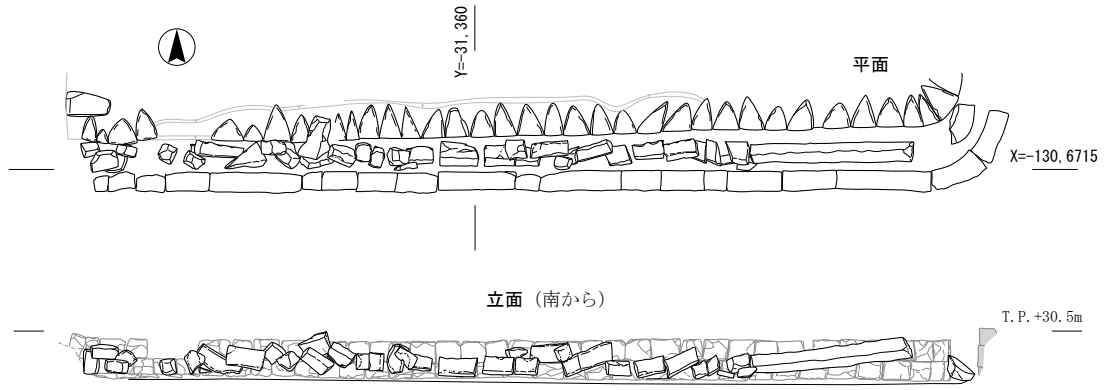


図28 8区 第1面



8石組溝検出状況

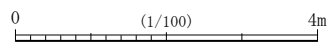
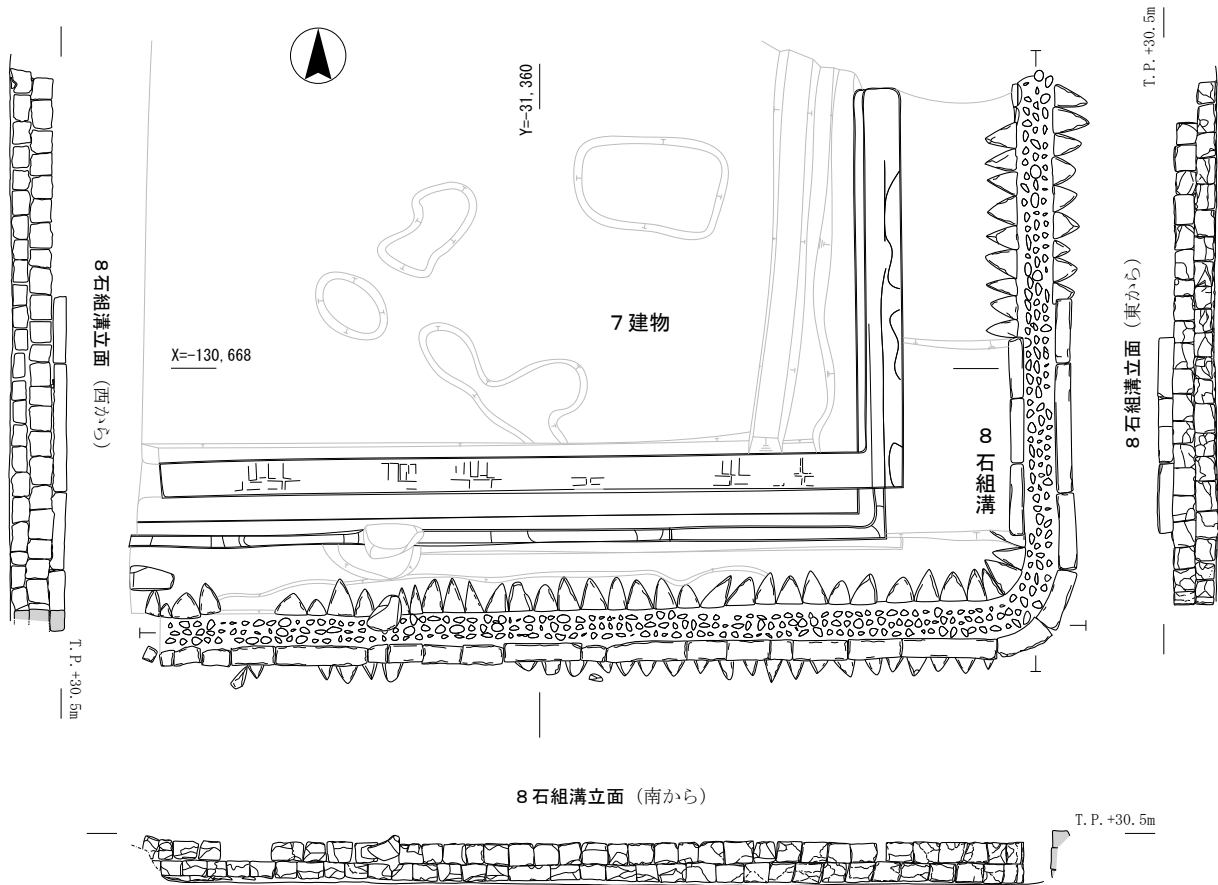
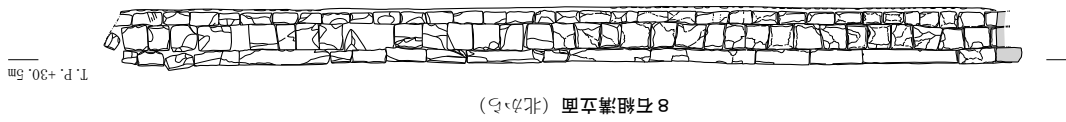


図29 8区 第1面7建物・8石組溝



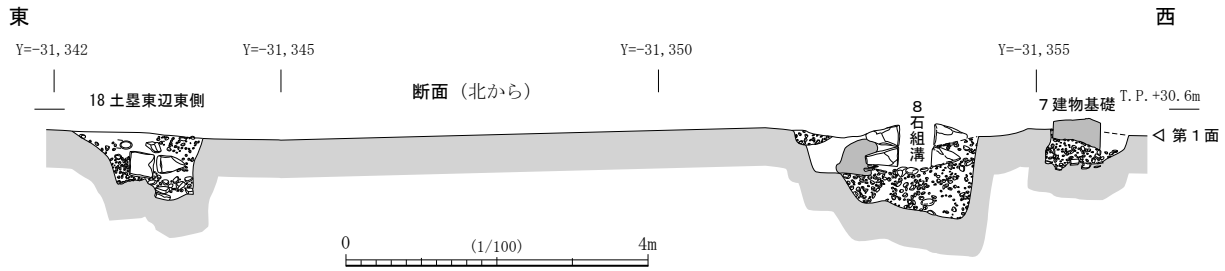


図30 8区 第1面 7建物・8石組溝・18土塁東辺東側断面

一方、8区中央部以東は明治43（1910）年に用地買収され、盛土により平坦化された後、昭和10（1935）年頃から諸施設が設けられた部分にあたる。

**明治・大正時代の遺構** まず、8区西半に位置する明治・大正時代に造られた建物、土坑、石組溝、土塁、職工厠から報告する。

**7建物**（図29・30 写真図版12-39・13-44） 8区西端に位置する。平成15・16年度調査で検出された昭和20（1945）年の「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠構内図」記載の第18号倉庫の東側部分であり、それ以前の火工場・倉庫の跡でもある。建物基礎は、溝を掘り、栗石を入れ、その上にコンクリートを打ち、さらにその上に煉瓦を積んで構築されている。基礎上部に使用された煉瓦のうち製造会社が判明したものは、岸和田煉瓦製であった。

この建物は、明治42（1909）年8月22日の爆発時には工事未着手で、爆発後に新築され、明治43（1910）～昭和9（1934）年は6号火工場、昭和10（1935）～昭和14（1939）年は5号火工場と称されていた。

昭和14年の爆発後には倉庫になり、昭和16（1941）年には第30号倉庫、昭和20（1945）年には第18号倉庫と呼ばれていた。爆発後の倉庫の基礎の南辺は、爆発以前の火工場の基礎よりも心々距離でおおよそ0.8m南に設けられている。北辺も、平成15・16年度調査成果からみて北へも拡張していると考えられる。東辺は、爆発以前の火工場の基礎を再利用した上で、南北へ延伸されている。

**8石組溝**（図29・30 写真図版12-40～13-45） 7建物は東・南・西辺を土塁で囲まれており、土塁裾には間知石を2段積みその上に笠石を置いた石組溝がめぐらされている。そのうち、7建物の東辺と南辺東部の部分を8石組溝として調査した。

溝の南辺には爆発時に崩落あるいは廃棄された考えられる溝の笠石などが転落しており（図29上）、それらに混じって金属製品（図138-136・140-183）、スレート瓦（写真図版81-1102）、煉瓦などが出土した。溝底は、3列の円礫を配しモルタルで固められていた（図29下）。

間知石の石材は、禁野本町遺跡から南東約4km離れた交野市倉治付近に産する中粒黒雲母花崗岩である（奥田尚氏のご教示）。

**43～45土坑** 3基とも7建物と8石組溝との間に位置し、建物に沿った方向に長い楕円形を呈する。第1面では見つけられずそこから約20cm下がった第2面で検出したが、内部には炭が充填されており周辺の土層とは一見して区別できる。したがって、7建物の存続時期のある段階に設けられた遺構だが、7建物や8石組溝が廃絶した時期には、地表面下に隠れていたものと推定できる。火工場に伴う施設で、除湿を狙ったものであろう。

**43土坑**は、平面は南北に長い楕円形で、南北1.1m、東西0.8m、深さ1.0m以上。鉄釘が出土し

- 11 便槽**
- 1 2.5Y4/3オリーブ褐 細砂～粗砂混じりシルト 径1～2cmの礫、煉瓦片、コンクリート片を含む
- 12 便槽**
- 1 2.5Y4/3オリーブ褐 細砂～粗砂混じりシルト 径1～2cmの礫、煉瓦片、コンクリート片を含む
- 13 便槽**
- 1 2.5Y4/3オリーブ褐 細砂～粗砂混じりシルト 径1～2cmの礫、煉瓦片、コンクリート片を含む
- 14 便槽**
- 1 10YR5/8黄褐 細砂～粗砂混じりシルトに2.5Y7/2灰黄 細砂～粗砂混じりシルトが混じる  
径1～3cmの礫、煉瓦片、コンクリート片、炭化粒を含む
  - 2 10YR5/8黄褐 細砂～粗砂混じりシルトと2.5Y5/2暗灰黄 細砂～粗砂混じりシルトの互層

- 15 便槽**
- 1 10YR5/8黄褐 細砂～粗砂混じりシルトに2.5Y7/2灰黄 細砂混じりシルトが混じる  
径1～3cmの礫、煉瓦片、炭化粒を含む
  - 2 径1～3cmの礫層
  - 3 10YR5/8黄褐 細砂～粗砂混じりシルトと2.5Y5/2暗灰黄 細砂～粗砂混じりシルトの互層
- 16 便槽**
- 1 10YR5/8黄褐 細砂～粗砂混じりシルトと2.5Y5/2暗灰黄 細砂～粗砂混じりシルトの互層
- 17 便槽**
- 1 2.5Y4/3オリーブ褐 細砂～粗砂混じりシルト 径1～2cmの礫、煉瓦片、コンクリート片を含む

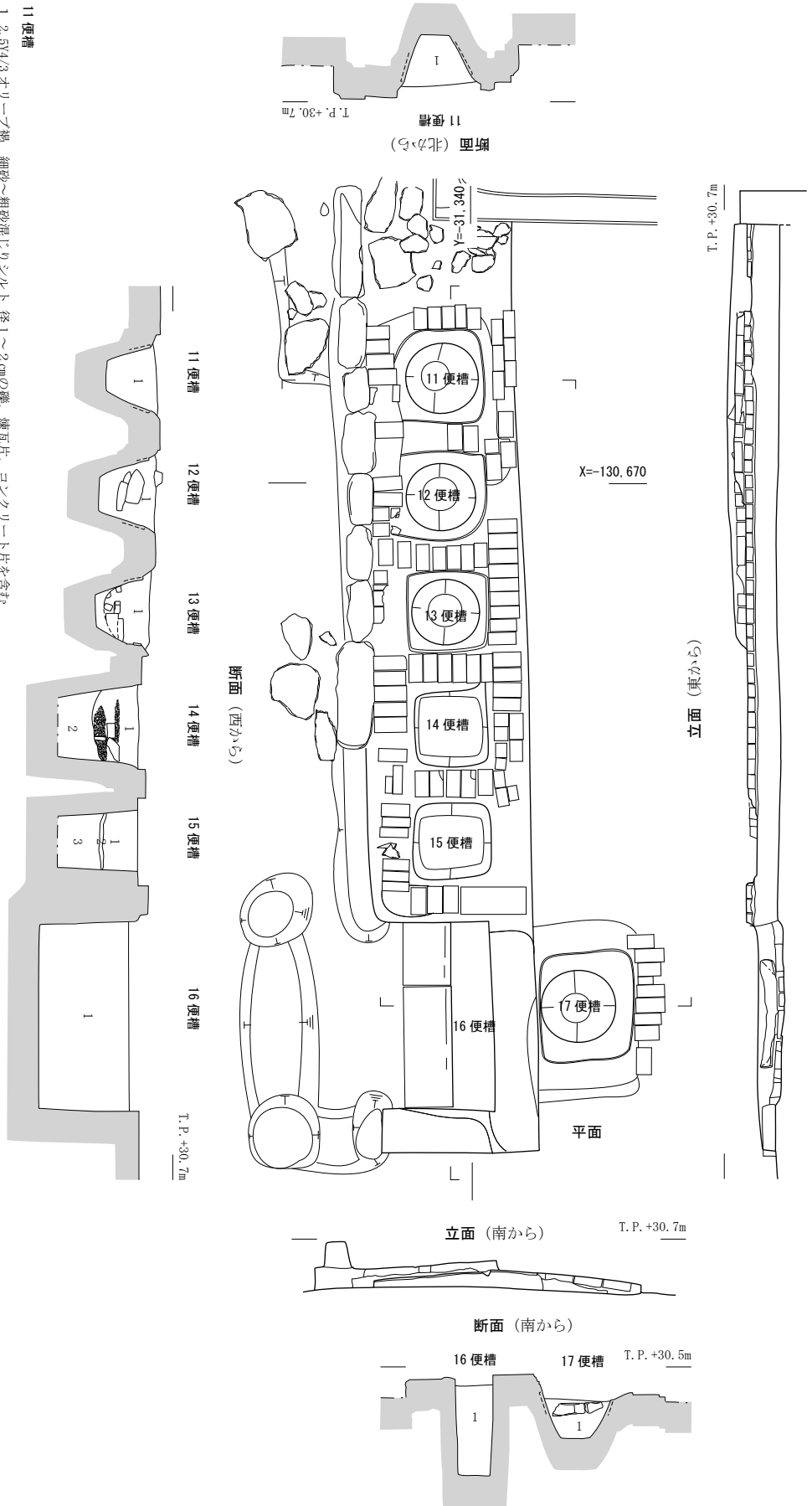
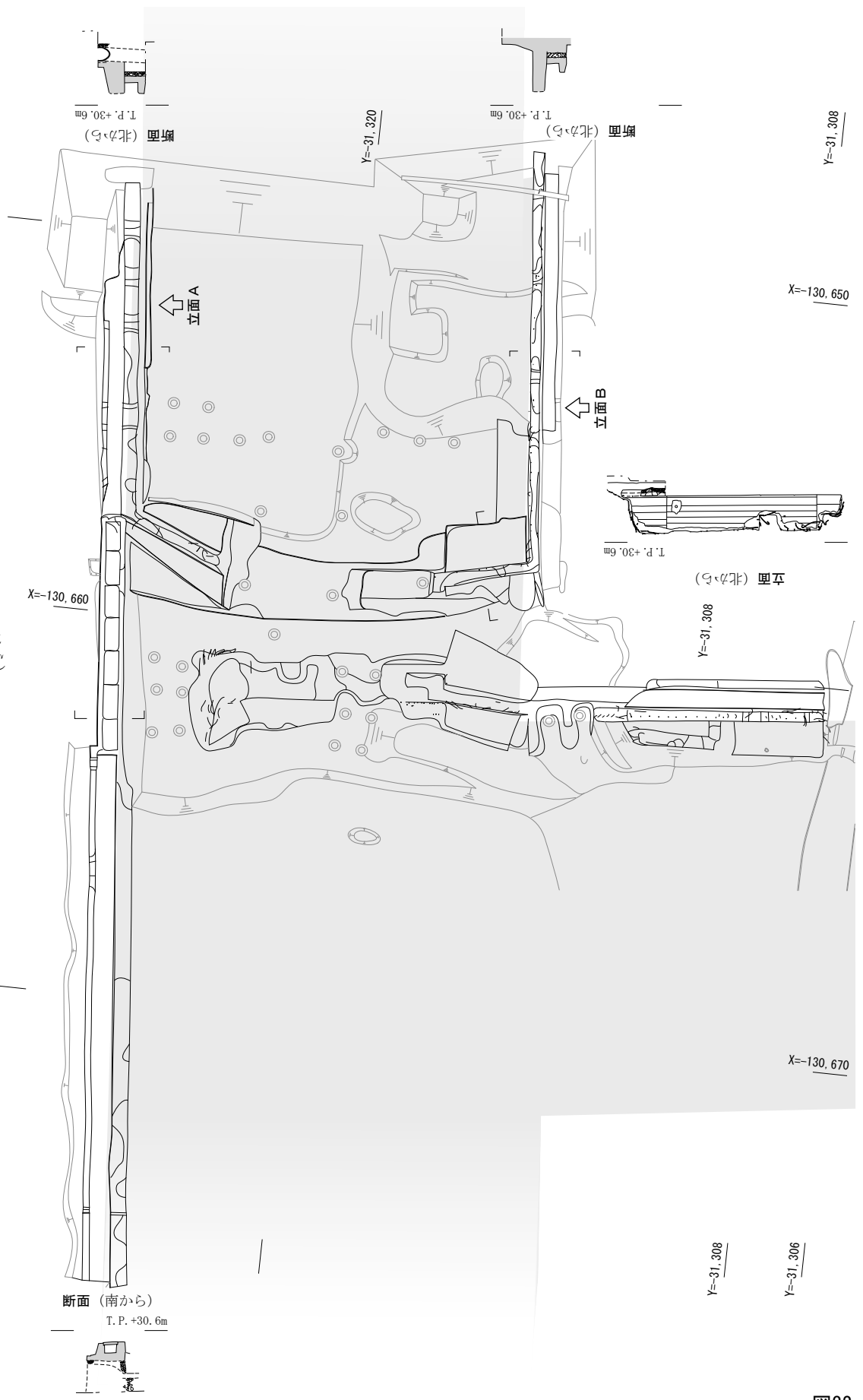
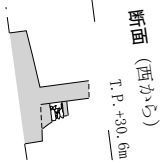
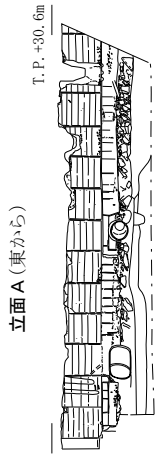


図31 8区 第1面10職工厠



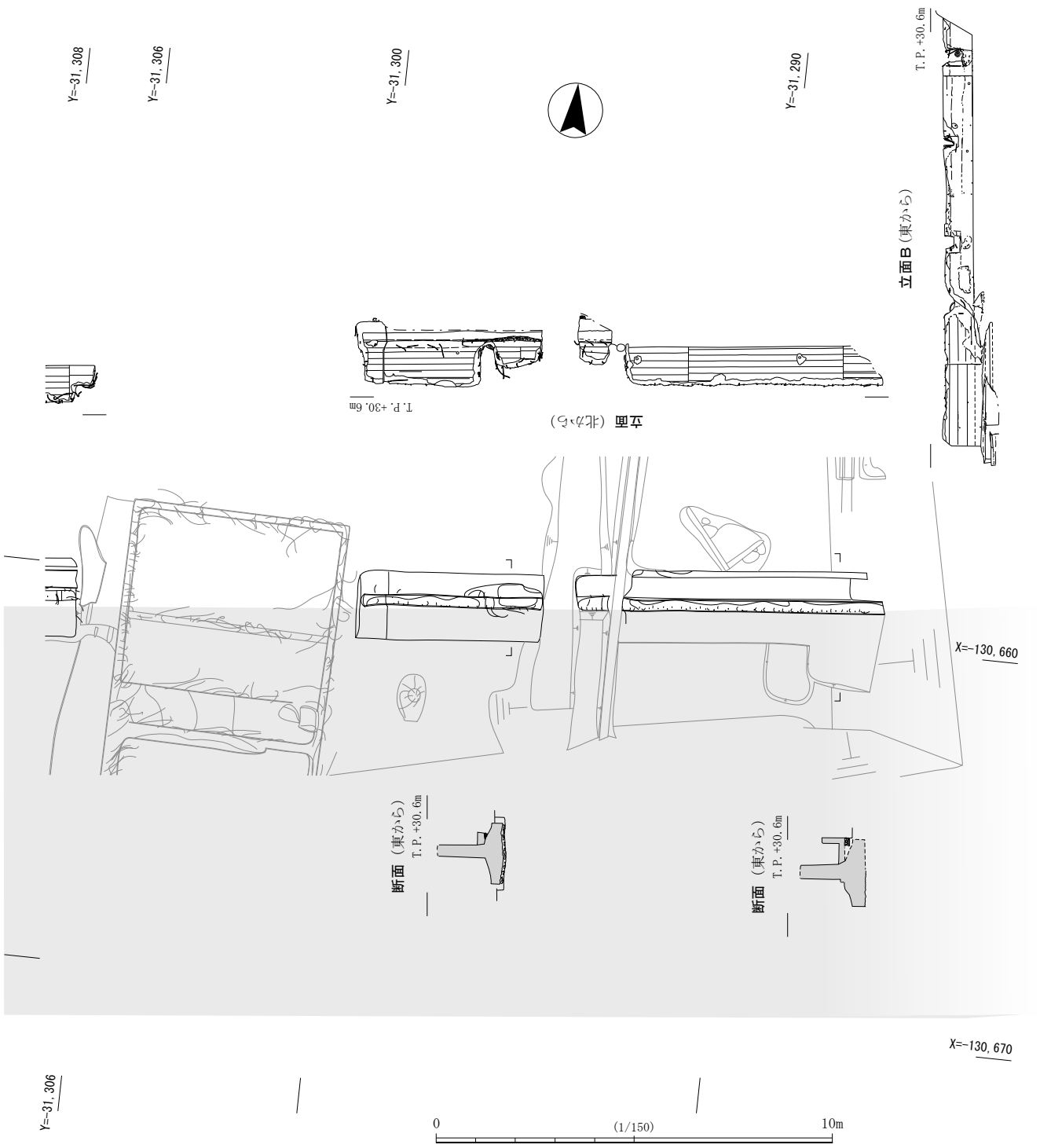
Y=-31.308

Y=-31.306

Y=-31.308

X=-130.650

図32



8区 第1面 19土塁

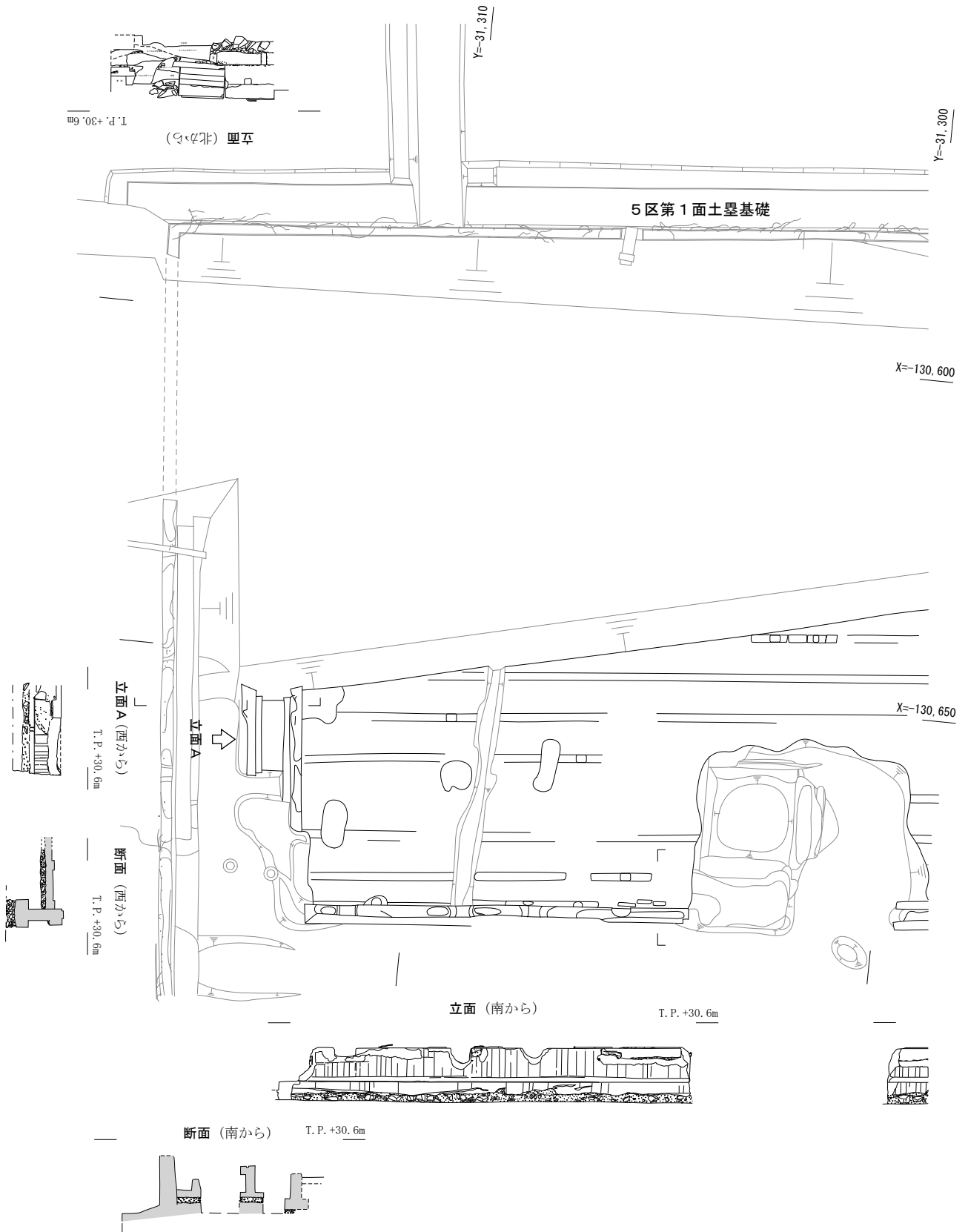
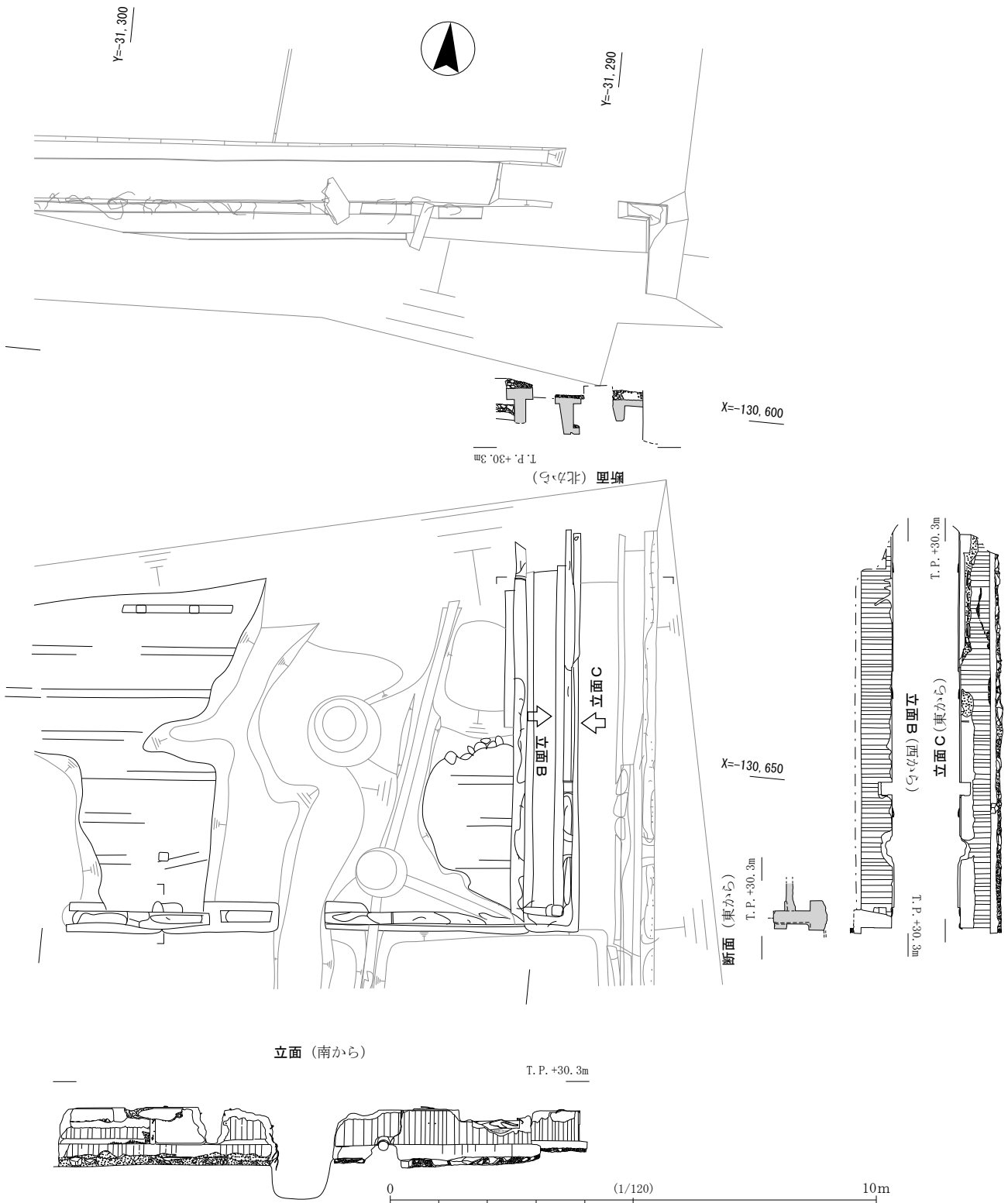


図33



た。

**44 土坑**は、平面は東西に長い楕円形で、東西 1.1 m、南北 0.6 m以上、深さ 1.2 m以上。

**45 土坑**は、平面は東西に長い楕円形で、東西 1.2 m、南北 0.6 m以上、深さ 1.3 m以上。

**18 土塁** 7 建物の東側から南側にめぐる土塁である。心々距離にして 7 建物の 2.1 m 東にある 8 石組溝が 18 土塁の南北部分の西側外面にあたる。18 土塁東辺東側には、図 30 に掲げるように断面観察により基礎と考えられるコンクリート塊などがみられた。痕跡から推して、18 土塁の基底部幅は約 10 m と考えられる。

**10 職工厠** (図 31 写真図版 14 - 46 ~ 49) 18 土塁の東側に位置する。溝を掘り込み、栗石を入れ、コンクリートを打ち、その上に煉瓦を積んだ基礎である。この構築方法は 7 建物と類似している。コンクリートと煉瓦基礎に囲まれた方形区画部分に便槽を設置し、その周囲にコンクリートを打っている (写真図版 14 - 48)。使用された煉瓦は、日本煉瓦株式会社の刻印が確認できた 1 点以外は、岸和田煉瓦製である。

南端にある平面長方形の **16 便槽** が小用で、鉢の埋められた **11 ~ 15 便槽** が大用であったと推定できる。さらに想像を逞しくすれば、東側に張り出して設けられた **17 便槽** は、その位置と当時の弾薬庫における関係者の男女比からみると、女子便所であったのかもしれない。

11 ~ 15・17 便槽に使用された陶器の鉢 (図 128 - 19 ~ 129 - 22) は、内面に尿石などの付着はみられず、容量もさして大きくない。維持管理の方法が気になるところである。

この職工厠は、大正 2 (1913) 年の「大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図」などからみて、大正時代頃 (1910 年代から 1920 年代前半頃) に機能していたと考えられる。

**昭和時代の遺構** 次に、8 区東半の昭和 10 (1935) ~ 11 (1936) 年にかけて新設された土塁、建物、軽便軌道、貯水池、溝、ピットを報告する。

**19 土塁** (図 32 写真図版 15 - 50・16 - 56) 8 区東部、次に報告する 20 建物の東西および南を囲む形で検出した。土塁の規模は、基底部幅約 10 m、高さは遺跡周辺の現存する土塁や下部のみだが残る土塁断面の表面が約 45 度の傾斜であることと頂部に幅の広い平坦面を造っていないことから推して約 5 m であろう。

土塁の盛土を支えるコンクリート基礎は、礫を敷き、フーチングを造り、その上に基礎を設けるという手順で構築されている。配水管が設けられた部分もある。

基礎外面には、全体的に型枠痕が残る。西辺西側内面や西辺東側外面には、セパレータ (仮設型枠間隔保持材) の跡も点々と残る。水抜き穴は、西辺東側外面に直径 5 ~ 6 cm のものがあり、南辺北側外面では基礎の一部を壊して新たに水抜き孔を設け、その周囲をモルタルで埋めたものもみられる。さらに、南辺北側には、木板の痕跡が残る打継目や、側溝の床面が剥離した痕跡も残る。上部が破壊された部分では鉄筋が露出していた。縦方向には 16 mm、横方向には 6 mm 径の鉄筋が使われている。

昭和 12 (1937) 年の「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」によると、同年に東西方向の軽便軌道が新設されたと推定できるが、この軽便軌道が土塁をトンネルで通過する部分は、側溝にはコンクリート製の蓋が被せられ、盛土で覆われる土塁の内側部分にもコンクリート基礎が設置されている。この 19 土塁と後述する 9 区第 2 面 55 基礎と名付けた土塁基礎でも、トンネル北壁の下部に基礎があり、それらは土塁の外方に向かってハの字状に開いた平面形をしている。

20 建物 (図 33 写真図版 15 - 50 ~ 16 - 55) 8区北東部に位置する。建物のおよそ南半分を検出した。昭和 10 (1935) 年 9 月 16 日起工、昭和 11 (1936) 年 7 月 30 日授受の火工場 2 棟のうちの西側に存在した第 4 師団保管建物に該当する。この建物は昭和 14 (1939) 年の爆発後、昭和 16 (1941) 年には第 28 号倉庫、昭和 20 (1945) 年には第 16 号倉庫となっている。

建物の基礎は、溝を掘り、栗石を入れ、捨てコンを打ち、その上にフーチングを築き、さらにその上にコンクリートを打って構築されている。基礎の外面には形枠痕が残るが、南辺では壁面にさらにモルタルを上塗りした部分もある。調査では、爆発後の倉庫への転用時における建物基礎の東西方向への拡張も確認できた。東西の壁の心々距離は、拡張前が 22.0 m、拡張後が 23.8 m である。

この基礎のうち、建物南側と東側、西側では、出入口の扉に伴うであろう溝状のくぼみなどが確認できた。南側の出入口は、後述する軽便軌道との荷物の積み下ろしのためと推定できる。一方、東西の出入口は土塁との間隙が狭く、とくに拡張後では 1 m もない。したがって、物資の出し入れには不向きで

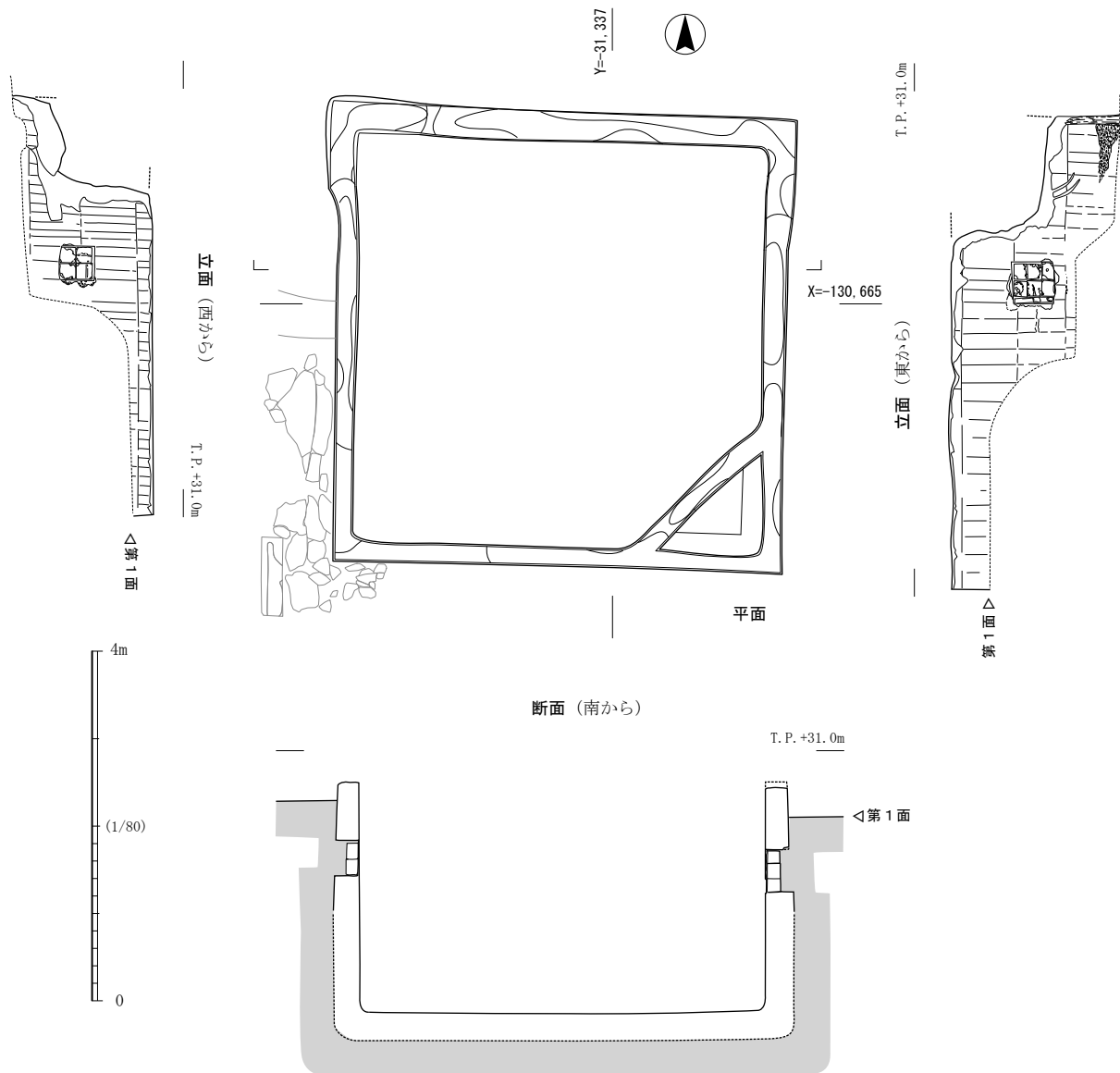


図34 8区 第1面9貯水池



あり、作業員の出入りや換気などが目的だったのかもしれない。

建物内部の土間コンクリート上には、蓆の痕跡や地下足袋で歩いた痕跡が多数見られた（写真図版 16 - 52）。また、アンカーボルトなどが埋められていることから、コンクリート上に木材を組み、その上に床を作っていたと考えられる。

**21 軽便軌道**（写真図版 16 - 57・58） 9 職工厠の東側と 19 土塁との間で、南北方向に並ぶコンクリート製枕木を原位置で 11 本と遊離した 2 本検出した。個々の枕木（図 143 - 228・229）には犬釘を打ち込む孔が 4 個開いており、その位置からすると軌間（ゲージ）は 600 mm であろう。

『分廠歴史』によると、この軽便軌道は、昭和 8 年に「軽便軌道（延長）240 米（未填薬弾丸庫新設ニ伴フ付帯工事トス）」として敷設されたようである。他方、「大阪兵器支廠禁野弾薬庫図」によれば、昭和 7（1932）年には存在し、昭和 8（1933）年にはなく、昭和 9（1934）年以降の「大阪兵器支廠禁野弾薬庫要図」に再度描かれるようになる。昭和 17（1942）年の「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠新築増築概要図」にもみられることから、昭和 14 年（1939）年の爆発後も機能していたと考えられる。

**9 貯水池**（図 34 写真図版 17 - 59～61） 8 区西部、8 石組溝の 10 数 m 東に位置する。『分廠歴史』記載の昭和 16 年 9 月 18 日に中部軍経理部より授受した 5 箇所のコンクリート製貯水池のうちの一つである。

貯水池の周囲は、平成 15・16 年度調査で検出されたものには雨水を溜めやすくするための勾配がつけられていたが、この 9 貯水池では残りが悪く痕跡的に認められたのみであった。

外面には型枠痕が残る。図 34 にあるように 9 貯水池の東壁には、予め型枠を入れ空間を確保して周辺のコンクリートを打った縦 49 cm、横 48 cm の孔に、長さ・幅ともに 17 cm、高さ 15 cm のコンクリート製ブロック 6 個と煉瓦 2 個を詰め、貯水池の内面からモルタルを塗り込めて孔を塞いでいる。西壁にも同様な孔があり、こちらは縦 40 cm、横 39 cm の孔に、コンクリート製ブロックを 4 個詰めて、貯水池の内面からモルタルを塗り込めて孔を塞いでいる。

内面は平滑に仕上げられており、内法は一辺 4.6 m、深さ 2.6 m である。貯水池の南東部には切梁が設けられており、それに扼された南壁には貯水池の上端から 50～60 cm 下に南からのびた鉄管が開口している。その鉄管は、9 貯水池付近から出土した接続部に栗本鐵工所の社印と「昭和十六年」が鋳出されたものと同種のものと推定されるが、それは貯水池の設置時期と一致する。貯水池底部の南東角付近は幅 20 cm、高さ 5 cm にわたって高まっており、切梁の真下も帯状に 10 cm 高くなっている。

**溝とピット** 以下の溝やピットは、8 区南西部に分布する。いずれからも遺物は出土しておらず、時期不詳である。

**1 溝** 主軸方位は南北。長さ 1.6 m、幅 0.3 m、深さ 4 cm。埋土は、2.5Y6/1 黄灰色細砂混じりシルト。

**2 溝** 主軸方位は南北。長さ 2.2 m、幅 0.2 m、深さ 3 cm。埋土は、1 溝と同じ。

**3 ピット** 平面隅丸方形で、東西・南北ともに 58 cm、深さ 8 cm。埋土は、7.5YR5/8 褐色細砂～粗砂混じりシルト。ピットの底に木杭が打たれている。何らかの柱穴の痕跡であろう。

**4 溝** 主軸方位は南北。検出長は 2.1 m で、南部を 5 溝に切られている。幅 0.3 m、深さ 8 cm。埋土は、2.5Y6/2 灰黄色シルト混じり細砂～粗砂。

**5 溝** 主軸方位は南北。検出長 0.9 m。幅 0.6 m、深さ 14 cm。埋土は、5YR5/4 にぶい赤褐色シルト

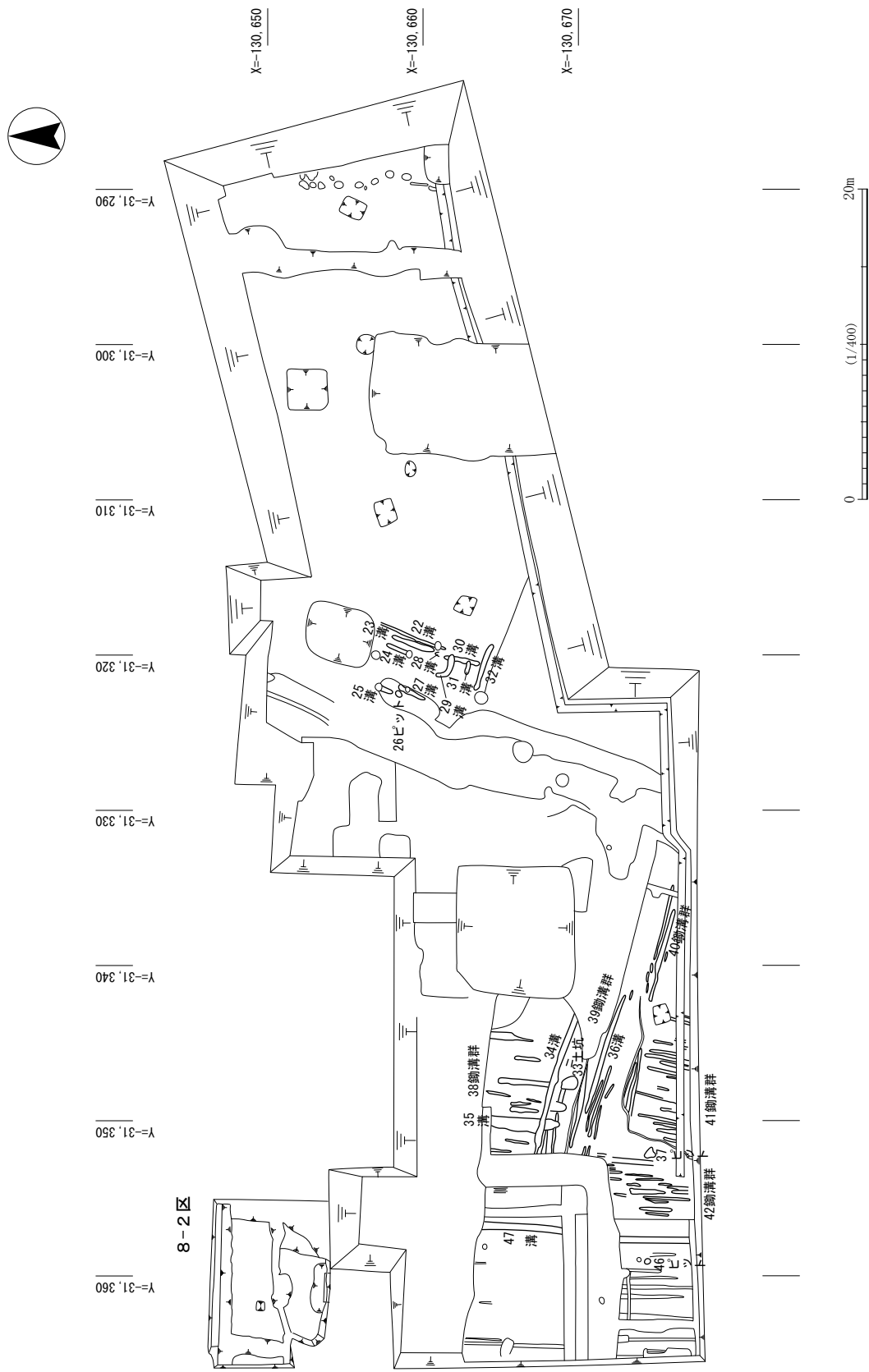


图 35 8 区 第 2 面

～細砂。

**6ピット** 平面不整形で、直径約45cm、深さ11cm。埋土は、10YR4/3にぶい黄褐色細砂～粗砂混じりシルトに10YR5/8黄褐色シルト混じり細砂～粗砂と2.5Y5/3黄褐色細砂混じりシルトが混じる。

## 第2面（図35 写真図版18-62～64、25-85） 中世～近世

禁野火薬庫に伴う盛土層と禁野火薬庫以前の旧作土層など（第Ⅱ層）を除去し検出した第Ⅲ層上面である。面の高さは、T.P.+28.1～30.3mで、西が高く東が低い。この高低差は、地山層上面である第6面まで同じ傾向にある。遺構として、8区西部において散在する土坑やピット、さらに溝を多数検出したが、東部や8-2区では顕著な遺構がみられなかった。

**26ピット** 8区中央部に分布する溝群の西部に位置する。平面は北東-南西に長い楕円形で、長径45cm、短径30cm、深さ4cm。埋土は、5Y4/1灰色シルト混じり細砂～粗砂。位置・形状・埋土からみて、このピットの北西にある溝25と一連のもの可能性もある。

**33土坑** 8区西部に位置する。平面は北北西-南南東に長い楕円形で、長径1.1m、短径0.9m、深さ9cm。埋土は、7.5YR6/1褐灰色細砂～粗砂。

**37ピット** 8区南西部に位置する。平面不整形で、直径60～76cm、深さ4cm。埋土は、10YR6/2灰黄褐色細砂～粗砂。

**46ピット** 8区南西部に位置する。平面円形で、直径34～36cm。深さ46cm。

**溝群** 耕作に伴うと考えられる素掘り溝を多数検出した。主軸方位は、8区中央部の22・25・27・28・30溝や西部の41鋤溝群は北北東-南南西、それらにほぼ直交するのが8区中央部の29・31・32溝や西部の34・36溝・39・40鋤溝群である。35溝や42鋤溝群はおおむね南北方向を主軸方位とする。方位の違いが時期差の反映かもしれないが、細片ばかりの出土土器からは不明である。溝は、いずれも第Ⅱ層下部と同じ10YR4/6褐色粗砂～礫混じりシルトや2.5Y5/2暗灰黄色粗砂～礫混じりシルトを埋土とする。

## 第3面（図36 写真図版19-65～67・25-86） 古代～中世

第Ⅲ層を除去し検出した面である。面の高さは、T.P.+28.0～30.3mで、西が高く東が低い。8区西端と8-2区では、第Ⅲ層を除去したこの段階で地山層（第Ⅶ層）が露出した。遺構として、土坑、溝、鋤溝群を検出した。

**51土坑** 8区南西部に位置する。平面は西北西-東南東に長い隅丸方形で、長径1.7m、短径1.0m、深さ14cm。埋土は、2.5Y6/6明黄褐色シルト混じり細砂に2.5Y6/1黄灰色シルト混じり細砂～粗砂がブロック状に混じる。出土遺物なし。

**8-2区1土坑** 8-2区西部に位置する。平面はほぼ円形と推定され、南北1.1m、東西0.9m、深さ44cm。埋土は、上部が2.5Y5/2暗灰黄～2.5Y5/3黄褐色粗砂混じりシルト、下層が2.5Y5/2暗灰黄色粗砂混じりシルトに10YR4/3にぶい黄褐色粗砂～礫混じりシルトが混じる。出土遺物なし。

**52溝** 51土坑のすぐ南に位置し、東西方向に延びる。検出長3.6m、幅0.6m、深さ16cm。埋土は、2.5Y6/6明黄褐色シルト混じり細砂～礫に2.5Y6/1黄灰色細砂混じりシルトのブロックや炭が混じる。出土遺物なし。

**53溝** 8区南西部に位置し、主軸方位は北北東-南南西で、南側は調査区外に延びる。検出長2.6m、

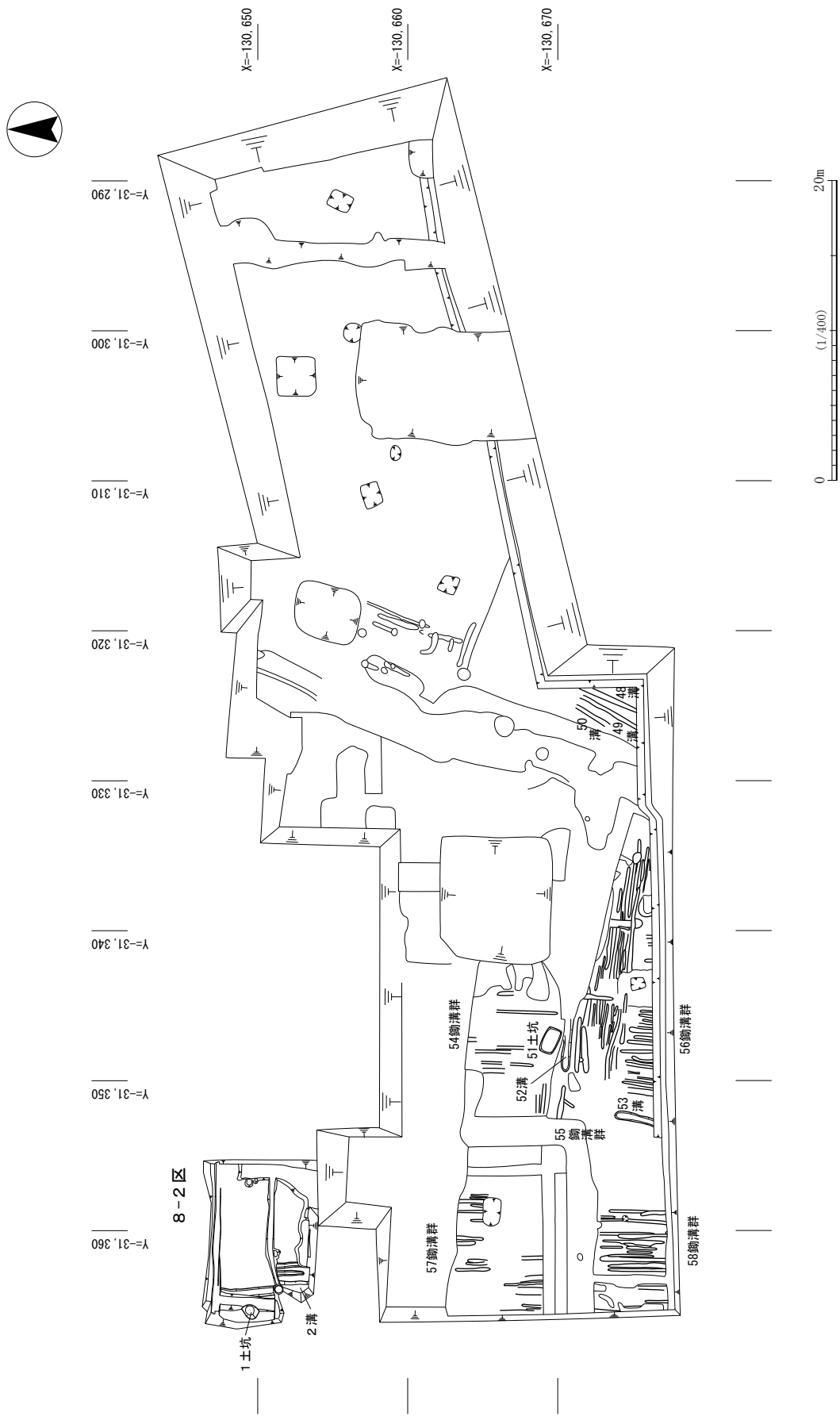


图 36 8 区 第 3 面

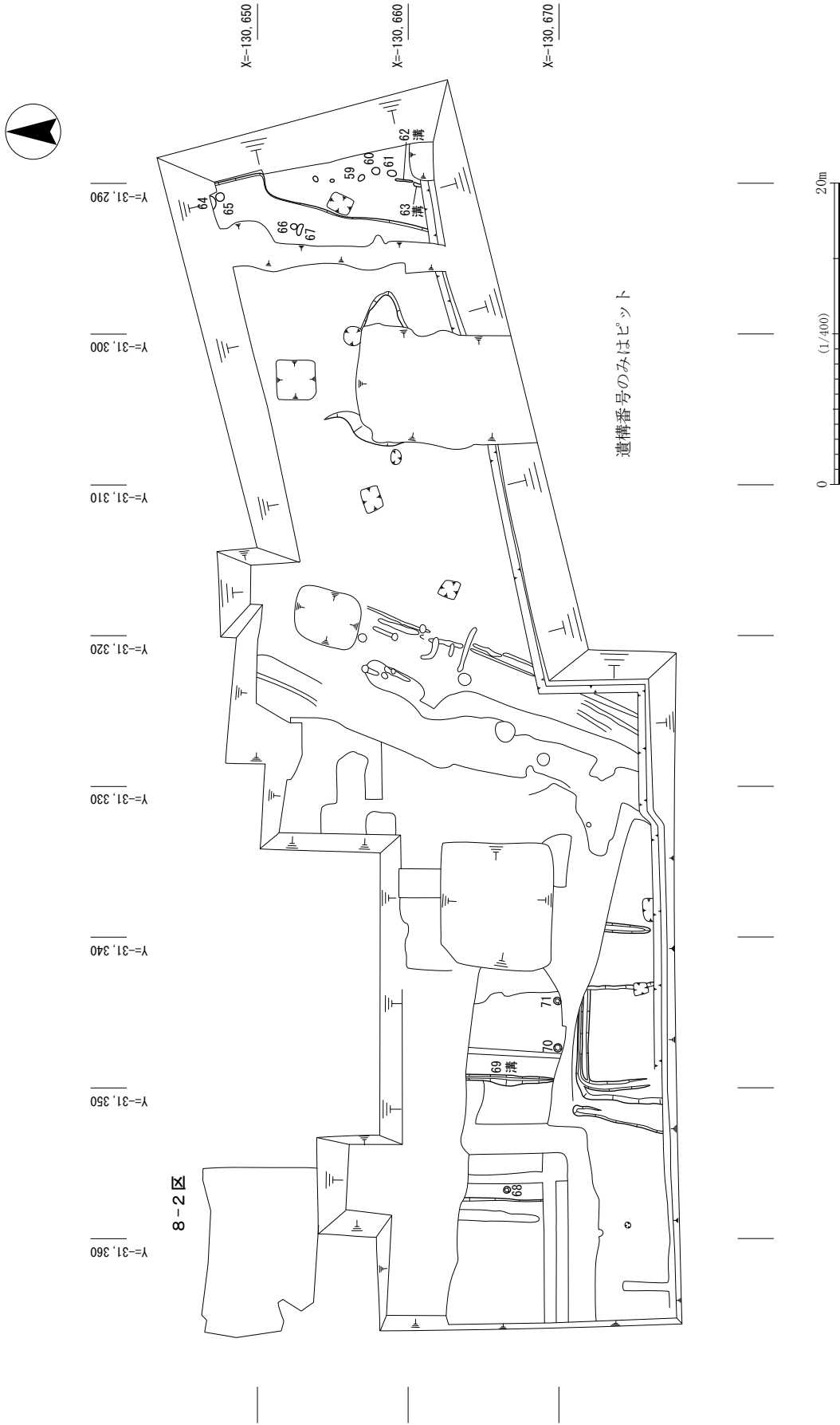


図 37 8区 第4面

幅 0.6 m、深さ 6 cm。埋土は、5Y5/2 灰オリーブ色シルト混じり細砂～粗砂に 5B5/1 青灰色シルト混じり細砂～粗砂が混じる。出土遺物なし。

**8 - 2 区 2 溝** 8 - 2 区南西部に位置する。主軸方位はほぼ南北で、検出長 5.9 m、幅 0.7 m、深さ 10 cm。埋土は、10YR4/3 にぶい黄褐色～10YR4/1 褐灰色に粗砂～礫混じりシルトが混じる。出土遺物なし。

**溝群** 8 区西部と 8 - 2 区の攪乱されてない部分では、一面に南北あるいは東西方向のいわゆる鋤溝を検出した。その幅は 0.1 ～ 0.4 m 程度、深さは 2 ～ 4 cm と浅い。埋土は、基本的に第Ⅲ層と同じ 10YR4/4 褐色粗砂などが多いが、**41 鋤溝群**の一部では 2.5Y7/3 浅黄色細砂と 2.5Y7/1 灰白色シルト混じり細砂が混じり、**48 ～ 50 溝**は 2.5Y6/1 黄灰色細砂混じりシルトに 10YR5/8 黄褐色細砂～中砂混じりシルトが混じっている。**48 ～ 50 溝**から土器細片が出土した。

#### 第 4 面 (図 37 写真図版 20 - 68 ～ 70) 古代

第Ⅳ層を除去し検出した面である。面の高さは、T.P.+27.9 ～ 30.2 m で、西が高く東が低い。遺構として、溝とピットを検出した。

**62 溝** 8 区南東隅に位置する。主軸方位は南北で、長さ 1.1 m、幅 0.1 m、深さ 5 cm。埋土は、10YR6/2 灰黄褐色細砂～粗砂混じりシルトに 10YR6/8 明黄褐色シルト混じり細砂～粗砂が混じる。出土遺物なし。

**63 溝** 62 溝の南部に位置する。主軸方位は南北で、検出長 0.5 m、幅 0.2 m、深さ 4 cm。埋土は、2.5Y6/2 灰黄色シルト混じり細砂～粗砂に 10YR6/8 明黄褐色シルト混じり細砂～粗砂や礫が混じる。出土遺物なし。

**69 溝** 8 区西部に位置する。主軸方位は南北で、検出長 6.0 m、幅 0.8 m、深さ 14 cm。埋土は、7.5YR4/2 灰褐色シルト混じり細砂～粗砂。出土遺物なし。

**ピット** **59 ～ 61・64 ～ 67** ピットは 8 区東端に、**68・70・71** ピットは 8 区西部に分布する。**68** ピットは 34 cm とやや深く、埋土は上層が灰褐色シルト混じり細砂～中砂、下層が 10YR4/2 灰黄褐色細砂～中砂混じりシルトで、全体にマンガン斑を含む。それ以外のピットは浅く単層である。**68** ピットから 6 世紀末の須恵器杯などが出土した。

#### 第 5 面 (図 38 写真図版 21 - 71 ～ 73) 古代

第Ⅴ層を除去し検出した面である。面の高さは、T.P.+27.8 ～ 30.1 m で、西が高く東が低い。遺構として、ピット、溝、土坑を検出した。いずれも 8 区中央部に位置する。

**72 ピット** 平面は北東 - 南西に長い不整形円で、長径 93 cm、短径 82 cm、深さ 11 cm。埋土は、7.5YR4/1 褐灰色シルト混じり細砂～粗砂に 10YR6/2 灰黄褐色細砂～粗砂が混じる。重複関係からみて、74 溝よりも古い。出土遺物なし。

**73 ピット** 北部は攪乱によって失われているが、平面円形と推定され、直径 35 ～ 38 cm、深さ 9 cm。埋土は、7.5YR4/1 褐灰色シルト混じり細砂～粗砂に 10YR6/2 灰黄褐色細砂～粗砂が混じる。出土遺物なし。

**74 溝** 主軸方位は、南端では東西だがそこから北東に延びる。検出長 2.3 m、幅 0.4 m、深さ 4 cm、埋土は、7.5YR4/2 灰褐色細砂～粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

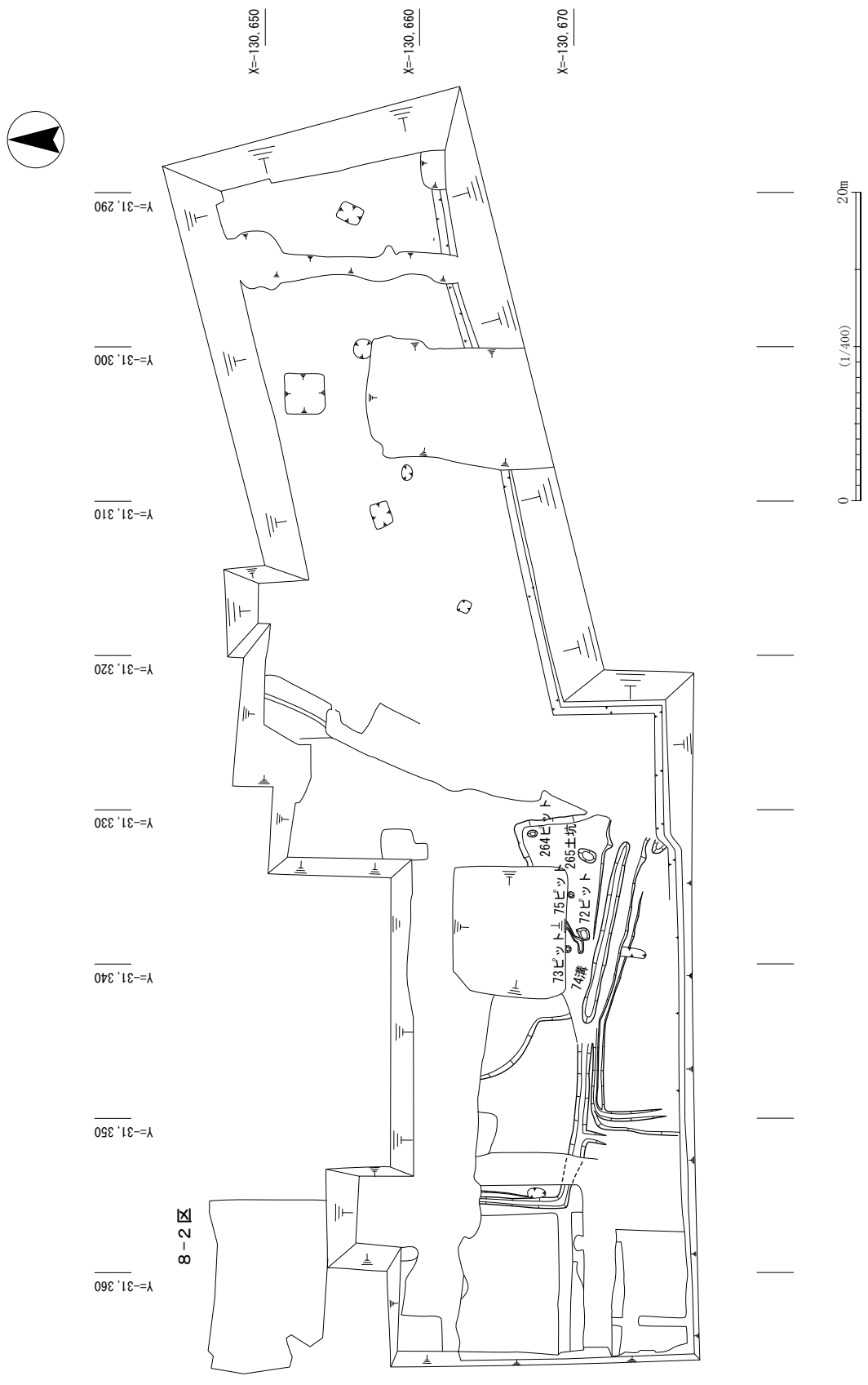


図 38 8区 第5面

**75 ピット** 平面不整円形で、直径 37～41 cm、深さ 26 cm。埋土は、7.5YR4/2 灰褐色シルト混じり細砂～粗砂を主体とし、炭や上部には 10YR6/6 明黄褐色細砂混じりシルトが混じる。出土遺物なし。

**264 ピット** 平面は南北に長い楕円形で、長径 62 cm、短径 43 cm、深さ 10 cm。埋土は、10YR4/2 灰黄褐色シルト混じり細砂が主体を占め、底部に薄く 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂～粗砂がみられる。出土遺物なし。

**265 土坑** 平面は北北東 - 南南西に長い楕円形で、長径 1.3 m、短径 0.7 m、深さ 11 cm。埋土は、7.5YR4/2 灰褐色細砂混じりシルトに 10YR6/2 灰黄褐色細砂がブロック状に多く混じる。出土遺物なし。

## 第6面 (図 39・40 写真図版 22 - 74・75) 古代以前

第Ⅵ層を除去した地山層 (第Ⅶ層) 上面である。面の高さは、T.P.+27.7～30.1 mで、上記各面と同様に、西が高く東が低い。調査区西半の地形がやや高い部分を中心に、掘立柱建物、井戸、溝、土坑、多くのピットを検出した。

**掘立柱建物 1** (図 41 写真図版 23 - 76・77) 8区西部に位置し、北東部を昭和 16 (1941) 年に設けられた 9 貯水池により破壊されている。主軸方位は N 10° W で、桁行 3 間 (6.7 m)・梁行 3 間 (5.9 m)、面積 39.5 m<sup>2</sup> の総柱建物である。ピット (写真図版 23 - 78～80) の掘方は一辺約 1.0 m、柱痕跡の直径は 0.4 m 程度である。ただし、ピットの深さは 0.2 m 程度と浅く、かなり削平されていると考えられる。

出土遺物には時期差がある。南辺の 123 ピットから 6 世紀末の須恵器杯と平瓦細片、北西隅の 128 ピットから 6 世紀末～7 世紀初頭の須恵器杯、屋内柱である 126 ピットから 6 世紀末～7 世紀初頭の須恵器杯・8 世紀の須恵器杯・青銅製品 (図 148 - 316)、南西隅の 131 ピットから 8 世紀の土師器甕などが出土している。新しい時期の遺物によればこの掘立柱建物 1 は 8 世紀の所産と考えられるが、6 世紀末～7 世紀初頭の可能性も否定はできない。

**249 井戸** (図 42 写真図版 24 - 81・82) 8区中央部北側に位置する。漏斗形の素掘り井戸である。検出面での平面は北東側に突出した不整円形で、長径 3.6 m、短径 2.9 m。直径約 1.3 m の比較的整った円筒状に掘り下げられているが、井戸枠はない。検出面からの深さ 3.0 m で底に達するが、底部には灰白色のシルトが溜まるのみで、集水施設 (水溜め) の構造物も見当たらない。出土土器には 6 世紀後半～7 世紀初頭のもの (図 148 - 332・333・344・345) も含まれるが、主体は 8 世紀 (図 148 - 317～331・335～343・346～351) である。曲物底板や火付け棒などの木製品 (図 149 - 352～355)、金属製品 (図 149 - 356)、ヒノキやヤブツバキの木片やスギの炭化材も出土した。

埋土を水洗したところ、イネ科の苞穎、ヒユ属の種子、ヒョウタンの果皮片などを検出できた。珪藻分析とあわせて、人間活動や生産活動が盛んであったことが想定された (「第 7 章 禁野本町遺跡の植物遺体」参照)。

**107 溝** 8区中央部北側、249 井戸の南側に位置する。主軸方位は北西 - 南東で、検出長 2.5 m、幅 0.5 m、深さ 8 cm。埋土は、10YR4/4 褐色細砂混じりシルト。出土遺物なし。

**116 溝** 8区中央部に位置する。主軸方位は北でわずかに西に偏するがほぼ南北で、検出長 8.0 m、幅 0.8 m、深さ 8 cm。埋土は、7.5YR3/3 暗褐色細砂混じりシルト。掘立柱建物 1 や後述の 110～112 ピットと主軸方位が類似している。8 世紀末の須恵器杯 (図 149 - 372) などが出土した。



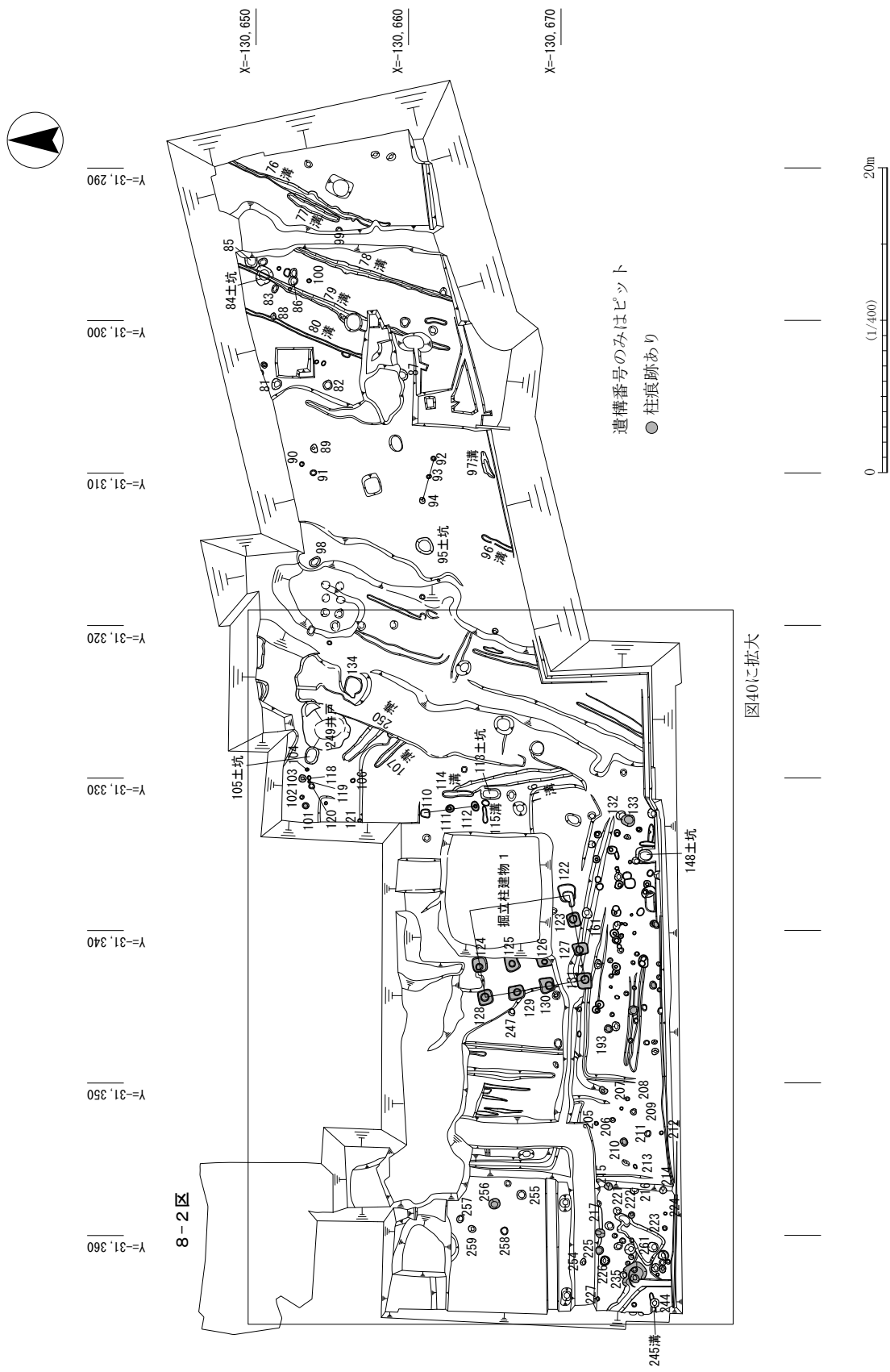


図 39 8区 第6面

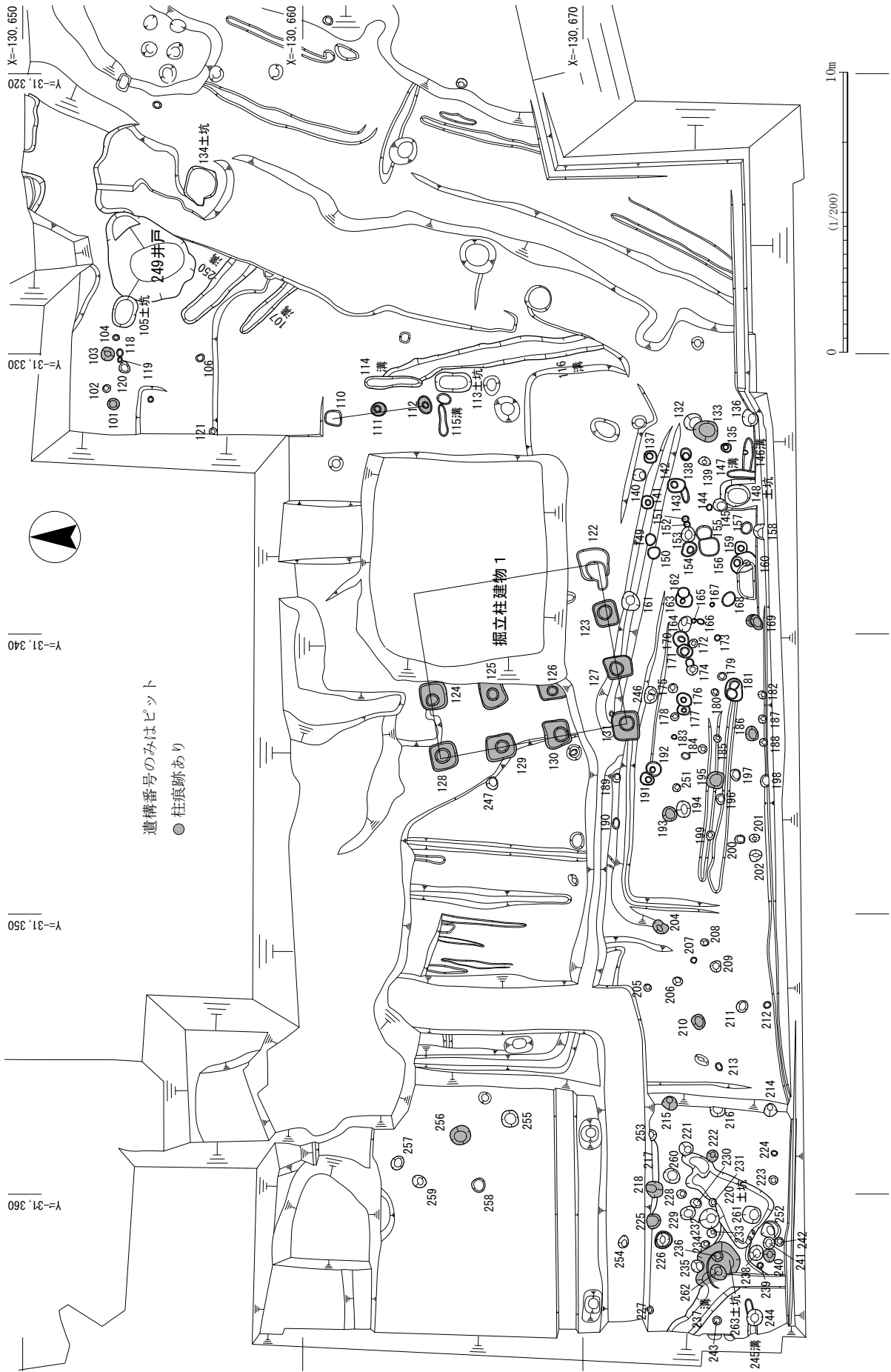
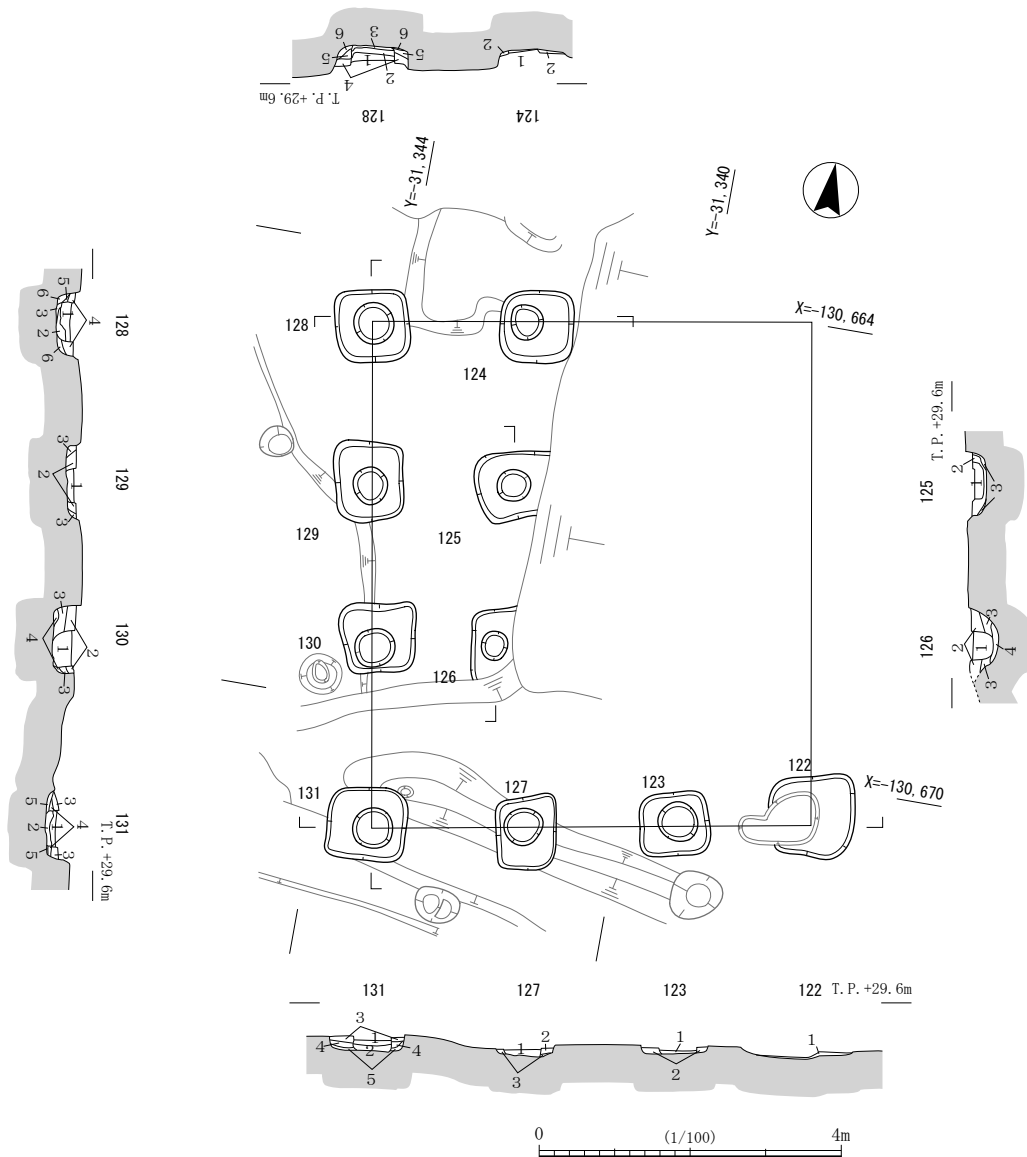


図 40 8区 第6面西半



**122 ピット**

- 1 10YR5/8 黄褐～10YR5/2 灰黄褐 シルト混じり中砂～粗砂

**123 ピット**

- 1 10YR5/2 灰黄褐～10YR4/6 褐 シルト混じり細砂～中砂
- 2 10YR7/1 灰黄褐～10YR4/6 褐 シルト混じり細砂～中砂

**124 ピット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐～10YR5/6 黄褐 シルト混じり粗砂～礫
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐～3/3 暗褐 シルト混じり中砂～粗砂

**125 ピット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐～4/3 にぶい黄橙 中砂～礫
- 2 10YR5/2 ～4/2 灰黄褐 シルト混じり中砂～粗砂
- 3 10YR5/8 黄褐～10YR5/1 褐灰 シルト混じり細砂～粗砂

**126 ピット**

- 1 10YR4/6 褐～10YR5/8 黄褐 シルト混じり中砂～粗砂 炭をわずかに含む
- 2 10YR6/2 灰黄褐～10YR7/1 灰白 中砂～粗砂 炭を含む
- 3 10YR5/2 灰黄褐～10YR4/6 褐 シルト混じり細砂～中砂
- 4 10YR5/1 褐灰～10YR4/6 褐 中砂～粗砂混じりシルト

**127 ピット**

- 1 10YR5/3 ～4/3 にぶい黄褐 シルト混じり細砂～中砂 炭を含む
- 2 10YR7/2 にぶい黄橙～6/2 灰黄褐 中砂～粗砂
- 3 10YR5/8 黄褐～10YR5/2 灰黄褐 細砂～中砂混じりシルト

**128 ピット**

- 1 10YR6/1 褐灰～6/2 灰黄褐 中砂～粗砂
- 2 10YR5/3 ～5/4 にぶい黄褐 シルト混じり細砂～中砂
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐～4/4 褐 中砂～粗砂混じりシルト
- 4 10YR4/2 灰黄褐～10YR6/1 褐灰 シルト混じり中砂～粗砂
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐～4/4 褐 シルト混じり中砂～粗砂
- 6 10YR4/4 ～4/6 褐 粗砂混じりシルト

**129 ピット**

- 1 2.5Y6/1 黄灰～6/2 灰黄 シルト混じり細砂～礫
- 2 10YR5/6 黄褐～6/2 灰黄褐 シルト混じり中砂～粗砂
- 3 10YR6/2 ～5/2 灰黄褐 中砂～粗砂混じりシルト

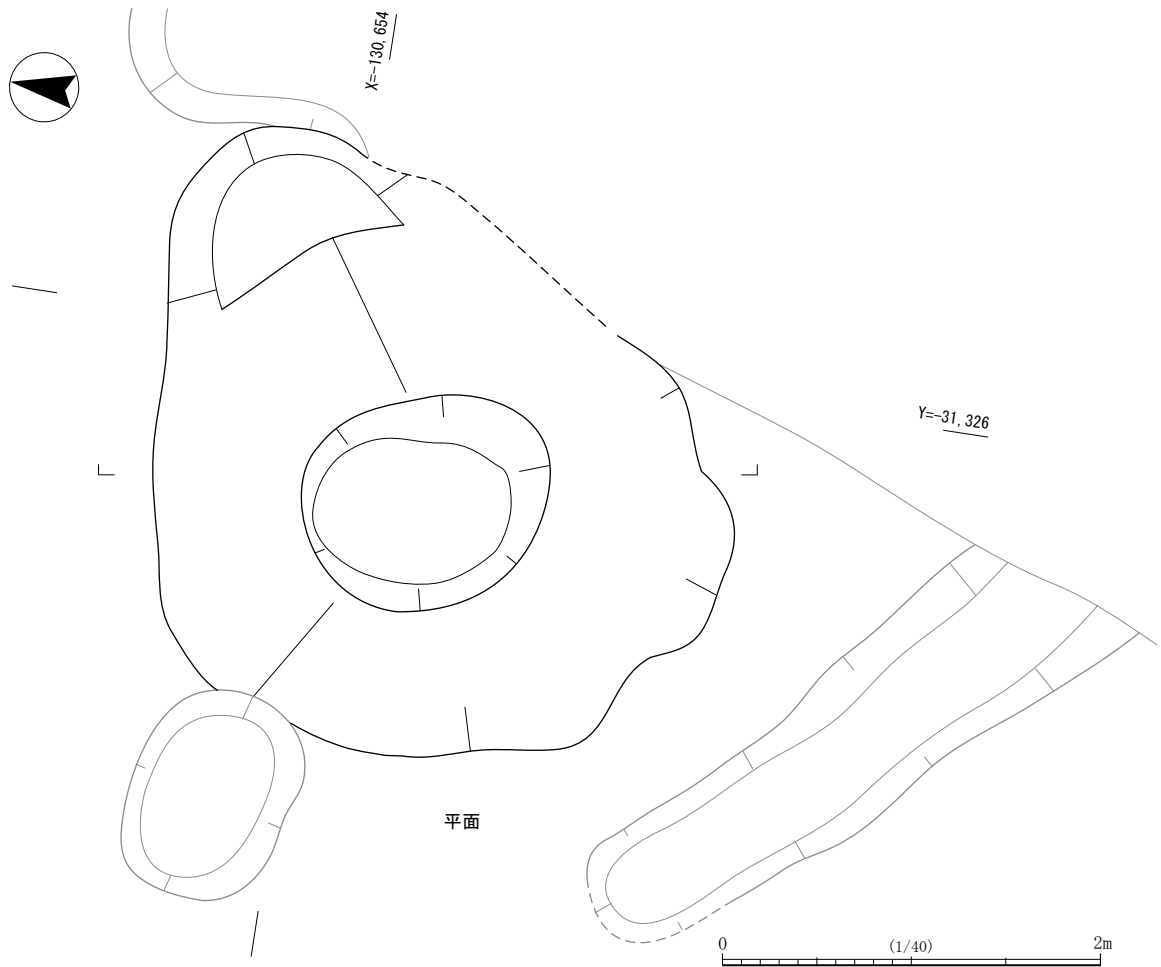
**130 ピット**

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐～10YR6/1 褐灰 中砂～粗砂混じりシルト 炭をわずかに含む
- 2 10YR5/8 黄褐～10YR5/2 灰黄褐 シルト混じり中砂～粗砂 炭をわずかに含む
- 3 10YR4/2 灰黄褐～10YR5/8 黄褐 シルト混じり中砂～粗砂
- 4 10YR6/2 灰黄褐～10YR6/8 明黄褐 細砂～中砂混じりシルト

**131 ピット**

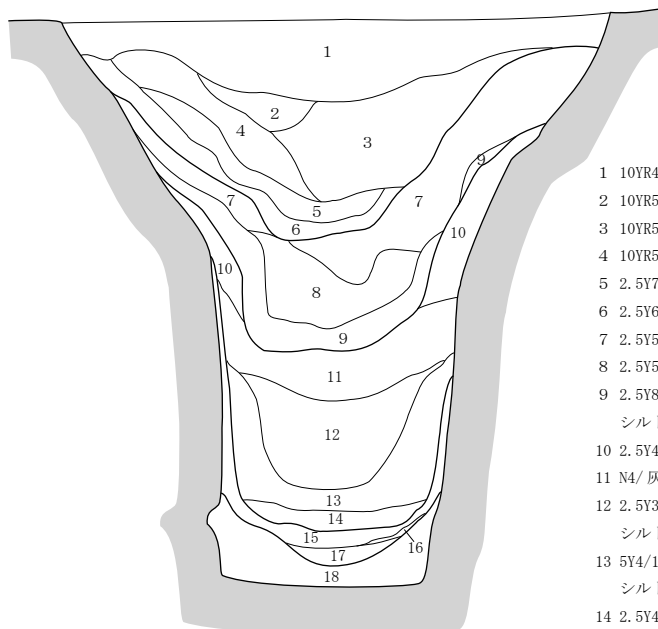
- 1 2.5Y5/1 黄灰～10YR5/8 黄褐 シルト混じり中砂～粗砂
- 2 2.5Y5/1 黄灰～5/6 黄褐 細砂～中砂混じりシルト
- 3 2.5Y5/2 暗灰黄～10YR5/8 黄褐 シルト混中砂～粗砂
- 4 10YR5/6 黄褐～5/1 褐灰 細砂～中砂混シルト
- 5 10YR6/1 褐灰～4/6 褐 中砂～粗砂混じりシルト

図41 8区 第6面掘立柱建物1



断面 (西から)

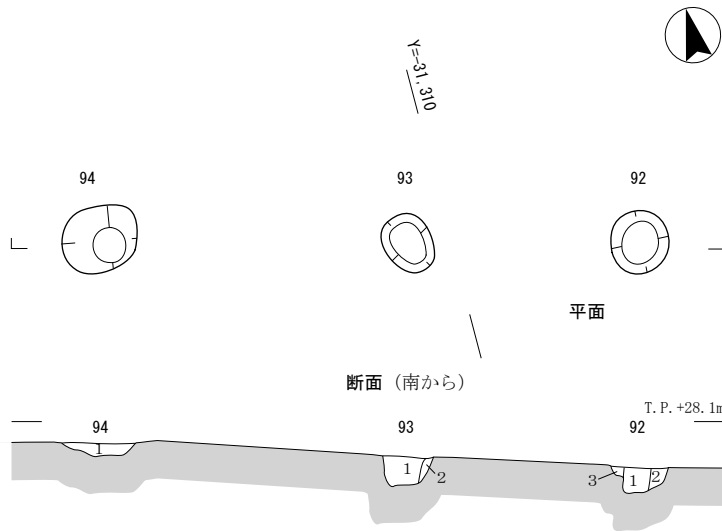
T. P. +28.8m



- 1 10YR4/3 にぶい黄褐 粗砂～礫混じりシルト
- 2 10YR5/1 褐灰 粗砂混じりシルト
- 3 10YR5/1 褐灰 粗砂～礫混じりシルト 炭化物を含む
- 4 10YR5/2 灰黄褐 粗砂～礫混じりシルト 炭化物を多く含む
- 5 2.5Y7/3 浅黄 粗砂～礫混じりシルト 炭化物を多く含む
- 6 2.5Y6/4 にぶい黄 粗砂～礫混じりシルト 炭化物を多く含む
- 7 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂～礫混じりシルト
- 8 2.5Y5/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルト
- 9 2.5Y8/4 淡黄 シルトブロックと 2.5Y5/1 黄灰  
シルト～礫のブロックが混じる
- 10 2.5Y4/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルト
- 11 N4/ 灰～ 2.5Y4/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルト
- 12 2.5Y3/1 黒褐～ N3/ 暗灰 粗砂シルトに 10GY7/1 明緑灰  
シルトブロックが混じる 炭化物を含む
- 13 5Y4/1 灰 粗砂混じりシルトに 2.5Y7/6 明黄褐  
シルトブロックが混じる
- 14 2.5Y4/1 黄灰 シルト
- 15 10YR1.7/1 黒 炭化物 (朽材か?)
- 16 7.5GY8/1 明緑灰 シルト
- 17 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト 炭化物を多く含む
- 18 10Y7/1 灰白 シルト

図42 8区 第6面249井戸

92～94ピット



94ピット

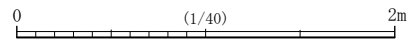
- 1 5YR3/1 黒褐 中砂～粗砂混じりシルト  
マンガン斑を含む

93ピット

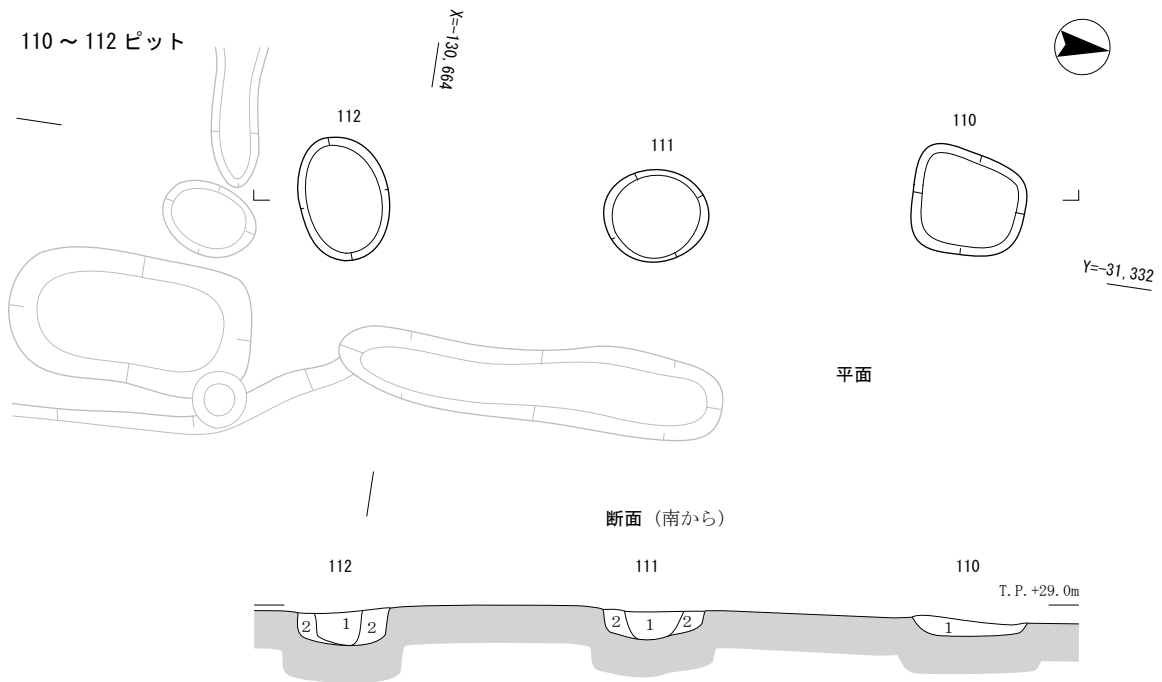
- 1 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR7/8 黄橙 細砂混じりシルト

92ピット

- 1 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
- 2 5YR3/1 黒褐 細砂～中砂混じりシルト
- 3 10YR7/8 黄橙 細砂混じりシルト



110～112ピット



112ピット

- 1 10YR5/1 褐灰～10YR4/4 褐 中砂～礫
- 2 10YR4/4～4/6 褐 シルト混じり中砂～粗砂

111ピット

- 1 10YR5/1 褐灰～10YR4/4 褐 中砂～礫
- 2 10YR4/4～4/6 褐 シルト混じり中砂～粗砂

110ピット

- 1 10YR4/4～4/6 褐～10YR5/1 褐灰  
シルト混じり中砂～粗砂

図43 8区 第6面92～94ピット・110～112ピット

**237 溝** 8区南西隅に位置する。主軸方位は北西 - 南東で、検出長 2.2 m、幅 0.7 ~ 0.9 m、深さ 16 cm。埋土は、2.5Y6/2 灰黄色細砂混じりシルトに 10YR4/6 褐色細砂混じりシルトや礫が混じり、炭化粒を含む。出土遺物なし。後述する 220 土坑と主軸方位がほぼ直交し、埋土が似ていることから、両者は 6 世紀末 ~ 7 世紀初頭に併存していたと推定できる。また、溝の東端は 263 土坑とつながっている。

**250 溝** 8区中央部北側、249 井戸のすぐ南側に位置する。主軸方位は 107 溝と同じく北西 - 南東で、検出長 3.2 m、幅 0.9 m、深さ 10 cm。埋土は、10YR4/3 にぶい黄褐色中砂 ~ 細砂混じりシルト。出土遺物なし。

**その他の溝** 地形的に低い 8 区東部で検出した 76 ~ 80 溝は、耕作に伴う溝群と考えられる。主軸方位は、いずれも北北東 - 南南西。埋土は、溝によって若干異なるが、5Y3/1 オリーブ黒色細砂 ~ 粗砂混じりシルトを主体とする。土器細片が出土した。8 区中央部南東側の 96 溝や主軸方位を異にする 97 溝、中央部で主軸方位を南北とする 114 溝や東西方向の 115 溝などの小規模な溝も耕作に伴うものと考えられる。これらの溝の中には古代の土器細片が出土したものもある。

**84 土坑** 8区北東部に位置する。79 溝と重複関係にあり、それよりも古い。平面不整円形で、直径 1.0 ~ 1.2 m、深さ 25 cm。埋土は、上層が 2.5Y5/1 黄灰色細砂混じりシルト、下層中心部は 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂混じりシルトに 2.5Y5/3 黄褐色細砂混じりシルトのブロックが混じる、下層周縁部は 2.5Y4/1 黄灰色細砂混じりシルト。7 世紀後半と考えられる須恵器甕 (図 149 - 368) などが出土した。

**95 土坑** 8区中央部東側に位置する。平面不整円形で、直径 1.1 ~ 1.3 m、深さは 7 cm と平面規模の割には浅い。埋土は、7.5YR7/8 黄橙色礫混じりシルトにわずかに 7.5YR4/4 褐色細砂混じりシルトが混じる。出土遺物なし。

**105 土坑** 8区中央部北側、249 井戸の北西部と重複関係にあり、それよりも新しい。西北西 - 東南東に長い楕円形で、長径 1.1 m、短径 0.8 m、深さ 10 cm。埋土は、10YR5/4 にぶい黄褐色細砂混じりシルトにマンガン斑が混じる。出土遺物なし。

**113 土坑** 8区中央部に位置する。平面は南北に長い隅丸長方形で、長径 1.3 m、短径 0.7 m、深さ 14 cm。埋土は、上層が 7.5YR3/3 暗褐色細砂混じりシルト、下層が 7.5YR5/1 褐灰色細砂混じりシルト。8 世紀後半の須恵器壺 (図 149 - 369) や瓦質土器などが出土した。

**134 土坑** 249 井戸南東 1.4 m に位置する。平面は隅丸方形に近い不整円形で、直径 1.1 ~ 1.3 m、深さ 25 cm。埋土は、10YR3/2 黒褐色細砂混じりシルト。6 世紀後半 ~ 7 世紀初頭の須恵器杯 (図 149 - 370) などが出土した。

**148 土坑** 8区南部に位置し、その南部は調査区外に延びる。平面は南北に長い長方形と推定され、南北 1.3 m 以上、東西 1.1 m、深さ 27 cm。埋土は、10YR4/2 灰黄褐色細砂混じりシルト。古代の土器が出土した。

**220 土坑** 8区南西部に位置する。先述の 237 溝とほぼ直交し、北東 - 南西を主軸方位とする。平面は背の高い不整台形で北東部が突出する。長径 3.7 m、短径は北東部で 1.0 ~ 1.2 m だが、南西部では 2.1 m と幅広になる。深さ 15 cm。埋土は、2.5Y6/2 灰黄色細砂混じりシルトに 10YR4/6 褐色細砂混じりシルトや 2.5Y7/4 浅黄色細砂 ~ 粗砂や礫が混じる。6 世紀後半 ~ 7 世紀初頭の須恵器杯蓋 (図 149 - 371) などが出土した。

**263 土坑** 8区南西部、**237 溝**の東端につながる。平面不整円形で、直径 1.1～1.2 m、深さ 14 cm。埋土は、2.5Y6/2 灰黄色細砂混じりシルトに 10YR5/8 黄褐色細砂混じりシルトや径 1 cm 程度の礫が混じる。底面は黒い。出土遺物なし。

**92～94 ピット** (図 43) 8区中央部やや東寄りに、西北西 - 東南東にピットが 3 個並ぶ。心々距離は、92 ピットと 93 ピットが 1.2 m、93 ピットと 94 ピットが 1.6 m。92・93 ピットでは断面観察により柱痕跡が認められた。ただし、周辺に他のピットなどは見当たらず、建物を構成しない。柵列であろうか。

出土遺物は、**94 ピット**の 8 世紀の土師器杯、**92 ピット**の古代の土器細片である。

**110～112 ピット** (図 43) 掘立柱建物 1 の東約 6 m に、主軸方位 N 8° W で 3 個のピットが並ぶ。掘立柱建物の主軸方位 N 10° W に近い。心々距離は、110 ピットと 111 ピットが 1.6 m、111 ピットと 112 ピットが 1.7 m。110 ピットでは不明瞭だが、111・112 ピットでは断面観察により柱痕跡が認められた。ピットがさらに東西に展開しないので、掘立柱建物 1 に伴う塀的な遺構であろうか。出土遺物なし。

**その他のピット** 柱根の残っていたピットはない。しかし、掘立柱建物 1 や上記のピットの他に、**101・133・169・186・193・195・204・210・218・222・225・256** ピットで柱痕跡が認められた。不明瞭だが **103・215・240・246** ピットも柱痕跡の可能性はある。平面分布をみると、掘立柱建物 1 の南西側で、**193・195・186** ピットが心々距離 2.0～2.1 m で北西 - 南東に並ぶ。249 井戸西側の **101・103** ピットも現状では 2 個だけだが心々距離 1.7 m の位置にある。8 区南西部にも柱痕跡のあるピットが散在している。これらが建物や柵列などを構成する可能性はある。

その他のピットは、埋土が単層あるいは水平方向に堆積するものであり、建物などの復元には至らなかった。

ピットからの出土遺物は、6 世紀後半から 9 世紀頃におよぶ (図 149 - 357～362・364～367)。**176** ピットからは須恵器片とともに鉄滓 (図 149 - 363) が出土した。

## 第8節 9区（C棟）・9 - 2区（防火水槽C）の遺構

9区は調査地東部に位置する。住宅C棟の建設に伴う調査である。9 - 2区は9区北西側の防火水槽C設置に伴う調査であり、とくに必要がある場合にのみ「9 - 2区」と表示する。T.P.+30.8～31.1 mの現地表面から、9区本体では最深部でT.P.+28.5 mの第6面まで、9 - 2区ではT.P.+28.4 mの第4面まで調査した。最終面での調査面積は、9区と9 - 2区を合わせて968 m<sup>2</sup>である。

9区には中央やや北側の東西方向に旧住棟の建設および解体時の攪乱があったが、北部と南部で遺構・遺物を調査できた。9 - 2区も北部が大きく攪乱を受けており、調査できたのは主に南部であった。

**第1面**は昭和14（1939）年爆発関連層の上面である。土塁や建物の基礎、枕木土坑、舗装道路を検出した。

**第2面**は昭和14年爆発関連層を除去した面。土塁基礎、枕木土坑、基礎石垣、土坑などを検出した。

**第3面**は中世～近世の面。溝群とピットを検出した。

**第4面**は古代の面で、9区中央部以西では地山層上面である。段、溝、土坑、ピットを検出した。

**第5面**は9区東部の古代の面。土坑、ピット、落ち込みを検出した。

**第6面**は9区東部の地山層上面。古代の掘立柱建物、溝、土坑、ピット、落ち込みを検出した。

### 層序（図44 写真図版34 - 118）

9区では、第I層が比較的良好に残る北壁の断面を掲げる。ただし、北壁の東部は第1面の55土塁基礎に、西部は56土塁基礎によりそれぞれ破壊されているので、堆積状況が明らかなのは中央部のみである。

**第0層**（1～6）は、基本層序の第0層に該当する。旧住棟建設に伴う盛土層を主とする。工事の過程であろうか盛土層（6）の上面が土壌化した層（5）もみられる。

**第1層**は、基本層序の第I層〔昭和14（1939）年爆発関連層〕に該当し、断面図の西半では爆発時形成層（12）と爆発後整地層（8）に分離できる。

**第2層**（15～40）は、基本層序の第II層に該当する。火薬庫造成に伴う盛土層を主体とするが、それ以前の旧作土層（32・35・39）なども含む。

**第3層**（41～45）は、基本層序の第III層に該当する。この層を除去した第4面調査段階に9区中央部以西では地山層上面に達した。

**第4層**（46）は基本層序の第V層、**第5層**（47）は基本層序の第VI層にそれぞれ該当する。今回の調査地が、基本的に南西が高く北東が低いことにより、第4層・第5層は9区では東部にのみ分布し、第6面が地山層（第VII層）上面となる。

### 第1面（図45 写真図版26 - 87・88、35 - 119） 昭和14年以後

禁野火薬庫に関する遺構面のうち、昭和14（1939）年爆発関連層（第I層）の上面である。ただし、9区ではそのほとんどが土塁部分に該当し、第I層の分布範囲は中央部北側の狭い範囲に限られる。その範囲では黒色を呈する第I層が比較的明瞭に確認でき、面の高さはT.P.+29.8～29.9 mである。遺構として、土塁基礎、枕木土坑、舗装道路、さらに9 - 2区で建物基礎を検出した。



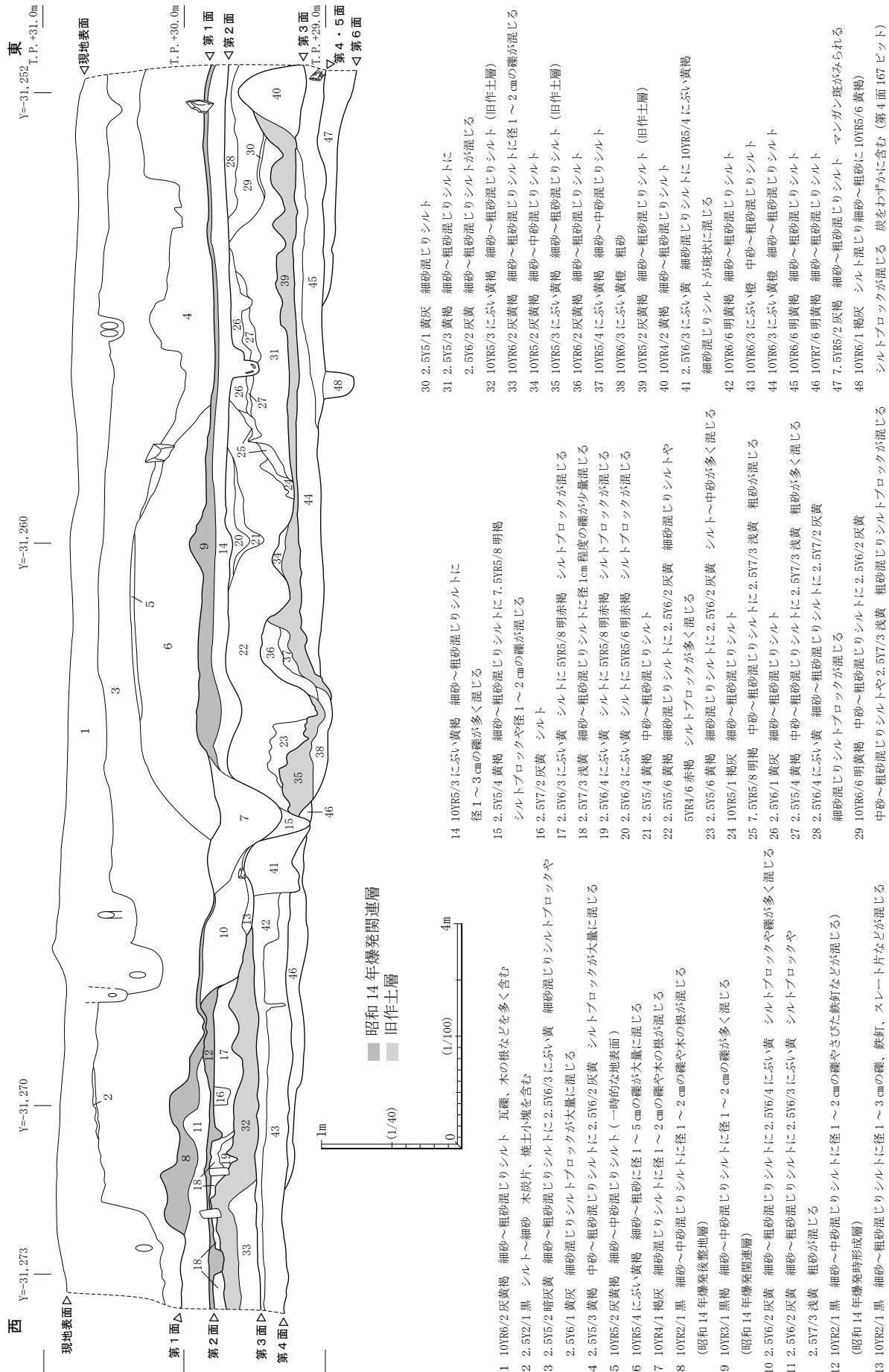


図 44 9区 北壁断面

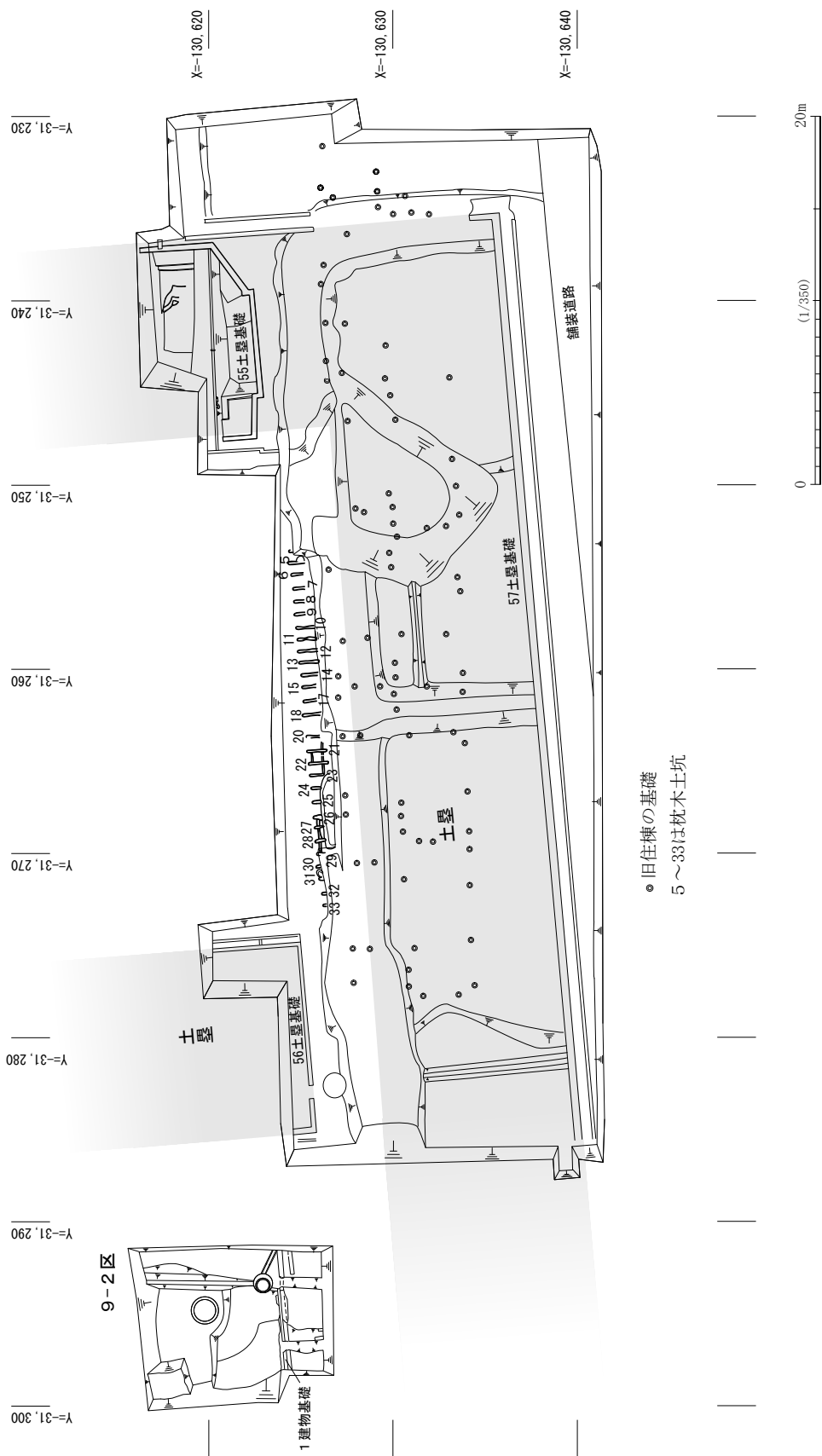


図45 9区 第1面

**55～57 土塁基礎** 昭和10（1935）年に築かれた土塁の基礎である。昭和14年の爆発後は、昭和17（1942）年の「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠新築増築概要図」では第25号倉庫、昭和20（1945）年の「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠構内図」では第13号倉庫と改称された建物を囲む土塁としてそれ以前と同様に機能していた。それぞれの部分については、第2面で記述する。

**5～33 枕木土坑（軽便軌道）** 9区北辺、55基礎と56基礎の南辺で東西に延びる。調査時には第2面で検出したが、昭和14年の爆発以後の状態についてはここで述べる。倉庫（火工場）南側に敷設された軽便軌道は、爆発までは複線であったが、昭和17（1942）年の「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠新築増築概要図」によると爆発後は単線となった。枕木自体が残っていた箇所は少ないが、土坑の形状が枕木と相似形であることから、いずれにもコンクリート製枕木が設置されていたと推測できる。土坑の形状は、後述する11区の枕木土坑に比べ概してシャープである。枕木土坑間には、線路の圧痕と考えられる筋状の浅い落ち込みが検出できた箇所がある。この幅は約50cmであり、軌道幅と考えられる。枕木土坑周辺の一部では、道床の可能性もある砂礫が混じる変色部分も見られた。

**舗装道路** 9区南辺、57基礎（土塁の南辺）の南、約1.9m幅でコンクリートが打設されていない部分のさらに南に、東西方向の舗装道路（コンクリート土間）がある。昭和11（1936）年授受の舗装道路で、昭和14年の爆発後も機能していた。

**9-2区1建物基礎** 調査区が狭いために一部のみの検出にとどまったが、昭和16（1941）年に新築された第27号倉庫の南辺に該当する。昭和20（1945）年には第15号倉庫と改称されている。なお、この建物の前身は、昭和10（1935）年授受、昭和14（1939）年の爆発時まで存在した7号火工場である。

## 第2面（図46 写真図版27-89・90、35-120） 昭和14年以前

昭和14年爆発関連層（第I層）を除去した面である。面の高さは、一部に低い部分もあるが、おおむねT.P.+29.7mである。遺構として、土塁基礎、枕木土坑、基礎石垣、土坑などを調査した。「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」などによると、昭和14年の爆発の前後に同様な位置に諸施設が存在したことがわかる。なお、第I層は9区の中央部北側にのみ分布するので、それ以外の範囲については第1面と同様である。

**55～57 土塁基礎** 昭和10（1935）年の「大阪兵器支廠禁野弾薬庫要図」に描かれた8号火工場（12区第2面1建物）を囲む土塁の基礎である。

**55 土塁基礎**（図47 写真図版28-91・92）は、9区北東部に位置する。8号火工場の東側の土塁のコンクリート基礎である。この基礎の下部には石垣状の石積み（写真図版28-93）が確認できた。石材は、石の隙間に詰められた小ぶりで黒っぽい石1点を除き花崗岩である。当該部分に禁野火薬庫以前に存在した溜池上に重量物を構築するため、その基礎として設置されたものと考えられる。

55土塁基礎の東西外側にはコンクリート製側溝が設けられている。さらに、南西角外側にはコンクリート製枡がある。枡からは南側への排水はなく、55土塁基礎西側に穿たれた孔から、痕跡的に検出できた土塁盛土内に埋設された土管を通して、地形的に低い北方へ排水していたと考えられる。

**56 土塁基礎**（図48 写真図版29-96）は、9区北西部に位置する。8号火工場とその西側に位置する7号火工場との間にある土塁の基礎である。

56土塁基礎にも東西外側にコンクリート製側溝がある。東側の側溝では途中でコンクリートにより

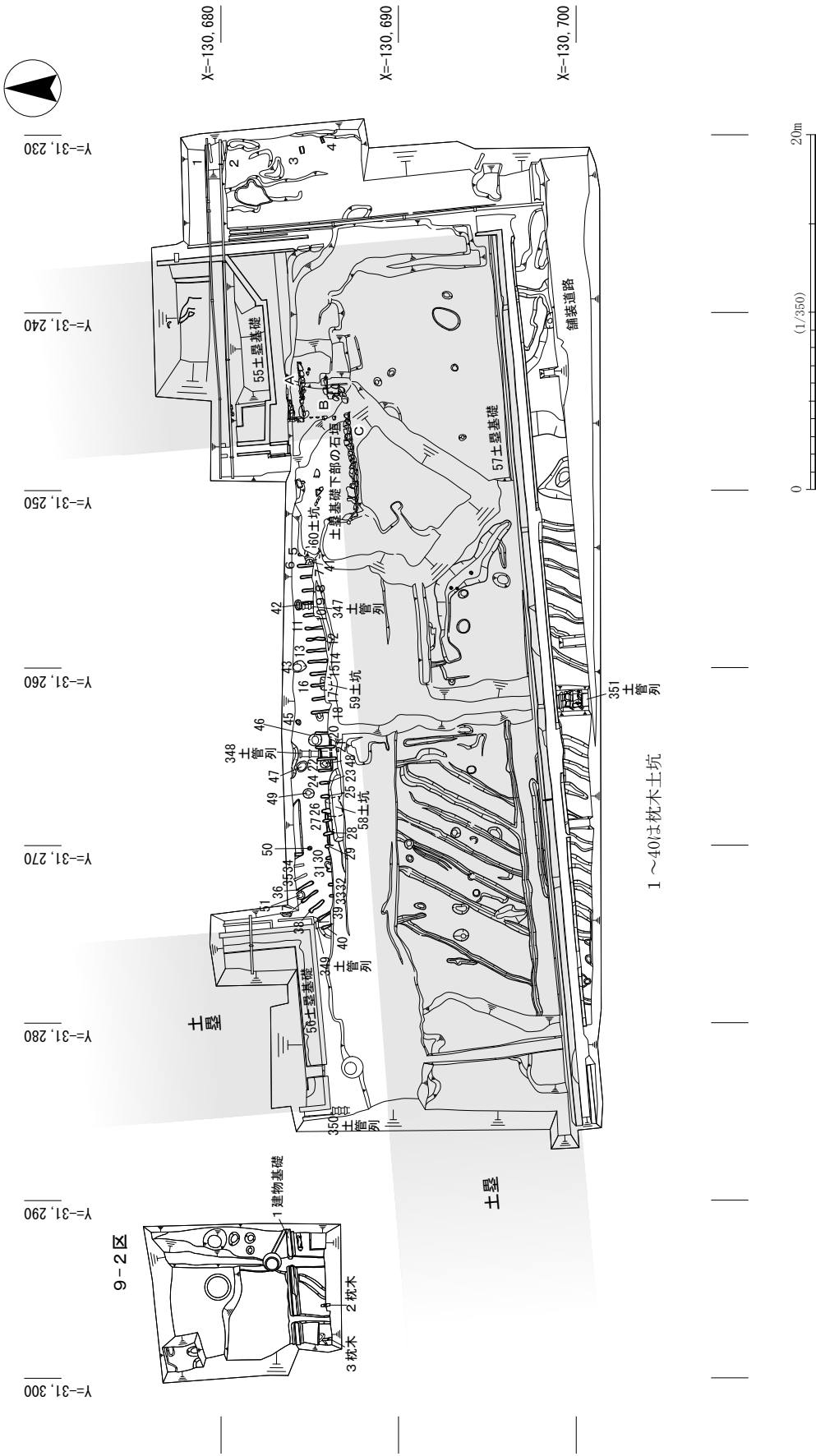
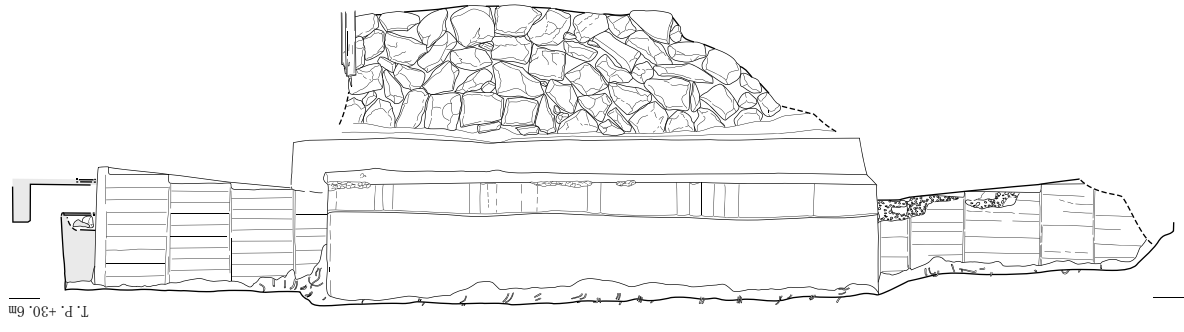
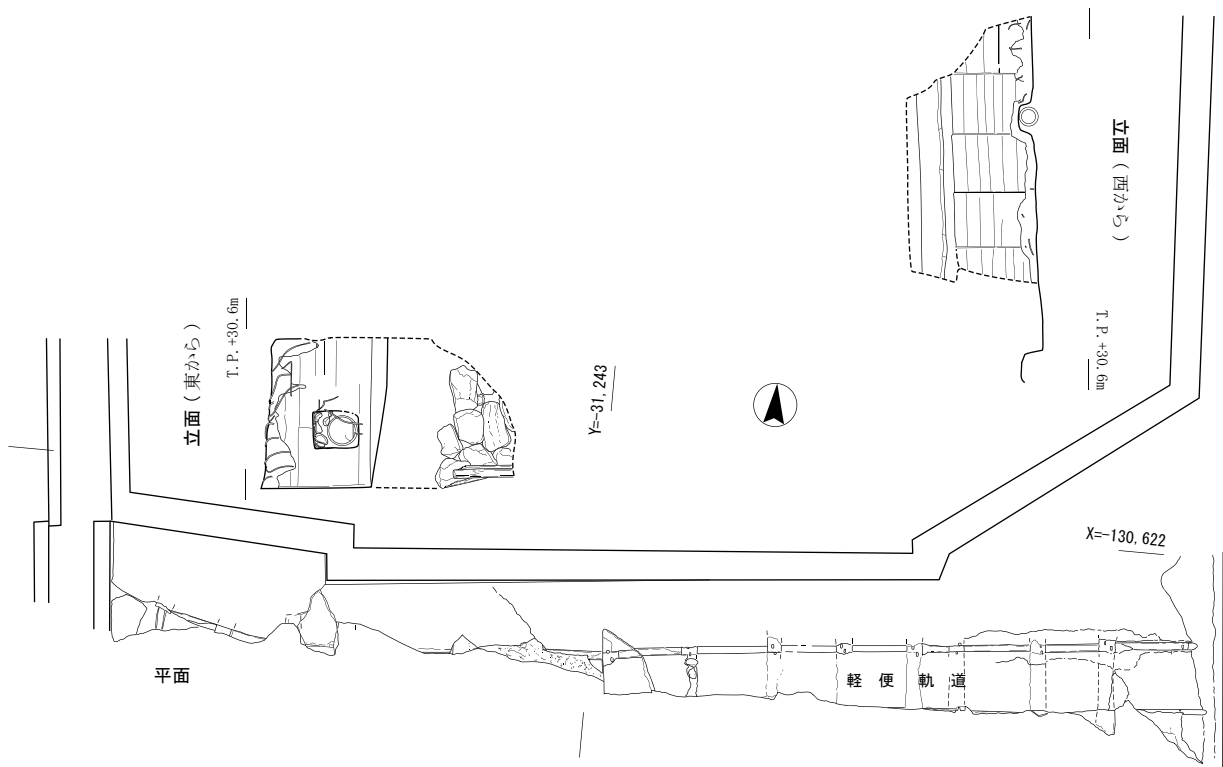


図 46 9区 第2面



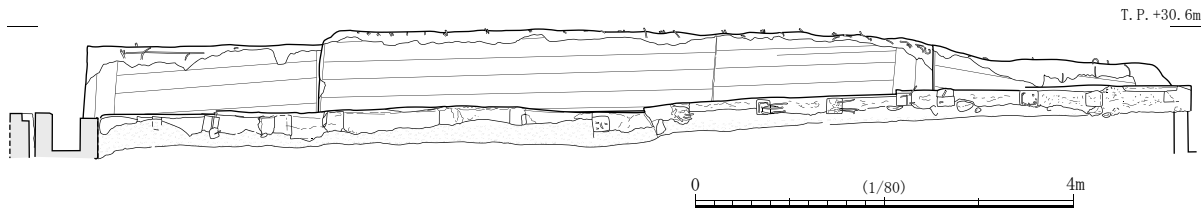
立面 (北から)



平面

軽便軌道

立面 (南から)



T.P. +30.6m

0 (1/80) 4m

図47 9区 第2面55土塁基礎・軽便軌道

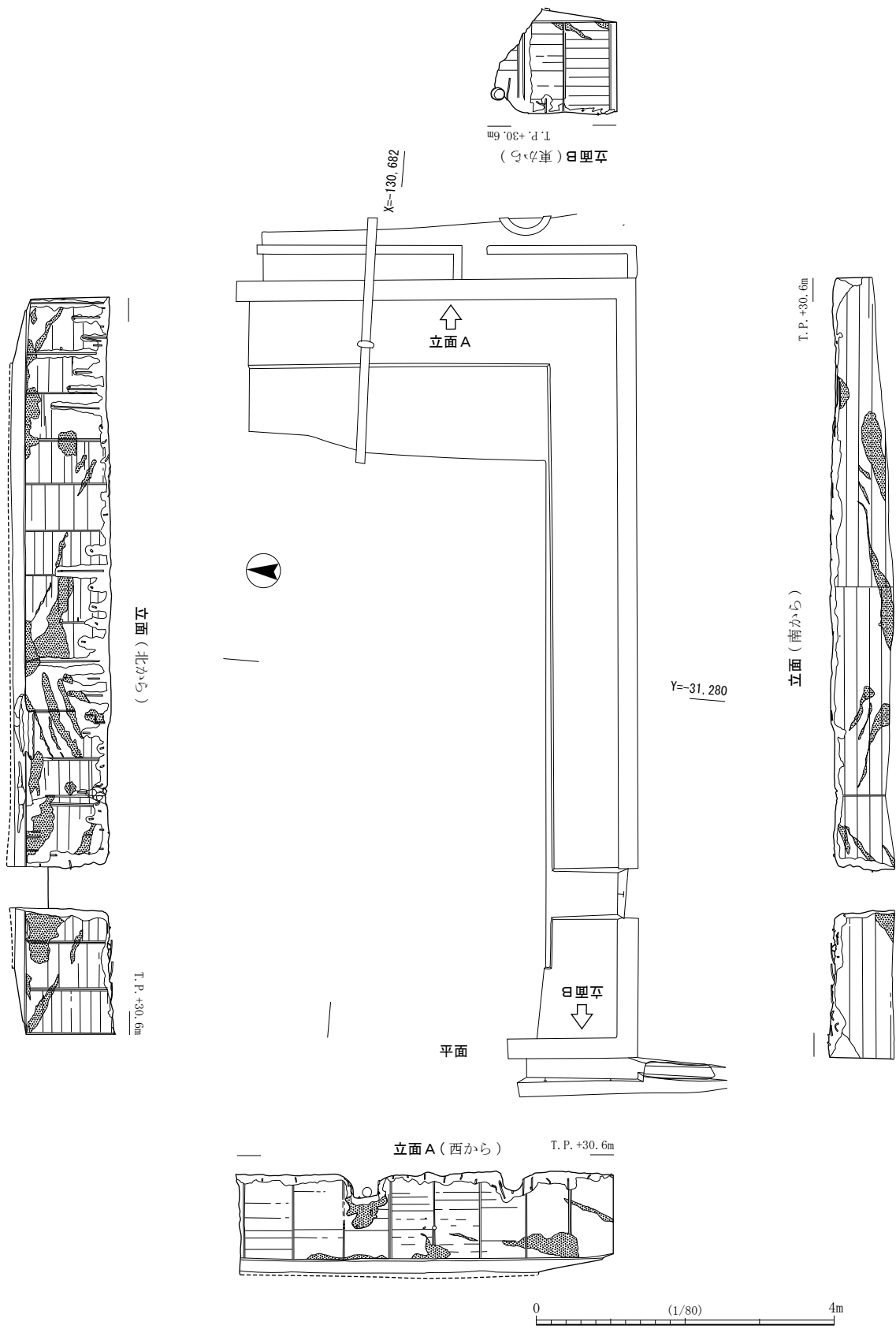


図48 9区 第2面56土塁基礎

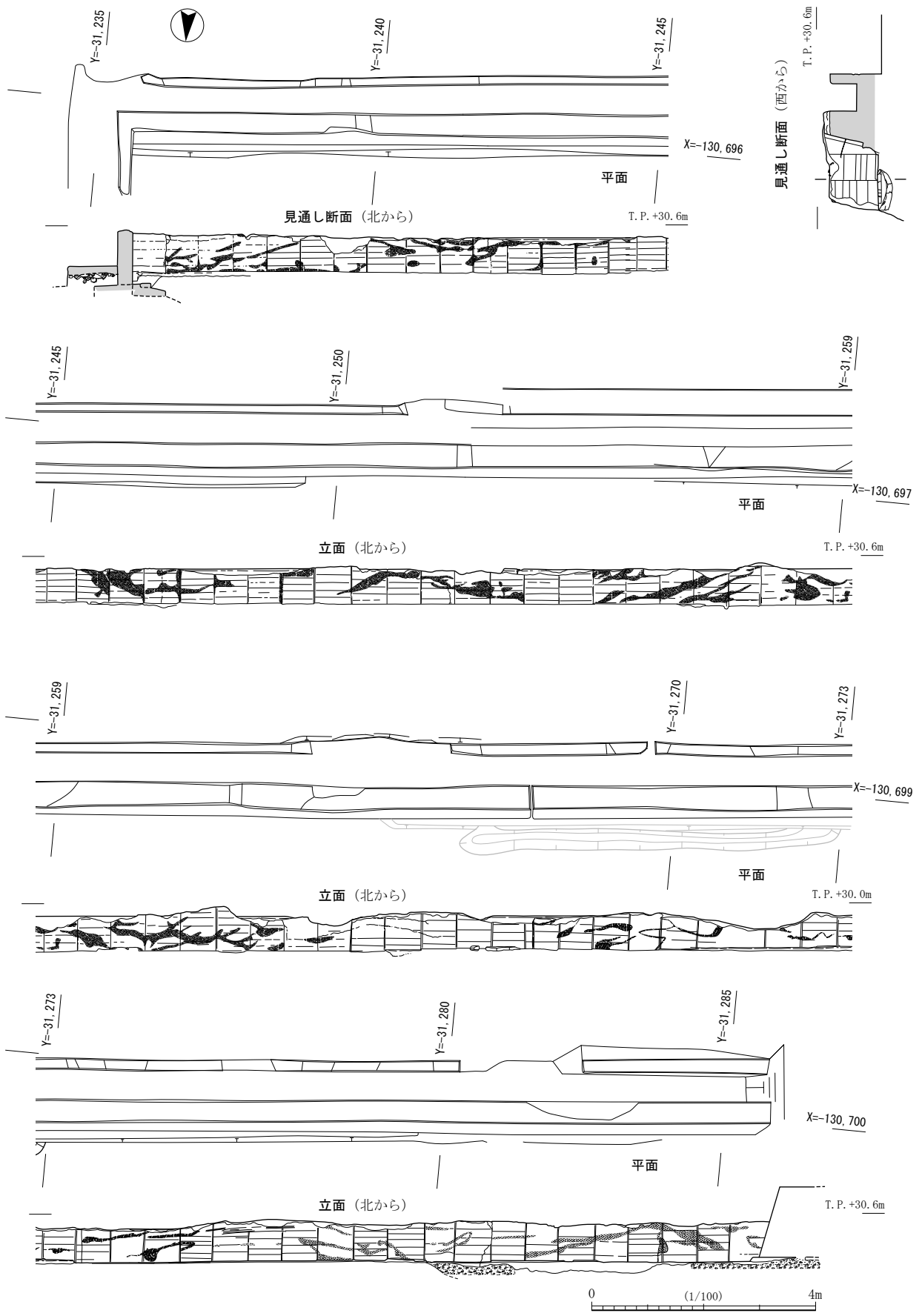


図49 9区 第2面57土塁基礎

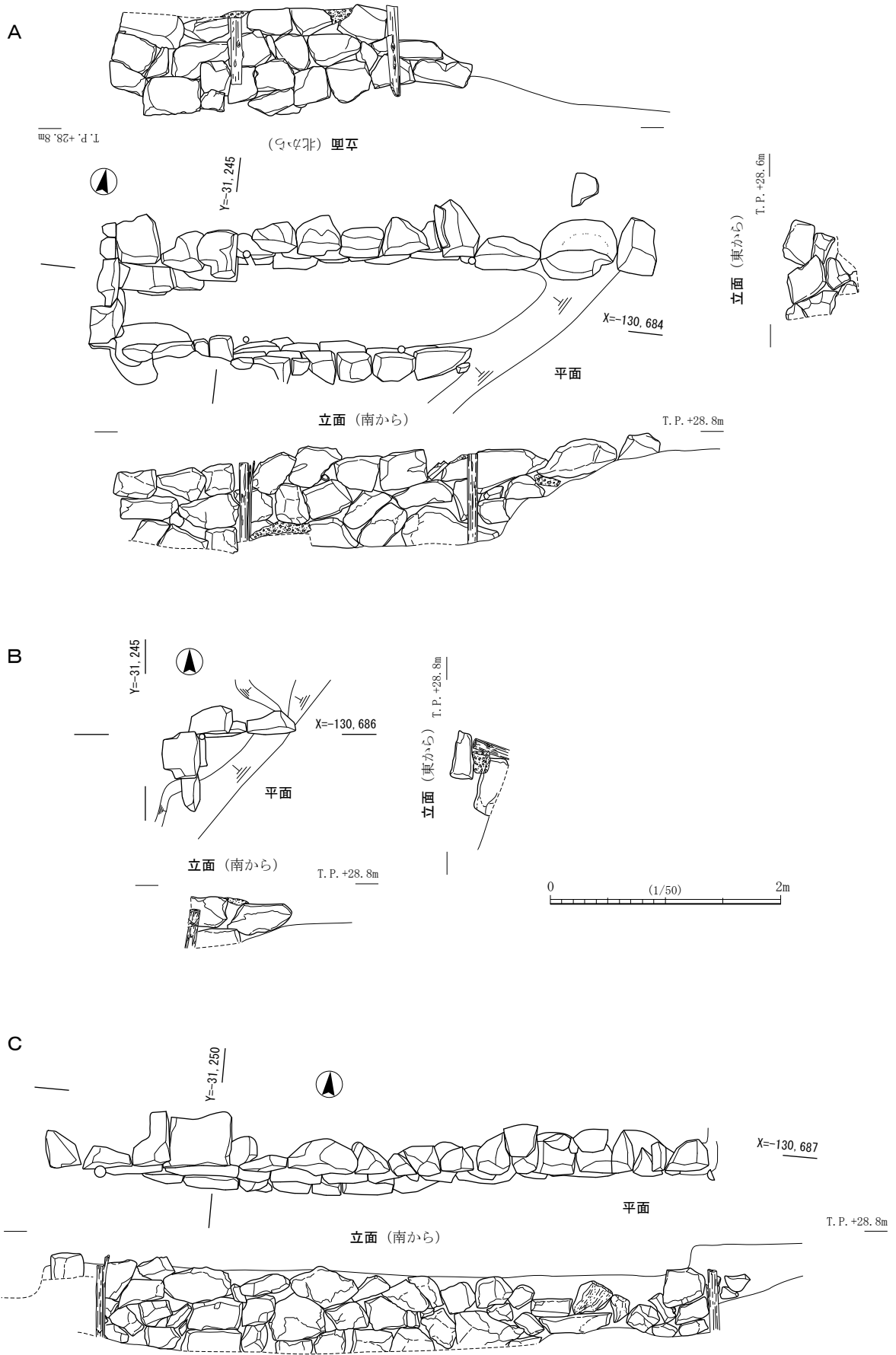


図50 9区 第2面土塁基礎下部の石垣



蓋がされているが、その部分の土塁基礎には水抜き用と考えられる孔が開いている。一方、蓋よりも南では側溝に土管が接続し、西側の側溝でも南側に土管が接続している。これらは、55 土塁基礎の場合とは異なり、南への排水を意図したものと推定できる。

**57 土塁基礎** (図 49 写真図版 29 - 97) は、9 区南部で東西に延びる。8 号火工場と 7 号火工場の南側の土塁南辺の基礎となるコンクリート擁壁とその南側に付随するコンクリート製側溝である。擁壁の内側 (土塁の土を受けるこの擁壁の北面) は直立ではなく南側にやや傾斜し、擁壁の南側 (土塁の外側) には側溝が一体となって成形されている。この 57 土塁基礎は 9 区南東部で直角に北へ曲がり、その北側は攪乱により遺存しない部分もあるが、55 土塁基礎の南東角に連続する。

**土塁基礎下部の石垣** (図 50 写真図版 28 - 94) 55 土塁基礎の下部と同様の石垣状の石積みが、その南西側のかつて溜池であった部分にもみられる。位置的に、57 土塁基礎を南辺とする土塁の北辺の基礎下部にあたる。用いられている石は全て花崗岩である。軟弱地盤上に重量物を上部に構築するための造作と考えられる。北東から順に A・B・C として図 50 に掲げる。位置は、第 2 面 (図 46) を参照されたい。

**9 - 2 区 1 建物基礎** (図 51) 昭和 10 (1935) 年授受の 7 号火工場の南辺と考えられる。建物の内側に当たるコンクリート基礎の北側では碎石層が確認できた。

**1 ~ 4 枕木土坑 (軽便軌道)** 9 区東端で南北方向に並ぶ。1・2 はコンクリート製枕木で、3・4 は痕跡的な枕木土坑である。土塁の東側を南北に走る軽便軌道に該当する。

**5 ~ 40 枕木土坑 (軽便軌道)** 9 区北辺に位置する。昭和 10 (1935) 年の「大阪兵器支廠禁野弾薬庫要図」や昭和 13 (1938) 年の「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」では 1 条に描かれているが、調査では 5 ~ 33 枕木土坑によって構成される東西方向の軌道と、34 ~ 40 枕木土坑からなる北方に分岐した複線部分の 2 条を検出した。この事実と後述する 12 区第 2 面の調査成果から、図では単線であっても実際には複線である軽便軌道が存在することが判明した。35 枕木土坑には枕木 (図 144 - 230) が残っていた。

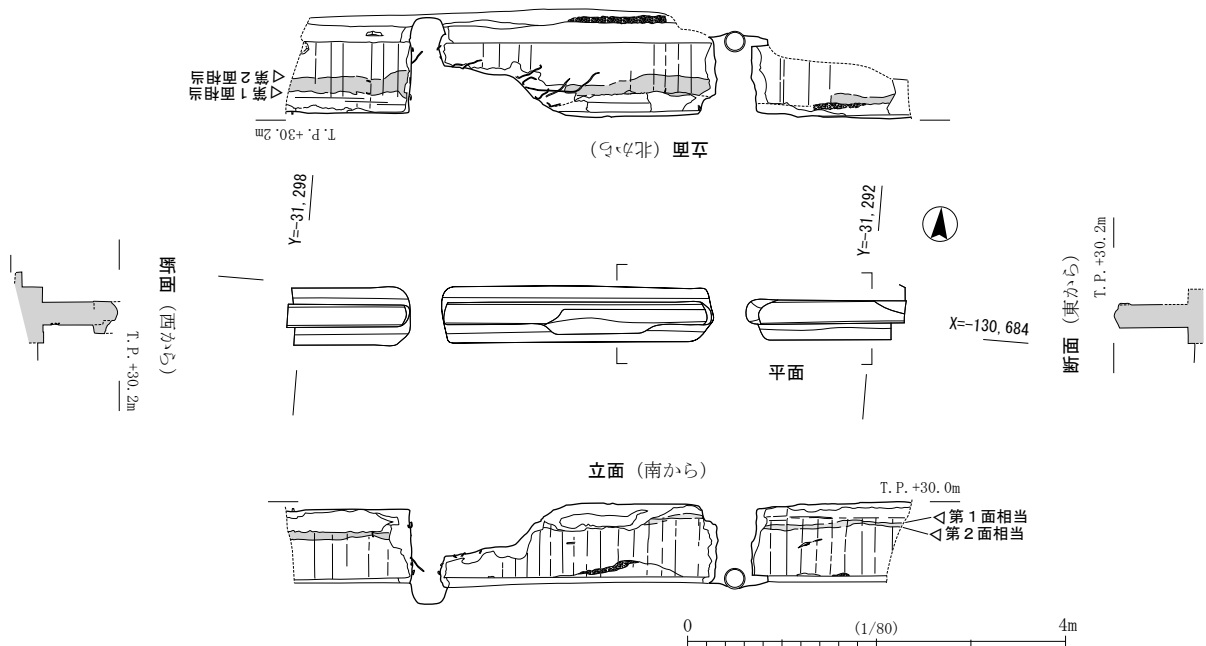


図51 9-2区 第2面1 建物基礎

14 枕木土坑から砲弾関連品（図 140 - 186）、20 枕木土坑からワッシャー（図 136 - 97）や木ネジ（図 137 - 102）が出土した。

この軽便軌道の東の延長にあたる 55 土塁基礎の南側では、コンクリート製枕木が土間コンクリートに埋め込まれていた（図 47 写真図版 29 - 95）。8 区と同様に、この部分には土塁に穿たれたトンネルが存在したと考えられる。コンクリート基礎の平面形がハの字状を呈することも 8 区第 1 面 19 土塁と同様である。

**9-2 区 2・3 枕木** コンクリート製枕木 2 本のみを検出だが、昭和 12（1937）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」記載の、7 号火工場南側の軽便軌道のうち北側に分岐して複線化された部分に該当しよう。なお、昭和 14 年の爆発後はこの軽便軌道は単線となっているので、第 1 面段階では複線部分は存在しない。

**舗装道路** 9 区南辺に位置する。『分廠歴史』などにみられる昭和 10（1935）年 9 月 16 日起工、昭和 11（1936）年 7 月 31 日授受の「舗装道路 一式 八〇〇米」に該当する。道路部分には、舗装以前の遅くとも大正 13（1924）年までには軽便軌道が敷設されている。さらにその下層に、南北方向に 351 土管列が埋設されている。土管（図 130 - 31）の口径は 80 cm あり、今回の調査で出土した土管では最も太い。

**58～60 土坑** 9 区北部において第 3 面で検出したものだが、その様態と出土遺物から火薬庫に伴うものと考えられる。この範囲は明治 43（1910）年に土地買収されているが、昭和 9（1934）年までは顕著な土地改変はみられない。心々距離は 58 土坑と 59 土坑が 7.0 m、59 土坑と 60 土坑が 7.2 m とほぼ等間隔に並び、昭和 10（1935）年には敷設されていた軽便軌道の下層に該当することから、その敷設直前に掘られたものと推定できる。3 基とも平面隅丸方形である。

**58 土坑**は、東西 1.1 m、南北 0.9 m、深さ 1.3 m。埋土は、2.5Y5/1 黄灰色シルト～中砂と 2.5Y7/2 灰黄色シルトの互層で、下層ほど圧密を受け土が締まっている。陶器、鉄釘、瓦などが出土した。

**59 土坑**は、東西 0.7 m、南北 0.6 m、深さ 1.0 m 以上。埋土の主体は 2.5Y7/2 灰黄色シルトに 2.5Y5/1 黄灰色シルト～中砂が混じるもので、下層 20 cm 程は 10GY6/1 青灰色シルト。土管、瓦、鉄釘、木製品などが出土した。

**60 土坑**は、東西 0.8 m、南北 0.8 m、深さ 1.1 m。埋土は、上層 30 cm 程が 2.5Y4/1 黄灰色シルト～中砂のブロックと 10YR6/6 明黄褐色中砂～粗砂混じりシルトのブロックの互層で、下層 80 cm 程は N5/ 灰色細砂混じりとシルトと 10YR6/6 明黄褐色中砂～粗砂混じりシルトのブロックの互層に礫が混じる。瓦などが出土した。

**給排水施設** 土塁基礎に付属する側溝以外にも、土管や鉄管などの給排水施設が存在する。

9 区東側から、昭和 11（1936）年の栗本鐵工所製の銘がある鉄管が出土した。上水道管の可能性もある。

東西方向の軽便軌道（5～33 枕木土坑）の下層で痕跡的に検出された南北方向の 347～350 土管列は、接続方法からみて、12 区の南縁で 1 建物として検出された昭和 10（1935）年授受の 8 号火工場の南辺から 9 区に存在していた土塁の北辺に向けて排水されていた可能性が高い。各土管列の土管を、図 129 - 27～130 - 30 に掲げる。

**畝溝群** 9 区では第 1 層 [昭和 14（1939）年爆発関連層] は、中央部北側にのみ残り、大方を占める

土塁部分には現存しない。そのため結果的に、土塁部分では第2面として禁野火薬庫造成以前の旧作土層上面を記録した。その上面には、幅0.3～0.5 m、深さ0.1～0.3 mで、北東-南西を主軸方位とする畝溝群がみられる。

昭和8(1933)年の「大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図」に書き込まれた「秘 土地買収要図」によると、9区部分は明治43(1910)年12月に買収されており、この景観はその頃のものと考えられる。

### 第3面(図52 写真図版30-98、35-121) 中世～近世

禁野火薬庫に伴う盛土層と火薬庫以前の旧作土層など(第Ⅱ層)を除去し検出した面である。面の高さはT.P.+29.1～29.5 mで、9区中央部南側が高い。遺構として、溝群とピットを検出した。

**溝群** 9区中央部以西に分布し、埋土はいずれも第2層の旧作土層と同じ10YR5/3にぶい黄褐色細砂～粗砂混じりシルトで、主軸方位も第2面の畝溝と同様に北東-南西である。出土遺物なし。耕作に伴う溝群であろう。

**ピット** 9区南西側に散在する。平面は円形が多く、直径19～43 cm、深さは3～23 cmで、埋土はほとんどが単層である。62・69・79ピットから土器細片が出土したが、時期が明確なものではない。

### 第4面(図53 写真図版30-99) 古代

第Ⅲ層を除去し検出した第Ⅴ層上面である。面の高さはT.P.+29.0～29.4 mで、第3面と同様に9区中央部南側が高い。9区中央部以西では、第Ⅲ層を除去した段階で地山層(第Ⅶ層)上面に達した。遺構として、溝状落ち込み、段、溝、土坑、ピットを検出した。

9-2区では、第2面調査後一度埋め戻し、その後横矢板を設置しつつ機械掘削を行い、旧作土層を除去して検出した地山層の上面が第4面である。面の高さは、およそT.P.+28.4 m。溝とピットを検出した。

**90 溝状落ち込み** 9区中央部東側に位置する。落ち込みの北部は攪乱されている。屈曲はあるが、北北東-南南西が主軸方位である。検出長約13 m、幅2.6～4.2 m、深さ32 cm。円面硯(図150-390)や9世紀後半の緑釉陶器皿(図150-391)などが出土した。

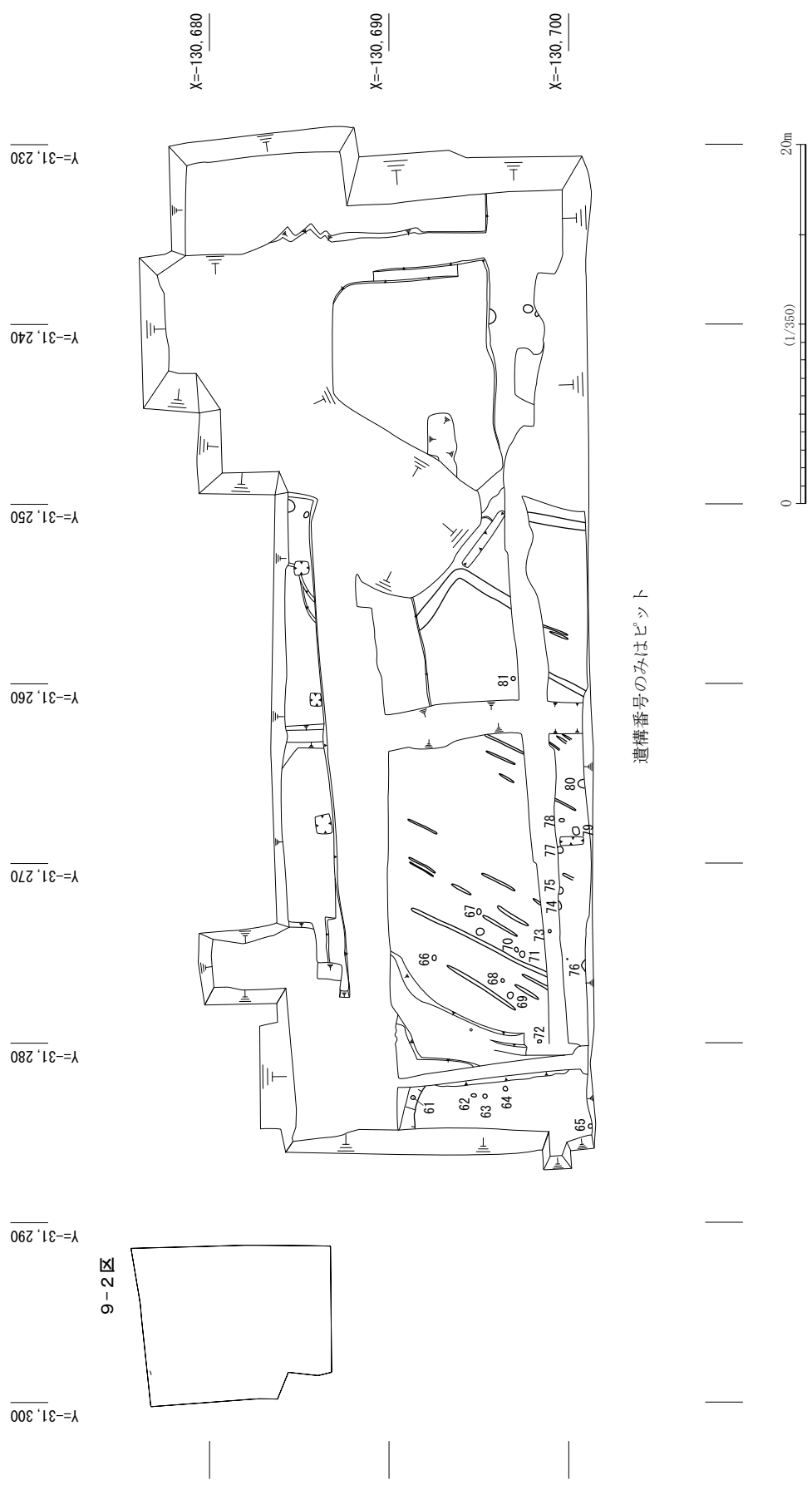
**段** 9区南西部に位置する。北東側と北西側に縁のある高さ10 cmほどの段である。

**溝** 段の主に北東側には、段の縁に並行して北西-南東を主軸方位とする125～133・142・171～175溝が存在する。また、それらの溝とほぼ方位を同じくするものとして、9区北東部に82～87溝がある。また、9区中央部には、北東-南西を主軸方位とする105・109・111溝がある。埋土はいずれも、2.5Y4/2 暗灰黄色～2.5Y5/4 黄褐色細砂～粗砂混じりシルトとなっており似ている。87・105・109・111溝から土器細片が出土した。いずれも耕作に伴う溝であろう。

**9-2区5溝** 主軸方位は北北東-南南西で、検出長3.2 m、幅1.5 m、深さ14 cm。埋土は、2.5Y5/1 黄褐色細砂混じりシルト。出土遺物なし。

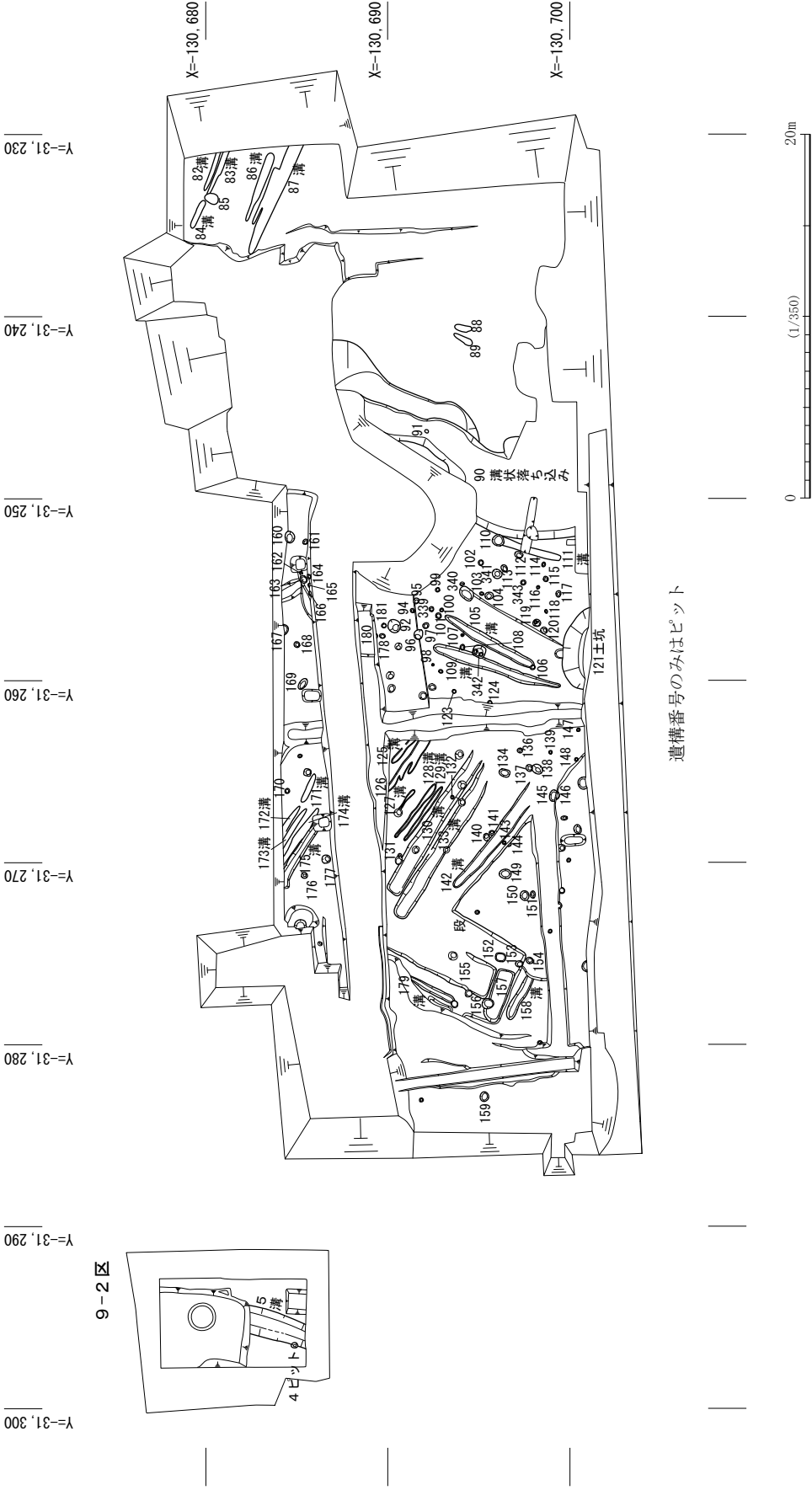
**121 土坑(図54)** 9区中央部南辺に位置し、その南部は調査区外に延びる。検出部分から推定すると、平面円形で、直径4.6 m以上、深さ1.0 m以上となる。埋土は、図54のように細かく分かれる。7世紀後半の須恵器甕や9世紀の灰釉陶器碗などが出土した。

**ピット** 9区中央部などに多くのピットが存在する。しかし、柱根や柱痕跡の認められるピットはなく、110・140・150・153・156・168・170ピットで埋土が複数に分層できた以外はいずれも単層



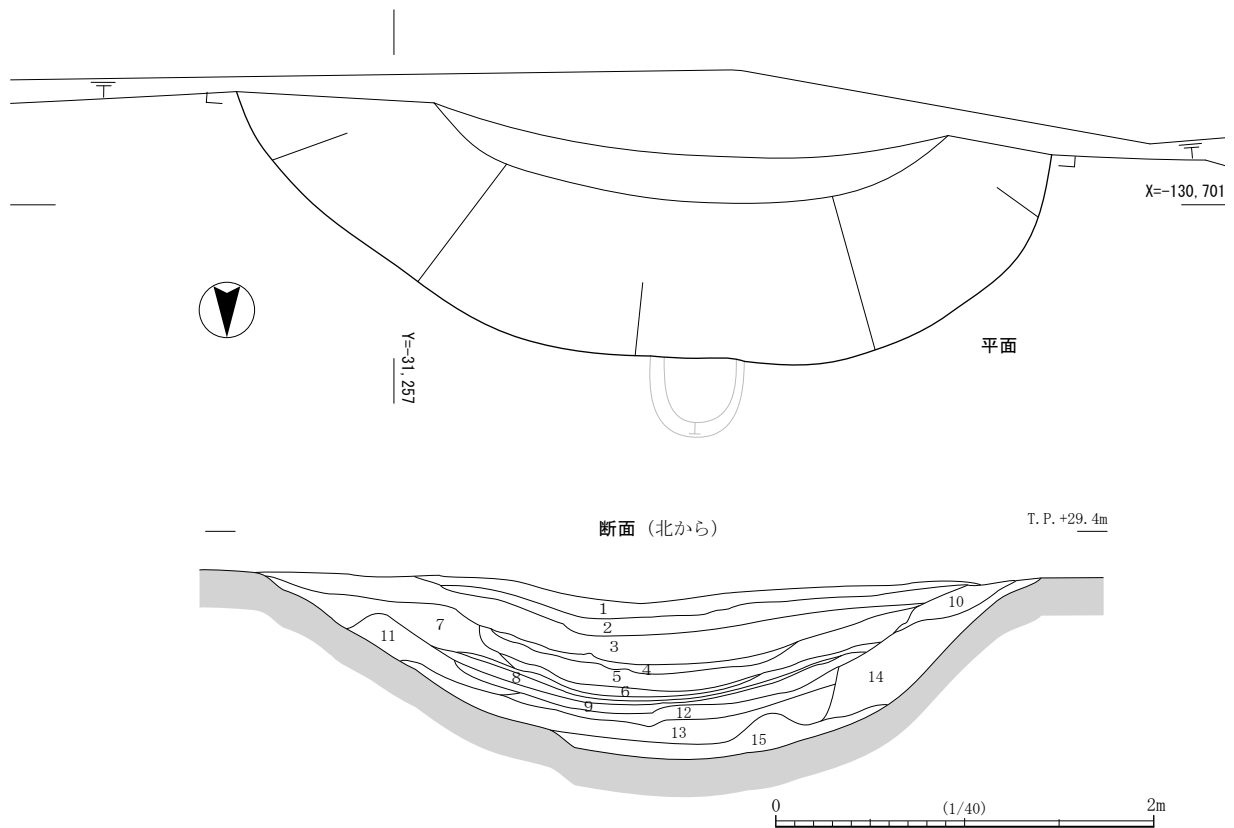
遺構番号のみはピット

図 52 9 区 第 3 面



遺構番号のみはピット

図 53 9区 第4面



- |  |   |
|--|---|
| 1 N6/ 灰 細砂～中砂混じりシルト マンガン斑あり              | 10 5Y6/1 灰 細砂混じりシルト   |
| 2 N6/ 灰 細砂混じりシルト                         | 11 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト混じり細砂～粗砂に 10YR5/6 黄褐 細砂～粗砂が混じる              |
| 3 2.5Y6/1 黄灰 細砂に 10YR5/6 黄褐 粗砂混じりシルトが混じる | 12 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂～粗砂混じりシルト                                    |
| 4 10YR5/1 褐灰 細砂混じりシルト                    | 13 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 細砂混じりシルト                                    |
| 5 10YR4/1 褐灰 細砂混じりシルト                    | 14 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト混じり細砂に 2.5Y6/8 明黄褐 シルト混じり細砂が混じる             |
| 6 10YR6/1 褐灰 シルト                         | 15 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混じりシルトに 10YR6/8 明黄褐～ 2.5Y7/1 灰白 細砂混じりシルトが混じる |
| 7 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト                        |   |
| 8 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂～粗砂混じりシルト                |   |
| 9 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト                        |   |

図54 9区 第4面121土坑

である。掘立柱建物などを復元するには至らなかった。

出土遺物には、104ピットの8世紀中頃の須恵器杯蓋（図150-387）、110ピットの土錘（図150-388）、342ピットの8世紀末の須恵器杯（図150-389）、123・140・181ピットの製塩土器細片などの他、複数のピットからの古代の土器細片がある。

**9-2区4ピット** 平面楕円形で、南北35cm、東西28cm、深さ13cm。埋土は、2.5Y4/3オリーブ褐色細砂混じりシルト。出土遺物なし。

#### 第5面（図55 写真図版30-100）古代

9区では東部にのみ分布する第V層を除去し検出した面である。その範囲の面の高さは、T.P.+28.8～28.9m。遺構として、土坑、ピット、落ち込みを検出した。

**191土坑** 9区南東部に位置する。平面は南北方向に長い長楕円形で、長径1.6m、短径0.6m、深さ8cm。埋土は、10YR4/1褐灰色細砂～粗砂混じりシルト。8世紀中頃の土師器皿（図152-421）などが出土した。

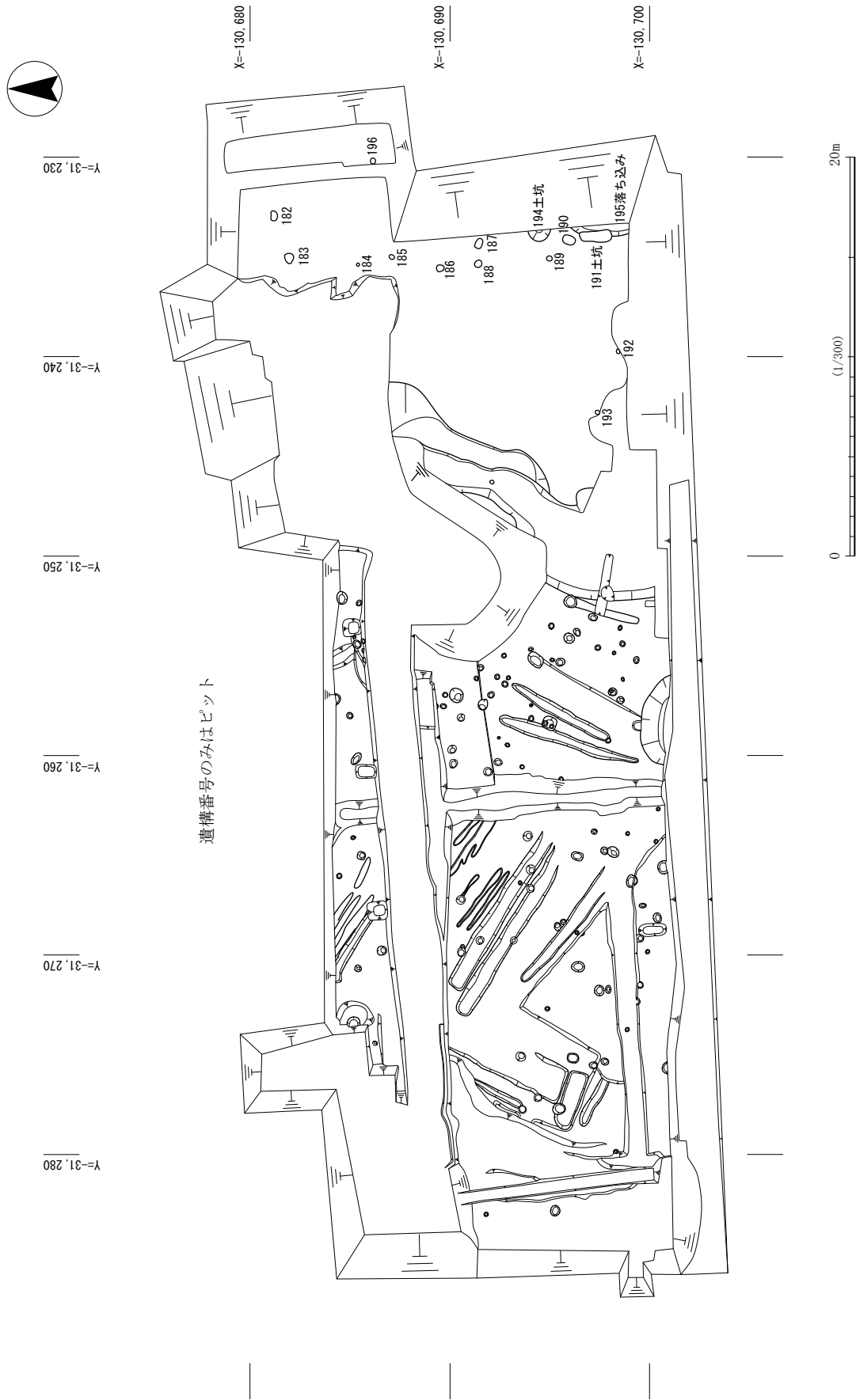


図55 9区 第5面

**194 土坑** 9区東端に位置し、その東部は調査区外に延びる。平面円形とすれば、直径約1.1 m、深さ26 cm。埋土は、上層が10YR4/2 灰黄褐色細砂～粗砂混じりシルト、下層が10YR5/6 黄褐色細砂混じりシルト。8世紀の須恵器杯などが出土した。

**ピット** 9区東部において、183～189ピットが南北に並ぶように見える。しかし、その心々距離は1.8～3.5 mとまちまちで、これらを含め全てのピットの埋土は柱痕跡が認められず単層である。

出土遺物は比較的豊富で、182ピットの須恵器甕（図151-413）、185ピットの8世紀後半の土師器杯（図151-414）、186ピットの須恵器蓋と黒色土器A類、187ピットの土師器や瓦（図151-415・416）、189ピットの瓦（図151-417・418）、190ピットの須恵器杯（図152-419）、196ピットの黒色土器水滴（図152-420）をはじめ、多くのピットから古代の土器細片が出土した。

**195 落ち込み** 9区南東隅に位置する。検出は南北3.0 m、東西0.6 m、深さ0.3 mだが、そのほとんどは調査区外に広がると考えられる。埋土は、上層が10YR4/2 灰黄褐色細砂～粗砂混じりシルト、下層が10YR5/6 黄褐色細砂混じりシルト。古代の土器細片が出土した。

## 第6面（図56・57 カラー写真図版2-4 写真図版31-101・102） 古代

9区では東部にのみ分布する第VI層を除去し検出した面で、地山層（第VII層）上面である。その範囲の面の高さはT.P.+28.5～28.8 m。範囲は狭いが、古代の土器や瓦などの出土量は多い。遺構として、掘立柱建物、溝、土坑、ピット、落ち込みを検出した。

**掘立柱建物1**（図58 写真図版32-103～105） 9区北東隅で掘立柱建物の西側部分を検出したところ、大阪府教育委員会より指示があり調査区を東側へ約2 m拡張した。その結果、南東側に未調査部分は残るが、主軸方位N5°W、桁行5間（約11.5 m）・梁行2間（約4.5 m）、面積51.8 m<sup>2</sup>の掘立柱建物と判明した。柱間寸法は2.2～2.5 mを基本とするが、桁行中央の柱間寸法が狭い箇所は約1.8 mである。ピットの埋土は図58に示すとおりで、東辺の335・336ピットにはスギ材の柱根（図155-530・156-531）が残っており、それらを含め身舎を構成する全ピットと北面廂の303ピットで柱痕跡が認められた（写真図版33-106～34-114）。身舎北東隅の332ピットの底部からは、枕木と考えられるヒノキ材が出土した（図155-524 写真図版34-115）。

建物北側の柱列の北側約1 mに平行するように外周柱穴列と考えられる321・294・303ピットが存在することから、建物は北面廂を有した可能性がある。294ピットにはスギ材の柱根（図156-540）が残っていた。

各ピットの出土土器は8世紀中頃～後半の土師器・須恵器を主体とするが、その前後のものや製塩土器も含まれる（図156-498～523・525～529）。加えて、北辺中央の328ピットから泥岩、東辺の334ピットからは不明骨片（「第6章 禁野本町遺跡出土の動物遺存体」参照）が出土した。

**掘立柱建物2**（図59） 掘立柱建物1の身舎と位置的に重複するが、ピットの重複はない。南北に長い建物と仮定すると、主軸方位N5°W、桁行2間以上・梁行1間以上の側柱建物である。北西隅の329ピットは単層だが、その他の3個のピットでは柱痕跡が認められた。

331ピットから8世紀前半～中頃の須恵器杯（図156-532）やスギ材の柱根（図156-533）が出土し、他のピットからも8世紀の土師器や古代の製塩土器などが出土した。

**197・199 溝** 9区東部に位置する。この2本の溝は道路側溝と考えられる。

197溝の主軸方位はN25°E。検出長7.0 m、幅0.6～0.8 m、深さ49 cm。埋土は、上層が



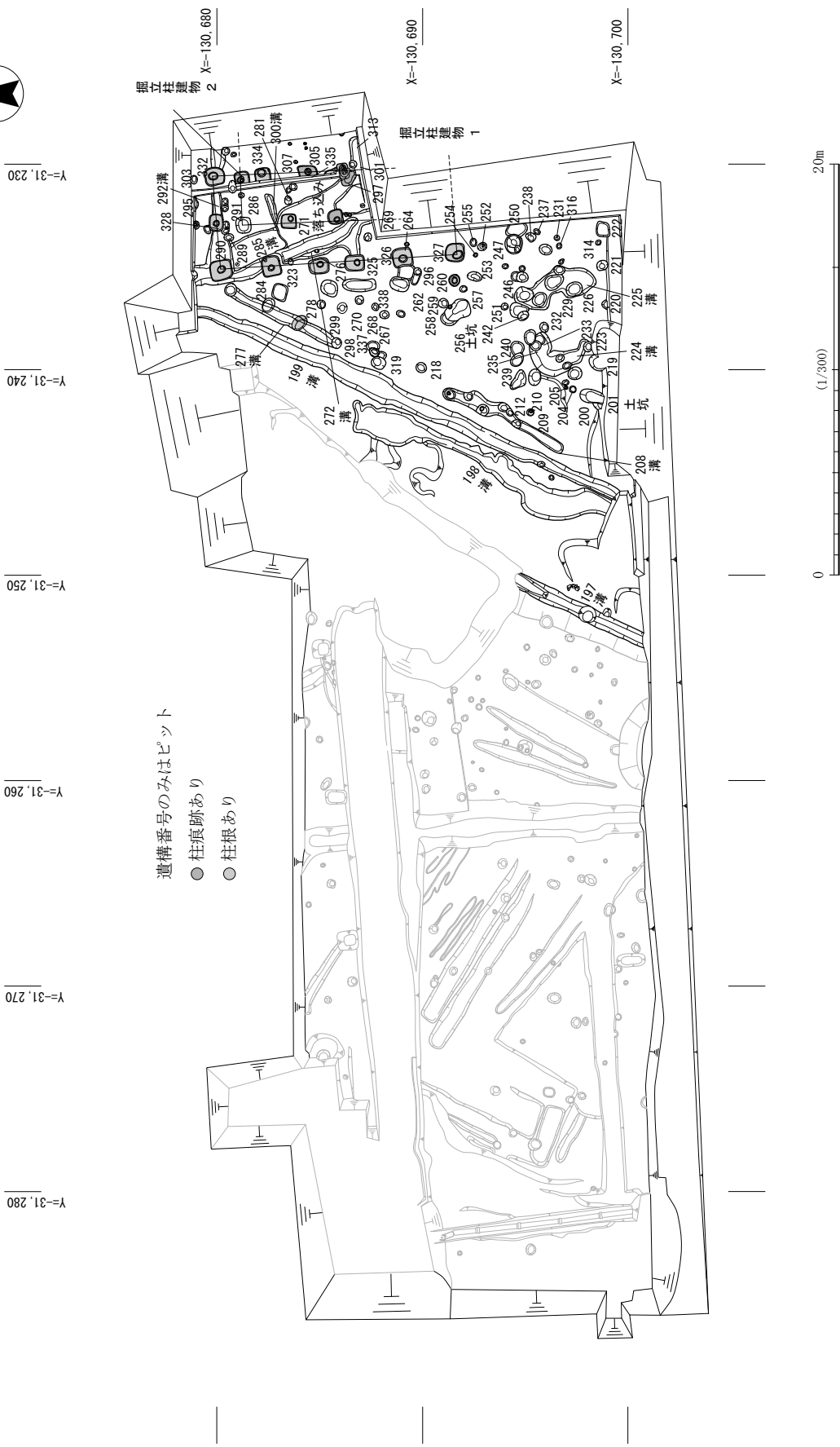


図56 9区第6面

Y=-31, 250

Y=-31, 240

Y=-31, 230



遺構番号のみはピット

● 柱痕跡あり

○ 柱根あり

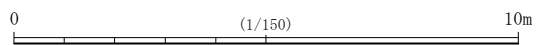


図57 9区 第6面東部

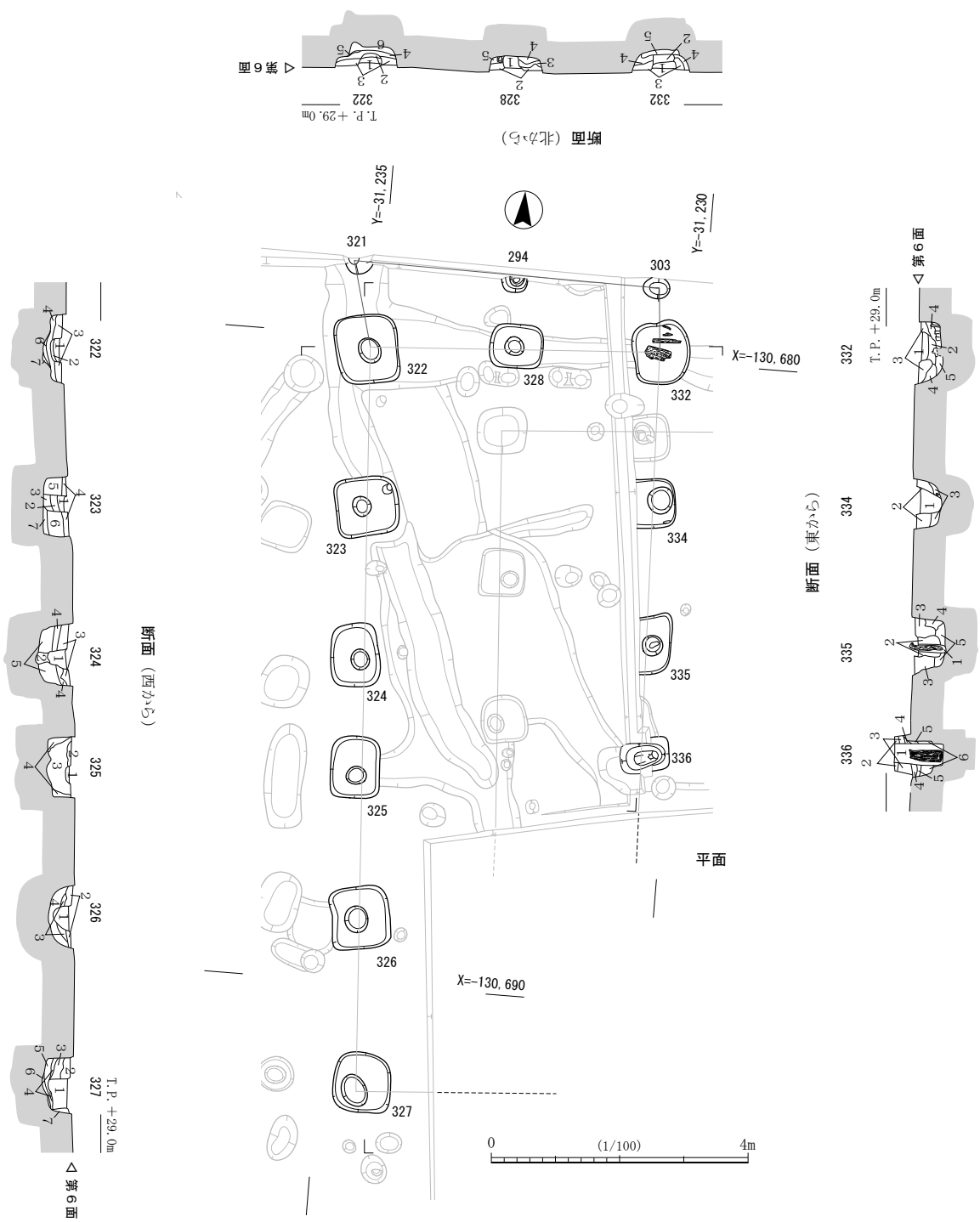


图58 9区 第6面掘立柱建物1

**322 ビット**

- 1 10YR5/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂～中砂混じりシルトに  
10YR6/1 褐灰 細砂～粗砂混じりシルトブロックが混じる
- 4 10YR4/1 褐灰 細砂混じりシルト 炭化粒を含む
- 5 2.5Y6/2 灰黄 細砂混じりシルト
- 6 2.5Y4/1 黄灰 シルト
- 7 2.5Y5/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルト

**323 ビット**

- 1 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂～中砂混じりシルトに  
2.5Y5/4 黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる 炭化粒を含む
- 2 2.5Y4/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルトに  
2.5Y5/4 黄褐 粗砂混じりシルトブロックが混じる
- 3 10YR4/1 褐灰 細砂～粗砂混じりシルトに  
2.5Y6/2 灰黄 粘土～シルトブロックを含む
- 4 2.5Y5/4 黄褐 細砂～粗砂混じりシルトと  
10YR4/2 灰黄褐 細砂～粗砂混じりシルトが混じり合う
- 5 10YR4/1 褐灰 細砂～粗砂混じりシルトに  
10YR6/6 にぶい黄橙 細砂～粗砂混じりシルトブロックと  
2.5Y5/2 暗灰黄 細砂～粗砂混じりシルトが混じる
- 6 2.5Y6/3 にぶい黄 細砂～粗砂混じりシルトに  
10YR4/2 灰黄褐 細砂～粗砂混じりシルトブロックが多く混じる
- 7 10YR4/1 褐灰 中砂～粗砂混じりシルト

**324 ビット**

- 1 2.5Y5/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルトに  
10YR6/8 明黄褐 細砂～粗砂混じりシルトが混じる 炭化粒を含む
- 2 2.5Y4/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルトに  
2.5Y6/2 灰黄 粘土～シルトブロックが混じる 炭化粒を含む
- 3 10YR6/1 褐灰 細砂混じりシルトに 10YR6/8 明黄褐 細砂混じり  
シルトブロックと 2.5Y7/1 灰白 シルトブロックが混じる 炭化粒を含む
- 4 2.5Y7/1 灰白 細砂～極粗砂混じりシルトと 10YR6/8 明黄褐  
細砂混じりシルトと 10YR6/1 褐灰 細砂混じりシルトが混じり合う
- 5 2.5Y4/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルトに  
10YR5/6 黄褐 細砂～中砂混じりシルトブロックと  
2.5Y6/2 灰黄 粘土～シルトブロックが混じる 炭化粒を含む

**325 ビット**

- 1 5Y5/1 灰 細砂混じりシルトに  
2.5Y6/8 明黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる 炭化粒を含む
- 2 2.5Y6/1 黄灰 細砂～中砂混じりシルトに  
2.5Y6/8 明黄褐 細砂～粗砂混じりシルトブロックが混じる
- 3 2.5Y5/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルトに  
2.5Y6/6 明黄褐 細砂～粗砂混じりシルトブロックと  
2.5Y7/2 灰黄 シルトブロックが混じる 炭化粒を含む
- 4 2.5Y4/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルトが混じる 炭化粒を含む

**326 ビット**

- 1 10YR5/1 褐灰 細砂混じりシルトに 10YR6/8 明黄褐 細砂～粗砂混じり  
シルトブロックが混じる 炭化粒を含む
- 2 2.5Y6/2 黄灰 細砂～粗砂混じりシルトに 2.5Y6/8 明黄褐 細砂～粗砂混じり  
シルトブロックと 2.5Y7/1 灰白 細砂～粗砂混じりシルトブロックが混じる  
炭化粒を含む
- 3 10YR4/1 褐灰 細砂～粗砂混じりシルトに 10YR6/8 明黄褐 粗砂混じり  
シルトが混じる 炭化粒を含む
- 4 2.5Y4/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルトに 10YR6/8 明黄褐 細砂～粗砂混じり  
シルトブロックが混じる 炭化粒を含む

**327 ビット**

- 1 2.5Y5/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルトに 10YR6/8 明黄褐 細砂～粗砂混じり  
シルトが混じる 炭化粒を含む
- 2 10YR4/4 褐 細砂～粗砂混じりシルト
- 3 10YR4/1 褐灰 細砂～粗砂混じりシルトに 10YR5/6 黄褐 細砂～粗砂混じりシルト  
に 10YR5/6 黄褐 細砂～粗砂混じりシルトが混じる 炭化粒を含む
- 4 10YR4/6 褐 細砂～中砂混じりシルト
- 5 2.5Y4/1 黄灰 細砂～中砂混じりシルト 炭化粒を含む
- 6 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂～粗砂混じりシルトに 10YR6/8 明黄褐 細砂混じり  
シルトブロックと 2.5Y7/1 灰白 シルトブロックが混じる 炭化粒を含む
- 7 2.5Y5/4 黄褐 細砂～粗砂混じりシルトと 2.5Y5/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルト  
と 2.5Y7/1 灰白 細砂～粗砂混じりシルトが混じり合う

**328 ビット**

- 1 10YR5/1 褐灰 細砂～粗砂混じりシルトに  
10YR5/4 にぶい黄褐 細砂～粗砂混じりシルトブロックが混じる 炭化粒を含む
- 2 2.5Y6/2 灰黄 細砂～粗砂混じりシルトに 10YR6/8 明黄褐  
細砂～粗砂混じりシルトと 2.5Y7/1 灰白 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 3 2.5Y6/1 黄灰 細砂混じりシルトに  
10YR6/8 明黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 4 2.5Y6/1 黄灰 細砂混じりシルトと  
10YR6/8 明黄褐 細砂～粗砂混じりシルトが混じり合う
- 5 2.5Y5/1 黄灰 細砂～中砂混じりシルト

**332 ビット**

- 1 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂～粗砂混じりシルトに  
2.5Y6/1 黄灰 細砂混じりシルトが混じる
- 2 10YR5/1 褐灰 細砂～中砂混じりシルト
- 3 10YR5/6 黄褐 細砂～粗砂混じりシルト
- 4 10YR5/2 灰黄褐 細砂～粗砂混じりシルト
- 5 2.5Y5/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルト 炭化粒を含む

**334 ビット**

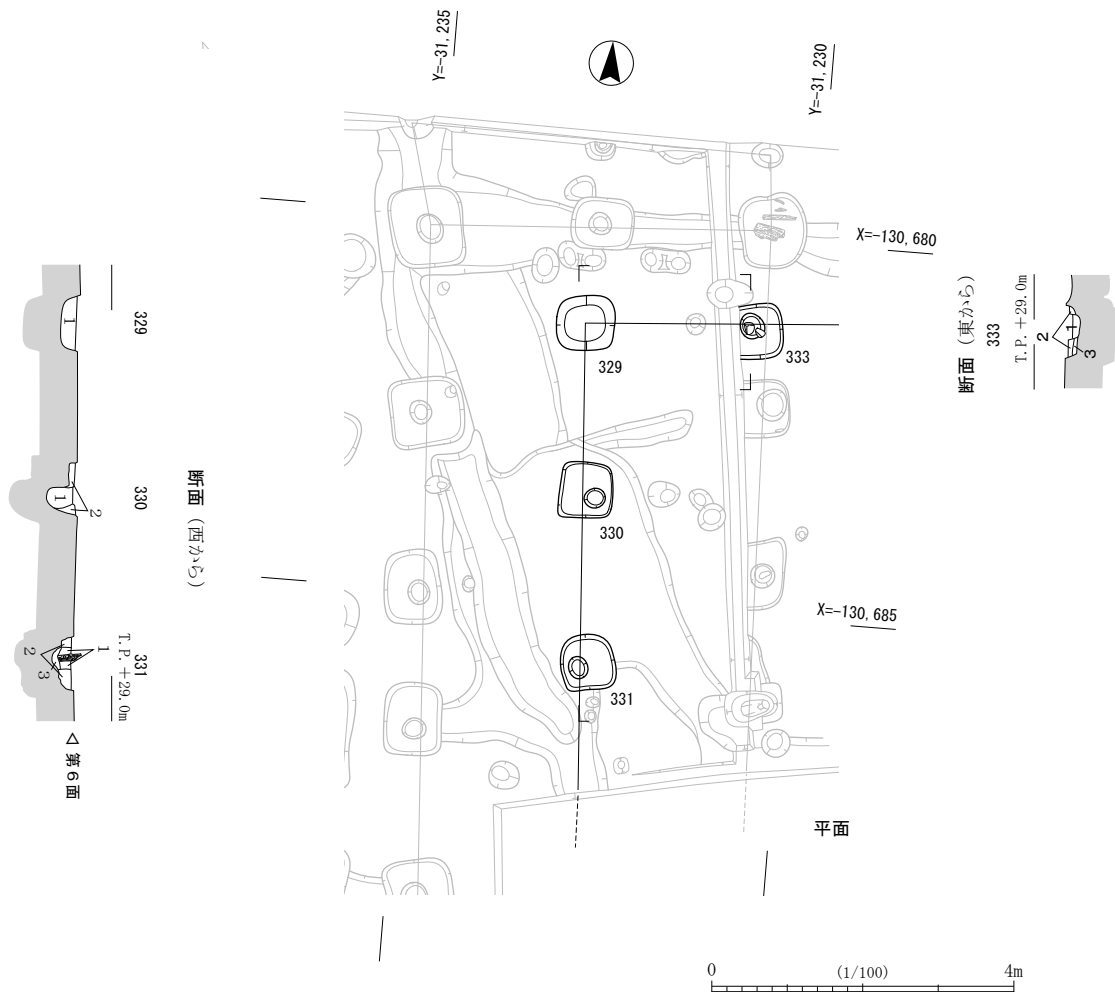
- 1 2.5Y4/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルトに  
10YR4/6 褐 細砂～粗砂混じりシルトが混じる
- 2 10YR5/1 褐灰 細砂～粗砂混じりシルトと  
10YR4/6 褐 細砂～中砂混じりシルトと  
2.5Y7/1 灰白 細砂～中砂混じりシルトが混じり合う
- 3 2.5Y3/1 黒褐 細砂～中砂混じりシルトに  
10YR5/6 黄褐 細砂～粗砂混じりシルトブロックと  
2.5Y7/1 灰白 シルトブロックが混じる

**335 ビット**

- 1 5Y5/1 灰 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 5Y5/1 灰 細砂～粗砂混じりシルトに  
2.5Y6/2 灰黄 細砂～粗砂混じりシルトが混じる 炭化粒含む
- 3 10YR5/1 褐灰 細砂～粗砂混じりシルトと  
10YR4/6 褐 細砂～中砂混じりシルトと  
2.5Y7/1 灰白 細砂～中砂混じりシルトが混じり合う
- 4 10YR5/6 黄褐 細砂～粗砂混じりシルトに  
2.5Y4/1 黄灰 細砂～中砂混じりシルトブロックが混じる
- 5 2.5Y4/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルトと  
5Y5/6 灰 細砂～中砂混じりシルトが混じり合う

**336 ビット**

- 1 10YR4/1 褐灰 細砂混じりシルト
- 2 10YR4/4 褐 細砂～粗砂混じりシルト
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂～礫混じりシルト
- 4 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂～粗砂混じりシルトに  
2.5Y7/2 灰黄 シルトブロックが多く混じる
- 5 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
- 6 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂～粗砂混じりシルトに  
10Y5/6 黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる



#### 329 ピット

- 1 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂～粗砂混じりシルトに 10YR5/4 にぶい黄褐細砂～粗砂混じりシルトブロックと 2.5Y7/1 灰白 細砂混じりシルトブロックが混じる 径 1cm 程度の礫を少量含む

#### 330 ピット

- 1 2.5Y4/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルトに 10YR5/8 黄褐 細砂～粗砂混じりシルトブロックが混じる 炭化粒を含む
- 2 2.5Y5/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルトに 2.5Y6/8 明黄褐 細砂～粗砂混じりシルトブロックが混じる

#### 331 ピット

- 1 5Y4/1 灰 細砂～粗砂混じりシルト 炭化粒を含む
- 2 5B6/1 青灰 細砂～粗砂混じりシルト
- 3 2.5Y5/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルトに 10YR5/6 黄褐 細砂～粗砂混じりシルトが混じる 炭化粒を含む

#### 333 ピット

- 1 10YR5/1 褐灰 細砂混じりシルトに 10YR6/8 明黄褐 細砂～粗砂混じりシルトブロックが混じる
- 2 2.5Y6/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルトに 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂～粗砂混じりシルトが混じる
- 3 10YR4/1 褐灰 細砂～中砂混じりシルト

図59 9区 第6面掘立柱建物2

2.5Y6/1 黄灰色中砂～粗砂混じりシルトに 10YR4/4 明黄褐色中砂～粗砂混じりシルトや粗砂が混じる、中層が炭を多く含む 10YR6/1 褐灰色細砂混じりシルトと 2.5Y6/1 黄灰色細砂～中砂混じりシルト、下層が 2.5Y6/1 黄灰色中砂～粗砂混じりシルト。8 世紀を主体とする土師器・須恵器（図 156 - 541 ～ 548）などが出土した。

199 溝の主軸方位は N 24° E で 197 溝とほぼ並行する。検出長 22.0 m、幅 0.5 ～ 1.3 m、深さ 22 cm。埋土は、2.5Y5/1 黄灰色シルト混じり中砂～粗砂に 2.5Y7/1 灰白色シルト混じり中砂～粗砂と 10YR6/6 明黄褐色シルト混じり中砂～粗砂が混じる。8 世紀末の須恵器（図 156 - 554 ～ 556）、9 世紀中頃の緑釉陶器（図 156 - 557）、瓦（図 156 - 558・559）などが出土した。

197 溝と 199 溝は、心々距離 5.8 m、溝の内側間 5.1 m でほぼ並行しており、その間には 199 溝に先行する 198 溝があるものの、199 溝の東側に多く展開するピットがほとんどみられない。また、両

溝間の幅員の中央部には幅約2 mに渡って地山層の上面に4～5 cm程度の厚さにN6/ 灰色粗砂混じりシルトに粗砂～径3 cm程度の礫がきわめて多く混じった層がみられ、小砂利が敷かれていた名残と考えられる。以上により、197 溝と199 溝の間は道で、両溝はその側溝であった可能性が高い。

**198 溝** 上記199 溝のすぐ西側、道と想定した範囲内に位置する。主軸方位は道とほぼ並行ではあるが、197・199 溝よりも蛇行している。検出長13.5 m、最大幅1.5 m。深さは、197・199 溝よりもかなり浅く7 cm。埋土は、2.5Y7/1 灰白～6/1 黄灰色細砂～中砂。道の中のくぼみ的な溝であろう。8世紀末の須恵器（図156 - 549～552）と9世紀の緑釉陶器（図156 - 553）が出土した。

**208・277 溝** 両溝とも199 溝の東に、やや蛇行するが0.4～0.8 mの間隔をもってほぼ並行する。

**208 溝**は、長さ6.5 m、幅0.4～0.9 m、深さ4 cm。埋土は、10YR4/1 褐灰色細砂～中砂。6個のピットと重複関係にある。8世紀の土師器や9世紀の灰釉陶器（図156 - 560）などが出土した。

**277 溝**は、208 溝東北端から5.4 m隔たって存在する。長さ6.0 m、幅0.6 m、深さ6 cm。埋土は、2.5Y7/1 灰白色細砂～中砂混じりシルトに2.5Y6/6 灰白色細砂～中砂混じりシルトが混じる。4個のピットと重複関係にある。そのうち**278**ピットでは溝埋土の下層で柱痕跡が認められた。古代の土器細片が出土した。

溝とピットからなる平面形は、布掘り柱掘方に類するものである。その場合、ピットの方が新しくなるのが通例であろう。平面検出時には両溝ともピットの方が新しいようにも見えたが、断面を検討したところ溝の方が後から埋まったことが判明した。以上の状況から、**208・277 溝**は、197・199 溝を側溝とする道に沿った塀のような施設の柱穴であったものが、柱がなくなった後に埋まったものと推測する。

**224・225 溝** 9区南東部に位置する。半弧状の2本の溝が向かい合うようにあり、それらに囲まれた2.5 m四方程度の内部空間にはピットなどが見当たらない。

**224 溝**は、最大幅1.3 m、深さ13 cm。埋土は、10YR4/1 褐灰色シルト混じり細砂～中砂に2.5Y5/6 黄褐色シルト混じり細砂～中砂や5Y8/1 灰白色シルト混じり細砂～中砂が混じる。8世紀の土師器鉢や製塩土器細片などが出土した。

**225 溝**は、最大幅1.4 m、深さ8 cm。埋土は、2.5Y4/1 黄灰色シルト混じり細砂～中砂に2.5Y6/6 明黄褐色シルト混じり細砂～中砂が混じる。8世紀の土師器杯や製塩土器細片などが出土した。

**272 溝** 掘立柱建物1と重複関係にあり、それよりも古い。主軸方位は北北西 - 南南東。検出長8.4 m、幅0.7 m、深さ12 cm。埋土は、2.5Y5/1～4/1 黄灰色細砂～中砂混じりシルト。出土遺物なし。

**285 溝** 272 溝の東に重複し、主軸方位は同じ。重複する周辺の遺構よりも古い。検出長2.6 m、幅は1.2 m以上あるが、深さは5 cmと浅い。埋土は、2.5Y7/6 明黄褐色細砂～中砂混じりシルトに2.5Y7/1 灰白色細砂～中砂混じりシルトが混じる。出土遺物なし。

**292 溝** 主軸方位はほぼ東西で、掘立柱建物1北辺の3個のピットと重複関係にあり、それよりも古い。西端で272 溝につながる。検出長6.0 m、幅1.3 m、深さ4 cm。埋土は、2.5Y5/1 黄灰色シルト混じり細砂に10YR6/8 明黄褐色シルト混じり細砂が混じる。出土遺物なし。

**300 溝** 掘立柱建物1の内部、掘立柱建物2の西辺近くに位置する。主軸方位は272 溝とほぼ直交する東北東 - 西南西。西端は271 落ち込みと重複し、それよりも古い。検出長1.5 m、幅0.4 m、深さ4 cm。埋土は、2.5Y5/1 黄灰色シルト混じり細砂に10YR4/2 灰黄褐色シルト～礫混じり細砂が混じる。出土遺物なし。

**201 土坑** 9区南東部に位置し、その南部は攪乱されている。平面は北北東 - 南南西に長い長楕円形と推定され、長径 1.2 m 以上、短径 0.7 m、深さ 34 cm。埋土は、上層が 2.5Y5/1 黄灰色シルト混じり細砂～粗砂に 10YR5/6 黄褐色シルト～粗砂が斑状に混じる、下層が 2.5Y5/1 黄灰色細砂～粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**256 土坑** 9区東部にする。平面は北西 - 南東に長い不整楕円形で、長径 1.6 m、短径 0.9 m、深さ 44 cm。埋土 4 層に分かれ、上層から順に、2.5Y5/2 暗灰黄色～ 5/6 黄褐色シルト混じり細砂～中砂、2.5Y7/1 灰白色～ 2.5Y5/6 黄褐色中砂～粗砂混じりシルト、2.5Y6/6 明黄褐色～ 5G7/1 明緑灰色細砂混じりシルトで、最下層は 2.5Y5/6 黄褐色～ 10YR6/1 褐灰色細砂～中砂混じりシルト。出土遺物なし。

**ピット** 掘立柱建物を構成するもの以外では、260 ピットと 277 溝と重複する 278 ピットで柱痕跡が認められたのみである。埋土が複数に分かれるピットが比較的多いが大半は単層で、配列からも建物や柵列などの復元には至らなかった。

これらのピットの出土遺物は 8 世紀の土師器・須恵器（図 156 - 534 ～ 539）が主体で、土錘や古代の製塩土器細片なども出土した。

**271 落ち込み** 9区北東部に位置する。重複関係からみて、285・300 溝よりも新しく、272 溝や 273・274・330・331 ピットよりも古い。東西幅 2.8 m、深さ 6 cm。埋土は、2.5Y4/2 暗灰黄色細砂混じりシルトに 2.5Y6/6 明黄褐色細砂混じりシルトが混じる。瓦（図 156 - 561）などが出土した。

## 第9節 10区（A棟）・10-2区（防火水槽A）の遺構

10区は調査地南東部に位置する。建設工事との関係で、南側で東西に長い住宅A1棟と北東部のA2棟に分けて調査を行った。さらに、10-2区はA1棟の東側に接する防火水槽Aの設置に伴う調査である。以下、この3者を合わせて報告する。T.P.+30.8～31.2mの現地表面から、T.P.+28.6～29.7mの第5面まで調査した。最終面での調査面積は、A1棟・A2棟・防火水槽Aを合わせて1717㎡である。

第1面は昭和14（1939）年爆発関連層の上面。倉庫や土管溝などを検出した。

第2面は昭和14年爆発関連層を除去した面。臨時構築物である掘立柱建物や軽便軌道に伴う枕木などとともに多数の爆発穴を検出した。

この10区では、8区・9区・12区のような土塁と火工場（爆発後は倉庫）が主体となる調査区とは異なり、昭和14年の爆発の前（第2面）後（第1面）で禁野火薬庫の建物が一変する。

第3面は中世～近世の面。溜池、土坑、溝を検出した。

第4面・第5面は基本的に古代の面で、一部それ以前の遺構もみられる。

A1棟（10区南側）では中央部の広い範囲には第4層が分布せず第4面段階で地山層が露出し、西部では第4面と第5面が分離できた。

A2棟（10区北西部）では第4面と第5面の分離が困難であった上に、今回の調査では最も密度高く掘立柱建物、井戸、土坑、ピット、溝などの遺構が検出された。このような状況のため、A1棟では第4面と第5面を分けて報告し、A2棟については遺構の検出状況に鑑み第4面と第5面を合わせて報告する。

### 層序（図60 写真図版51-193）

10区では南壁の断面を図示し、東壁（写真図版51-193）と西壁（写真図版51-194）の断面写真も掲げる。

第0層（1～4）は、基本層序の第0層に該当する。旧住棟建設に伴う盛土層である。

第1層は、基本層序の第Ⅰ層〔昭和14（1939）年爆発関連層〕に該当する。10区では爆発後に倉庫が建てられており、その際に相当な整地作業がなされたようである。しかし、爆発穴や復旧作業のための廃棄土坑的な土坑など（6～12）もかなり残っている。

第2層は、基本層序の第Ⅱ層に該当する。火薬庫造成に伴う盛土層（13～22）を主体とし、それ以前の旧作土層（24）や中世～近世の包含層（25・27～34）も含む。

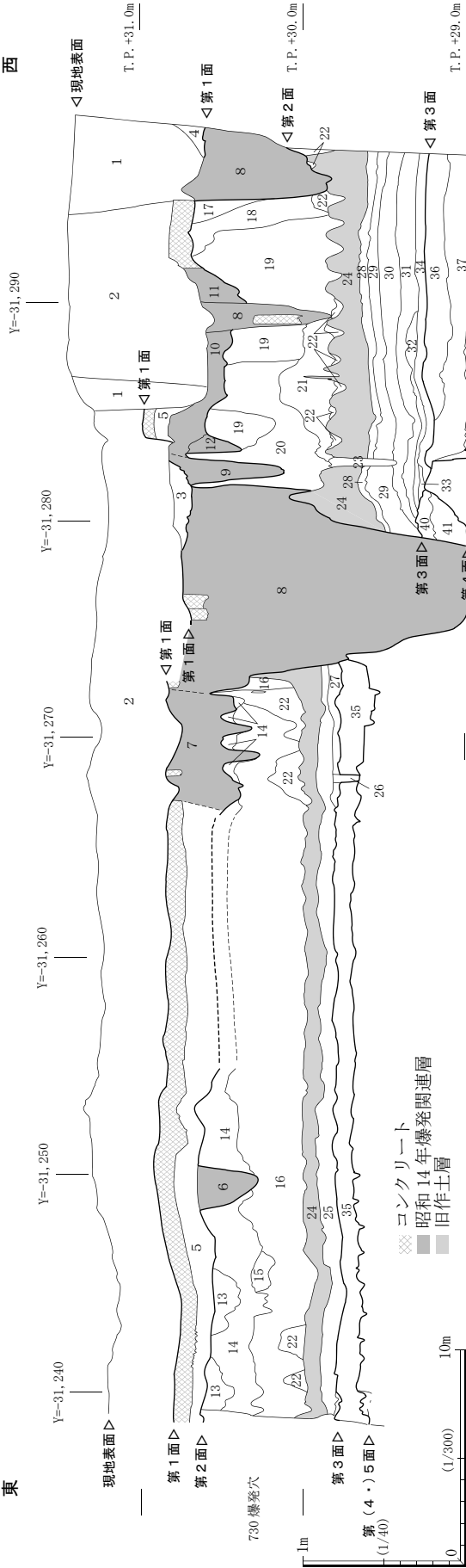
第3層（35～41）は、基本層序の第Ⅲ層・第Ⅴ層に該当する。この層を除去した第4面調査段階で10区南東部では地山層（第Ⅶ層）上面に達した。

第4層（42）は、基本層序の第Ⅵ層に該当する。今回の調査地は基本的に南西が高く北東が低くなる地形で、10区北東部も同様の傾向にある。しかし、10区西側では西方の11区に向かって谷状に低くなる範囲にのみ第4層が分布しており、それを除去して検出した第5面が地山層（第Ⅶ層）上面となる。



東

西



- 1 2.5Y7/1 灰白 粗砂～礫混じりシルト  
 2 2.5Y6/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルト (旧住棟建築時の盛土層)  
 3 2.5Y7/2 黄灰 粗砂～礫混じりシルト (旧住棟建築時の盛土層)  
 4 2.5Y4/1 黄灰 粗砂～礫 (旧住棟建築時の盛土層)  
 5 砕石 (コンクリート設置に伴う層)  
 6 14を攪拌した層にコンクリート殻などが混じる (昭和14年爆発後に掘削された土坑)  
 7 10YR2/1 黒 砂礫・コンクリート殻等混じりシルト (昭和14年爆発関連層)  
 8 2.5Y3/1 黒褐～10YR4/6 褐 砂礫・焼土・炭混じりシルト (爆発後に掘削された廃棄土坑と推定)  
 9 2.5Y3/1 黒褐～10YR4/6 褐 砂礫・焼土・炭混じりシルト (昭和14年爆発時形成層)  
 10 10YR2/1 黒 砂礫混じりシルト (昭和14年爆発時形成層)  
 11 10YR3/2 黒褐～4/2 灰黄褐 砂礫混じりシルト (昭和14年爆発時形成層)  
 12 2.5Y7/1 灰白 粗砂にレンガが混じる  
 13 10YR6/6 明黄褐 粗砂混じりシルトに567/1明緑灰 シルトが混じる (火薬庫造成時の盛土層)  
 14 10YR4/6 褐 粗砂～礫混じりシルト (火薬庫造成時の盛土層)  
 15 5B67/1 明青灰 10YR7/4 にぶい黄橙 粗砂に地山ブロックが混じる (火薬庫造成時の盛土層)  
 16 2.5Y4/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルト 地山ブロックが混じる (火薬庫造成時の盛土層)  
 17 2.5Y5/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルトに地山ブロックが少量混じる  
 18 10YR4/6 褐 粗砂～礫混じりシルト (火薬庫造成時の盛土層)  
 19 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂～礫混じりシルト (火薬庫造成時の盛土層)  
 20 10YR5/4 にぶい黄褐 シルトブロックと地山のシルトブロックの混在層 (火薬庫造成時の盛土層)  
 21 10YR4/1 褐灰 粗砂～礫混じりシルト (15cm以下の巨礫が混在している)  
 22 10YR3/1 黄褐 粗砂～礫混じりシルトに地山ブロックが混じる (火薬庫造成時の盛土層)
- 23 2.5Y5/4 黄灰～5/2 暗灰黄 礫混じりシルト (土管溝)  
 24 2.5Y3/1 黒褐 粗砂混じりシルト (旧作土層)  
 25 2.5Y4/1 ～5/1 黄灰 粗砂混じりシルト  
 26 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂～礫混じりシルト (第3面739溝)  
 27 10YR5/6 黄褐 粗砂～礫混じりシルト  
 28 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂～礫混じりシルト  
 29 2.5Y4/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルト  
 30 2.5Y5/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルト  
 31 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂～礫混じりシルト  
 32 2.5Y6/1 黄灰 粗砂混じりシルト  
 33 10YR5/3 にぶい黄褐 粗砂混じりシルト  
 34 10YR5/6 黄褐 粗砂混じりシルト  
 35 2.5Y5/2 暗灰黄～5/3 黄褐 粗砂混じりシルト  
 36 10YR4/3 にぶい黄褐 粗砂混じりシルト  
 37 10YR4/2 灰黄褐 粗砂混じりシルト  
 38 10YR4/3 にぶい黄褐 粗砂混じりシルト  
 39 10YR5/2 灰黄褐 粗砂混じりシルト  
 40 10YR4/4 褐 粗砂混じりシルト  
 41 2.5Y4/1 黄灰～4/2 暗灰黄 粗砂混じりシルト  
 42 10YR2/1 黒 粗砂混じりシルト

図 60 10 区 南壁断面



図 61 10区 第1面

## 第1面（図61 写真図版36-122～37-125）昭和14年以後

昭和14(1939)年爆発関連層の上の盛土のさらに上に設置されたコンクリート土間の検出面である。面の高さは、T.P.+30.4～30.7 m。遺構として、倉庫や土管溝などを検出した。

**1～3建物** これらの土間コンクリートは、昭和17(1942)年の「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠新築増築概要図」に記載された、南から、**第16号倉庫**(1建物)、**第17号倉庫**(2建物)、**第18号倉庫**(3建物)に該当する。

昭和20(1945)年の「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠構内図」では、第17号倉庫が**第7号倉庫**に改称されており、第16号倉庫と第18号倉庫は描かれていない。

昭和23(1948)年の米軍による航空写真では、第16号倉庫と第18号倉庫の土間コンクリートは比較的良好に残存しているように見える。

昭和29(1954)年に撮影された大阪大学の施設として使用されていた当時の航空写真を観察すると、第16号倉庫(1建物)は土間コンクリートが東側一部で破損を受けているようだが残存し、第17号倉庫(2建物)部分には建物が存在し、第18号倉庫(3建物)は東端部分を除き土間コンクリートが破損を受けている。今回の調査でも、1建物(第16号倉庫)の東部では土間コンクリートが破損を受けており、3建物(第18号倉庫)の残存状況は悪かった。

昭和17(1942)年の「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠新築増築概要図」には、それぞれの倉庫内に東西方向と南北方向に軽便軌道が敷設されていることが記されている。今回の調査では1建物(第16号倉庫)で南北方向(写真図版38-126・127)の、2建物(第17号倉庫)で東西方向(写真図版38-132)の軽便軌道の一部を検出できた。しかし、東西・南北方向の軽便軌道が交差する部分の転車台は検出できなかった。

各倉庫には北辺と南辺にそれぞれ4箇所ずつ、東辺と西辺にそれぞれ1箇所ずつ、合計10箇所の出入口が設けられていた。扉の溝の一部には鉄製レールが遺存する部分もあり、引戸であることが判明した。

**1建物**の北部を、10区南部において東西74 m、南北6 mにわたって検出した。出入口は、北辺の4箇所全てを検出できた。そのうち北出入口B(図62)には南北方向の軽便軌道が敷設され、建物内部の床面に続いている(写真図版38-126・127)。コンクリート枕木の間隔は基本的には0.9 mごとに配置されているが、出入口近くでは0.75 mに詰まっている。軌間(ゲージ)は600 mm。枕木6本の孔合計22箇所のうち11箇所に犬釘(図143-209～212)が残っていた。コンクリート土間の厚さは、出入口周辺で約10 cmあり、その下層に径1～5 cmの礫が厚さ10～20 cmに敷かれている。

建物北辺外縁に造られた側溝(写真図版38-128)の外幅は50 cmで、内法は幅30 cm、深さ22～28 cm。北出入口Bから2.4 m西の側溝底には、L字形に屈曲した土管(図130-32)を用いた排水管が設えられていた。

残りの良い北出入口C(写真図版38-129)でコンクリート土間の規模を測ると、幅1.0 m・長さ3.7 mであった。土間の下には暗渠として土管(図130-33)が設置されていた。

**2建物**を、南北約11 m、東西69 mにわたって検出したが、破壊されている部分も広い。本来の規模は、昭和20(1945)年の「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠構内図」の第7号倉庫に「280坪」(924 m<sup>2</sup>)と記されているので、南北約11 mであることから(6間強)、東西は84～85 m(約46.5間)と推定できる。

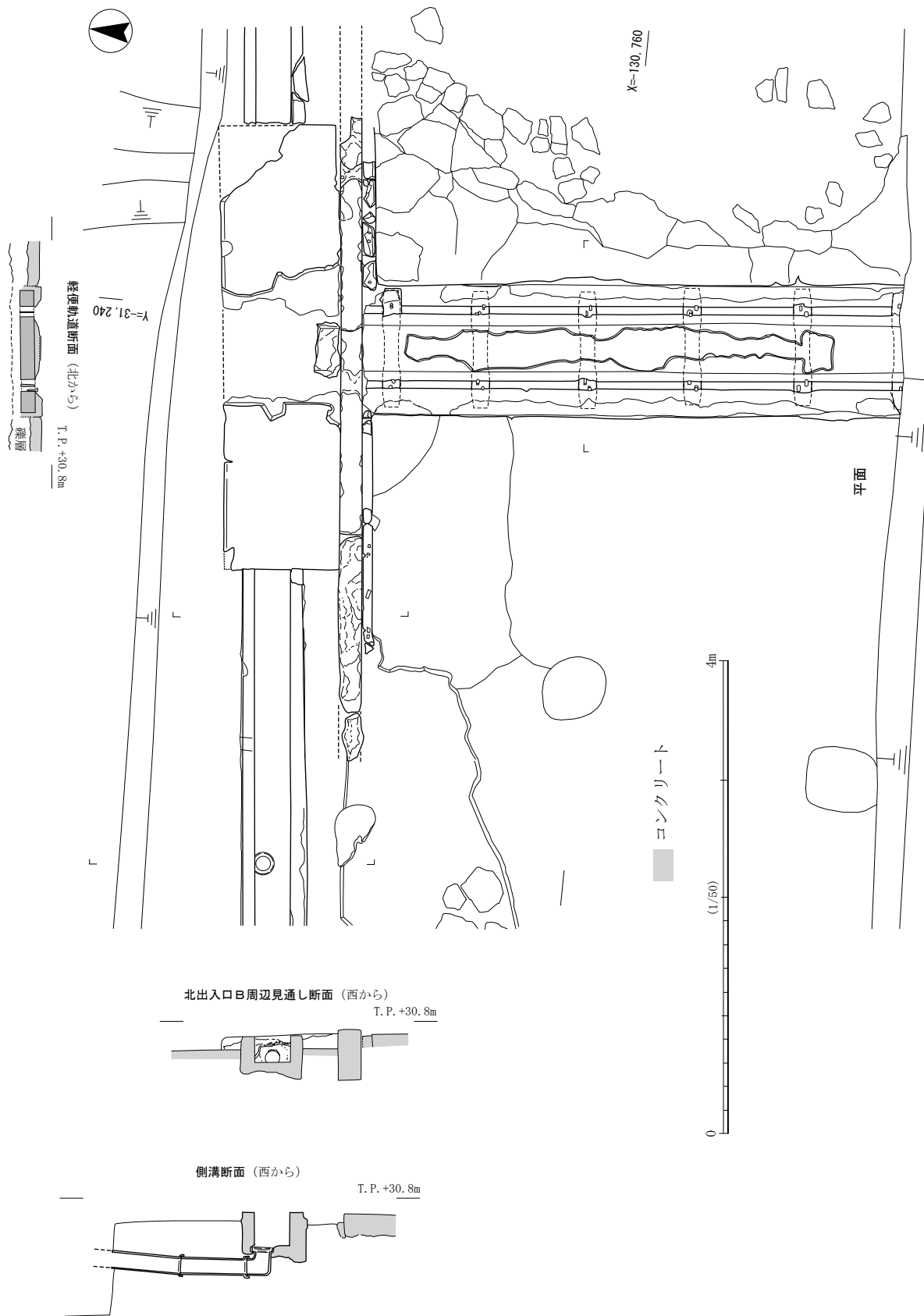


図 62 10 区 第 1 面 1 建物北出入口 B 周辺

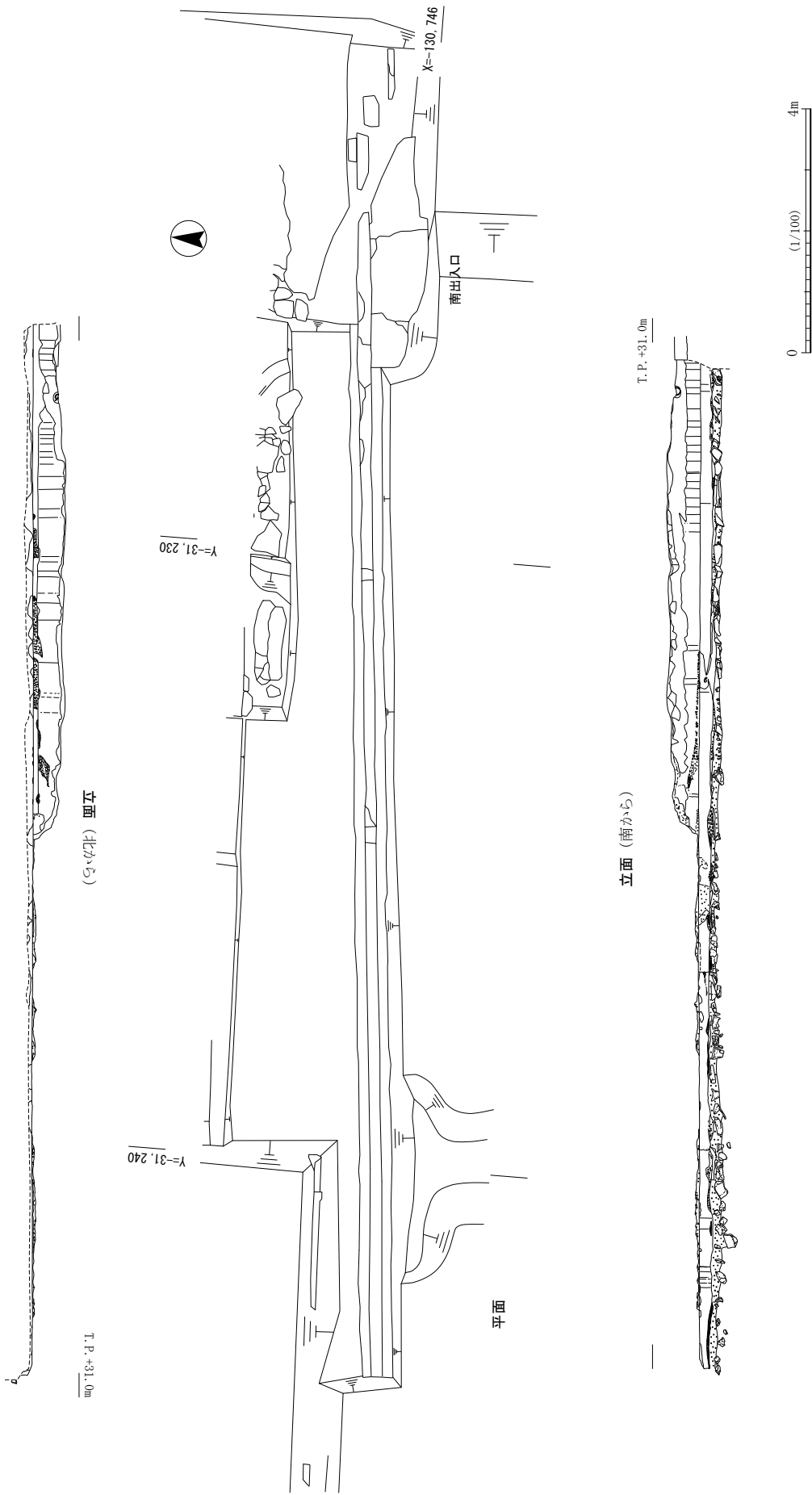


图 63 10 区 第 1 面 2 建物南辺東部

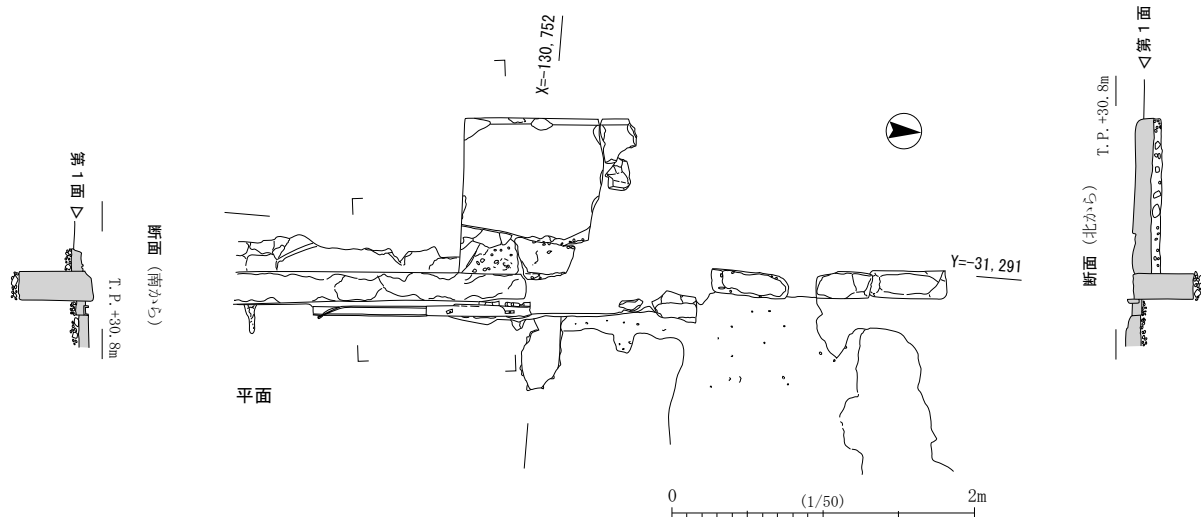


図64 10区 第1面 2建物西出入口

比較的遺存状況の良い建物南辺東部の基礎（図63）では、栗石と捨てコンの上にフーチングを築き、さらにその上にコンクリート製の基礎を立ち上げた状況がわかった。基礎の外面には型枠痕が残る。他の調査区の基礎に埋め込まれていたような鉄筋は判然としない。

北出入口（写真図版38-130）周辺では、側溝と建物内部のコンクリート土間を検出できた。西出入口（図64・写真図版38-131）には、コンクリート土間と鉄製の引戸下枠（写真図版82-1111）が残っていた。痕跡的ではあるが、建物の中央部を東西に貫く軽便軌道（写真図版38-132）もみられた。

建物の北辺と南辺には、コンクリート製の側溝が設けられており、側溝の底に土管が埋め込まれている箇所もある。排水用と考えられるが、2建物では土管が連なっている状況は確認できなかった。

3建物は、北辺の出入口1箇所とその周辺のコンクリート土間や側溝が残るのみであった。

**40～43土管溝** 2建物と3建物の間に敷設されている。44会所（枡）を交点として東西に41・43土管溝が、南北に40・42土管溝がつながる。配置箇所からすると、2・3建物（第17・18号倉庫）建設に伴って設置されたものであろう。1建物（第16号倉庫）の北側外縁にある側溝の状況を参考とし、土管の接合方向や勾配を加味して考えると、3建物南辺の側溝から南下する40土管溝・2建物北辺の側溝から北上する42土管溝・西から流下する43土管溝からの排水を44会所に集め、41土管溝で東に流すように配置されている。

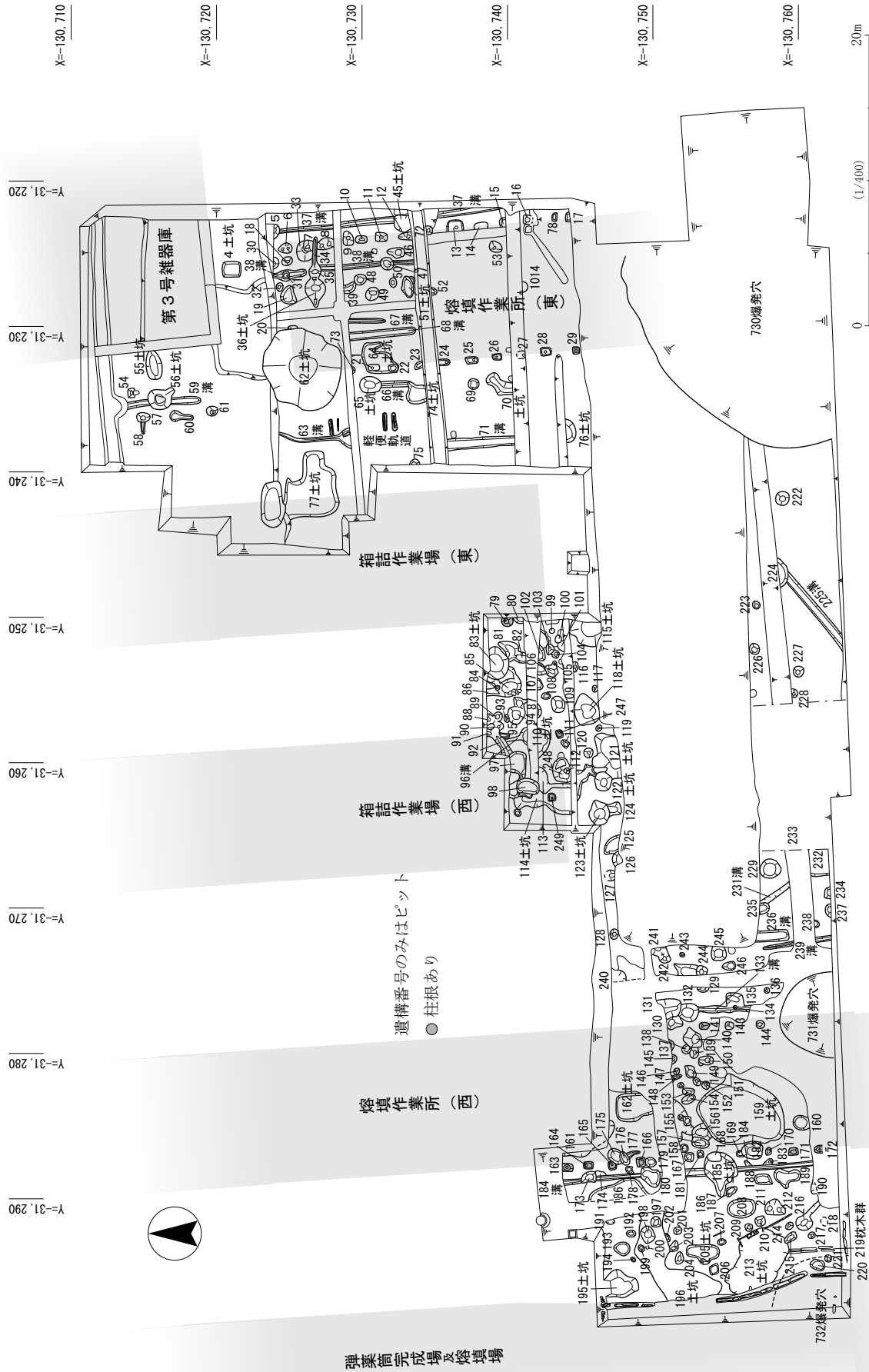
42・43土管溝に用いられた土管を、図130-34～36に掲げる。

## 第2面（図65 写真図版39-133～40-136）昭和14年以前

第1面検出の土間コンクリートや昭和14年爆発関連層（第I層）を除去し検出した爆発以前の禁野火薬庫に関する遺構面である。面の高さはT.P.+30.0～30.4m。

第2面では、第1面で検出した倉庫以前の昭和12（1937）年に軍需動員に伴う臨時構築物とされる熔填作業場の掘立柱建物、軽便軌道に伴うと考えられる枕木などを検出した。ただし、昭和14年の爆発により生じた穴が多数あったため、これらの遺構はかなり損傷していた。

**第3号雑器庫** 10区北東隅において第1面の第18号倉庫（3建物）に重複するように検出されたコ



X=-130.710

X=-130.720

X=-130.730

X=-130.740

X=-130.750

X=-130.760

Y=-31.220

Y=-31.230

Y=-31.240

Y=-31.250

Y=-31.260

Y=-31.270

Y=-31.280

Y=-31.290

図 65 10 区 第 2 面

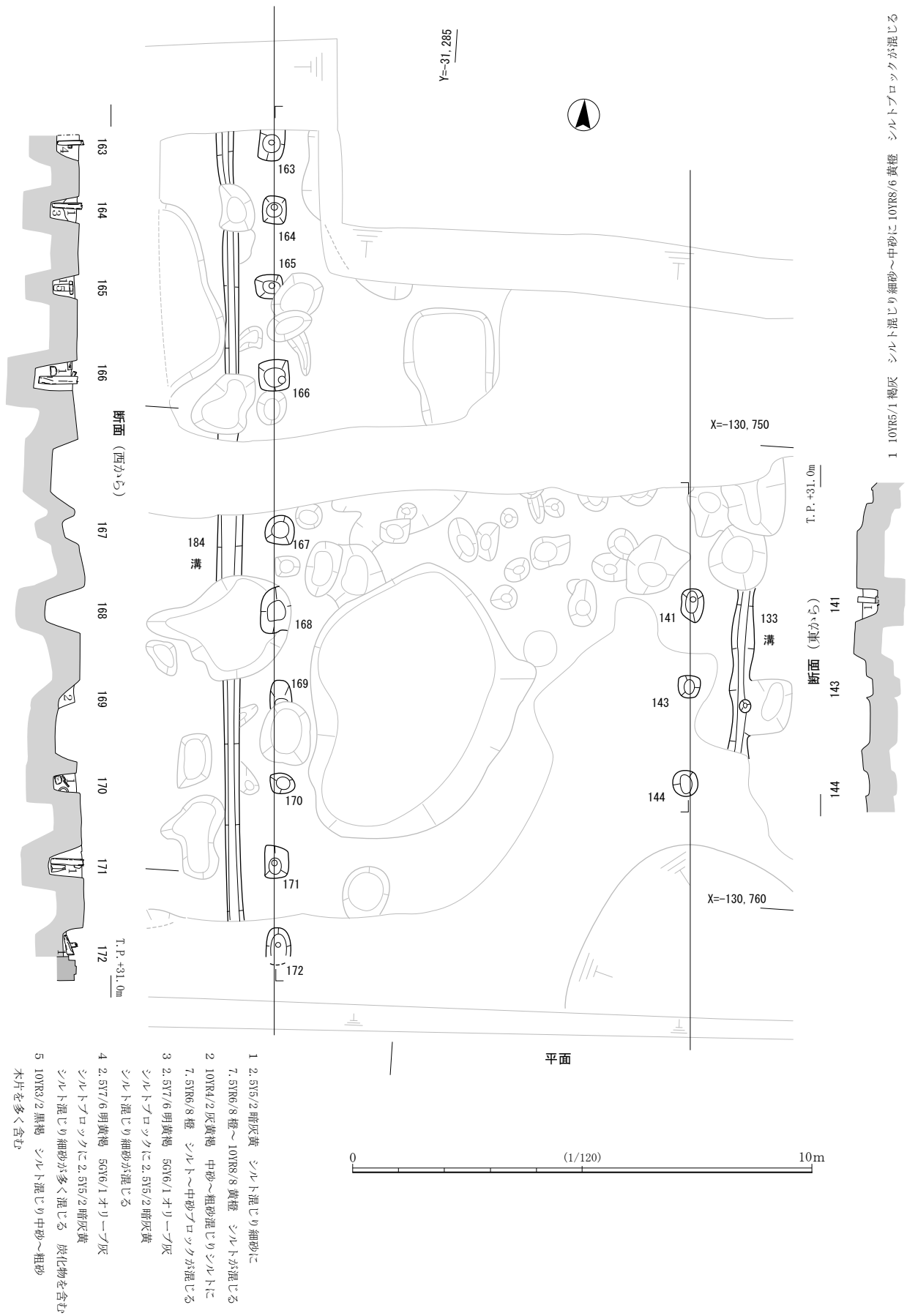


図66 10区 第2面熔填作業場 (西)



ンクリート基礎である。東西・南北とも 8.5 m以上の規模がある。第 3 号雑器庫は、昭和 14 (1939) 年の「事故発生直以前ニ於ケル弾薬調製作業班ノ配置及完成弾薬格納状況要図」には描かれているが、同年の「禁野倉庫大阪工廠移管要図」には記載がないことから、3 月 1 日の爆発により廃絶したものと推測できる。

**熔填作業場 (東)** 10 区東部、第 3 号雑器庫の南西側に位置する。検出できた範囲では、6 ピットが建物の最も北東に位置しそこから南の 17 ピットまで 19.5 m なので南北はそれ以上、73 ピットと 21 ～ 29 ピットが建物西辺と推定できるので東西は約 9 m の規模となる。ピットの埋土は、N2/ 黒色細砂～粗砂混じりシルトに 5Y6/2 灰オリーブ色シルトのブロックや 10G7/1 明緑灰色粗砂混じりシルトが混じる。柱根は、東辺の 13 ピットと西辺の 21・23～29 ピットで検出できた。この建物は『昭和 12 年度大阪陸軍兵器支廠歴史』記載の、昭和 12 年 11 月 3 日起工、同年 12 月 20 日竣工の熔填作業場のうち東側のものに該当すると考えられる。面積は 378 m<sup>2</sup>と記入されており、東西が約 9 m (5 間) であることから、南北約 42 m (23 間) の規模であったと推定できる。また、その位置関係から、37 溝は建物東側の、66 溝は西側の雨落ち溝であったと考えられる。

なお、東西の熔填作業場とその間にある 2 棟の箱詰作業場は、いずれも昭和 12 年の「軍需動員ニ伴フ臨時構築物」であるためか、コンクリート製の重厚な基礎はなく、掘立柱建物として建てられている。

**熔填作業場 (西)** (図 66 写真図版 41 - 137) 10 区西部に位置する。ピット (写真図版 41 - 138 ～ 142) から出土した柱材の存在などから、おおむね等間隔に掘削された 141・143・144 ピットが熔填作業場の東辺、163～172 ピットが西辺に該当すると考えられる。この建物も上記『支廠歴史』に 630 m<sup>2</sup>と記されており、東西が約 9 m (5 間) であることから、南北約 70 m (38 間) と南北に細長い建物であったと推定できる。なお、昭和 14 (1939) 年の「事故発生直以前ニ於ケル弾薬調製作業班ノ配置及完成弾薬格納状況要図」には、この建物の南端に直径 13 m の「爆発ニ依リ生シタル漏斗孔」が記入されており、10 区の南辺でそれと思われる穴が検出されたので、10 区南辺がこの建物の南端に近いと推定できる。また、熔填作業場 (東) の場合と同様にその位置関係から、133 溝は建物東側の、184 溝は西側の雨落ち溝であったと考えられる。両溝とも、重複関係にある爆発後の土坑やピットよりも古く、時期的にも整合する。

**箱詰作業場 (東) (西)** 昭和 12 (1937) 年の「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」に「(朱書ハ軍需動員に伴フ臨時構築物ヲ示ス)」として追記された配置図には、東西の熔填作業場の間に、それらよりも明らかに南辺が北に寄った箱詰作業場が 2 棟描かれている。位置的に 10 区中央部北側の張り出し部分のピットのいずれかがそれらを構成する可能性が高く、なかでも柱根の残っている 79・247・249 ピットがそれらの柱穴であると推定できる。熔填作業場 (東) の東西幅が約 9 m (5 間) であることと昭和 12 年や 14 年の配置図では建物がおおむね等間隔に配置されていることから、79 ピットが箱詰作業場 (東) の西辺の柱穴、247 ピットが箱詰作業場 (西) の南東角、249 ピットが同建物の南辺中央の柱穴であると考えられる。加えて、昭和 14 (1939) 年の「事故発生直以前ニ於ケル弾薬調製作業班ノ配置及完成弾薬格納状況要図」にこの 2 棟の箱詰作業場に該当する建物の内部に小規模な爆発穴が複数描かれている姿が、10 区中央部北側の張り出し部分の検出状況と一致する。

**軽便軌道** 熔填作業場 (東) の西側に南北方向に敷設されている。昭和 12 (1937) 年 12 月 28 日に起工された「鉄道側線延長 115 m」に該当するものと推定される。軍需動員に伴う臨時構築物とし

て急遽敷設されたためか、枕木は禁野火薬庫で多くみられるコンクリート製ではなくスギ材で遺存状況は概して悪い。その中で比較的残りの良い木製枕木（図 143 - 227）は、長さ 97 cm・直径 5～6 cm の幹に加えて枝も残っていた。その他の枕木も長さ 87～103 cm・直径 5～9 cm で、鉄製犬釘の残るものもみられた。その状況から軌間（ゲージ）は 500 mm と判明した。

**弾薬筒完成場及熔填場** 10 区に西辺際に南北にコンクリート基礎が連なる。各年の配置図と比較すると、昭和 8 年から 14 年の爆発まで存在した弾薬筒完成場及熔填場の東辺に該当すると考えられる。昭和 14（1939）年の「事故発生直以前ニ於ケル弾薬調製作業班ノ配置及完成弾薬格納状況要図」には、この建物内部の南側には直径 9 m の「爆発ニ依リ生シタル漏斗孔」が記録されており、この爆発に伴いコンクリート基礎が建物東辺南部で外側に向けてずれて膨らんだものと推定できる。

なお、細かいことだが、昭和 8（1933）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図」には弾薬筒完成場「及」熔填場、昭和 11（1936）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」には弾薬筒完成場「竝」熔填場、昭和 12（1937）年の同図には弾薬筒完成場「並」熔填場と記されている。

**219 枕木群**（写真図版 41 - 143） 10 区南西部では、6 本のコンクリート製枕木が出土した。2 本ずつ寄り添うように南北方向に縦に 3 組並んでいる。北側の 2 本（図 144 - 231・232）は長さ 90 cm、中央と南側（図 144 - 233）の計 4 本は 105 cm のコンクリート製枕木である。周囲に掘方などは認められず、枕木は当時の地表面に置かれたものと考えられる。

枕木の洗浄を行ったところ、このうち 2 点について新聞が転写されていることが判明した。いずれも大阪毎日新聞のもので、南西から出土した枕木には昭和 2（1927）年 8 月 10 日（水）と 13 日（土）の、北東から出土した枕木には同年 10 月 29 日（土）と 30 日（日）の記事が裏写りしている。新聞が転写されていたのは、枕木の一面のみであった。

この枕木は昭和 2 年以降に製造されたことが明らかである。その時期・位置・検出状況から、弾薬筒完成場及並熔填場の東辺外側に付属していた熔填場または汽罐室の土台として使われていた可能性もある。昭和 9（1934）年の「大阪兵器支廠禁野弾薬庫要図」では弾薬筒完成場及並熔填場の東辺の外側に張り出して熔填場とその南側に小さな汽罐室、昭和 10（1935）年の「大阪兵器支廠禁野弾薬庫要図」と昭和 11（1936）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」には同様な配置図に熔填場とキカン室が描かれ、昭和 12（1937）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」ではキカン室を描いていた線は消えたが、熔填場とキカン室という文字が残る。昭和 14（1939）年の「事故発生直以前ニ於ケル弾薬調製作

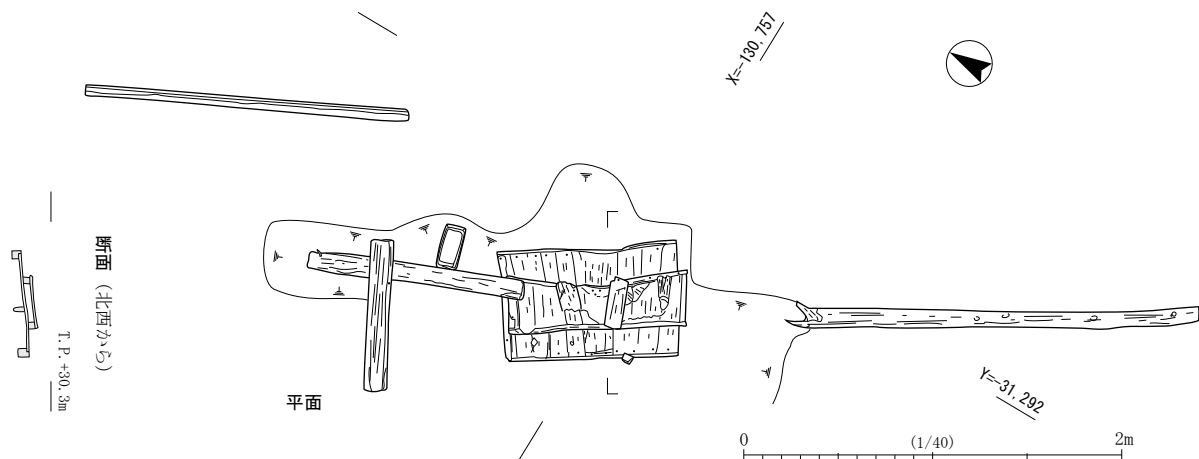


図67 10区 第2面250構造物

業班ノ配置及完成弾薬格納状況要図」では、弾薬筒完成場並熔填場の位置に建物の表現が残り、そこに付属していた熔填場やキカン室は消えている。

**250 構造物** (図 67 写真図版 41 - 144) 10 区南西部に位置する。縦 60 cm・横 90 cm・厚さ約 10 cm の型枠に類似するが 2 段重ねになった木製品と、一辺 9 ~ 10 cm と一辺約 4 cm の角材がある。位置関係からみると、昭和 14 年の爆発により吹き飛んだ弾薬筒完成場並熔填場の建築部材の一部の可能性がある。金属製品 (図 137 - 135) が出土した。

**爆発穴** 10 区第 2 面では、昭和 14 年の爆発により生じた穴も特徴的な遺構である。「事故発生直前ニ於ケル弾薬調製作業班ノ配置及完成弾薬格納状況要図」に「爆発ニ依リ生シタル漏斗孔」と記された漏斗状の穴が複数確認できた。このなかでも最大のものが 10 区南東部から 10 - 2 区にかけて検出した **730 爆発穴** で、直径 20 m と記録されたものに該当しよう。なお、10 - 2 区では、第 2 面調査後一度埋め戻し、その後横矢板を設置しつつ機械掘削を行ったところ、その全域が直径 20 m の爆発穴内であることが判明した。また、10 区南辺西寄りの **731 爆発穴** が直径 13 m の、10 区南西隅で上記の弾薬筒完成場及並熔填場内に想定される **732 爆発穴** が直径 9 m の「爆発ニ依リ生シタル漏斗孔」に該当する可能性が高い。

この他、10 区北東部の **4・36・45・51・55・56・62・64・65・70・74・76・77** 土坑、10 区中央部北側の張り出し部分の **83・110・114・115・118・121・122・123** 土坑や建物を構成しないピット群、10 区西部の **159・162・185・195・196・205・213** 土坑や建物を構成しないピット群なども、黒々としたその埋土や砲弾片や瓦礫が出土することから、爆発穴あるいは爆発の事後処理のために掘られた土坑と考えられる。

砲弾片や瓦礫に加え、**7** ピットから砲弾 (図 139 - 150) や金属製品 (図 138 - 138)、**54** ピットから薬莖 (図 140 - 161)、**56** 土坑から木ネジ (図 137 - 103)、**62** 土坑から分銅 (図 128 - 6・7) や薬莖 (図 140 - 162 ~ 164・172) や砲弾関連品 (図 140 - 188)、**77** 土坑から金属製品 (図 137 - 131) や薬莖 (図 140 - 168)、**83** 土坑や **122** 土坑から木製の托板 (図 141 - 204)、**162** 土坑から樋受 (図 128 - 16) や薬莖 (図 140 - 174)、**179** ピットから啄螺 (図 140 - 179)、**189** ピットから砲弾 (図 139 - 147) や手違い (図 136 - 90)、**196** 土坑から金属製品 (図 137 - 129)、**1014** ピットから紙製品 (写真図版 75 - 1095 ~ 1099) が出土した。

**溝** 上述のように **37** 溝と **66** 溝は熔填作業場 (東) の、**133** 溝と **184** 溝は熔填作業場 (西) の雨落ち溝と考えられる。10 区北東部にある **31・38・59・63・66・67・68・71** 溝は、熔填作業場 (東) の内外という違いはあるものの、比較的小規模で南北を主軸方位とし昭和 14 年爆発関連層である黒色土を埋土とするという諸点で共通する。10 区西部に位置し南北方向に延びる **236・239** 溝や、主軸方位の異なる **225** 溝や **231** 溝も同様の埋土であり、昭和 14 年の爆発で廃絶した溝であろう。

瓦礫のほかに、**37** 溝から木ネジ (図 137 - 104・105) や薬包 (写真図版 88 - 1120)、**59** 溝などから瓦 (図 133 - 62・63) が出土した。

### 第 3 面 (図 68 写真図版 42 - 145 ~ 147) 中世~近世

禁野火薬庫の盛土層・旧作土層・近世包含層 (第 II 層) を除去して検出した第 III 層の上面である。面の高さは、中央南部が T.P.+29.8 m と高く、西部で T.P.+29.2 m まで、北東部で T.P.+29.1 m まで下がる。遺構として、溜池、土坑、溝を検出した。

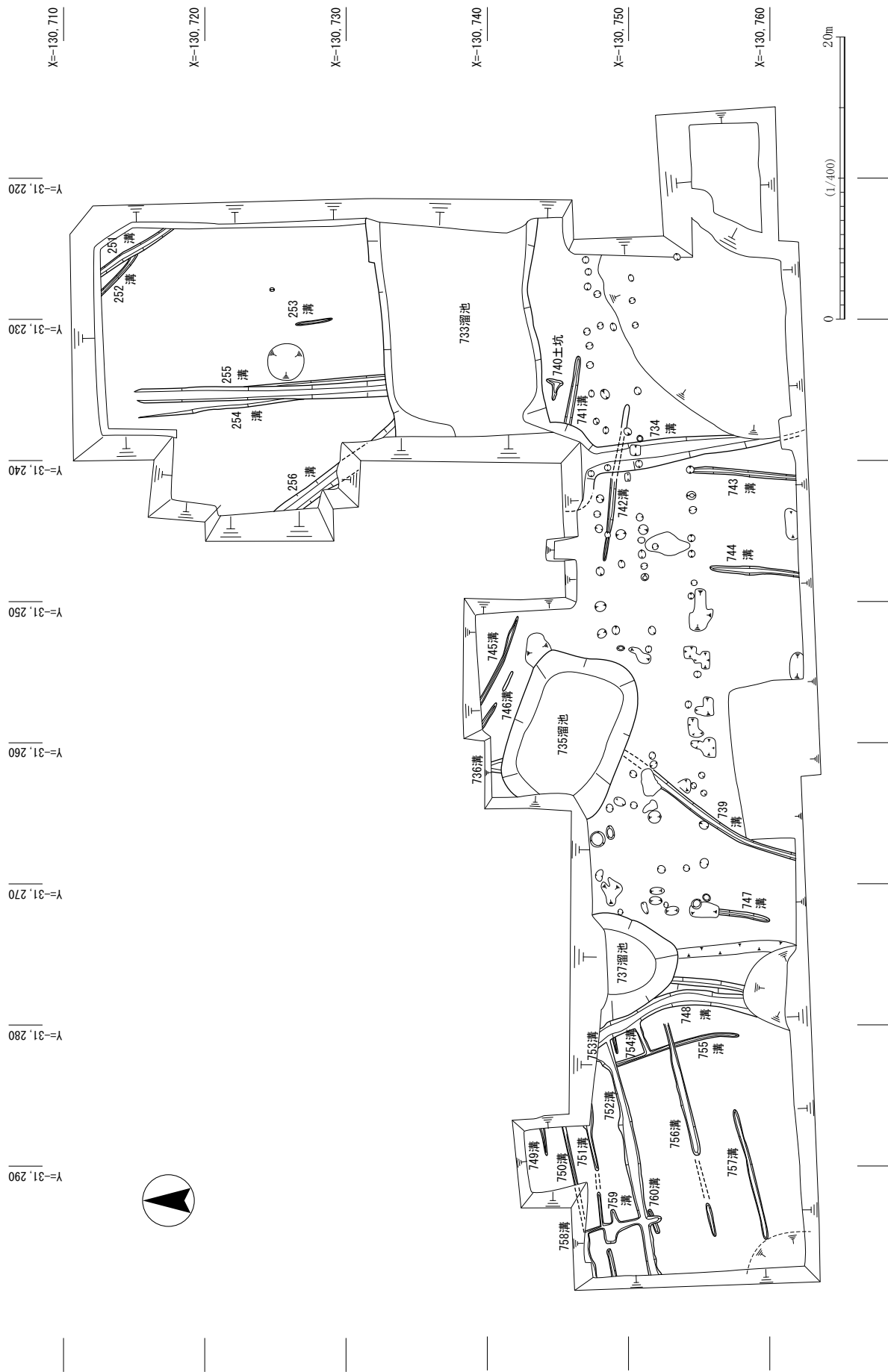


图 68 10 区 第 3 面

**733 溜池** 10区東部に位置する。南北10.5 m、東西は調査区幅の15 mよりは大きく、南西側に張り出しそこに**734 溝**が取り付く。深さは0.9 m以上。出土遺物なし。

**735 溜池** 10区中央部北側に位置する。平面隅丸方形で、西北西 - 東南東に長く、長軸約11 m、短軸8.0 m、深さ1 m以上。出土遺物なし。南側に**739 溝**が取り付くと考えられる。

**737 溜池** 10区西部に位置する。平面楕円形の南半を検出したような状況である。東西幅7.0 m、南北検出長5.6 m、深さ1.1 m以上。出土遺物なし。この溜池に出入りする溝は明らかにできなかった。

**740 土坑** 10区東部、733溜池の南側に位置する。平面T字状で、東西1.4 m、南北1.2 m、深さ14 cm。埋土は、2.5Y5/1 黄灰色粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**251 溝** 10区北東隅に位置する。主軸方位は北北西 - 南南東。検出長6.3 m、幅0.5 m、深さ8 cm。埋土は、7.5Y5/1 灰色～2.5Y6/2 灰黄色粗砂混じりシルト。瓦細片が出土した。

**252 溝** 251溝と接続し、北西 - 南東に延びる。検出長3.8 m、幅0.3 m、深さ2 cm。埋土は、2.5Y6/2 灰黄色粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**253 溝** 254～256溝とともに10区北東部に位置する。主軸方位はほぼ南北だが、わずかに北北西 - 南南東に傾く。長さ2.6 m、幅0.2 m、深さ4 cm。埋土は、252溝と同じ。土器細片が出土した。

**254 溝** 主軸方位はほぼ南北だが、わずかに北で西に偏する。重複関係にある255溝よりも古い。検出長17.6 m、幅1.4 m、深さ10 cm。埋土は、2.5Y5/1 黄灰色粗砂～礫混じりシルト。黒色土器A類碗や製塩土器細片などが出土した。

**255 溝** 主軸方位は南北。検出長17.7 m、幅1.0 m以上、深さ22 cm。埋土は、10YR5/6 黄褐色粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**256 溝** 主軸方位は北西 - 南東。検出長10.5 m、幅1.1 m、深さ29 cm。埋土は、2.5Y5/1 黄灰色粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**739 溝** 10区中央部に位置する。南部では北北東 - 南南西、北部では北東 - 南西を主軸方位とし、北東端で735溜池につながると考えられる。検出長約13 m、幅0.5 m、深さ12 cm。埋土は、2.5Y8/3 浅黄色～7/6 明黄褐色粗砂～礫混じりシルト。土器細片が出土した。

**748 溝** 10区西部に位置する。検出した範囲では、南北を主軸方位としつつ、東に張り出す弧状を描く。検出長約11 m、幅0.9～1.1 m、深さ16 cm。埋土は、2.5Y5/1 黄灰色粗砂混じりシルト。陶器の細片などが出土した。

**その他の溝** 741・742溝は10区東部に位置し、主軸方位はわずかに西北西 - 東南東。743・744・747溝は10区中央部南側に位置し、主軸方位はほぼ南北。745・746溝は10区中央部北側に位置し、主軸方位は西北西 - 東南東。749～754・756・757・759・760溝は10区西部に位置し、主軸方位は東北東 - 西南西。755・758溝はそれらと直交し、主軸方位を北北西 - 南南東とする。以上の多くは、当面の直上にみられる10YR5/6 黄褐色粗砂混じりシルトなどを埋土とする。いずれも耕作に伴う溝と考えられる。

752溝から15世紀後半の陶器すり鉢、765溝から製塩土器細片、750・757溝から土器細片などが出土した。

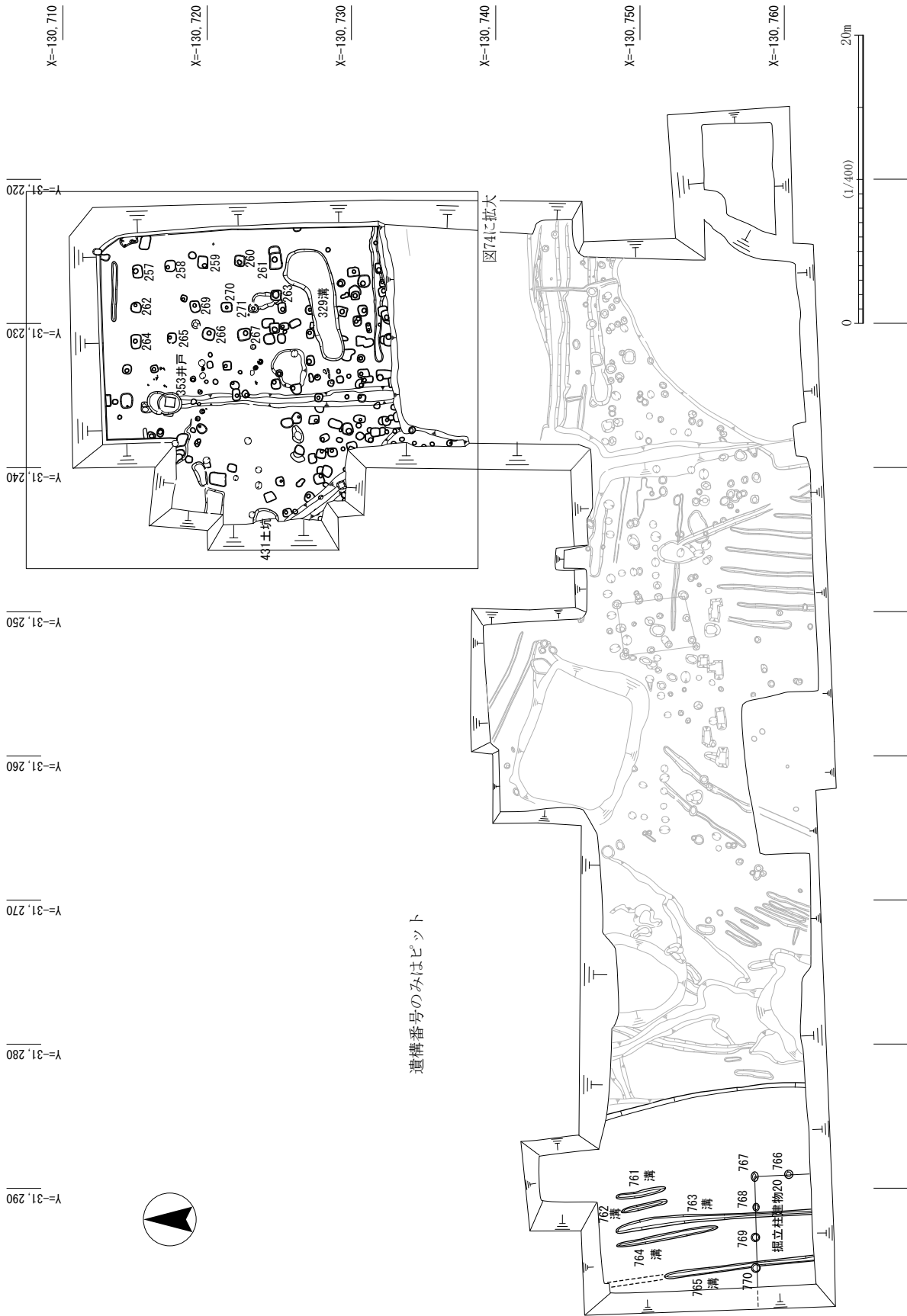


図 69 10 区 第 4 面

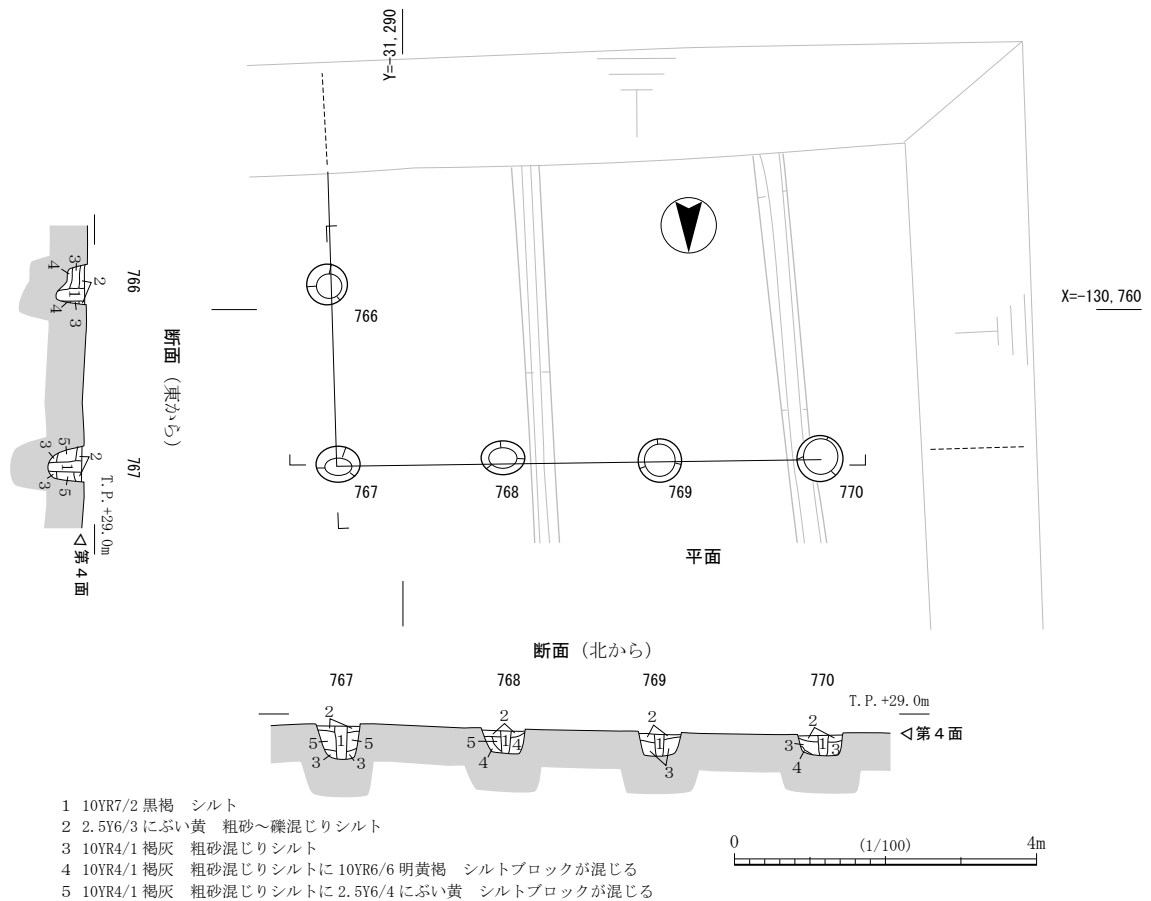


図70 10区 第4面掘立柱建物20

### 10区 (A 1棟) 第4面 (図69 写真図版43-148・149) 古代

10区には基本層序の第IV層は分布しないので、第III層・第V層を除去して検出した第VI層の上面である。その第VI層も10区では西部や北東部(A2棟)にのみ分布し、10区南側の広い範囲では地山層上面に達した。この項では、第4面としては10区西部に分布する第VI層の上面部分を報告する。その部分の面の高さは、T.P.+28.7～29.0m。遺構として、掘立柱建物と溝を検出した。

10区北東部(A2棟)部分については後述する。

**掘立柱建物20** (図70) 10区南西隅に位置する。方位N89°E、柱間寸法いずれも2.1mで並ぶ767～770ピットと、その東端の767ピットの南2.3mに位置する766ピットの計5個の柱穴を検出した。桁行3間以上・梁行1間以上の側柱建物と推定される。掘立柱建物を構成する各ピットから古代の土器細片が出土した。

**761～765溝** 10区西部にあり、ほぼ南北を主軸方位とする。いずれも耕作に伴う溝と考えられ、第3層下部である10YR5/2灰黄褐色粗砂混じりシルトを埋土とする。764・765溝から古代の土器細片が出土した。

### 10区 (A 1棟) 第5面 (図71 写真図版43-150～153) 古代以前

地山層(第VII層)上面である。面の高さは、10区中央部南側でT.P.+29.7mと高く、北東部でT.P.+28.8mまで、西部でT.P.+28.6mまで低くなる。この項では10区南側(A1棟)の第5面で検出した掘立柱建物、土坑、溝、ピットについて報告する。

Y=31.290

Y=31.280

Y=31.270

Y=31.260

Y=31.250

Y=31.240

Y=31.230

Y=31.220

X=130.710

X=130.720

X=130.730

X=130.740

X=130.750

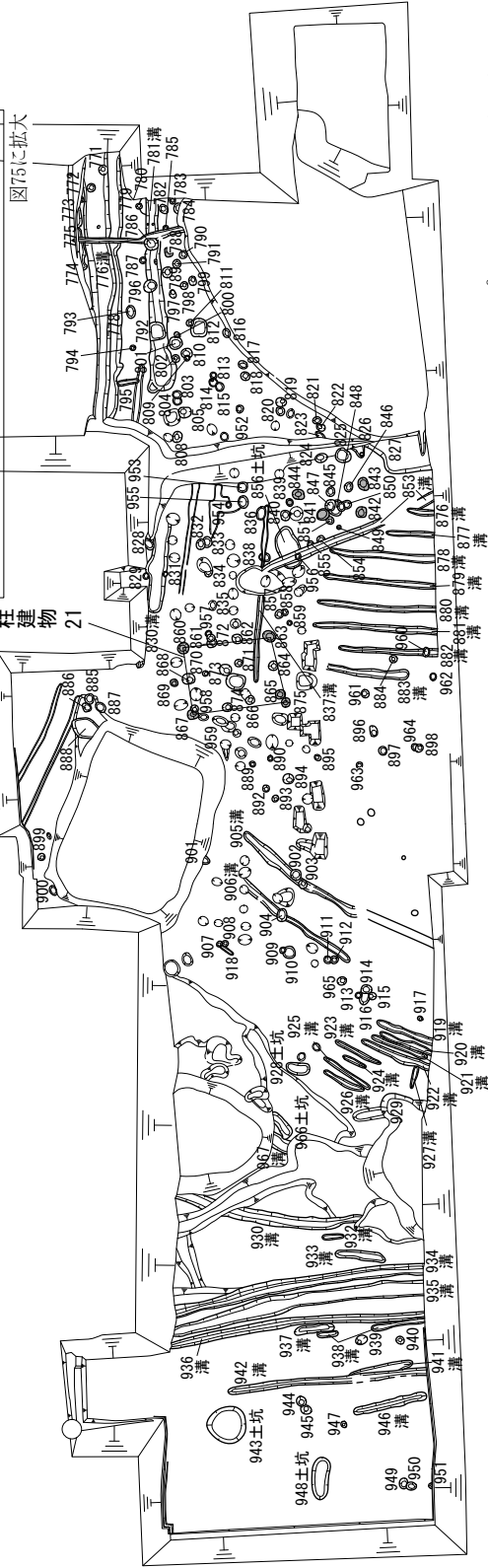
X=130.760



遺構番号のみはビット

● 柱痕跡あり

掘立柱建物 21



20m

(1/400)

図 71 10 区 第 5 面



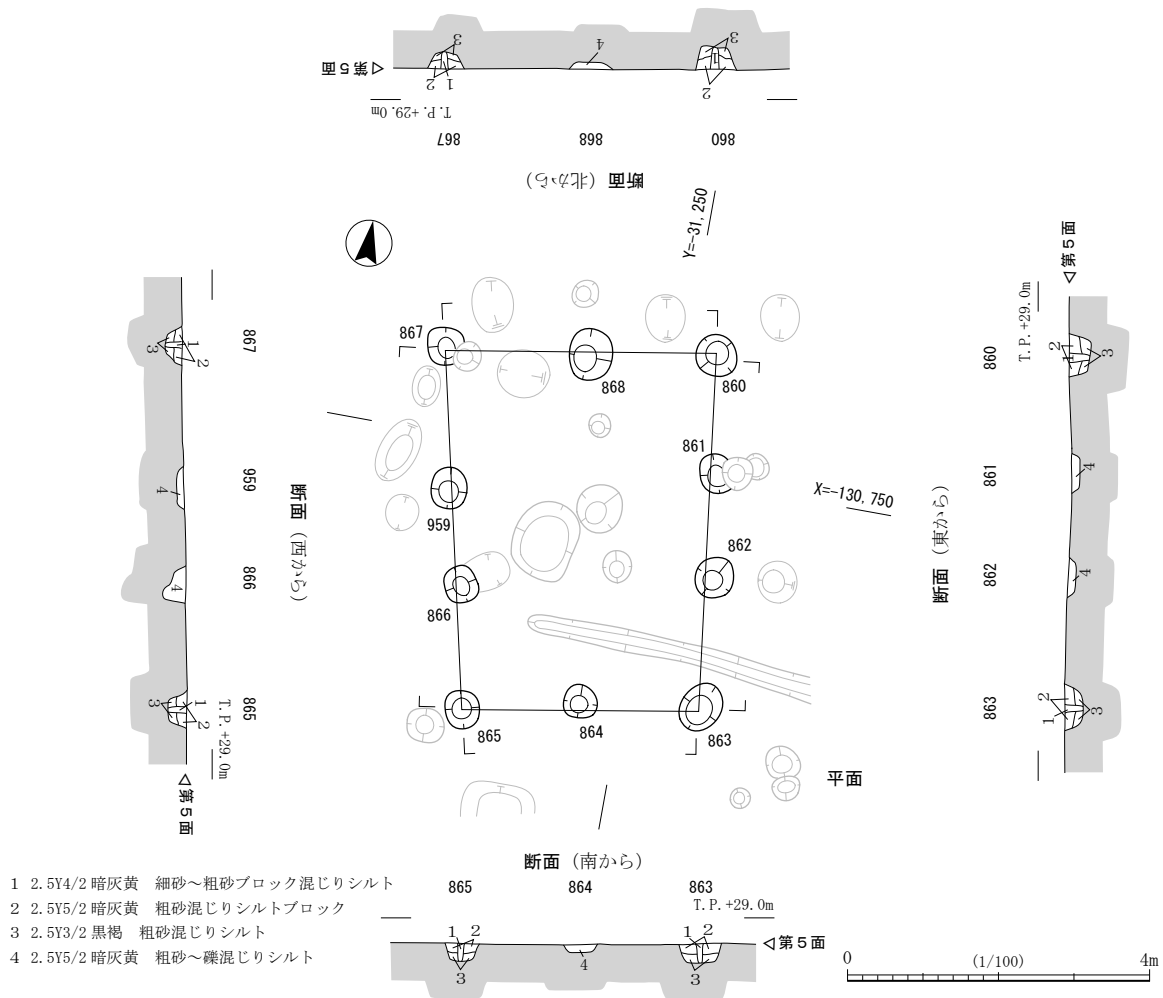


図72 10区 第5面掘立柱建物21

**掘立柱建物 21** (図 72) 10区中央部に位置する。主軸方位はN 9° Wで、桁行3間(東4.7 m、西4.8 m)・梁行2間(北3.5 m、南3.2 m)、面積15.9 m<sup>2</sup>の側柱建物である。四隅のピットは深くて柱痕跡が認められるが、その他のピットは浅くて単層である。北西隅の867ピットからのみ古代の土器細片が出土した。

**827 土坑** 10区南東部に位置する。南側は調査区外に広がり、東側は第2面の730爆発穴に攪乱されている。東西2.0 m以上、南北3.3 m以上、深さ15 cm。埋土は、上層が2.5Y6/1黄灰色～6/2灰黄色粗砂混じりシルト、下層が2.5Y3/2黒褐色粗砂混じりシルト。8世紀後半の須恵器(図158-615・616)などが出土した。

**856 土坑** 10区中央部やや東寄りに位置する。重複関係にある853溝よりも古い。平面は東北東-西南西に長い楕円形で、長径2.2 m、短径1.2 m、深さ8 cm。埋土は、2.5Y5/1黄灰色粗砂混じりシルト。6世紀末～7世紀初頭の須恵器(図158-617)などが出土した。

**928 土坑** 10区中央部西側に位置する。平面は南北に長い楕円形で、長径1.3 m、短径0.6 m、深さ9 cm。埋土は、2.5Y5/1黄灰色粗砂混じりシルトに炭が含まれる。8世紀後半の須恵器杯蓋・皿蓋(図158-618・619)などが出土した。

**943 土坑** 10区西部に位置する。平面はほぼ円形で、直径約2.0 m、深さ20 cm。埋土は、10YR3/2黒褐色粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

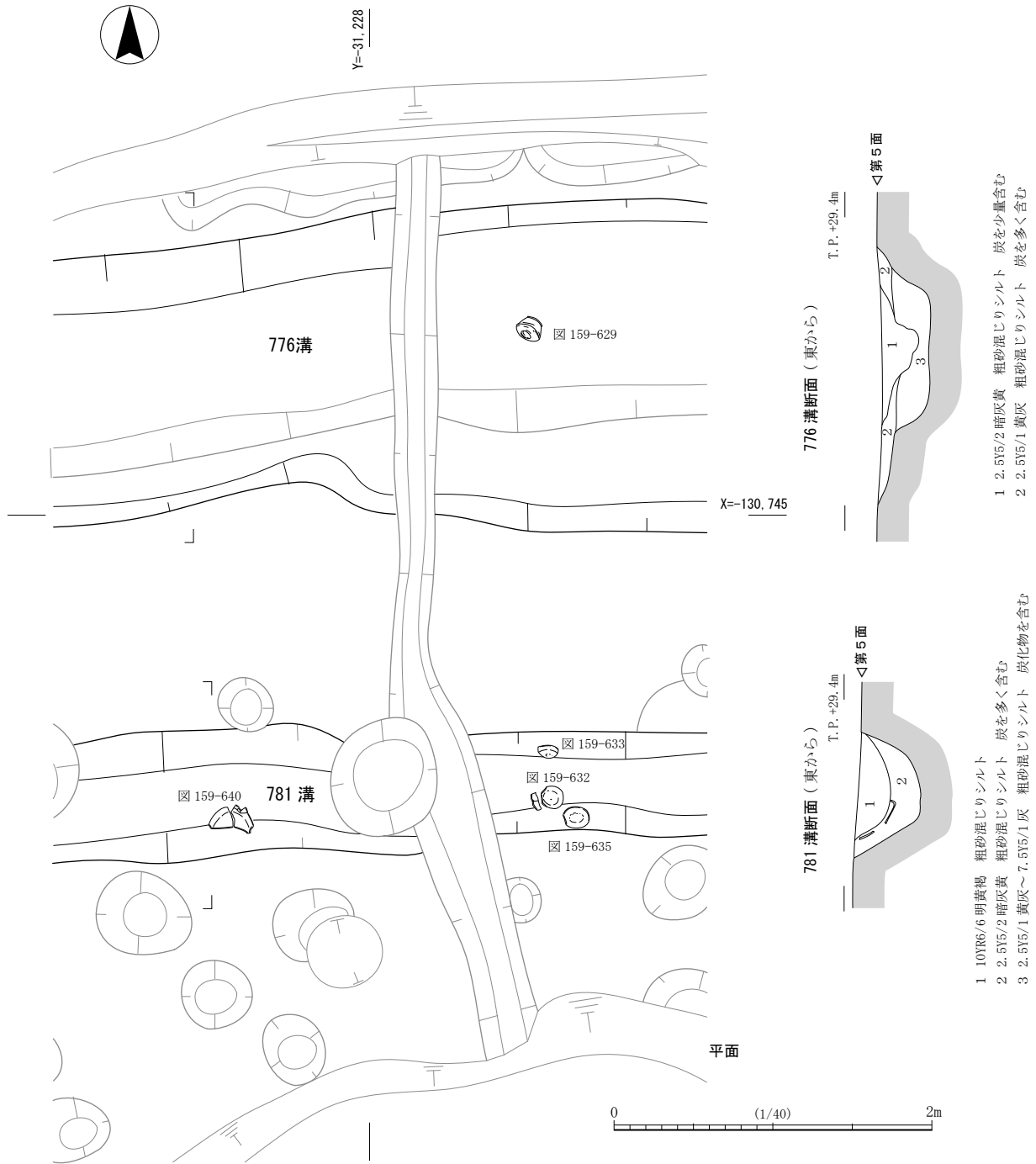


図73 10区 第5面776・781溝

**948 土坑** 10区西部、943土坑の南南西約4mに位置する。平面は東西に長い楕円形で、長径2.2m、短径1.0m、深さ20cm。埋土は、943土坑と同じ10YR3/2黒褐色粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**966 土坑** 10区中央部、上記928土坑の西北西約2.5mに位置する。平面は北東-南西に長い楕円形で、長径1.5m、短径0.6m、深さ8cm。埋土は、2.5Y5/1黄灰色粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**775 溝** 10区東部に位置する。776・781溝と重複関係にあり、それらよりも新しい。検出長は5.7mだが、北半は南北を主軸方位とし、幅0.3m、深さ6cm、南半では南でわずかに東偏し、幅0.5m、深さ12cm。埋土は、2.5Y6/1黄灰色細砂混じりシルト。古代の土器細片が出土した。

**776 溝** (図73) 主軸方位は東西で、検出長約14.5m、最大幅2.0m、深さ33cm。埋土は、図73の

ように3層に分かれる。8世紀前半～中頃の土師器・須恵器（図159-620～629）などが出土した。

**781溝**（図73 写真図版51-191）776溝の南約1.3mに並行する。検出長10.2m、最大幅1.4m、深さ41cm。図73のような状況で主に8世紀中頃～後半の土師器・須恵器（図159-630～640）などが出土した。

**795溝** 776溝の南側に位置する。主軸方位はほぼ南北だが、北でわずかに西偏する。長さ1.1m、幅0.3m、深さ6cm。埋土は、2.5Y6/1黄灰色細砂混じりシルト。古代の土器細片が出土した。

**830溝** 10区中央部北東側に位置する。主軸方位はほぼ東西だが、西でわずかに北偏する。検出長6.3m、幅0.8mだが一部では1.2mにまで広がり、深さ17cm。埋土は、上層が2.5Y5/2暗灰黄色粗砂混じりシルト、下層が2.5Y4/1黄灰色粗砂混じりシルト。8世紀前半の須恵器壺片などが出土した。

**853溝** 10区中央部南東側に位置する。主軸方位は北北西-南南東。途中途切れる部分もあるが、検出長約10m、幅0.5m、深さ18cm。埋土は、2.5Y5/1黄灰色粗砂混じりシルト。6世紀末～7世紀初頭の須恵器蓋などが出土した。約30°という中途半端な交差角ではあるが、耕作に伴うと考えられる876～878溝の北端を制するようにのびており、その北東側にはピットが多くみられることから、853溝には区画機能が想定できる。

**905・906溝** 10区中央部に位置する。905溝と906溝の主軸方位はN36°E。両溝ともごくごくゆるく弧を描きつつ、心々距離およそ2.0m、溝の内側間1.4～1.9mで並行している。溝よりも新しいピットと重複しているが、溝間には他の遺構が存在しない。以上の平面形からは両溝が道路側溝とも考えられる。しかし、両溝は調査区を貫通せず、2.5Y5/2暗灰黄色粗砂～礫混じりシルトという埋土は後述の耕作に伴う溝と共通し、道路側溝と推定した9区第6面の197・199溝のような溝間の路盤状の層もない。したがって、905・906溝も耕作に伴う溝であろう。**905溝**からのみ古代の土器細片が出土した。

**930溝** 10区西部に位置する。主軸方位はほぼ南北だが、北側でごくゆるやかに東へカーブを描く。検出長約10m、幅0.7m、深さ14cm。埋土は、2.5Y7/2灰黄色粗砂混じりシルト。8世紀後半の須恵器壺（図159-641）などが出土した。

**934～936溝** 10区西部に位置する。耕作に伴う溝に比べてやや規模が大きく、埋土も異なる。主軸方位はほぼ南北だが、北で西偏する。長さはいずれも13.5m以上である。幅と深さは、934溝が0.7mと27cm、935溝が1.0mと14cm、936溝が0.5mと17cm。埋土は、2.5Y3/2黒褐色粗砂混じりシルトで共通する。**934溝**から製塩土器細片、**935溝**から8世紀中頃の土師器（図159-642）・須恵器など、**936溝**から古代の土器細片が出土した。

周辺の調査成果を援用すると、これらの溝よりも西側は、南北方向の道路であった可能性もある。

**その他の溝** **837溝**は10区中央部に位置し、主軸方位はほぼ東西だが、西でわずかに北偏する。埋土は、2.5Y6/2灰黄色粗砂混じりシルト。**876～883溝**は10区中央部南東側に位置し、主軸方位はほぼ南北。埋土は、2.5Y6/2灰黄色粗砂混じりシルト。**919～926溝**は10区中央部南西側に位置し、主軸方位を北北東-南南西。埋土は、2.5Y5/1黄灰色粗砂混じりシルト。**932・933・937・938・941・942・946溝**は10区西部に位置し、主軸方位はほぼ南北とする。埋土は、やはり2.5Y5/1黄灰色粗砂混じりシルト。これらの溝からの出土遺物は少なく、**878溝**から古代の土器細片、**937溝**から8世紀前半頃の須恵器壺片などが出土したのみである。

これらの溝は、形態と埋土と僅少な遺物からみて、耕作に伴うものと考えられる。

ピット 10区(A1棟)の第5面でも、とくに中央部以東で多くのピットを検出した。それらのうち柱痕跡が認められたのは、掘立柱建物21の四隅のピット以外では、10区東部の783・788ピット、中央部南東側の839・841～844ピット、掘立柱建物21周辺の869・875ピットの計9個のみであった。その中では839・841～844ピットが分布状況からみて掘立柱建物を構成する可能性がある。その他のピットは単層のものが多く、建物などの復元には至らなかった。ピットから出土した土師器・須恵器・瓦(図158-605～614)はいずれも8世紀の所産である。

#### 10区(A2棟)第4・5面(図74～76 カラー写真図版2-3 写真図版44-154～45-157) 古代

10区北東部(A2棟)の古代の遺構面である第4・5面においては、今回の調査では最も密度高く、井戸、掘立柱建物や柱列を構成するピット、土坑、溝などの遺構が検出された。面の高さは、第4面でT.P.+28.9～29.2m、第5面ではT.P.+28.0～29.1mと、おおむね10cm程度の差であった。

第4面の平面(図74)では、作業痕跡として、柱穴の段下げ時に柱痕跡が見つかったピットについては下端ではなく柱痕跡の平面形を図化してある。

第5面については、第5面で検出した遺構とともに第4面で検出した遺構を第5面まで掘り下げた状況を薄く示し(図75)、さらにその図に第4・5面で検出した掘立柱建物・柱列を加えた(図76)。

以下、堆積状況や検出状況に応じて、第4面と第5面で検出した遺構を合わせて報告する。なお、10区北東部(A2棟)の遺構番号は、第4面検出が257～447、第5面検出は448～770・968～1013である。

**井戸** A2棟北西部に位置する井戸は、630井戸→357井戸→353井戸(図77)の順に重複している。

**630井戸** 第5面検出。平面ほぼ円形で、直径3.1～3.5m。その後重複して353・357井戸が設けられているため、その構造などは明らかではない。

掘方から、8世紀後半頃の土師器・須恵器(図169-787～791)や製塩土器細片などが出土した。

**357井戸** 第4面検出。353井戸により南部を壊されているが、平面は直径約1.5mの円形と推定できる。

8世紀後半の土師器杯(図169-783)や須恵器甕、製塩土器(図169-784～786)などが出土した。

**353井戸**(図78 写真図版46-158～47-166) 第4面検出。重複関係からみて、3基のうち最も新しい。平面円形で、直径1.5～1.6m、検出面からの深さ1.6m。井戸枠はヒノキ材(図165-752～168-770)を用いた横板井籠組構造で、井戸底の集水施設もヒノキ材の曲物である。

8世紀の土師器・須恵器(図169-771～775)も混じるが、製塩土器(図169-778・779)、瓦(図169-780～782)、9世紀の須恵器(図169-776)、黒色土器、灰釉陶器(図169-777)などが出土した。

井戸同士の重複関係と主体を占める土器の時期から、8世紀後半～9世紀初頭の所産と考えられる。その点で、後述の掘立柱建物12が井戸屋形であった可能性が高い。

**掘立柱建物・柱列** 10区北東部(A2棟)の第4・5面の調査時点で、柱根や柱痕跡のあるピットを中心に検討し、掘立柱建物10棟と柱列2箇所(掘立柱建物・柱列1～12)を復元した。さらに、ピットの埋没状況からは根拠が劣るものの、平面分布などを考慮して掘立柱建物5棟と柱列2箇所(掘立

柱建物・柱列 13～19) を想定復元した。それらの遺構は、第4面で完結したものは「第4面」、第4面で検出したが第5面が露出していた部分に位置するものや第4面と第5面で検出したものは「第4・5面」、第5面で検出したものは「第5面」と記載した。

**掘立柱建物1** (図79 写真図版48-167) 第4面において明瞭に検出できた。A2棟北東部に位置する。主軸方位はN4°Wで、桁行4間(9.6m)・梁行2間(4.8m)、面積46.1㎡の側柱建物である。個々のピット(写真図版48-168～49-179)の埋土を図79に示す。東辺の259・260ピットと西辺の265・267ピットからはスギ材の柱根(図162-698・699・704・705)が出土し、その他のピットでも柱痕跡が認められた。

各ピットから8世紀中頃～末の土師器・須恵器・製塩土器・瓦(図162-693～697・700～703・706)などが出土した。

**掘立柱建物2** (図80) 第4・5面検出。A2棟南東部に位置する。ピットを8個検出したが、南部は第3面733溜池により攪乱されている。東西3間(4.8m)・南北2間以上の総柱建物であろう。全てのピットで柱痕跡が認められた。南北に長い建物と仮定すると、主軸方位はN5°Wとなる。後述する掘立柱建物9と重複関係にあり、それよりも新しい。掘立柱建物2・9の柱穴が重複する位置にある971ピットは、平面・断面とも他のピットと状況が異なっており、柱を抜き取った跡とも考えられる。

各ピットから8世紀中頃の土師器・須恵器(図162-707・708)、製塩土器、瓦片などが出土した。

**掘立柱建物3** (図81) 第4・5面検出。A2棟南西部に位置する。南部は攪乱されているが、主軸方位N3°W、桁行3間以上(6.5m以上)・梁行2間(4.5m)、面積29.3㎡以上の側柱建物である。建物東側の柱列の東側1.8mに平行して外周柱穴列が存在することから、東面廂と考えられる。柱痕跡が、身舎の西辺の286ピットと東辺の720ピットと外周柱穴列の579ピットで認められた。

北西隅の387ピットから、8世紀の土師器・須恵器(図162-709・711)とともに9世紀の土師器甕(図162-710)や緑釉陶器椀(図162-712)、瓦(図162-713)なども出土した。他のピットからの出土遺物は、製塩土器や瓦の細片が多い。

**掘立柱建物4** (図82) 第4・5面検出。A2棟西部に位置する。主軸方位はN87°E。桁行は5間以上(8.6m以上)で、調査区外さらに延びる可能性もある。梁行は2間相当(東4.1m、西4.0m)の長さがあるが、梁行中央の柱は確認できなかった。面積34.8㎡以上の側柱建物と考えられる。北西隅の647ピットからスギ材の柱根が出土し、柱痕跡が北東隅の655ピットと南西隅の679ピット以外の9個のピットで認められた。

南辺の663ピットに8世紀後半の須恵器蓋(図162-714)などがみられたほか、各ピットから古代の土器細片も出土した。

**柱列5** (図83) 第4・5面検出。掘立柱建物4と重複するが、ピット同士の切り合いはない。主軸方位N89°E、柱間寸法1.6～1.9mで並ぶピット4個で構成される。全てのピットで柱痕跡が認められた。掘立柱建物であれば、これらを南辺として北方に展開すると考えられる。あるいは、柵の可能性もある。

西端の648ピットの須恵器杯などの他、各ピットからも古代の土器や製塩土器の細片が出土した。

**掘立柱建物6** (図84) 第5面検出。A2棟中央部に位置する。掘立柱建物1と重複するが、ピット同士の切り合いはない。主軸方位N87°E、桁行2間(4.2m)・梁行2間(3.3m)、面積13.9㎡の側柱建物である。南辺中央の側柱は見当たらなかったが、東辺の520ピットからスギ材の柱根が出土し、

Y=-31, 240

Y=-31, 230



X=-130, 710

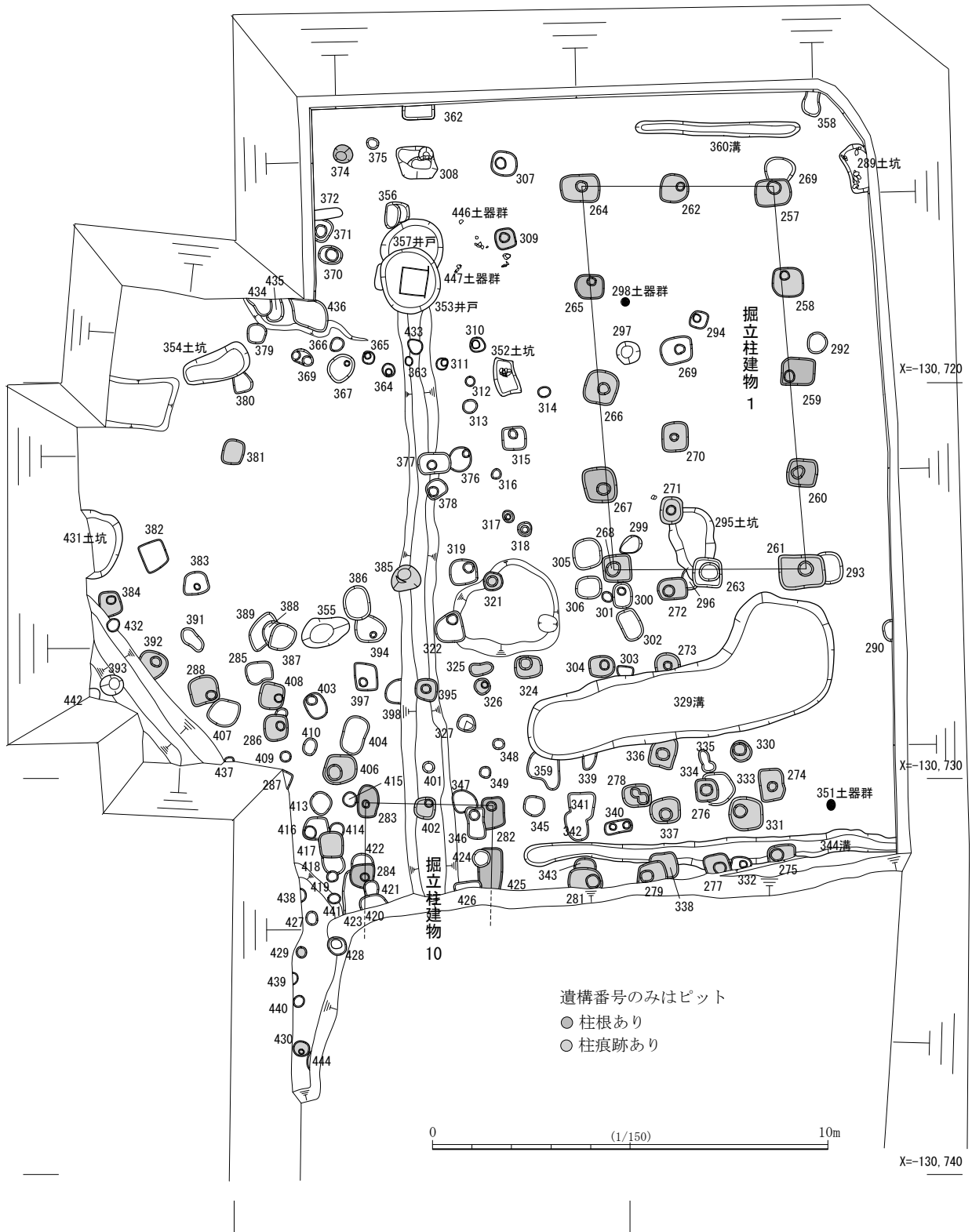
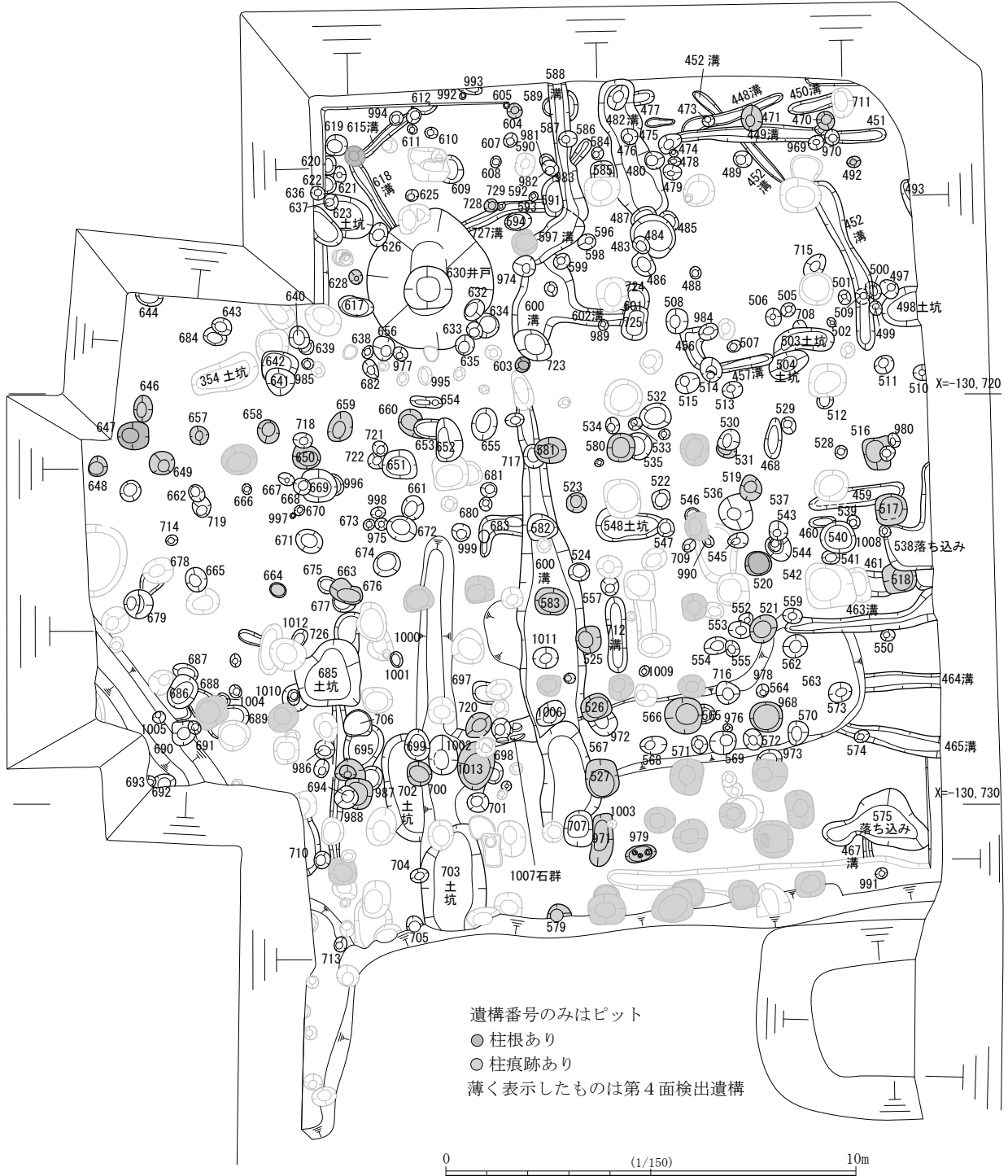


図74 10区(A2棟)第4面

Y=31,240

Y=31,230

X=130,710



X=130,740

図75 10区(A2棟)第5面

Y=-31, 240

Y=-31, 230



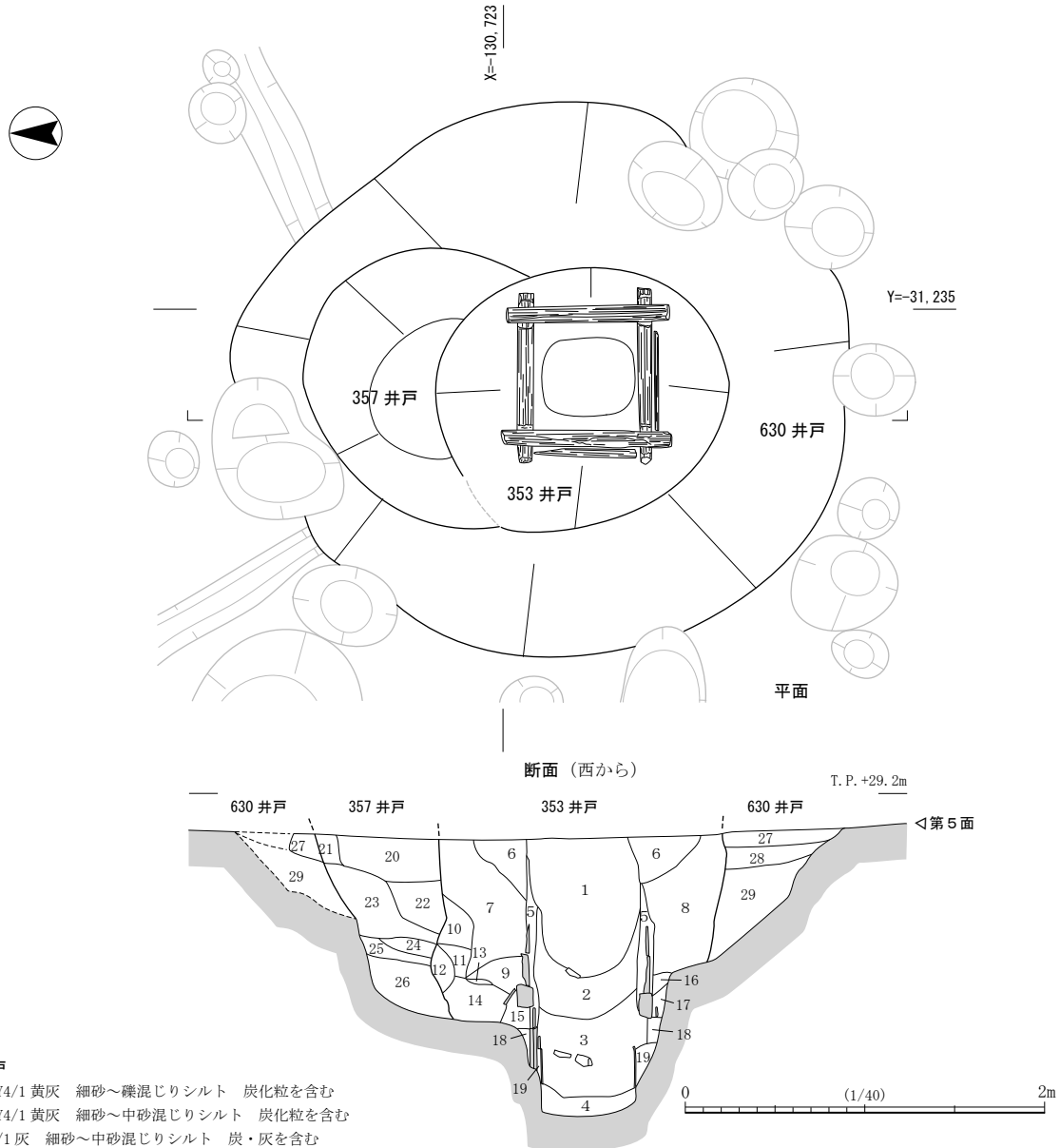
X=-130, 710



X=-130, 740

図76 10区(A2棟)第4・5面掘立柱建物・柱列配置





**353 井戸**

- 1 2.5Y4/1 黄灰 細砂～礫混じりシルト 炭化粒を含む
- 2 2.5Y4/1 黄灰 細砂～中砂混じりシルト 炭化粒を含む
- 3 5Y4/1 灰 細砂～中砂混じりシルト 炭・灰を含む
- 4 5GY6/1 オリーブ灰 シルトに 5Y5/1 灰 細砂～礫混じりシルトが混じる 炭化粒を含む
- 5 2.5Y3/1 黒褐 シルト
- 6 2.5Y5/1 黄灰 細砂～礫混じりシルト
- 7 2.5Y4/1 黄灰 中砂混じりシルトに 5G7/1 明緑灰 シルトと 2.5Y6/8 明黄褐 シルト混じり細砂が混じる
- 8 2.5Y6/1 黄灰 細砂混じりシルトに 2.5Y5/6 黄褐 細砂混じりシルトと 5G7/1 明緑灰 シルトが混じる
- 9 5Y4/1 灰 細砂～中砂混じりシルトに 5Y7/1 灰白 細砂混じりシルトと 5Y3/1 オリーブ黒 細砂～中砂混じりシルトが混じる
- 10 5Y4/1 灰 細砂混じりシルトに 2.5Y6/8 明黄褐 シルト～細砂と 5Y7/1 灰白 細砂混じりシルトが混じる
- 11 5Y5/1 灰 細砂～中砂混じりシルト
- 12 5Y4/1 灰 細砂混じりシルトに 2.5Y5/6 黄褐 細砂混じりシルトが混じる
- 13 5Y3/1 オリーブ黒 細砂～中砂混じりシルト
- 14 5Y4/1 灰 細砂～中砂混じりシルトに 5Y7/1 灰白 細砂混じりシルトと 2.5Y6/8 明黄褐 細砂混じりシルトが混じる 炭化粒を含む
- 15 5Y4/1 灰 細砂～中砂混じりシルトに 2.5Y3/1 黒褐 シルトと 2.5Y6/2 灰黄 細砂混じりシルトが混じる
- 16 5Y5/1 灰 細砂～中砂混じりシルトに 5Y7/1 灰白 シルトが混じる
- 17 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂～中砂混じりシルトに 2.5Y3/1 黒褐 シルトが混じる
- 18 5Y3/1 オリーブ黒 シルト
- 19 5Y3/1 オリーブ黒 シルトに 10BG6/1 青灰 シルト～礫が混じる

**357 井戸**

- 20 5Y6/1 灰 細砂混じりシルトと 5Y5/1 灰 細砂混じりシルトと 2.5Y6/8 明黄褐 シルト混じり細砂と 5Y7/1 灰白 シルトが混じる
- 21 5Y5/1 灰 細砂混じりシルトに 2.5Y6/8 明黄褐 シルト混じり細砂と 5Y7/1 灰 シルトが混じる
- 22 5Y4/1 灰 細砂混じりシルトに 2.5Y6/8 明黄褐 シルト混じり細砂が混じる
- 23 5Y5/1 灰 細砂混じりシルトに 2.5Y6/8 明黄褐 細砂混じりシルトと 10BG7/1 明青灰 細砂～中砂混じりシルトが混じる
- 24 5Y4/1 灰 細砂混じりシルトに 5Y7/1 灰白 細砂混じりシルトが混じる
- 25 5Y4/1 灰 細砂～中砂混じりシルト
- 26 5Y4/1 灰 細砂～中砂混じりシルトに 2.5Y5/6 黄褐 シルト混じり 細砂～中砂と 5Y7/1 灰白シルトが混じる 炭化粒を含む

**630 井戸**

- 27 10YR5/8 黄褐 シルト混じり細砂～中砂に 2.5Y6/8 明黄褐 シルト混じり 細砂～中砂が混じる
- 28 10YR5/8 黄褐 シルト混じり細砂 炭化粒を含む
- 29 2.5Y5/1 黄灰 細砂～中砂混じりシルトに 2.5Y6/8 明黄褐 細砂混じり シルト～礫が混じる 炭化粒を含む

図77 10区 第4面353・357井戸 第5面630井戸

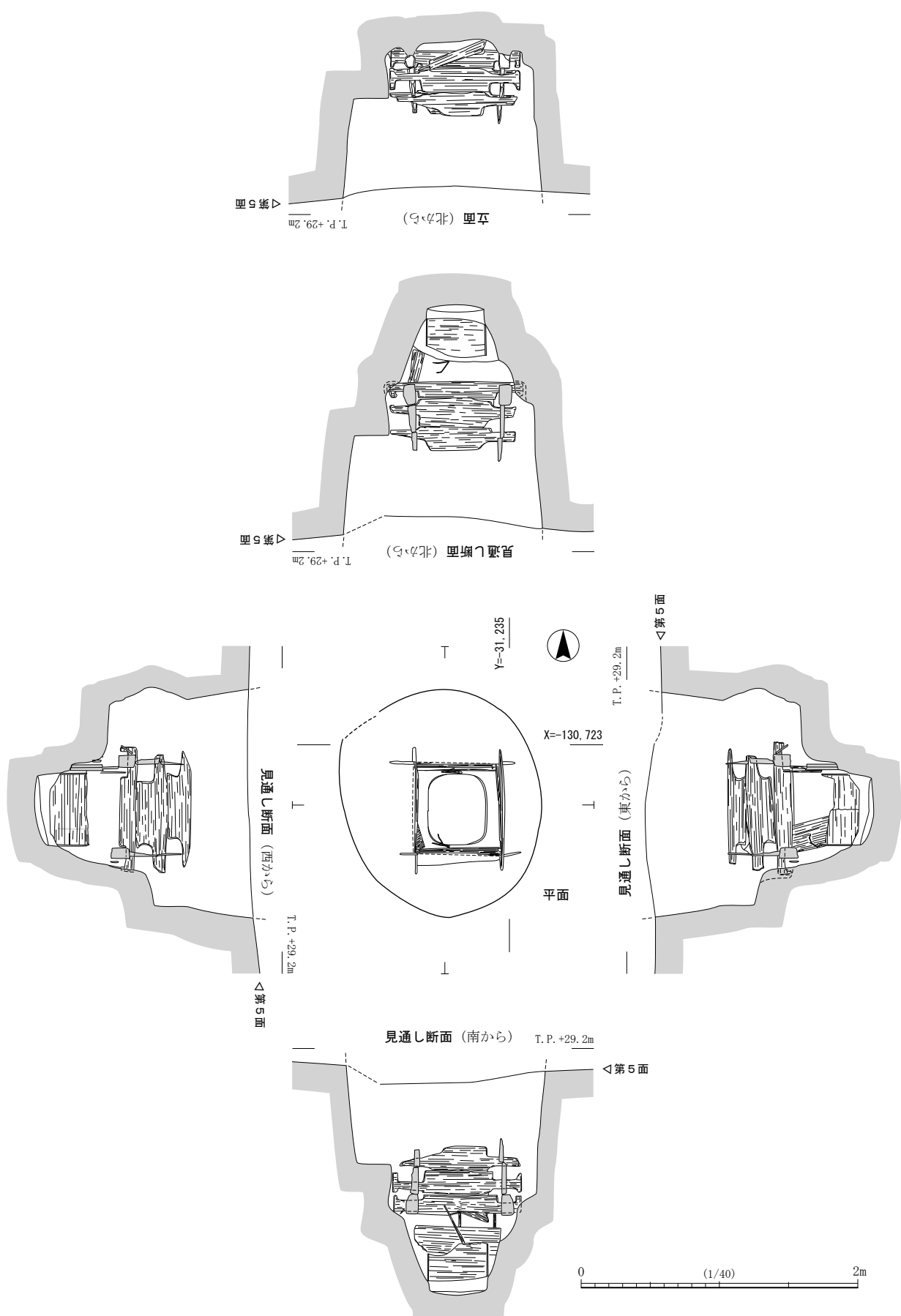


図78 10区 第4面353井戸

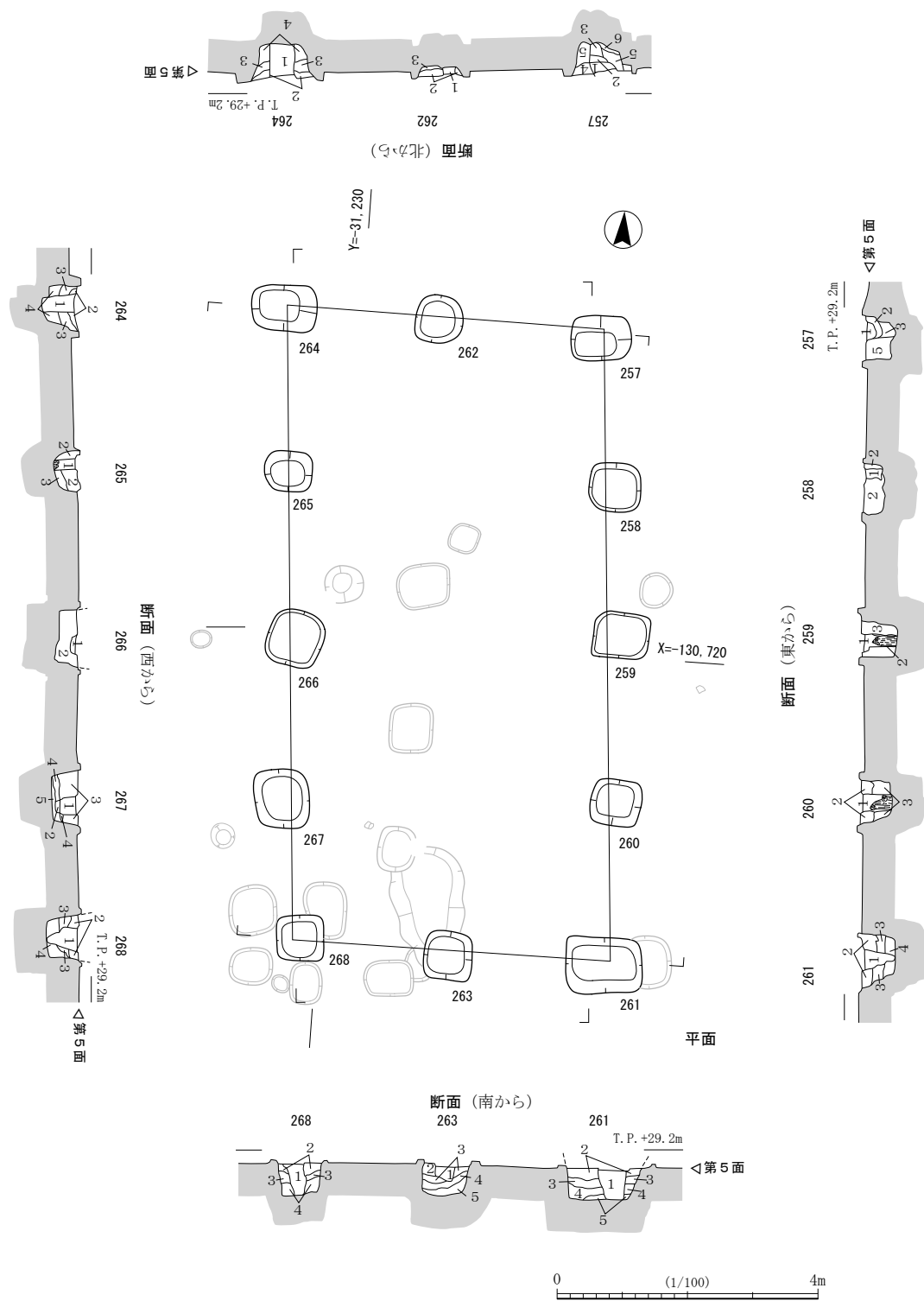


図79 10区 第4面掘立柱建物1

**257 ピット**

- 1 10YR4/1 褐灰 細砂混じりシルト
- 2 10YR4/1 褐灰 細砂混じりシルト
- 3 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 4 10YR7/8 黄橙 細砂混じりシルトに10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 5 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに10YR7/8 黄橙 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 6 10YR6/1 灰 細砂混じりシルトに10YR4/2 にぶい黄橙 細砂混じりシルトブロックが混じる

**258 ピット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに10YR7/8 黄橙 細砂混じりシルトブロックが混じる

**259 ピット**

- 1 5Y4/1 灰 細砂混じりシルト
- 2 5Y6/1 灰 細砂混じりシルト
- 3 2.5Y7/8 黄 細砂混じりシルトに2.5Y4/1 黄灰～10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトブロックが混じる

**260 ピット**

- 1 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 2 2.5Y7/8 黄 細砂混じりシルトに2.5Y4/1 黄灰～10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトブロックと10YR3/2 黒褐 細砂ブロックが混じる
- 3 2.5Y7/8 黄 細砂混じりシルトに2.5Y4/1 黄灰～10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトブロックが混じる

**261 ピット**

- 1 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR7/8 黄橙 細砂混じりシルトに10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 3 10YR7/8 黄橙 細砂～細礫混じりシルトに10YR4/2 灰黄褐 細砂～礫混じりシルトブロックが混じる
- 4 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに10YR7/8 黄橙 細砂混じりシルトのブロックが混じる
- 5 2.5Y7/8 黄 細砂混じりシルトに2.5Y4/1 黄灰・10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトブロックが混じる

**262 ピット**

- 1 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR7/8 黄橙 細砂混じりシルトに10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 3 10YR7/8 黄橙 細砂～礫混じりシルトに10YR4/2 灰黄褐 細砂～礫混じりシルトブロックが混じる

**263 ピット**

- 1 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトに2.5Y7/8 黄 シルトブロックが混じる
- 2 10YR7/8 黄橙 細砂混じりシルトに10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 3 10YR7/8 黄橙 細砂～礫混じりシルトに10YR4/2 灰黄褐 細砂～礫混じりシルトブロックが混じる
- 4 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに10YR7/8 黄橙 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 5 2.5Y7/1 灰白 礫混じりシルト

**264 ピット**

- 1 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR7/8 黄橙 細砂混じりシルトに10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 3 10YR7/8 黄橙 細砂～礫混じりシルトに10YR4/2 灰黄褐 細砂～礫混じりシルトブロックが混じる
- 4 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに10YR7/8 黄橙 細砂混じりシルトブロックが混じる

**265 ピット**

- 1 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトに2.5Y7/8 黄 シルトブロックが混じる
- 2 10YR7/8 黄橙 細砂混じりシルトに10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 3 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに10YR7/8 黄橙 細砂混じりシルトブロックが混じる

**266 ピット**

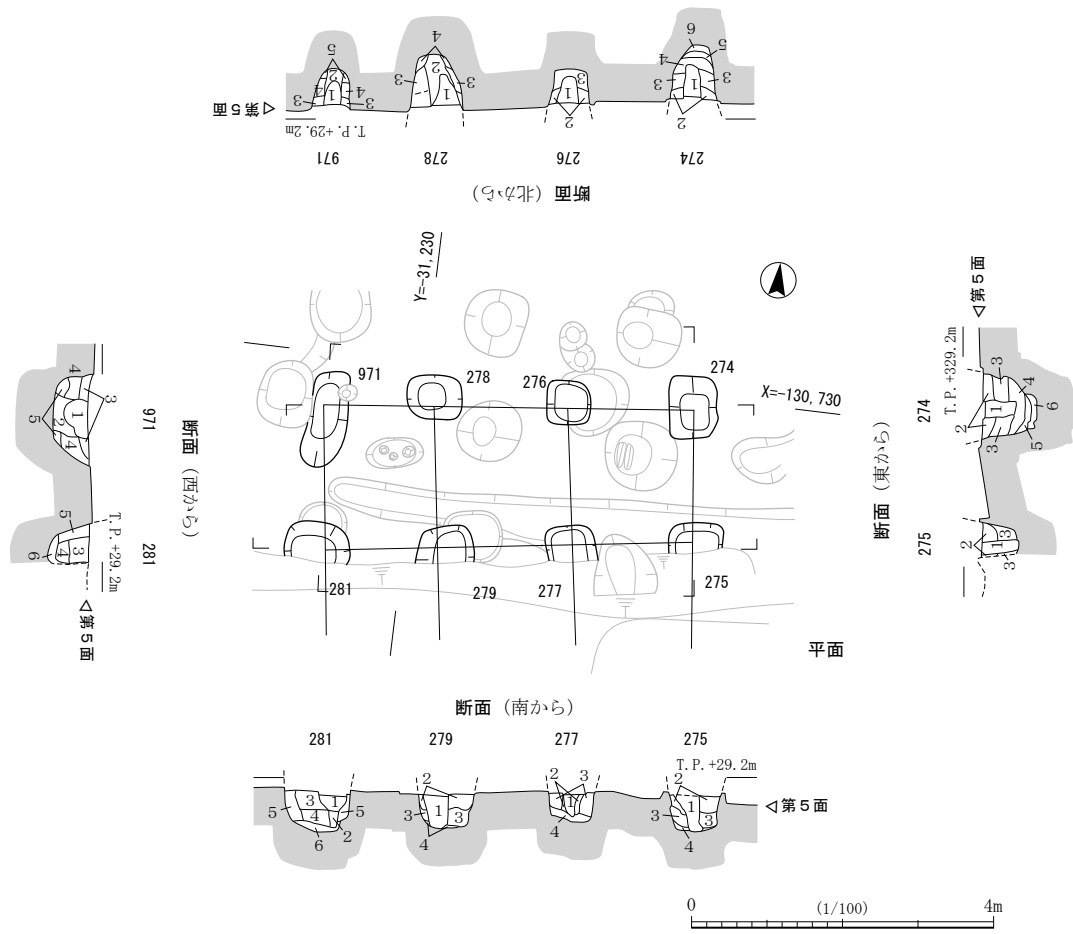
- 1 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト 炭を含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに10YR7/8 黄橙 細砂混じりシルトブロックが混じる

**267 ピット**

- 1 10YR8/1 灰白 細砂混じりシルトと10YR7/6 明黄褐 礫～粗砂混じりシルトの互層
- 2 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト 炭を含む
- 3 10YR7/8 黄橙 細砂混じりシルトに10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 4 10YR7/8 黄橙 細砂～礫混じりシルトに10YR4/2 灰黄褐 細砂～礫混じりシルトブロックが混じる
- 5 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに10YR7/8 黄橙 細砂混じりシルトブロックが混じる

**268 ピット**

- 1 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR7/8 黄橙 細砂混じりシルトに10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 3 10YR7/8 黄橙 細砂～礫混じりシルトに10YR4/2 灰黄褐 細砂～礫混じりシルトブロックが混じる
- 4 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに10YR7/8 黄橙 細砂混じりシルトブロックが混じる



**278 ピット**

- 1 10YR2/2 黒褐 細砂～礫混じりシルト
- 2 10YR2/3 黒褐 細砂～礫混じりシルト
- 3 10YR3/2 黒褐 礫混じりシルト
- 4 10YR6/1 褐灰 礫混じりシルトに10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトブロックが混じる

**279 ピット**

- 1 10YR2/2 黒褐 細砂～礫混じりシルト
- 2 10YR3/2 黒褐 礫混じりシルト
- 3 10YR3/2 黒褐 細砂～礫混じりシルトブロック
- 4 10YR6/1 褐灰 細礫混じりシルトに10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトブロックが混じる

**971 ピット**

- 1 10YR3/2 黒褐 礫混じりシルト
- 2 10YR3/2 黒褐 礫混じりシルトに7.5Y7/1 灰白 礫混じりシルトブロックが混じる
- 3 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
- 4 10YR6/6 明黄褐 細砂混じりシルトに10YR4/3 にぶい黄橙 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 5 10YR6/6 明黄褐 細砂混じりシルトに10YR7/2 にぶい黄橙 礫混じりシルトが混じる

**281 ピット**

- 1 7.5Y3/2 オリーブ黒 細砂混じりシルト
- 2 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
- 3 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
- 4 10YR6/6 明黄褐 細砂混じりシルトに10YR4/3 にぶい黄橙 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 5 2.5Y6/4 にぶい黄～6/8 明黄褐 シルト混じり礫
- 6 2.5Y5/6 黄褐 礫混じりシルト

**274 ピット**

- 1 10YR2/2 黒褐 細砂～礫混じりシルト
- 2 10YR3/2 黒褐 礫混じりシルト
- 3 2.5Y6/1 黄灰 シルトブロック
- 4 10YR3/2 黒褐 礫混じりシルトブロック
- 5 10YR3/2 黒褐 細砂～礫混じりシルトブロック
- 6 10YR6/1 褐灰 礫混じりシルトに10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトブロックが混じる

**275 ピット**

- 1 10YR2/2 黒褐 細砂～礫混じりシルト
- 2 10YR3/2 黒褐 礫混じりシルト
- 3 10YR3/2 黒褐 細砂～礫混じりシルト
- 4 10YR6/1 褐灰 礫混じりシルトに10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトブロックが混じる

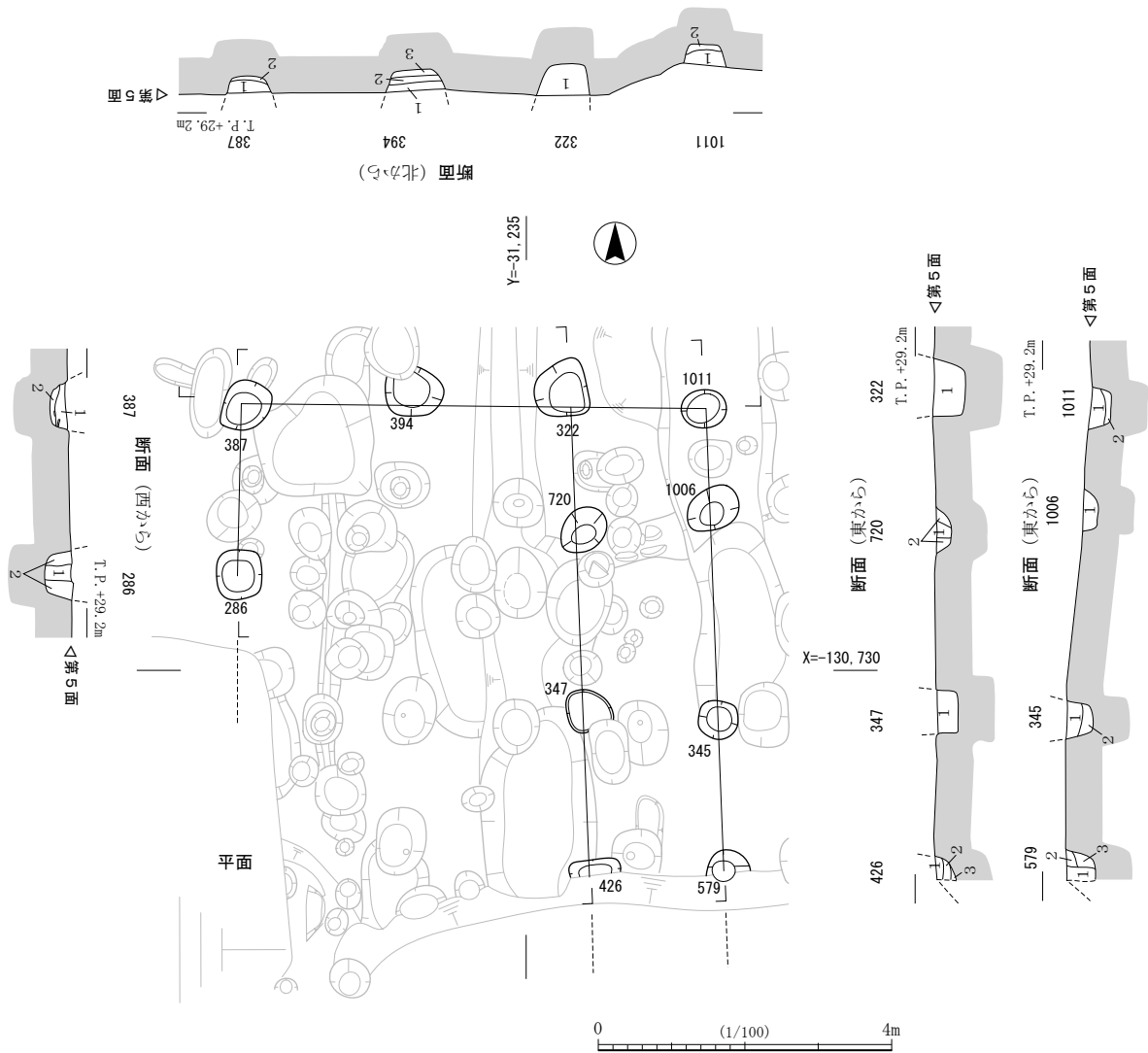
**276 ピット**

- 1 10YR2/2 黒褐 細砂～礫混じりシルト
- 2 10YR3/2 黒褐 礫混じりシルト
- 3 10YR3/2 黒褐 細砂～礫混じりシルトブロック

**277 ピット**

- 1 10YR2/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR6/6 明黄褐 礫混じりシルト
- 3 10YR3/2 黒褐 礫混じりシルト
- 4 10YR3/2 黒褐 細砂～礫混じりシルトブロック

図80 10区 第4・5面掘立柱建物2



**286 ピット**

- 1 7.5YR3/1 黒褐 細砂混じりシルト
- 2 7.5YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト

**387 ピット**

- 1 5Y2/1 黒 細砂混じりシルト
- 2 5Y6/6 オリーブ 細砂～粗砂混じりシルト

**394 ピット**

- 1 7.5YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトに 2.5Y7/8 黄 礫混じりシルトが混じる
- 2 2.5Y7/8 黄 細砂混じりシルト
- 3 2.5Y7/8 黄 細砂混じりシルトに 5Y4/2 灰オリーブ 細砂混じりシルト

**322 ピット**

- 1 2.5Y6/6 明黄褐 細砂混じりシルトに
- 2 2.5Y3/2 黒褐 細砂混じりシルトブロックが混じる

**720 ピット**

- 1 2.5Y6/6 明黄褐 細砂混じりシルトブロック
- 2 2.5Y6/6 明黄褐 細砂混じりシルトに
- 2.5Y3/2 黒褐 細砂混じりシルトブロックが混じる

**347 ピット**

- 1 2.5Y6/6 明黄褐 細砂混じりシルトに
- 2 2.5Y3/2 黒褐 細砂混じりシルトブロックが混じる

**426 ピット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに
- 10YR6/6 明黄褐 細砂～礫混じりシルトが混じる
- 3 10YR6/6 明黄褐～4/6 褐 シルト混じり礫

**1011 ピット**

- 1 2.5Y5/3 黄褐 礫混じりシルト
- 2 2.5Y5/6 黄褐 礫混じりシルト

**1006 ピット**

- 1 5B5/1 青灰～2.5GY7/1 明オリーブ灰 粗砂混じりシルトに
- 5Y7/8 黄 粗砂混じりシルトが混じる

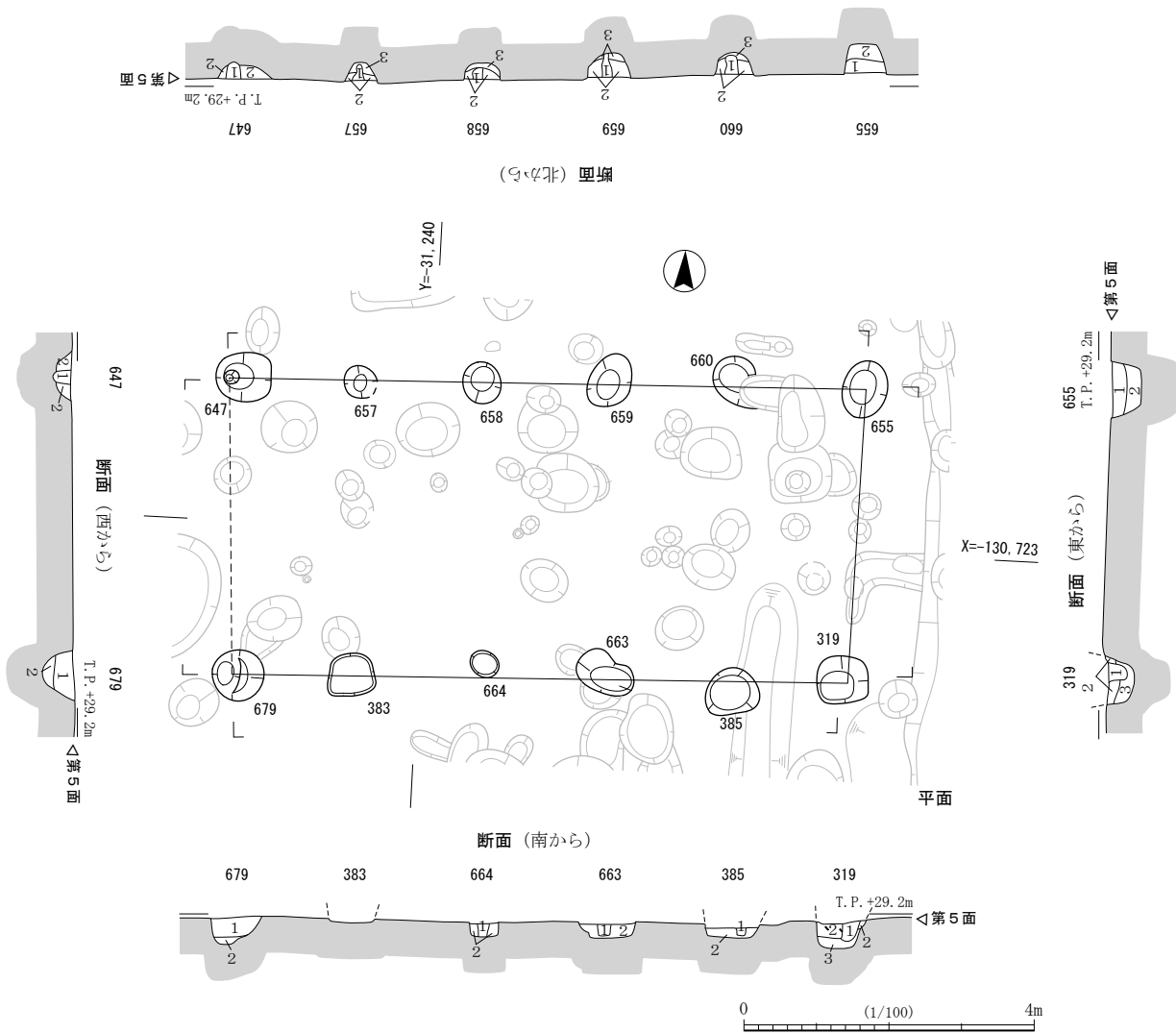
**345 ピット**

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐 細砂～粗砂混じりシルト 炭を含む
- 2 2.5Y4/1 黄灰 細砂混じりシルト

**579 ピット**

- 1 10YR2/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR7/6 明黄褐 細砂混じりシルトに
- 10YR3/2 黒褐 細砂～礫混じりシルトブロックが混じる
- 3 10YR7/6 明黄褐 細砂混じりシルトに
- 10YR3/2 黒褐 シルトブロックが混じる

図81 10区 第4・5面掘立柱建物3



**647ピット**

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混じりシルト
- 2 7.5YR5/8 明褐 細砂～礫混じりシルトに  
2.5Y4/3 オリーブ褐 細砂混じりシルトブロックが混じる

**657ピット**

- 1 2.5Y3/2 黒褐 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄 礫混じりシルト
- 3 7.5YR6/8 橙 粗砂混じりシルトに  
5Y3/1 オリーブ黒 細砂混じりシルトブロックが混じる

**658ピット**

- 1 2.5Y3/2 黒褐 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄 礫混じりシルト
- 3 7.5YR6/8 橙 粗砂混じりシルトに  
5Y3/1 オリーブ黒 細砂混じりシルトブロックが混じる

**659ピット**

- 1 2.5Y3/2 黒褐 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄 礫混じりシルト
- 3 5Y4/1 暗オリーブ 細砂混じりシルトに  
5Y3/1 オリーブ黒 細砂混じりシルトブロックが混じる

**660ピット**

- 1 2.5Y3/2 黒褐 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄 礫混じりシルト
- 3 5Y4/1 暗オリーブ 細砂混じりシルトに  
5Y3/1 オリーブ黒 細砂混じりシルトブロックが混じる

**655ピット**

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混じりシルトに 2.5Y6/6 明黄褐 礫混じりシルトブロックが混じる
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混じりシルト

**319ピット**

- 1 2.5Y3/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混じりシルト
- 3 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混じりシルト

**385ピット**

- 1 2.5Y2/1 黒 細砂混じりシルト
- 2 2.5Y5/6 黄褐 細砂混じりシルトに  
2.5Y3/2 暗オリーブ褐 細砂混じりシルトブロックが混じる 炭を含む

**663ピット**

- 1 2.5Y3/2 黒褐 細砂～中砂混じりシルト
- 2 7.5YR4/1 褐灰 細砂混じりシルトに 7.5YR5/6 明褐 細砂混じりシルトブロックが混じる

**664ピット**

- 1 2.5Y3/2 黒褐 細砂～中砂混じりシルト
- 2 7.5YR4/1 褐灰 細砂混じりシルトに 7.5YR5/6 明褐 細砂混じりシルトブロックが混じる

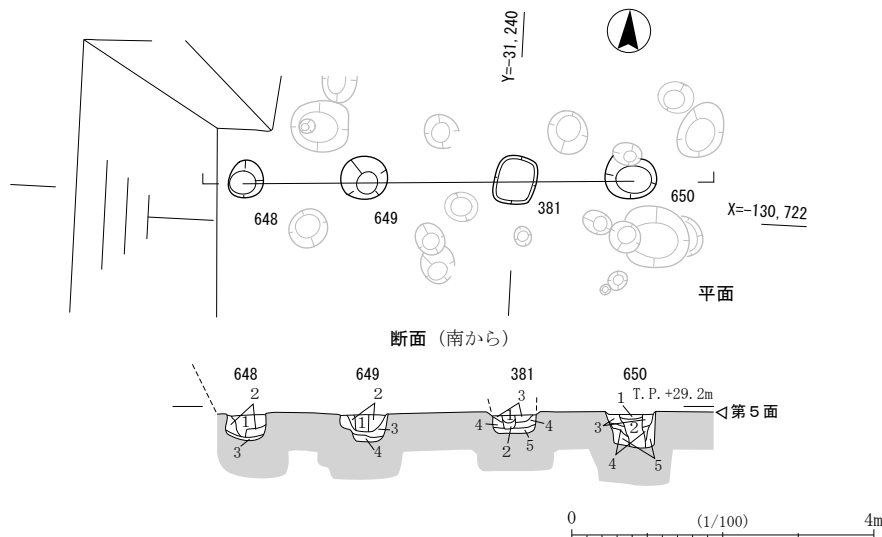
**383ピット**

- 1 埋土不詳

**679ピット**

- 1 2.5Y5/4 黄褐 細砂混じりシルト 炭を含む
- 2 2.5Y6/4 にぶい黄 細砂混じりシルト

図82 10区 第4・5面掘立柱建物4



**648 ピット**

- 1 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトに
- 10YR6/8 明黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 2 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトに
- 10YR6/8 明黄褐 細砂混じりシルトブロックが少量混じる
- 3 10YR6/8 明黄褐 細砂～礫混じりシルトに
- 10YR3/3 暗褐 シルトブロックが少量混じる

**649 ピット**

- 1 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトに
- 10YR6/8 明黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 2 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトに
- 10YR6/8 明黄褐 細砂混じりシルトブロックが少量混じる
- 3 10YR6/8 明黄褐 細砂混じりシルトブロックに
- 10YR3/3 暗褐 シルトブロックが混じる
- 4 10YR6/8 明黄褐 細砂～礫混じりシルトブロック

**381 ピット**

- 1 10YR4/1 褐灰 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 10YR4/1 褐灰 シルト
- 3 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトに 10YR6/8 明黄褐 細砂混じりシルトブロックが少量混じる
- 4 10YR6/8 明黄褐 細砂混じりシルトブロックに 10YR3/3 暗褐 シルトブロックが混じる
- 5 10YR6/8 明黄褐 細砂～礫混じりシルトブロックに 10YR3/3 暗褐 シルトブロックが混じる

**650 ピット**

- 1 2.5Y5/6 黄褐 細砂混じりシルト
- 2 2.5Y5/6 黄褐 シルト
- 3 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトに 10YR6/8 明黄褐 細砂混じりシルトブロックが少量混じる
- 4 10YR6/8 明黄褐 細砂混じりシルトブロックに 10YR3/3 暗褐 シルトブロックが混じる
- 5 2.5Y4/1 黄灰 細砂～粗砂混じりシルトブロック

図83 10区 第4・5面柱列5

それ以外の全てのピットで柱痕跡が認められた。

北西隅の 523 ピットから 8 世紀頃の土師器杯が出土したほか、各ピットから古代の土器細片も出土した。

**柱列 7** (図 84) 第 5 面検出。A 2 棟東部に位置する。主軸方位 N 12° W、柱間寸法 1.6 ~ 1.7 m で並ぶピット 3 個からなる。いずれもピットでも柱痕跡が明瞭に認められた。掘立柱建物であれば、それらを西辺として東方に展開すると考えられる。

516 ピットから製塩土器細片など、517・518 ピットから古代の土器細片が出土した。

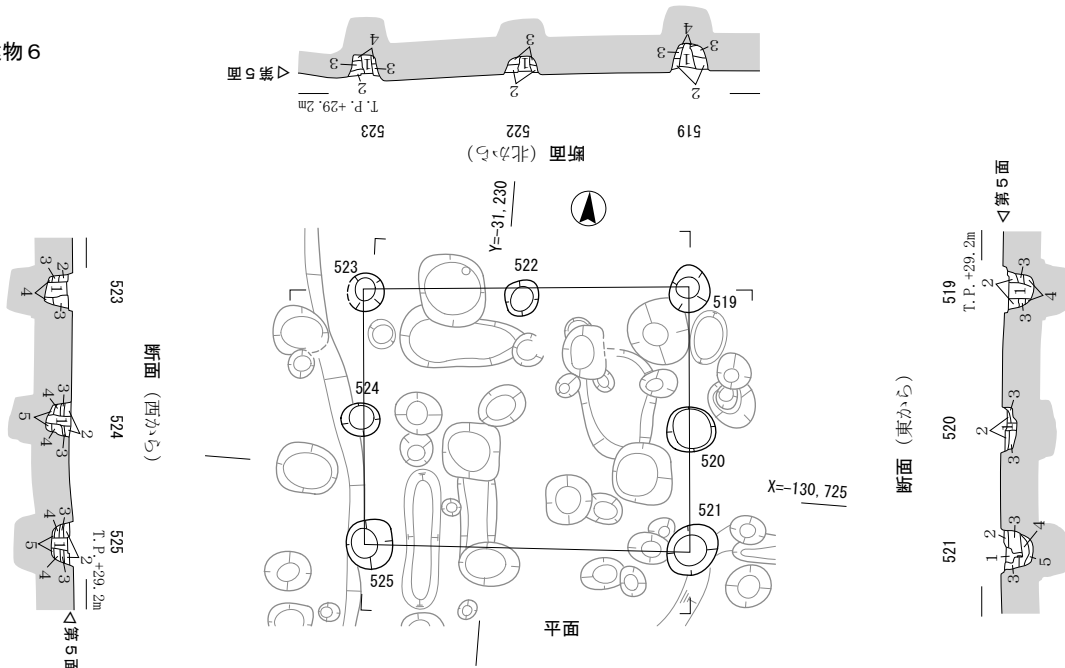
**掘立柱建物 8** (図 85) 第 4・5 面検出。A 2 棟中央部に位置する。主軸方位 N 1° W、桁行 3 間 (5.8 m)・梁行 2 間 (3.6 m)、面積 20.9 m<sup>2</sup> の側柱建物である。西辺の 582 ピットでは不明瞭だが、それ以外のピットでは柱痕跡が認められた。

南東隅の 273 ピットから製塩土器 (図 162 - 715)、南西隅の 324 ピットから 8 世紀中頃～後半の須恵器 (図 162 - 716・717)、北西隅の 581 ピットから 8 世紀の土師器甕 (図 162 - 718) などが出土した。その他のピットでは、製塩土器細片の出土が目立つ。

**掘立柱建物 9** (図 86) 第 4・5 面検出。掘立柱建物 6 の南約 1.5 m に位置する。主軸方位は N 3° W で、桁行 3 間以上 (4.3 m 以上)・梁行 2 間 (4.0 m)、面積 17.2 m<sup>2</sup> 以上の総柱建物である。東辺の 331 ピット (写真図版 50 - 185) からはスギ材の礎板が出土した。西辺には掘立柱建物 2 の 971 ピットによる攪乱がある。南東部の 332 ピットでは不明瞭だが、それ以外のピットでは柱痕跡が認められた。



掘立柱建物6



523 ビット

- 1 10YR3/1 黒褐 細砂混じりシルト 鉄を含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトブロック
- 3 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトブロック 炭を含む
- 4 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト

522 ビット

- 1 10YR3/1 黒褐 細砂混じりシルト 鉄を含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに  
10YR7/2 灰白 細砂混じりシルトが混じる
- 3 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに  
10YR3/4 暗褐 細砂混じりシルトが混じる

519 ビット

- 1 10YR3/1 黒褐 細砂混じりシルト 鉄を含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに  
10YR7/2 灰白 細砂混じりシルトが混じる
- 3 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに  
10YR7/2 灰白 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 4 10YR7/2 灰白 粗砂混じりシルトブロック

520 ビット

- 1 10YR3/1 黒褐 細砂混じりシルト 鉄を含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトブロック
- 3 10YR7/2 灰白 粗砂混じりシルトブロック

521 ビット

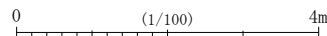
- 1 10YR3/1 黒褐 細砂混じりシルト 鉄を含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに  
10YR7/2 灰白 細砂混じりシルトが混じる
- 3 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに  
10YR7/2 灰白 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 4 10YR7/2 灰白 粗砂混じりシルトブロック
- 5 5Y7/1 灰白 粗砂混じりシルト

525 ビット

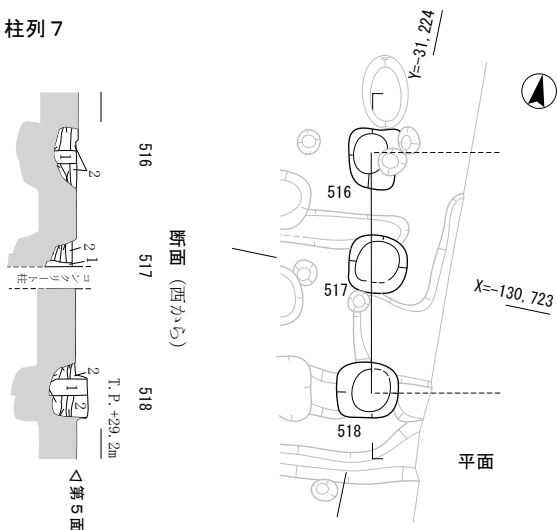
- 1 10YR3/1 黒褐 細砂混じりシルト 鉄を含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに  
10YR7/2 灰白 細砂混じりシルトが混じる
- 3 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに  
10YR7/2 灰白 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 4 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
- 5 5Y7/1 灰白 粗砂混じりシルト

524 ビット

- 1 10YR3/1 黒褐 細砂～礫混じりシルト 鉄を含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトに  
10YR7/2 灰白 細砂混じりシルトが混じる
- 3 7.5Y4/1 灰 シルト
- 4 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
- 5 10YR7/2 灰白 粗砂混じりシルトブロック



柱列7



516 ビット

- 1 10YR3/1 黒褐～6/6 明黄褐 細砂～礫混じりシルト
- 2 10YR3/1 黒褐 細砂～礫混じりシルトに 2.5Y7/8 黄 シルトブロックが混じる
- 3 10YR3/1 黒褐～6/6 明黄褐 細砂～礫混じりシルトブロック
- 4 10YR3/1 黒褐～6/1 褐灰 細砂～礫混じりシルトブロック

517 ビット

- 1 10YR3/1 黒褐～6/6 明黄褐 細砂～礫混じりシルト
- 2 10YR3/1 黒褐 細砂～礫混じりシルト
- 3 10YR3/1 黒褐～6/6 明黄褐 細砂～礫混じりシルトブロック
- 4 10YR6/1 褐灰 細砂～礫混じりシルト
- 5 10YR3/1 黒褐～6/1 褐灰 細砂～礫混じりシルトブロック

518 ビット

- 1 10YR3/1 黒褐～6/6 明黄褐 細砂～礫混じりシルト
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂～礫混じりシルト
- 3 10YR5/1 褐灰 細砂～礫混じりシルト
- 4 10YR3/1 黒褐～6/6 明黄褐 細砂～礫混じりシルトブロック
- 5 10YR3/1 黒褐～6/1 褐灰 細砂～礫混じりシルトブロック

図84 10区 第5面掘立柱建物6・柱列7

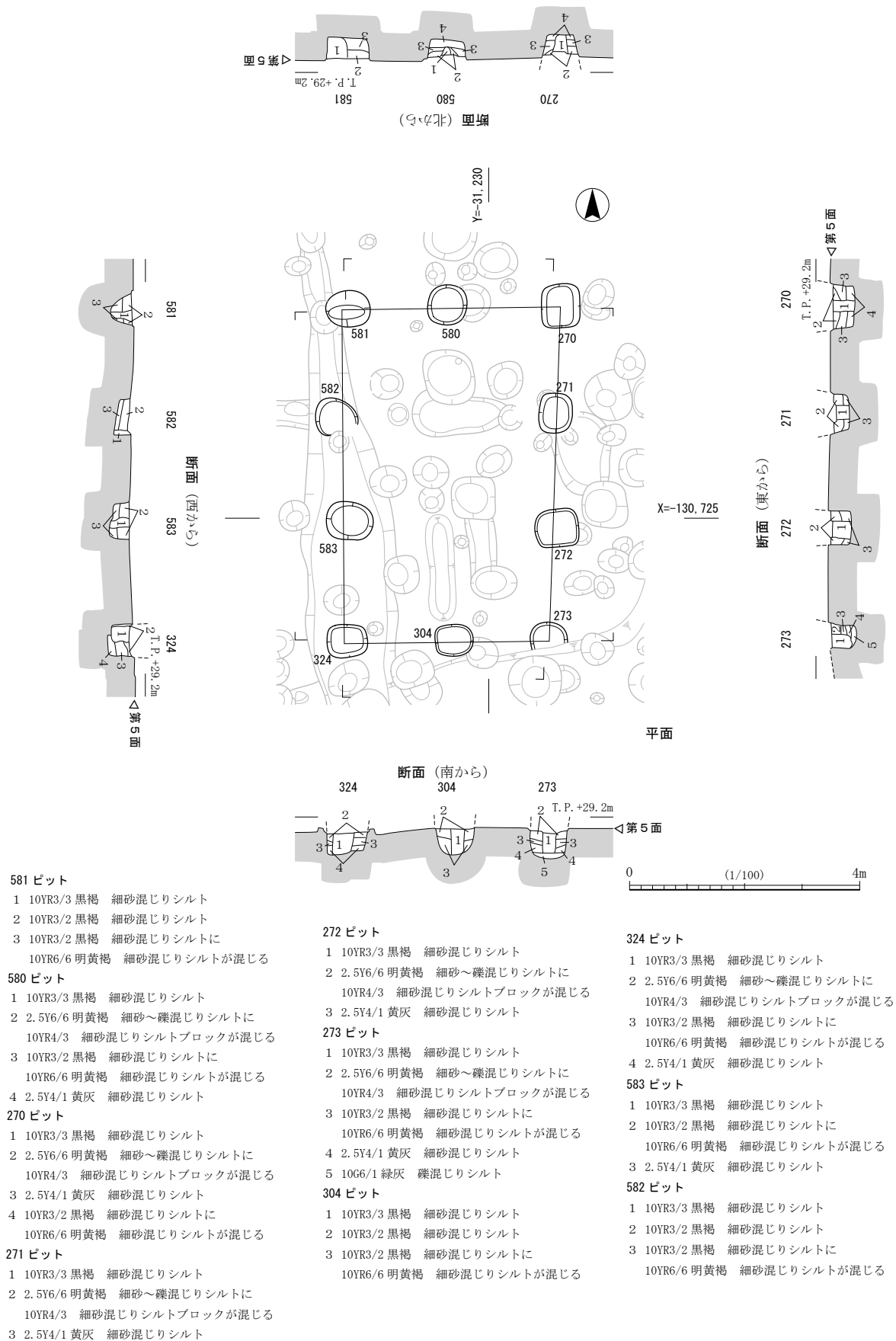
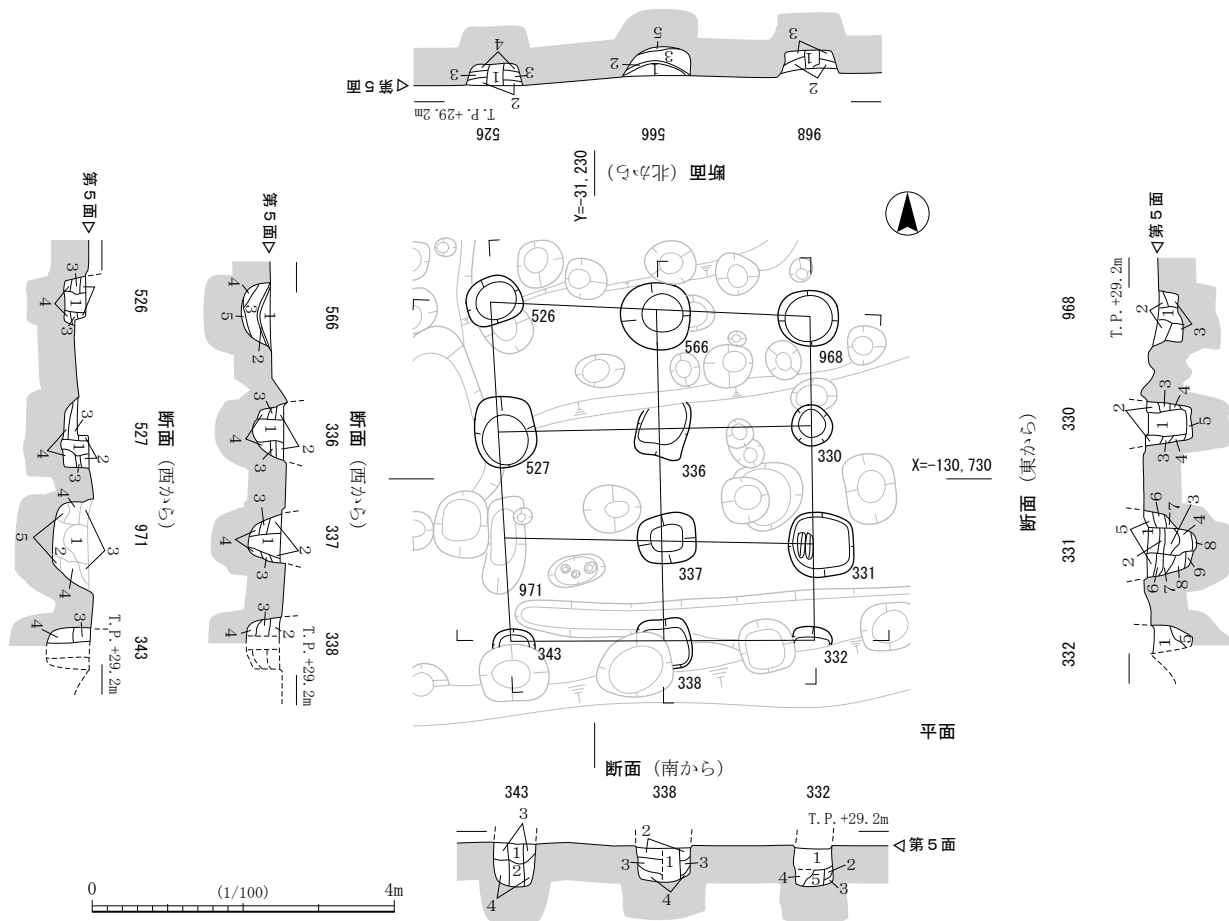


図85 10区 第4・5面掘立柱建物8



**526 ピット**

- 1 10YR7/6 明黄褐 細砂～礫混じりシルト
- 2 10YR7/2 にぶい黄橙 細砂～礫混じりシルト
- 3 10YR6/6 明黄褐 細砂混じりシルトに  
10YR4/3 にぶい黄褐 細砂混じりシルトが混じる
- 4 10YR6/6 明黄褐 細砂～礫混じりシルト

**527 ピット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR6/6 明黄褐 細砂混じりシルトブロック
- 3 10YR7/2 にぶい黄橙 礫混じりシルト
- 4 10YR6/6 明黄褐 細砂～礫混じりシルト

**(掘立柱建物 2 971 ピット)**

- 1 10YR3/2 黒褐 礫混じりシルト
- 2 10YR3/2 黒褐 礫混じりシルトに  
7.5Y7/1 灰白 礫混じりシルトブロックが混じる
- 3 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
- 4 10YR6/6 明黄褐 細砂混じりシルトに 10YR4/3  
にぶい黄褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 5 10YR6/6 明黄褐 細砂混じりシルトに  
10YR7/2 にぶい黄橙 礫混じりシルトが混じる

**343 ピット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐 細砂～礫混じりシルト
- 2 7.5YR3/1 黒褐 礫混じりシルト
- 3 10YR6/6 明黄褐 細砂混じりシルト
- 4 10YR7/2 にぶい黄橙 礫混じりシルト

**566 ピット**

- 1 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR4/1 褐灰 細砂混じりシルト
- 3 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトに  
10YR7/8 黄橙 細砂混じりシルトが混じる
- 4 7.5YR6/1 褐灰 粗砂混じりシルトに  
10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 5 7.5YR4/1 褐灰 細砂混じりシルト

**336 ピット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR6/6 明黄褐 細砂混じりシルトブロック
- 3 10YR6/6 明黄褐 細砂混じりシルトに  
10YR4/3 にぶい黄褐 細砂混じりシルトが混じる
- 4 10YR6/6 明黄褐 細砂～礫混じりシルト

**337 ピット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐 細砂～礫混じりシルトブロック
- 2 10YR6/6 明黄褐 細砂混じりシルトブロック
- 3 10YR7/2 にぶい黄橙 礫混じりシルト
- 4 10YR6/6 明黄褐 細砂混じりシルトに  
10YR4/3 にぶい黄褐 細砂混じりシルトが混じる

**338 ピット**

- 1 7.5YR3/2 黒褐～10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR6/6 明黄褐 細砂混じりシルトブロック
- 3 10YR6/6 明黄褐 細砂～礫混じりシルト
- 4 2.5Y4/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルト

**968 ピット**

- 1 7.5YR2/1 黒 細砂～礫混じりシルト
- 2 10YR3/2 黒褐 細砂～礫混じりシルト
- 3 10YR3/2 黒褐 細砂～礫混じりシルトに  
2.5Y8/2 灰白～2.5Y8/6 黄 シルトが混じる

**330 ピット**

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混じりシルトブロック
- 2 10YR6/6 明黄褐 細砂～礫混じりシルトブロック
- 3 10YR6/6 明黄褐 細砂混じりシルトに  
10YR4/3 にぶい黄褐 細砂混じりシルトが混じる
- 4 10YR6/6 明黄褐 細砂～礫混じりシルト
- 5 2.5Y4/1 黄灰 シルト

**331 ピット**

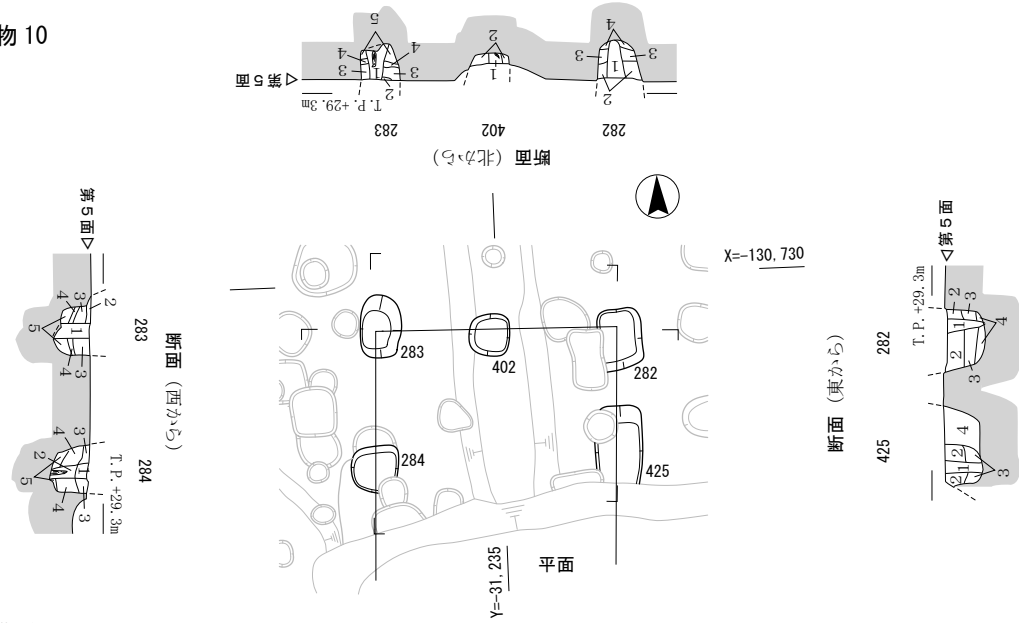
- 1 7.5YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
- 3 10YR4/2 灰黄褐 細砂～礫混じりシルトブロック
- 4 7.5YR3/1 黒褐 礫混じりシルト
- 5 10YR6/6 明黄褐 細砂混じりシルトブロック
- 6 10YR7/2 にぶい黄橙 礫混じりシルト
- 7 10YR6/6 明黄褐 細砂混じりシルトに  
10YR4/3 にぶい黄褐 細砂混じりシルトが混じる
- 8 10YR6/6 明黄褐 細砂～礫混じりシルト
- 9 2.5Y4/1 黄灰 シルト

**332 ピット**

- 1 10YR6/6 明黄褐 細砂～礫混じりシルト
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂～礫混じりシルト
- 3 2.5Y4/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルト
- 4 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトブロック
- 5 5Y4/1 灰 礫混じりシルト

図86 10区 第4・5面掘立柱建物9

掘立柱建物 10



284 ピット

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混じりシルト
- 2 2.5Y4/1 黄灰 細砂～中砂混じりシルト
- 3 2.5Y7/8 黄 粗砂～礫混じりシルトに
- 2.5Y4/3 オリーブ褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 4 2.5Y6/6 明黄褐 細砂混じりシルトに
- 2.5Y4/3 オリーブ褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 5 2.5Y4/1 黄灰 細砂～中砂混じりシルトに地山ブロックが混じる

283 ピット

- 1 2.5Y4/1 黄灰 細砂～中砂混じりシルト
- 2 2.5Y7/8 黄 粗砂～礫混じりシルトに
- 2.5Y4/3 オリーブ褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 3 2.5Y6/6 明黄褐 細砂混じりシルトに
- 2.5Y4/3 オリーブ褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 4 2.5Y4/1 黄灰 細砂～中砂混じりシルトに地山ブロックが混じる
- 5 2.5Y6/6 明黄褐 細砂混じりシルトに地山ブロックが混じる

402 ピット

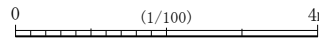
- 1 2.5Y4/1 黄灰 細砂～中砂混じりシルト
- 2 2.5Y6/6 明黄褐 細砂混じりシルトに2.5Y4/3 オリーブ褐 細砂混じりシルトブロックが混じる

282 ピット

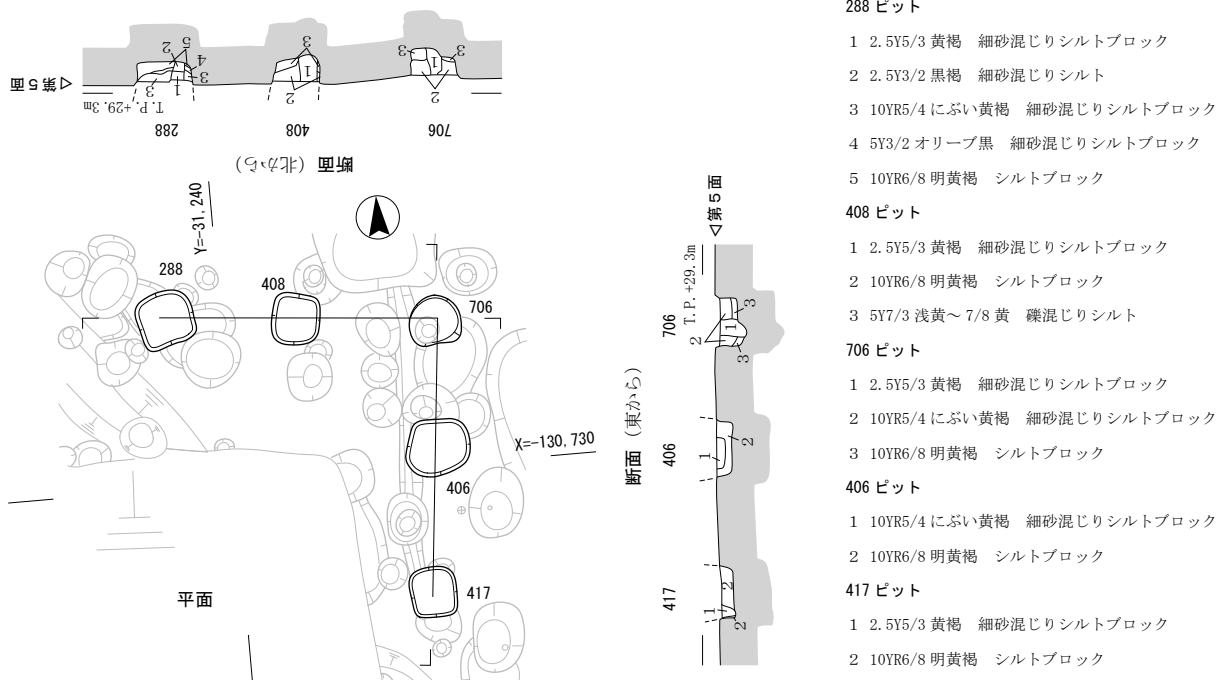
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混じりシルト
- 2 2.5Y6/6 明黄褐 細砂混じりシルトに2.5Y4/3 オリーブ褐 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 3 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルトブロックに2.5Y7/8 黄 細砂混じりシルトブロックが混じる
- 4 5PB5/1 青灰 粗砂混じりシルトに2.5YR4/2 灰赤 細砂混じりシルトが混じる

425 ピット

- 1 7.5YR4/1 褐灰 細砂～礫混じりシルトブロック
- 2 7.5YR3/2 黒褐 シルトブロック
- 3 7.5YR3/2 黒褐 細砂～礫混じりシルト
- 4 7.5YR4/2 灰褐 細砂混じりシルトブロック



掘立柱建物 11



288 ピット

- 1 2.5Y5/3 黄褐 細砂混じりシルトブロック
- 2 2.5Y3/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂混じりシルトブロック
- 4 5Y3/2 オリーブ黒 細砂混じりシルトブロック
- 5 10YR6/8 明黄褐 シルトブロック

408 ピット

- 1 2.5Y5/3 黄褐 細砂混じりシルトブロック
- 2 10YR6/8 明黄褐 シルトブロック
- 3 5Y7/3 浅黄～7/8 黄 礫混じりシルト

706 ピット

- 1 2.5Y5/3 黄褐 細砂混じりシルトブロック
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂混じりシルトブロック
- 3 10YR6/8 明黄褐 シルトブロック

406 ピット

- 1 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂混じりシルトブロック
- 2 10YR6/8 明黄褐 シルトブロック

417 ピット

- 1 2.5Y5/3 黄褐 細砂混じりシルトブロック
- 2 10YR6/8 明黄褐 シルトブロック

図87 10区 第4面掘立柱建物10 第4・5面掘立柱建物11

掘立柱建物9を構成するピットの出土遺物は8世紀の土師器、須恵器、製塩土器で、時期の判明するものには、8世紀中頃の東辺332ピットの須恵器（図163-720）、8世紀後半の東辺330ピット・西辺527ピットの須恵器（図163-719・721）や北辺中央566ピットの8世紀末の土師器皿（図163-722）がある。重複する掘立柱建物2とは、柱穴の切り合い関係では掘立柱建物9が古く、出土土器では掘立柱建物9が新しくなるという矛盾が生じている。

**掘立柱建物10**（図87）第4面検出。A2棟南部に位置し、南部は攪乱されている。主軸方位N1°E、桁行2間以上・梁行2間（3.1m）の側柱建物と考えられる。東辺の282・425ピットと西辺の283・284ピットにはスギ材の柱根（図163-723～726）が残っており、北辺中央の402ピットでも柱痕跡が認められた。

283ピットから6世紀末～7世紀初頭の須恵器杯、282ピットから瓦細片、284ピットから製塩土

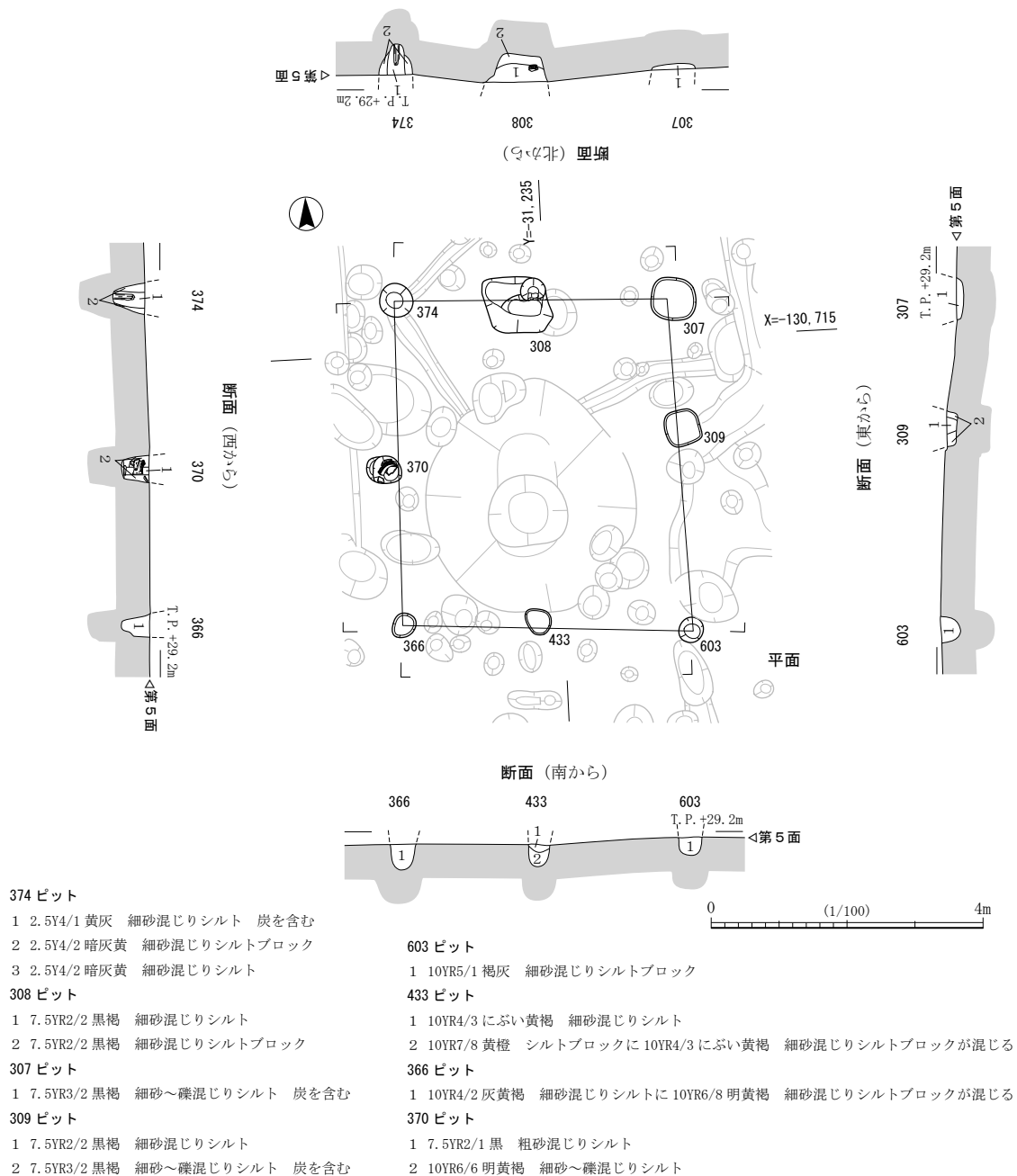
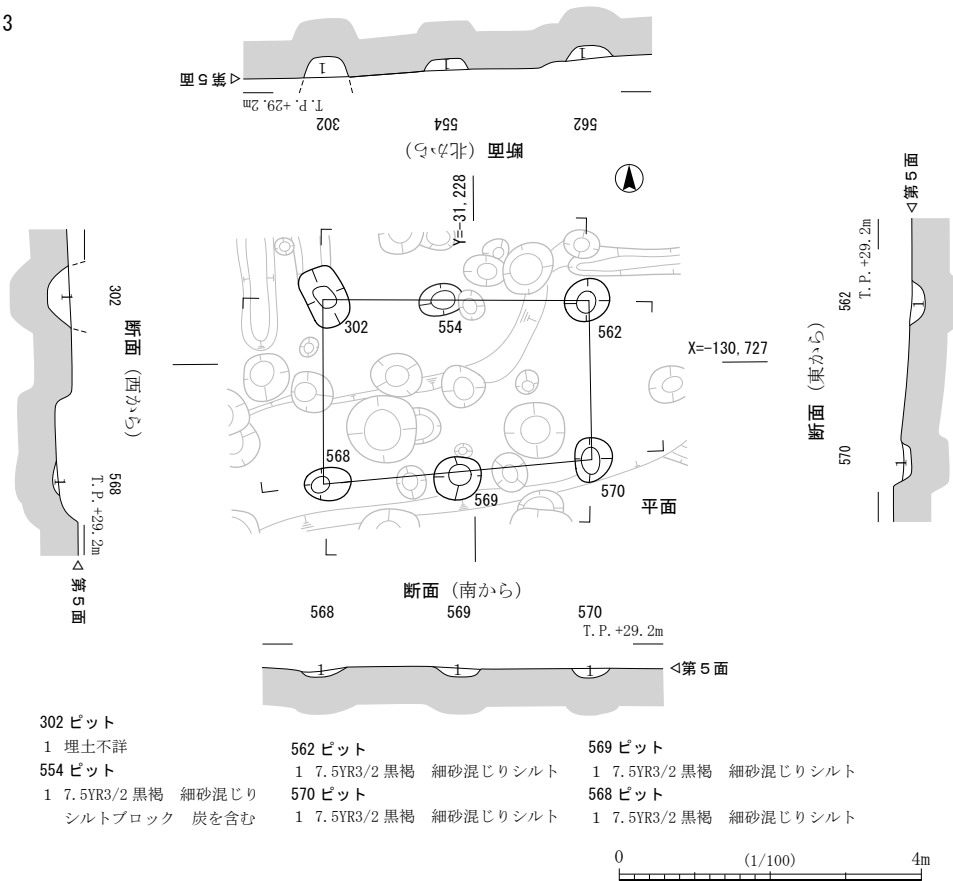


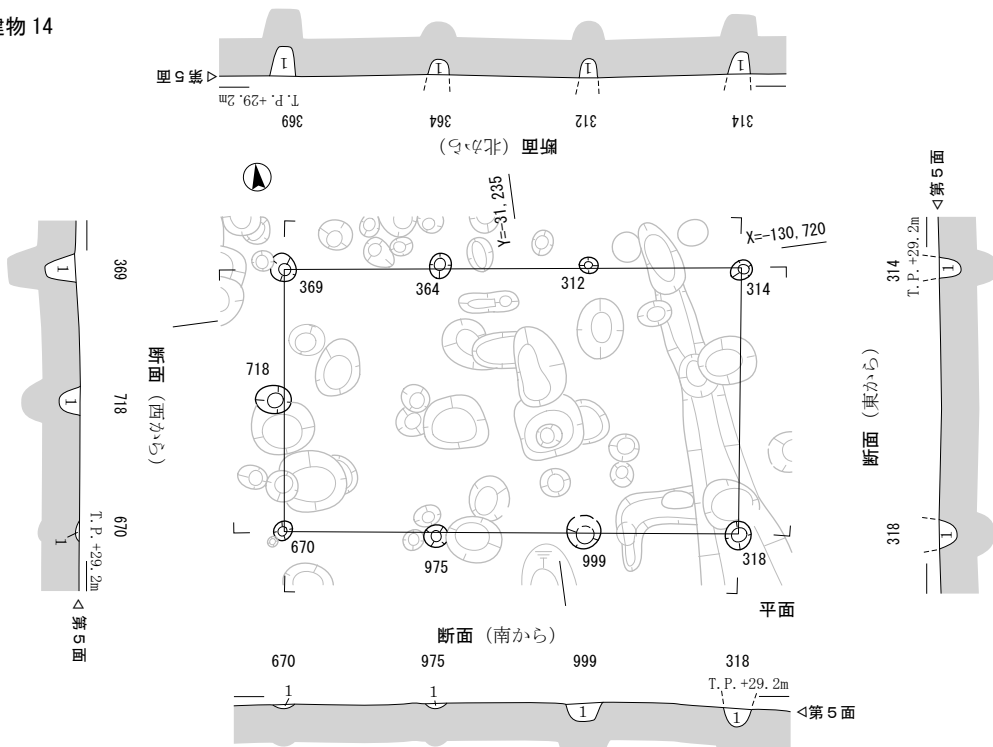
図88 10区 第4・5面掘立柱建物12

掘立柱建物 13



- 302 ビット  
1 埋土不詳
- 554 ビット  
1 7.5YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトブロック 炭を含む
- 562 ビット  
1 7.5YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 570 ビット  
1 7.5YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 569 ビット  
1 7.5YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 568 ビット  
1 7.5YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト

掘立柱建物 14



- 369 ビット  
1 7.5YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 364 ビット  
1 10YR4/3 にぶい黄橙 細砂混じりシルトに10YR7/8 黄橙 黄シルトブロックが混じる
- 312 ビット  
1 埋土不詳
- 314 ビット  
1 埋土不詳
- 318 ビット  
1 10YR4/2 灰黄褐 シルト混じり細砂
- 999 ビット  
1 埋土不詳
- 975 ビット  
1 7.5YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 670 ビット  
1 7.5YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 718 ビット  
1 7.5YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト 炭を含む

図89 10区 第4・5面掘立柱建物13・14

器細片、さらにそれらのピットから古代の土器細片も出土した。

**掘立柱建物 11** (図 87) 第 4・5 面検出。A 2 棟南西隅に位置する。東西・南北とも 2 間以上と考えられるが、南西側が調査区外となり、調査範囲内でもそれ以上の広がり不明瞭である。南北に長い建物とすれば、主軸方位は  $N 4^{\circ} E$  となる。

北東隅の 706 ピットからスギ材の柱根が出土し、その他のピットでも柱痕跡が認められた。706 ピットから 8 世紀後半の須恵器杯蓋 (図 163 - 727)、北辺の 288 ピットから須恵器壺、その他のピットからも古代の土器、製塩土器、瓦の細片が出土した。

**掘立柱建物 12** (図 88) 第 4・5 面検出。A 2 棟北西部に位置する。主軸方位は  $N 1^{\circ} E$ 、桁行 2 間 (4.9 m)・梁行 2 間 (4.2 m)、面積 20.6  $m^2$  で、先述の井戸に伴う屋形の可能性がある。北西隅の 374 ピットに残りの悪い柱根と南東隅の 603 ピットにはコウヤマキ材の柱根 (図 164 - 743) が遺存していた。東辺の 309 ピットでは柱痕跡が認められた。北辺中央の 308 ピット (写真図版 50 - 184) は、他のピットよりも規模が大きいことから、別遺構の重複の可能性もあるが、柱痕跡などは認められな

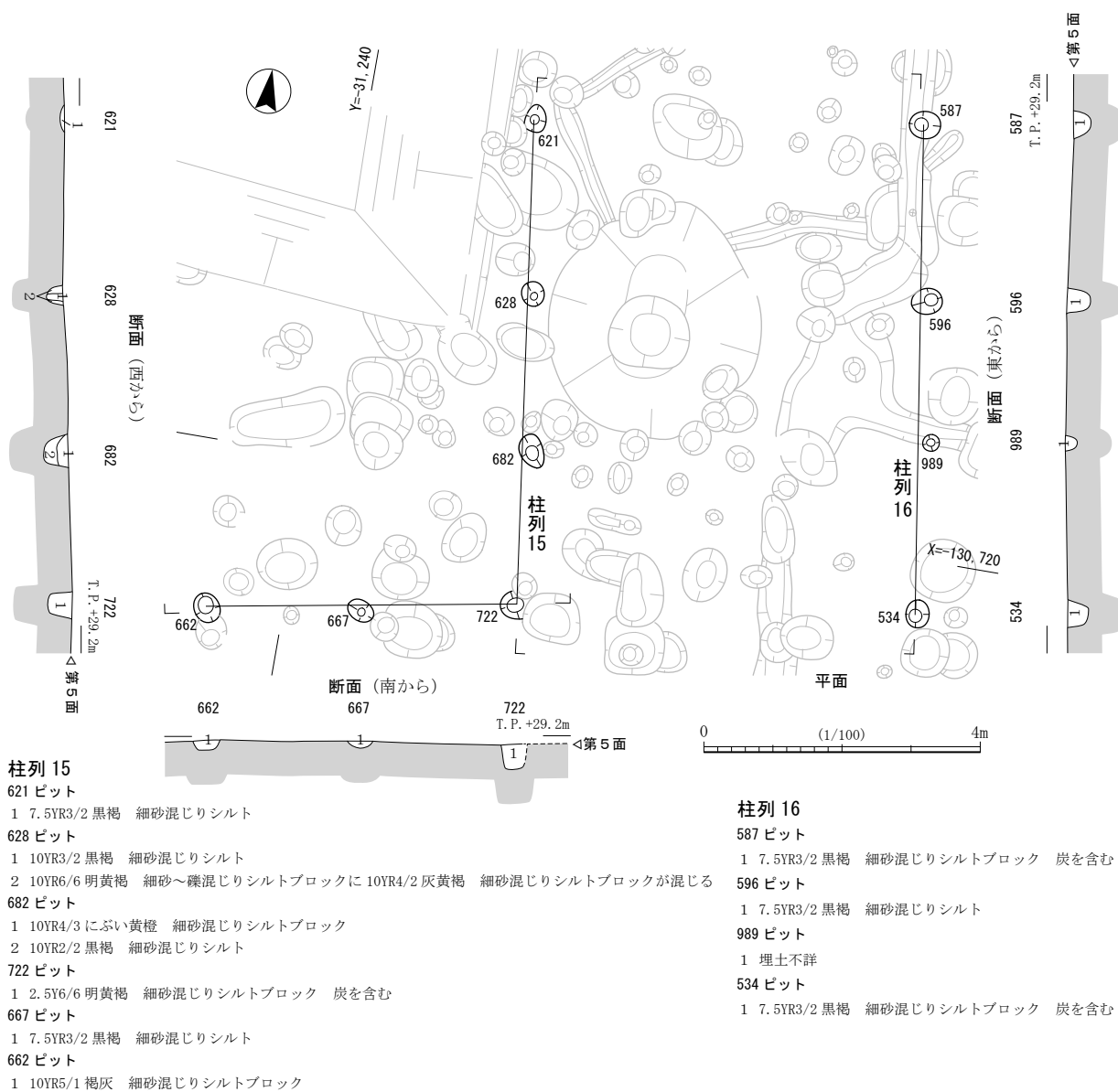
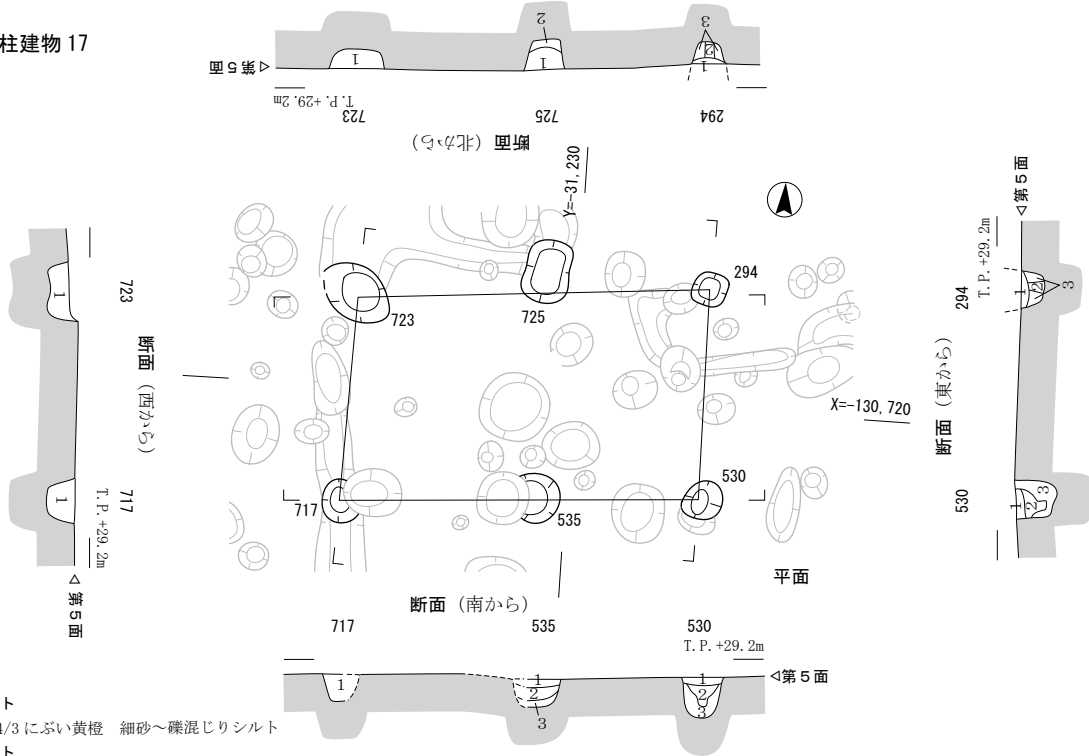


図90 10区 第5面柱列15・16

掘立柱建物 17



723 ピット

- 1 10YR4/3 にぶい黄橙 細砂～礫混じりシルト

725 ピット

- 1 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR6/6 明黄褐 細礫混じりシルトに
- 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトブロックが混じる

294 ピット

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混じりシルト
- 2 10YR4/1 暗灰褐 細砂混じりシルト
- 3 10YR7/8 黄 細砂～礫混じりシルト

530 ピット

- 1 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト 炭を含む
- 2 10YR2/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 3 10YR7/6 明黄褐 細砂混じりシルトに
- 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルトブロックが混じる

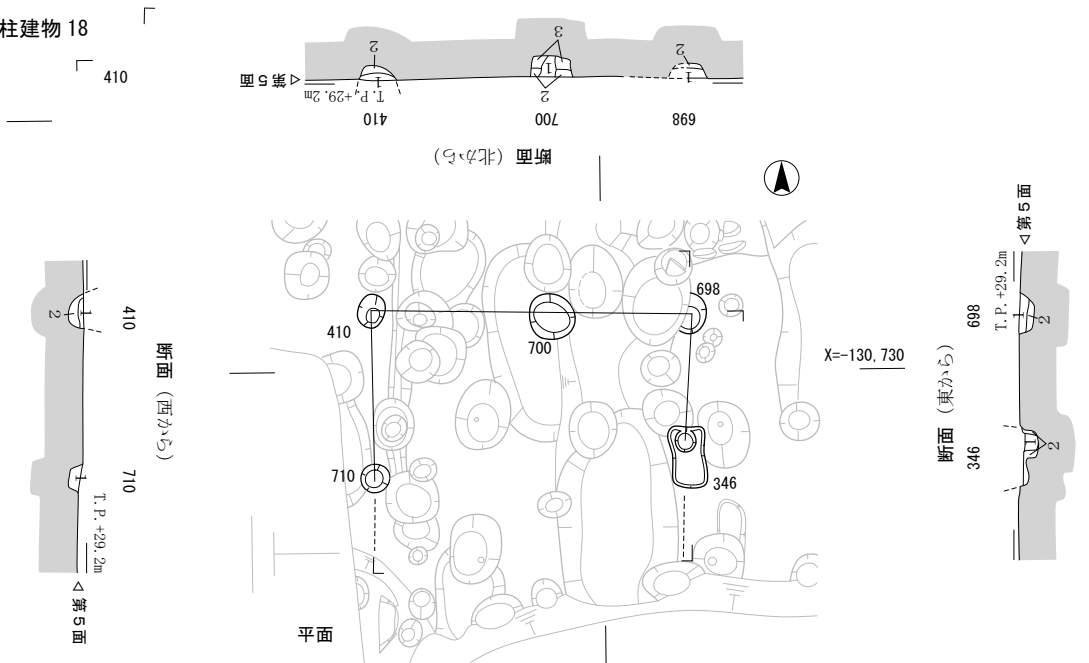
535 ピット

- 1 5Y3/2 オリーブ黒 細砂混じりシルト
- 2 5Y3/2 オリーブ黒 細砂混じりシルトに
- 5Y6/8 オリーブ 細砂～礫混じりシルトブロックが混じる
- 3 5Y6/8 オリーブ 細砂～礫混じりシルト

717 ピット

- 1 埋土不詳

掘立柱建物 18



710 ピット

- 1 7.5YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト 炭を含む

410 ピット

- 1 2.5Y6/6 明黄褐 細砂混じりシルト
- 2 7.5YR2/1 黒 細砂混じりシルト 炭を含む

700 ピット

- 1 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト 炭を含む
- 2 10YR3/2 黒褐 細砂～礫混じりシルト 炭を含む
- 3 2.5Y5/6 黄褐 礫混じりシルトに
- 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルトブロックが混じる

698 ピット

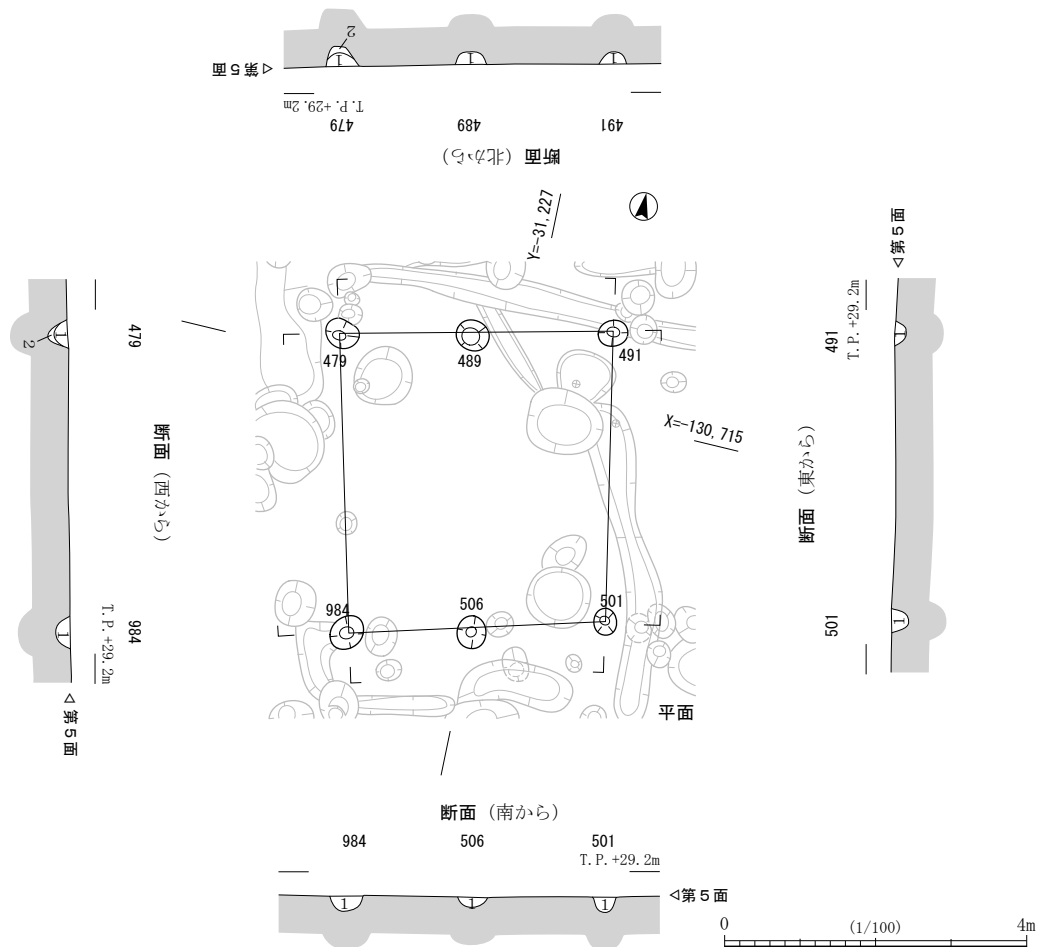
- 1 10YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR3/2 黒褐 シルトブロック

346 ピット

- 1 2.5Y2/1 黒 細砂混じりシルト 炭を含む
- 2 10YR2/2 黒褐 細砂混じりシルトブロック

図91 10区 第4・5面掘立柱建物17・18





479 ピット

- 1 2.5Y7/6 明黄褐 細砂混じりシルトに 10YR2/2 黒褐 細砂混じりシルトが混じる
- 2 10YR2/2 黒褐 細砂混じりシルト

489 ピット

- 1 7.5YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト 炭を含む

491 ピット

- 1 7.5YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト 炭を含む

501 ピット

- 1 7.5YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト 炭を含む

506 ピット

- 1 7.5YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト 炭を含む

984 ピット

- 1 7.5YR3/2 黒褐 細砂混じりシルト 炭を含む

図92 10区 第5面掘立柱建物19

った。

出土遺物は多彩で、北東隅の 307 ピットから製塩土器 (図 163 - 728)、308 ピットから 8 世紀後半～末の土師器・須恵器 (図 163 - 729～731・733)、「東」と墨書された須恵器 (図 163 - 732)、長岡京鞍岡廢寺と同範の軒平瓦片など (図 163 - 734・735)、309 ピットから 8 世紀後半～9 世紀の須恵器 (図 163 - 736・737)、製塩土器 (図 163 - 738)、瓦 (図 163 - 739)、西辺の 370 ピット (写真図版 51 - 189) から均整唐草文軒平瓦などの瓦 (図 164 - 740・741) や砂岩製砥石 (図 164 - 742) などが出土した。その他各ピットからも、古代の土器、製塩土器、瓦などの細片が出土した。

この掘立柱建物 12 は、位置関係からは第 4 面検出の 353・357 井戸や第 5 面検出の 630 井戸のいずれと併存しても矛盾はない。遺物の時期からは、8 世紀末頃の 357 井戸に伴う可能性が最も高い。

**掘立柱建物 13** (図 89) 第 4・5 面検出。A 2 棟南東部に位置する。主軸方位 N 85° E、桁行 2 間 (3.5 m)・梁行 1 間 (東 2.2 m、西 2.4 m)、面積 8.1 m<sup>2</sup> の側柱建物である。ピットはいずれも単層で浅く、柱痕跡は認められない。

北西隅の 302 ピットと南東隅の 570 ピットから 8 世紀後半の須恵器杯蓋 (図 164 - 744・746)、

南辺中央の 569 ピットから製塩土器（図 164 - 745）、その他のピットから古代の土器細片が出土した。

**掘立柱建物 14**（図 89） 第 4・5 面検出。A 2 棟中央部やや北西寄り位置する。主軸方位 N 82° W、桁行 3 間（6.0 m）・梁行 2 間（3.5 m）、面積 21.0 m<sup>2</sup>の側柱建物である。ただし、東辺の梁行中央のピットは検出できなかった。ピットはいずれも単層で、柱痕跡は認められない。

北東隅の 314 ピットから 10 世紀前半と考えられる土師器皿（図 164 - 747）、南東隅の 318 ピットから 8 世紀後半の須恵器（図 164 - 748・750）やカマドの一部の可能性のある土師器（図 164 - 749）が、他のピットからも古代の土器、製塩土器、瓦の細片が出土した。

この掘立柱建物 14 の復元が正しければ、柱穴が小規模な円形であることや主軸方位がこの遺跡の 8 世紀前後の掘立柱建物と異なる。10 世紀前半と考えられる土師器も出土しており、該期の建物の可能性がある。

**柱列 15**（図 90） 第 5 面検出。A 2 棟北西部に位置する。南東角の 722 ピットを南東角として、N 8° W 方向に 4 個、それとほぼ直交する N 80° E に 3 個のピットが並ぶ。北から 2 つめの 628 ピットで柱痕跡が認められた。掘立柱建物を構成する可能性もあるが、次の柱列 16 との関係から、柱列と考えたい。

出土遺物は、南西端の 662 ピットの古代の土器細片のみである。

**柱列 16**（図 90） 第 5 面検出。柱列 15 の南北部分と 5.6 m の間隔をもって、ほぼ並行する N 10° W にピットが 4 個並ぶ。柱列 15 と同様に、それを構成するピットは小規模な隅丸方形や不整形である。柱列 15 とともに塀のような機能が想定される。

北端の 587 ピットから製塩土器細片など、989 ピットから古代の土器細片が出土した。

**掘立柱建物 17**（図 91） 第 4・5 面検出。A 2 棟中央部北寄り、主軸方位 N 85° E、桁行 2 間（4.9 m）・梁行 1 間（2.7 m）、面積 13.2 m<sup>2</sup>の側柱建物である。ピットは比較的大きいが、柱痕跡は明瞭ではない。掘立柱建物 8 の北に位置し、重複関係ではそれよりも古いので、8 世紀中頃～後半以前の所産と推定できる。

南東隅の 530 ピットと南西隅の 717 ピットから古代の土器細片が出土した。

**掘立柱建物 18**（図 91） 第 4・5 面検出。A 2 棟南西隅に位置する。北辺の 700 ピットで柱痕跡が認められた。南北に長い建物と仮定すると、主軸方位は N 1° E、桁行 2 間（3.7 m）以上・梁行 2 間（3.5 m）の建物と考えられる。

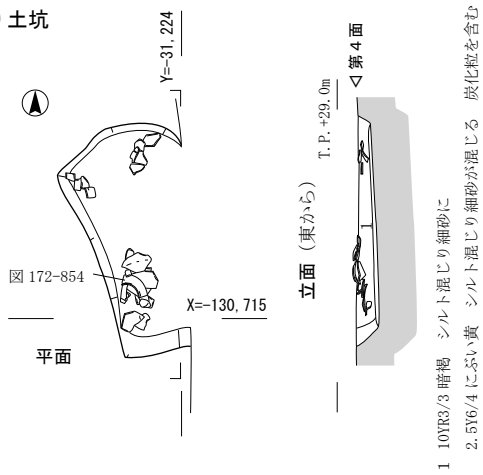
東辺の 346 ピットから古代の土器と黒色土器 A 類細片、北西隅の 410 ピットから古代の土器細片、西辺の 710 ピットから古代の土器と製塩土器の細片が出土した。黒色土器 A 類に注目すれば 10 世紀まで時期が下がる可能性がある。

**掘立柱建物 19**（図 92） 第 5 面検出。A 2 棟北東部に位置する。主軸方位は N 12° W で、桁行 2 間（3.8 m）・梁行 2 間（3.4 m）、面積 12.9 m<sup>2</sup>の側柱建物の可能性はある。しかし、ピットはいずれも小規模で柱痕跡も認められず、さらに桁行中央の柱が東西両辺とも見当たらないという疑問も残る。

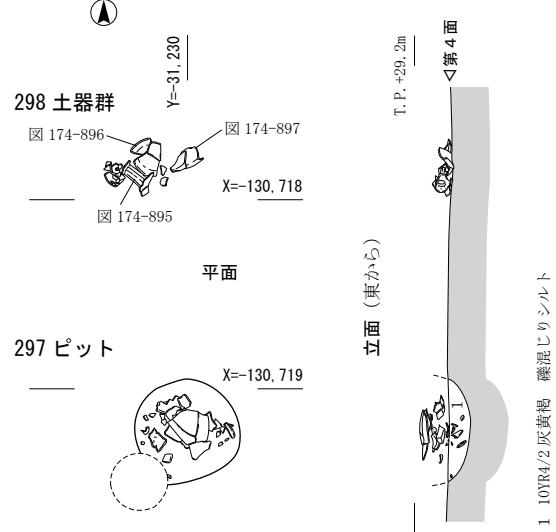
出土遺物は、北西隅の 479 ピットの 8 世紀の須恵器杯（図 164 - 751）、南東隅の 501 ピットの 8 世紀の土師器杯、古代の土器、製塩土器細片である。

**土坑・ピット・土器群** 10 区（A 2 棟）第 4・5 面検出の土坑、ピット、土器群のうち、掘立柱建物などを構成しないが特記事項のあるものについて遺構番号順に述べる。

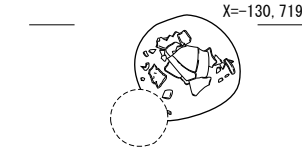
289 土坑



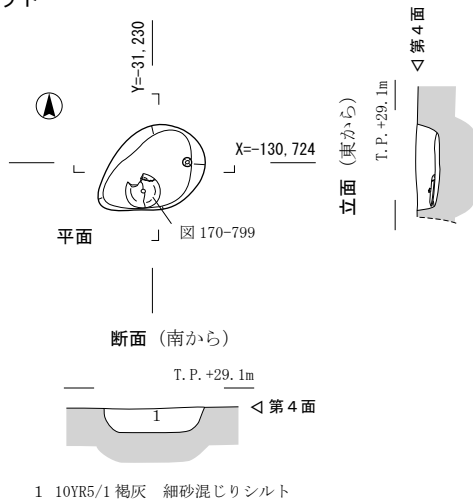
298 土器群



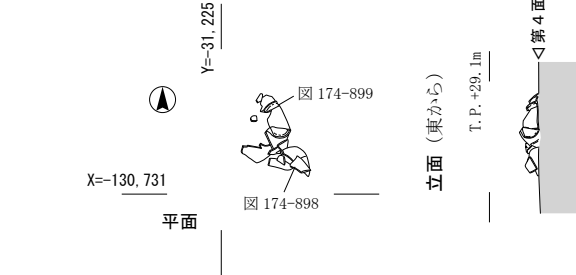
297 ピット



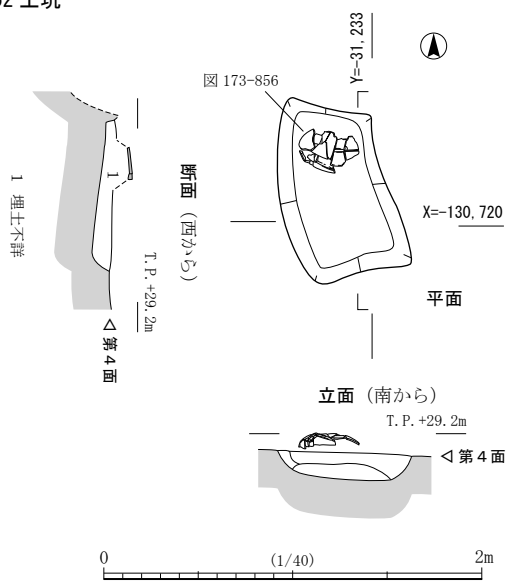
299 ピット



351 土器群



352 土坑



356 ピット

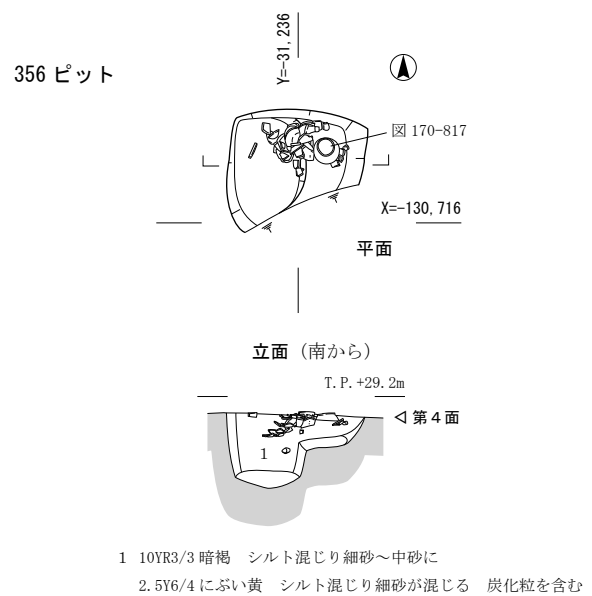


図93 10区 第4面289土坑・297ピット・298土器群・299ピット・351土器群・352土坑・356ピット

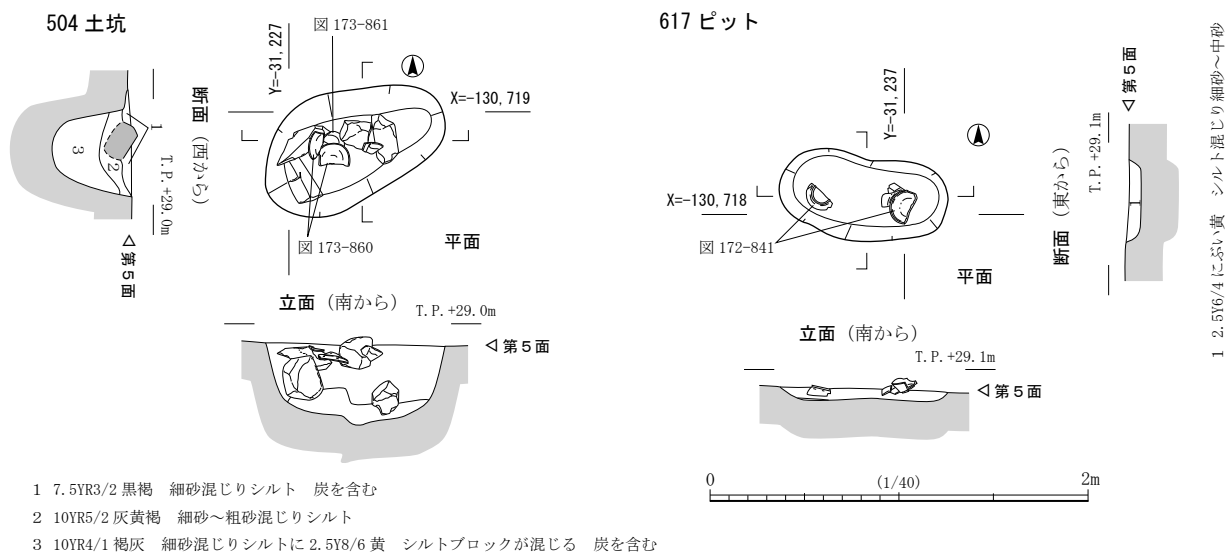


図94 10区 第5面504土坑・617ピット

**289 土坑** (図 93 写真図版 50 - 180) 第 4 面検出。A 2 棟北東隅に位置する。東部が調査区外に広がるので全貌は明らかではないが、南辺と西辺が直線的で、北辺が弧状を描く。南北 1.2 m、東西 0.7 m 以上、深さ 12 cm。埋土は、10YR3/3 暗褐色シルト混じり細砂に 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト混じり細砂や炭化粒が混じる。出土遺物は、8 世紀中頃を主体とする土師器・須恵器 (図 172 - 848 ~ 855) である。

**295 土坑** 第 4 面検出。A 2 棟中央部東側に位置する。重複関係では、掘立柱建物 1 や掘立柱建物 8 よりも古い。平面は南北に長い不整楕円形で、長径 1.9 m、短径 1.1 m、深さ 11 cm。埋土は、5Y4/1 灰色シルト混じり細砂に 5Y5/6 オリーブ色粗砂混じりシルトのブロックが混じる。古代の土器や製塩土器の細片が出土した。

**297 ピット** (図 93 写真図版 50 - 181) 第 4 面検出。掘立柱建物 1 の西辺内側に位置する。平面円形で、直径 54 ~ 57 cm、深さ 12 cm 以上。埋土は、10YR4/2 灰黄褐色礫混じりシルト。8 世紀後半の須恵器杯蓋 (図 170 - 798)、8 世紀後半~末の土師器 (図 170 - 792 ~ 796)、9 世紀前半の黒色土器 A 類 (図 170 - 797)、製塩土器細片などが出土した。

**298 土器群** (図 93 写真図版 50 - 182) A 2 棟北東部、297 ピットの北約 1 m に位置する。第 4 面上で 8 世紀後半の土師器杯蓋・高杯・鉢・甕 (図 174 - 894 ~ 897) などを検出した。周辺に掘方などは見当たらなかった。

**299 ピット** (図 93 写真図版 50 - 183) 第 4 面検出。掘立柱建物 1 の南西部に位置する。平面は北東 - 南西に長い楕円形で、長径 61 cm、短径 43 cm、深さ 11 cm。埋土は、10YR5/1 褐灰色細砂混じりシルト。8 世紀中頃の須恵器杯蓋 (図 170 - 799) がほぼ完形で出土した。

**351 土器群** (図 93 写真図版 50 - 186) A 2 棟南東隅に位置する。第 4 面上で 8 世紀後半の土師器甕 (図 174 - 898) と須恵器甕 (図 174 - 899) を検出した。周辺には遺構の輪郭などは認められなかったが、およそ 5 cm 下層の第 5 面ではこの周囲が 575 落ち込みであった。

**352 土坑** (図 93 写真図版 50 - 187) A 2 棟中央部北寄りに位置する。第 4 面で 8 世紀後半の須恵器壺 (図 173 - 856) が出土し、第 5 面まで掘り下げると土坑の形状が判明した。平面は北北西 - 南南東に長いややゆがんだ隅丸長方形で、長径 1.0 m、短径 0.6 m、深さは、土器の上面から土坑底まで

24 cm。埋土不詳。

**354 土坑** A 2 棟北西部に位置する。第 4 面検出。平面は東北東 - 西南西に長い隅丸長方形で、長径 1.7 m、短径 0.8 m、深さ 26 cm。埋土は、上層が 2.5Y5/1 黄灰色シルト混じり細砂に 10YR5/8 黄褐色細砂混じりシルトと 7.5YR4/4 褐色シルト混じり細砂のブロックや炭化粒が混じる、下層が 2.5Y6/1 黄灰色シルト混じり細砂に 10YR5/8 黄褐色細砂混じりシルトが混じる。8 世紀の須恵器（図 173 - 857・858）、製塩土器や瓦の細片が出土した。

**356 ピット**（図 93 写真図版 51 - 188） 第 4 面検出。A 2 棟北西部、357 井戸の北側に位置する。重複関係からすると、630 井戸よりも新しく、357 井戸よりも古い。平面は隅丸方形と推定され、東西 72 cm、南北 65 cm 以上。深さは、東側では 18 cm だが、39 cm と深くなっている。埋土は、10YR3/3 暗褐色シルト混じり細砂に 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト混じり細砂や炭化粒が混じる。8 世紀末の一括性のある土師器（図 170 - 806～813）、須恵器（図 170 - 814～818）、製塩土器（図 170 - 819・820）などが出土した。

**431 土坑** 第 4 面検出。A 2 棟西端に位置し、その西部は調査区外に延びる。平面はほぼ円形と推定され、直径約 1.7 m、深さ 20 cm。埋土は、10YR5/2 灰黄褐色粗砂混じりシルト。8 世紀前半と考えられる須恵器鉢（図 173 - 859）などが出土した。

**446 土器群** A 2 棟北西部、357 井戸の東約 1 m に位置する。第 4 面上で 8 世紀の製塩土器（図 174 - 900）などを検出した。周辺に掘方などは見当たらなかった。

**447 土器群** A 2 棟北西部、353・357 井戸の東約 0.5 m に位置する。第 4 面上で 8 世紀末の土師器皿や須恵器杯（図 174 - 901）を検出した。周辺に掘方などは見当たらなかった。

**498 土坑** 第 5 面検出。A 2 棟東辺に位置し、さらに調査区外に延びる。平面は東西に長い楕円形と推定され、長径 0.9 m 以上、短径 1.0 m、深さ 12 cm。埋土は、10YR4/1 褐灰色細砂混じりシルト。古代の土器細片が出土した。

**503 土坑** 第 5 面検出。A 2 棟北東部に位置する。平面は東西に長いややひしゃげた楕円形で、長径 1.5 m、短径 0.5 m、深さ 9 cm。埋土は、2.5Y4/1 黄灰色粗砂混じりシルト。古代の土器細片が出土した。

**504 土坑**（図 94 写真図版 51 - 190） 第 5 面検出。503 土坑の南西に接する。平面は東北東 - 西南西に長い楕円形で、長径 1.0 m、短径 0.6 m、深さ 42 cm。埋土は、図 94 のように 3 層に分かれる。8 世紀前半～中頃の須恵器（図 173 - 860～862）などに加えて人頭大の石が 4 個出土した。

**548 土坑** 第 5 面検出。A 2 棟中央部に位置する。平面は南北に長い楕円形で、長径 1.7 m、短径 0.7 m、深さ 19 cm。埋土は、2.5Y4/1 黄灰色粗砂混じりシルト。古代の土器細片が出土した。

**617 ピット**（図 94） 第 5 面検出。A 2 棟北西部、630 井戸の西側に位置する。平面は東西に長い楕円形で、長径 90 cm、短径 46 cm、深さ 7 cm 以上。埋土は、2.5Y6/4 にぶい黄色シルト混じり細砂～中砂。8 世紀中頃の杯・壺・甕といった須恵器（図 172 - 841～843）などが出土した。

**623 土坑** 第 5 面検出。A 2 棟北東部に位置する。平面は西北西 - 東南東に長い楕円形で、長径 1.3 m 以上、短径 1.0 m、深さ 14 cm。埋土は、10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混じりシルトに 10YR6/6 明黄褐色細砂混じりシルトが混じる。古代の土器細片が出土した。

**685 土坑** 第 5 面検出。A 2 棟南西部に位置する。平面不整形で、東西・南北ともに 1.6 m、深さ 24 cm。埋土は、2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂混じりシルトが主体で、底部に厚さ 2～8 cm で 2.5Y4/2 暗

灰黄色細砂混じりシルトが溜まっており、全体に焼土が含まれる。8世紀中頃の土師器杯（図173-863）、製塩土器や瓦の細片が出土した。

**702 土坑** 第5面検出。A2棟南部に位置する。第3面検出の255溝に攪乱されているが、平面は北北西-南南東に長い楕円形と推定され、長径2.6m、推定短径約1.2m、深さ12cm。埋土は、2.5Y5/4黄褐色細砂～粗砂混じりシルト。製塩土器や古代の土器細片が出土した。

**703 土坑** 第5面検出。702土坑の南東側に位置する。平面は南北に長い楕円形で、長径2.6m以上、短径1.6m、深さ42cm。埋土は、2.5Y5/4黄褐色細砂～粗砂混じりシルトで、702土坑とよく似ている。古代の土器細片が出土した。

**その他のピット** A2棟（10区北東部）の第4面と第5面では、掘立柱建物や柱列を構成するものや上記以外にも多くのピットを検出した。第4面の321・325・326・384・392・429・430ピットや第5面の470・471・492・531・604・646・695・728・979・1004・1013ピットでは柱痕跡が認められた。その他のピットは、単層あるいは水平方向に分層できるものが多く、建物や柱列などの復元には至らなかった。

これらのピットからの出土遺物は、8世紀の土師器・須恵器（図170-800・802～804、171-823～828、172-832～839・844・846・847）が主体を占めるが、8～9世紀の製塩土器（図170-805、172-845）や瓦（図170-801・822、171-829～831）、9世紀後半の灰釉陶器碗（図171-821）などもみられる。さらに、第4面ではA2棟中央部南側の327ピットから花崗岩、395ピットからアカガシ亜属の木片、第5面では中央部の683ピットから礫岩、南東部の574ピットから鉄製品（図172-840）が出土した。

**1007 石群**（写真図版51-192） 第5面検出。A2棟中央部南側に位置する。東西1.1m以上、南北幅0.6m、深さ16cmの溝状のくぼみに、礫岩と点紋緑色片岩が並んでいる。土器は出土しなかった。

**538 落ち込み** 第5面検出。A2棟東辺に位置し、調査区外に延びる。検出した範囲では、平面は南北1.0m、東西1.2m以上の隅丸長方形で、北部が1.5mほど北に突出する形状である。深さ9cm。埋土は、7.5YR3/1黒褐色細砂混じりシルト。8世紀の土師器・須恵器（図174-889～893）や製塩土器細片などが出土した。

**575 落ち込み** 第5面検出。A2棟南東隅に位置する。平面が不整三角形で、東西2.6m、南北1.4m、深さ16cm。埋土は、周辺の第4層と同じ2.5Y4/1黄灰色粗砂混じりシルト。7世紀と考えられる須恵器甕や製塩土器細片などが出土した。

**329 溝** 第4面検出。A2棟南東部に位置する。主軸方位は東北東-西南西だが、東端で北に延びる。主軸方位の長さ8.0m、幅2.0m、深さ21cm。重複関係では、周辺ピットよりも新しくなる。埋土は、5Y4/1灰色シルト混じり細砂に2.5Y5/6黄褐色シルト混じり細砂のブロック・礫・炭化粒が混じる。出土遺物は、8世紀の土師器（図173-864～872）・須恵器（図173-874～877）を主体とするが、6世紀末～7世紀初頭の須恵器壺蓋（図173-873）、鉄製品（図173-878・879）なども含まれる。

**344 溝** 第4面検出。A2棟南東部に位置する。重複関係では掘立柱建物2や掘立柱建物9よりも古い。主軸方位は東西で、検出長9.4m、幅0.7m、深さ12cm。埋土は、2.5Y3/2黒褐色細砂混じりシルトに2.5YR4/4にぶい赤褐色細砂混じりシルトのブロックが混じる。古代の土器細片が出土した。

**360 溝** 第4面検出。A2棟北東部に位置する。主軸方位は東西で、長さ4.1m、幅0.4m、深さ8

cm。埋土は、2.5Y3/2 黒褐色細砂混じりシルトに 2.5YR4/4 にぶい赤褐色細砂混じりシルトのブロックが混じる。古代の土器や製塩土器の細片が出土した。

**452 溝** 第5面検出。A 2 棟北東部に位置する。主軸方位は北西 - 南東で、南部でゆるやかに屈曲し南へ延びる。長さ約 7.5 m。幅は北部では 0.2 m、南部の広い所で 0.8 m。深さ 8 cm。埋土は、2.5Y4/1 黄灰色粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**464 溝** 第5面検出。A 2 棟南東部に位置する。主軸方位は東西で、検出長 1.8 m、幅 0.5 m、深さ 7 cm。埋土は、10YR4/2 灰黄褐色シルト混じり細砂。8 世紀後半の土師器杯（図 174 - 881）などが出土した。

**482 溝** 第5面検出。A 2 棟北部に位置する。主軸方位は北でやや西に偏する南北で、長さ約 3.5 m、幅 0.7 ~ 1.1 m、深さ 16 cm。埋土は、7.5YR3/2 黒褐色細砂～粗砂混じりシルト。8 世紀中頃の土師器甕（図 174 - 882）や製塩土器細片などが出土した。

**588 溝** 第5面検出。482 溝から約 1 m 西に、ほぼ平行に延びる。検出長 3.5 m、幅 0.5 m、深さ 8 cm。埋土不詳。8 世紀後半の土師器甕（図 174 - 883）などが出土した。

**600 溝** 第5面検出。A 2 棟中央部で南北に延びる。長さ約 10.5 m、幅 1.7 m、深さ 16 cm。埋土は、10YR4/4 褐色細砂混じりシルト。8 世紀の土師器・須恵器（図 174 - 884 ~ 888）が出土した。

**その他の溝** 以上の溝以外にも耕作溝と考えられる平行する浅い溝を複数検出した。重複関係では、第 4 面検出の 329 溝以外はいずれもピットよりも古い。8 世紀の須恵器（図 174 - 880）や製塩土器の細片が出土する溝もあるが、その量は少ない。

## 第10節 11区（B棟）の遺構

11区は調査地南西部に位置する。住宅B棟の建設に伴う調査である。T.P.+31.0～31.3mの現地表面から、最深部でT.P.+28.7mの第6面まで調査した。最終面での調査面積は1146㎡である。

11区の**第1面**は、昭和14（1939）年爆発関連層の上面と推定し今回最初に調査に着手した面であった。しかし結果的に、昭和40年代のアパート（旧住棟）建設当時の地表面であることが判明した。

**第2面**は昭和14年爆発関連層の上面である。爆発復旧後の休憩所と厠を検出した。

**第3面**は昭和14年以前の禁野火薬庫の面で、建物、軽便軌道に伴う枕木土坑、溝、柵、土坑、ピットといった多くの遺構を検出した。

**第4面**は中世（～近世）の面で、土坑、ピット、溝を検出した。

**第5面**は古代（～中世）の面で、水田畦畔、溝、土坑、ピットなどを検出した。

**第6面**は地山層上面で、古代ないしそれ以前の掘立柱建物、土坑、溝、ピットを多数検出した。

### 層序（図95）

11区では南壁の断面を掲げる。

**第1層**は、基本層序の第0層に該当する。旧住棟建設に伴う盛土層（1）と攪乱（2）からなる。

**第2層**（3～10）は、基本層序の第Ⅰ層に該当する。主体となるのは、昭和14（1939）年爆発後の整地層（5・6）と爆発関連層（7・8）である。

**第3層**（11～57）は、基本層序の第Ⅱ層に該当する。火薬庫造成に伴う碎石（14）や盛土層（17～25）を主体とし、それ以前の溜池状の落ち込み（29～33）や旧作土層（34～37）、中世～近世の包含層など（38～57）に分けられる。旧作土層は、他の調査区と同様に段々に設えられている。

**第4層**（58～60）は、基本層序の第Ⅲ層に該当する。この層を除去した第5面調査段階で、11区の西部や中央部南側では地山層（第Ⅶ層）上面に達した。

**第5層**（64～66）は、基本層序の第Ⅴ層・第Ⅵ層に該当する。11区では西部の高い部分と東部に低い部分にこの層が分布していた。

### 第1面（写真図版52-195） 現代

今回の調査では、平成15・16年度調査の成果に依拠し、昭和14（1939）年爆発関連層の上面から人力による調査を開始する計画であった。最初に調査に着手した11区では、主にその北東部に分布する黒色を呈する層を昭和14年爆発関連層、その直上の盛土層を爆発後の整地層と推定し、その上面を第1面として調査した。面の高さはT.P.+30.8～31.0mで、顕著な遺構はなかった。

しかし、この盛土層中から昭和30年代前後の遺物や愛知県常滑市の杉江製陶で昭和42（1967）年に作られた土管が出土し、11区第1面は昭和40年代のアパート（旧住棟）建設当時の地表面であることが判明した。そこで、以後の調査ではこの盛土層や黒色層を重機による掘削対象とした。

### 第2面（図96 写真図版52-196・197） 昭和14年以後

昭和14年爆発関連層（第Ⅰ層）上面である。面の高さはT.P.+30.5～30.9mで、西側が高い傾向にある。昭和14年以降の施設として、休憩所と厠を検出した。



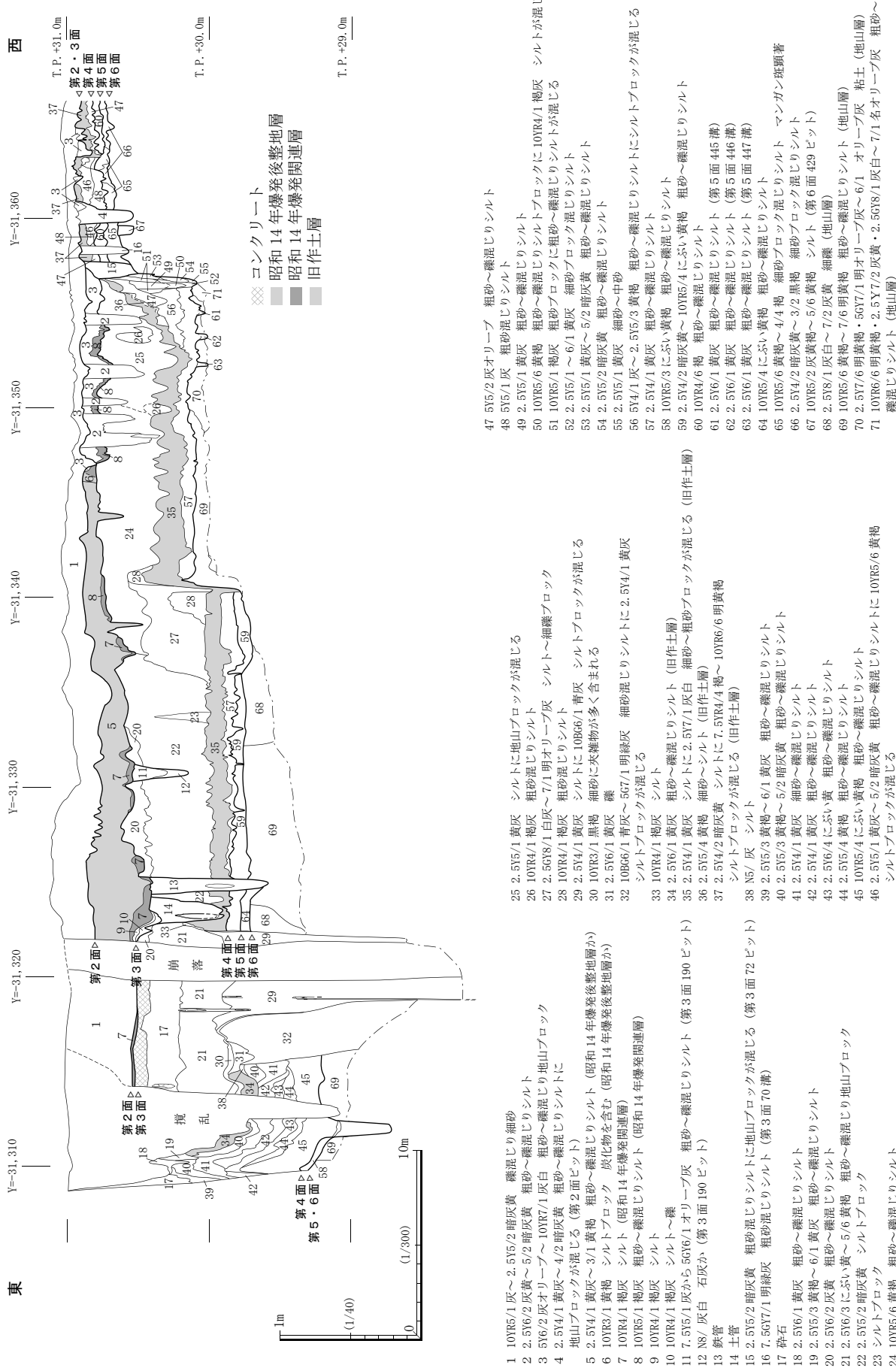


図 95 11 区 南壁断面

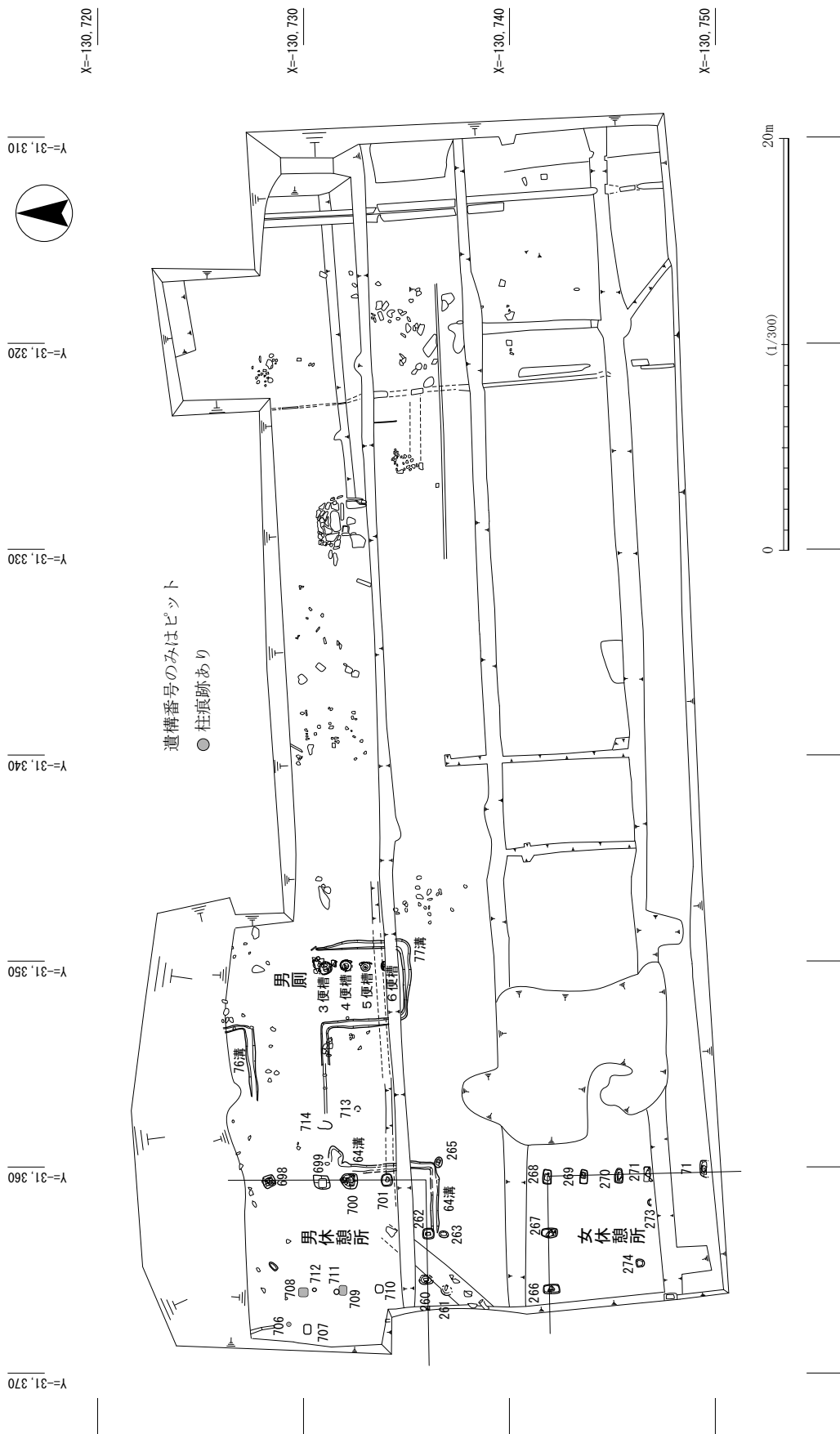


図96 11区 第2面

**休憩所** 11区西部から調査区外にかけて2棟存在する。昭和14(1939)年の「禁野倉庫大阪工廠移管要図」に人夫休憩所として描かれている建物に該当する。

明治29(1896)年10月から昭和18(1943)年9月までの禁野火薬庫の歴史を編年的に記した『分廠歴史』には、昭和14年授受の木造平屋建て人夫休憩所2棟で748.44㎡という記事があり、これによると1棟は374.22㎡(約113坪)となる。また、昭和17(1942)年の「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠新築増築概要図」では、北側の建物に**男休憩所**、南側には**女休憩所**と記されている。

なお、大正13(1924)年の「大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図」から昭和10(1935)年の「大阪兵器支廠禁野弾薬庫要図」までの各年の配置図には、昭和14年の爆発後に建てられた人夫休憩所とほぼ同様な位置に、十五榴破甲弾完成場と十五榴薬筒完成場という2棟の建物が描かれている。それらは人夫休憩所よりもさらに西側へ長く伸びた仮建物(あるいは仮建築物)で、西辺は正門から北上する道路に面している。これに対し、11区の西部で検出した昭和14(1939)年の爆発後に造られた建物の柱穴は、建物の西辺が道路よりも東に20m弱離れた位置にある平成15・16年度調査において検出された建物に連なる。その点から、11区で検出した掘立柱の建物は完成場ではなく、休憩所であったと判

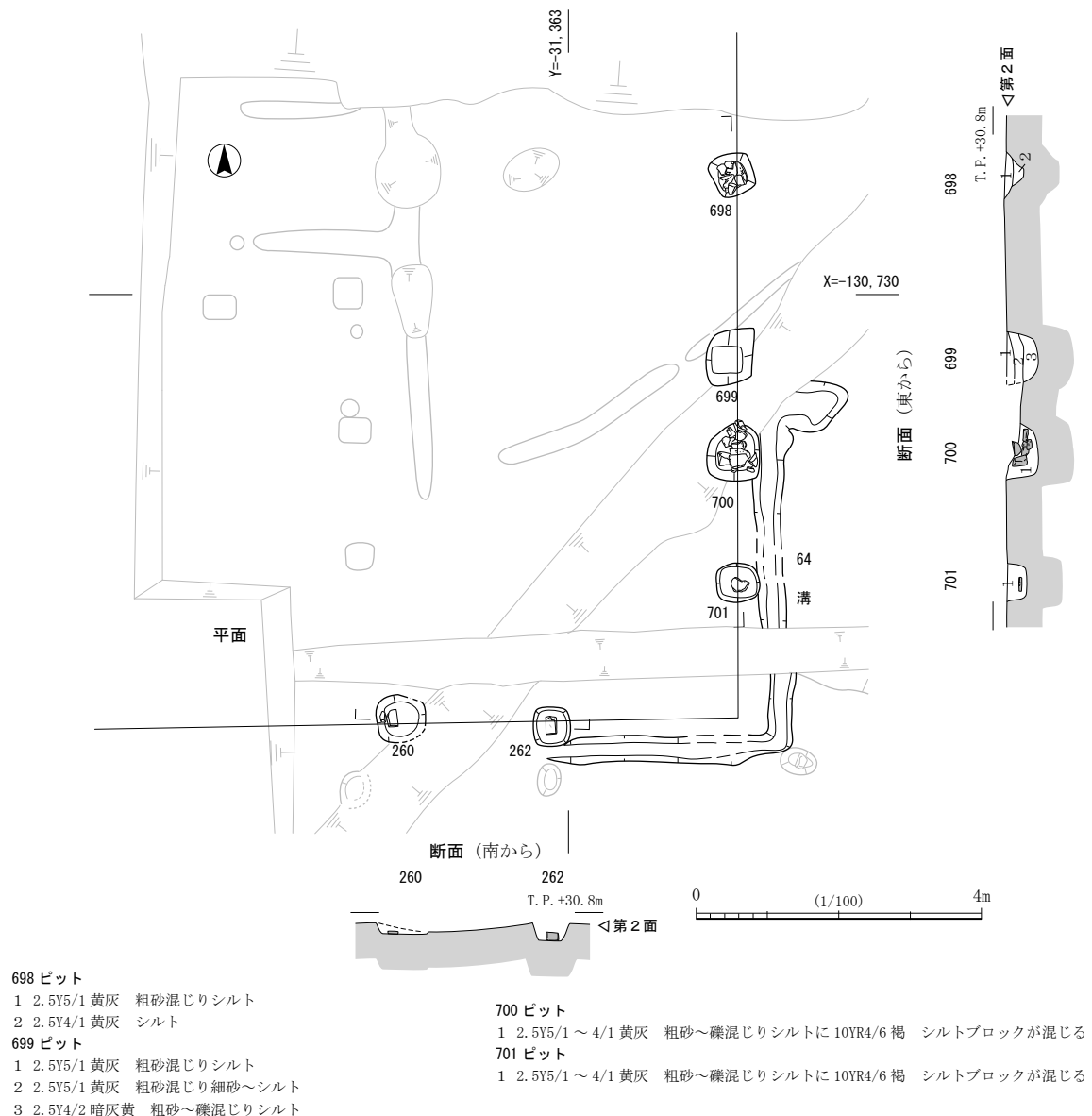


図 97 11区 第2面男休憩所

断できる。

男休憩所（図 97）は 11 区北西隅に位置し、平面形が隅丸長方形を呈するピット群で構成される。その周囲をめぐる 64 溝が男休憩所の雨落ち溝と推定される。男休憩所の東側は男廁につながる。出土遺物は、262 ピットの砲弾・不明鉄片などである。

根石として、260 ピットに禁野本町遺跡から南東約 4 km の交野市倉治付近産の中粒黒雲母花崗岩、262 ピットに兵庫県加古川市増田池付近産の可能性のある流紋岩質火山礫凝灰岩、700 ピットに高槻層の砂岩に似た細粒砂岩や産地不明の細粒黒雲母花崗岩、花崗岩、石英斑岩が用いられている（奥田尚氏のご教示）。

女休憩所（図 98 写真図版 53 - 198）は 11 区南西隅に位置し、ピットの根石にはいわゆる竜山石が用いられている（写真図版 53 - 199 ～ 202）。出土遺物には、267 ピットの砲弾、270 ピットの椀瓦、271 ピットの鉄片などがある。

男廁（3～6 便槽）（図 99 写真図版 54 - 203 ～ 209） 11 区北西部に位置する。3～6 便槽が南北に並ぶ。位置的にみて、昭和 17（1942）年の「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠新築増築概要図」や昭和 20（1945）年の「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠構内図」に記載された男廁に伴う便槽であろう。

便槽に用いられた鉢（図 129 - 23 ～ 25）内の埋土を全て洗浄したところ、各鉢から、木片、瓦、ガラスが出土した。5 便槽からは、生後 6 カ月未満の幼体のイヌの歯、下顎骨、肩甲骨、肋骨（「第 6 章

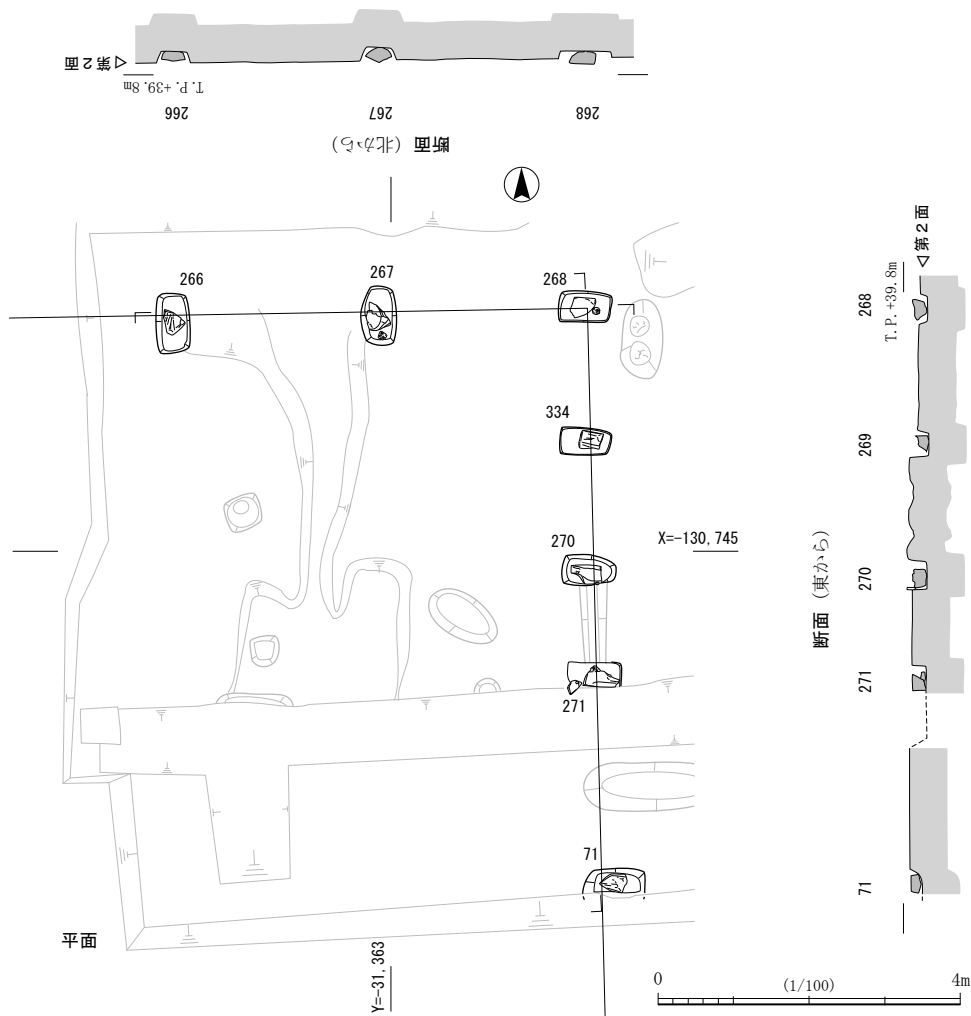


図 98 11 区 第 2 面女休憩所

- 1 5Y3/2灰オリーブ シルト～礫に5Y3/1オリーブ黒 シルト～細砂が混じる
- 2 5Y3/2オリーブ黒 シルト～細砂に10YR4/4褐色 シルト～細砂が混じる  
径3～10cmの石、コンクリを含む
- 3 2.5Y3/1黒褐色 シルトに粗砂が混じる 有機質繊維を含む
- 4 10YR3/2黒褐色 シルト 木片を含む
- 5 10YR3/2黒褐色 シルトと2.5Y4/2暗灰黄 粗砂のラミナ
- 6 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂

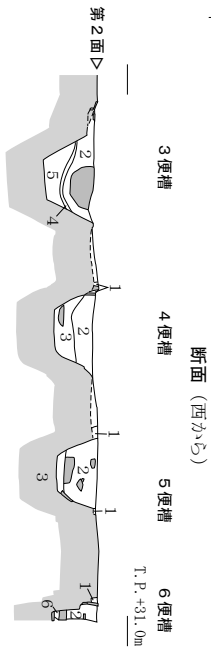


図99 11区 第2面男廁 (3～6便槽)

禁野本町遺跡出土の動物遺存体」参照)が出土した。

3～6 便槽の周囲で 76・77 溝を検出した。埋土は、76 溝が 10YR5/2 灰黄褐色～4/1 褐灰色粗砂～礫混じりシルト、77 溝が 10YR3/1 黒褐色シルト。これらの溝は、北西 - 南東に並ぶ枕木土坑群やその北東側に位置する建物よりも新しく、便槽と同時存在としても時期的な矛盾はない。

『分廠歴史』には、昭和 14 年に授受された木造平屋建ての廁が 2 棟で延 51.30 m<sup>2</sup>という記事があり、これによると男廁はその半分として 25.65 m<sup>2</sup>となる。西側に延びる 2 本の溝に挟まれた部分が男休憩所からの渡り廊下でそれが廁の西辺中央に取り付いていたと仮定して溝の中心を基準として計測すると、溝に囲まれた空間は南北約 11 m (約 6 間)・東西 3.7 m (約 2 間)、面積約 40 m<sup>2</sup>となる。約 40 m<sup>2</sup>と 25.65 m<sup>2</sup>では違いが大き過ぎるので、76・77 溝は基礎跡ではなく雨落ち溝で、壁の位置はその内側にあったものと考えられる。

### 第 3 面 (図 100 写真図版 55 - 210～56 - 212) 昭和 14 年以前

第 I 層を除去した面である。面の高さは T.P.+30.4～30.9 m。11 区西端では地山層が露出したが、これ以外の範囲では、禁野火薬庫造成に伴う盛土層 (第 II 層) 上面である。昭和 14 年爆発以前の遺構の他、第 2 面での検出状況が悪かった爆発後の遺構も合わせて調査した。主な遺構は、建物、軽便軌道に伴う枕木土坑、溝、柵、土坑、ピットである。

**第 2 荷造場** (写真図版 58 - 222) 11 区東部に位置する。昭和 8 (1933) 年頃に設けられた荷造場のコンクリート製基礎である。東西 8.9 m。南北 19.8 m 以上。

荷造場には東辺北寄りと西辺南寄りに出入口が存在する。東出入口 (写真図版 58 - 223) 部分のコンクリート基礎には約 7.2 m にわたって溝があり、幅 1.8 m (1 間) の引戸が左右に 2 枚ある形態であったと推定できる。東西の出入口の外側には幅 3.6 m・奥行き 0.4 m 程の踏み石が設えられている。西出入口 (写真図版 58 - 224) の外側には出入口の踏み石よりも南北にそれぞれ約 0.3 m 広く南北 4.2 m・東西 0.9 m の範囲にコンクリートが打たれ、さらにこの外側に幅 4.3 m・奥行き 1.2～1.4 m 程の土間がある。

荷造場南部のコンクリートの上面では、細かな凹凸が看取できた。荷造場内には 3 箇所の漏斗状の穴がみられた。北側の穴の最下層には昭和 14 年爆発関連層と思しき黒色層がみられ、穴付近のコンクリート基礎は歪み、一部には亀裂が生じていた。また、コンクリートの床面は黒く焦げていた。これらの点から、荷造場建物内の穴は昭和 14 年の爆発穴であり、また、爆発時に荷造場内で火災が発生したものと推定できる。

**仮建物・十五榴霰弾完成場** 11 区中央部、8～45 枕木土坑 (軽便軌道) の北東側に位置し、それと平行して主軸方位を北西 - 南東とする。この建物に関係深いと考えられるのが以下の溝である。

128 溝は枕木土坑 30～40 の北東側に位置し、コの字形にめぐる。幅 0.3～0.6 m、深さ 10 cm。埋土は、枕木土坑に近い主軸方位北西 - 南東の部分とそれに続く北東 - 南西の部分が 2.5Y6/2 灰黄色シルト、127 ピットに近い北西 - 南東の部分では 10YR1/6 褐灰色粗砂混じりシルト。128 溝の枕木土坑寄りの北西側の延長線上には、10YR5/2 シルト混じり礫を埋土とする 79・80 溝があり、その延長は、128 溝のみでは約 7.5 m、80 溝を含めて約 21 m、79 溝までをも含めると 23.5 m 以上となる。なお、78・82・83・97・118 溝や 128 溝から南東に突き抜ける 116 溝も同様の主軸方位と埋土である。

Y=31.370

Y=31.360

Y=31.350

Y=31.340

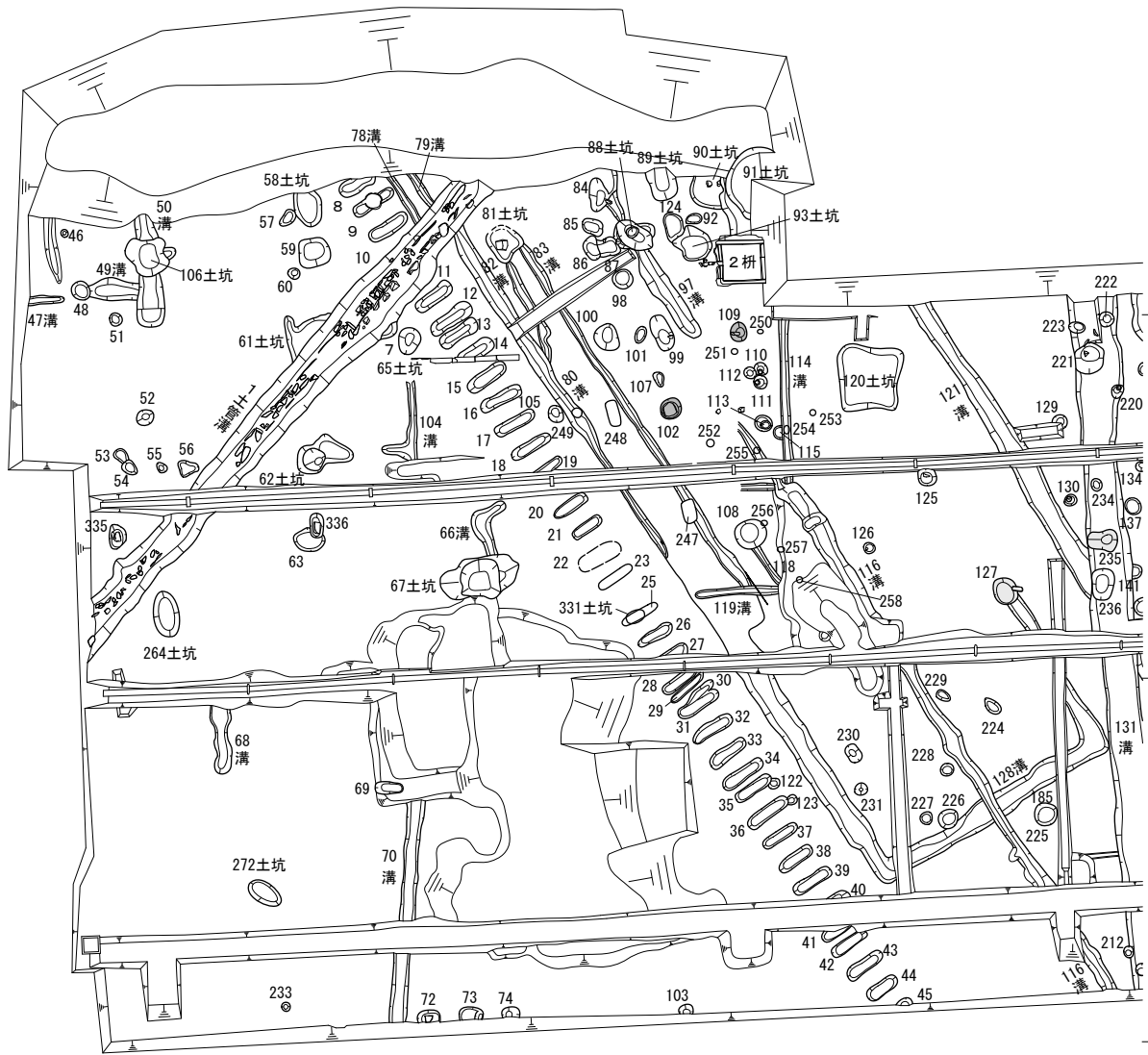


图 100

Y=31.340

Y=31.330

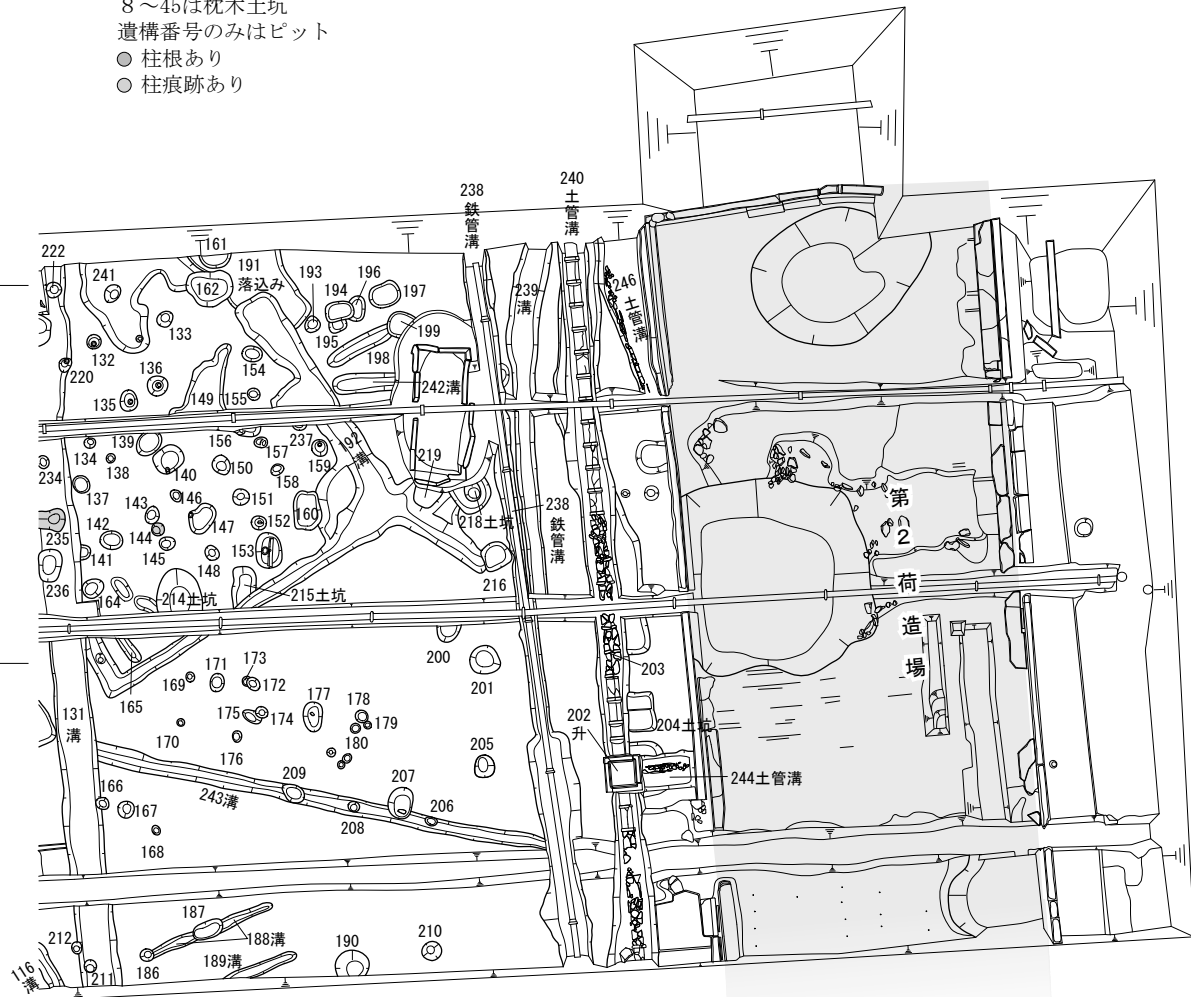
Y=31.320



Y=31.310

X=130.720

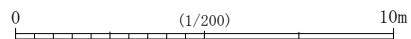
8～45は枕木土坑  
 遺構番号のみはピット  
 ● 柱根あり  
 ○ 柱痕跡あり



X=130.730

X=130.740

X=130.750





121 溝は 11 区中央部に位置する。主軸方位が北西 - 南東で幅 0.5 ～ 0.6 m の部分とその南東端で直角に曲がり北東に向かう幅 0.3 ～ 0.4 m の部分とがある。深さは 11 cm。埋土は、10YR7/6 明黄褐色～2.5Y5/2 暗灰黄色シルト。192 溝は 121 溝の北東端から北西に延びる。長さ約 7 m、幅 0.6 ～ 1.1 m、深さ 13 cm。埋土は、2.5Y5/2 暗灰黄色シルト。

これらの溝の相対的な位置関係をみると、主軸方位が北東 - 南西の部分は 128 溝と 121 溝が 1.6 m の空間をはさんで直列する。一方、北西 - 南東に並行する溝の心々距離は、128 溝同士が約 7 m、128 溝と 121 溝は約 2 m、121 溝と 192 溝が約 9 m となる。

大正 2 (1913) 年の「大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図」には軽便軌道の北東側に隣接して長方形の**仮建物**が、大正 13 (1924) ～昭和 4 (1929) 年の同図には軽便軌道の北東側に隣接して正方形に近い長方形の**十五榴霰弾完成場**が、昭和 5 (1930) 年の同図には正方形に近い大きめの建物の北部に一部重複してひとまわり小ぶりの長方形の建物が描かれ両者を示すように**十五榴霰弾完成場**という文字が、昭和 6 (1931) ～昭和 8 (1933) 年の同図では軽便軌道の北東側にやや離れて長方形の**十五榴霰弾完成場** (昭和 8 年図では十五榴散弾完成場) が、それぞれ描かれている。昭和 9 (1934) 年以降の「大阪兵器支廠禁野弾薬庫要図」には、北西 - 南東方向の軽便軌道やこの建物の表現はない。

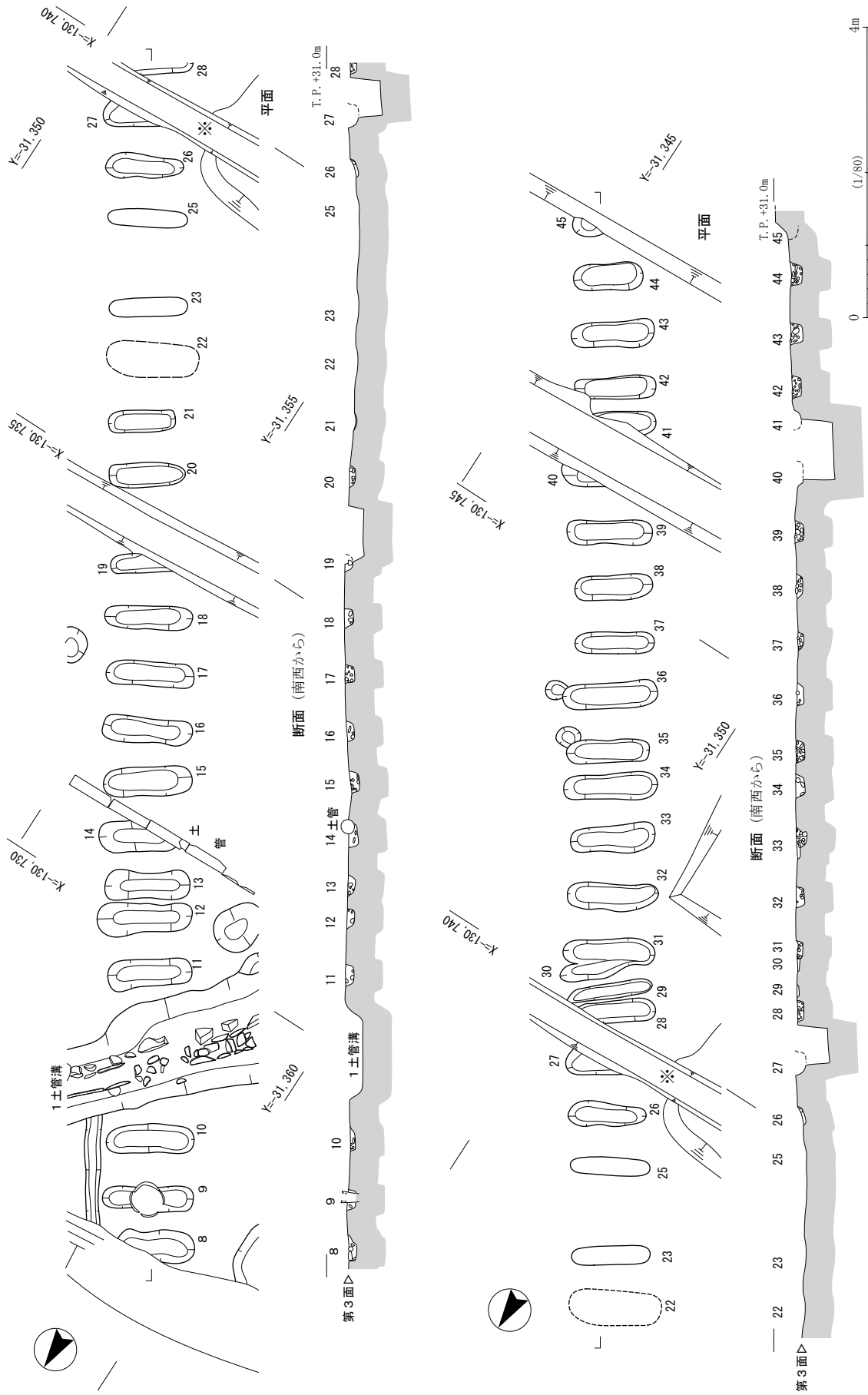
この建物と同じ配置図に描かれている 1 ～ 4 号火工場は、平成 15・16 年度の調査で東西 11 m (6 間強)、南北 7.4 m (4 間強) という規模が判明している。それを一応の目安として仮建物の規模を測定すると、おおむね、大正 2 (1913) 年の図では、軽便軌道に接して桁行約 20 m・梁行約 9 m、昭和 3 (1928) ～ 5 (1930) 年の図では、軽便軌道に接して桁行約 24 m・梁行約 18 m、昭和 6 (1931) ～ 8 (1933) 年の図では軽便軌道からやや離れて、桁行約 21.5 m・梁行約 8.5 m となる。

以上のような検出遺構と配置図との対比から、建物が溝の底に木材などを設置して土台とする土台建ちのものであったと仮定すると、大正 2 年頃の建築当初は桁行不明・梁行 7.2 m (4 間) ～ 9 m (5 間) の仮建物であったものが、昭和 3 年までには梁行 18 m (10 間) の十五榴散弾完成場に拡張され、昭和 5 年に北側に幅約 9 m (5 間) の建物が造られたと考えられる。ただし、第 2 面の男体休憩所や男廁のように雨落ちの溝であったとすれば、建物の規模はひとまわり小さくなる。その後、昭和 6 年頃に軽便軌道際の部分の建物が取り払われ、昭和 8・9 年頃には建物と軽便軌道が撤去されたものと推定できる。

建物範囲の内側に多数存在し建物と平行・直交して並ぶ**ピット群**の一部は、束柱と考えられる。

**8 ～ 45 枕木土坑 (軽便軌道)** (図 101) 12 区西部、仮建物・十五榴霰弾完成場の南西側に位置し、37 基の枕木土坑が南東 - 北西方向に並ぶ。個々の土坑は、軌道の延長方向に直交し、平面隅丸長方形で、長さ 0.9 ～ 1.3 m、幅 0.3 ～ 0.4 m、深さ 10 ～ 20 cm 程度である。配列状況をみると、12 と 13、25 と 26、34 と 35、41 と 42 の各枕木土坑の間が他の間隔よりも狭くなっている。その間は約 5 m なので、それがレールの長さであると推定できる。この軌道は、各年の「大阪兵器支廠禁野弾薬庫図」を参照すると、大正 2 (1913) 年頃敷設され、昭和 9 (1934) 年にはなくなっている。

**1 土管溝** (写真図版 57 - 216・217) 9 区北西部において、北東 - 南西方向に検出された。幅 1.0 ～ 1.5 m、深さ約 40 cm。埋土は、2.5Y5/1 黄灰色粗砂混じりシルトに 2.5Y7/1 灰白色礫が混じる。土管の遺存状況は悪いが、外径約 26 cm の土管 (図 130 - 37) が連なっていた。溝底の傾斜と土管の接続部の状況から、南西から北東に水を流していたと考えられる。土管のほか、瓦 (図 132 - 51・52) などとも出土した。



枕木土坑 8 ~ 44 (29・30、埋土が残っていないもの、未掘削の 45 は除く) 10TR3/3 暗褐色 シルト混じり礫 炭化物を含む  
 枕木土坑 29・30 2.5N4/2 暗灰黄 シルト～礫

図 101 11 区 第 3 面 8 ~ 45 枕木土坑

**66 溝** 11 区西部、軽便軌道のうちの 20 枕木土坑の西側に位置する。主軸方位が北東 - 南西の部分と北西 - 南東の部分が西部でつながり、平面は L 字形となる。幅 0.3 ～ 0.4 m、深さ 10 cm。埋土は、10YR2/1 黒色粗砂～礫混じりシルト。

**131 溝** 11 区中央部をほぼ南北に貫く。上記の十五榴榴散弾完成場に関係する 121 溝などと重複関係にあり、それらよりも新しい。幅 0.9 ～ 1.2 m、深さ 8 cm。埋土は、2.5Y5/4 黄褐色粗砂～礫混じりシルトに 2.5Y6/1 黄灰色シルトが混じる。

**188・189 溝** 11 区中央部南辺にあり、東北東 - 西南西を主軸方位として心々距離 1.5 m で並行する。2.5Y3/1 黒褐色粗砂～礫混じりシルトを埋土とすることから、昭和 14 年の爆発で埋まった可能性が高い。

**198 溝** 11 区中央部北東側、十五榴榴霰弾完成場北東辺の 192 溝のさらに北東側に位置する。主軸方位は 192 溝とほぼ直交する北東 - 南西で、検出長 1.9 m、幅 0.4 m、深さ 10 cm。埋土は、昭和 14 年爆発関連層である 10YR4/1 褐灰色シルト。

**238 鉄管溝**（写真図版 56 - 212） 11 区東部、後述の 2 号荷造場や土管と主軸方位を異にしやや外側に位置する。幅は北部では 0.5 m だが、南部では最大 1.2 m と広がる。深さは約 40 cm。埋土は、5B6/1 ～ 5/1 青灰色粗砂混じりシルトブロックに N5/ 灰色粗砂混じりシルトが混じる。鉄管の接続部分に、昭和 11（1936）年の栗本鐵工所製であることを示す銘がある（写真図版 56 - 214・215）。瓦（図 132 - 50）なども出土した。

**239 溝** 238 鉄管溝の東に隣接する。主軸方位はほぼ南北だが微妙に曲がり、238 鉄管溝または 240 土管溝とは並行ではない。検出長約 9 m、幅 0.5 ～ 0.8 m、深さ 12 cm。埋土は、昭和 14 年爆発関連層である 10YR4/1 褐灰色シルト。

**240 土管溝**（写真図版 57 - 218・219） 238 鉄管溝と第 2 荷造場との間に位置する。240 土管溝と後述の 202 柵は一連のもので、土管溝の主軸方位は 2 号荷造場に平行している。幅 0.7 ～ 1.2 m、深さ約 40 cm。埋土は、2.5Y5/2 暗灰黄色～ 6/2 灰黄色シルトブロック混じり細砂～シルト。土管（図 131 - 39～41）を 30 本検出した。

**243 溝** 11 区中央部南東側に位置する。131 溝や 238 鉄管溝と重複関係にあり、それらよりも古い。主軸方位は西北西 - 東南東で、検出長約 12 m、幅 0.4 m、深さ 12 cm。埋土は、2.5Y4/1 黄灰色粗砂混じりシルト。両端が明確ではないが、溝底が西が高く東が低くなっていることもあり、上記の仮建物関係の 128 溝から東南東への排水を意図したものと推定できる。金属製の樋留（図 128 - 15）が出土した。

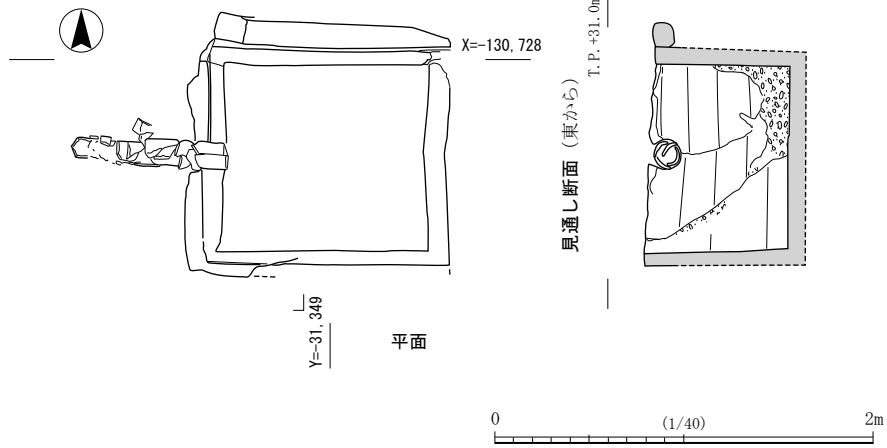
**244 土管溝** 第 2 荷造場から西の 202 柵へ導水する。土管（図 131 - 42）は破損が著しいが、外径約 18 cm。

**246 土管溝** これも検出状況は不良だが、土管の接続部の状況から南南東から北北西に水を流していたと考えられる。土管（図 131 - 43）の外径は約 19 cm。

**その他の溝** 主軸方位が南北方向の 68・70・104・114 溝や東西方向の 47・49・117・119・242 溝は、2.5Y4/1 黄灰色粗砂～礫混じりシルトや 2.5Y5/2 暗灰黄色シルトなどを埋土とするものが多い。その方位から、主軸方位を北西 - 南東とする十五榴榴霰弾完成場や軽便軌道廃絶後の昭和 9（1934）年以降の所産と推定できる。

**2 柵**（図 102） 11 区北西部に位置する。西側に直径 15 ～ 16 cm の土管（図 131 - 38）が接続してい

2 升



202 升

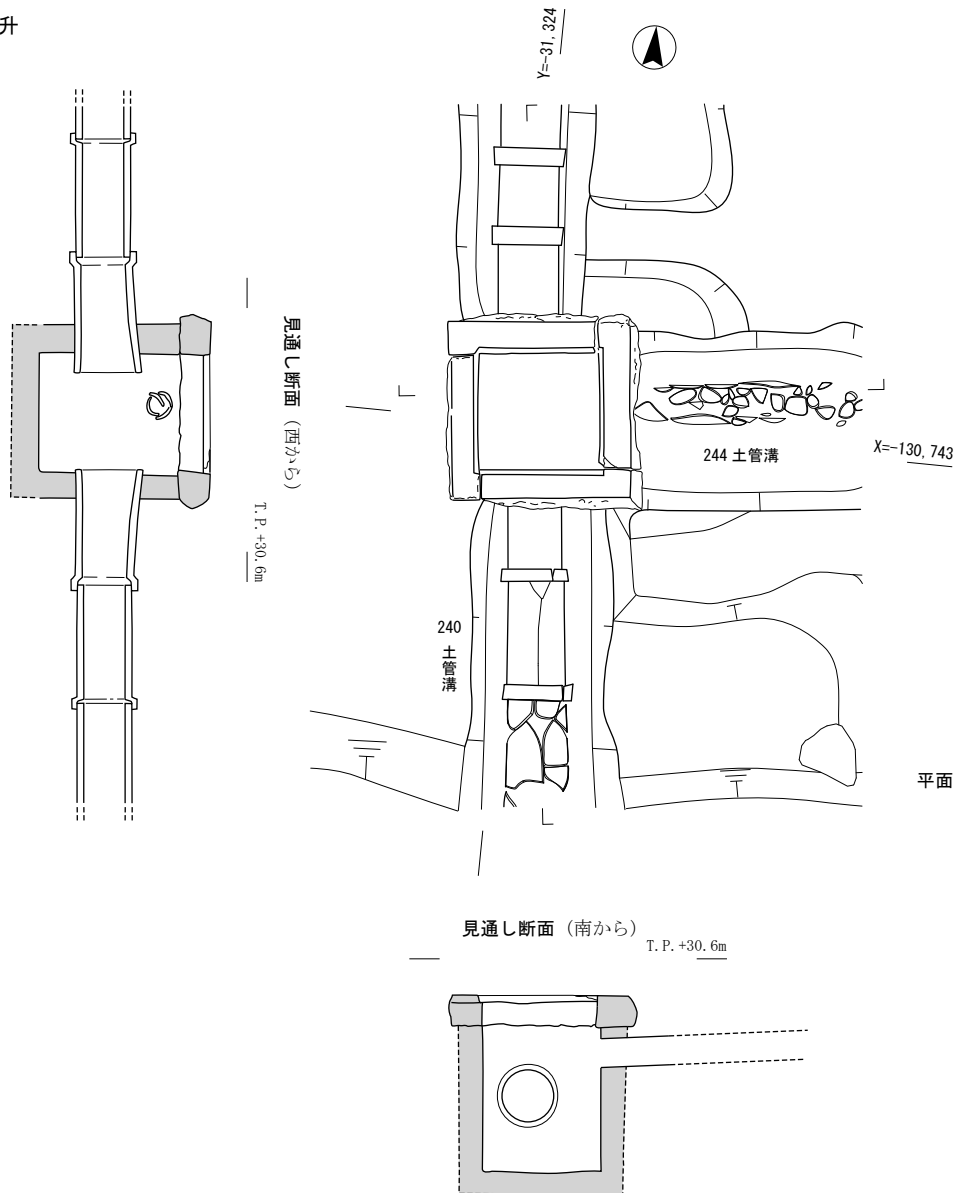


図102 11区 第3面2・202升

る。枡の内法は東西 110 cm、南北 100 cm、深さ 76 cm。スギ材の建築部材（図 137 - 126）やスレート製波板（写真図版 81 - 1101）などが出土した。

**202 枡**（図 102 写真図版 57 - 220・221） 240 土管溝の中ほど位置し、東側に 244 土管溝が接続している。枡本体のコンクリートの上に花崗岩の笠石が設えられている。笠石は 4 つの同形の石材を組み合わせたもので、組み合わせた内側に蓋を受けるための窪みがある。その大きさから、約 68 cm 四方・厚さ約 3 cm の蓋が備えられていたと推定できる。枡の内法は、東西・南北ともに 64 cm、深さ 74 cm である。

**58 土坑** 11 区北西部、8 枕木土坑の西に位置し、その北部は攪乱されている。平面は北北西 - 南南東に長い楕円形と推定され、長径 1.0 m 以上、短径 0.7 m、深さ 15 cm。

この 58 土坑を含め 11 区第 3 面北西部検出の土坑の埋土は、昭和 14 年爆発関係層である 10YR3/1 黒褐色粗砂～礫混じりシルト、あるいはそれを含むものが多い。

**61 土坑** 11 区北西部、1 土管溝の北西側に重複し、それよりも古い。平面は北西部に突出部のある隅丸方形と推測され、東西 1.4 m 以上、南北 1.1 m 以上、深さ 10 cm。埋土は、上層が 10YR3/1 黒褐色粗砂～礫混じりシルト、下層が 10YR3/2 黒褐色粗砂～礫混じりシルト。

**67 土坑** 11 区西部に位置する。66 溝と重複関係にあり、それよりも新しい。平面は東北東 - 西南西に長い不整楕円形で、長径 2.3 m 以上、短径 1.2 m、深さは 60 cm と周辺の土坑よりも一段と深い。埋土は、10YR3/1 黒褐色粗砂～礫混じりシルト。

**81 土坑** 11 区北西部に位置する。重複関係からみると、76・82・83 溝よりも新しい。平面不整円形で、直径約 1.0 m、深さ 10 cm。埋土は、10YR3/1 黒褐色粗砂～礫混じりシルト。

**88 土坑** 11 区北西部に位置する。97 溝と重複関係にあり、それよりも新しい。平面は北西 - 南東に長い楕円形で、長径 1.2 m、短径 0.7 m、深さ 47 cm。埋土は、10YR3/1 黒褐色粗砂～礫混じりシルト。砲弾の弾帯（図 139 - 155）、瓦、スレートなどが出土した。

**89 土坑** 88 土坑の北東約 1 m に位置し、その北部は攪乱されている。主軸方位をほぼ南北とする楕円形と推定され、長径 0.9 m 以上、短径 0.8 m、深さ 43 cm。埋土は、上層が 10YR3/1 黒褐色礫混じりシルト、中層が 10YR6/6 明黄褐色粗砂混じりシルト、下層は N6/ 灰色礫混じりシルトと 10YR5/2 灰黄褐色礫混じりシルトが混じり、上層と中層の層境に木杭や石が含まれる。

**90 土坑** 88 土坑のすぐ東に位置する。北部は攪乱され、東部は 91 土坑と重複関係にあり、それよりも古い。平面円形と推定され、推定径約 1.2 m、深さ 58 cm。埋土は、上層が 2.5Y5/1 黄灰色粗砂～礫混じりシルト、中層と下層は 89 土坑のそれらと同様で、上層と中層の層境にコンクリート塊が含まれる。

**91 土坑** 11 区北西部の北東隅に位置し、90 土坑よりも新しい。平面はほぼ円形と推定され、直径 1.8 ～ 2.0 m、深さも 1.4 m と深い。埋土は、ほぼ水平に各々 15 ～ 40 cm の厚みで、上層から順に、10YR3/1 黒褐色粗砂～礫混じりシルト、10YR4/1 褐灰色粗砂混じりシルト、7.5Y5/1 灰色粗砂～礫混じりシルト、5GY6/1 オリーブ灰色シルト混じり粗砂、10YR4/1 褐灰色粗砂混じりシルト、5GY5/2 灰オリーブ色シルトブロック混じりシルト、5GY3/1 オリーブ黒色シルトが堆積しており、底は地山層にまで達している。

**93 土坑** 90 土坑の南約 0.5 m に位置する。平面不整円形で、直径 0.9 ～ 1.1 m、深さ 9 cm。埋土は、10YR3/1 黒褐色粗砂～礫混じりシルト。

**106 土坑** 11 区北西部に位置する。50 溝と重複関係にあり、それよりも新しい。平面不整円形で、直径 0.9 ～ 1.3 m、深さ 31 cm。埋土は、上層が 10YR3/1 黒褐色粗砂～礫混じりシルト。

**120 土坑** 11 区中央部北西側に位置する。平面はややいびつな隅丸方形で、東西・南北ともに 1.8 m、深さ 8 cm。埋土は、10YR3/1 黒褐色粗砂～礫混じりシルト。

**204 土坑** 11 区東部に位置する。240 土管溝と重複関係にあり、それよりも古い。平面方形で南北 1.0 m、東西 0.7 m 以上 1.4 m 以下、深さ 12 cm。埋土不詳。

**214 土坑** 11 区中央部に位置し、その南部は鉄管により攪乱されている。平面は南北に長い楕円形で、推定長径 1.5 m、短径 1.1 m、深さ 25 cm。埋土は、2.5Y4/1 黄灰色粗砂～礫混じりシルト。

**215 土坑** 214 土坑の東 0.8 m に位置する。平面は南北に長い隅丸方形で、長径 1.1 m 以上 1.6 m 以下、短径 0.6 m、深さ 19 cm。埋土は、上層に薄く 2.5Y4/6 オリーブ褐色粗砂混じりシルトがあり、中層が 10YR5/1 褐灰色細砂～粗砂混じりシルト、下層が 2.5Y4/1 黄灰色粗砂～礫混じりシルト。

**218 土坑** 11 区東部、238 鉄管溝のすぐ西側に位置する。平面は直径約 1.0 m の円形と推定される。埋土は、中央部の直径 43 cm、深さ 30 cm の部分が 2.5Y6/1 黄灰色粗砂～礫混じりシルト。その周囲は深さ 8 cm 程度と浅く、10YR5/1 褐灰色細砂～粗砂混じりシルト。

**264 土坑** 11 区西部に位置する。平面は南北に長い楕円形で、長径 1.2 m、短径 0.7 m、深さ 23 cm。埋土は、2.5Y6/2 灰黄色礫混じりシルト。金属製品（図 128 - 13・138 - 142）などが出土した。

**272 土坑** 11 区南西部に位置する。平面は北西 - 南東に長い楕円形で、長径 1.0 m、短径 0.6 m、深さ 11 cm。埋土は、2.5Y6/2 灰黄色礫混じりシルト。

**191 落ち込み** 11 区北東部に位置する。北部は調査区外に広がる。東西 5.3 m、深さ 11 cm の不定形な落ち込みである。埋土は、第 2 層と同じ 2.5Y4/1 黄灰～ 3/1 黄褐色粗砂～礫混じりシルト。

瓦礫や木ネジ（図 137 - 110・111）などの金属製品が出土した。

**ピット** 先述の 11 区中央部、121・128・192 溝に囲まれた内部にはピットが多数存在するが、そのうち 102・109 ピットには柱根が残り、127・144・235 ピットでは不明瞭ではあるが柱痕跡の可能性のあるものが認められた。これらは仮建物ないし十五榴榴霰弾完成場の束柱と考えられる。11 区中央部南東側に位置する 205 ピットにも角材の柱根が残っており、そこから心々距離 2.8 m で北に並ぶ 201・216 ピットなどとともに掘立柱建物や柱列を構成する可能性もある。

その他のピットは、土坑と同様に昭和 14 年爆発関係層である 10YR3/1 黒褐色粗砂～礫混じりシルトの単層あるいはそれを含むものが多かった。

ピットからの出土遺物には、鉄釘、瓦（図 133 - 58）、木製品、玉碇子（図 128 - 12）など、さらに混入と考えられる寛永通寶（図 128 - 8）がある。

#### 第 4 面（図 103 写真図版 59 - 225 ～ 227） 中世（～近世）

旧作土層や近世の作土層など（第 II 層）を除去し検出した。面の高さは T.P.+29.2 ～ 30.8 m であるが、近世頃にひな壇状に造成されたため、西から東へ向かい明瞭な段差をもって低くなっていく。また、それぞれの平坦面でも相対的に地形が高い部分である 11 区の南西部や中央部南辺などでは、第 4 面調査時に地山層が露出した。遺構として、土坑、ピット、溝を検出した。

**277 土坑** 11 区北東部に位置する。その北部は攪乱されているが、平面は東西に長い長方形と推定され、長径 2.1 m、短径 1.0 m、深さ 22 cm。埋土は、2.5Y6/2 灰黄色礫混じりシルト。13 世紀頃の青

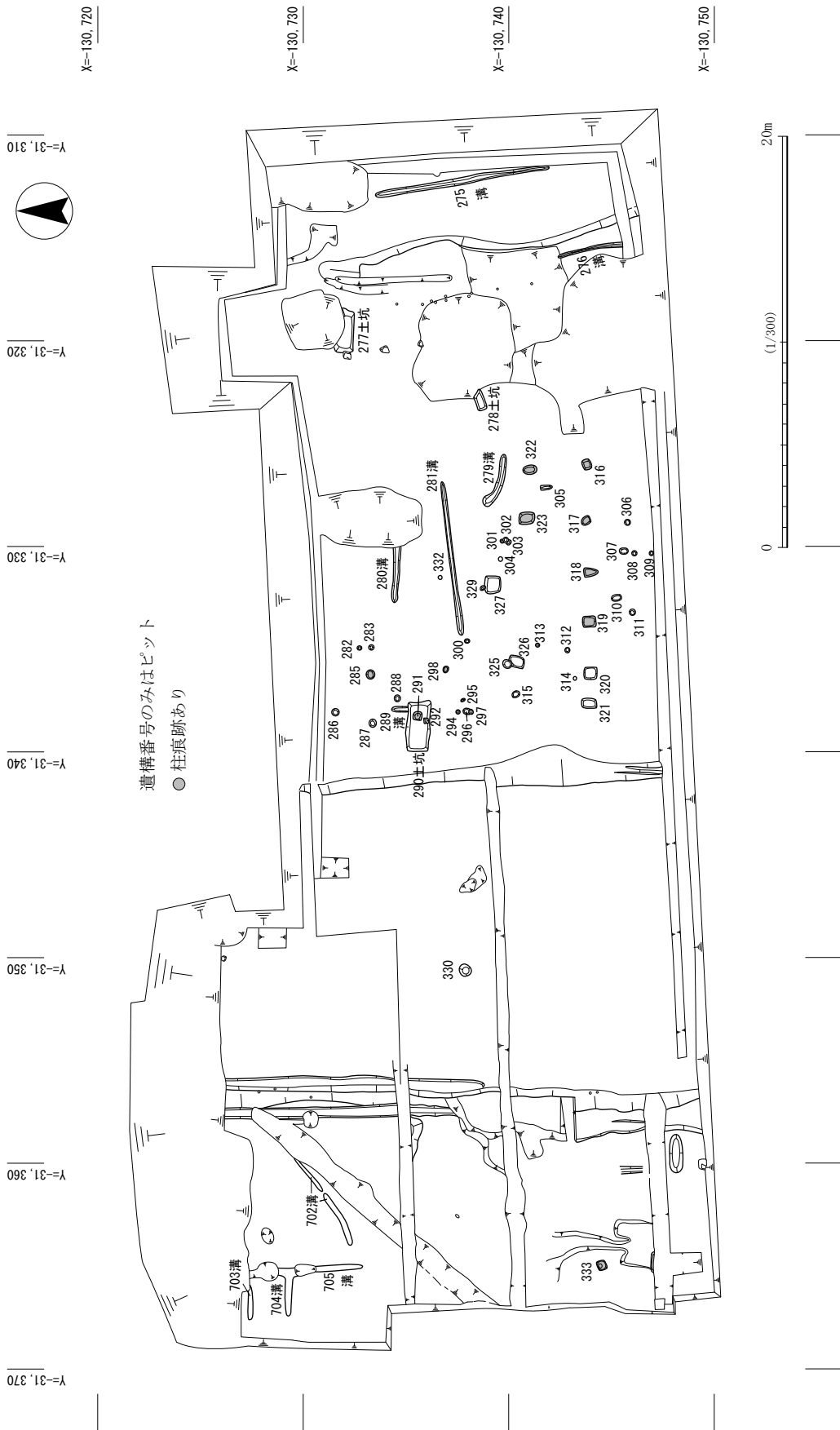


図 103 11 区 第 4 面

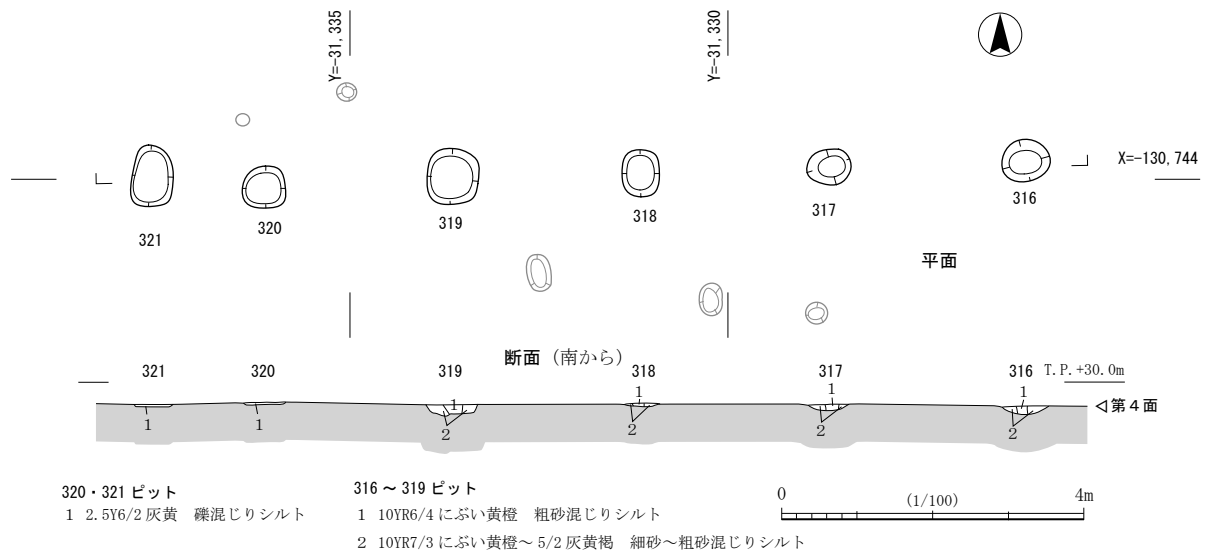


図 104 11 区 第 4 面 316 ～ 321 ピット

磁碗（図 176 - 940）などが出土した。

**278 土坑** 11 区東部に位置する。その北東部は攪乱されているが、平面は東北東 - 西南西に長い隅丸長方形と推定され、長径 1.0 m 以上、短径 0.5 m、深さ 12 cm。埋土は、旧作土と地山ブロックの混じったもの。土器細片のみ出土した。

**290 土坑** 11 区中央部北寄りに位置する。平面は東西に長い不整長方形で、長径 2.4 m、短径 1.2 m、深さ 14 cm。埋土は、2.5Y7/2 灰黄色細砂～礫混じりシルト。出土遺物なし。

**316～321 ピット**（図 104） 11 区中央部南側で東西に並ぶ。心々距離は、西端の 321 ピットと東隣の 320 ピットとの間は 1.5 m で、320 ピットから東端の 316 ピットまでは各々 2.5 m である。埋土は、ごく浅い 320・321 ピットでは単層だが、316～319 ピットでは柱痕跡が認められた。このピット列の北方にも柱痕跡のあるピットが散在するが、明確に掘立柱建物を構成するには至らない。いずれのピットからも出土遺物なし。

**その他のピット** 主に 11 区中央部に分布する。柱根の残っていたピットはない。柱痕跡は 316～319 ピット以外には、285・291・298・322・323・333 ピットで認められた。その他のピットは、埋土が単層のものが多く、建物などの復元には至らなかった。291 ピットから 8 世紀中頃の土師器杯（図 176 - 939）、323 ピットから 8 世紀前半の須恵器杯が出土した。

**溝** 東西あるいは南北を主軸方位とする細めの溝が多い。いずれも耕作に伴う溝であろう。279 溝から 8 世紀前半の須恵器杯蓋（図 176 - 941）や製塩土器（図 176 - 942）などが出土した。

#### 第 5 面（図 105 写真図版 60 - 228・229） 古代（～中世）

第Ⅲ層を除去すると、11 区東部の地形が低い部分では第Ⅴ層上面となり、西部や中央部南側では地山層（第Ⅶ層）が露出する。面の高さは T.P.+29.1～30.8 m。地山層上面の遺構は古代を主体とするが、古代ないし中世と推測される耕作に伴う溝もみられる。そこで、11 区東部に分布する第Ⅴ層上面で検出した水田畦畔、溝、土坑、ピットと、地山層（第Ⅶ層）上面で検出した溝を第 5 面の遺構とする。

**577 畦畔** 11 区東辺で検出した。ただし、上面は自然堆積層で覆われず、水田面の一部で地山層が露



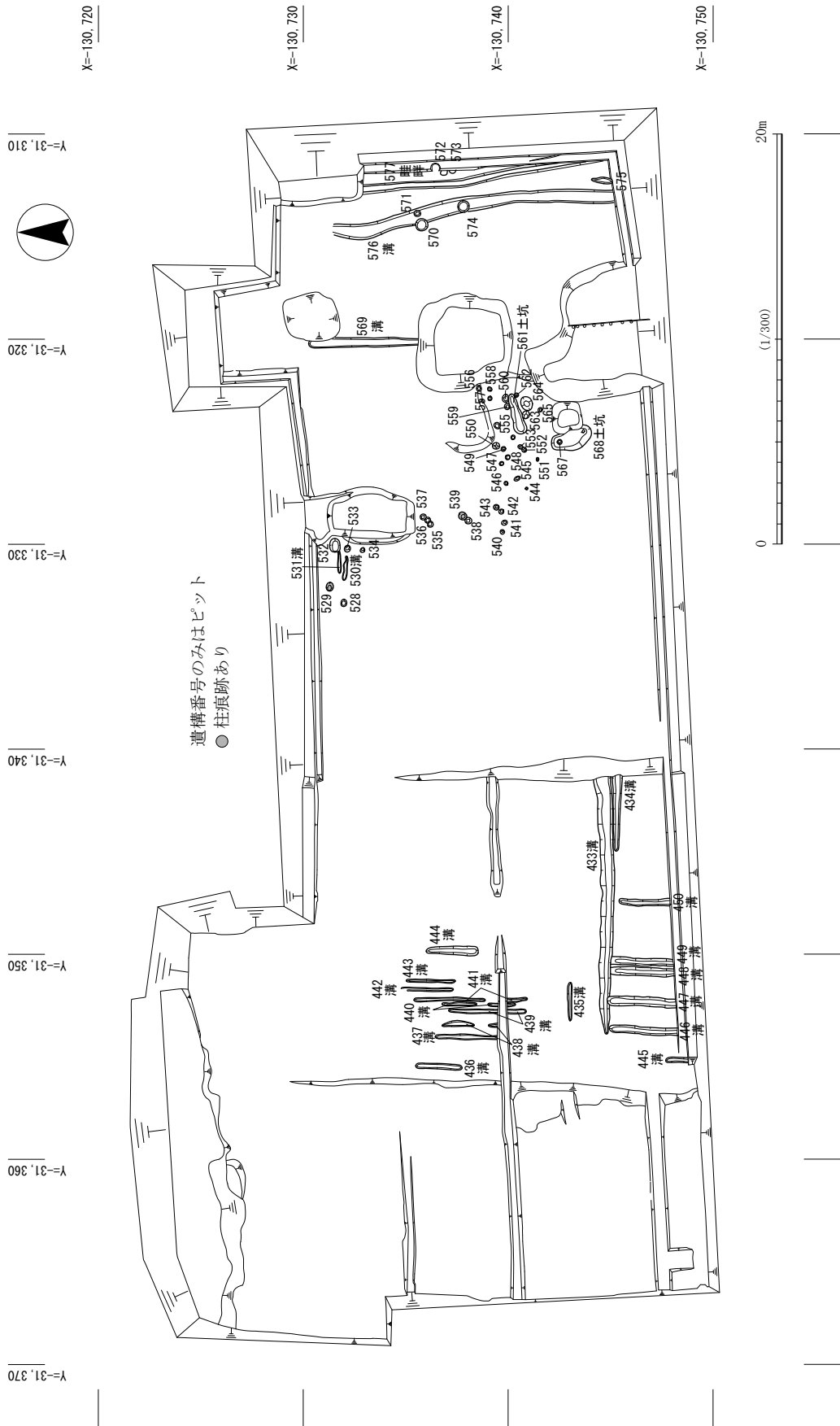


図 105 11 区 第 5 面

出することなどから、上層の畦畔部分の下面であるいわゆる擬似畦畔Bと考えられる。

**569 溝** 11区東部に位置する。主軸方位はほぼ南北で、検出長5.5 m、幅0.4 m、深さ7 cm。埋土は、10YR4/2 灰黄褐色シルト。土器細片が出土した。

**576 溝** 11区東辺に位置する。主軸方位は北に西にわずかに偏する南北で、やや蛇行する。検出長約14 m、幅0.5～0.8 m、深さ4 cm。埋土は、2.5Y6/1 黄灰色粗砂混じりシルト。製塩土器や瓦の細片などが出土した。

**561 土坑** 11区東部に位置する。溝状に細長い土坑で、東北東-西南西を主軸方位とし、長径2.0 m、最大幅0.6 m、深さ12 cm。埋土は、2.5Y6/1 黄灰色粗砂～礫混じりシルト。出土遺物なし。

**568 土坑** 561土坑の南南西1.3 mに位置する。東部は攪乱されているが、平面は北北西-南南東に長い不整楕円形で、長径2.0 m、推定短径1.2 m、深さ28 cm。埋土は、上層が10YR7/4 にぶい黄橙色シルト、下層が2.5Y5/1 黄灰色粗砂混じりシルト。8世紀中頃の土師器（図176-960）などが出土した。

**ピット** 第5面では、柱根の残っていたピットはない。柱痕跡は529・539・543ピットで認められた。その他のピットは、埋土が単層のものが多く、377ピットから10世紀後半の土師器皿（図176-956）や黒色土器（図176-957）、他のピットからは8世紀を主体とする土器（図176-958・959）などが出土した。

**433～450 溝** 11区中央部南西側に位置する。主軸方位は、433～435溝が東西、436～450溝は南北と、いずれも方位に則る。埋土は、2.5Y6/1 黄灰色粗砂～礫混じりシルトで共通し、この直上を覆う第3層である2.5 Y 4/1 黄灰色粗砂～礫混じりシルトにも似る。耕作に伴う溝群と考えられる。433・444溝から、古代の土器細片が出土した。

## 第6面（図106 写真図版61-232～62-236） 古代以前

第V層・第VI層を除去し検出した地山層（第VII層）上面である。面の高さはT.P.+28.7～30.7 m。検出遺構は、掘立柱建物、土坑、溝、ピットでほぼ全域に分布しているが、とくに地形的に高い西部と低い東部での密度が高い。

**掘立柱建物1**（図107 写真図版63-237） 11区東部に位置する。南東部は攪乱されているが、主軸方位N 76° E、桁行2間（4.2 m）・梁行2間（3.9 m）、面積16.4 m<sup>2</sup>の掘立柱建物である。個々のピットは比較的大きい。建物内側の659・679・660ピットのいずれかも柱穴であるとすれば総柱建物となる。

578・580・581・582ピットから古代の土器細片が出土した。また、579ピットから弥生土器底部（図177-972）が出土したが、これは混入と考えられる。

**掘立柱建物2**（図108） 11区中央部に位置する。主軸方位N 6° W、桁行3間（5.5 m）・梁行2間（3.4 m）、面積18.7 m<sup>2</sup>の側柱建物である。ただし、南辺梁行中央のピットは検出できなかった。

520・521・522・523ピットから古代の土器細片が出土した。

**掘立柱建物3**（図109） 11区西部に位置する。主軸方位はN 20° W、桁行3間（4.7～4.9 m）・梁行2間（3.4～3.8 m）、面積17.3 m<sup>2</sup>、やや台形状の側柱建物である。

出土遺物は、861ピットの6世紀末～7世紀初頭の須恵器杯、南東隅柱の337ピット（写真図版60-230・231）の8世紀前半～中頃の須恵器壺（図177-973）、722ピットの8世紀前半～中頃の須恵

Y=31.370

Y=31.360

Y=31.350

Y=31.340



图 106

Y=31.340

Y=31.330

Y=31.320

Y=31.310



X=-130.720

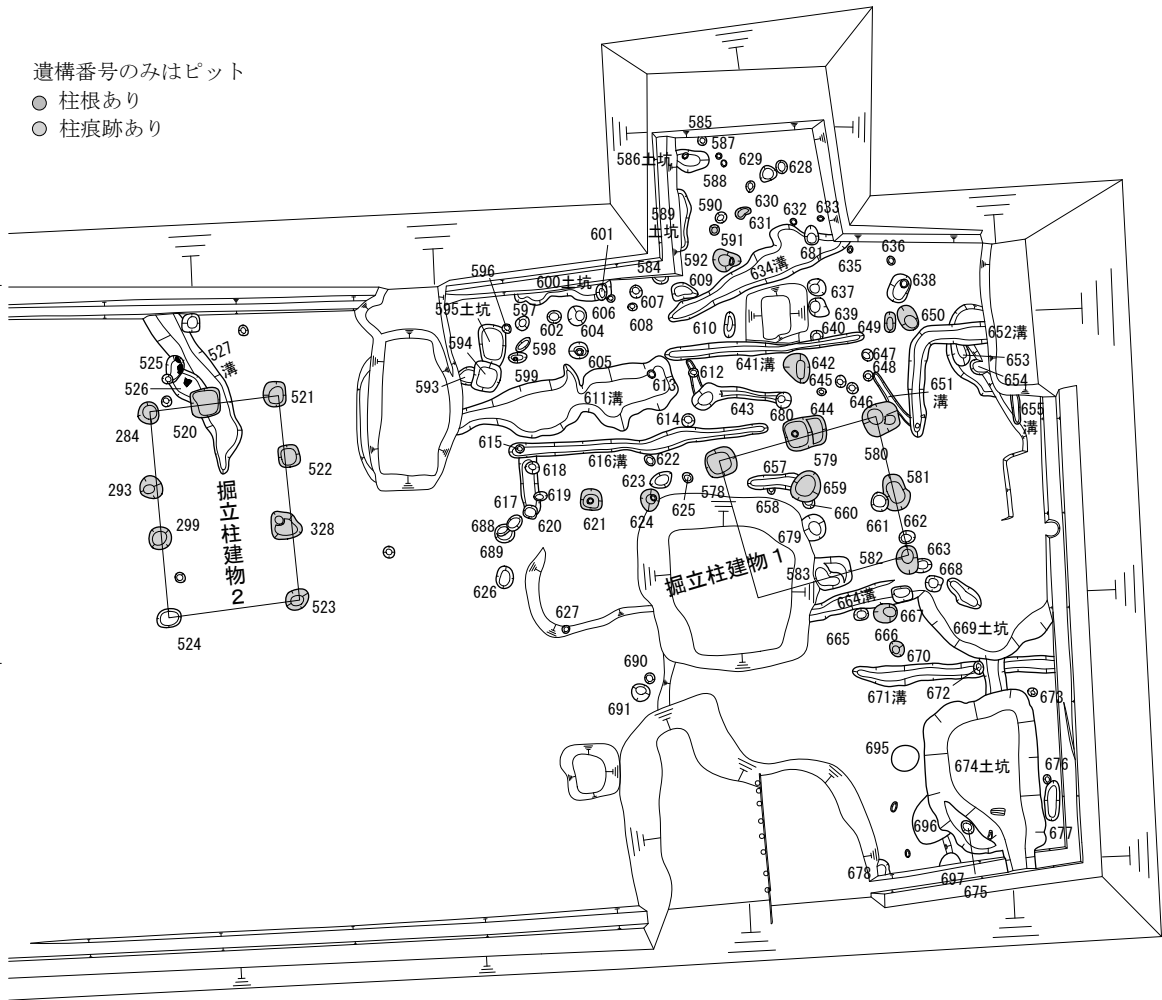
遺構番号のみはピット

- 柱根あり
- 柱痕跡あり

X=-130.730

X=-130.740

X=-130.750



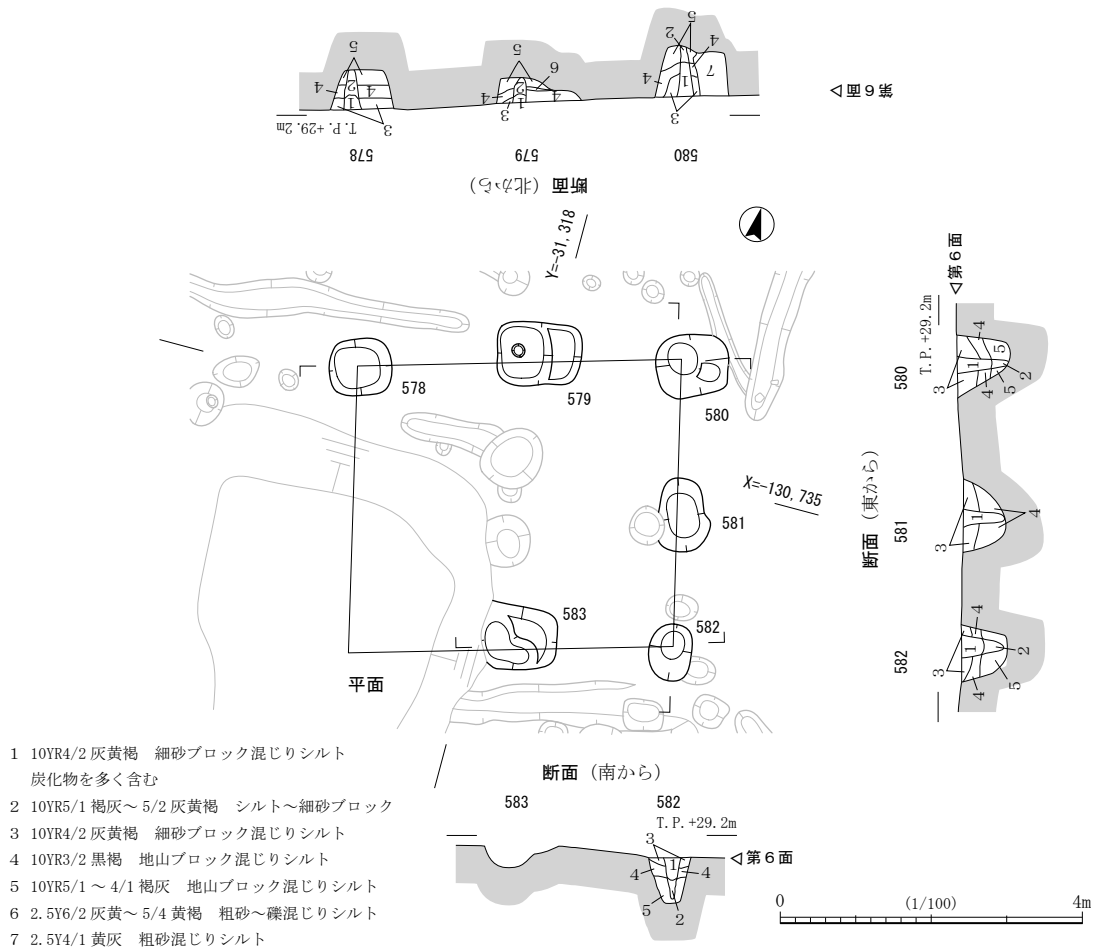


図 107 11 区 第 6 面掘立柱建物 1

器 (図 177 - 974・975) などである。337 ピットの須恵器壺が柱を抜いた後の掘方最上部から出土したことから、8 世紀前半～中頃に廃絶したと考えられる。

**掘立柱建物 4** (図 110) 11 区北西隅に位置する。掘立柱建物 1～3 と同様に梁行 2 間の建物だと仮定すると、主軸方位 N 55° W、桁行不明・梁行 2 間 (3.7 m) となる。出土遺物なし。

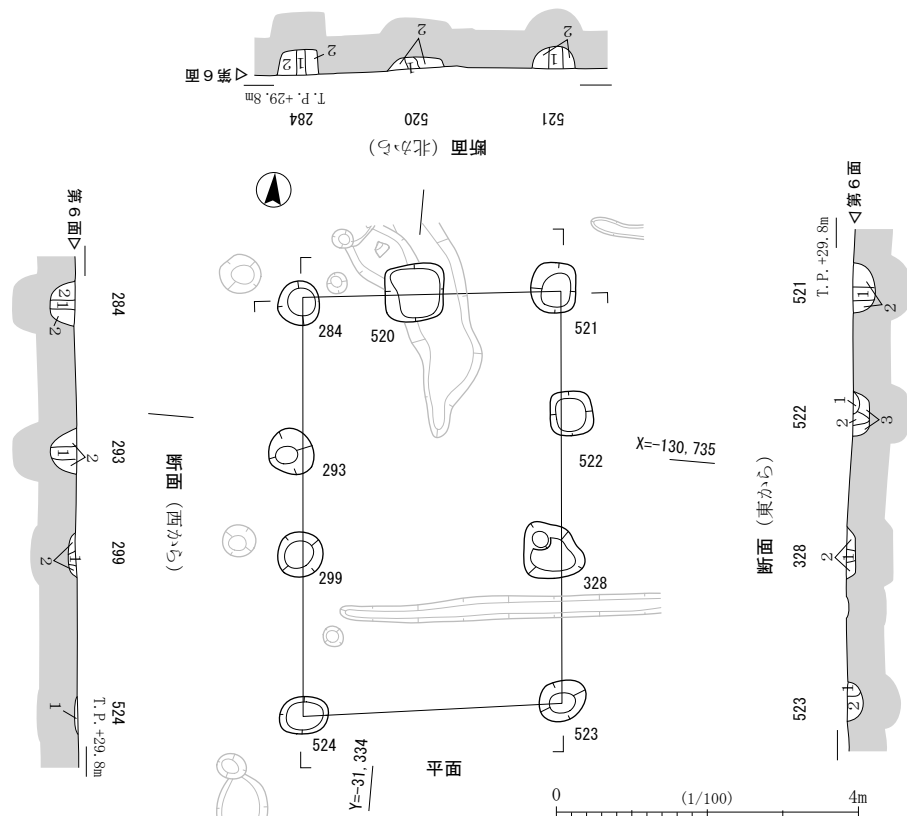
**386 土坑** 11 区南西部に位置する。平面は東西に長い隅丸長方形で、長径 1.3 m、最大幅 0.7 m、深さ 20 cm。埋土は、上層が 10YR3/1 黒褐色シルト、下層が 10YR3/2 黒褐色シルトに 10YR4/6 褐色粗 2.5Y5/6 黄褐色シルトのブロックが混じる。製塩土器細片などが出土した。

**478 土坑** 11 区中央部北側に位置し、その北部は調査区外に広がる。平面は東側に突出部のある隅丸長方形と推定され、東西 2.8 m、南北 1.2 m 以上、深さ 12 cm。埋土は、10YR4/6 褐色粗砂～礫混じりシルト。製塩土器などが出土した。

**586 土坑** 11 区北東部に位置し、その西部は調査区外に延びる。平面は東西に長い楕円形と推定され、長径 0.9 m 以上、短径 0.6 m 以上、深さ 21 cm。埋土は、2.5Y5/2 暗灰黄色シルト。出土遺物なし。

**589 土坑** 586 土坑の南 0.4 m に位置し、その西部は調査区外に広がる。平面は不整隅丸長方形と推定され、南北 1.7 m、東西 0.3 m 以上、深さ 8 cm。埋土は、2.5Y5/2 暗灰黄色シルト。出土遺物なし。

**595 土坑** 11 区北東部に位置する。594・596 ピットと重複関係にあり、それらよりも古い。平面は南北に長い隅丸長方形で、推定長径 1.1 m 以上、短径 0.7 m、深さ 6 cm。埋土は、2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細砂～粗砂混じりシルト。出土遺物なし。



**521 ビット**

- 1 2.5Y6/1 黄灰 シルト
- 2 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～礫混じりシルト

**520 ビット**

- 1 2.5Y6/1 黄灰 シルト
- 2 10YR4/2 灰褐 粗砂～礫混じりシルト

**284 ビット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～礫混じりシルト
- 2 10YR3/2 黒褐 粗砂～礫混じりシルト

**293 ビット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～礫混じりシルト
- 2 10YR3/2 黒褐 粗砂～礫混じりシルト

**299 ビット**

- 1 10YR6/4 にぶい黄橙 粗砂～礫混じりシルト
- 2 10YR7/3 にぶい黄橙～5/2 灰黄褐 粗砂～礫混じりシルト

**524 ビット**

- 1 10YR4/2 灰褐 粗砂～礫混じりシルト

**523 ビット**

- 1 10YR4/2 灰褐 細砂～礫混じりシルト
- 2 10YR4/2 灰褐 粗砂～礫混じりシルト

**522 ビット**

- 1 2.5Y7/2 灰黄 粗砂～礫混じりシルト
- 2 2.5Y6/2 灰黄 粗砂～礫混じりシルト
- 3 10YR4/2 灰褐 粗砂～礫混じりシルト

**328 ビット**

- 1 10YR6/4 にぶい黄橙 粗砂～礫混じりシルト
- 2 10YR7/3 にぶい黄橙～5/2 灰黄褐 粗砂～礫混じりシルト

**図 108 11 区 第 6 面掘立柱建物 2**

**600 土坑** 595 土坑の北東約 1 m に位置し、その北部は調査区外に広がる。平面隅丸形で、東西 2.5 m、南北不詳、深さ 12 cm。埋土は、2.5Y3/2 黒褐色シルト。土器細片が出土した。

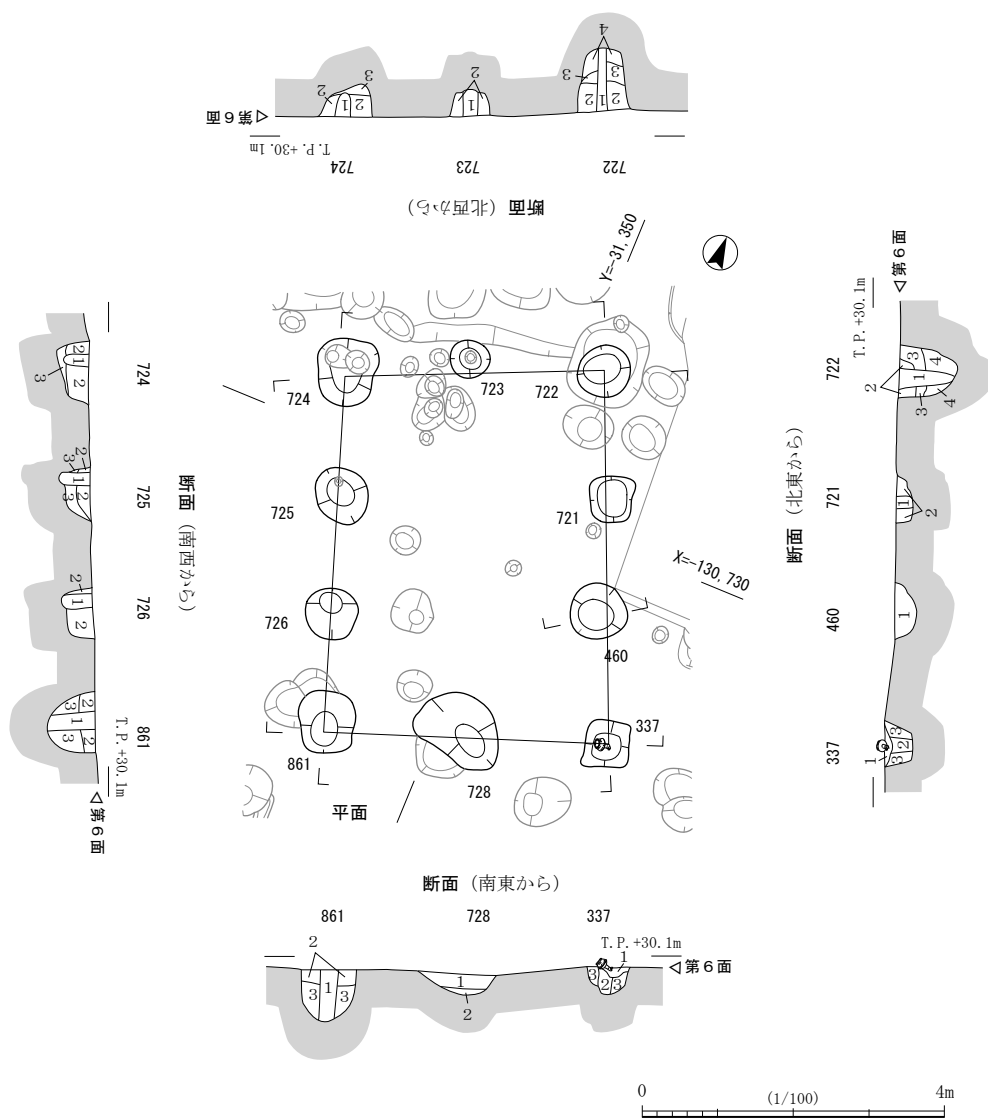
**669 土坑** 11 区東部に位置する。平面は、北西 - 南東に長い不整楕円形で、長径 1.1 m、短径 0.5 m、深さ 6 cm。埋土は、2.5Y3/2 黒褐色粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**674 土坑** (図 112 写真図版 63 - 242・243) 11 区南東部に位置する。平面は東辺を底辺とする不整形台形状で、幅 0.8 m の溝状に南に延びる。南北 4.2 m、東西 3.0 m、深さ 46 cm。8 世紀後半～末の須恵器 (図 178 - 984～987)、丸瓦 (図 178 - 988・989)、鉄製品 (図 178 - 990) などが出土した。

**719 土坑** 11 区北西部に位置する。平面不整形で、東西 1.7 m、南北 1.5 m、深さ 33 cm。埋土は、上層が 5B6/1 青灰色シルトに 2.5Y6/1 黄灰色シルトブロックが混じる、下層が 5Y5/1 灰色粗砂混じりシルト。古代の土器細片が出土した。

**720 土坑** 719 土坑の南西 3.5 m に位置する。平面は北北東 - 南南西に長い楕円形で、長径 2.6 m、短径 1.3 m、深さ 18 cm。埋土は、2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂～礫混じりシルト。出土遺物なし。

**751 土坑** 11 区北西部、掘立柱建物 3 の北西に位置する。平面はほぼ円形で、直径 1.6 m、深さ 24



**722 ビット**

- 1 2.5Y5/3 黄褐 粗砂混じりシルトに地山ブロックが混じる
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂混じりシルト
- 3 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂混じりシルト に 2.5Y7/1 灰白 細砂と地山ブロックが混じる
- 4 10YR4/1 褐灰～3/1 黒褐 シルト

**723 ビット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐 粗砂混じりシルトに 2.5Y7/1 灰白 細砂ブロックが多く混じる
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐 粗砂混じりシルトに 2.5Y7/1 灰白 細砂ブロックが混じる

**724 ビット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐 粗砂混じりシルトに 2.5Y7/1 灰白 細砂ブロックが多く混じる
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐 粗砂混じりシルトに 2.5Y7/1 灰白 細砂ブロックが混じる
- 3 10YR7/6 ～6/6 明黄褐 シルトブロック

**725 ビット**

- 1 埋土不詳
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐 粗砂混じりシルトに 2.5Y7/1 灰白 細砂ブロックが混じる
- 3 10YR7/6 ～6/6 明黄褐 シルトブロック

**726 ビット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐 粗砂混じりシルトに 2.5Y7/1 灰白 細砂ブロックが多く混じる
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐 粗砂混じりシルトに 2.5Y7/1 灰白 細砂ブロックが混じる

**861 ビット**

- 1 10YR5/2 暗灰黄～3/2 黒褐 粗砂混じりシルト
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂混じりシルト
- 3 2.5Y4/1 黄灰 粗砂混じりシルトに 2.5Y7/6 ～10YR6/6 明黄褐 地山ブロックが混じる

**728 ビット**

- 1 10YR7/6 ～6/6 明黄褐 シルトブロック
- 2 埋土不詳

**337 ビット**

- 1 10YR5/2 暗灰黄 シルトに 2.5Y7/1 灰白 シルトが混じる
- 2 10YR3/2 黒褐 シルトに地山ブロックが混じる 炭を多く含む
- 3 10YR4/2 灰黄褐 シルトに 2.5Y7/1 灰白 シルトブロックが混じる

**460 ビット**

- 1 10YR6/6 明黄褐 シルトに 10YR4/2 灰黄褐 シルトブロックが混じる

**721 ビット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐 粗砂混じりシルトに 2.5Y7/1 灰白 細砂ブロックが多く混じる
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐 粗砂混じりシルトに 2.5Y7/1 灰白 細砂ブロックが混じる

図 109 11 区 第 6 面掘立柱建物 3

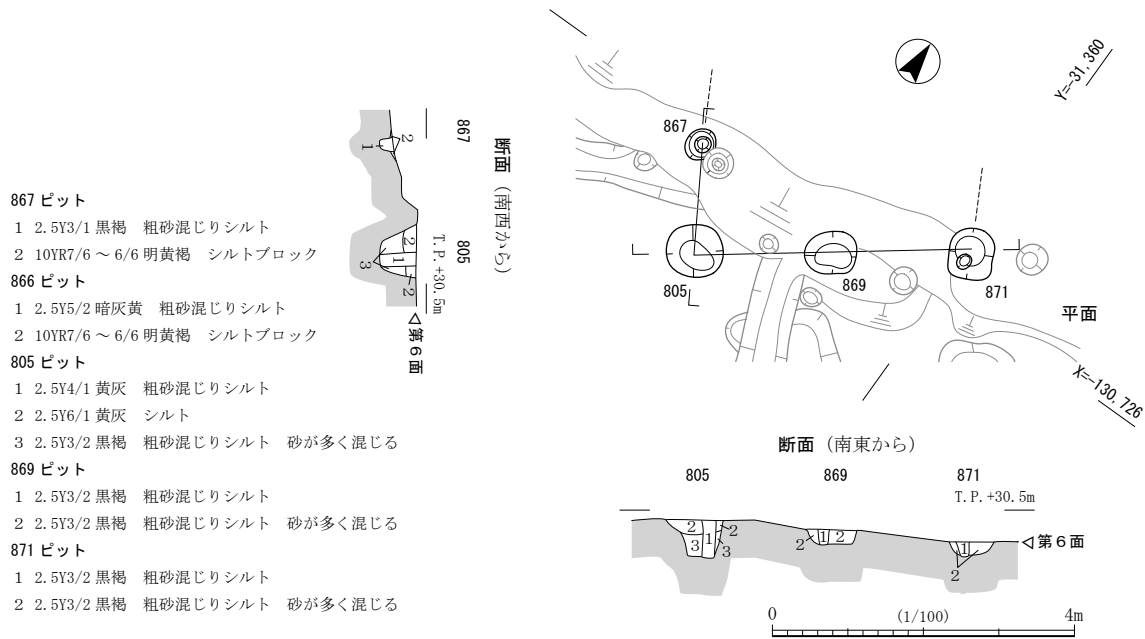


図 110 11 区 第 6 面掘立柱建物 4

cm。埋土は、10YR4/1 褐灰色粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**784 土坑** 751 土坑の西南西 1.7 m に位置する。平面は、北北西 - 南南東に長い楕円形で、長径 1.0 m、短径 0.7 m、深さ 15 cm。埋土は、10YR4/1 褐灰色粗砂混じりシルト。古代の土器細片が出土した。

**785 土坑** 784 土坑の北 0.2 m に位置する。平面は、不整形台とも南西側がくぼんだ隅丸方形ともいえる。南北 2.0 m、東西 1.5 m、深さ 18 cm。埋土は、2.5Y5/2 暗灰黄色細砂～粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**803 土坑** 11 区北西部に位置する。799 溝と重複関係にあり、それよりも古い。平面不整形で、南北 1.4 m、東西 1.8 m、深さ 8 cm。埋土は、2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂混じりシルト。6 世紀末～7 世紀初頭の須恵器杯 (図 178 - 991) などが出土した。

**611 溝** 11 区北東部に位置する。主軸方位は東西に近い東北東 - 西南西で、検出長 5.9 m、溝の両肩には出入りが多く幅は 0.5 ~ 1.8 m、深さ 25 cm。埋土は、10YR3/2 黒褐色細砂混じりシルトと 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂～粗砂混じりシルトが混じり合い、マンガン斑を多く含む。出土遺物なし。

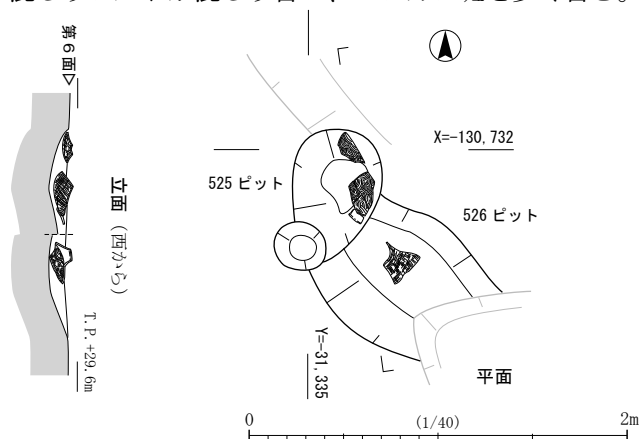


図 111 11 区 第 6 面 525・526 ピット



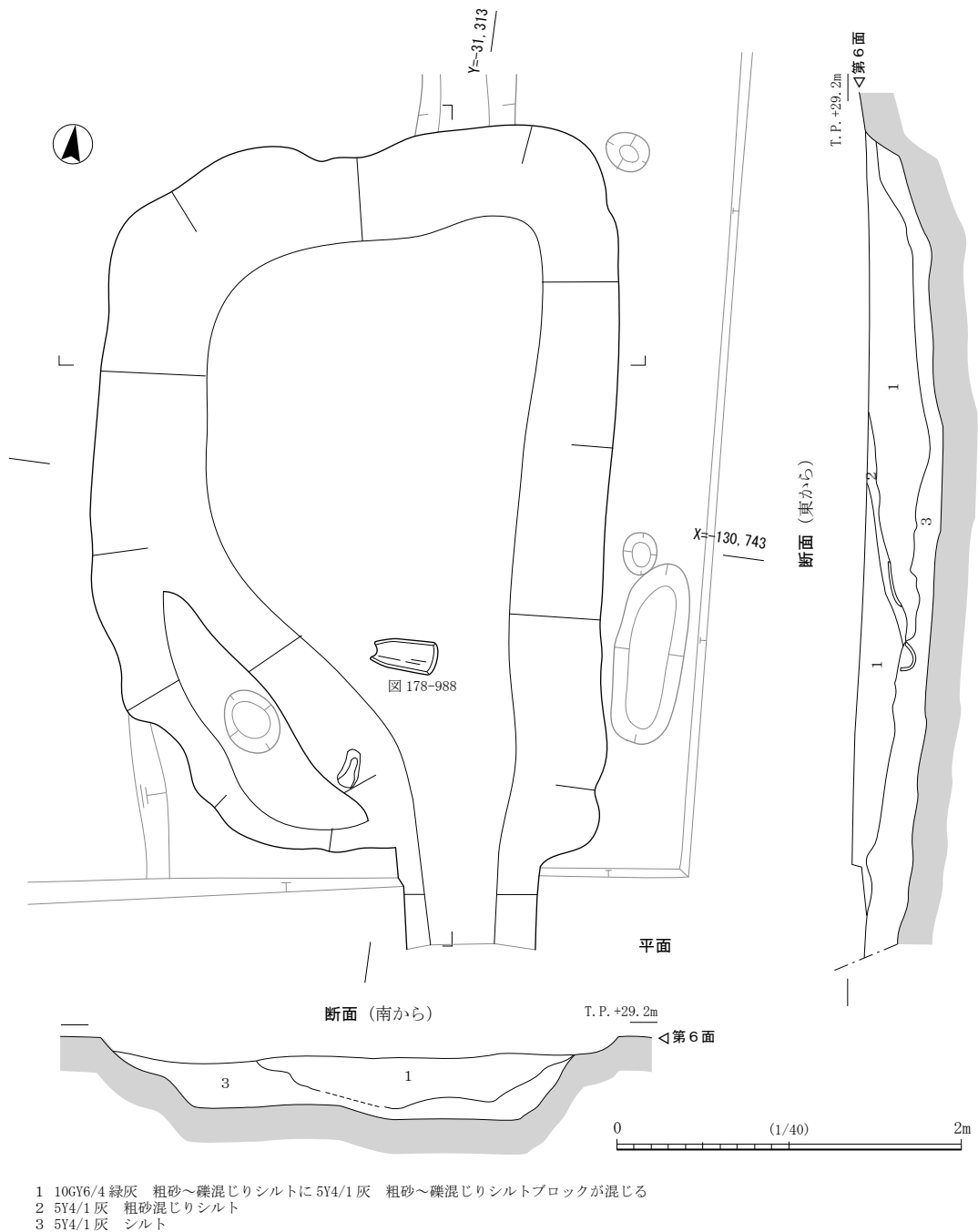


図 112 11 区 第 6 面 674 土坑

**634 溝** 11 区北東隅に位置する。681 ピットと重複関係にあり、それよりも古い。主軸方位は東北東 - 西南西で、検出長 5.2 m、この溝も両肩に出入りがあり幅は 0.4 ～ 1.3 m、深さ 15 cm。埋土は、2.5Y5/2 暗灰黄色細砂～粗砂混じりシルト。出土遺物なし。

**652 溝** 11 区北東隅、634 溝の南東約 3 m に位置する。653 ピットや 651 溝と重複関係にあり、それよりも新しい。平面は L 字形で、主軸方位は東西の部分と南北の部分がある。東西部分は検出長 1.9 m、幅 0.6 m。南北部分は長さ 2.9 m、幅 0.5 m。深さ 10 cm。埋土は、10YR3/2 黒褐色シルト。8 世紀の土師器鉢 (図 178 - 993) や須恵器杯蓋 (図 178 - 994) などが出土した。

652 溝とその南東側で南北方向に延びる 655 溝 (検出長 0.8 m、幅 0.2 m、深さ 4 cm、埋土は 2.5Y6/1 黄灰色シルト) が一連のものとなると、コ字形に囲まれた内部は、東西・南北とも約 2.2 m の

空間となる。

**その他の溝** 11区東部にあり東西あるいは南北を主軸方位とする溝、西部の主軸方位を北北西-南南東あるいはそれと直交方向の溝は、耕作に伴う溝であろう。426溝から8世紀の須恵器杯蓋(図178-992)、802溝から8世紀前半の須恵器杯(図178-995)が出土した。

**525・526ピット**(図111 写真図版63-241) 掘立柱建物1の北側に位置し、その北辺中央の520ピットよりも526ピットは古い。平面では526ピットと525ピットも重複関係があるようにみえるが、埋土は10YR4/2灰黄褐色粗砂混じりシルトと共通し、2つのピットから出土した8世紀末頃の須恵器甕(図177-977)も同一個体である。526ピットからは8世紀後半の須恵器杯蓋(図177-976)も出土した。

**その他のピット** 柱痕跡の認められるものは、掘立柱建物を構成するピット以外にも、11区北東部の低い部分では591・592・599・604・605・621・624・631・642・649・650・666・670ピットがある。なかでも、掘立柱建物1の西側に位置する平面隅丸方形の621ピットと心々距離でその東1.7mにある624ピットには明瞭な柱痕跡がある。

一方、11区西部では、822ピットに柱根が残っていた。柱痕跡は339・342・346・348・351・352・354・379・384・385・387・388・392・399・405・408・410・412・419・422・424・491・752・780・792・800・808・816・818・819・820・821・824・839・841・842・849・852・854・856・860ピットや掘立柱建物3近くの464・465・472・692・736・752ピットで認められた。このうち11区西部から中央部にかけて346・342・352・354(柱痕跡はないが451・455・461ピット)・465・472ピットが西南西-東北東に並んでおり、柵列などが想定できる。また、北西部の821・820・819(とその東の818)・817(これのみ柱痕跡なし)・816(とその東の824)ピットは心々距離1.4~1.8mでほぼ東西に並ぶことから、その周辺のピットと相まって建物や柵列などを構成する可能性がある。さらに、掘立柱建物3南西隅の861ピットとその北の727ピット、掘立柱建物4南西辺の867ピットとその東の866ピットなどのように、柱痕跡のあるピットが2個近接して存在する例もある。

他のピットは、埋土が単層あるいは水平方向に堆積するものであった。これらのピットからは、8世紀を主体とする須恵器・製塩土器・瓦(図177-978~983)などが出土した。

## 第 11 節 12 区（立体駐車場）の遺構

12 区は調査地北東部に位置する。立体駐車場の建設に伴う調査である。最終面での調査面積は 1221 m<sup>2</sup>。およそ T.P.+31.0 m の現地表面から、最深部で T.P.+27.8 m の第 4 面まで調査した。

**第 1 面**は昭和 14（1939）年爆発関連層の上面である。建物と土塁を検出した。爆発以後の建物の拡張が認められた。

**第 2 面**は昭和 14 年以前の禁野火薬庫の面。建物、土塁、軽便軌道などを検出した。土塁は攪乱部分が多かったが、調査区中央部の火工場は良好に残っていた。

**第 3 面**は古代～中世の面。溝、土坑、ピットを検出した。

**第 4 面**は地山層上面。古代の掘立柱建物、溝、土坑、ピットなどと中世の土坑やピットを検出した。

層序（図 113 写真図版 73 - 280）

12 区では、東壁の断面を掲げる。

**第 0 層**（1）は、基本層序の第 0 層に該当する。旧住棟建設に伴う盛土層である。

**第 1 層**は、基本層序の第 I 層 [昭和 14（1939）年爆発関連層] に該当する。12 区では土塁部分が広い面積を占めるが、その範囲には昭和 14 年爆発関連層がみられない。他方、12 区北部の土塁よりも北の部分や中央部の火工場が存在した部分では、爆発後の整地層（3～7）やその下層に爆発関連層（14～18）が広がる。

**第 2 層**は、基本層序の第 II 層・第 III 層に該当する。土塁や建物基礎の掘方（20～45）、土塁の盛土層（46～76）が残る、火薬庫造成に伴う盛土層（77～95）、それ以前の旧作土層（96・97）、古代～近世の包含層（98～103）などからなる。それらのうち、土塁部分では、戦後になって土塁が壊されたことによって盛土層の下部しか残っていないが、とくに 12 区北部の 4 土塁の断面（46～76）では、北辺の斜面と南辺のコンクリート基礎との間の土の積み方が良く分かる。また、図 113 の 88～94 層の堆積順を追うことによって、この断面では火薬庫造成に伴う盛土が南から進められたことが判明した。

**第 3 層**（104・105）は、基本層序の第 V 層・第 VI 層に該当する。12 区では、第 3 層を除去した第 4 面で地山層（第 VII 層）上面に達した。

**第 1 面**（図 114 写真図版 64 - 244） **昭和 14 年以後**

旧住棟に伴う盛土層などを除去して検出した、昭和 14（1939）年爆発関連層の上面である。ただし、12 区では建物と土塁であった範囲が広いこともあってその層の残りは悪く、明確に第 1 面と第 2 面とを掘り分けることはできなかった。遺構として建物と土塁を検出したが、第 1 面では昭和 14 年の爆発以後の建物 2 棟についてのみ記述し、爆発以前から存続する遺構については第 2 面で報告する。面の高さは、建物周辺の当時の地表面と考えられる部分でおよそ T.P.+29.8 m。

**1 建物** 12 区南部に位置する。昭和 10（1935）年に建てられ、昭和 14（1939）年の爆発時まで存在した 8 号火工場の位置に、昭和 16（1941）年にそれを東西方向へ拡張して新築された第 25 号倉庫である。昭和 20（1945）年の配置図では第 13 号倉庫と改称されている。先述の 9 区の調査でこの建物南側の土塁の基礎が見つかったが、12 区では建物本体の北辺と東西両辺の基礎の一部が検出で

きた。拡張に際し、建物本体周囲に土間コンクリートが設置され、基礎外面にはモルタルが塗りなおされている。1 建物北辺の基礎で床下換気口が4箇所確認できた。

**2 建物** (図 115 写真図版 66 - 249 ~ 67 - 254) 12 区中央部に位置する。昭和 11 (1936) 年に建てられ、昭和 14 年の爆発時まで存在した 9 号火工場の位置に、昭和 16 (1941) 年にそれを東西方向へ拡張して新築された第 26 号倉庫である。昭和 20 (1945) 年には第 14 号倉庫と改称されたようで、「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠構内図」には「第 14 号倉庫 86 坪」と記載されており、東西に拡張後の規模 [拡張された建物の規模は壁の心々で、東西 23.8 m、南北 12.0 m、面積 286 m<sup>2</sup> (約 86.5 坪)] と一致する。爆発後の新築に際し東西に 1 m ほど拡張された基礎の状況が明瞭にわかる。

出入口を東西辺で各 1 箇所、南辺で 2 箇所検出した (写真図版 67 - 251 ~ 253)。出入口部分のコンクリート土間や引き戸を受ける部分も、従来の基礎に追加されている。その下部には昭和 14 年の爆発に伴うと考えられる黒色層が確認できたので、これらの出入口はそれ以後に新設されたことが判明した。南出入口 A の下には **21 土管列**、南出入口 B の下には **20 土管列** が埋められ、2 建物南辺の側溝をつないでいる。21 土管列の土管のひとつを図 131 - 44 に掲げる。

建物内部には、古い土間コンクリートの上には黒色層を挟んで土台状のコンクリートが設えられ、規則的にアンカーボルトも配置されている。鋸 (図 136 - 80)、釘 (図 137 - 115 ~ 125 写真図版 80 - 1100)、金属製品 (図 137 - 134・138 - 139) などが出土した。基礎の外面には、拡張に際し 1 建物と同様にモルタルが塗りなおされている。西辺で確認された床下換気口 (写真図版 67 - 254・81 - 1104) の格子はコンクリート製であり、より古く大正時代から昭和時代初期にかけて竣工した火工場の鉄製の格子とは異なる。

## 第 2 面 (図 116 カラー写真図版 1 - 2 写真図版 64 - 245 ~ 65 - 247) 昭和 14 年以前

昭和 14 年爆発関連層を除去した面である。面の高さは、T.P.+29.6 ~ 29.7 m。第 1 面と同様な景観だが、爆発により埋没した軽便軌道なども検出できた。

**1 建物** (写真図版 66 - 248) 12 区南部に位置する。建物基礎とそれに囲まれる土間コンクリートを検出した。昭和 10 (1935) 年に建てられ、昭和 14 (1939) 年の爆発時まで存在した 8 号火工場である。

床下換気口 4 箇所のうち 3 箇所の外側では **17・18・19 土管列** が検出できた。比較的遺存状況の良い **18 土管列** (図 117) は断面 L 字状で、1 建物北辺側溝の底部から 3 土壘南辺側溝へ排水する機能をもつ。**19 土管列** では、排水先の側溝との接続部分が塞がれていた。

**2 建物** (図 115 写真図版 66 - 249・250、67 - 256) 12 区中央部、5・6 軽便軌道が敷設されている幅約 4 m の範囲の北側に位置する。昭和 11 (1936) 年に建てられ、昭和 14 年の爆発時まで存在した 9 号火工場である。規模は、壁の心々で東西 21.8 m、南北 12.0 m、面積 262 m<sup>2</sup>。8 区の調査では今回検出できた建物の西側に築かれた第 4 師団兵器部保管建物 (8 区第 1 面 20 建物) が検出できたが、これとほぼ同じ形状である。

第 1 面で記述したように出入口部分は爆発後に改修されているが、爆発前と考えられる基礎には一辺 10 cm 弱の方形の孔の中央部にさらに直径 3 cm ほどの円孔が穿たれており、これが枢 (戸臍) であれば、開き戸であったと推定できる。

建物の南側には木枠の溝が設置されており、出入口付近は土管による暗渠となっている (写真図版

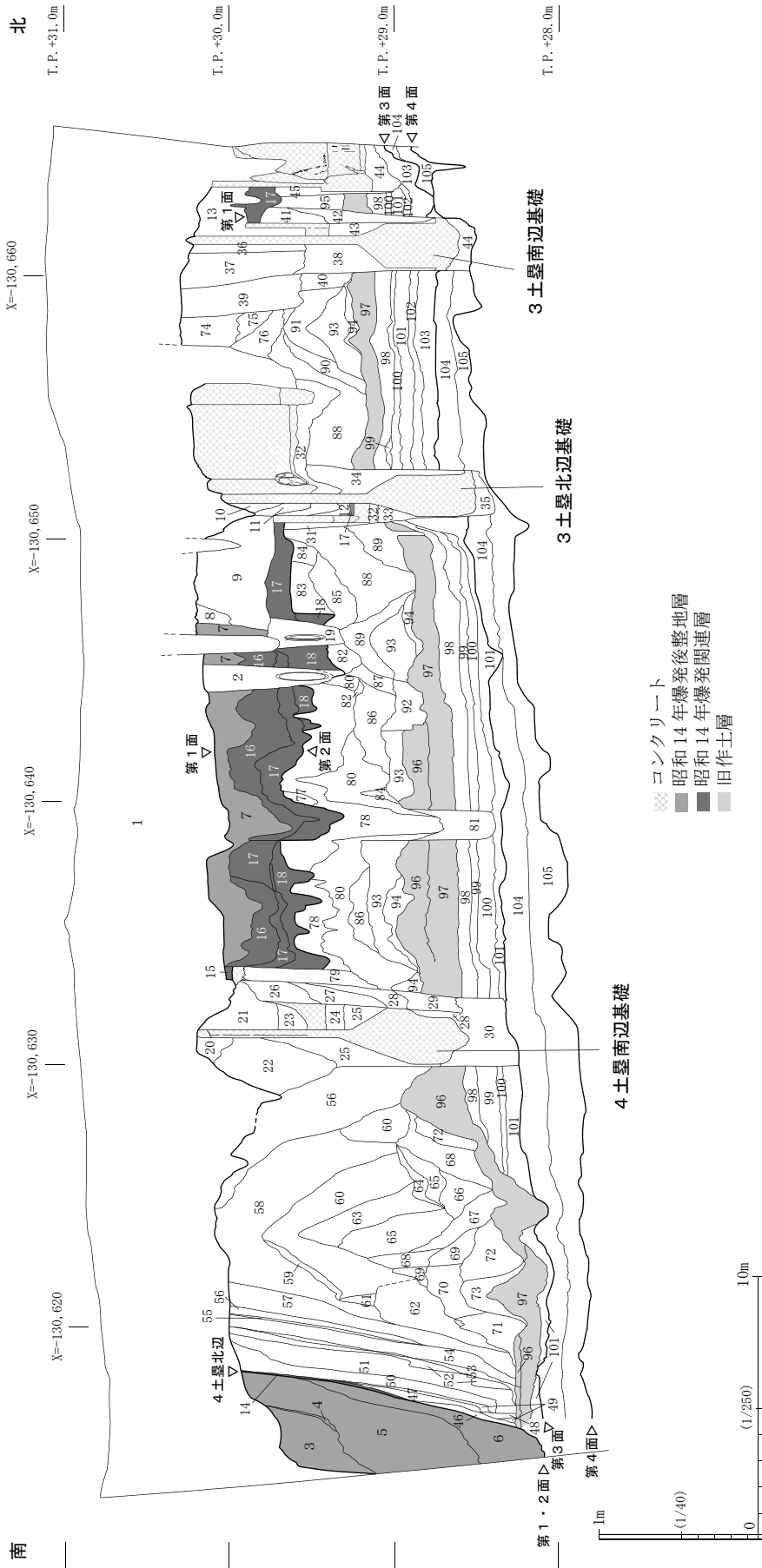


図 113 12区 東壁断面

72 2.5Y8/1～7/2 灰白に10YR6/6明黄褐～8/4浅黄橙 粗砂～礫混じり  
 シルトブロックが混じる  
 73 2.5Y5/1 黄灰 シルトブロック  
 74 2.5Y7/1 灰白～6/4 にぶい黄 粗砂～礫混じりシルトブロック  
 75 2.5Y6/2 灰黄～7/3 浅黄 粗砂～礫混じりシルト  
 76 2.5Y6/3 にぶい黄～5/4 黄褐 粗砂～礫混じりシルトに  
 2.5Y5/1 黄灰 シルトブロックが混じる  
 77 2.5Y7/2 灰黄 粗砂～礫  
 78 2.5Y7/2 灰黄 粗砂～礫に10YR6/6明黄褐～6/3 にぶい黄褐  
 シルトブロックが混じる  
 79 2.5Y8/2 灰白 粗砂～礫混じりシルトブロック  
 80 2.5Y7/1 灰白～7/2 灰黄 粗砂～礫混じりシルトブロック  
 81 2.5Y7/1 灰白 粗砂～礫混じりシルトブロックに7.5YR4/4 褐  
 粗砂～礫混じりシルトブロックが混じる  
 82 2.5Y6/2～7/2 灰黄 粗砂～礫混じりシルト  
 83 2.5Y7/2 灰黄～8/4 浅黄橙 粗砂～礫混じりシルトブロック  
 84 2.5Y7/2 灰黄 粗砂～礫に10YR6/6明黄褐～6/3 にぶい黄褐  
 シルトブロックが混じる  
 85 2.5Y5/3 黄褐～10YR5/3 にぶい黄褐 粗砂～礫混じりシルト  
 86 2.5Y8/3 淡黄 粗砂～礫に2.5Y7/2 灰黄～10Y7/1 灰白  
 シルトブロックが混じる  
 87 2.5Y6/4 にぶい黄～5/6 黄褐 粗砂混じりシルトブロック  
 88 10YR5/2 灰黄褐～8/4 浅黄橙 粗砂～礫混じりシルトブロック  
 89 10YR5/2 灰黄褐～2.5Y6/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルトブロック  
 90 2.5Y7/1 灰白～10Y7/1 灰白 粗砂～礫混じりシルトブロックに  
 10YR6/6明黄褐～7/3 にぶい黄橙 粗砂混じりシルトブロックに  
 10YR5/2 灰黄褐 シルトブロックが混じる  
 92 2.5Y7/2 灰黄 粗砂～礫に2.5Y8/1 灰白 シルトブロックが混じる  
 93 10YR4/1 褐灰 粗砂混じりシルト  
 94 2.5Y8/2 灰白 粗砂～礫に10Y7/1 灰白 シルトブロックが混じる  
 95 2.5Y7/4 浅黄 粗砂～礫混じりシルト  
 96 2.5Y4/1 黄灰 粗砂混じりシルト (旧作土層)  
 97 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂混じりシルト (旧作土層)  
 98 2.5Y6/3 にぶい黄 粗砂混じりシルト  
 99 2.5Y6/1 黄灰 粗砂混じりシルト  
 100 2.5Y6/3 にぶい黄 粗砂混じりシルト  
 101 10YR6/4 にぶい黄橙 粗砂混じりシルト  
 102 10YR4/3 にぶい黄褐 粗砂混じりシルト  
 103 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂混じりシルト  
 104 10YR4/2 灰黄褐 粗砂混じりシルト  
 105 10YR3/1～3/2 黒褐 粗砂混じりシルト

36 10YR7/6 明黄褐～5/4 にぶい黄褐 粗砂～礫混じりシルト  
 37 2.5Y7/2 灰黄～6/3 にぶい黄 粗砂～礫混じりシルトに地山ブロックが混じる  
 38 2.5Y7/2 灰黄～10YR7/1 灰白 粗砂～礫混じりシルト  
 39 2.5Y6/1 明オリーブ灰～7.5Y6/1 灰 粗砂～礫混じりシルトブロック  
 40 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂～礫混じりシルト  
 41 10YR7/4 にぶい黄褐 粗砂～礫混じりシルト  
 42 2.5Y7/3 浅黄 粗砂～礫混じりシルト  
 43 礫層  
 44 礫層  
 45 2.5Y7/4 浅黄 粗砂～礫混じりシルト  
 46 2.5Y5/2 暗灰黄 シルトブロック混じり粗砂  
 47 2.5Y8/2 灰白 粗砂混じりシルトブロック  
 48 2.5Y6/2 灰オリーブ 粗砂混じりシルトに  
 7.5YR4/4 褐 シルトブロックが混じる  
 49 2.5Y8/2 灰白～6/2 灰黄 粗砂～礫  
 50 10YR5/4 にぶい黄褐～5/6 黄褐 粗砂～礫混じりシルトブロック  
 51 7.5YR4/4 褐 粗砂～礫混じりシルトブロック  
 52 2.5Y5/1 黄灰 粗砂混じりシルトに7.5Y8/1 明緑灰 シルトブロックが混じる  
 53 7.5Y8/1 明緑灰～2.5Y7/3 浅黄 シルトブロックに  
 2.5Y5/2 暗灰黄 シルトが混じる  
 54 2.5Y5/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルト  
 55 10YR6/6 明黄褐～4/6 褐 粗砂～礫  
 56 2.5Y5/1 黄灰 シルトブロック  
 57 7.5Y8/1 明緑灰～10YR6/4 にぶい黄橙 粗砂～礫混じりシルトブロック  
 58 2.5Y7/1 明オリーブ灰 シルトブロックに  
 2.5Y7/2 灰黄～6/6 明黄褐 粗砂～礫が混じる  
 59 2.5Y5/1 黄灰 シルトブロック  
 60 2.5Y6/3 にぶい黄～5/6 黄褐 粗砂～礫混じりシルトブロック  
 61 10YR6/6 明黄褐～5/6 黄褐 シルト  
 62 7.5YR4/4 褐 粗砂～礫混じりシルトブロック  
 63 2.5Y7/1 明オリーブ灰 シルトブロック  
 64 2.5Y5/1 黄灰 シルトブロック  
 65 2.5Y6/2 灰黄 粗砂混じりシルトに7.5Y7/1 明緑灰 シルトブロックが混じる  
 66 2.5Y5/1 黄灰 シルトブロック  
 67 2.5Y6/4 にぶい黄 粗砂混じりシルト  
 68 7.5YR4/4 褐 粗砂～礫混じりシルトブロック  
 69 2.5Y5/1 黄灰 シルトブロック  
 70 7.5Y8/2 灰白 粗砂混じりシルトブロックに  
 2.5Y6/2 灰黄 粗砂混じりシルトが混じる  
 71 10YR5/5～8/6 黄橙 粗砂～礫

1 2.5Y5/2 暗灰黄～5Y6/1 灰 砂礫・コングリート等混じりシルト  
 2 土層  
 3 5Y6/2 灰オリーブ シルト地山ブロックと  
 2.5Y6/3 淡黄～7/4 浅黄 粗砂～礫混じりシルトが混じる  
 4 2.5Y5/1 黒褐～2/1 黒 粗砂混じり灰  
 5 25Y5/2 暗灰黄 シルト～礫混じり地山ブロック  
 6 2.5Y7/2 灰黄 シルトブロック  
 7 2.5Y8/2 灰白 粗砂～礫  
 8 2.5Y7/2 灰白 粗砂～礫混じりシルト  
 9 2.5Y7/1 灰白～6/4 にぶい黄 粗砂～礫混じりシルトブロック  
 10 2.5Y6/3 にぶい黄～6/6 明黄褐 粗砂～礫混じりシルト  
 11 2.5Y5/3 黄褐～5/6 黄褐 粗砂～礫混じりシルト  
 12 10YR5/3 にぶい黄褐 地山ブロック混じり粗砂～礫混じりシルト  
 13 2.5Y7/3 浅黄 粗砂～礫混じりシルト  
 14 2.5Y8/1 黒褐～2/1 黒 炭 (昭和14年爆発関連層)  
 15 10YR4/1 褐灰 地山ブロック混じりシルト (昭和14年爆発関連層)  
 16 2.5Y7/2 灰黄 粗砂～礫 (昭和14年爆発関連層)  
 17 2.5Y5/1 黄灰 地山ブロック混じりシルト (昭和14年爆発関連層)  
 18 2.5Y6/1 黄灰～6/2 灰黄 地山ブロック混じりシルト (昭和14年爆発関連層)  
 19 2.5Y6/1 黄灰 シルトブロック (土管)  
 20 2.5Y7/3 浅黄 粗砂～礫混じりシルトブロック  
 21 礫層  
 22 2.5Y7/6 明黄褐～2.5Y5/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルトブロック  
 23 2.5Y6/2 灰黄 粗砂～礫  
 24 礫層  
 25 2.5Y8/1 灰白 粗砂～礫  
 26 2.5Y6/2 灰黄 粗砂～礫混じりシルトに  
 2.5Y5/1 黄灰 粗砂混じりシルトブロックが混じる  
 27 2.5Y8/1 灰白 シルトブロックに10YR6/6 明黄褐 粗砂～礫ブロックが混じる  
 28 2.5Y6/2 灰黄 粗砂～礫混じりシルトに  
 2.5Y5/1 黄灰 粗砂まじりシルトブロックが混じる  
 29 2.5Y5/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルト  
 30 礫層  
 31 10YR4/3 にぶい黄褐 粗砂～礫混じりシルトに  
 10YR4/1 褐灰 シルトブロックが混じる  
 32 礫層  
 33 10YR4/3 にぶい黄褐 粗砂～礫混じりシルトに礫が多く混じる  
 34 2.5Y5/3 黄褐～6/3 にぶい黄 粗砂～礫混じりシルトブロックに  
 10YR4/1 褐灰 シルトブロックが混じる  
 35 礫層



図114 12区 第1面

67 - 255)。

排水用の土管は、2建物の南側には5軌道の下層に、南北方向を基調とする22～24土管列が埋設されている。24土管列の土管のひとつを図131-45に掲げる。建物北東側の状況が不明だが、北西側では25・26土管列が2建物から北方にある4土塁南辺の側溝に向けて排水するように設えられている。それらの代表例として、比較的残りの良い25土管列(図117)を掲げる。

2建物の断面(図115 写真図版67-256)を観察すると、旧作土層の上に水平に盛土を行い、一部を掘って基礎を設置し、さらに建物内部を盛土でかさ上げし、コンクリート土間を打っていることが良くわかる。

**3土塁**(図118 写真図版66-248) 1建物基礎コンクリートの北側約2mでは、建物を囲む3土塁南辺のコンクリート基礎が検出できた。基礎の南側にはコンクリート製の側溝が設置されている。この北側約10mに3土塁北辺のコンクリート基礎と側溝が検出できた。3土塁の盛土自体は昭和40年代の旧住棟建設時などの破壊を受けているが、断面(図113)に示したように盛土の状況が確認できた。

3土塁北辺の南側(外面)には型枠の痕跡が明瞭に残り、水抜き孔や金具もみられる。北側(内面)には基礎の内部にあるべき鉄筋が露出しているが、その鉄筋は縦に直径18mm、横には6mmのものが使われている。

**4土塁**(写真図版67-257・258) 2建物の北側約2mには4土塁南辺のコンクリート基礎があり、その南側にはコンクリート製の側溝が設置されている。2建物西側から後述の14区の北半にあたる部分の土塁は、各年の配置図を参照すると昭和14(1939)年の爆発の頃までは築かれていない。

4土塁は大部分が削平されていたが、北へ向かい下がる地形が幸いし、北側では比較的良好に土塁盛土が遺存していた。今回の調査で検出した他の土塁は、基本的に土塁裾の両側に重厚な基礎があり土塁盛土を支える構造になっているが、5区南西部・15区北部・12区北部に位置するこの土塁の北辺だけはコンクリートなどの基礎がなく、約45度の角度で地表面から立ち上がる形状である。

**5・6軽便軌道**(写真図版68-259～262) 3土塁北辺のコンクリート基礎と2建物との間では、東西方向に走る軽便軌道が存在し、これに伴うコンクリート製枕木が比較的良好に検出できた。軽便軌道は12区西端で単線だが、これ以外では複線となっている。12区西部の軽便軌道が単線から複線になる部分では、通常コンクリート製枕木とは異なる長い枕木(図145-238～243)も確認できた(写真図版68-261・262)。なお、軽便軌道は、昭和14年の爆発以後に複線部分(6軌道)が廃止されて単線部分(5軌道)のみとされており、そのため北側の複線部分は単線部分比べて遺存状況が悪い。

通常コンクリート製枕木は長さ105cmのもので、犬釘(図143-217～226)には木製のくさびでとめているものと、モルタルで埋めているものがある。枕木に残るレール底部幅の痕跡は6cm強であり、10区西部の機械掘削中に出土したレールの底部幅63mmと一致する。軌間(ゲージ)は、600mm(ないし610mm=2フィート)である。

**10・11桶** 2建物の南側に約6mの間隔で東西に並ぶ。両者とも直径50cmの木桶で、高さは30cmあるが上部は消失している。厚さは側・底ともに約1cm。内部には底に10cmほど2.5Y4/1黄灰色細砂～粗砂混じりシルトが溜まり、その上部は10YR4/1褐灰色シルト混じり細砂にスレート、礫、鉄釘が混じる。



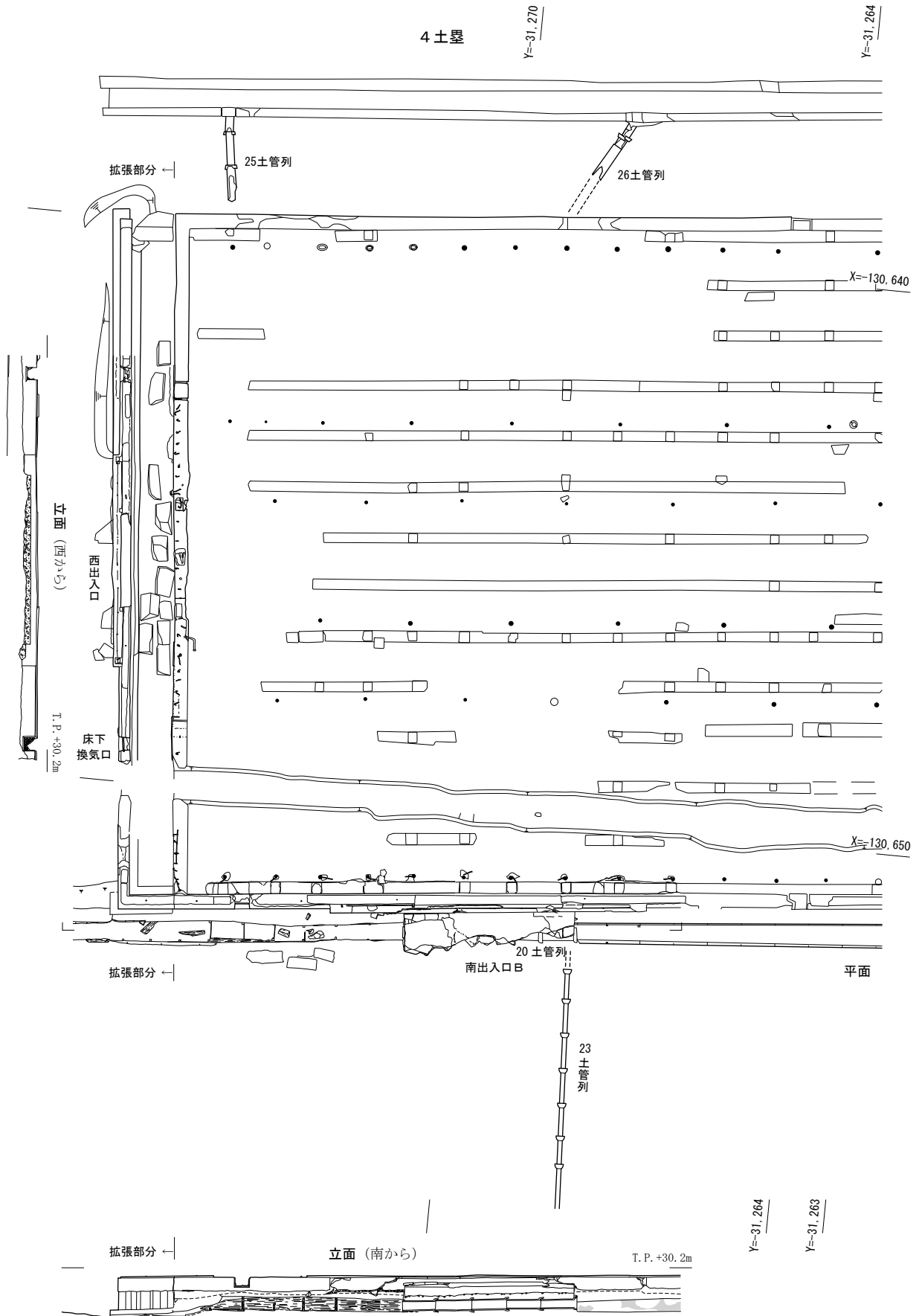
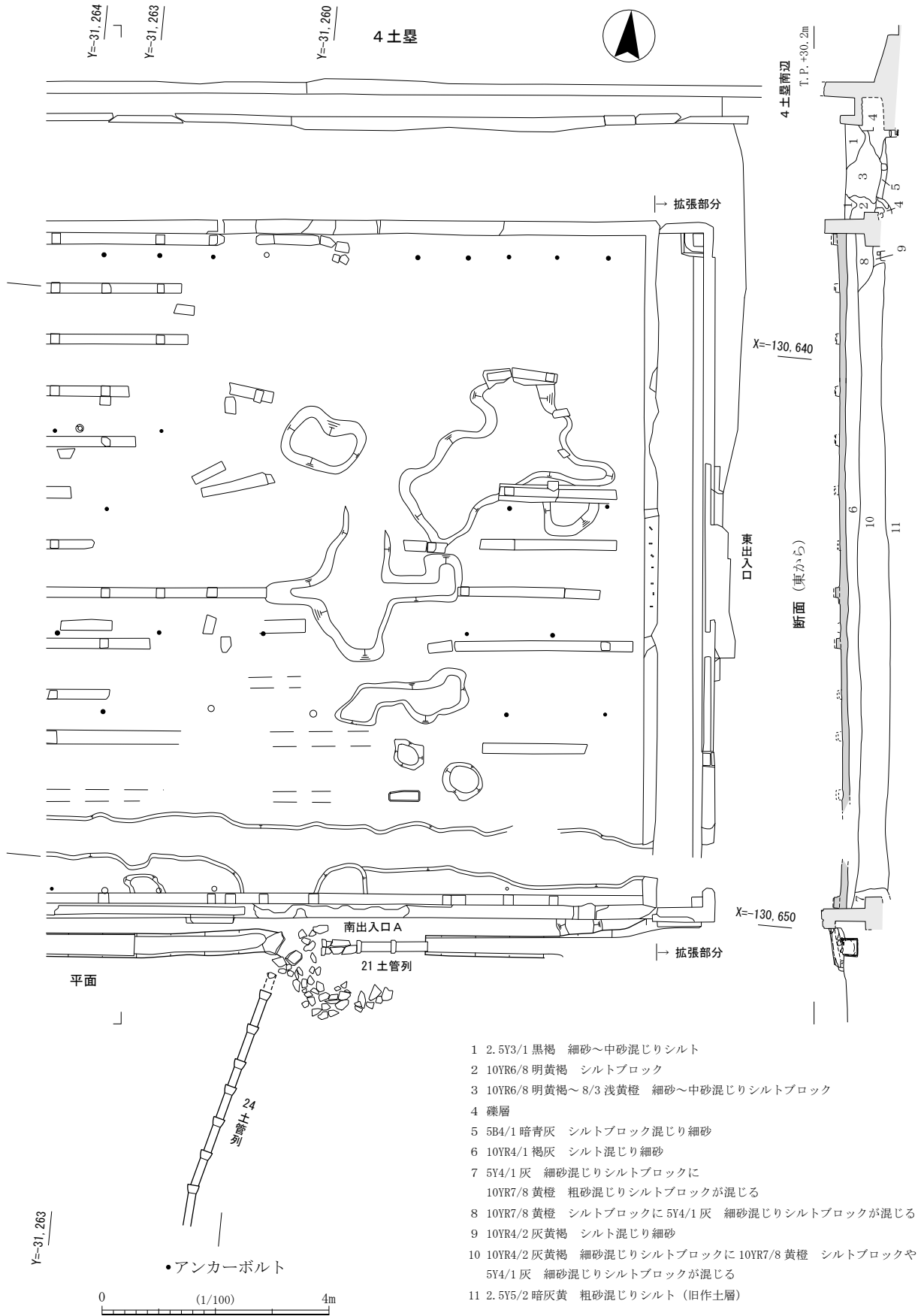


図 115



12区 第1・2面2建物

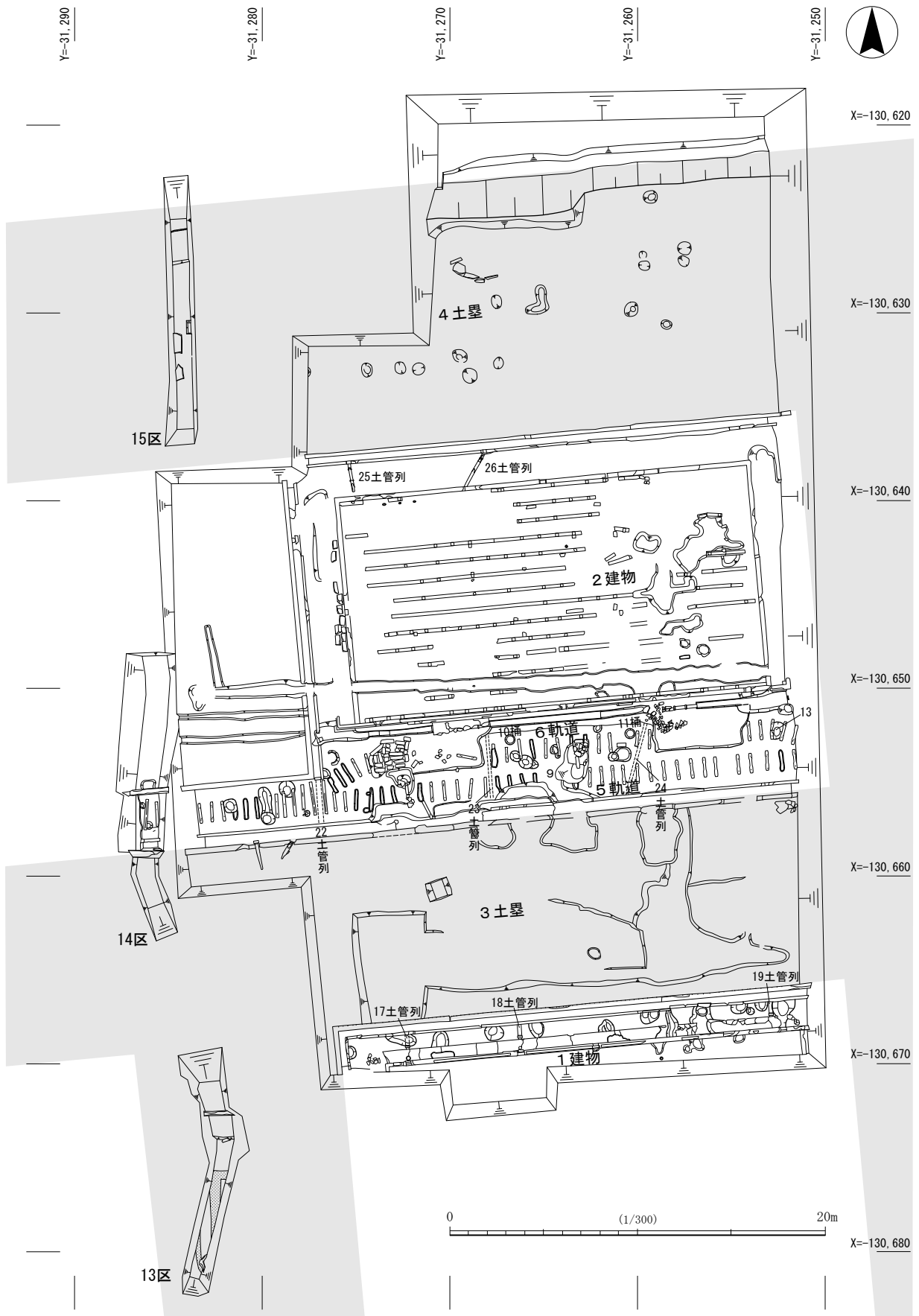


图116 12区 第2面

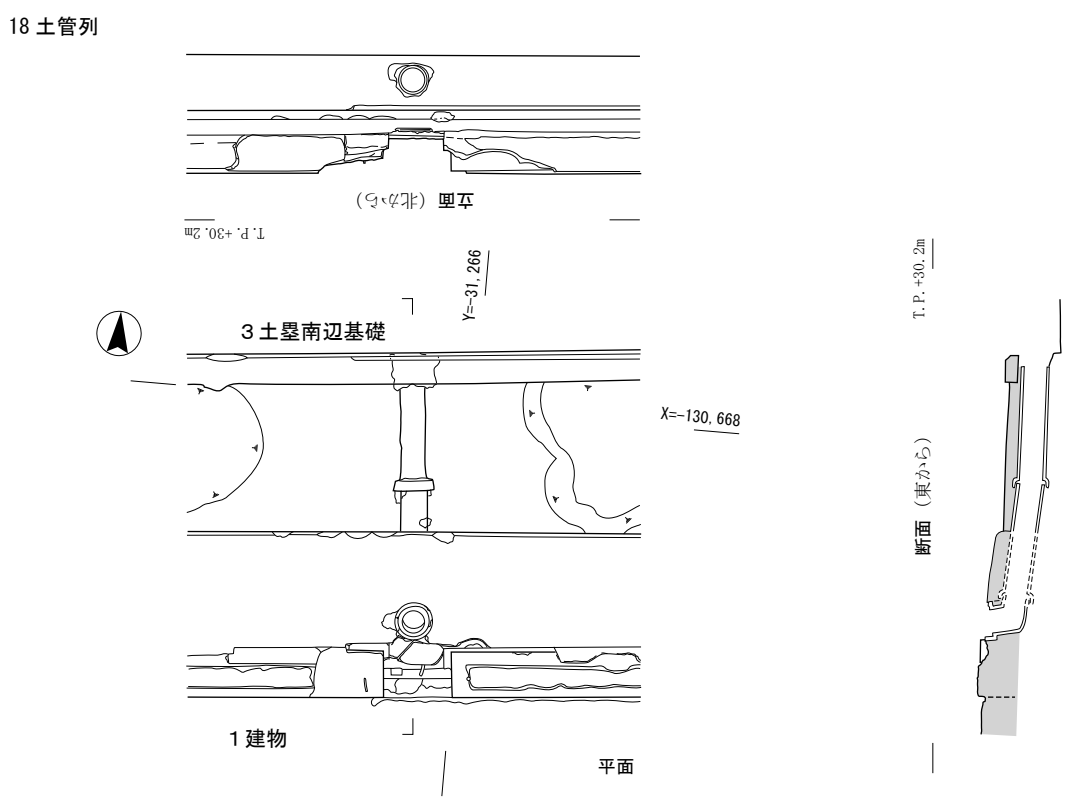
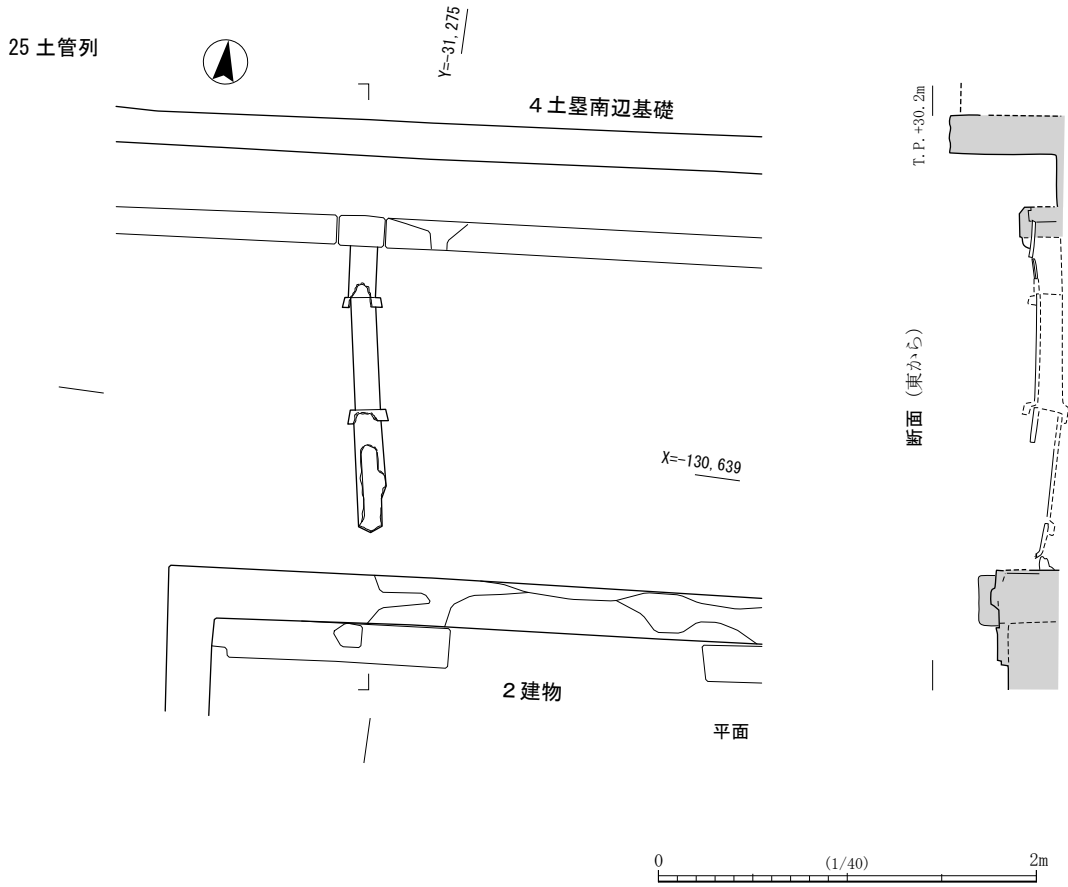


図 117 12 区 第 2 面 18・25 土管列

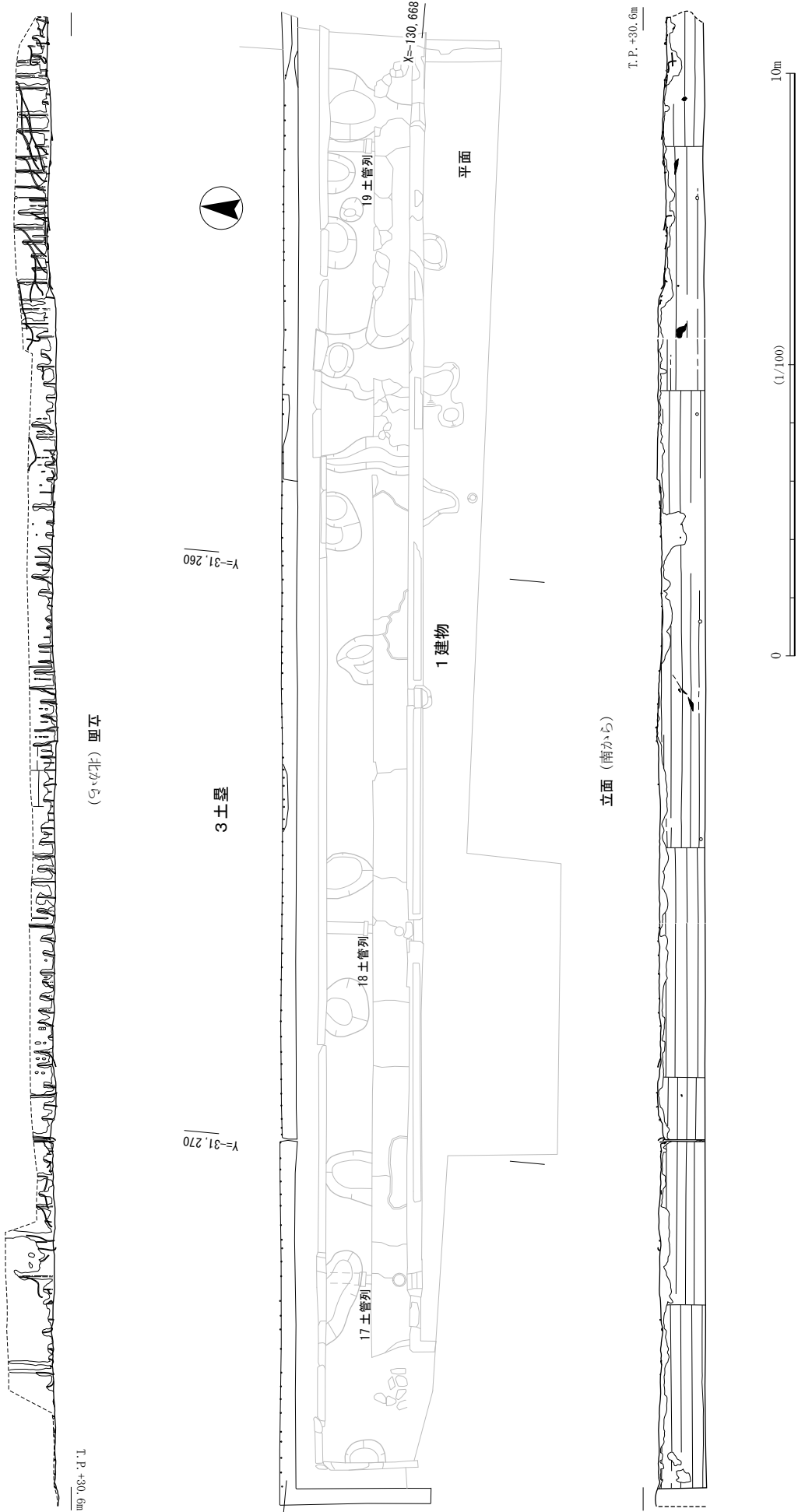


图 118 12区 第2面 3 土壘南边

### 第3面 (図 119 写真図版 69 - 263・264) 古代～中世

禁野火薬庫造成に伴う盛土層やこれ以前の作土層、近世の作土層など(第Ⅱ層)を除去した面である。面の高さは、T.P.+27.9～29.0 mで、南から北に向かって緩やかに下がる。12区南側で地山層が露出し、それ以外では第Ⅴ層・第Ⅵ層が分布していた。第3面では、溝、土坑、ピットを検出した。

**28・29 杭列** (図 120) 12区北東部に位置する。両者とも北北東-南南西に並ぶ。杭自体の残りは悪く、28杭列の一部に木質が痕跡的に残る程度であった。個々の杭跡の平面は円形で、直径7～13 cm、深さは15～59 cmである。出土遺物なし。

**32 溝** 12区北端に位置する。28・29杭列と同様に北北東-南南西を主軸方位とし、南端で33溝に合流する。幅2.1～3.5 m、深さ22 cm。出土遺物なし。

32溝も含め、以下49溝までの埋土はいずれも、第2層下部と同じ10YR6/4にぶい黄褐色細砂～粗砂混じりシルトである。

**33 溝** 西北西-東南東を主軸方位とし、32溝とT字形に接する。幅1.0～1.4 m、33溝の東部では、北側が南側よりもさらに一段深くなっており、その部分で深さ18 cm。8世紀末の須恵器杯(図 179-1005)や製塩土器細片などが出土した。

**38・40・42 溝群** 12区中央部から東側にかけて分布する。**38・40 溝群**の主軸方位は北東-南西、**42 溝群**はそれらとほぼ直交し北西-南東を主軸方位とする。個々の溝は、幅0.2～0.7 m、深さは1～3 cmときわめて浅い。これらは、第3面よりも上層の耕作に伴う溝の痕跡であろう。いずれの溝からも出土遺物なし。

**39 溝** 38溝群の東側に位置する。北北西-南南東を主軸方位とし、検出長2.2 m、幅0.3 m、深さは2 cmと浅い。主軸方位は異なるが、38・40・42溝群と同様、耕作に伴う溝の痕跡であろう。出土遺物なし。

**41 溝** 40溝群の東約3 mに平行する。検出長4.9 m、幅1.0 m、深さ7 cm。出土遺物なし。

**44 溝** 12区西部に位置する。直上にある旧作土層により攪乱され遺存状況は悪いが、主軸方位は北西-南東で、検出長4.8 m、幅約0.7～0.9 m、深さ9 cm。出土遺物なし。

**45 溝** 12区中央部に位置する。44溝の延長上に北西-南東に延びる。検出長約14.5 m、最大幅1.6 m、深さ18 cm。出土遺物なし。

**46 溝** 12区南東部に位置する。主軸方位は西北西-東南東で、検出長1.7 m、幅0.3 cm、深さ10 cm。出土遺物なし。

**49 溝** 12区南部に位置する。40溝群や41溝と同様に、主軸方位は北東-南西で、検出長約9 m、幅0.3～0.8 m、深さ10 cm。土器細片が出土した。

**37 土坑** 12区中央部やや北側に位置する。平面は北西-南東に長い楕円形で、長径1.1 m、短径0.9 m、深さ18 cm。埋土は、10YR3/1黒褐色細砂～粗砂混じりシルト。土器細片が出土した。

**48 土坑** 12区南東部、49溝の東約1.3 mに位置する。平面は北東-南西に長い不整楕円形で、長径3.4 m、短径1.1～1.3 m、深さ20 cm。埋土は、10YR4/2灰黄褐色細砂～粗砂混じりシルト。8世紀前半～中頃の土師器・須恵器(図 179-1006・1007)などが出土した。

**ピット** 柱根や柱痕跡の認められるものはない。埋土はいずれも単層であった。配置からみても、建物などを構成するとは考えにくい。出土遺物は少なく、**31ピット**に陶器、**36ピット**に8世紀後半の須恵器杯がみられた程度である。

Y=-31, 280

Y=-31, 270

Y=-31, 260

Y=-31, 250

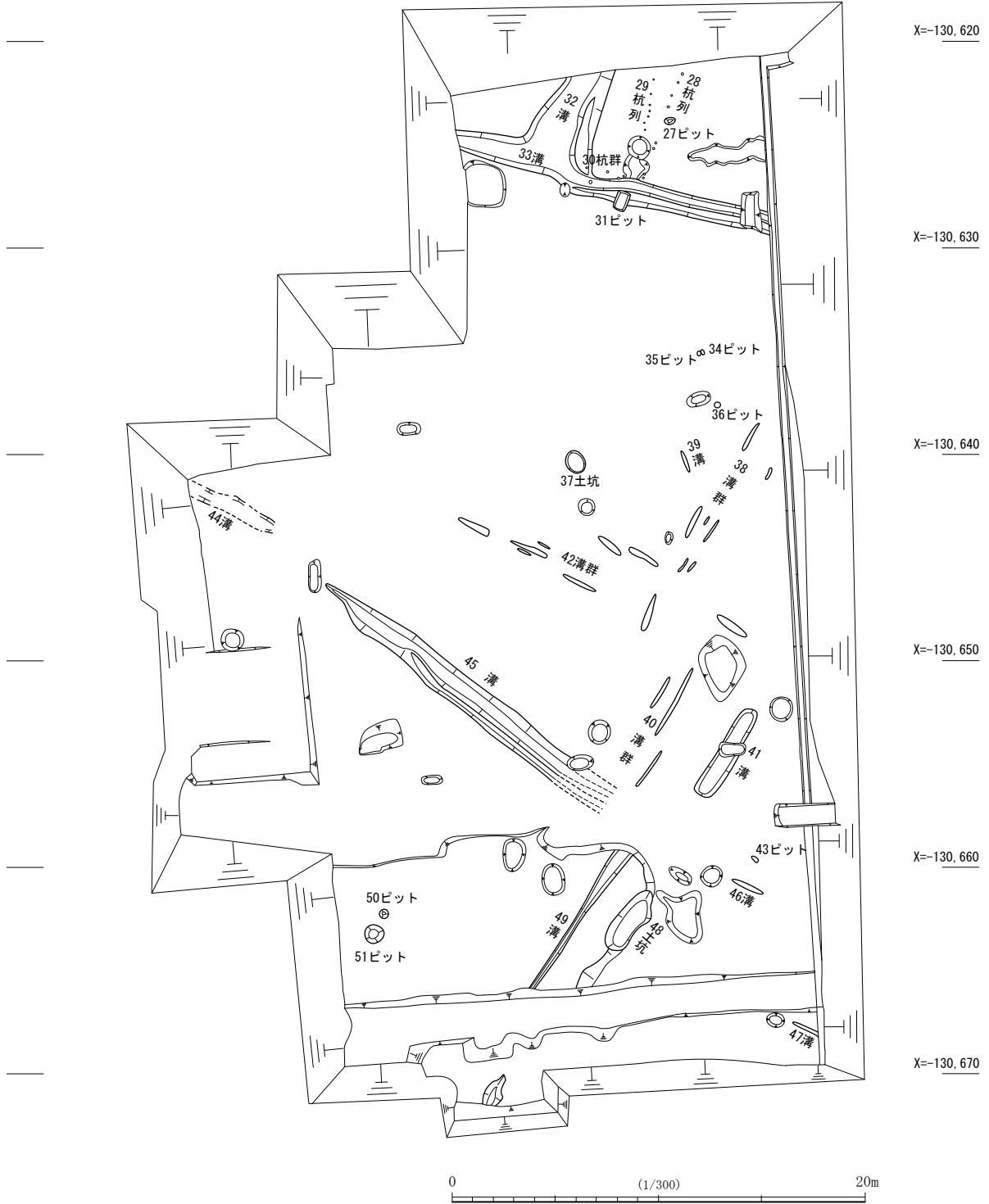


図119 12区 第3面

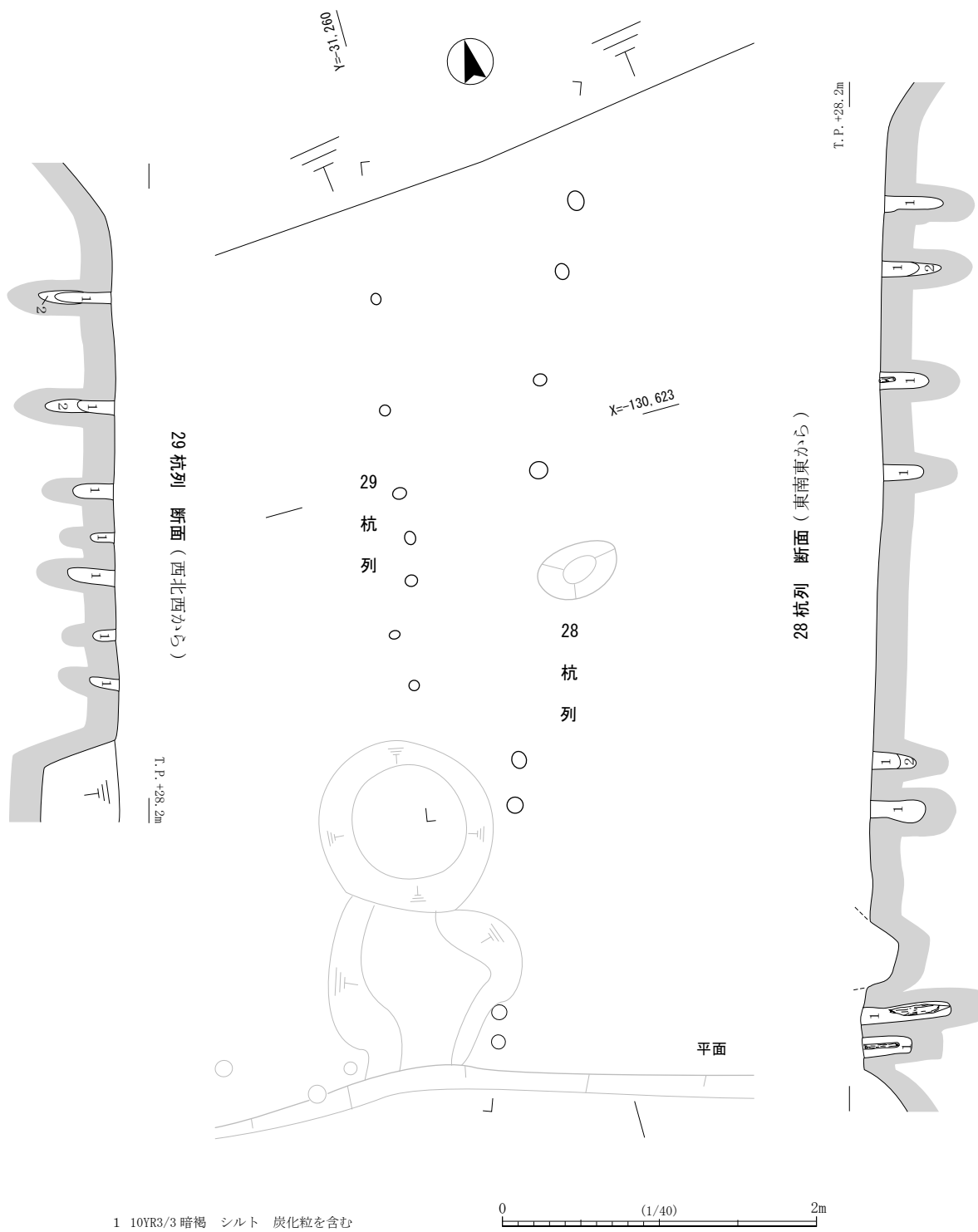


図120 12区 第3面28・29杭列



#### 第4面(図121 写真図版70-265・266) 古代～中世

地山層(第Ⅶ層)上面である。面の高さは、T.P.+27.8～28.9 mで、南から北に向かって緩やかに下がる。掘立柱建物、溝、土坑、ピットなどを検出した。基本的に古代の遺構・遺物が多いが、12区中央部には中世の瓦器を含む土坑やピットが集中している。

**中世の遺構** 中世の遺物を含む遺構は、ピット、掘立柱建物、土坑、溝、落ち込みである。いずれも12区中央部の地山層上面にまとまって分布する。

**ピット群** 12区中央部の西北西-東南東約13 m、北北東-南南西約9 mのほぼ長方形の範囲に約160個のピットが集中する(図122)。それらの北辺で典型的なように、西北西-東南東方向に列をなす。個々のピットは、平面円形で、直径15～30 cm、深さ10～20 cm程度の比較的小規模である。埋土は、10YR4/3にぶい黄褐色ないし2.5Y5/3黄褐色細砂混じりシルトの単層のものが多く、柱根・柱痕跡ともになかった。

これら12区中央部のピットの出土遺物は、古代の土器も若干混じるが、瓦器や土師器といった中世土器(図180-1038～1044・1046～1048)が主体である。179・249ピットからは白磁碗(図180-1045・181-1049)が出土し、249ピットには凝灰岩製砥石(図181-1050)も含まれていた。

**掘立柱建物2**(図123) 中世のピット群の中に、7.5YR4/6褐色細砂～粗砂混じりシルトを埋土とする比較的大きめのピットが存在する。柱根や柱痕跡は確認できなかったが、それらの分布から掘立柱建物が復元できる。主軸方位はN 60° W(北東辺はN 64° W)で、桁行3間(北東4.9 m、南西6.1 m)・梁行2間(北3.7 m、南4.5 m)、面積22.6 m<sup>2</sup>のややひしゃげた側柱建物である。建物の内部空間ではピットが疎になる。

全てのピットから中世土器(図180-1027～1031)が出土した。さらに、南東隅の226ピットから平瓦(図180-1032・1033)、南西隅の238ピットから石が出土した。

**261～268ピット** 上記ピット群の南側に分布する。北北東-南南西に3列に261～263ピット、264・265ピット、266～268ピットが並ぶ。心々距離は、北北東-南南西は1.6～1.7 mと広く、それと直交方向の西北西-東南東は0.6～0.7 mと狭い。直交方向で柱間が著しく異なることから、通常の掘立柱建物とは考えにくい。北北東が開いた囲いの施設も想定できるが、その場合、中央部に位置する264ピットの存在が疑問である。この261～268ピットも、上記ピット群の北東辺や掘立柱建物2と同様の配列方位をなす。これらピットのうち、267ピットから瓦器細片などが出土した。

**85土坑**(図124 写真図版72-274～277) 12区中央部西側、ピット群の南西側に位置する。北西-南東に長い不整楕円形だが、北西部の立ち上がりは明確ではない。80溝よりも後の構築である。長径約6 m、短径約3.5 m、深さ約0.3 m。埋土は図124のように3層に分かれる。土坑の底はほぼ平坦で、北西部には数個のピットがみられるが、中央部から南東側にはピットは存在しない。

85土坑からは、12世紀後半～13世紀前半の白磁皿・碗(図181-1054～1057)、11世紀後半の土師器皿(図181-1059)、12世紀前半の灰釉陶器(図181-1058)、12世紀後半の瓦器椀(図181-1060・1061)などに加えて、8～9世紀の瓦(図181-1062～182-1068)や花崗岩を主体とする人頭大の石が27個出土した。

**81溝** ピット群や掘立柱建物2の北西側を画し、85土坑の北西端から北北東に延び、74落ち込みにつながる。検出長約7 m、幅0.9 cm、深さ11 cm。埋土は、10YR4/3にぶい黄褐色細砂混じりシルト。

Y=-31,280

Y=-31,270

Y=-31,260

Y=-31,250



図121に拡大

遺構番号のみはピット

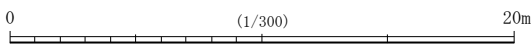


図121 12区 第4面

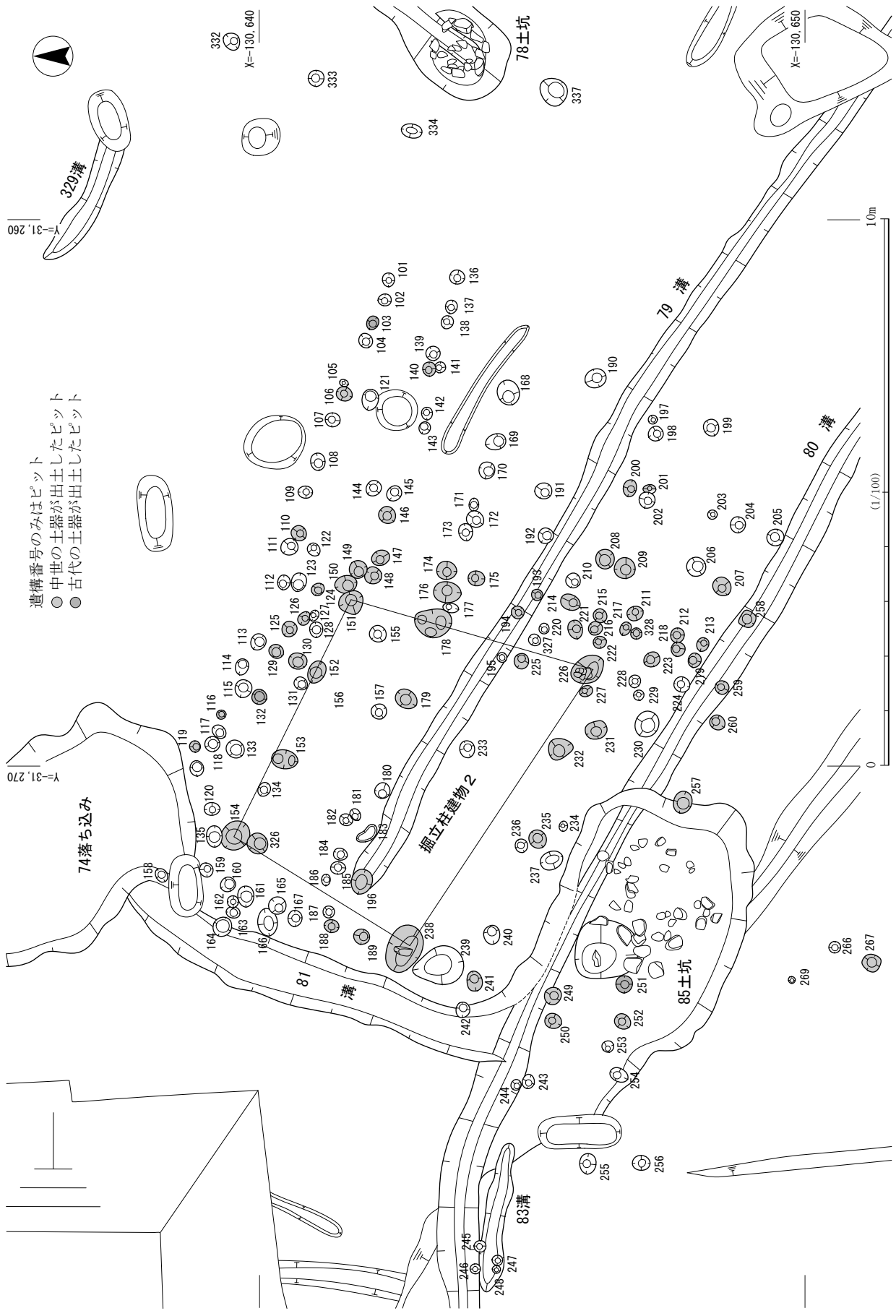


図122 12区 第4面中央部

12世紀末～13世紀初頭の土師器皿（図184-1089）や13世紀前半の瓦器椀（図184-1090）などが出土した。

**74 落ち込み** 12区北西部、ピット群の北西側に位置する。北部は調査区外に広がるが北北西-南南東に長い不整形と推定され、長径4.5m以上、短径約3.5m、深さ0.4m。埋土は、ほとんどが第3層の下部と同じ10YR3/1～3/2黒褐色粗砂混じりシルトで、底に2～8cmほどの厚みで5YR2/2黒褐色シルトに径1～2cmの焼土塊と微細な炭片が混じったものが溜まっている。

落ち込み内の下層には8世紀の土師器・須恵器（図184-1092～1094）もみられるが、上層から12世紀前半の白磁碗（図184-1091）が出土していることと重複関係では81溝よりも後から埋まっていることから、中世に埋没したものと考える。

**古代の遺構** 以下の掘立柱建物、竪穴建物、土坑、ピット、溝は古代の遺構である。

**掘立柱建物1**（図125 写真図版71-267～269）12区南部に位置する。主軸方位はN9°Eで、桁行3間（東5.4m、西5.1m）・梁行2間（北3.9m、南3.6m）、面積19.7㎡の側柱建物である。東西側柱のピットは基本的に平面隅丸方形だが、梁行中央のピットはやや小規模な円形である。各ピットの埋土は図125に示すとおりで、西側柱の98ピットの検出面において拳大の石が1個検出できた以外には礎石や礎板は出土しなかった。また、内部に東柱なども見あたらなかった。

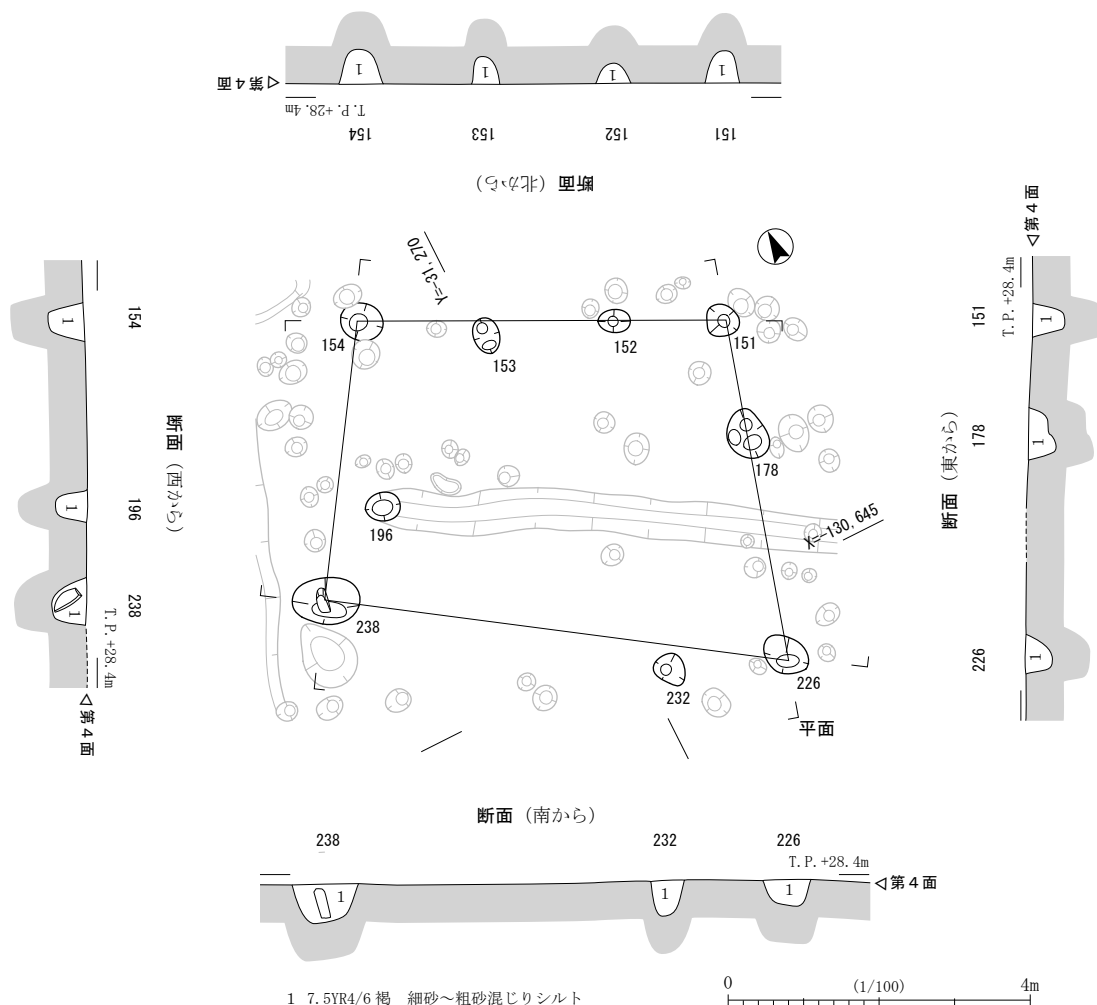
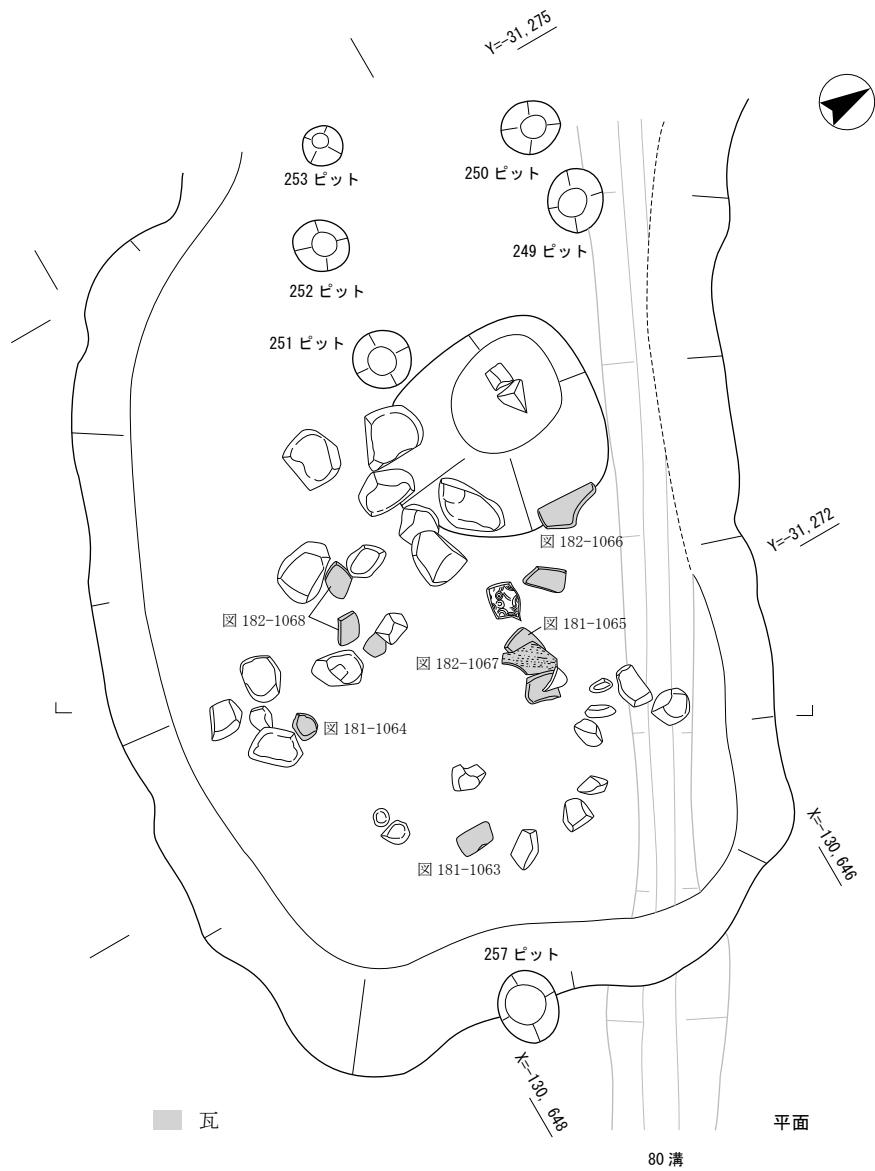


図123 12区 第4面掘立柱建物2



断面 (南東から)

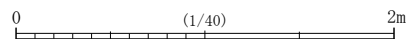
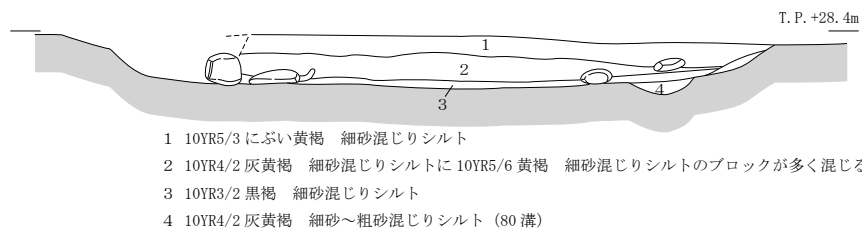


図 124 12 区 第 4 面 85 土坑

92・94・95 ピットから時期不詳ながら古代の土器細片が出土した。

**89 竪穴建物** (図 126 写真図版 73 - 278・279) 12 区南東端に位置する。平面隅丸方形で、北東 - 南西 3.4 m、北西 - 南東 2.9 m 程度、深さ 0.5 m 以上の規模となる。面積は 9 m<sup>2</sup> 程度で小型の竪穴建物である。炉やカマドといった火処は認められなかった。貼床は竪穴周辺の地山層と判別がつきにくかったが、サブトレンチを設定して下層を確認したところ、厚さ 3～8 cm の貼床であることが判明した。貼床をはがすと、ピットを検出できた。すなわち、貼床上面で検出した 308・312・316 (掘りすぎたが)・317 ピットが柱痕跡、貼床をはがして検出した 339・340・341・342 ピットが支柱穴となる。支柱は垂直ではなくわずかに内転び傾向にある。貼床は竪穴中央部に比べて周辺では薄くなっており、その結果、壁際は浅い溝状にくぼんでいる。

竪穴建物の埋土からの出土遺物は、6 世紀後半の須恵器や 9～10 世紀頃の黒色土器 A 類も混じるが、主体は 8 世紀中頃の土師器 (図 179 - 1012～1020)・須恵器 (図 179 - 1021～1023) である。さらに、製塩土器 (図 179 - 1024・1025) や丸瓦 (図 179 - 1026) など出土した。

建物の柱穴であるピットからの出土遺物は少なく、316 ピットの製塩土器細片のみである。

**90 土坑** 12 区南辺、89 竪穴建物の西隣に位置する。遺構の大部分は調査区外に広がると考えられる。検出した範囲では、北端に丸みを帯びた角があり、北東辺と北西辺が直線的である。埋土は、上層が 10YR4/2 灰黄褐色細砂～礫混じりシルト、下層が 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂混じりシルトを主とする。8 世紀後半の土師器杯 (図 182 - 1073)・須恵器杯蓋 (図 182 - 1074・1075) などが出土した。

90 土坑の底面で検出された 4 個のピットのうち 323 ピットは、柱痕跡は認められないものの直径 44 cm、深さ 24 cm の規模で、柱穴としても位置的におかしくはない。

土坑の平面形状と 323 ピットの存在から、この 90 土坑も竪穴建物の一部である可能性が高い。

**78 土坑** (図 127 写真図版 72 - 270～273) 12 区東部に位置する。主軸方位は北東 - 南西で、平面形は、楕円の一端が北東に延びたような、しいて言えばイチジクのような形で、長軸に並行する南東辺と北西辺は直線的になっている。長径 3.1 m、短径 1.5 m。深さは約 30 cm だが、床面はさらに中軸線に沿って幅 40 cm、深さ 12 cm ほど溝状にくぼんでいる。

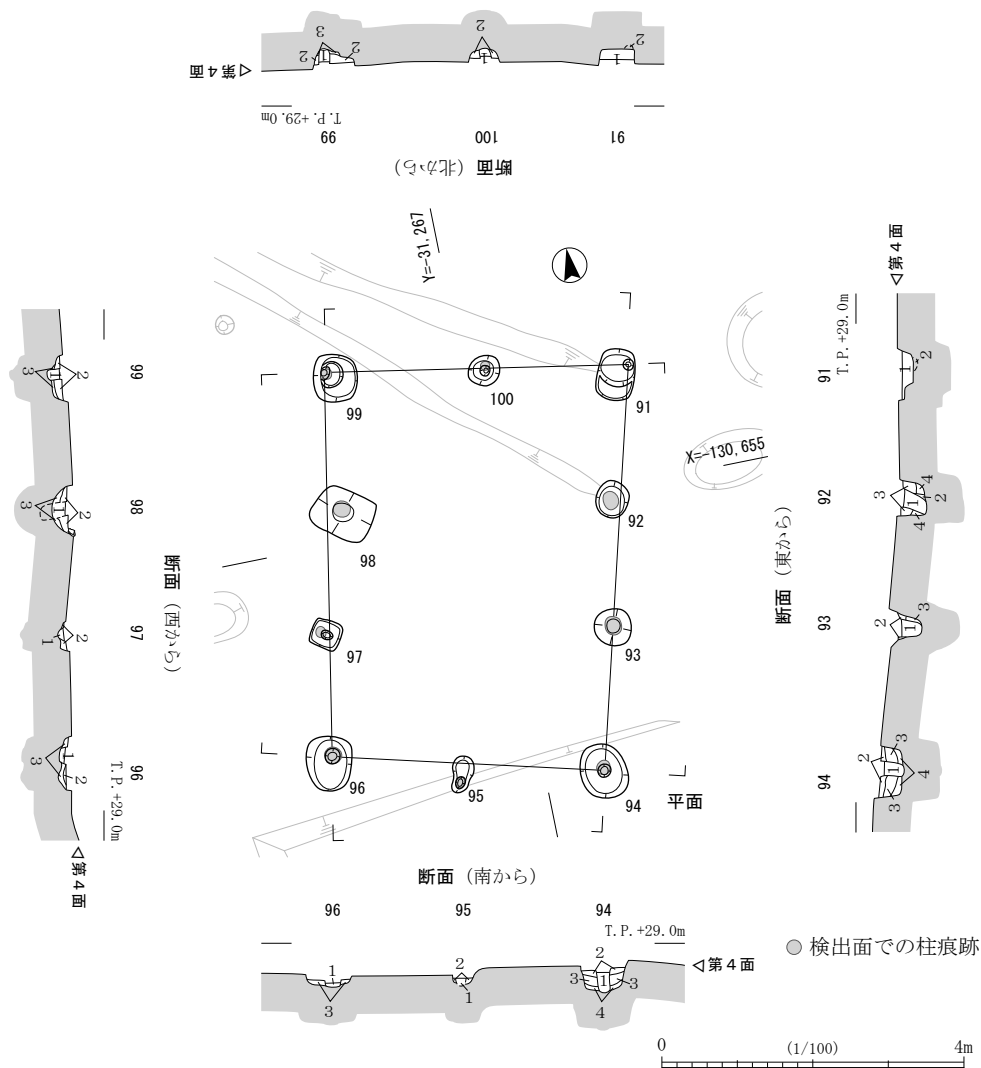
楕円形部分の中心には、平瓦と花崗岩が外径約 1.0 m の環状に並べられ、その中心にも灰色の石と平瓦と焼土塊が存在する。焼土塊は、他にも遺構の北東端部と環状の南西部、すなわち遺構の長軸線上に分布している。遺構の壁面・底面とも顕著な被熱痕跡や火熱による固化は認められない。

埋土は図 126 のように 5 層に分かれるが、いずれも類似した層相である。それほど顕著ではないものの、埋土全体にまんべんなく径 5～20 mm 程度の炭化した粒子が混じっている。

8 世紀初頭の瓦 (図 183 - 1076～184 - 1084)、鉄滓 (図 184 - 1085)、溶壁などが出土した。埋土にも、被熱遺物、微細遺物、土器片、炭化材、骨片、鉍滓などが含まれていると予想されたので水洗したが、それらは見当たらず瓦片のみ出土した。

この遺構の壁面・底面には顕著な被熱痕跡は見当たらない。しかし、遺構底の溝状のくぼみ、円形に並べられた瓦と花崗岩の造作、焼土塊の存在といった諸点から、火化 (荼毘) 施設、火葬墓、湯屋 (湯沸し) 遺構、土器焼成坑、炉、窯などといった火熱を用いた遺構のひとつと考えられる。

**77・332～335 ピット** 332～335 ピットは、78 土坑の北西側に北北東 - 南南西に並ぶ。心々距離は、332 ピットと 333 ピットは 3.3 m、333 ピットと 334 ピットは 4.0 m。78 土坑とは方位を若干異にし、他にピットなどが検出できなかったが、78 土坑の東側にある 77・335 ピットとともに、78 土坑の覆



**91 ピット**

- 1 10YR4/2 灰黄褐 細砂～礫混じりシルトに  
10YR5/6 黄褐 細砂～粗砂混じりシルトのブロックが混じる
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐 細砂～粗砂混じりシルト

**92 ピット**

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 10YR4/4 褐 細砂～粗砂混じりシルト
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂～粗砂混じりシルト
- 4 2.5Y5/4 黄褐 粗砂～礫混じりシルト

**93 ピット**

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂～粗砂混じりシルト
- 3 10YR5/2 灰黄褐 細砂～礫混じりシルト

**94 ピット**

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 10YR3/4 暗褐 細砂～礫混じりシルト
- 3 10YR4/4 褐 細砂～礫混じりシルト
- 4 10YR4/6 褐 細砂～礫混じりシルト

**95 ピット**

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 10YR4/6 褐 細砂～粗砂混じりシルト

**96 ピット**

- 1 10YR5/3 にぶい黄褐 細砂混じりシルト
- 2 10YR4/4 褐 細砂～粗砂混じりシルト
- 3 10YR5/6 黄褐 細砂～粗砂混じりシルト

**97 ピット**

- 1 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂混じりシルト
- 2 10YR5/6 黄褐 細砂～粗砂混じりシルト

**98 ピット**

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 10YR5/6 黄褐 細砂～粗砂混じりシルト
- 3 10YR4/6 褐 細砂混じりシルト

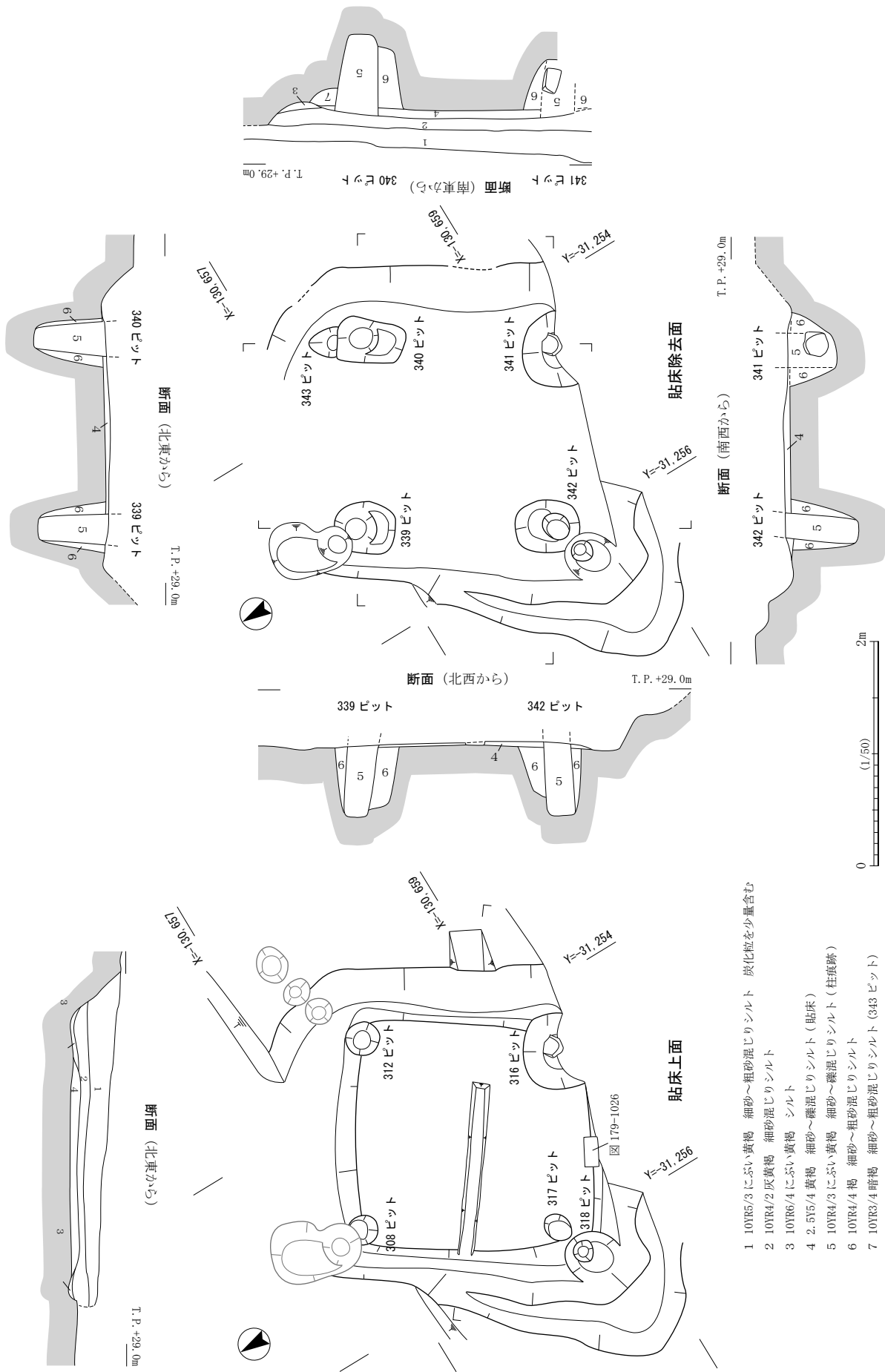
**99 ピット**

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐 細砂～粗砂混じりシルト
- 2 2.5Y5/4 黄褐 細砂～粗砂混じりシルト
- 3 10YR6/6 明黄褐 細砂混じりシルト

**100 ピット**

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐 細砂～礫混じりシルト
- 2 10YR5/6 黄褐 細砂～粗砂混じりシルト

図 125 12 区 第 4 面掘立柱建物 1



- 1 10VR5/3 にぶい黄褐色 細砂〜粗砂混じりシルト 炭化粒を少量含む
- 2 10VR4/2 灰黄褐色 細砂混じりシルト
- 3 10VR6/4 にぶい黄褐色 シルト
- 4 2.5Y5/4 黄褐色 細砂〜礫混じりシルト (貼床)
- 5 10VR4/3 にぶい黄褐色 細砂〜礫混じりシルト (柱痕跡)
- 6 10VR4/4 褐色 細砂〜粗砂混じりシルト
- 7 10VR3/4 暗褐色 細砂〜粗砂混じりシルト (343ピット)

図 126 12 区 第 4 面 89 竖穴建物



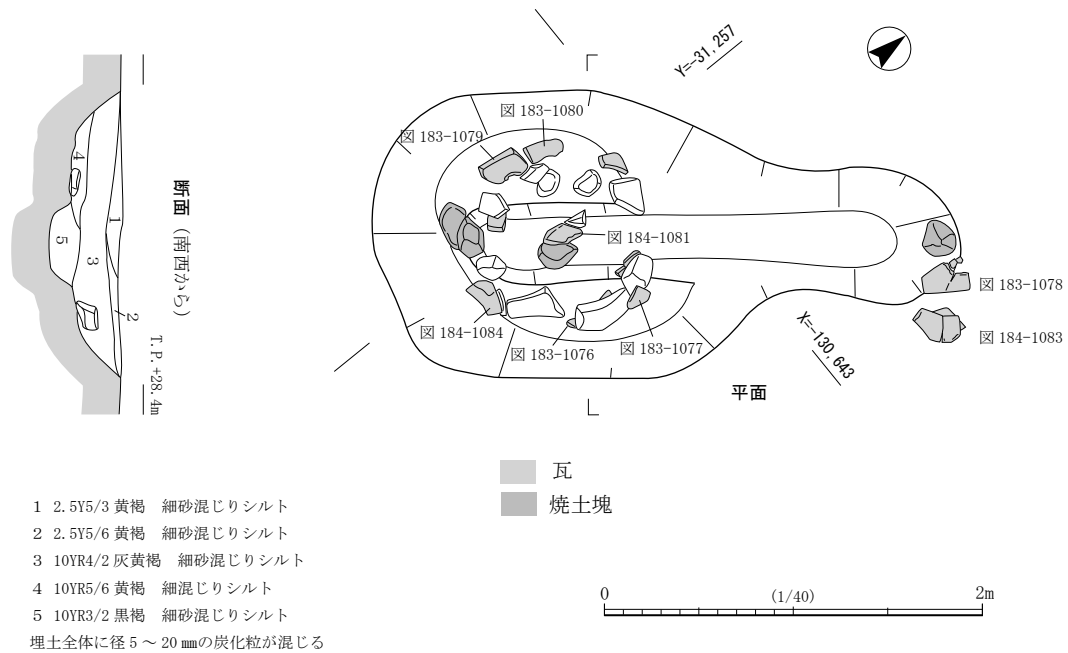


図 127 12区 第4面 78土坑

屋的な遺構も想定できる。

77ピットの埋土は、上層が10YR4/2灰黄褐色細砂混じりシルト、下層が5YR4/6赤褐色細砂混じりシルト。332～335ピットの埋土は、いずれも第3層下部と同じ10YR3/2黒褐色粗砂混じりシルト。

77ピットからのみ古代の遺物細片が出土した。

**その他のピット** 古代と考えられるピットのうち掘立柱建物1を構成する以外には、12区南東部の285ピットからスギ材の柱根が出土し、北部の67ピットで柱痕跡が認められた。285ピット周辺の12区南東部では、土坑や溝とともにピットが分布している。67ピット周辺の12区北部では、58～62ピットや68・331・70ピットが北北西-南南東に、62・63・66・67・72ピットや70・71・73ピットが北東-南西に並んでいる。埋土が単層のものが多く柱穴とは確認できないが、これらが柵列などを構成する可能性はある。

57ピットから8世紀末～9世紀初頭の須恵器杯(図180-1034・1035)、72ピットから8世紀末の須恵器杯(図180-1036)や鉄釘(図180-1037)、277ピットから8世紀の土師器甕(図181-1051)、279ピットから8世紀の平瓦(図181-1052)、289ピットから8世紀後半の須恵器甕(図181-1053)などが出土した。

**86土坑** 12区南東部に位置する。平面は北東-南西に長い長楕円形で、長径3.0m、短径0.9m、深さ0.3m。埋土は、上層が10YR3/3暗褐色細砂～粗砂混じりシルト、下層がそれと地山層である2.5Y5/3黄褐色シルトがブロック状に混じり合っている。8世紀中頃の須恵器杯(図182-1069)などが出土した。

**87土坑** 86土坑の東に位置し、それとほぼ直交するように北西-南東に延びる。平面楕円形で、長径2.3m、短径1.2m、深さ0.6m。埋土は、上層が10YR4/2灰黄褐色細砂～粗砂混じりシルト、中層が10YR5/6黄褐色細砂混じりシルトに10YR5/2灰黄褐色細砂混じりシルトのブロックが混じる、下層が10YR3/2黒褐色細砂混じりシルトに10YR4/6褐色細砂混じりシルトのブロックや炭化粒が混じる。8世紀の須恵器などが出土した。

**88 土坑** 87 土坑の南東側に連なる。87 土坑との間は馬の背状に高まっており、2つの土坑が直列に並んだようにもみえる。長径 3.8 m、短径 1.2 m、深さ 0.6 m。埋土は、上層が 10YR4/4 褐色細砂～粗砂混じりシルト、中層が 10YR3/3 暗褐色細砂混じりシルトに炭化物が混じったもの、下層が地山層である 2.5Y5/3 黄褐色シルトのブロックに 10YR4/2 灰黄褐色細砂混じりシルト少量混じっている。8 世紀中頃～後半の須恵器（図 182 - 1070～1072）などが出土した。

**52 溝** 12 区北東部に位置する。北北西 - 南南東を主軸方位とし、検出長約 14 m、幅 1.1～1.5 cm、深さ 0.6 m。埋土は、上層が 10YR3/3 暗褐色細砂混じりシルト、中層西側が 10YR5/6 黄褐色細砂～粗砂混じりシルト、中層東側が 10YR5/6 黄褐色細砂～粗砂混じりシルトに 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトのブロックが混じったもの、下層が 10YR5/6 黄褐色細砂～粗砂である。出土遺物なし。

**79・80・82 溝** 12 区中央部に位置する。これらの溝は道路側溝と考えられる。

**79 溝**の主軸方位は N 55° W。検出長約 23 m、幅 0.4～0.6 m、深さ 14 cm。埋土は、10YR4/2 灰黄褐色細砂～粗砂混じりシルト。79 溝は上述のピット群のほぼ中央に伸びているが、重複関係は全てピットの方が新しい。出土遺物なし。

**80 溝**の主軸方位は、79 溝と対向部分ではそれとほぼ並行する N 56° W だが、**82 溝**とした 12 区西部では西へと向きが変わる。80・82 溝の検出長約 33 m、幅 0.5～0.7 m、深さ 25 cm。埋土は、上層が 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂混じりシルト、下層が 10YR4/2 灰黄褐色細砂～粗砂混じりシルト。**80 溝**の出土遺物には中世の土器も少量混入するが、主体は 8 世紀末～9 世紀初頭の須恵器や瓦（図 184 - 1086～1088）である。**82 溝**からは古代と考えられる土師器細片のみ出土した。

79 溝と 80 溝は、主軸方位 N 55～56° W、心々距離 2.8～3.8 m、溝の内側間 2.1～3.3 m でほぼ並行しており、その間は道で、両溝はその側溝であった可能性が高い。

なお、この 12 区の南側にあたる 9 区第 6 面でも道路側溝と考えられる 197 溝と 199 溝を検出した。しかし、12 区の 79・80 溝の主軸方位が N 55～56° W であるのに対し 9 区検出の溝は N 24～25° E で、その交差する角度は約 80° となり直角とするにはややぶれがある。また、溝間の内法も 9 区では約 5.1 m、12 区では 2.1～3.3 m と、規模の違いもある。

**83 溝** 12 区西部、82 溝の南に接する。主軸方位は西北西 - 東南東で、長さ 2.7 m、幅 0.5 m、深さ 10 cm。埋土は、10YR4/4 褐色細砂混じりシルト。古代の土器細片が出土した。

**84 溝** 12 区南東部、80 溝の南に並行する。西北西 - 東南東を主軸方位とし、検出長約 9 m、幅 0.6 m、深さ 35 cm。

84 溝も含め、以下の 329 溝まではいずれも、第 3 層下部と同じ 10YR3/2 黒褐色粗砂混じりシルトを埋土とする。84 溝の古代の土器細片以外には、遺物は出土していない。

**274 溝** 12 区西部に位置する。主軸方位は北北東 - 南南西で、長さ 2.0 m、幅 0.6 m、深さ 7 cm。

**297 溝** 12 区南東部に位置する。主軸方位は北北東 - 南南西で、長さ 2.2 m、幅 0.5 m、深さ 16 cm。

**329 溝** 12 区南東部に位置する。北西 - 南東を主軸方位とし、検出長 2.5 m、幅 0.5 m、深さ 6 cm。

**338 溝** 12 区北東部に位置する。主軸方位は北西 - 南東で、検出長 2.7 m、幅 0.3 m、深さ 7 cm。52 溝につながり、埋土も 52 溝の上層と同じ 10YR3/3 暗褐色細砂混じりシルト。

## 第 12 節 13 区・14 区・15 区（人孔・管路）の遺構

13 区・14 区・15 区は、調査地中央部、12 区の西側、5 区・8 区の東側に位置する。南北方向に延びる管路とそれに接続する人孔の設置に伴う調査である。

13 区・14 区・15 区の平面は、12 区第 1 面（図 114）・第 2 面（図 116）の図に掲げた。

### 13 区（写真図版 74 - 281）

9 区北西部にある 56 土塁基礎内側の盛土部分にあたる。13 区北側は攪乱を受けている。T.P.+31.1～31.8 m の現地表面から、南側は掘削限界の T.P.+29.3 m まで掘り下げた。最終面での調査面積は 9 m<sup>2</sup>。その面で耕作に伴うと考えられる南北方向の土変わりがみられたのみで、顕著な遺構は存在しなかった。

### 14 区（写真図版 74 - 282）

およそ T.P.+30.8 m の現地表面から調査を開始し、12 区中央部において、およそ T.P.+29.6 m で東に隣接する 12 区で検出した軽便軌道や土塁基礎の延長などが検出できた。最終面での調査面積は 15 m<sup>2</sup>。

軽便軌道に伴う枕木はコンクリート製で、単線から複線への分岐部分に相当するため、12 区にも存在した長い枕木（図 144 - 234・235）が出土した。さらに、土塁の内側に相当する部分において、14 区北側では T.P.+29.1 m、南側では T.P.+29.6 m まで掘り下げたが、遺構・遺物ともに出土しなかった。

### 15 区（写真図版 74 - 283）

その大分部が 5 区や 12 区北端で検出した土塁の内側に該当する。およそ T.P.+30.8 m の現地表面から、南部で T.P.+30.0 m、北部で T.P.+29.3 m まで掘り下げた。最終面での調査面積は 10 m<sup>2</sup>。

北部において、12 区 4 土塁の北辺斜面の延長部分にコンクリート基礎が存在せず土塁の表層がおよそ 45 度の傾斜で北に下がる状況が確認できた。他に顕著な遺構は存在しなかった。

## 第5章 遺物の調査成果

### 第1節 近代以降遺物 (図128～145、写真図版75～89・103)

当調査の第0層、昭和14年爆発関連層上面、第I層(昭和14年爆発関連層)、昭和14年爆発関連層下面から出土した、主に近代以降と判断した遺物について種類毎に概要を説明したい。詳細については、巻末の掲載遺物観察表を参照願う。

**磁器**(図128) 磁器碗・皿(1～3)等が出土した。瀬戸焼の印判染付と思われ、同じような文様のものが多い。3は輪花口縁、蛇の目凹形高台で、見込みの文様は松竹梅かと思うもので、口縁内面にも鶴の文様がある。内底面にトチン跡がある。1も内底面にトチン跡?がある。

**ガラス製品**(図128) 4・5は、茶色の薬瓶の栓と瓶である。同一個体と判断できなかったため、別々に掲載した。栓のつまみ以外と瓶の口縁内面はすりガラス状で、外底部は気泡のざらつきがある。

**分銅**(図128、写真図版81) 6・7は、10区(A2棟)第2面62土坑から出土した。6の上面に「大阪? Y 函 100 g」、7の上面に「阪大 函 100 g」と刻印がある。

**銭貨**(図128、写真図版81) 8は寛永通寶で、11区第3面166ピットから出土した。裏面に「文」の文字がある文銭で寛文8年(1668年)～天和3年(1683年)に鑄造されたものである。近世の遺物だが、ここに掲載した。

**紙製品**(写真図版75) すべて10区(A2棟)第2面1014ピットから出土した。写真図版75・1095・1096は、「株式会社神戸米穀株式取引所仲買人売買元帳」と書かれたB4判の書類である。1097・1098は、ゼネラルマスク、エーワンマスクの外箱である。1099は外箱のようなボール紙で、墨で何か書かれている。大正時代後半から昭和時代初頭のものと考えられる。

**碍子**(図128) 9～12は、磁器の碍子で、9はシーリングローゼット(通称 菊)で、まん中の孔からコードを下げ、キーソケットなどに電球を取り付けて照明とした。10は二重碍子、11は茶台碍子で、電柱や建物に取り付け、電線の引き留めに使われる。12は玉碍子で、支線の絶縁に使用される。

**金属製品**(図128) 13～18は生活用品に近いものとしてここに掲載したが、図137・138の建具類のところでも扱うものであった。13は口輪と押え金具、14は戸車、15は樋受金具の豎とり控金具、16は樋受金具の軒とり金具で針金がかっついており、全体にニス?が塗布され、煤も付着している。掲載しなかったが樋自体の一部も出土している。17は排水目皿で、18はブラインドフランジ(閉止フランジ)で、パイプの閉止に使われる。

**陶器便槽鉢**(図128・129、写真図版76) 19～22は、8区第1面10職工厠の便槽に使われていた陶器の鉢である。口径は57cm前後、器高は37cm前後である。外面体部に接合時の段と思われる2条の凸線があり、外底部に砂粒が付着している。19～21は、外底部に墨書らしきものが書かれている。21の口縁外面直下には、記号かと思われる「○」がある。23～25は、11区第2面3～5便槽に使われていた陶器の鉢で、口径58～60cm、器高31～33cmである。24・25の外面体部に接合時の段と思われる2条の凸線があり、25の外底部に墨書らしきものが書かれている。

**陶器土管**(図129・130、写真図版76) 各調査区に、排水用施設として土管列が検出されている。主な土管列から1～2本を掲載した。26は、5区第1面9土管溝から出土した。この土管暗渠は明治42

年から昭和 11 年の間に構築されたと考えられる。口径 61.8 cm、器高 68.6 cmで、外面口縁直下に「アイチ 並管 ハ T トコナメ」の刻印があり、常滑焼である。31 は、9 区第 2 面 351 土管列から出土し、口径 80 cm、器高 71 cmで、当調査で出土した土管のなかで一番大きなものである。32・34 は、10 区（A 1 棟）第 1 面 1 建物、10 区（A 2 棟）第 1 面 42 土管溝から出土した L 字形土管である。

**瓦**（図 131～133、写真図版 77）各調査区から多量の瓦片が出土した。残りの良いもの、種類の違うもの、刻印されているものを掲載した。46 は軒瓦、47 は紐丸瓦、48 は平瓦、49 は棧瓦、50 は引掛付棧瓦、51 は袖瓦（左）、52 は伏間瓦である。53～63 は刻印瓦である。53 は軒瓦で、垂れの部分に「村瓦米」と刻印がされており、54 は棧瓦で、頭に「三州」と刻印がされている。三州は三州瓦を指し、愛知県で作られたものと思われる。55 は、「淡路阿萬 ○○組（？）合 | 谷」と刻印がされている。淡路で作られた瓦と思われる。56 は平瓦で、凹面に「一」と刻印がされている。57～59 は引掛付平瓦で、凹面にそれぞれ「K 杏」、「S」、「ト」、「隆」と刻印がされている。61～63 は別個体であるが同じ刻印と思われ、繋げると「(上段) ○○○○○ MARK (下段) 森分式瓦○○製」となる。平成 15・16 年度調査の報告書『禁野本町遺跡』（以下「第 140 集」と略す）で同様なものが出土し、上段は「TRADE MARK」の一部として紹介されている。

**煉瓦**（図 134・135、写真図版 78）各調査区から多量の煉瓦が出土した。計測ならびに観察した煉瓦は 419 点である（表 2）。そのうち会社印またはそれと思われる刻印がある煉瓦は 325 点で、大阪窯業株式会社製（67・70・74～76）が 179 点（55.1%）を占め、岸和田煉瓦株式会社製（64～66・73）が 137 点（42.2%）で、2 つの会社製品がほとんどを占める。他には日本煉瓦株式会社製（71・72）が 4 点（1.2%）、堺煉瓦株式会社製（69）が 1 点（0.3%）、会社名は不明だが、ダビデの星型が刻印されたもの（68）が 4 点（1.2%）出土している。他に不明刻印があるもの（77・78）が 21 点あり、釘印?、「ホ」、四本線、「一・ニ?」、「ウ?」、「ト?」、「ア?」である。大阪窯業株式会社の会社印の中に「8、10?、11、12、14?、16?、18?、20?、21?、23、25、44?、60?」という数字が刻印されているものがある。カタカナの「ホ」か「キ」に見えるものも 1 点ある。会社印の横に刻印されているものに、「釘印、ホ、ニ?、ト?、へ、ル、ヌ、ヲ?、ワ、一?」がある。岸和田煉瓦株式会社の会社印とともに刻印されているものは、「岸・泉、釘印、イ、ホ、ウ?、ト?」がある。日本煉瓦株式会社製（71）の会社印の中には「六」がある。刻印があるもの 346 点中、両面にあるものは 219 点（63.3%）、片面と思われるもの 127 点（36.7%）である。

煉瓦の法量は、大正 13 年（1924 年）に J E S 規格（日本標準規格）（長さ 210 mm、幅 100 mm、厚さ 60 mm）が制定されたが、完全には統一されなかったようである。煉瓦 1 個ずつの法量が煉瓦の規格のどの形なのかまでは調べられなかったが、大阪窯業株式会社製は、長さ 228～230 mm、幅 108～112 mm、厚さ 60 mmが多く、岸和田煉瓦株式会社製は、長さにはばらつきがあり、226～228 mmがやや多く、幅も 106～111 mmとばらつき、厚さは 59～60 mmが多い。刻印が無く、また不明会社印の煉瓦は、長さ 225～228 mm、幅 105～108 mm、厚さはばらつきがあるが 58～61 mmがやや多い。

成形には手抜き成形と機械抜き成形があり、419 点中 352 点（84.0%）が手抜き成形で、機械抜き成形は 65 点（15.5%）である。大阪窯業株式会社製 179 点のうち機械抜き成形は 1 点（0.6%）と少なく、岸和田煉瓦株式会社製 137 点中 38 点（27.7%）が機械抜き成形である。日本煉瓦株式会社製、堺煉瓦株式会社製、ダビデの星型印の煉瓦は手抜き成形である。制作会社不明の 94 点のうち 25 点（26.6%）が機械抜き成形である。手抜き成形にはあるとされる、成形（型に粘土を詰める）時上面に

ある線状凹み（当センター 市村慎太郎氏の命名による。従来凹線状圧痕などと呼称されていたものである）を有するものは221点（52.7%）、無いものは166点（39.6%）である。機械抜き成形だと思いう煉瓦65点中に、線状凹み・凹み？があるものは4点あるが、機械抜き成形かどうか不確かなものばかりである。線状凹みが無いものは53点で、不明は8点である。

**金属製品**（鋸・手違い・ボルト・ワッシャー・工具）（図136、写真図版79・80）79～86は、鉄製鋸である。47点ほど出土した鋸は、働き長さが6.5cm～15.3cmまでであるが、多いのは10cm台～12cm台である。そのなかで10.5cm、11.5cm、12.0cmがやや多い。ツメの長さ（通常片方が若干長い）は1.6～5.5cmまでであるが、3～4cm台が多い。86は36.0cmを測る特別大きいものである。87～91は、鉄製手違いである。17点ほど出土した手違いは、働き長さが10.1cm～14.5cmまでであるが、11cm台が多く、そのなかで11.0cmがやや多い。ツメの長さ（通常片方が若干長い）は2.3～6.0cmまでであるが、3cm台が多い。92～95は、ワッシャー付ボルトである。ボルトは30点ほど出土している。95は大型で、1.1cmの厚みのある台形ワッシャー？を付けており、さびについてはなく動く。96はボルトと思われるが、先端が尖り、ナットの下部に径0.8cmの孔が開いている。97・98は丸と方形のワッシャーである。ワッシャーのみの出土は少ない（丸が2点、角（木材用）が5点）。99は鑿、100はやつとこ、101はとび口である。

**金属製品**（建具類）（図137・138、写真図版79・80・82・86）102～112は、木ネジまたは木ネジと思われるものである。204点出土している（表3参照）。主な長さは、J E S規格と一致するものが25・30・35・38・40・45（銅）・45・50（銅）・50・60・80mmである（銅と書いていないものは全て鉄）。一番多く出土したのは、50（鉄）mmである。102・103・106～108・112は頭部にすり切りがない。104は真鍮で、109～111も真鍮と思われる。106・107は、丸のワッシャー付である。112はサビがネジ切りのような凹凸を示し、木ネジだとすると長さ151mmで一番大きい。113～125は釘である（表4参照）。1555点が完形に近い形で出土している。J I S規格（日本工業規格）と一致した、釘の主な長さは、25・38・45・50・65・75・90・100・115・125・150mmである。50mm・65mmが多い。1100は、12区第1・2面2建物から出土した多量の木ネジ・釘群である。128は止め具で、127・129・130・131・136・142は不明品である。136は二股に分かれた先端に同形の空豆状のものが取り付けられているが、取り付け方は表裏反対である。132～135・137～141は、補助金具と思われるものである。135は長方形の枠で、長側面に孔が7個あけられている。142は、薄い金属の板の周囲を薄い金属で包まれた木枠が回っている。1111は、10区第1面2建物から出土した幅6.5cmの引戸下枠である。

**木製品**（建具類）（図137、写真図版103）126は、11区第3面2柵から出土した建築部材である。スギ材で、6.3～6.6×3.2cmのホゾ2個と径11.0×2.0cmのホゾ孔1個を持つ。


**コンクリート製品**（図138、写真図版81・82）143は、11区第1層から出土した敷居と思われるものである。コンクリートの中には鉄筋が2本入っている。上面には2本の筋があるが、磨り減ったような痕跡はない。下面は三角に凹み、両側面に三角形の切込みが6箇所残存している。1104は、12区第1面2建物から出土した床下換気口である。1105は、11区第2層から出土したコンクリート片である。流し込んだ時の斜格子状の網目が残る。1106～1110は、コンクリートに平瓦を埋め込んだ堅瓦壁である。

**スレート製品**（写真図版81）1101は、11区第3面2柵から出土した波板である。1102・1103は

瓦で、1102は袖が付いている。

**砲弾**（図139、写真図版83）144～152は砲弾で、147は九四式七糎榴弾、148は九一式九糎尖鋭弾、149・150は十四年式鋼性十糎銃榴弾かと思われるものである。砲弾の破片は、底部片が60点ほど、先端破片が110点ほど出土している。弾底部径は、3.3cm～15.3cmまでであるが、10cm台と6～7cm台が多い。10糎、7糎の砲弾に対応すると思われる。弾底部から弾帯までの距離は、2.0cm～7.9cmまでであるが、3.3cmと3.5cmが多い。先端部のネジ切り幅は、1.1cm～2.5cmまでであるが、1.9cmと2.0cmが多い。

153～157は、弾帯である。弾帯幅は、0.8cm～2.4cmまでであるが、1.0cmと2.2cm・2.3cmが多い。前者は裏面を細かく刻むものが多く、後者は表面に2条の沈線、裏面に連続しない1条の沈線を持つものが多い。155は、表裏とも何も施さないものである。

**薬莢**（図140、写真図版84）158～174は、薬莢である。底径のわかるものは90点ほど出土している。10区（A2棟）から多く出土し、第2面62土坑から一括で出土している。底径は5.3cm～14.0cmまであり、8.0cm・8.1cmが多い。九二式歩兵砲の薬莢と思われる。158・159は、底径1.2cmの小薬莢である。158～166・170・171・173・174は爆管が入ったままで、爆管の中心に円形の凹みあるものは（158～166・170・171・173・174）は使用済みの印とのことである（当センター駒井正明氏教示）。薬莢底部と爆管底部には刻印がされており、組合せは表5を参照願う。表5は、同一薬莢の薬莢底部刻印と爆管刻印の組合せを示している。薬莢底部の刻印は大正3年、昭和8～11・13・14年とあるが、昭和14年が58点と多く、爆管の刻印は昭和10年と13年があり、13年が29点と多い。刻印されていないものも5点ある。刻印が何を表すか今のところわかっているのは、「F（材質：Fは真鍮）、昭（年号—昭和）、十四（年）、2（月）、（大阪陸軍造兵廠のマーク）、ヤ（不明）、阪（大阪）」で製造所と製造年月日と材質を主にあらわしている。162・165は、刻印とは別に青色で文字と思われるものが書かれている。薬莢の中に薬包が残存しているものもある。165は緑色の絹のような布で、166は麻のような布である。

**薬包**（写真図版85）1112～1120は薬包の一部で、いずれも布製品である。1112～1119は、第1層から出土した薬莢の中に残存していたものである。1114に書かれている「九二式歩砲（乙）甲」の上には、大阪砲兵工廠のマークや「昭 十三 11」などが、同右側には「4」などの数字が見られた。これらから、出土例の多くが昭和13（1938）年11～12月に作られたものであることがわかる。また、薬莢内の薬包を上から順に摘み上げたところ、4点の薬包片が確認でき、下の2点1118・1119には「3」「4」の数字が確認できた。このことから、「九二式歩砲（乙）丁」の右側の数字は、薬包を薬莢内につめる際の順序を記していると考えられる。また、「九二式歩兵砲（乙）丁」の「（乙）」は陸軍歩兵学校が昭和13年に発行した『九二式歩兵砲取扱上ノ参考』によれば、九二式歩兵砲の薬莢の種類を記していることがわかった。また、同書からは「丁」などは薬包をつめる順番であることがわかり、「丁」と数字「3」も同書と一致する。

**砲弾関連品**（図140・141、写真図版85・86）176・177・179は、啄螺である。啄螺は、信管を載せるものである。178は、八八式瞬発信管かと思うものである。中には白いものや炭化したものが詰まっていて、針金が周囲を回っている。180は、（乙種）信管接続筒である。180には「C O c？」の刻印がある。182～184は、伝火薬筒室である。伝火薬筒室は炸薬と信管の中にあって、爆発を媒介する伝火薬を詰める筒である。182の上端には「D」の刻印がある。189は榴散弾の弾で、型で作

られた痕跡が残っている。191は、口径50mmの演習弾かと思うものである。演習弾は、訓練に用いられる射撃性能を有するものである。192は、榴散弾内部の弾子と炸薬を隔てるものである。3点出土している。193～195は、爆管である。爆管は、薬莖内の発射薬に点火する装置である。193は中が詰まっていて、底面に「六式」の刻印がある。194は上面に布らしきものが残存しており、底面に「民國卅四年 徳式十二号 39 ㊦」の刻印がある（同じようなものが平成15・16年度調査でも出土している）。195も上面に布が残存し、布を覆うように銅が覆っている。底面に「16」の刻印がある。198・199は、ベークライト製の弾頭螺塞である。弾頭螺塞は填薬後の砲弾に栓をする蓋である。175・181・185～188・190・196・197・200～202は、不明品である。181は、伝火薬筒室に啄螺がついているような形である。185は中に針金が入っており、突出した部分は十字に別の板状のもので覆われている。186は、上部に炭化物が付着している。187は、中が詰まっている。188は下部のやや太い部分に上方に1箇所、下方に2箇所孔があいている。190は、底部突出部に十字状（中央に孔）の覆いがある。196は側面に切込みが2箇所あり、底面に鉄線らしきものが埋め込まれている。197は、未貫通の小孔が2個ある。200は、底面にネジ回しの凹みがある。201は、下方が非鉄で上方が鉄で作られている。底面にねじ回しの凹みがあり、側面にネジ?が埋め込まれている。202は側面にネジが1本埋め込まれていて、底面に未貫通孔が2個ある。

**木製品（砲弾関連）**（図141・142、写真図版103）203～208は砲弾を保管するのに使われたと思われるものであるが名称が不明なので、托板と仮に呼んでおく〔陸軍技術本部「積載用爆薬箱九四式37耗砲外1点駄載用弾薬箱仮制定の件（大日記甲輯昭和12年）」アジア歴史資料センター〕の中に托板という文字が出てくる。すべてスギ材である。203～205は高さ約7cm、厚み約3～5cmの板を幅11cmの半円に1～2個割りぬいている。突出部には釘を1本ずつ打ち込んでいる。205は、両側面にも釘が残存している。これらを箱の中に数本並べて、砲弾または薬莖を横にして保管していたのではないかと推測する。206～208は長さ約50cm、幅約5cm（端は3.5cm）、厚み約3cmの板を5本並べ、その上に直角に幅約5cm（端は3.5cm）、厚み約1.5cmの板をはめ込み、下に長さ約50cm、幅約38cm、厚み約2cmの板を重ね、さらに下に長さ約38cm、幅10cm、厚み約1.5cmの板を重ねている（今は1枚だが、もう1枚片側にあったと思われる）。上面から見ると、径約8cmの穴が12個開いている。ここに砲弾または薬莖を立てて保管していたのではと推測する。穴の深さは3cmほどなので、どちらかと言えば薬莖の方の保管のほうが安定性はある。

**犬釘**（図143、写真図版80）209～226は、犬釘である。犬釘は、鉄道のレールに枕木を締結する専用の釘である。軽便鉄道が検出された調査区で出土しているが、12区から多く出土している。完形に近い犬釘は75点（表6参照）出土し、長さは62mm～100mmがあり、70mmが22点とやや多い（現在の9Kレール用の長さは80mm、10～15Kレール用は100mmである）。頭部の形で犬形と亀甲形があり、209・213～216が犬形で、210～212・217～226が亀甲形である。アメリカから鉄道部品の輸入が始まった明治30年代に、当時アメリカで広く使用されていた亀甲形犬釘が導入され、犬形犬釘にとって代わったらしい（第140集に記載）。209・211・217・218・221・222の犬釘には、コンクリート製枕木の孔に埋め込まれた木材が付着している。

**枕木**（図143～145、写真図版87～89・103）227は、木製の枕木である。スギ材で、長さ95.8cm、厚み約6cmで、犬釘が1本残存していた。かなり腐食してやせていると思われる。228～235・238～243は、コンクリート製枕木である。228・229・230・233が一般的な枕木で、長さ約105



cm、幅約 15 cm、厚み約 11 cmで、中央が少し細くなっている。コンクリートの中の構造は図 143 の模式図のように、上面に 2 本、下面に 3 本になるように鉄筋を折り曲げ、上下の鉄筋を囲むように横方向に 9 本の鉄筋をめぐるせていると推測する。レールをとめる孔が 4 箇所開いている。228・229 の裏面、233 の表面に製作時の痕跡と思われる若干の段が多数ある。231・232 は、10 区（A 1 棟）第 2 面 219 枕木群のコンクリート製枕木が 6 点集中して出土したうちの 2 点である。この 2 点の裏面に新聞が転写されていることが判明した。いずれも昭和 2（1927）年の大阪毎日新聞のもので、232 には 8 月 10 日（水）と 13 日（土）、231 には 10 月 29 日（土）と 30 日（日）の記事が裏写りしている。新聞が転写されていたのは、枕木の一面のみであり、枕木が新聞紙にくるまっていたのではない。枕木製作時かそれ以降に、新聞紙の上に枕木を置く過程があり、やや湿っていた枕木に新聞紙の文字が転写されたと推定できる。写真図版 88・89 に載せた新聞のコピーは奈良県立情報館のマイクロフィルムをコピーした。○の中の数字が同じものが新聞記事とそれが転写されたコンクリート製枕木の拡大写真である。転写されているので実際は文字が左右逆に反転しているが、わかりやすくするため現像段階で、反転させている。231・232 は、長さ約 96 cm、幅約 12.5 cm、厚み 11～12 cmの細長四角のもので、裏面は製作時の痕跡と思われる若干の段がある。234・235 は、14 区から出土した長さ約 137 cm・158 cm、幅約 15 cm、厚み約 11 cmの細長四角のものである。234 の裏面は長辺に直角の溝が 3 本あり 1 本に木が付着しており、製作時の痕跡と思われる若干の段もある。235 は、表面に細長い 11 個の孔があり、裏面に 1 本の溝と製作時の痕跡と思われる若干の段があり、コンクリートがとれて鉄筋がむき出しになっている所もある。234・235 は、後述する 12 区第 1・2 面 5 軌道と同じ分岐線の枕木と思われる。238～243 は、12 区第 1・2 面 5 軌道の枕木である。長さ約 126 cm～177 cm、幅約 15 cm、厚み約 11 cm、分岐線の枕木のため 238 から 243 に徐々に長くなっていっている。238・239 は、裏面に溝 2 本と、製作時の痕跡と思われる若干の段がある。240 は、表面に細長い 7 個の孔があり、木が埋まっている所と、モルタルで埋まっている所がある。裏面は溝が 1 本、凹凸状の突帯 1 本、帯状の突帯 1 本があり、製作時の痕跡と思われる若干の段がある。241 は、表面に細長い孔 5 個があり、中央はモルタルが塗りこんであり、木が埋まっている所もある。裏面は溝 2 本、凹凸状の突帯 1 本、突帯 1 本があり、製作時の痕跡と思われる若干の段がある。242 は、表面に細長い 9 個の孔があり、木が埋まっているものと、モルタルで塗り固めているものがある。裏面は、溝が 2 本あり、製作時に痕跡と思われる若干の段がある。243 は、表面に細長い 8 個の孔があり、木が埋まっているものとモルタルで塗り固めているものがある。裏面は溝が 2 本と製作時の痕跡と思われる若干の段がある。

レール（図 144、写真図版 86・87） 237 は、鉄製レールである。現長約 300 cmと長く、一部分のみ実測した。写真図版 87 で全体を示している。断面の頭部幅 3.2 cm、底部幅 6.2～6.3 cm、高さ 6.4～6.5 cmを測り、昭和 7 年（1932 年）の J E S 規格で決められた炭素鋼軽軌条の 9 kg レールの規格、頭部幅 32.1 mm、底部幅 63.5 mm、高さ 63.5 mm、重量 8.94 kg/mに近く、9 kg レールと思われる。9 kg は軽量のレールで、一般的な鉄道よりも規格が低く、安価に建設された軽便鉄道に使われたものである。継ぎ目板が一部残存し、幅約 3 cmでボルト 2 箇所止められている。236 は継ぎ目板で、現長 39.4 cm、幅 4.0 cmで、径 1.6×1.9 cmの孔が 4 箇所開いている。

表2 煉瓦集計表 大窯:大阪窯業 岸練:岸和田煉瓦 日本:日本煉瓦 堺:堺煉瓦

個数	刻印									線状凹み			成形			合計419
	無	有		会社印				不明刻印	刻印有不明	有	無	不明	手抜	機械	不明	
		片面	両面	大窯	岸練	日本	堺									
42	127(内59?)	219(内5?)	179	137	4	1	4	21	31	221(内23?)	166(内5?)	32	352(内4?)	65(内21?)	2	

表3 木ネジ集計表

長さ	25mm鉄	30mm鉄	35mm鉄	38mm鉄	40mm鉄	42mm銅	44mm銅	45mm銅	45mm鉄	48mm鉄	49mm鉄	50mm銅	50mm鉄	51mm銅	52mm銅	53mm鉄	55mm鉄	58mm鉄	60mm鉄	65mm銅	70mm鉄	78mm鉄	80mm鉄	81mm鉄	151mm鉄	合計
個数	3	7	2	7	17	1	1	2	12	0	1	21	70	1	32	4	1	1	4	1	1	1	12	1	1	204

\* 太枠は木ネジJES規格の長さ

表4 釘集計表

長さ	20mm	25mm非鉄	25mm	30mm	35mm	38mm	40mm	42mm	44mm	45mm	47mm	50mm	51mm	51.5mm銅	51.5mm	52mm	54mm	55mm	57mm	58mm	60mm	62mm	63mm	64mm	65mm
個数	4	1	9	53	7	1	73	16	1	69	3	334	14	3	3	11	1	107	1	34	116	2	7	16	164

長さ	66mm	68mm	70mm	75mm	76mm	77mm	80mm	82mm	83mm	85mm	90mm	92mm	95mm	100mm	103mm	105mm	107mm	110mm	115mm	120mm	123mm	125mm	126mm	128mm	130mm
個数	13	7	49	72	5	1	55	1	1	27	18	2	18	47	4	78	3	9	3	14	1	18	2	2	20

長さ	132mm	137mm	140mm	145mm	150mm	155mm	200mm	220mm	合計
個数	1	1	7	1	22	1	1	1	1555

\* 太枠は釘のJIS規格の長さ

表5 葉莢・爆管刻印一覧

葉莢底部刻印	爆管刻印	葉莢底部刻印	爆管刻印
佐? F大三五久?阪	昭十三11?阪	F 昭十四1?ヤ阪	昭十三12?阪
短F 昭八4?テ阪	不明	F 昭十四1?阪	昭十三12?阪
??賀久?四阪	昭十三11 阪		昭十三12
F 昭九4?テ阪	昭十三11?阪	昭十四1?イ阪	十三12?阪
F 昭九5?テ	昭十三11?阪	昭十四1 阪	昭十三12?阪
F 昭九6?テ阪	不明	昭十四1 Y	不明
昭九8?テ阪	不明	昭十四?1?阪	十三?12 阪
F 昭九8 阪	不明	F 昭十四1?	不明
F 昭十三3?Yテ阪	不明	F 昭十四2?Y	昭十三11
F 昭十七?テ阪	昭十三11?阪		T昭十三12
F 昭十一1?Yテ阪	不明	F 昭十四2?Y阪	不明
F 十一2?Y阪	昭十10 阪	F 昭十四2 Y阪	不明
F 昭十三1?Y阪	昭十三10?阪二	F 昭十四2?ヤ阪	昭十三3?阪
F 昭十三2? Y	昭十三12?	F 昭十四2?ヤ阪	不明
F 昭十三6?阪	不明	F 昭?十四2?Y	昭十三12
F 昭十三11?Y阪	昭十三10?阪	F 昭十四 ?Y	昭十四7?Y阪
	昭十三10?阪	F 昭十四口?ヤ阪	昭十三12?阪
F 昭十三12?ヤ阪	昭十三12 阪	F 昭十四口?Y	不明
	昭十三	F 昭十四 ?Y阪	昭十三12?阪(青文字64?)
昭十三	不明		昭十三
F 昭 三12?ヤ阪	昭十三11?ヤ阪ヨ?(青文字7??)	F 昭十四	十三12?阪
	昭十三12?阪	F 昭十四 Y阪	昭十三12?阪
F 昭十四1?Y阪	昭十三12?阪二	昭十四 ?阪	不明
	昭十三12 T阪		
	昭十三12?阪(青文字6A?)		

表6 犬釘集計表

長さ	62mm	64mm	65mm	66mm	70mm	71mm	73mm	75mm	76mm	77mm	78mm	79mm	80mm	82mm	84mm	85mm	86mm	87mm	89mm	90mm	100mm	合計
個数	3	1	3	1	22	1	2	7	1	1	2	1	8	2	1	12	1	2	1	2	1	75

\* 太枠は現在の9K用と10~15K用の法量である。

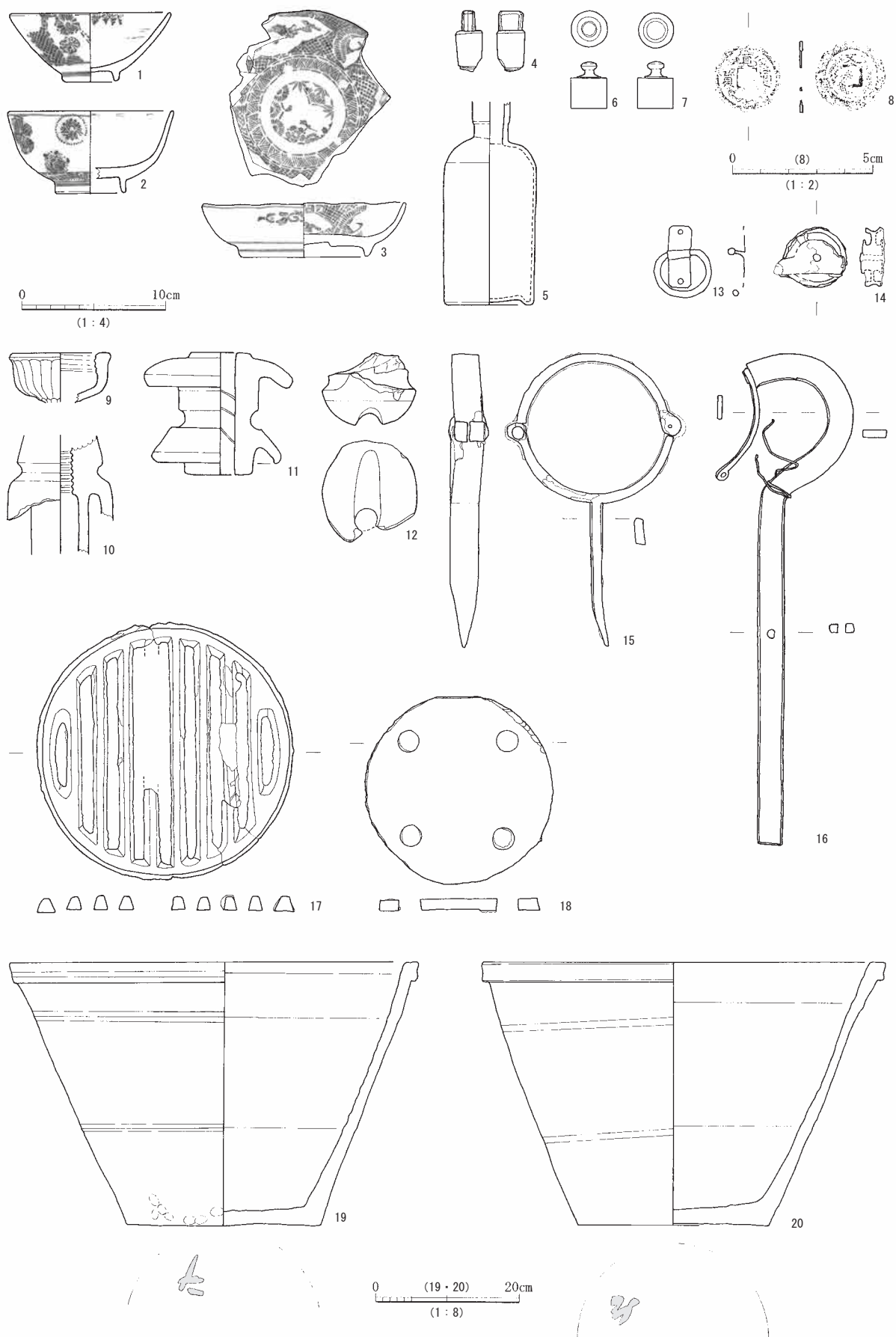


図 128 近代以降遺物 陶磁器・ガラス製品・金属製品 (1)

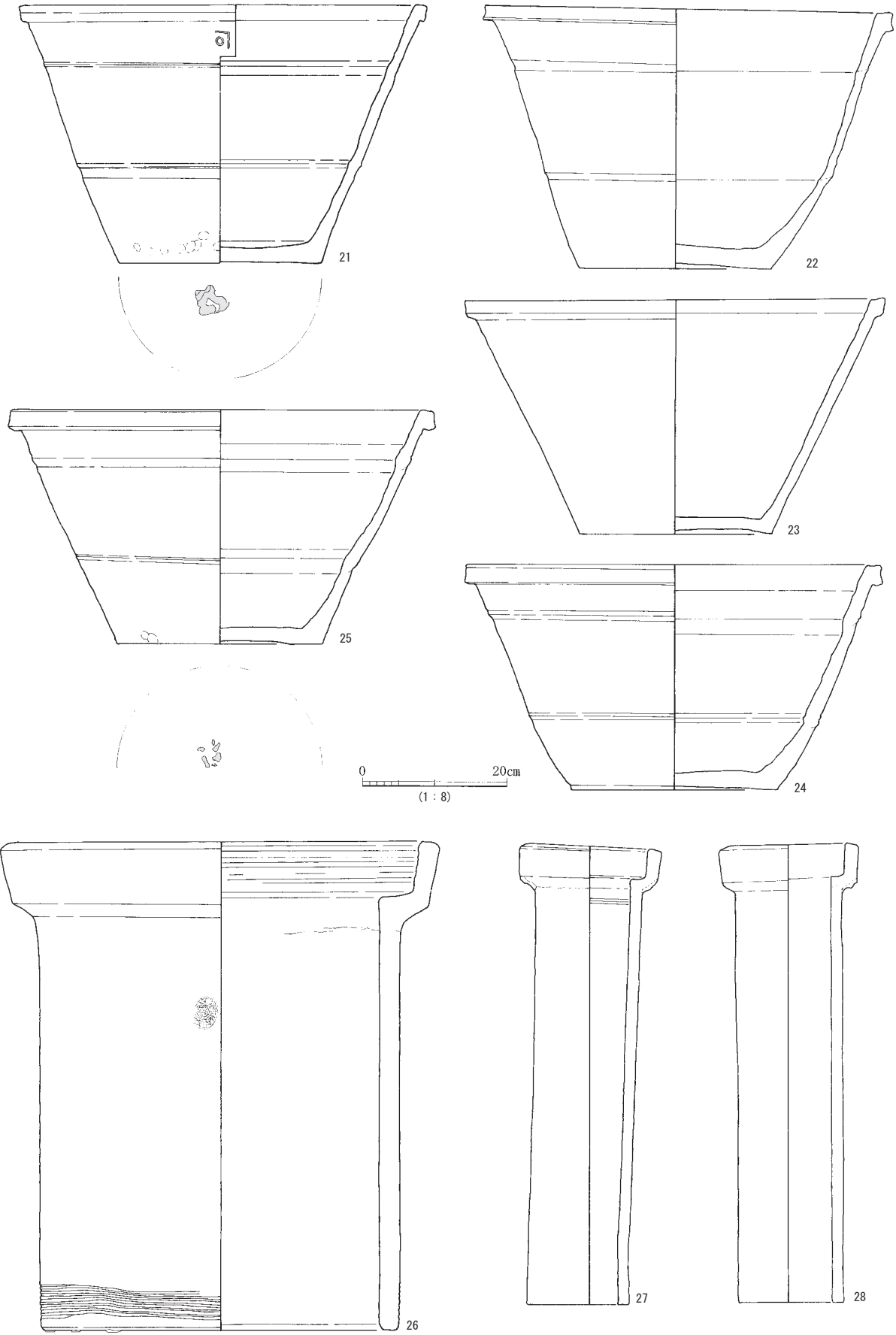


图 129 近代以降遺物 陶器 (1)

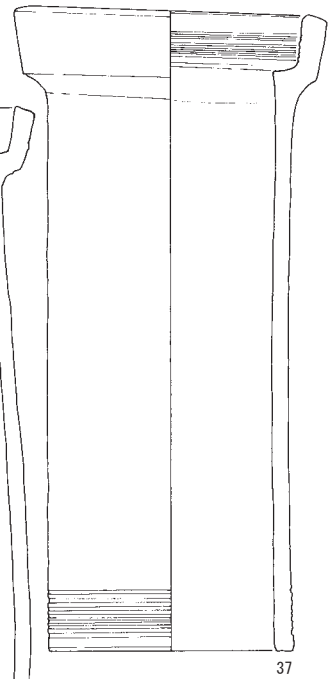
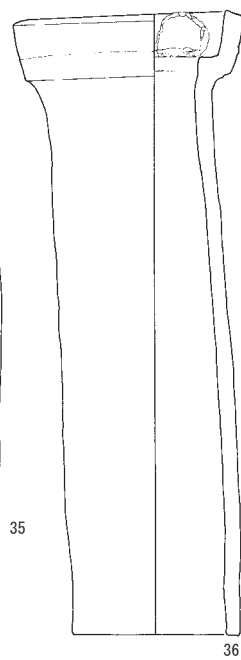
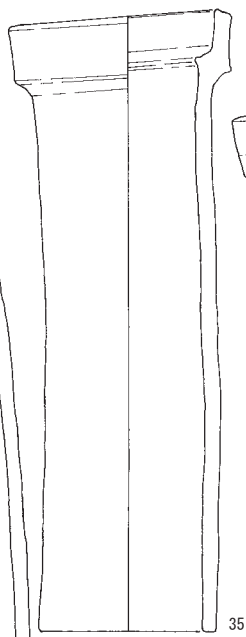
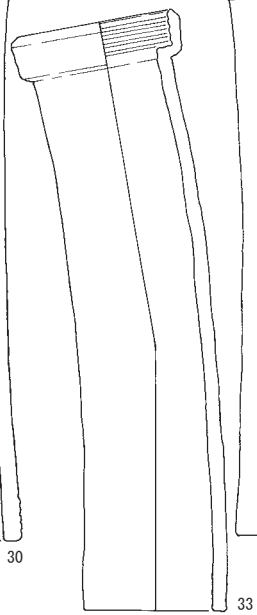
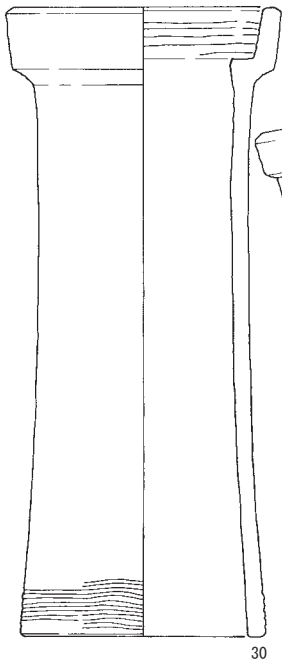
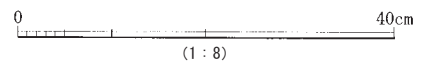
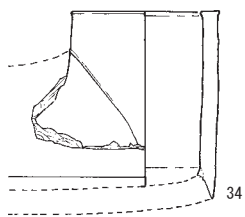
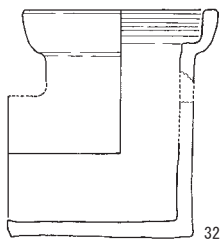
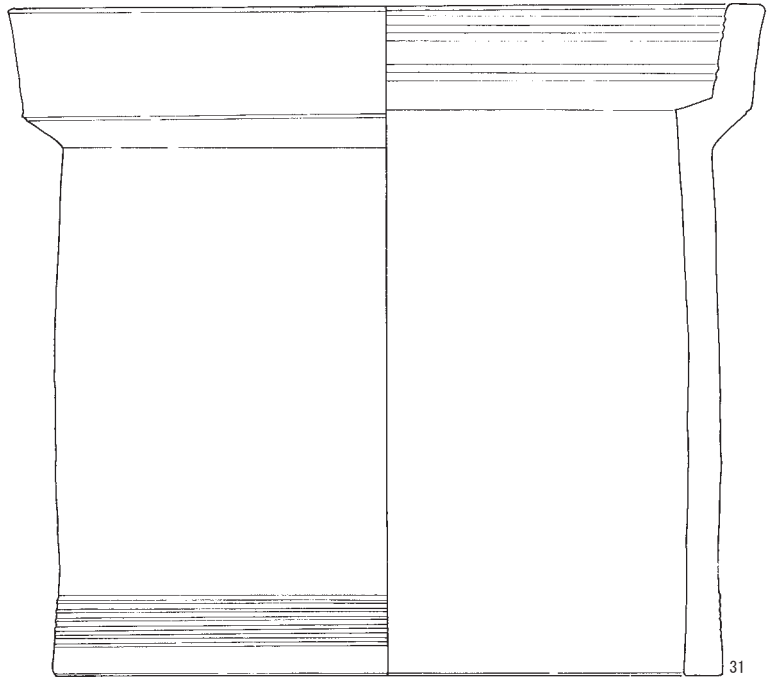
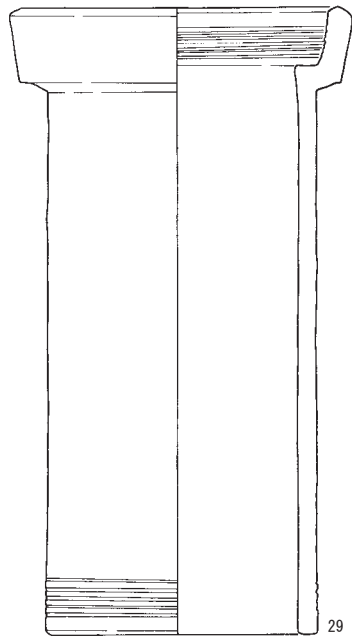
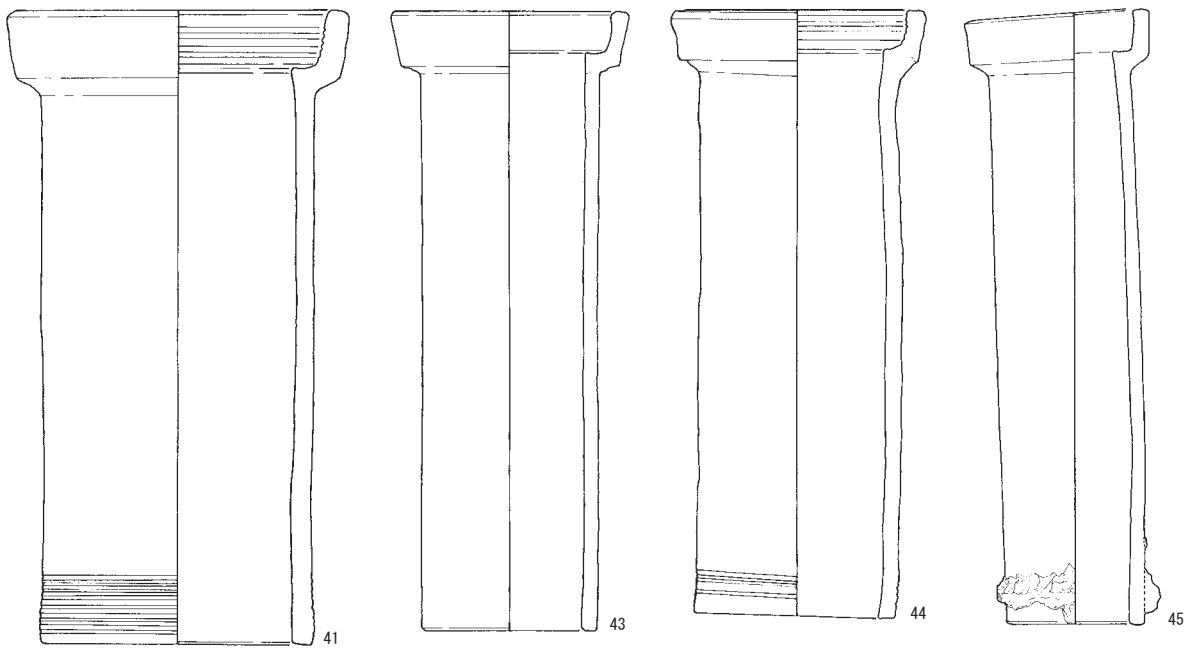
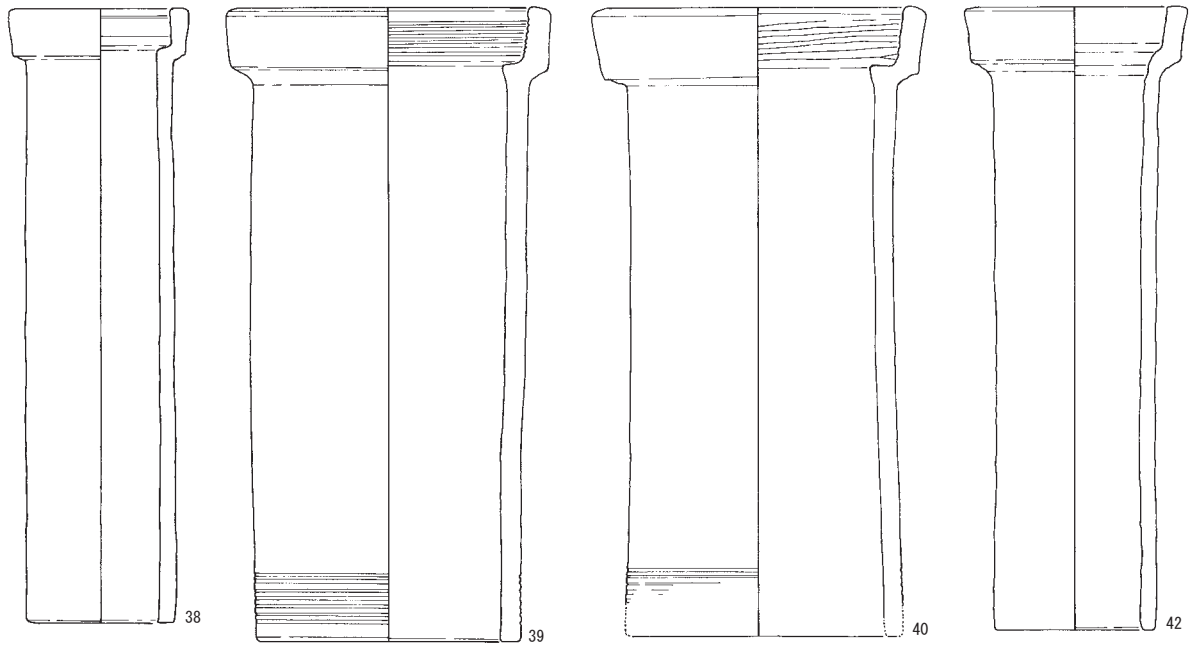


图 130 近代以降遺物 陶器 (2)



0 (38 ~ 45) 20cm  
(1 : 8)

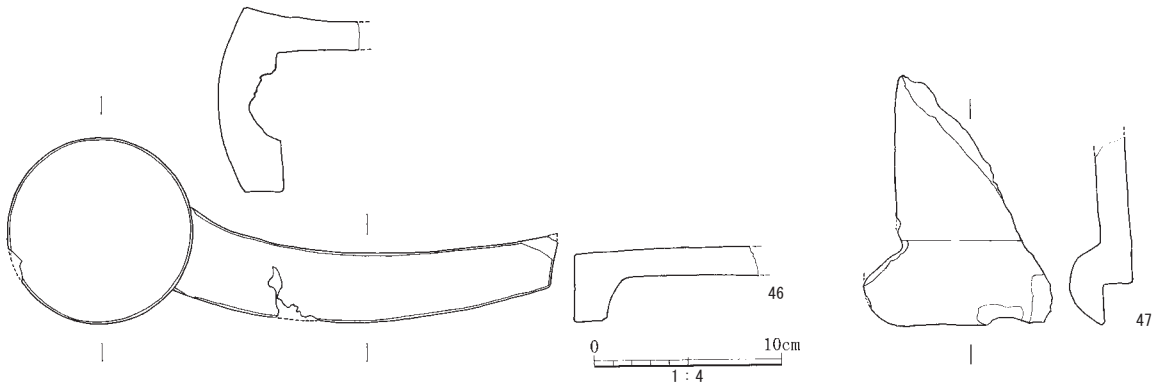


图 131 近代以降遺物 陶器 (3) · 瓦 (1)

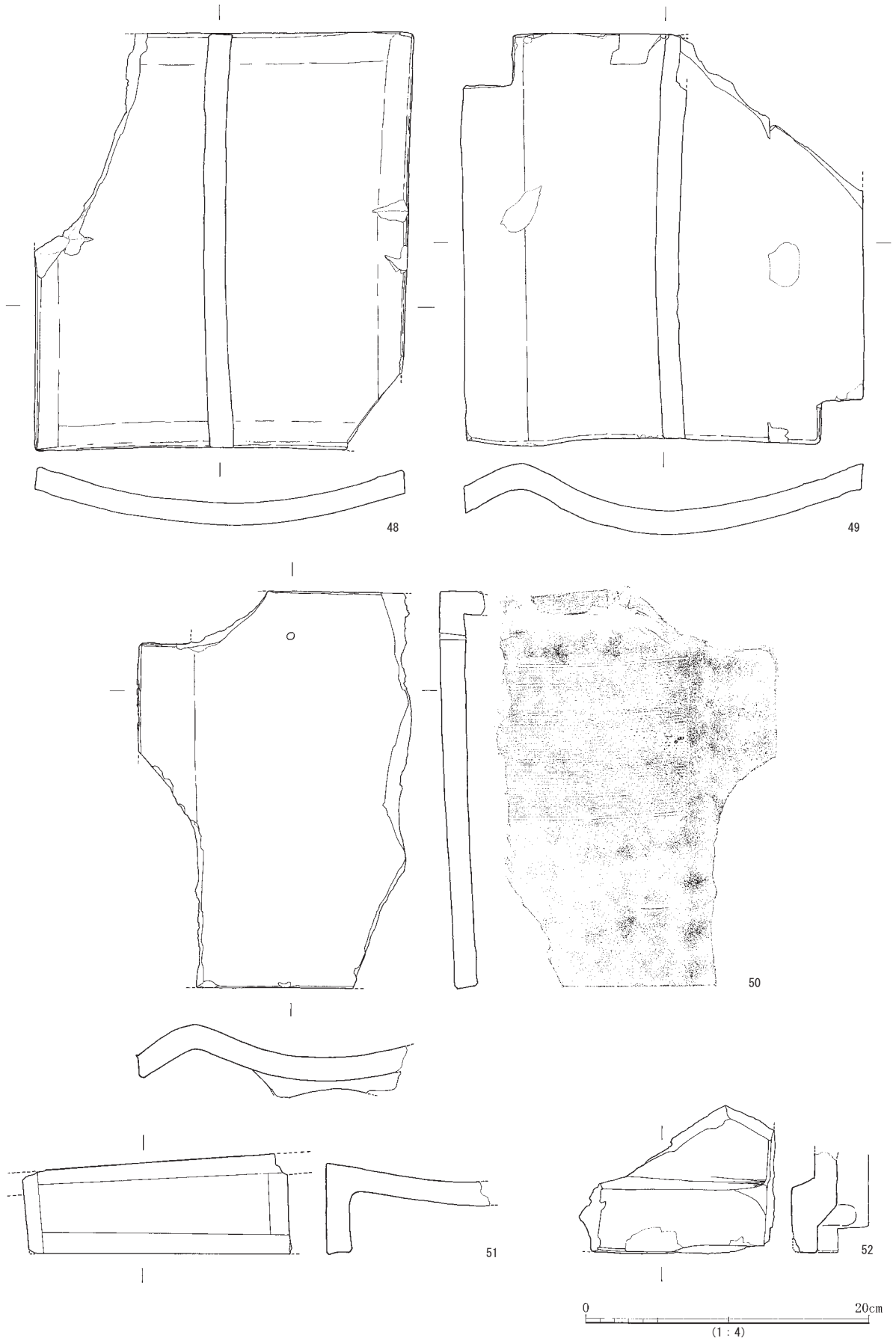


图 132 近代以降遺物 瓦 (2)

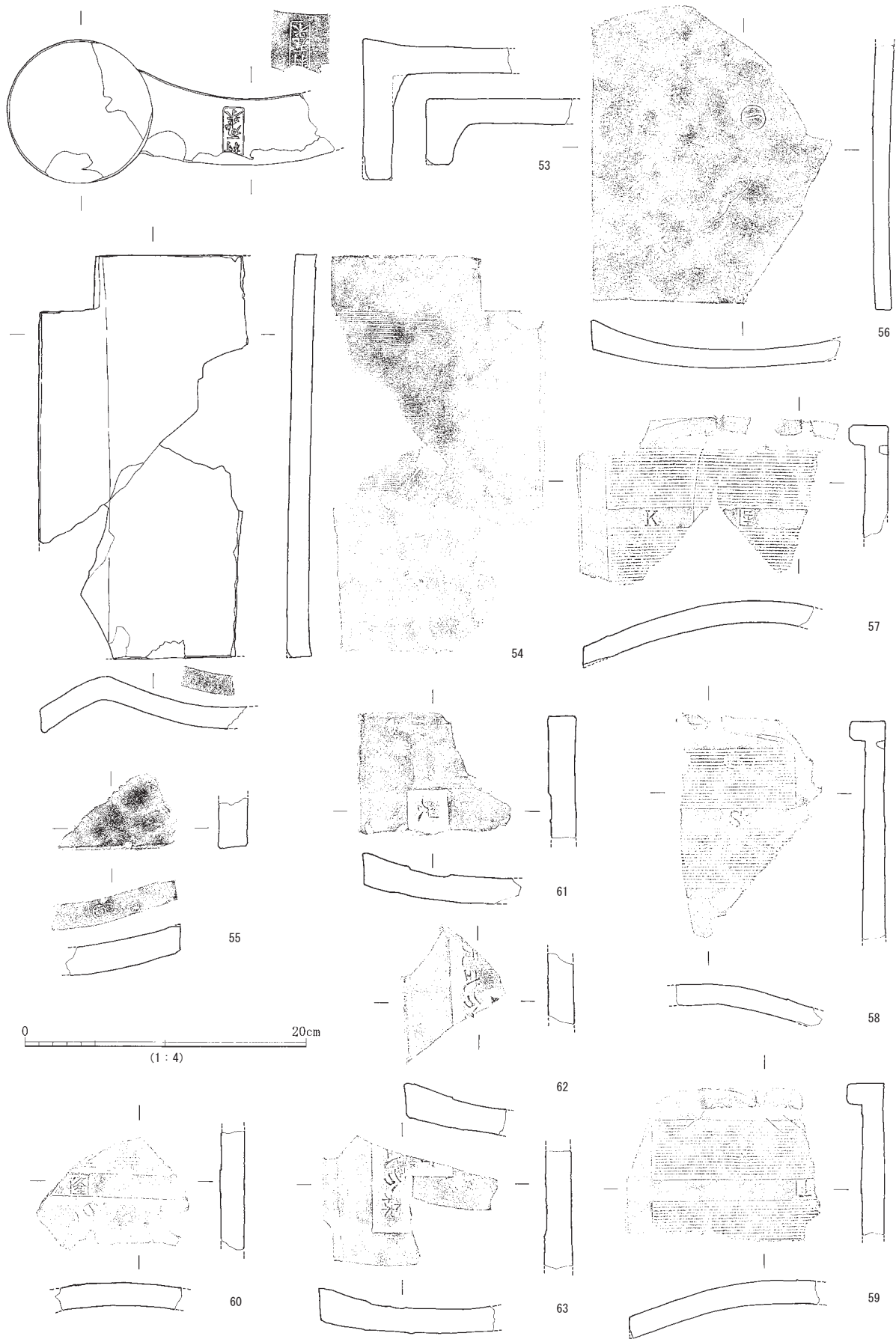


图 133 近代以降遺物 瓦 (3)



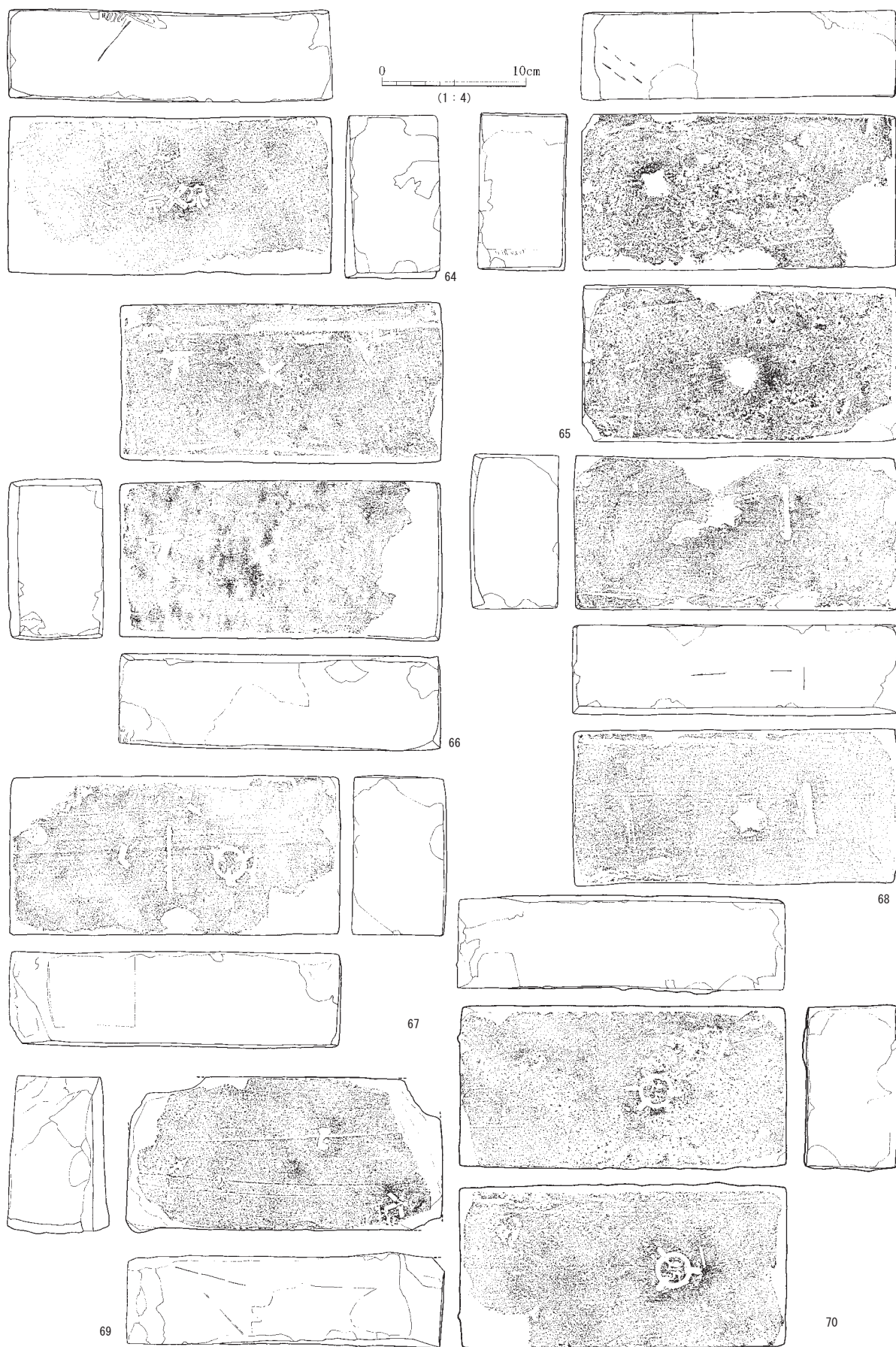


图 134 近代以降遺物 煉瓦 (1)

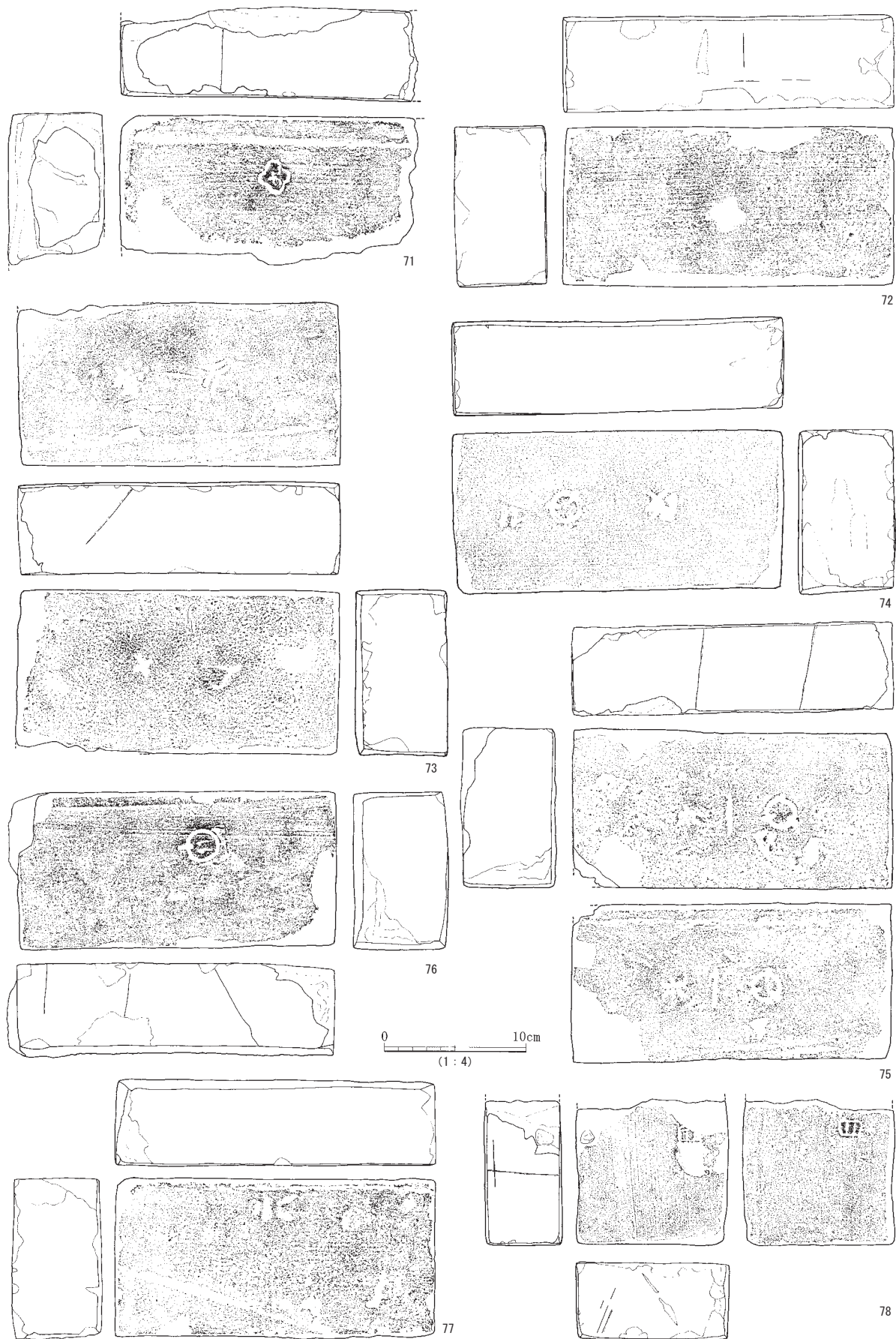


图 135 近代以降遺物 煉瓦 (2)

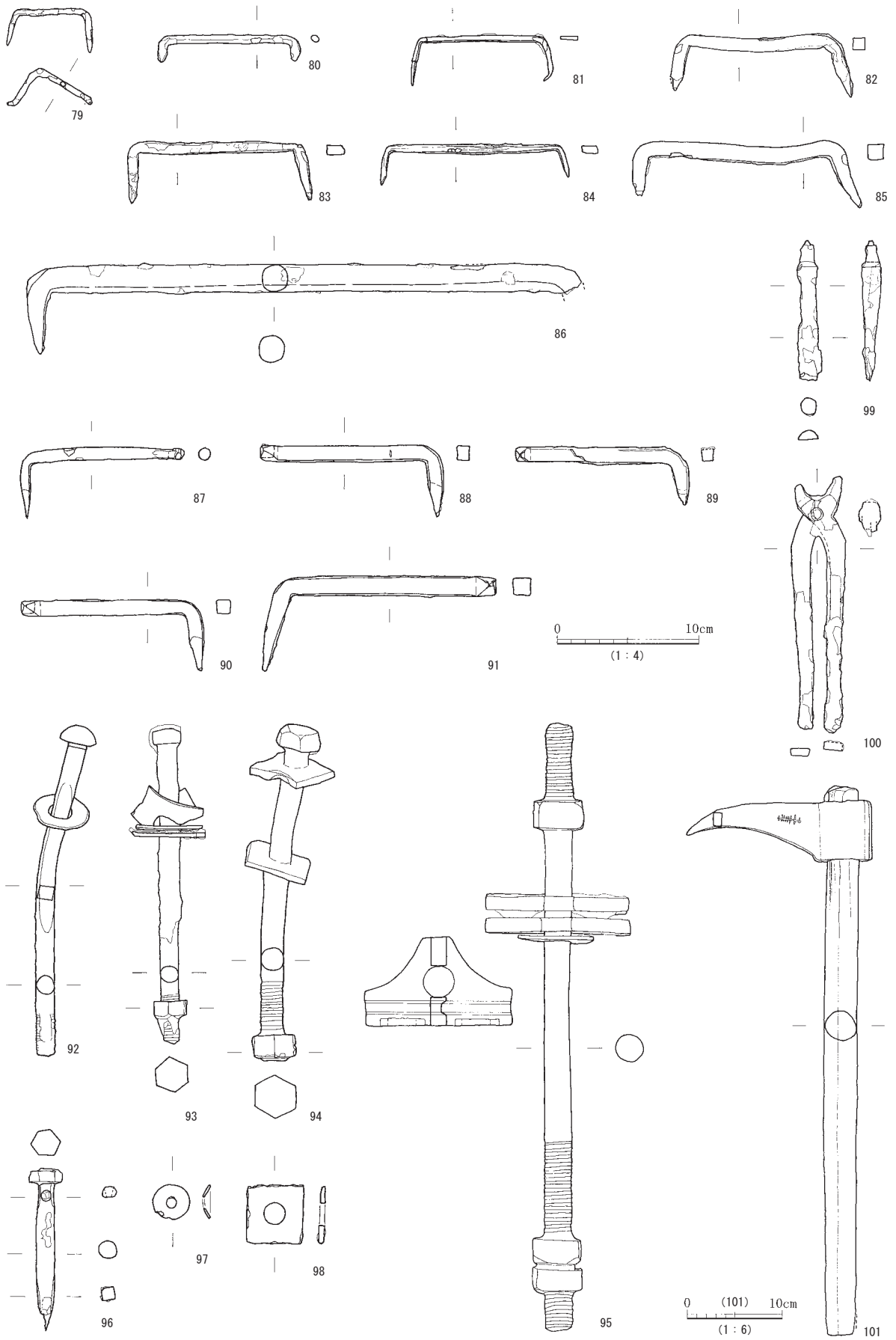


图 136 近代以降遺物 金属製品 (2)

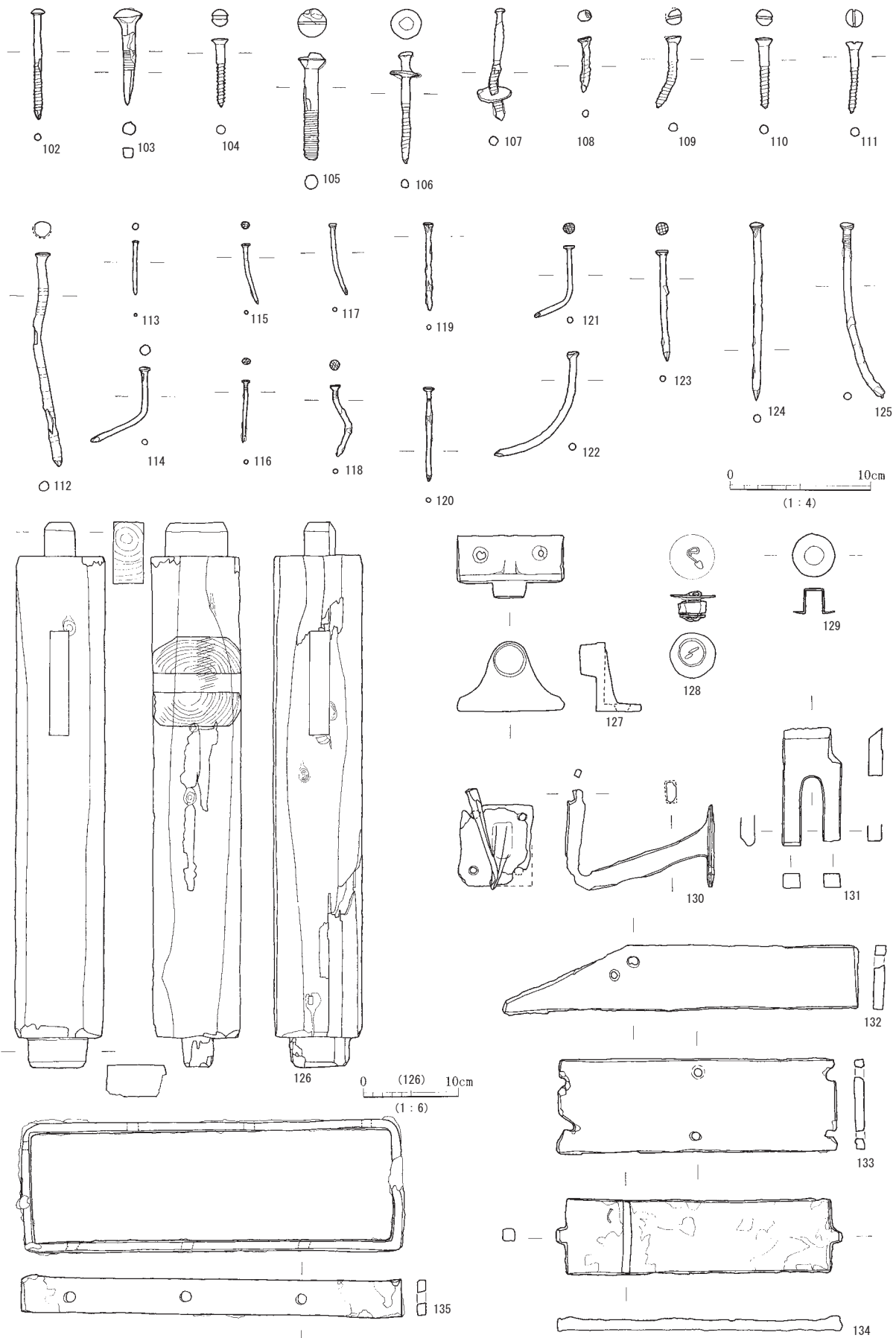


图 137 近代以降遺物 木製品 (1)・金属製品 (3)

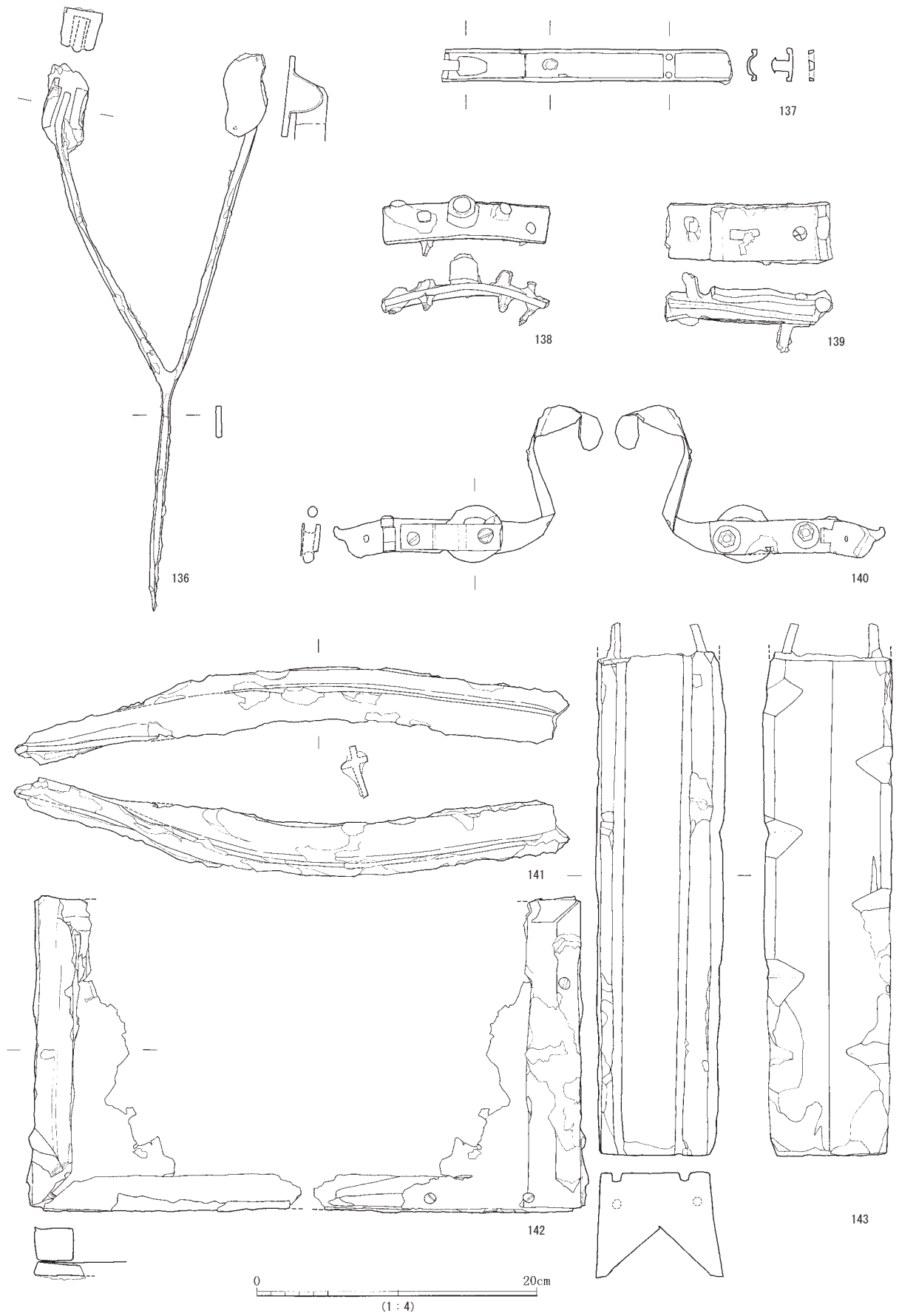


図 138 近代以降遺物 金属製品（4）・コンクリート製品（1）

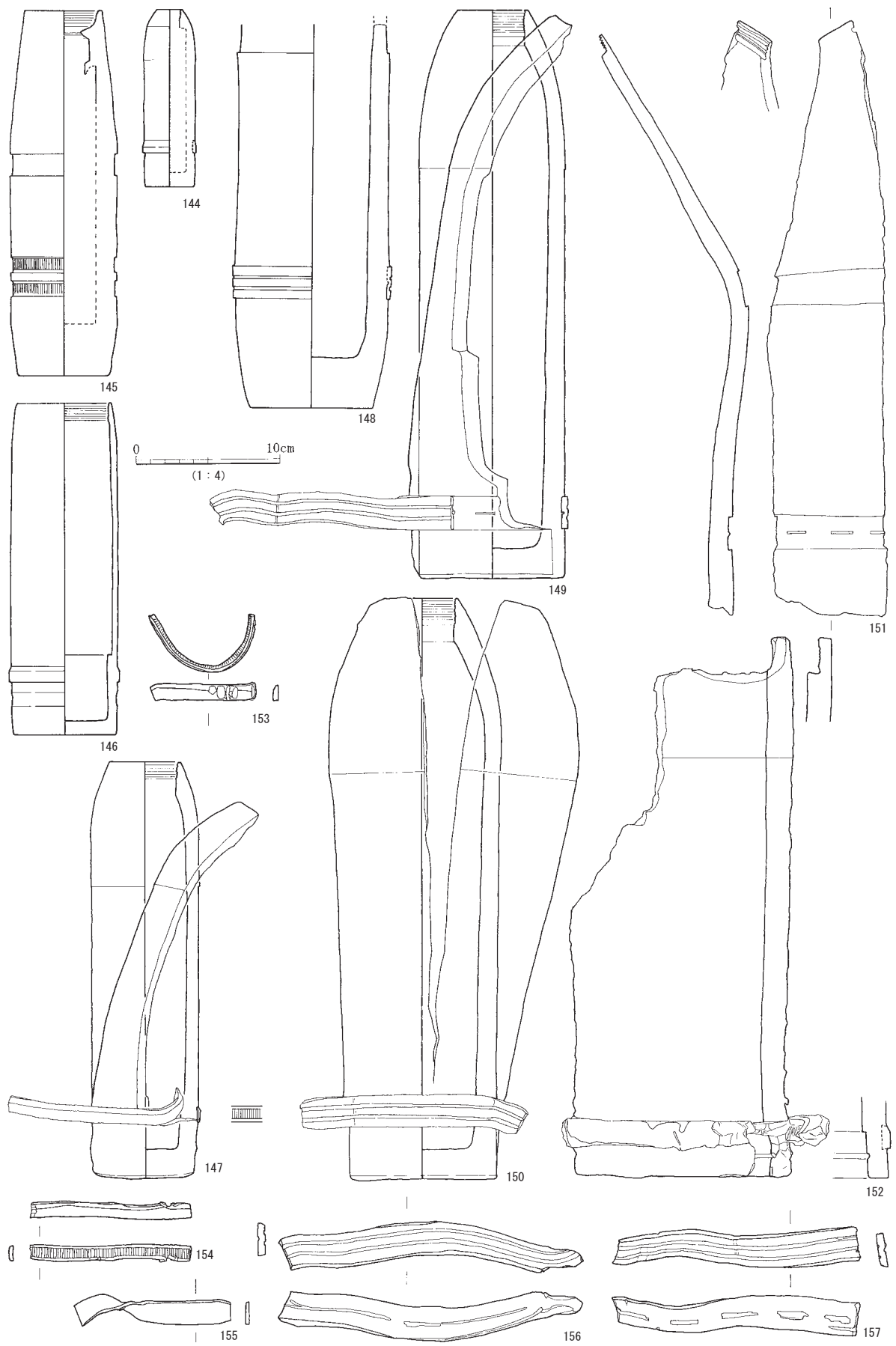


图 139 近代以降遺物 金属製品 (5)

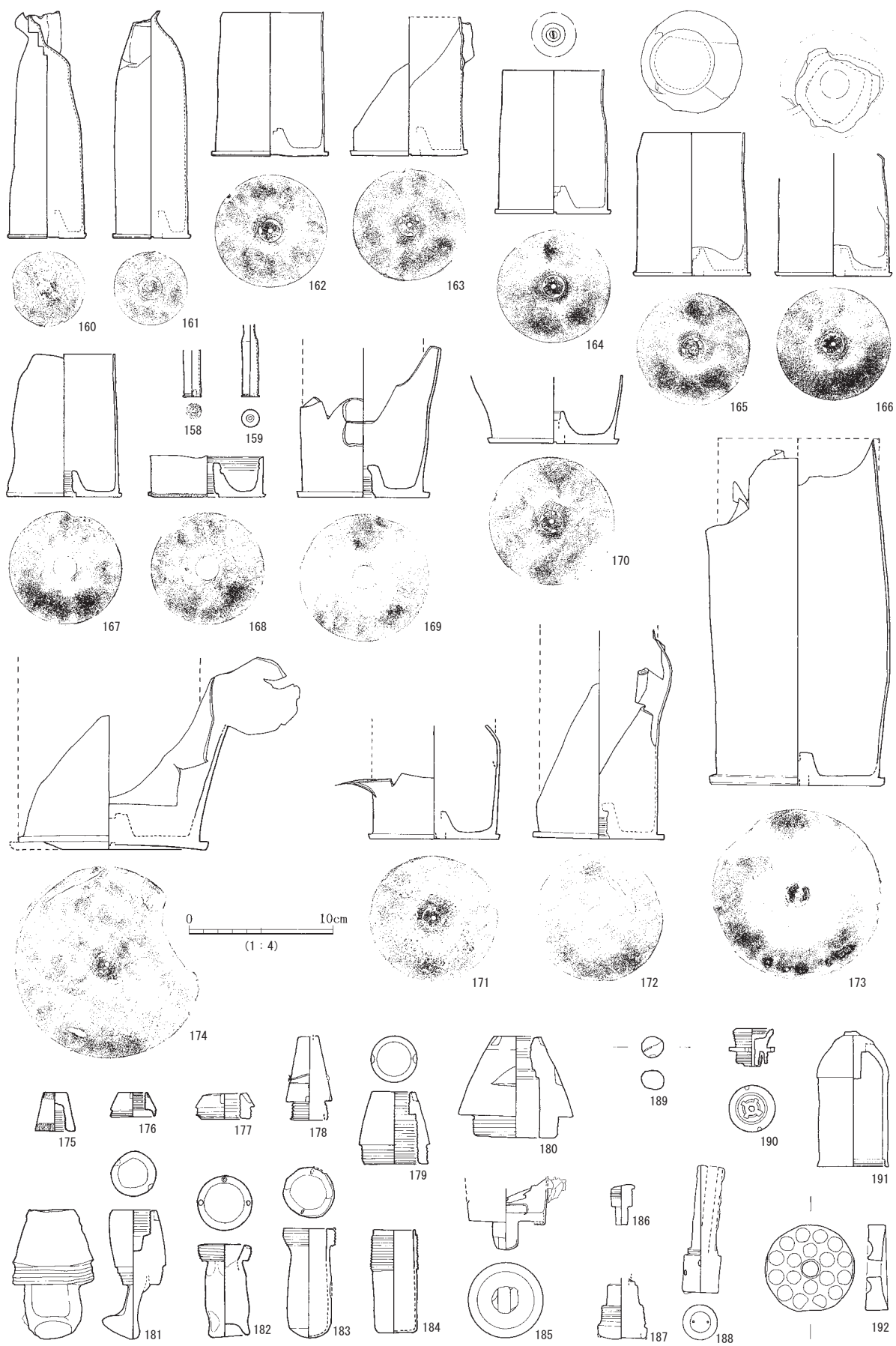


图 140 近代以降遺物 金属製品 (6)

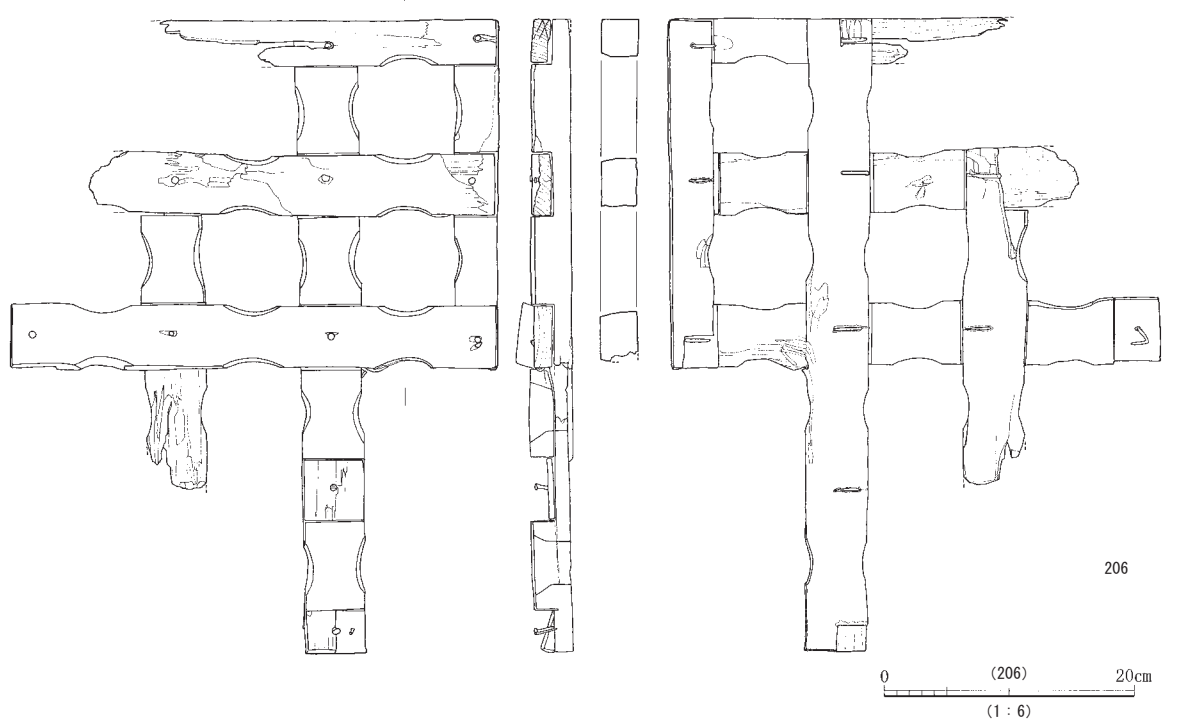
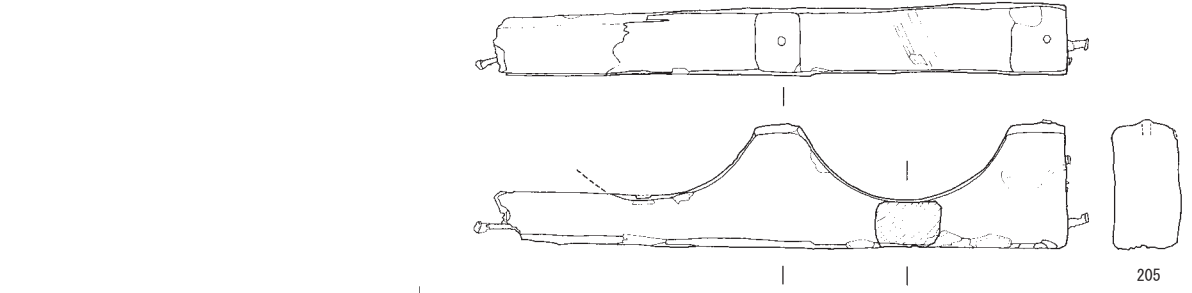
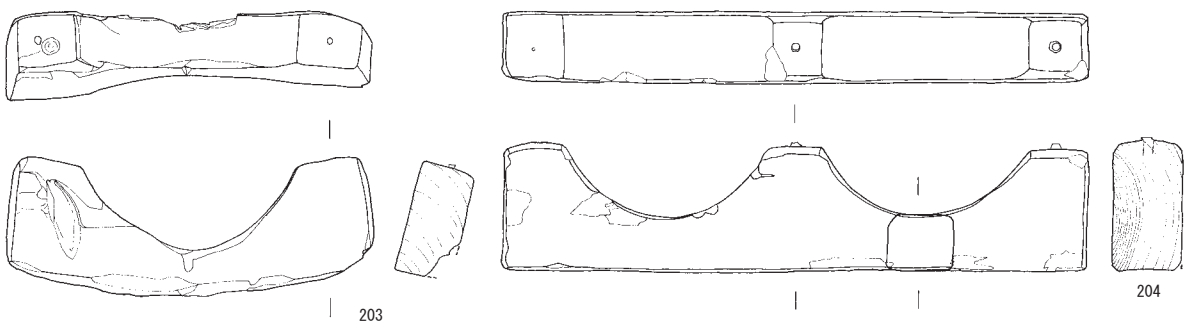
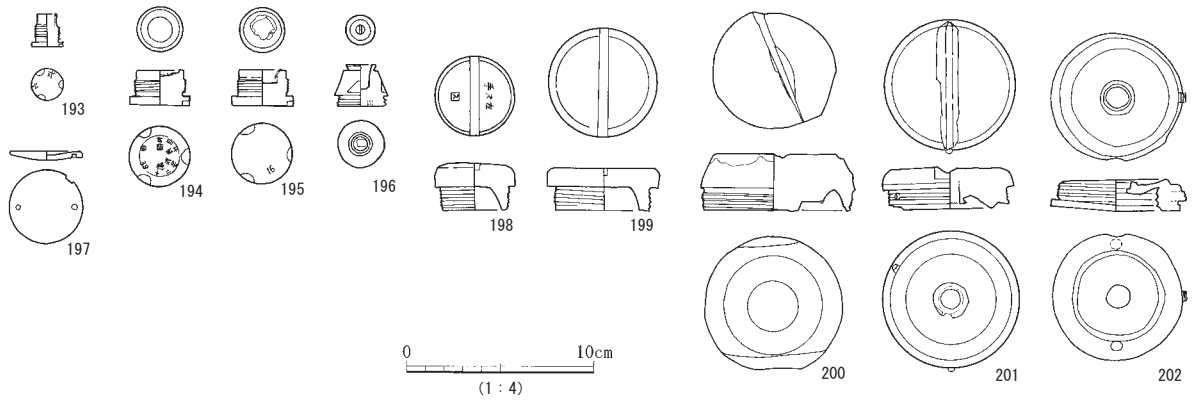


図 141 近代以降遺物 木製品 (2)・金属製品 (7)・ベークライト製品



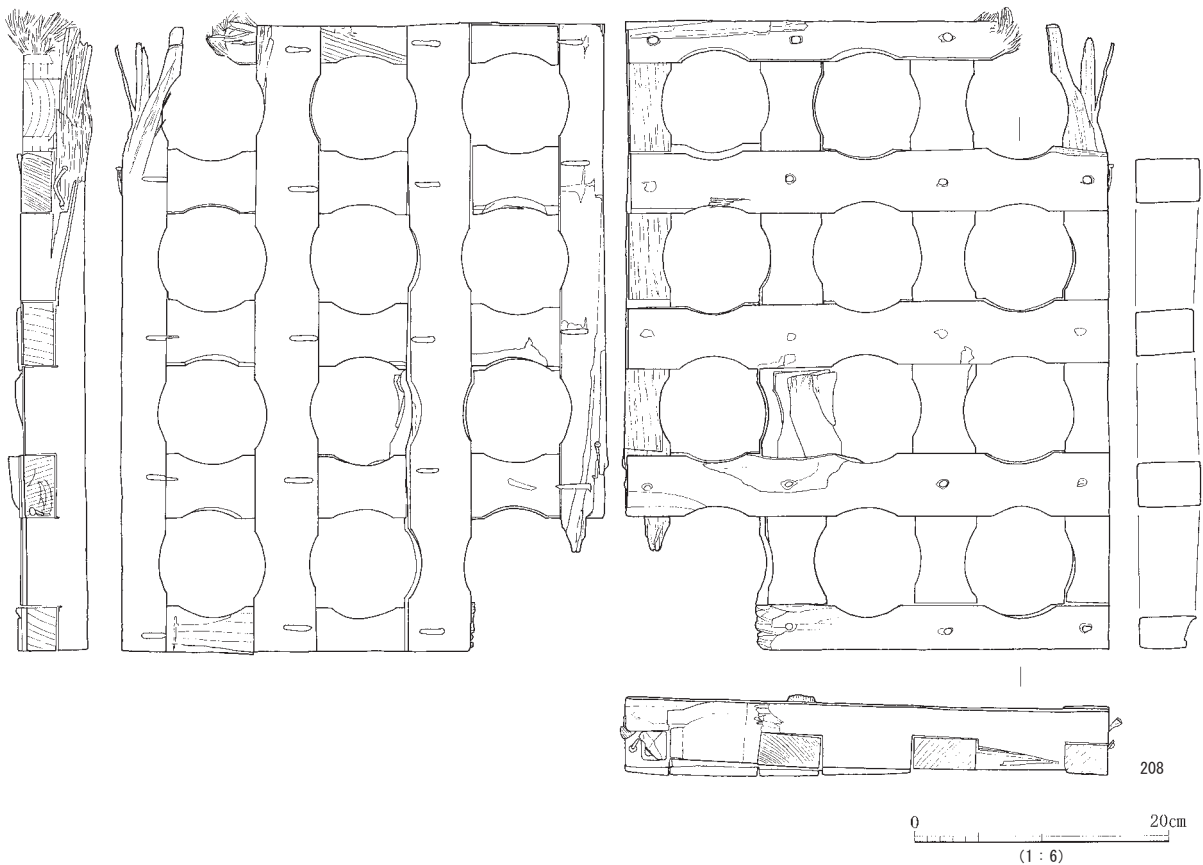
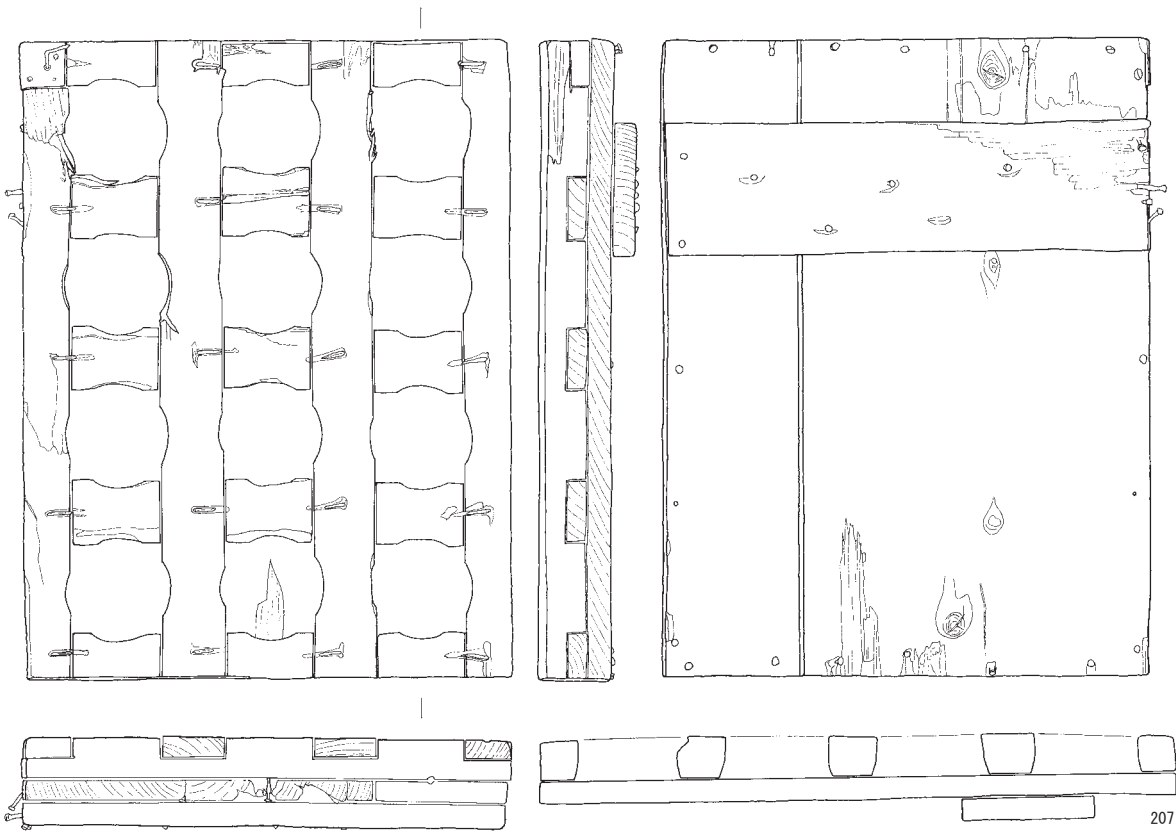


图 142 近代以降遺物 木製品 (3)

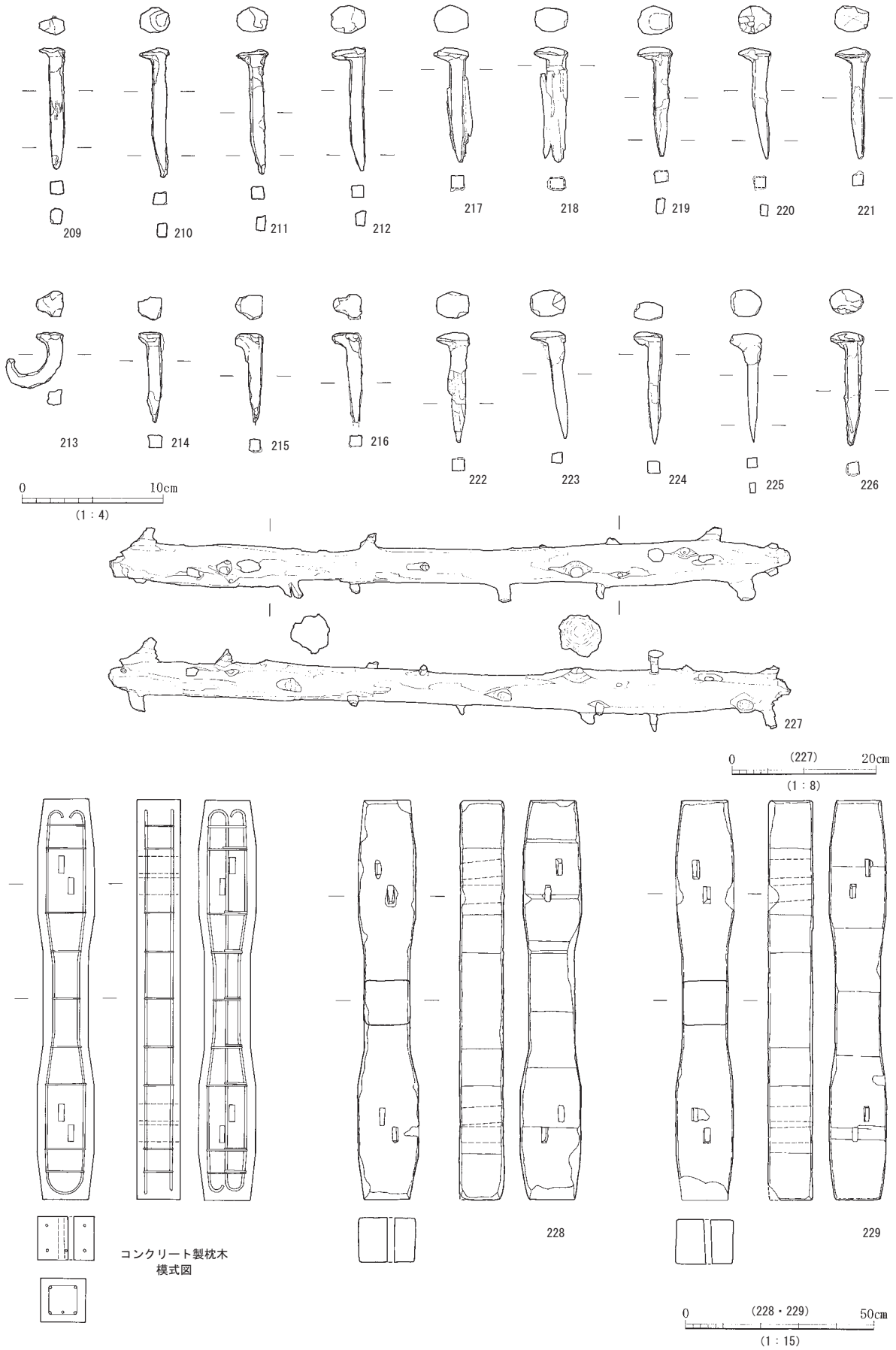


図 143 近代以降遺物 木製品 (4)・金属製品 (8)・コンクリート製品 (2)

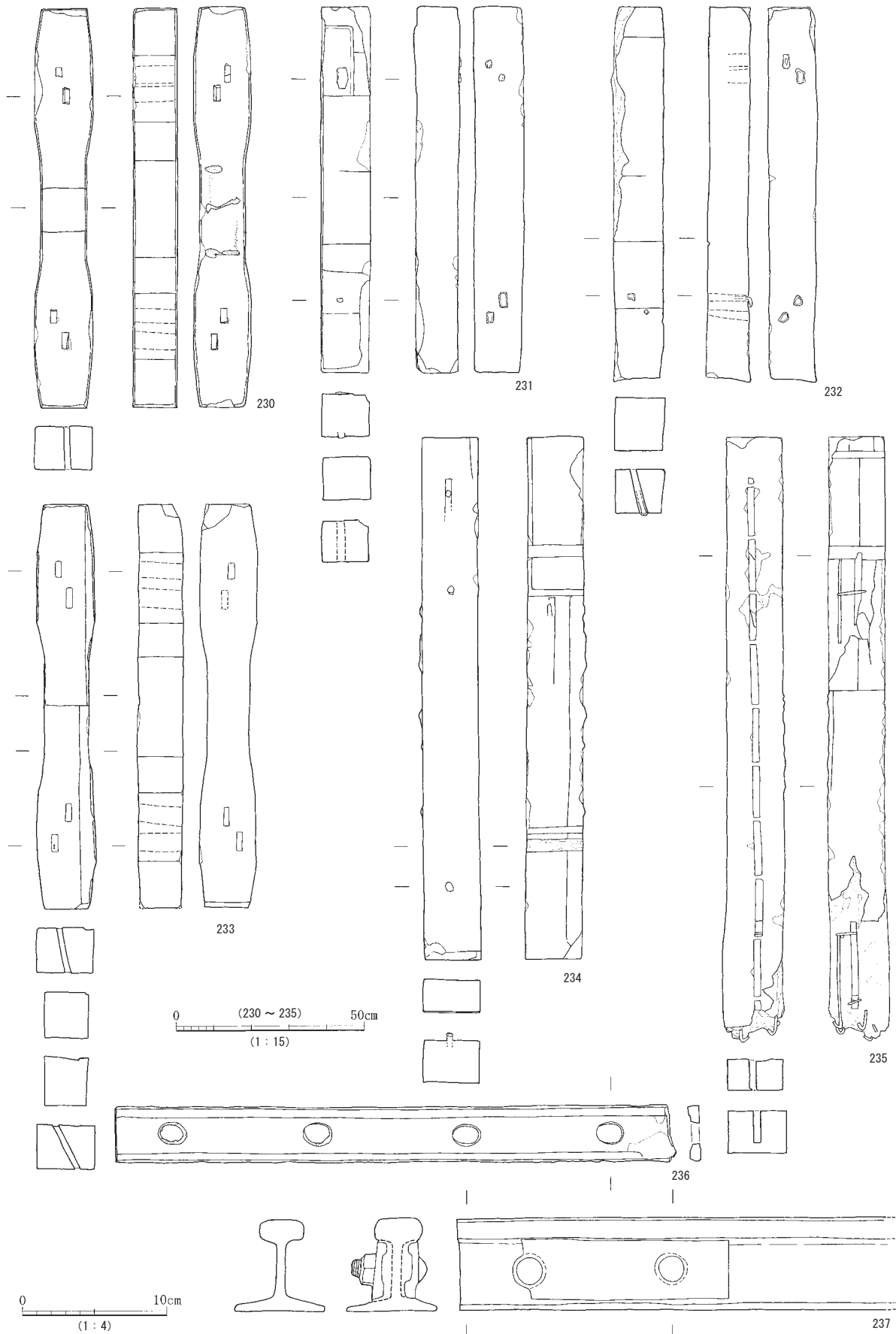


図 144 近代以降遺物 金属製品 (9)・コンクリート製品 (3)

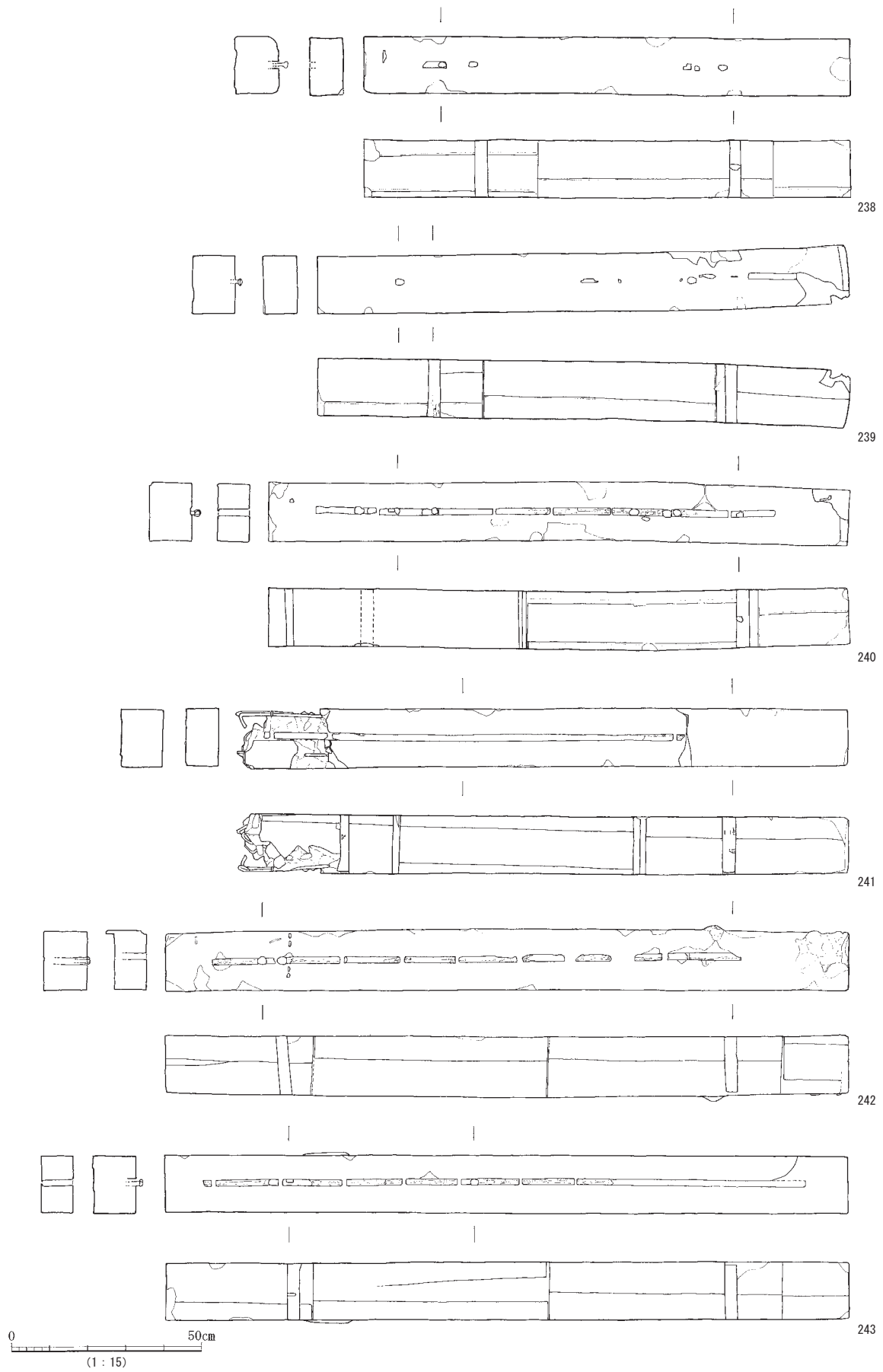


図 145 近代以降遺物 コンクリート製品（４）

## 第2節 中世・古代遺物 (図146～184、写真図版90～102・104～108)

中世・古代の遺物の記述は、近代以降と違って各調査区毎に、上の層から記述していきたい。各遺物の詳細は、巻末の掲載遺物観察表を参照願う。

5区(図146、写真図版90) 244～246は、第2層、第2層下部で出土した須恵器である。

247～255は、第3面竪穴建物1から出土した土師器杯A・皿A・甕、須恵器杯皿・皿A?・鉢・平瓶で、他に炉壁?と思われる細片もある。8世紀前半の遺物が多いが、250の須恵器杯蓋が東壁際溝出土で、6世紀後半と古く、254・255の土師器皿A・甕は埋土出土だが、8世紀後半と新しい。遺構の説明に準じ、8世紀の遺物は、重複する掘立柱建物の遺物と考え、竪穴建物1の時期は6世紀後半と考える。252は土師器鉢Cの模倣かと思われる、高台の胎土が体部の胎土と違う。

256～258は、第3面竪穴建物2から出土した土師器甕、須恵器杯蓋で、時期は6世紀後半である。他に炉壁?と思われるものが多数出土している。256はカマドの支脚に転用されていたようだ。257の須恵器杯蓋の外面に溶着がある。

259～262は、第3面掘立柱建物2から出土した土師器杯、須恵器杯A・杯Bで、時期は8世紀末～9世紀初頭のものが多い。

263・264・(265～267)・268・269〔()内は同じ遺構出土の遺物で、次に示す遺構に対応している〕は、第3面14・31・32・119・134ピットから出土した須恵器高杯・杯、土師器甕?、須恵器杯蓋・杯・高杯である。32ピットの266・267の須恵器杯蓋・杯と119ピットの268の須恵器杯蓋の時期は6世紀後半で、他の遺物に比べ古い。263・269の須恵器高杯も時期は、7世紀である。264は、8世紀中頃である。

270・(271～273)は、第3面17・20土坑から出土した7～8世紀中頃の土師器甕・杯C、須恵器杯蓋・杯B蓋である。(274～277)・(278・279)は、第3面21・44溝から出土した8世紀中頃の須恵器杯・杯B・杯B蓋である。

8区(図147～149、写真図版90・91・98・102・104) 280は、第2層以下から出土した均整唐草文軒平瓦で、長岡京内の鞆岡廃寺から出土するT-60型式と同範のものである(平成15・16年度調査でも出土)。

281～287は、第3層から出土したものである。第3層からは、中世の青磁碗、陶器碗・播鉢、瓦器碗、古代(9～10世紀)の土師器羽釜、黒色土器A類、緑釉陶器水注、灰釉陶器碗、須恵器、古代(7～8世紀)の土師器、須恵器、瓦等が多数出土している。283は緑釉陶器の水注の注口部で、9世紀のものである。284・285は、9世紀前半の灰釉陶器碗である。286は、平城宮6133A型式を祖型とする単弁10弁軒丸瓦である(百済寺跡からも出土している)。287は、鉾滓である。

288～296は、第4層から出土したものである。第4層からは、上層からの混入と思う近世の陶磁器、中世の瓦器碗、古代(9～10世紀)の緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器、古代(7～8世紀)の土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦等が多数出土している。293は緑釉(二彩)陶器かと思う皿で、濃緑と薄緑で施釉されている。294は、9世紀中頃と思われる灰釉陶器段皿である。295は、平城宮6291B型式を祖型とする複弁8弁軒丸瓦である(百済寺跡からも出土している)。296は、均整唐草文軒平瓦で百済寺跡から出土したものと同一吉志部瓦窯産かと思うものである。

297～315は、第5層から出土したものである。第5層からは、古代(7～9世紀)の土師器杯A・

杯B・甕、須恵器杯蓋・杯・杯A・杯B・杯B蓋・高杯・鉢・提瓶・円面硯・壺・甕、緑釉陶器皿？、灰釉陶器皿・長頸壺、土馬、瓦、鉄製品等が多量に出土している。弥生土器底部も1点出土している。304は、円面硯で陸の部分は使い込んで磨耗している。309は、9世紀の緑釉陶器皿かと思うものである。310・311は、9世紀の灰釉陶器皿・長頸壺である。312は土製品の土馬で、上面の2箇所突出で鞍を表現している。前足・後足が接合面から欠損している。314は不明鉄製品で、315は鋳滓と思うものである。

316は、第6面掘立柱建物1から出土した不明青銅製品である。上から見ると楕円形の形で、口縁端部は玉縁状になっている。掘立柱建物1から出土した土器は細片ばかりであるが、6世紀末～7世紀初頭の須恵器杯と8世紀と思う須恵器杯、土師器甕等である。

317～356は、第6面249井戸から出土したものである。249井戸からは、古代（7～8世紀）の土師器杯A・杯B・皿A・把手付壺A・鍋・甕C・竈、須恵器杯・杯G・杯A・杯B蓋・杯B・高杯・壺・平瓶・甕、製塩土器、木製品、鉄製品等が多数出土した。332・333・344・345が6世紀末～7世紀と思うもので、他は8世紀のものである。土師器杯A・皿Aには、放射状暗文や連結輪状暗文があるものが多い。330は、土師器竈の脚である。331は製塩土器で、積山編年（積山洋1993「律令制期の製塩土器と塩の流通」『ヒストリア』141号）の5a類と思われる。他に製塩土器細片は多量に出土している。340・342は須恵器杯Bで、外底面にヘラ痕がある。349は須恵器甕で、外底部は手持ちヘラケズリ、体部外面はカキメ調整で、土師器の大型蛸壺に似ている。350は火ぶくれが著しく、他に体部片もあるが復元出来なかった。352～355は木製品で、352・353が、スギ材の枡の一辺と曲物底板である。354・355は、ヒノキ材の火付け棒である。356は不明鉄製品で、割れているためX線写真は撮らずに復元したが、断面Y字状の鋤様のものである。

357・358・359・360・(361・362)・363・364・365・(366・367)は、第6面98・156・160・162・163・176・226・238・248ピットから出土した須恵器甕、製塩土器、平瓦、須恵器杯・杯B、鋳滓、土師器甕、須恵器杯・壺である。357・364・365・367が6世紀後半～7世紀の須恵器甕、土師器甕、須恵器杯・壺で、359が9世紀かと思う須恵器甕である。他は8世紀かと思うものである。363は鋳滓である。

368・369・370・371は、第6面84・113・134・220土坑から出土した須恵器甕・壺L・杯・杯蓋である。368・370・371は、6世紀後半～7世紀初頭のものである。371の須恵器杯蓋は、口縁部外面にハケ状刻目をもつ。369の須恵器壺Lは、8世紀かと思うものである。

372は第6面116溝出土の須恵器杯Bで、8世紀末かと思うものである。

9区（図150～156、写真図版91・92・98・99・101・102・104）373は、第2層から出土した15～16世紀の瓦質土器土筒である。第2層からは、近代以降の遺物、近世の陶磁器、泥面子、中世の瓦質土器、古代の土師器、須恵器、瓦等が出土している。

375～384は、第3層から出土したものである。第3層からは、近世の磁器転用円盤、陶器、中世の東播系播鉢、瓦器椀、古代（9世紀）の緑釉陶器（二彩も含む）、灰釉陶器、須恵器、古代（7～8世紀）の土師器、須恵器、製塩土器、瓦等が多く出土している。8世紀代の土師器、須恵器が多い。374・375は9世紀の緑釉陶器椀か皿で、京都産と思われる。376は9世紀の緑釉（二彩）陶器華瓶と思われ、外面に濃緑と薄緑の施釉がされている。377・378は9世紀前半頃と思う灰釉陶器椀・長頸壺である。379～381は8～9世紀の製塩土器である。382は摩滅しているが、8区の286と同じ

く、平城宮 6133 A 型式を祖型とする単弁 10 弁軒丸瓦である。383 は 8 ～ 9 世紀の丸瓦、384 は 12 ～ 13 世紀の平瓦である。

385・386 は、第 3 層以下から出土した。第 3 層以下からは、近世の陶器、中世の瓦質羽釜、古代（7 ～ 8 世紀）の土師器、須恵器、製塩土器等が出土している。385 は 8 世紀後半の土師器杯 A かと思うものであるが、外面に赤色顔料が塗布してある。387・388・389 は、第 4 面 104・110・342 ピットから出土した 8 世紀中頃の須恵器杯 B 蓋、土錘、8 世紀末の須恵器杯 B である。388 は土錘である。土錘は、他に第 4 層で 1 点出土しているのみである（他の調査区からは出土していない）。

390・391 は、第 4 面 90 溝状落ち込みから出土したものである。390 は 8 世紀末～9 世紀初頭の円面硯で、使い込まれて陸部が磨耗している。391 は、9 世紀後半の緑釉陶器皿かと思うものである。

392 ～ 408 は、第 4 層出土のものである。第 4 層からは、古代（8 ～ 9 世紀）の土師器杯 A ・皿・皿 B ・椀 C ・甕、須恵器杯 A ・杯 B 蓋・杯 B ・鉢 D ・壺・甕、黒色土器 A 類土器片、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀・壺、製塩土器、土錘、瓦、鉾滓等である。394 は 8 世紀前半の土師器皿 B で、放射状暗文と連結輪状暗文がある。397・398 は 9 世紀の緑釉陶器椀で、399・400 は 9 世紀中頃～後半の灰釉陶器椀・壺である。401・402 は、8 世紀の製塩土器である。403 は、土錘である。404 は土製品と思われる、方形の四隅かと思われるものである。405 は、平城宮 6572 A 型式を祖型とする重廓文軒平瓦である（平成 15・16 年度調査でも出土）。406 ～ 408 は、8 ～ 9 世紀の丸瓦、平瓦である。409 ～ 412 は第 4 層以下から出土したものである。第 4 層以下から古代（8 ～ 9 世紀）の土師器、須恵器、製塩土器、瓦、鉄製品等が出土している。412 は不明鉄製品で、板状であるが脆い。

413・414・(415・416)・(417・418)・419・420 は、第 5 面 182・185・187・189・190・196 ピットから出土したものである。413 は 8 世紀の須恵器甕、414 は 8 世紀後半の土師器杯 C である。415 ～ 418 は 8 ～ 9 世紀の丸瓦、平瓦である。419 は 9 世紀の須恵器杯 A で、420 は黒色土器の水滴で、9 世紀かと思うものである。

421 は、第 5 面 191 土坑から出土した 8 世紀中頃の土師器皿 A である。

422 ～ 497 は、第 5 層から出土したものである。第 5 層からは、古代（10 世紀）の篠窯鉢、灰釉陶器、古代（8 ～ 9 世紀）の土師器杯 A ・皿 A ・椀 A ・椀 C ・高杯・鉢 B ・鍋 B ・甕 A ・甕 C、須恵器杯 A ・杯 B 蓋・杯 B ・皿 B 蓋・皿 C ・高杯・鉢 D ・壺蓋・壺 K ・壺 Q ・台付長頸壺・平瓶・甕、緑釉陶器椀・皿・短頸壺、灰釉陶器皿、黒色土器 A 類、製塩土器、埴、瓦、砥石等が出土している。422 は 8 世紀前半の土師器杯 A で、内面に放射状暗文と連結輪状暗文がある。428 ～ 430 は 8 世紀前半の高杯で、粘土紐巻上げ成形である。杯部内面に放射状暗文、連結輪状暗文が、外面に分割ヘラミガキが施され、脚部は面取りが施されている。458 は、8 世紀中頃かと思う須恵器壺蓋である。462 は 8 世紀後半かと思う須恵器壺高台で、高台内面に須恵器破片が溶着している。466 は 9 世紀の須恵器小型壺 P かと思うもので、底部は未調整で、体部は回転ナデ調整だが、外面底部近くを部分的に手で押えている。468・469 は、8 世紀中頃～後半の須恵器平瓶である。472 は、10 世紀中頃と思われる篠窯鉢片である。473 ～ 477 は 9 世紀の緑釉陶器で、476 は大型椀かと思うもので、477 は、二彩かと思う短頸壺である。478・479 は、9 ～ 10 世紀の灰釉陶器である。480 は土師器の不明土器で、推定口径が約 29 cm を測る。481 ～ 488 は 8 世紀の製塩土器で、488 は内面に布目痕がある。489 は土製品と思われるもので、上面に段と突帯がはがれた跡があり、下方に一部突出し、下面にも突帯がはがれた跡がある。490 は幅 15.3 cm の埴で、当調査で 1 点のみ出土している。上面にヘラ痕がある。491 ～ 496 は、

8～9世紀の丸瓦、平瓦である。497は砂岩製の砥石で、砥面は3面か4面である。

498～531は第6面掘立柱建物1から出土したもので、322・324～328・332・334～336ピット順に掲載している。主な時期は、8世紀中頃～後半のものである。500～503・511は8世紀中頃の土師器杯A・Bで、放射状暗文がある。504は8世紀後半と思う土師器皿Aで、外面をヘラケズリしている。512は体部外面はヘラケズリ？調整、内面はハケ状ナデ調整のもので、時期はよくわからない。515・516・518～520・522・529は、8世紀の製塩土器である。各ピットから数点ずつ出土しているが、335ピットから少し多く出土している。524・530・531は、それぞれ332・335・336ピットから出土した柱根である。524はヒノキ材、530・531はスギ材である。

532・533は第6面掘立柱建物2の331ピットから出土したもので、掘立柱建物2からは、8世紀の土師器杯・高杯、須恵器杯A・杯B蓋、製塩土器等が出土している。532は8世紀前半～中頃の須恵器杯Aで、533はスギ材の柱根である。

534・535・(536～538)・539・540は、第6面214・216・241・283・294ピットから出土した土師器鍋B、須恵器杯A・杯B蓋、土師器高杯、柱根である。241ピットから出土したものの時期は、8世紀前半かと思うもので、他に比べてやや古い。

541～548は、第6面197溝から出土したものである。時期は8世紀中頃のものが多い。197溝からは、土師器杯A・皿A・椀C・壺A・甕、須恵器杯B蓋・杯B・壺・平瓶・甕、製塩土器、瓦等が出土している。541は8世紀中頃と思う土師器皿Aで、内面にまばらな放射状暗文がある。546も8世紀中頃の須恵器杯Bで、外底部に墨が付着しているが擦痕は認められない。547は6世紀後半かと思う須恵器壺で、他のものに比べ時期が古い。549～553は、第6面198溝から出土したものである。8世紀末のものが多い。198溝から、土師器甕、須恵器杯A・杯B蓋・杯B・鉢A・壺・甕、緑釉陶器、瓦等が出土した。土師器が少ない。551は須恵器壺底部で、外底部に他の須恵器の溶着がある。553は、9世紀後半と思う緑釉陶器である。554～559は、第6面199溝から出土したものである。8世紀末のものが多い。199溝からは、土師器杯A・高杯・甕・羽釜、須恵器杯B・鉢・甕C、緑釉陶器、製塩土器、瓦等が出土した。556は須恵器甕C底部で、外面の調整は格子状タタキの後一部板ナデで、内面の調整は同心円文当て具痕と板ナデである。557は、9世紀中頃の緑釉陶器である。558・559は、8～9世紀の丸瓦・平瓦である。560は9世紀かと思う灰釉陶器で、第6面208溝から出土したものである。208溝からは、他に土師器杯A・高杯、須恵器片も出土している。

561は第6面271落ち込みから出土した、8～9世紀の平瓦である。271落ち込みからは、他に須恵器杯、丸瓦も出土している。

**10区(A1棟)**(図157～159、写真図版92・93・98・101・102) 562～601は、第3層から出土したものである。第3層からは、古代(8～9世紀)の土師器杯A・杯B蓋・杯B・高杯・壺B・甕・羽釜、須恵器杯A・杯B蓋・杯B・皿・椀・高杯・鉢A・挿鉢・壺(A・G・L・M・N・Q)・平瓶・円面硯・甕(B・C)、灰釉陶器壺、黒色土器A類椀、黒色土器B類、製塩土器、瓦、鞆の羽口、砥石等が多く出土した。579は、8世紀後半かと思う須恵器円面硯である。透孔は7個と推定でき、内面は磨耗しており、使用された痕跡かと思われる。586は、8世紀末の須恵器壺Gである。壺Gは、山中章氏(1997「桓武朝の新流通構造 - 壺Gの生産と流通 - 」『古代文化』Vol. 49 No. 11)によると、壺Gは平城V期に出現し、長岡京に盛行して、平安京初期の9世紀初頭には姿を消す寿命の短い土器であり、官衙(的)遺跡からも出土するものの、竪穴建物等、居住空間から発掘される例が多く、日常的



にも使用する容器であり、東国からの衛士の必需品（水筒）として長岡京へ、一方で東国から徴発された兵士の携帯用水筒として各国府へ、持ち込まれたものではないかと推測されている。壺Gは、10区（A2棟）の第3層からも1点（678）出土している。591・592は、9世紀の灰釉陶器壺で同一固体片と思われる。593・594は8世紀後半～9世紀前半の製塩土器で、破片は多数出土している。595は轆の羽口で、外面は二次的に火を受けたことにより黒色化し、発泡しており、内面は赤色化している。596は、平城宮6291 B型式か6282型式を祖型とする複弁8弁軒丸瓦である（百濟寺跡からも出土している）。597は、平城宮6012型式を祖型とする重圈文軒丸瓦である（百濟寺跡からも出土している）。598は、平城宮6702 G型式を祖型とする均整唐草文軒平瓦で、同文異範は百濟寺跡からも出土している。599・600は、8～9世紀の丸瓦（無段式）・平瓦である。601は砂岩の砥石で、砥面は3面である。

602～604は、第3・4層から出土した。第3・4層からは、上層からの混じりこみの陶磁器片、古代（9世紀）の灰釉陶器壺、古代（7～8世紀）の土師器杯A・高杯・鉢・甕、須恵器杯A・杯B蓋・杯B・鉢・壺・高杯・甕、製塩土器、瓦等があり、他に敲き石、サヌカイト片、鉄製品がある。603は砂岩の敲き石で、表裏ともに二次的に火を受けたような痕跡がある。604は、不明鉄製品である。

605・606・（607～612）・（613・614）は、第5面789・819・888・929ピットから出土した須恵器杯A・甕B、土師器杯A・皿A、須恵器杯B・杯E・杯B蓋、軒平瓦である。888ピットは、8世紀後半の時期のものが多い。614は、平城宮6667 A型式を祖型とする均整唐草文軒平瓦である。

（615・616）・617・（618・619）は、第5面827・856・928土坑から出土した須恵器杯B蓋・壺蓋・杯・皿B蓋である。856土坑出土の617は、6世紀末～7世紀初頭の須恵器杯である。

620～629は、第5面776溝から出土したものである。主に8世紀中頃のものが多い。776溝からは、土師器杯A・高杯・鉢F・甕、須恵器杯A・杯B蓋・杯B・皿B蓋・壺K・甕、製塩土器、紅簾片岩片等が出土した。621は土師器杯Aで、内面に放射状暗文がある。622は土師器鉢Fで、低い高台が付いているが、その高台を付けるためと思われる3本の円がある。626は須恵器杯Bで、外底面にヘラ痕がある。628は、須恵器皿B蓋である。629は8世紀前半かと思う須恵器壺Kで、肩部と体部の境に沈線2本がある。外面と内底面に自然釉が付着し、外面肩部には溶着があり、外底面は発泡している。630～640は、第5面781溝から出土した。時期は、8世紀中頃～後半のものが主である。781溝からは、土師器杯A・高杯・甕、須恵器杯A・杯B蓋・杯B・皿B蓋・皿B・壺A・甕、製塩土器等が出土した。630は土師器杯Aで、内底面に連結輪状暗文がある。639は須恵器杯Bで、外底面にヘラ痕がある。641・642は、第5面930溝・935溝から出土したものである。641は8世紀後半の須恵器壺高台で、930溝からは、他に土師器杯B・高杯、須恵器壺、瓦等が出土している。642は8世紀中頃かと思う土師器杯Aで、内面に放射状暗文があり、外体部はヘラケズリ調整である。935溝からは、他に土師器杯C、須恵器杯B、製塩土器等が出土している。

10区（A2棟）（図160～175、写真図版93～96・98・99・101・102・104～108）643は、第2層から出土した9世紀前半かと思う緑釉陶器（二彩）碗である。644～646は第2層最下部から出土し、第2層は近代以降の遺物や近世の遺物を含むが、第2層最下部からは中世と古代（8～9世紀）の遺物がほとんどである。644は、中世の青磁碗である。645・646は、9世紀後半の緑釉陶器碗、灰釉陶器碗である。

647～692は、第3層から出土したものである。第3層からは、中世の青磁碗、瓦器碗、古代（8～9世紀）の土師器杯（A・B・C）・皿A・高杯・鉢F？・甕A・甑・竈、須恵器杯A・杯B蓋・杯B・皿C・高杯・鉢A・壺蓋・壺（C・G・M・Q）・甕B・甕C・甑、緑釉陶器碗、灰釉陶器碗・皿、黒色土器A類、製塩土器、瓦、砥石、鉄製品等が出土した。647は、14世紀かと思う龍泉窯系青磁碗である。648・649は8世紀中頃かと思う土師器杯Aで、放射状暗文があり、648は連結輪状暗文もある。655が8世紀中頃の心棒成形の高杯で、656・657が、8世紀中頃と8世紀末の粘土紐巻上げ成形の高杯である。655・656には連結輪状暗文がある。661は、8世紀後半かと思う土師器甑である。662は土師器竈で、破片を図上復元したものである。庇の上部に突帯がめぐり、焚口の縁は脚となり突出している。669は8世紀後半の須恵器杯Bで、外底部にヘラ痕がある。674は8世紀後半かと思う須恵器皿Cで、内外底面に火ダスキ痕がある。678は8世紀末～9世紀初頭の須恵器壺Gで、山中氏の細型になる〔10区（A2棟）第3層図157-586で詳述〕。壺Gは、今回の調査で2点出土している。681は9世紀かと思う須恵器甑で、図上復元である。把手が付いていた跡があり、蒸気孔は2個残存している。682は9世紀前半かと思う緑釉陶器碗で、内底面に「×」のヘラ記号がある。683・684は、9世紀の灰釉陶器碗・皿である。685～689は8世紀後半～9世紀前半かと思う製塩土器で、製塩土器は多数出土している。690は8～9世紀の平瓦で、瓦も多数出土している。691は砂岩の砥石で、砥面は2面である。692は、小柄状の鉄製品である。

693～706は、第4面掘立柱建物1から出土したもので、257・259・260・261・262・264・265・267・268ピットの順で掲載している。8世紀中頃～末のものである。掘立柱建物1から土師器杯A・杯B・皿C・高杯・鉢B・甕・羽釜、須恵器杯B蓋・杯B・甕、製塩土器、瓦等が出土した。700は8世紀中頃かと思う土師器高杯で、内面に放射状暗文と連結輪状暗文があり、外面調整はヘラケズリである。701は8世紀中頃かと思う土師器杯Bで、内面に連弧状暗文と放射状暗文があり、外面調整はヘラミガキである。702は8世紀中頃かと思う土師器皿Cで、口縁端部にススが付着している。706は8～9世紀の丸瓦で、有段式である。698・699・704・705は259・260・265・267ピットの柱根である。いずれもスギ材で、698・699・704は底部に加工痕と思われるものがある。

707・708は、第4・5面掘立柱建物2の276・279ピットから出土した8世紀中頃の須恵器杯Bである。掘立柱建物2から土師器杯A・高杯・鉢・甕、須恵器杯A・杯B蓋・杯B・壺・甕、製塩土器等が出土した。

709～713は第4・5面掘立柱建物3の387ピットから出土したもので、8世紀中頃と9世紀前半かと思うものである。掘立柱建物3から土師器杯A・杯B蓋・杯B・甕、須恵器杯B蓋・皿・甕、緑釉陶器碗、製塩土器、瓦等の細片が出土した。712は、9世紀前半かと思う緑釉陶器碗である。

714は、第4・5面掘立柱建物4の663ピットから出土した8世紀後半かと思う須恵器杯B蓋である。掘立柱建物4からは、他に土師器杯A・甕、須恵器杯・皿B蓋・壺・甕、製塩土器等の細片とスギ材の柱根の一部が出土している。

715～718は、第4・5面掘立柱建物8の273・324・581ピットから出土したもので、8世紀中頃～後半のものである。掘立柱建物8からは、土師器杯A・甕、須恵器杯A・杯B蓋・杯B、製塩土器等が出土した。715は、8世紀後半の製塩土器である。製塩土器が多数出土している。

719～722は第4・5面掘立柱建物9の330・332・527・566ピットから出土した、8世紀中頃～末のものである。掘立柱建物9からは、土師器杯A・杯B・皿A、須恵器杯A・杯B・壺・甕、製塩

土器等が出土した。722は8世紀末の土師器皿Aで、内面にヘラ記号かと思うものがあり、外面調整はヘラケズリである。

723～726は、第4面掘立柱建物10の282・283・284・425ピットの柱根である。すべてスギ材である。掘立柱建物10からは、土師器杯A・鉢・甕、製塩土器等の極細片が出土した。

727は第4・5面掘立柱建物11の706ピットから出土した、8世紀後半の須恵器杯B蓋である。掘立柱建物11からは、他に土師器杯A・高杯、須恵器杯A・杯B・壺、製塩土器、瓦等の極細片とスギ材の柱根の一部が出土した。

728～743は第4・5面掘立柱建物12の307～309・370・603ピットから出土したもので、8世紀後半～末のものが多い。掘立柱建物12からは、土師器杯A・皿A・高杯・甕、須恵器杯A・杯B・皿C・鉢D・壺、墨書土器、製塩土器、瓦等が出土した。732は、須恵器片に「東」と墨書がある。平成15・16年度調査で「西」と墨書された須恵器杯B蓋が出土している。734は、鞆岡廃寺出土T-60型式と同範の均整唐草文軒平瓦である。8区第2層以下(図147-280)からも出土している。740は、平城宮6702G型式を祖型とする均整唐草文軒平瓦である(百濟寺跡からも出土している)。742は砂岩の砥石?で、擦ったような跡はあるが、平らではない。743は603ピットの柱根で、スギ材が多い中、コウヤマキ材である。

744～746は、第4・5面掘立柱建物13の302・569・570ピットから出土した須恵器杯B蓋、製塩土器である。主に8世紀後半のものである。掘立柱建物13からは、他に土師器杯A、須恵器杯A等が出土した。

747～750は、第4・5面掘立柱建物14の314・318ピットから出土したもので、8世紀後半と10世紀前半のものである。掘立柱建物14からは、土師器杯A・皿・甕C・竈、須恵器壺蓋・壺・甕、製塩土器、瓦等の細片が出土した。747は、10世紀前半かと思う土師器皿である。749は、土師器竈の底である。748・750は、8世紀後半の須恵器壺蓋・甕である。

751は、第4・5面掘立柱建物19の479ピットから出土した8世紀の須恵器杯Aである。掘立柱建物19からは、他に土師器杯A・甕等の極細片が出土した。

752～782は、第4面353井戸から出土したものである。8世紀後半から9世紀前半のものが多い。353井戸からは、土師器杯A・皿A・高杯・甕、須恵器杯A・杯B蓋・杯B・皿・鉢A・円面硯・壺A・甕、黒色土器A類椀、灰釉陶器椀、製塩土器、瓦等が出土した。752～770は、横板井籠構造の井戸枠材である。752～754が北側の枠で上から内側を表にして掲載している。755は北側から出土したものであるが、井戸枠ではなく、周縁部に小孔が25個残存しているものである。756～758も北側から出土したものであるが細片である。759～761は、東側の枠で上から掲載している。762・763・765は、南側の枠で上から掲載している。764は、南側から出土した細片である。766～768は、西側の井戸枠で上から掲載している。769・770は、西側から出土したものであるが細片である。770は端部が円形を成しているので、桶等の底板かもしれない。すべてヒノキ材である。775は8世紀後半かと思う円面硯で、陸部は使用痕かと思う磨耗がある。777は、9世紀後半かと思う灰釉陶器椀である。778・779は8～9世紀の製塩土器で、779は内面に布目痕がある。製塩土器が多数出土している。780は、鞆岡廃寺出土T-60型式と同範の均整唐草文軒平瓦である。今回の調査で3点出土している。781は、8～9世紀の丸瓦(無段式)である。

783～786は、第4面357井戸から出土した。8世紀後半のものである。357井戸からは、土師器

杯A・皿・高杯・甕、須恵器杯A・杯B蓋・杯B・甕、製塩土器等が出土した。783は土師器杯Aで、外面底部の調整はヘラケズリである。784～786は8世紀の製塩土器で、786は内面に布目痕がある。

787～791は、第5面630井戸から出土したものである。主に8世紀後半のものが多い。630井戸からは、土師器皿A・甕、須恵器杯A・杯B蓋・甕・盤、製塩土器等が出土した。791は、8世紀後半の須恵器盤である。

10区（A2棟）は第4面と第5面が分けにくく、以下は遺構の種類毎に、番号順に掲載した。

792～798は297ピットから出土した土師器皿A・椀A・高杯・甕、須恵器杯B蓋、黒色土器A類杯で、8世紀後半～9世紀前半のものである。297ピットから、他に土師器杯A・羽釜等の細片が出土した。795は粘土紐巻上げ成形の土師器高杯で、内面に放射状暗文がある。797は黒色土器A類杯で、内面に暗文がある。799・800・801は、299・300・325ピットから出土した8世紀中頃の須恵器杯B蓋、8世紀後半の須恵器杯B、8～9世紀の平瓦である。802～805は、355ピットから出土した土師器皿A、須恵器杯C・壺蓋、製塩土器で、8世紀後半～末のものである。他に、土師器甕、須恵器杯・杯B蓋等の破片が出土した。806～820は356ピットから出土したもので、8世紀末の一括資料と考えられる遺物である（当センター 秋山浩三氏教示）。土師器杯A・杯C・椀C・皿A、須恵器杯A・杯B・皿A、製塩土器等が多く出土した。810は、外面を口縁までヘラケズリ調整をしている。808・809の土師器椀Cは、胎土が粗く地元で作られたものかもしれない。814・816の須恵器杯Aは、焼きが甘い。817の須恵器杯Bの外底面にヘラ記号がある。820の製塩土器の内面は、布目痕がある。821・822・(823～825)は、391・392・403ピットから出土した9世紀後半の灰釉陶器椀、8～9世紀の丸瓦、8世紀中頃の土師器椀C？、8世紀前半の須恵器杯A・杯Cである。(826・827)・(828～831)・832・833・834は、(434・435)・445・470・471・486ピット〔( )の中はどちらかの遺構出土〕から出土した8世紀後半の須恵器杯B蓋・壺H、8～9世紀の丸瓦（無段式）・平瓦、8世紀中頃の須恵器杯B、8世紀前半の杯B蓋・杯Aである。835・836・(837～839)・840は、553・559・564・574ピットから出土した8世紀前半の須恵器壺L、8世紀後半の須恵器杯B、8世紀中頃の土師器甕C、8世紀後半の須恵器杯B蓋、不明鉄製品である。(841～843)・844・845・846・847は、617・619・632・633・973ピットから出土した8世紀中頃の須恵器杯B・壺Q、8世紀の甕C？、8世紀後半の土師器高杯、8世紀後半～9世紀前半の製塩土器、8世紀後半の須恵器杯A、8世紀中頃の須恵器杯B蓋である。841の須恵器杯Bの外底部には、ヘラ痕がある。

848～855は、289土坑から出土した土師器杯C・椀C・甕C・甕B・羽釜、須恵器杯A・杯B・甕で、8世紀中頃のものである。856は、352土坑から出土した8世紀後半の須恵器壺Qである。857・858は、354土坑から出土した8世紀中頃～後半の須恵器杯A・甕である。859は、431土坑から出土した8世紀前半の須恵器鉢Aである。860～862は、504土坑から出土した8世紀前半～中頃の須恵器杯B蓋・杯B・鉢Bである。861の須恵器杯Bの外底部にはヘラ記号がある。862の須恵器鉢Bは、片口である。863は、685土坑から出土した8世紀中頃の土師器杯Cである。

864～879は、329溝から出土した主に8世紀中頃～8世紀末のものである。土師器杯A・皿A・皿B・高杯・鍋B・甕C・竈、須恵器壺蓋・杯B蓋・杯B・甕B、不明鉄製品等が多く出土した。329溝からは、他に須恵器鉢A・壺、製塩土器等の細片が出土した。873は、6世紀末～7世紀初頭の須恵器壺蓋である。869は、形が変わった高杯である。880・881・882・883は、457・464・482・588溝から出土した8世紀中頃～後半の須恵器壺C？、土師器杯B・甕C・甗である。884～888は

600 溝から出土した、8 世紀中頃～後半の土師器高杯・甕・竈、須恵器杯 B 蓋・壺である。他に、600 溝から土師器杯 A、須恵器杯 A 等の細片が出土している。

889～893 は、538 落ち込みから出土した 8 世紀中頃～後半の土師器壺・甕、須恵器鉢・壺 A 蓋である。538 落ち込みからは、土師器杯 A・高杯・鉢・壺 A 等の細片も出土している。

894～897 は、298 土器群から出土した 8 世紀後半の土師器杯 B 蓋・高杯・鉢 B・甕 C である。898・899 は、351 土器群から出土した 8 世紀後半の土師器甕 C、須恵器甕 C である。900・901 は 446・447 土器群から出土した 8 世紀の製塩土器、8 世紀末の須恵器杯 B である。

902～936 は、第 4 層から出土したものである。8 世紀中頃～末のものが主である。土師器杯 A・杯 B 蓋・皿 A・皿 C？・高杯・甕 A・甕 C・甗？、須恵器杯 A・杯 B 蓋・杯 B・杯 C・皿 C・高杯・壺（A・C・Q）・平瓶・甕、土製円板、丸瓦である。902 の土師器杯 A は、内底面に放射状暗文と連結輪状暗文がある。第 4 層からは他に、土師器鉢 A・壺、須恵器鉢 A、製塩土器、平瓦等が出土している。

11 区（図 176～178、写真図版 96～99・101・102） 937・938 は、第 3 層下部と以下から出土した 8 世紀後半の須恵器杯 A、砥石である。938 の砥石は、砂岩で砥面は 1 面である。

939 は第 4 面 291 ピットから出土した 8 世紀中頃の土師器杯 A で、放射状暗文がある。

940 は、第 4 面 277 土坑から出土した 13 世紀の龍泉窯系青磁小碗である。

941・942 は、第 4 面 279 溝から出土した 8 世紀前半の須恵器杯 B 蓋、8 世紀の製塩土器である。

943 は、第 4 層上部出土の 12～13 世紀の軒丸瓦である。944～954 は、第 4 層出土のものである。第 4 層から、陶磁器、土師器杯 A・高杯・鍋・甕・羽釜、須恵器杯 A・杯 B 蓋・杯 B・皿 C・盤・壺蓋・壺・甗・横瓶・甕、灰釉陶器椀、瓦等が出土している。944 は、10 世紀後半～11 世紀中頃かと思う白磁碗である。945 は 7～8 世紀の新羅系土器片で、外面に列点文かと思うものと竹管文がある。本調査では 1 点のみの出土である。946 は 8 世紀前半の土師器杯 A で、内面に放射状暗文がある。951 は、6 世紀後半の甗で、外面に波状文と沈線文と凸線文がある。952 は、10 世紀前半の灰釉陶器椀である。953・954 は 8 世紀後半の製塩土器で、953 は内面に布目痕がある。955 は、第 4 層下部出土の 9 世紀の小型壺かと思う。

956・957 は、第 5 面 377 ピットから出土した 10 世紀後半の土師器皿、黒色土器 B 類？椀である。958・959 は、第 5 面 537・539 ピットから出土した 8 世紀中頃の須恵器鉢、製塩土器である。

960 は、第 5 面 568 土坑から出土した 8 世紀中頃の土師器皿 A である。

961～971 は、第 5 層から出土したもので、6 世紀末～10 世紀末までのものを含む。第 5 層からは、黒色土器 A 類杯、黒色土器 B 類椀、土師器小皿・杯 A・高杯・甕・羽釜、須恵器杯・杯 B 蓋・杯 B・皿・鉢・壺・甕 B、製塩土器、瓦が出土している。961 は、10 世紀末の小皿（ての字）で、962 は、9 世紀中頃の黒色土器 A 類杯で内面に暗文がある。963 は、10 世紀後半の黒色土器 B 類椀である。965 は、6 世紀末～7 世紀初頭の須恵器杯である。969 は 8 世紀後半の壺で、外底部にヘラ記号がある。

972 は、第 6 面掘立柱建物 1 から出土した弥生第 VI 様式～庄内期と思う壺底部で、混入である。

973～975 は、第 6 面掘立柱建物 3 から出土した 8 世紀前半～中頃の須恵器長頸壺・皿 A・壺 A である。975 は頸部に重ね焼された蓋の一部が溶着している。

976・977 は、526・(525・526) ピットから出土した 8 世紀後半～末の須恵器杯 B 蓋・甕である。

978・979・(980・981)・982・983 は、(603or604)・605・696・840・844 ピットから出土したものである。8世紀後半の須恵器壺A蓋、8世紀の製塩土器、8世紀中頃の須恵器杯B蓋、8～9世紀の平瓦である。

984～990 は、第6面674土坑から出土した8世紀末のものである。須恵器杯B蓋・杯B・壺・甕、丸瓦(無段式)、不明鉄製品である。990の不明鉄製品は輪状である。991は、第6面803土坑から出土した6世紀後半～7世紀初頭の須恵器杯である。

992・(993・994)・995 は、第6面426・652・802溝から出土した。8世紀後半の須恵器杯B蓋、8世紀の土師器鉢、8世紀末の須恵器杯B蓋、8世紀前半の須恵器杯Aである。

12区(図179～184、写真図版97・99・100・102) 996は、近代の第0層から出土した8世紀前半の須恵器壺C?である。古代の遺物で目に付いたのでここに掲載した。997～1004は、第2層最下部から出土したものである。997～1000が12世紀の白磁碗で、1001が12世紀末～13世紀初頭の楠葉型瓦器椀である。1002が12世紀かと思う土師器羽釜で、1003は14～15世紀の菊花文スタンプがある瓦質浅鉢かと思うものである。1004は、9世紀後半の灰釉陶器椀である。

1005は、第3面33溝から出土した8世紀末の須恵器杯Aである。

1006・1007は、第3面48土坑から出土した8世紀前半～中頃の土師器鍋A、須恵器壺Qである。1007の須恵器壺Qの外底部にヘラ記号がある。

1008～1011は、第3層から出土したものである。第3層から瓦器椀、黒色土器A類椀、土師器杯A・高杯・甕、須恵器杯B蓋・杯B・壺Q・甕、石鏃等が出土した。1008はサヌカイト製の凹基式石鏃で、1点のみ出土した。須恵器は8世紀後半～末のものである。1010の須恵器杯Bの外底部にヘラ痕がある。

1012～1026は、第4面89竪穴建物から出土した土師器杯A・杯C・杯B・椀C・高杯・鉢B・甕A、須恵器杯B蓋・杯B、製塩土器、丸瓦で、8世紀中頃のものである。他に須恵器皿C・甕等が出土している。1013・1014・1016の土師器杯A・杯C・杯Bは、内面に放射状暗文や連結輪状暗文がある。1023の須恵器杯Bの外底部にヘラ記号がある。

1027～1033は、第4面掘立柱建物2の153・178・232・226ピットから出土した12世紀後半の白磁碗、土師器小皿・皿、楠葉型瓦器椀と8～9世紀の平瓦である。

1034・1035は、第4面57ピットから出土した8世紀末～9世紀初頭の須恵器杯A・杯Bである。1036・1037は、第4面72ピットから出土した8世紀末の須恵器杯Aと鉄釘かと思うものである。1038・1039・1040・1041・1042は、第4面124・125・126・130・150ピットから出土した12～13世紀の土師器皿・小皿、瓦器小皿・椀である。1043・1044は、第4面174ピットから出土した12世紀の土師器皿、楠葉型瓦器椀である。1045・1046・1047・1048は、第4面179・211・217・235ピットから出土した12世紀の白磁碗、楠葉型瓦器椀・小皿、土師器皿である。1049・1050は、第4面249ピットから出土した12世紀後半の白磁碗と凝灰岩製の砥石である。1050の砥石は、砥面は3面である。1051・1052・1053は、第4面277・279・289ピットから出土した8世紀の土師器甕C、平瓦、須恵器甕である。1052の平瓦の凸面には格子状タタキが残る。

1054～1068は、第4面85土坑から出土した主に12世紀後半～13世紀前半の白磁皿・碗、灰釉陶器小皿、土師器小皿、楠葉型瓦器椀と8～9世紀の丸瓦・平瓦である。1069は、第4面86土坑から出土した8世紀中頃の須恵器杯Aである。1070～1072は、第4面88土坑から出土した8世紀中

頃～後半の須恵器杯B蓋・杯C・壺Qである。1073～1075は、第4面90土坑から出土した8世紀後半の土師器杯A、須恵器杯B蓋である。1076～1085は、第4面78土坑から出土した8世紀初頭の丸瓦（無段式）・平瓦と鉾滓である。平瓦の凸面に格子状タタキが残り、凹面は布目痕が残る（時期に関しては枚方市教育委員会の竹原伸仁氏にご教示願った）。すべて焼きが甘い。

1086・1087は、第4面80溝から出土した8世紀末～9世紀初頭の須恵器杯B、8世紀かと思う須恵器甕である。80溝からは、他に土師器杯A・皿・高杯・甕、須恵杯B蓋・壺A等の細片が出土している。1088は、第4面80溝または85土坑（85土坑が80溝を切る）から出土した平瓦である。遺構の時期から見ると、80溝に伴うものと思う。1089・1090は、第4面81溝から出土した12世紀末～13世紀前半の土師器小皿、楠葉型瓦器椀である。

1091～1094は、第4面74落ち込みから出土した12世紀前半の白磁碗と8世紀後半～末の土師器皿A、須恵器杯B・甕Cである。1094の須恵器甕Cは把手痕が4箇所ある。74落ち込みから土師器鉢・高杯、須恵杯B蓋等の細片が出土している。

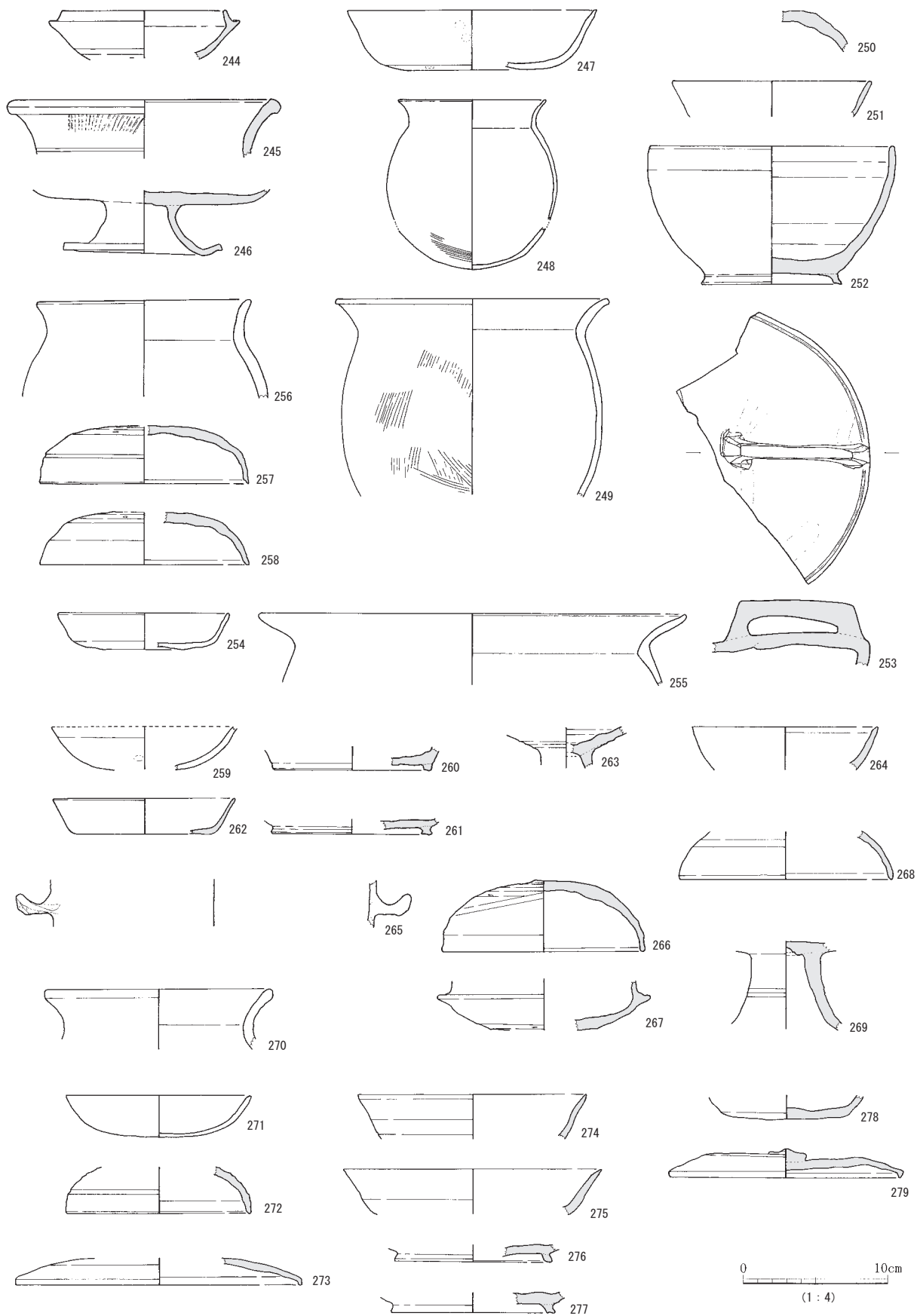


图 146 5区 古代遺物 (第2層、第2層下部、第3面竪穴建物1・2、掘立柱建物2、14・31・32・119・134ピット、17・20土坑、21・44溝出土)



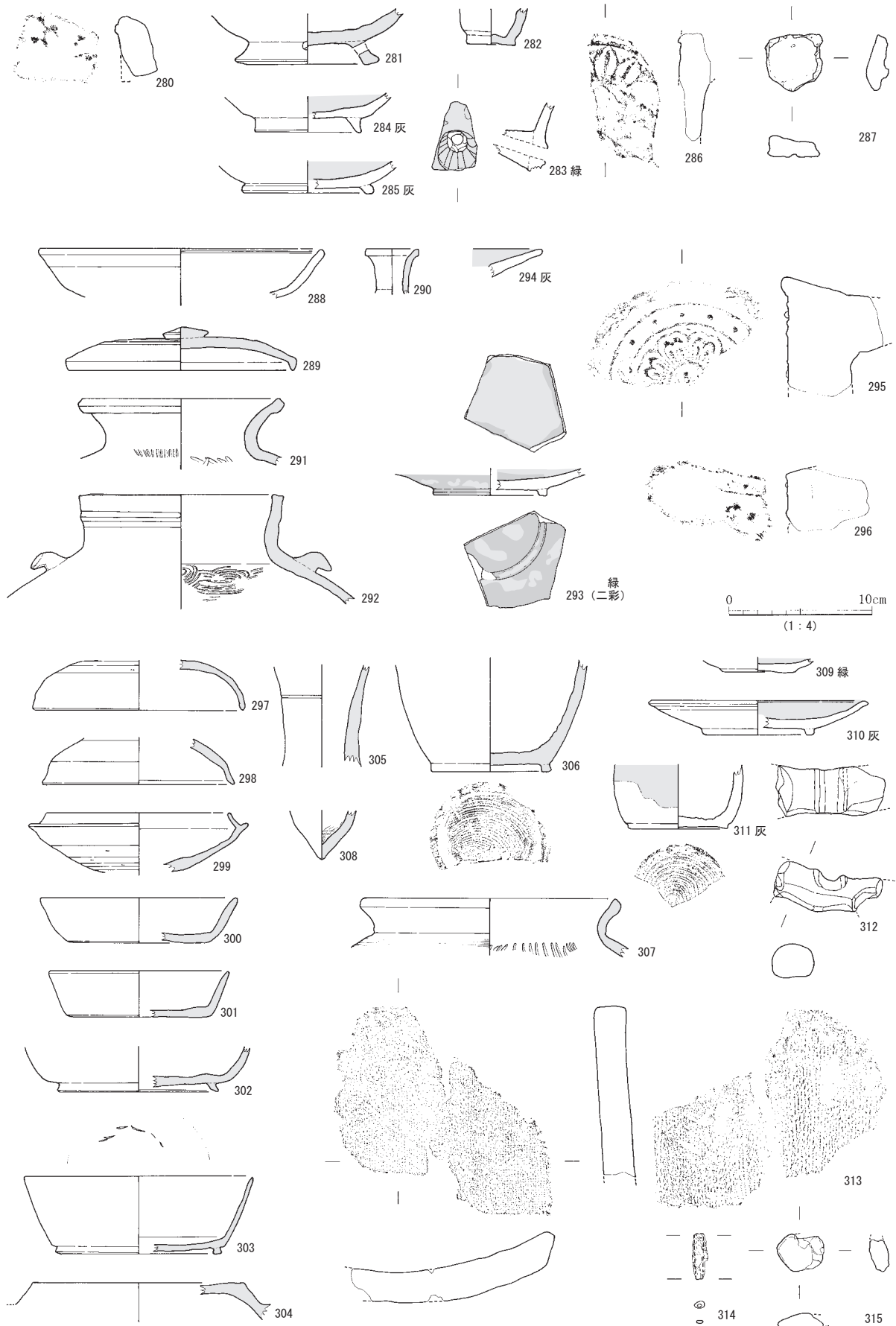


图 147 8区 古代遺物 (1)

(第2層以下、第3層、第4層、第5層出土)

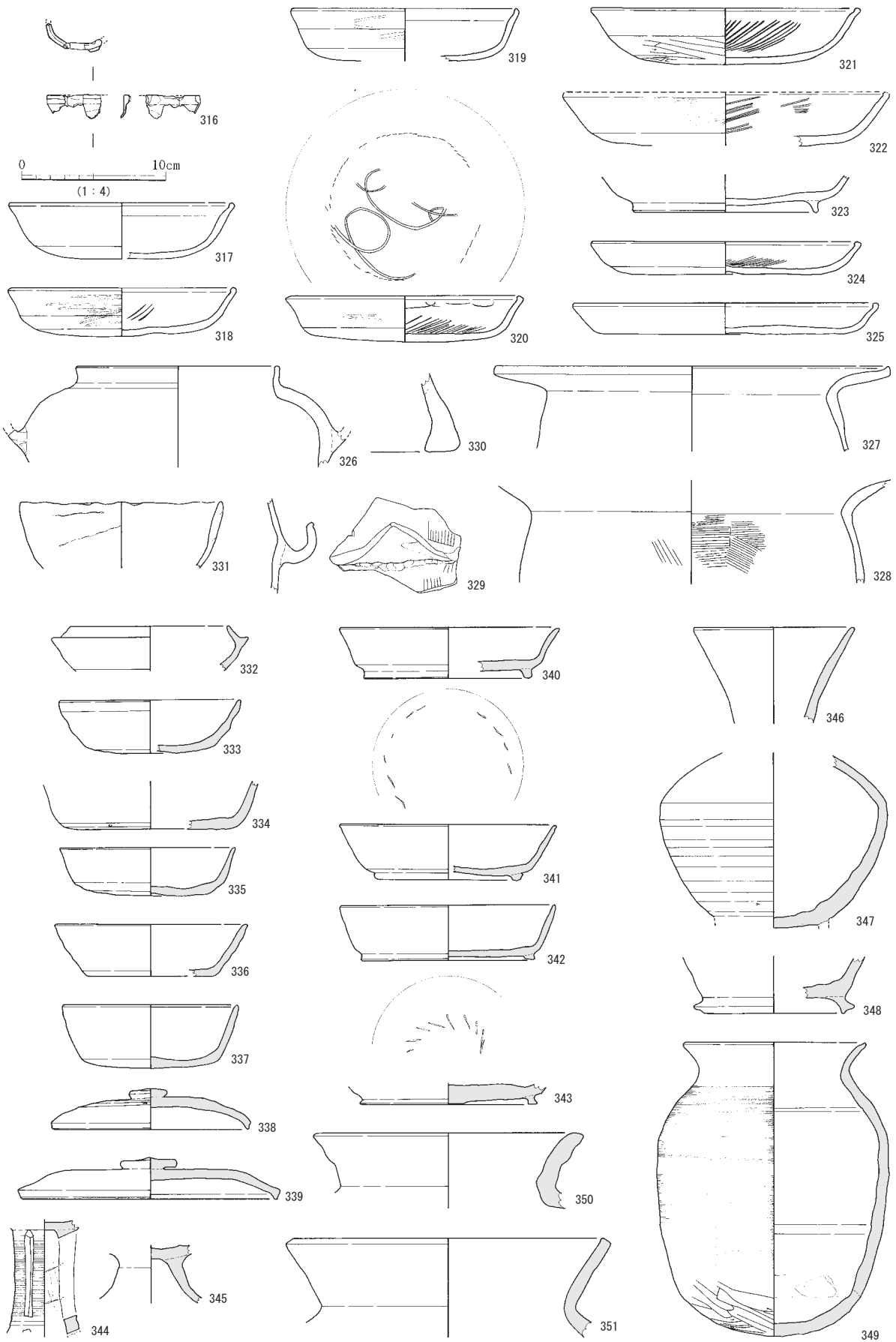


图 148 8区 古代遺物 (2)

(第6面掘立柱建物1、249井戸出土)

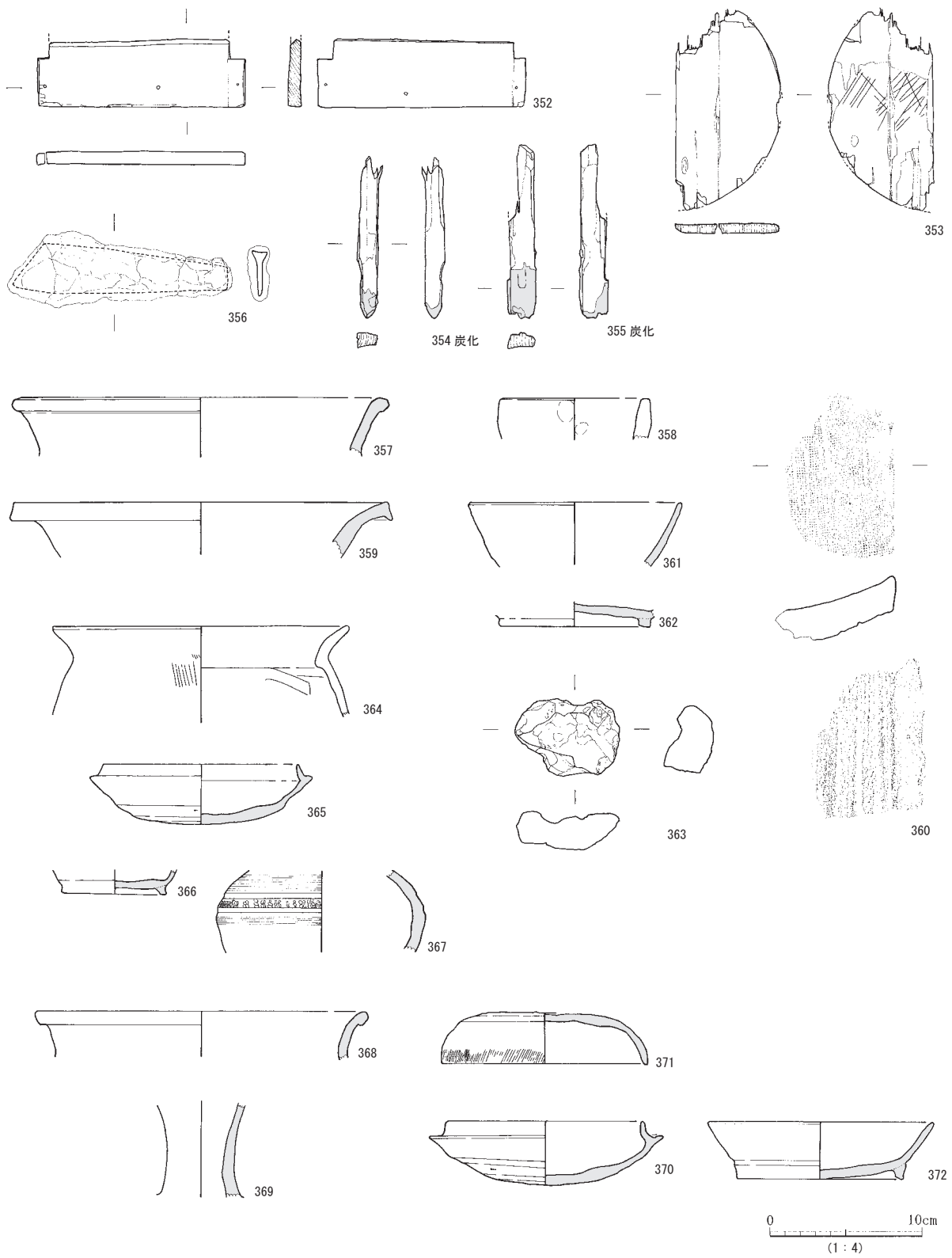


図 149 8区 古代遺物 (3)

(第6面249 井戸、98・156・160・162・163・176・226・238・248 ビット、84・113・134・220 土坑、116 溝出土)

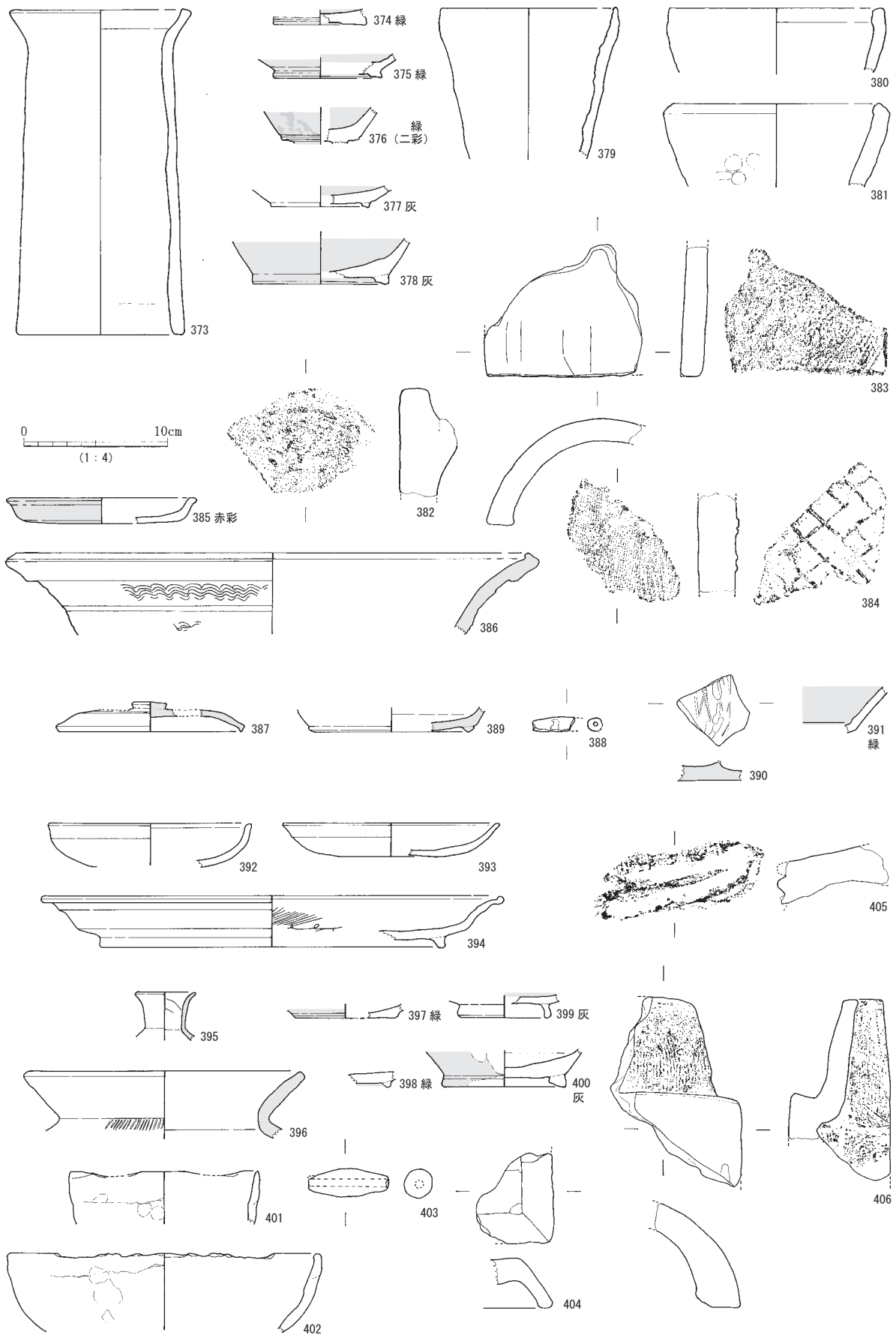


图 150 9区 中世・古代遺物

(第2層、第3層、第3層以下、第4面104・110・342ピット、90溝状落ち込み、第4層出土)

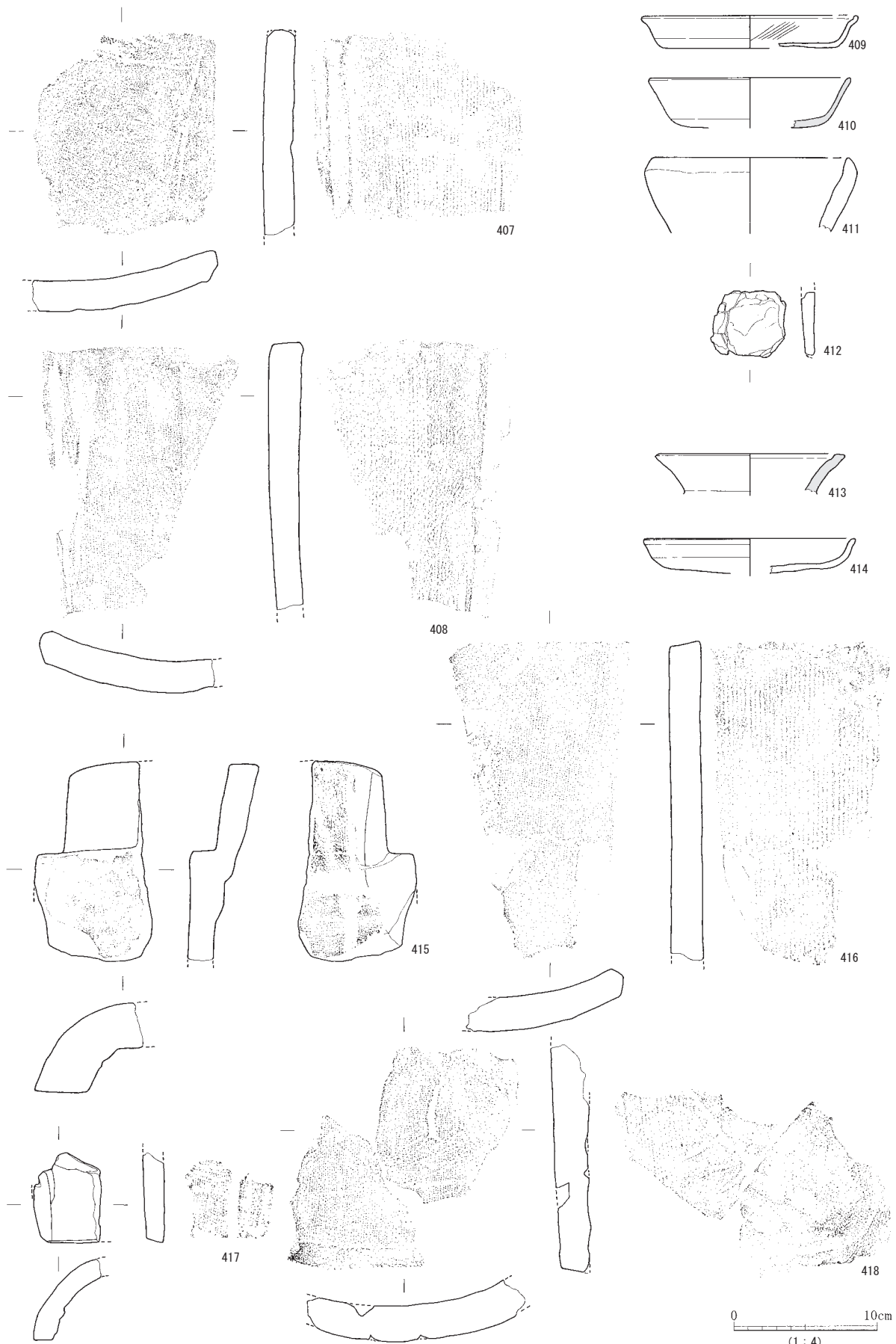


图 151 9区 古代遺物 (1)

(第4層、第4層以下、第5面182・185・187・189ピット出土)

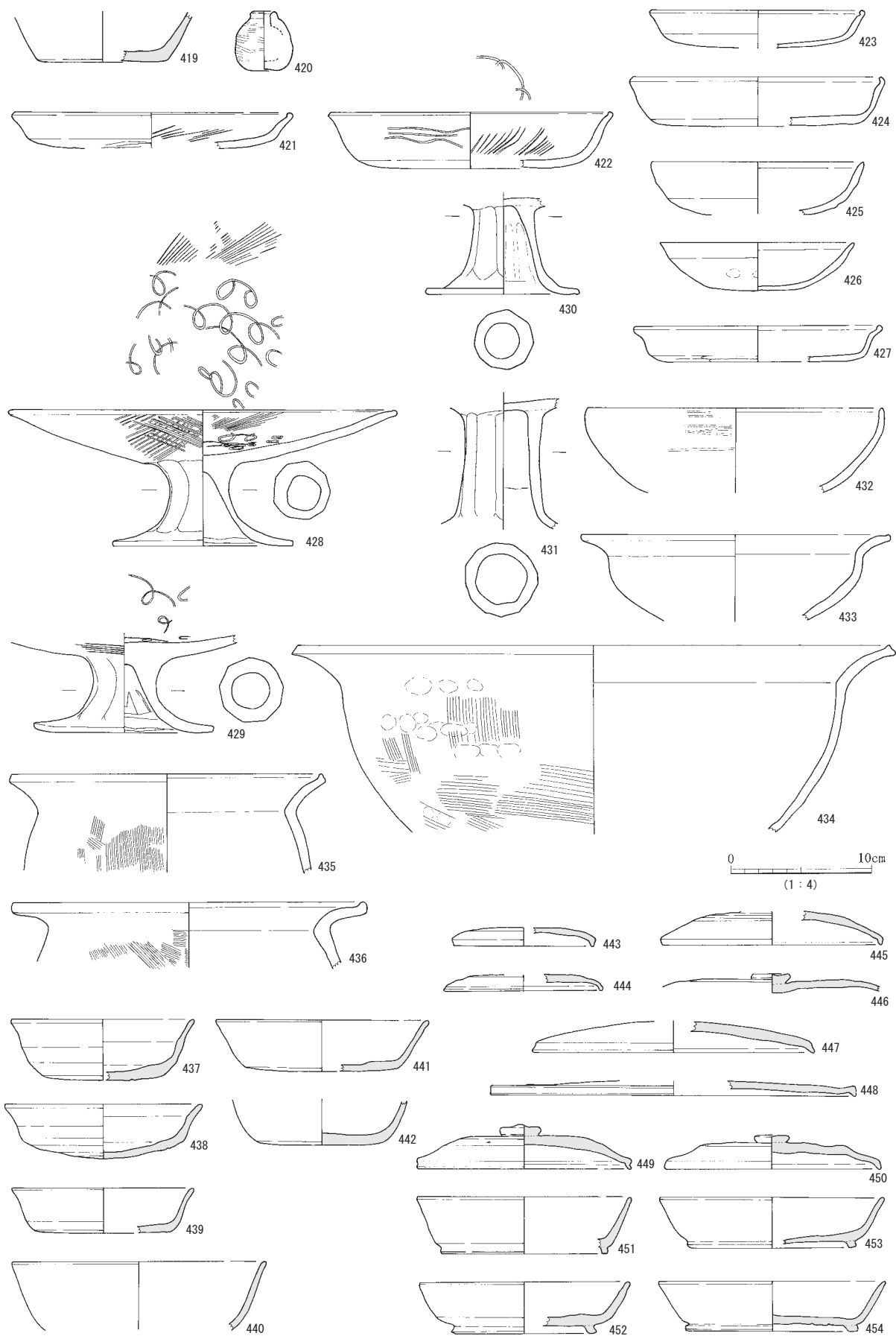


图 152 9区 古代遺物 (2)

(第5面 190・196ピット、191土坑、第5層出土)

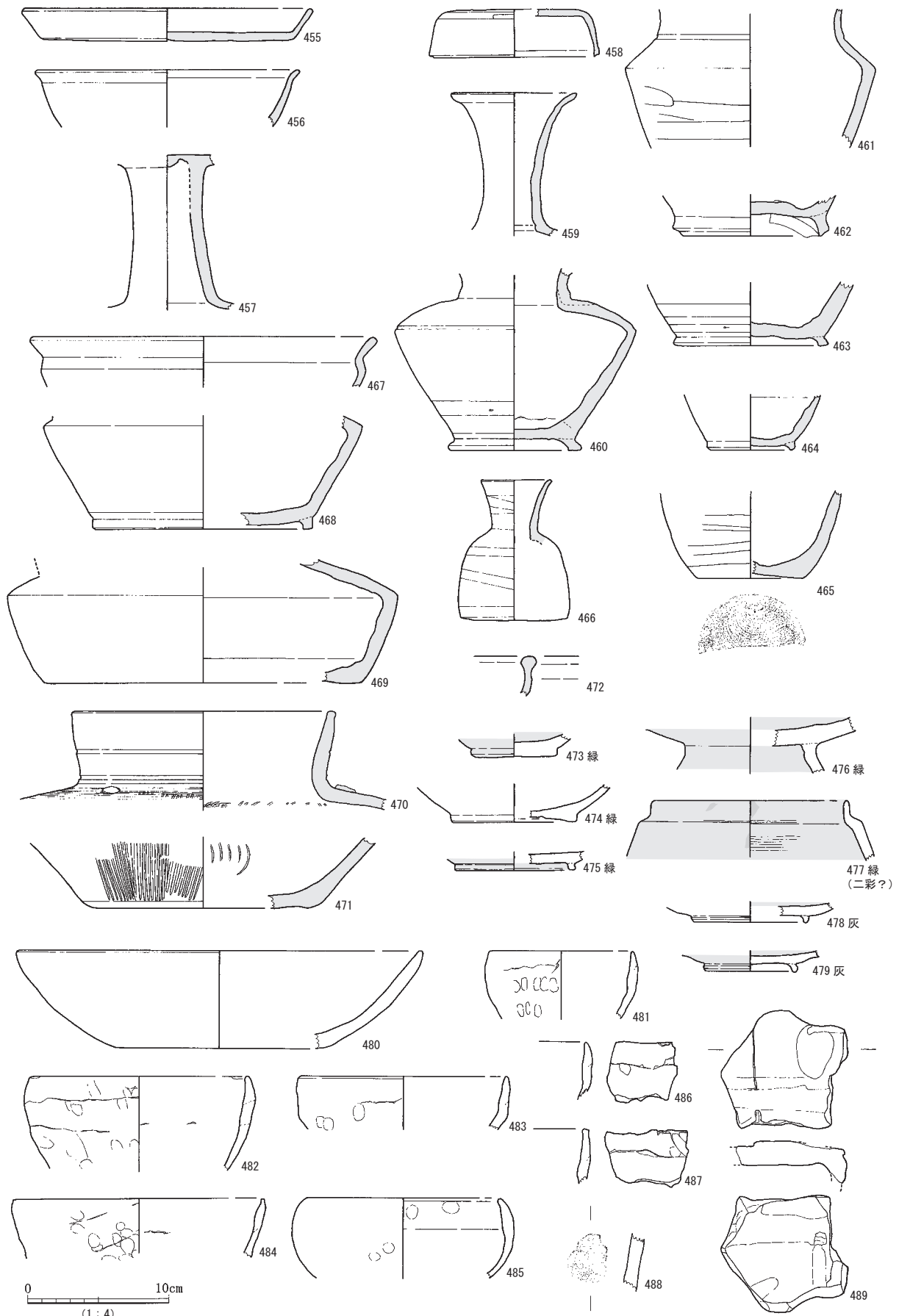


图 153 9区 古代遺物 (3)

(第5層出土)

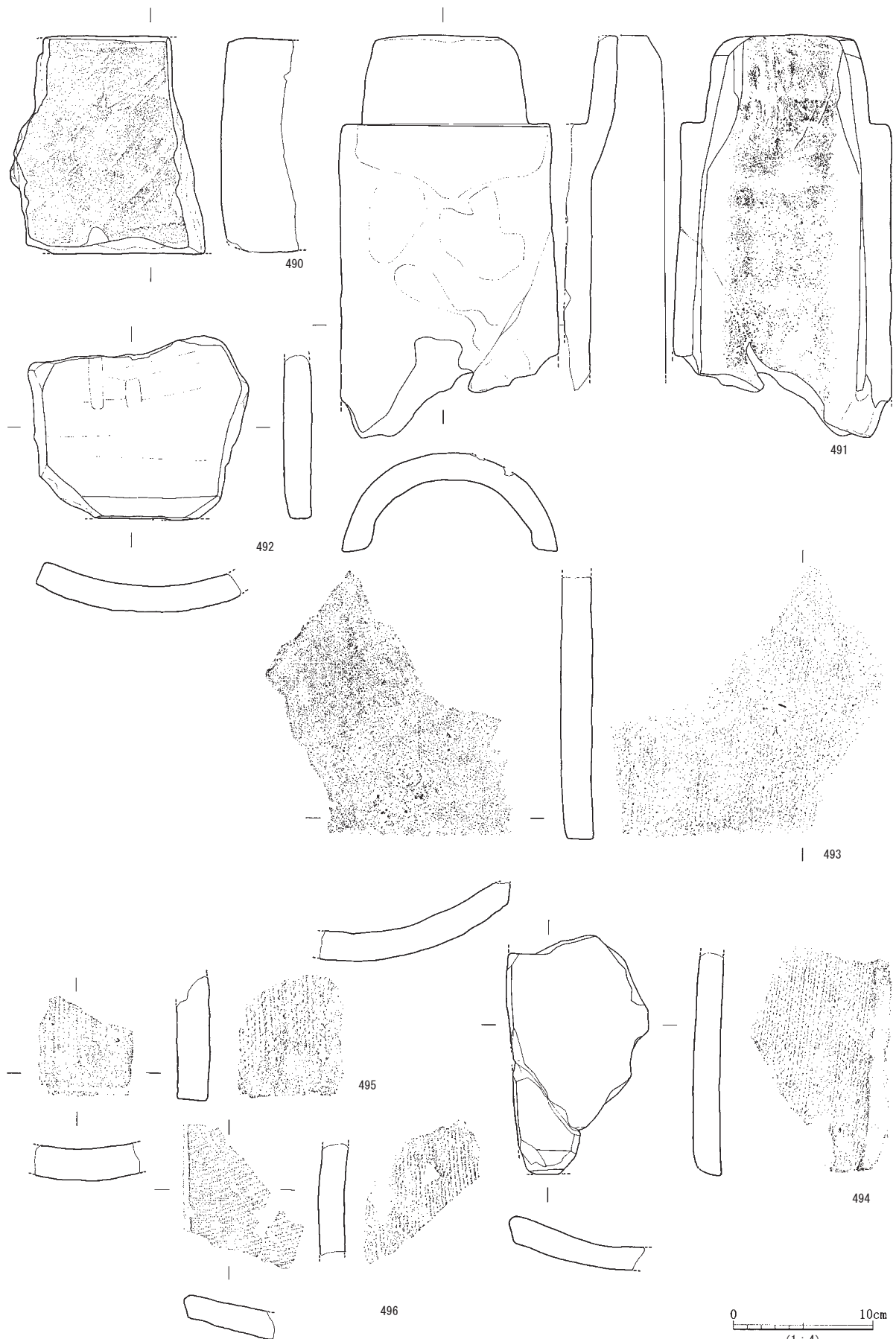


图 154 9区 古代遺物 (4)

(第5層出土)



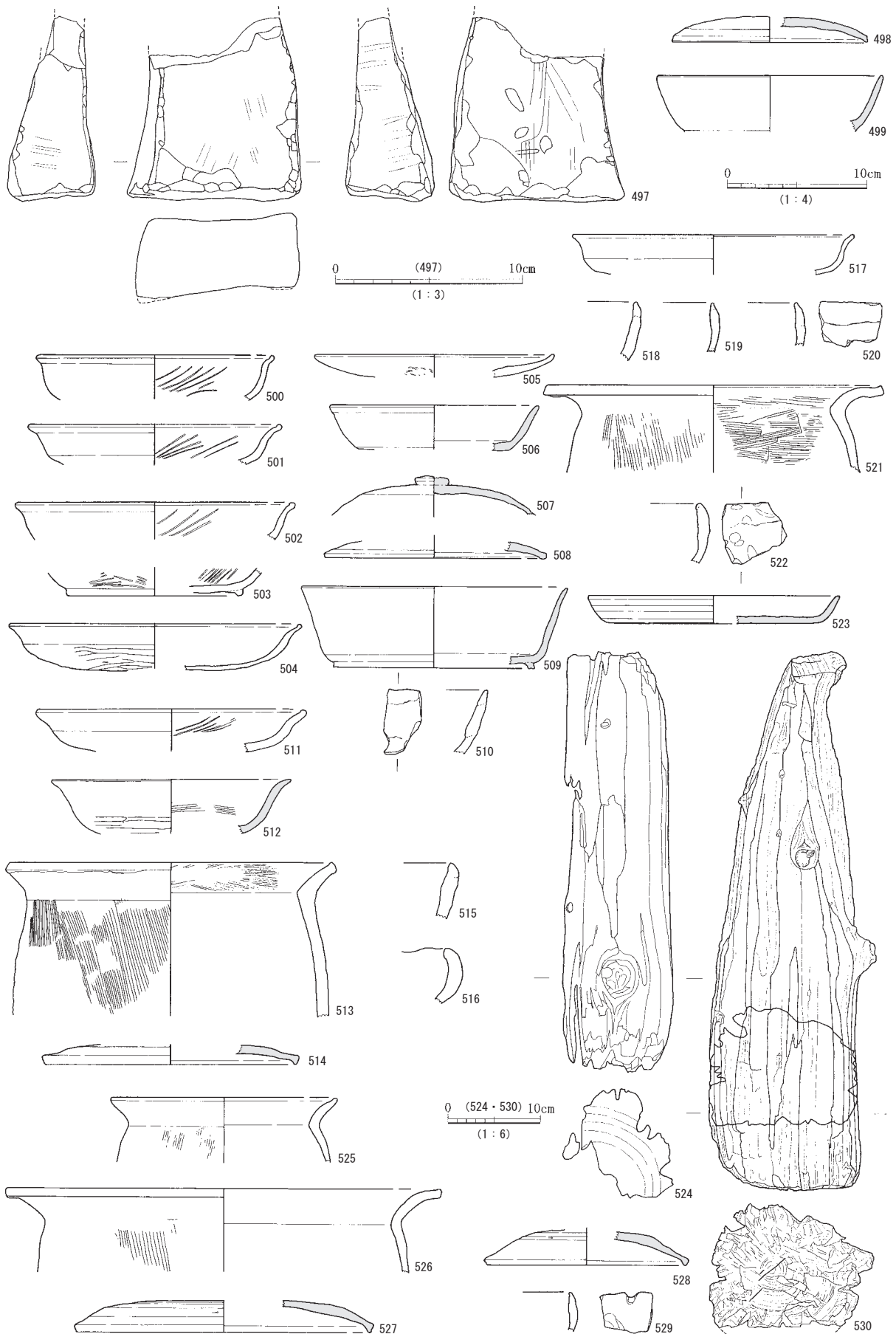


图 155 9区 古代遺物 (5)

(第5層、第6面掘立柱建物1出土)

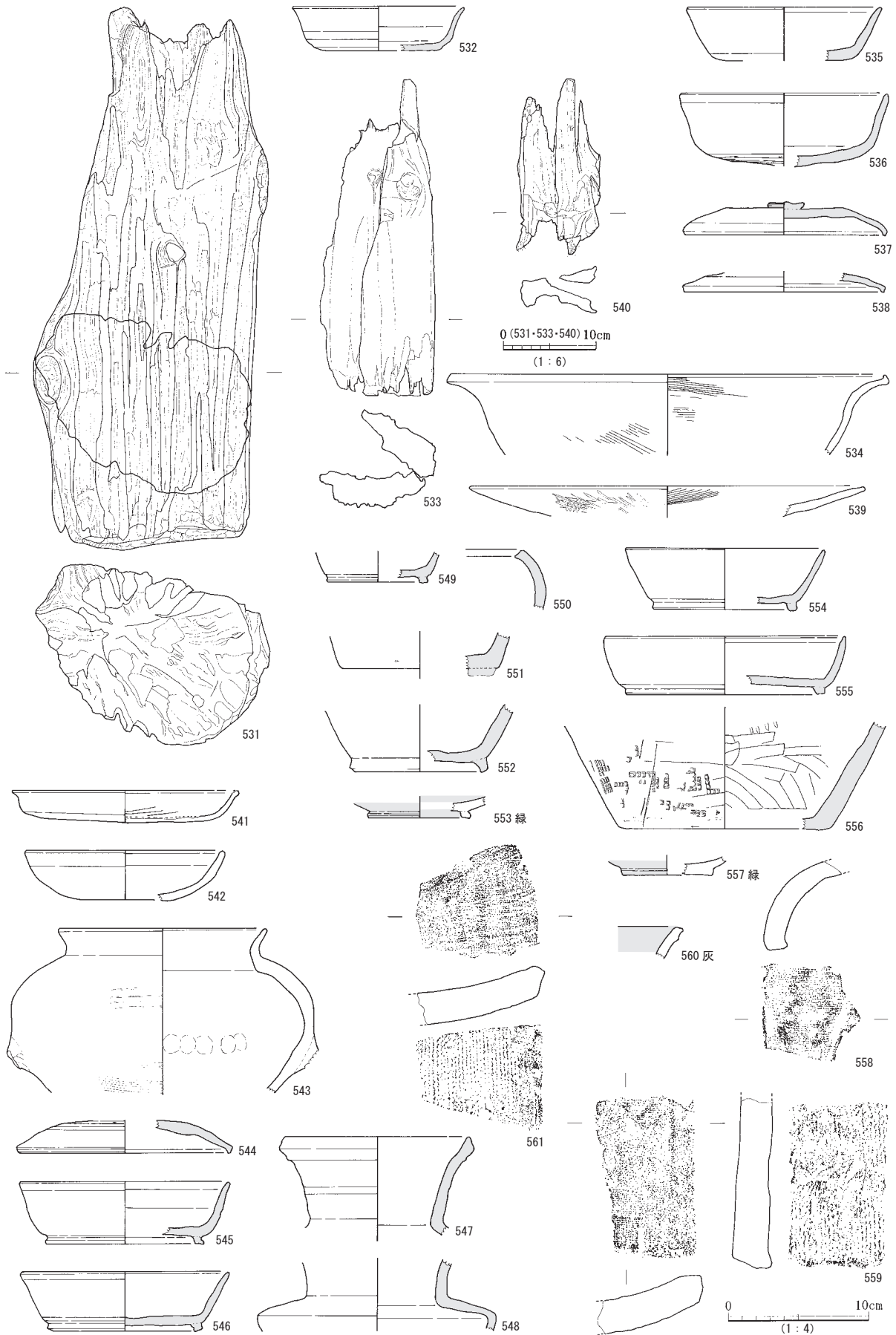


图 156 9区 古代遺物 (6)

(第6面掘立柱建物1・2、214・216・241・283・294ピット、197・198・199・208溝、271落ち込み出土)

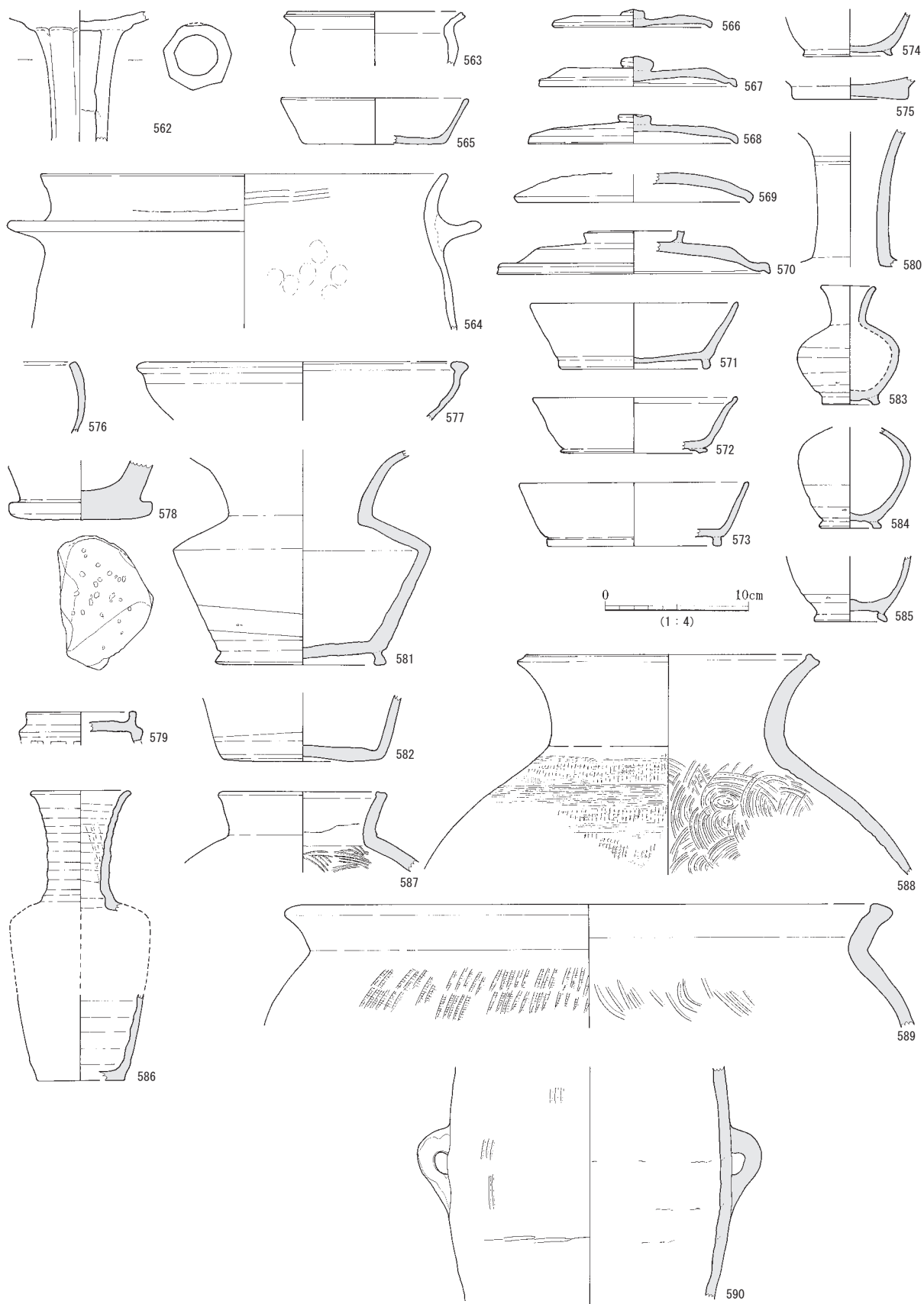


图 157 10 区 (A 1 棟) 古代遺物 (1)

(第 3 層出土)

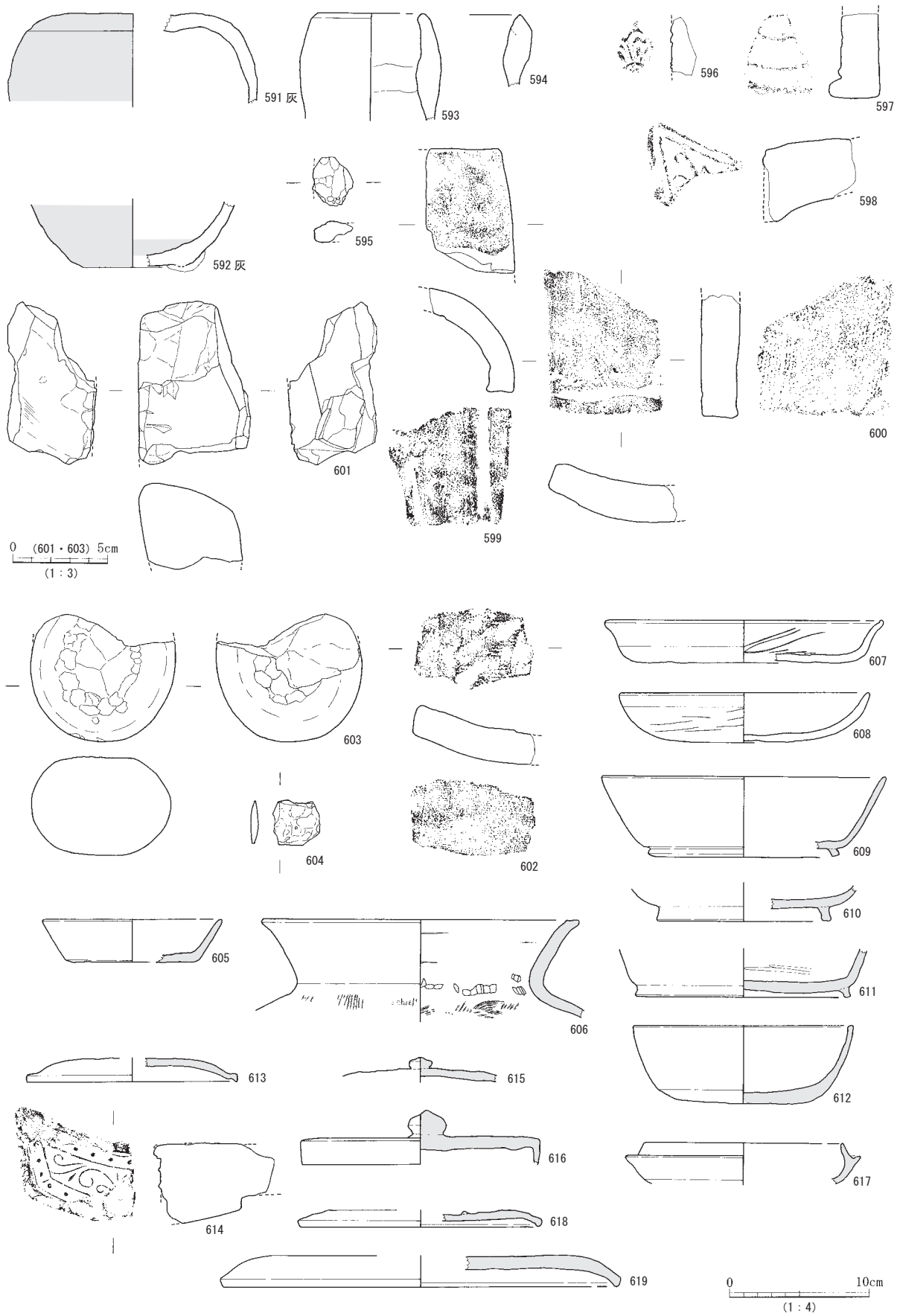


図 158 10 区 (A 1 棟) 古代遺物 (2)

(第 3 層、第 3・4 層、第 5 面 789・819・888・929 ピット、827・856・928 土坑出土)

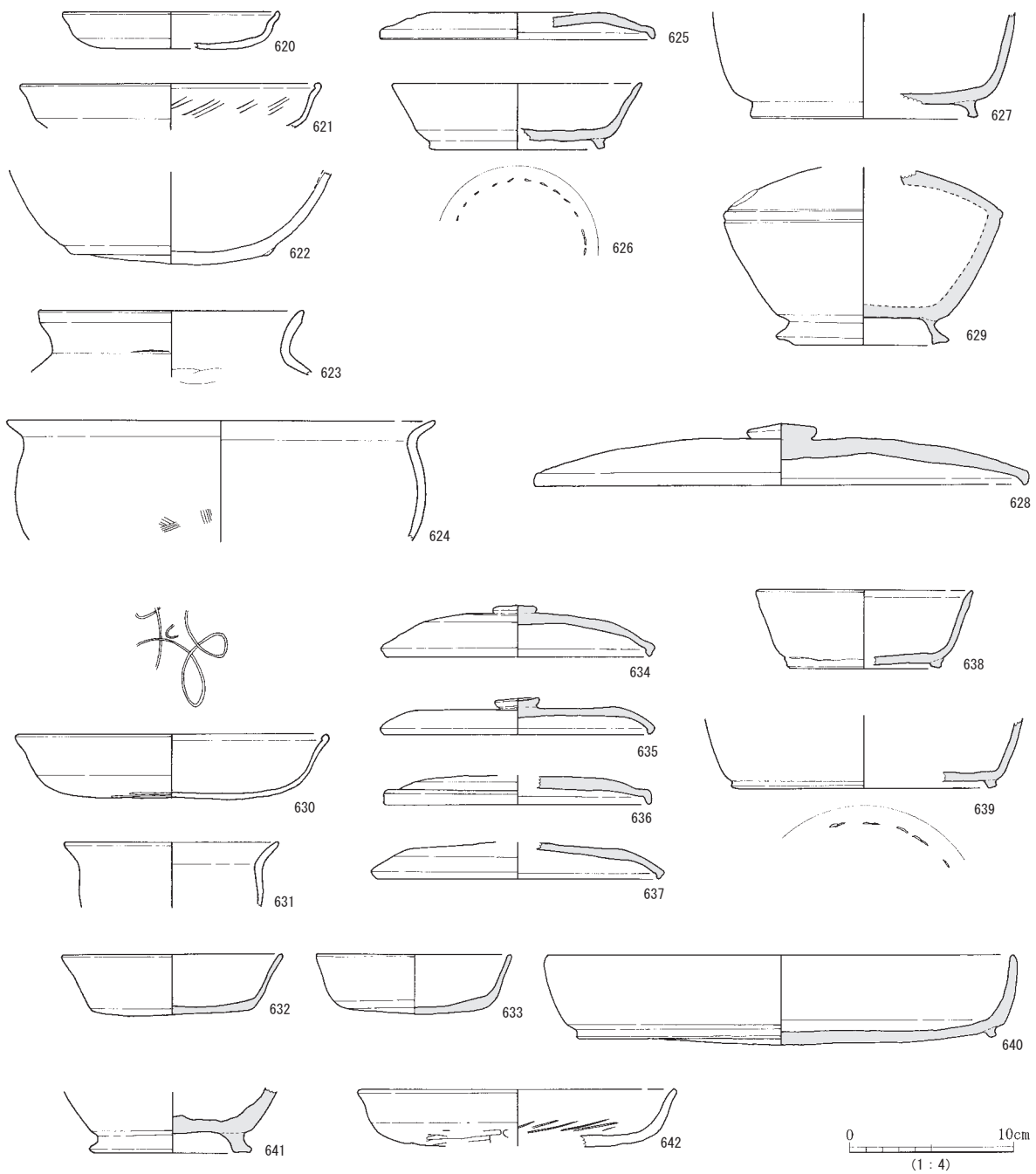


图 159 10 区 (A 1 棟) 古代遺物 (3)

(第 5 面 776・781・930・935 溝出土)

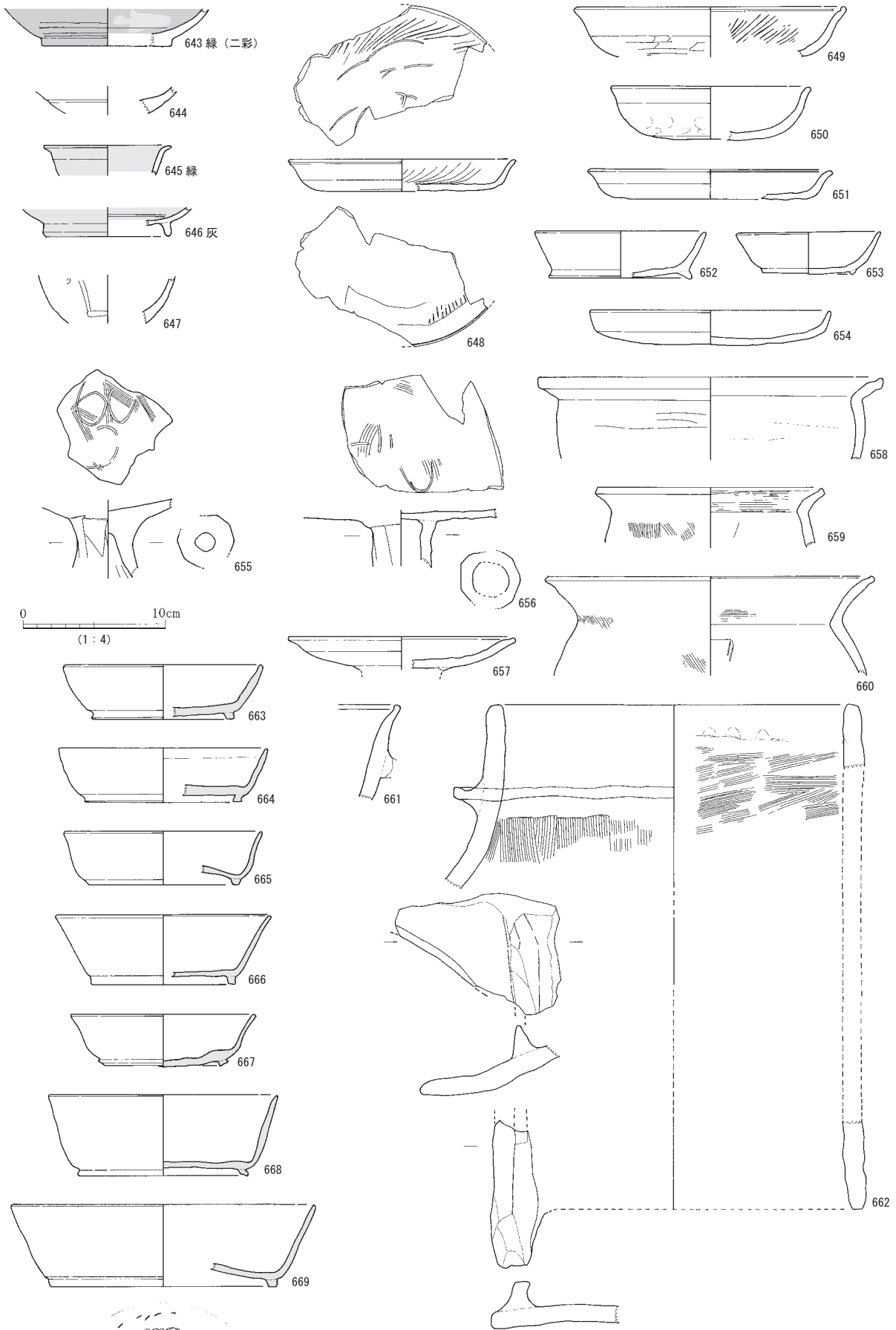


图 160 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (1)

(第 2 層、第 2 層最下部、第 3 層出土)

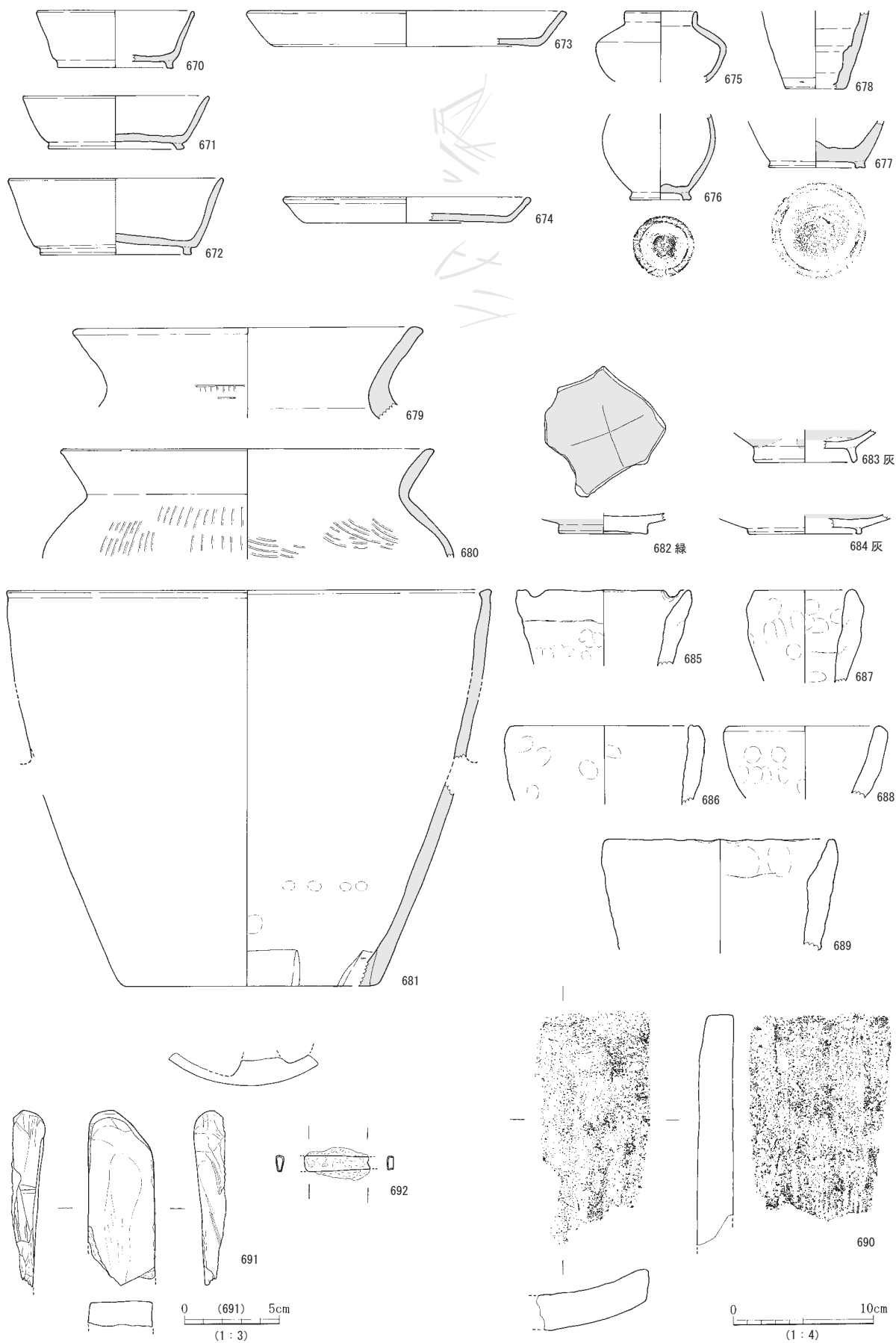


图 161 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (2)

(第 3 層出土)

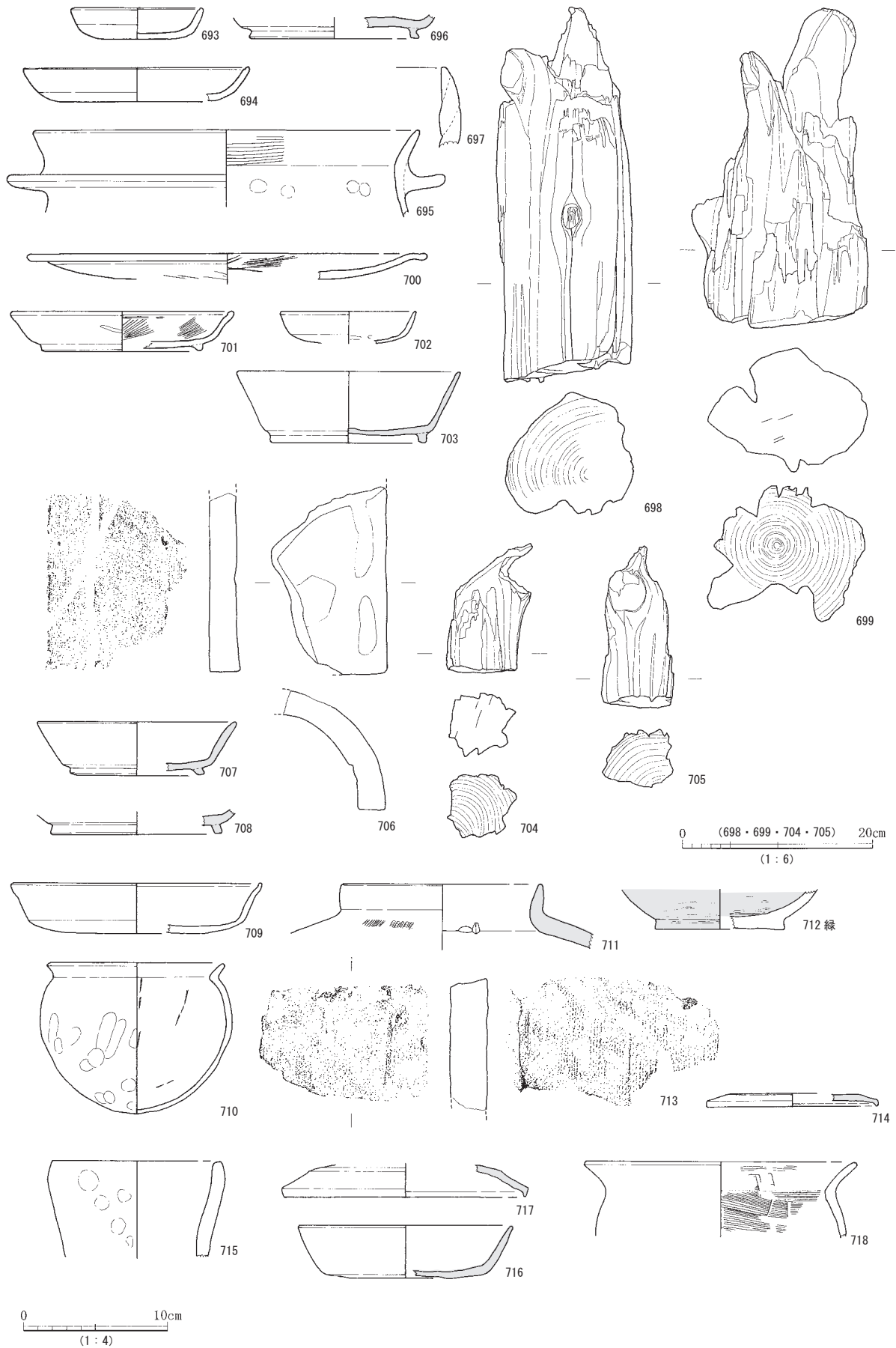


图 162 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (3)

(第 4 面掘立柱建物 1、第 4・5 面掘立柱建物 2・3・4・8 出土)



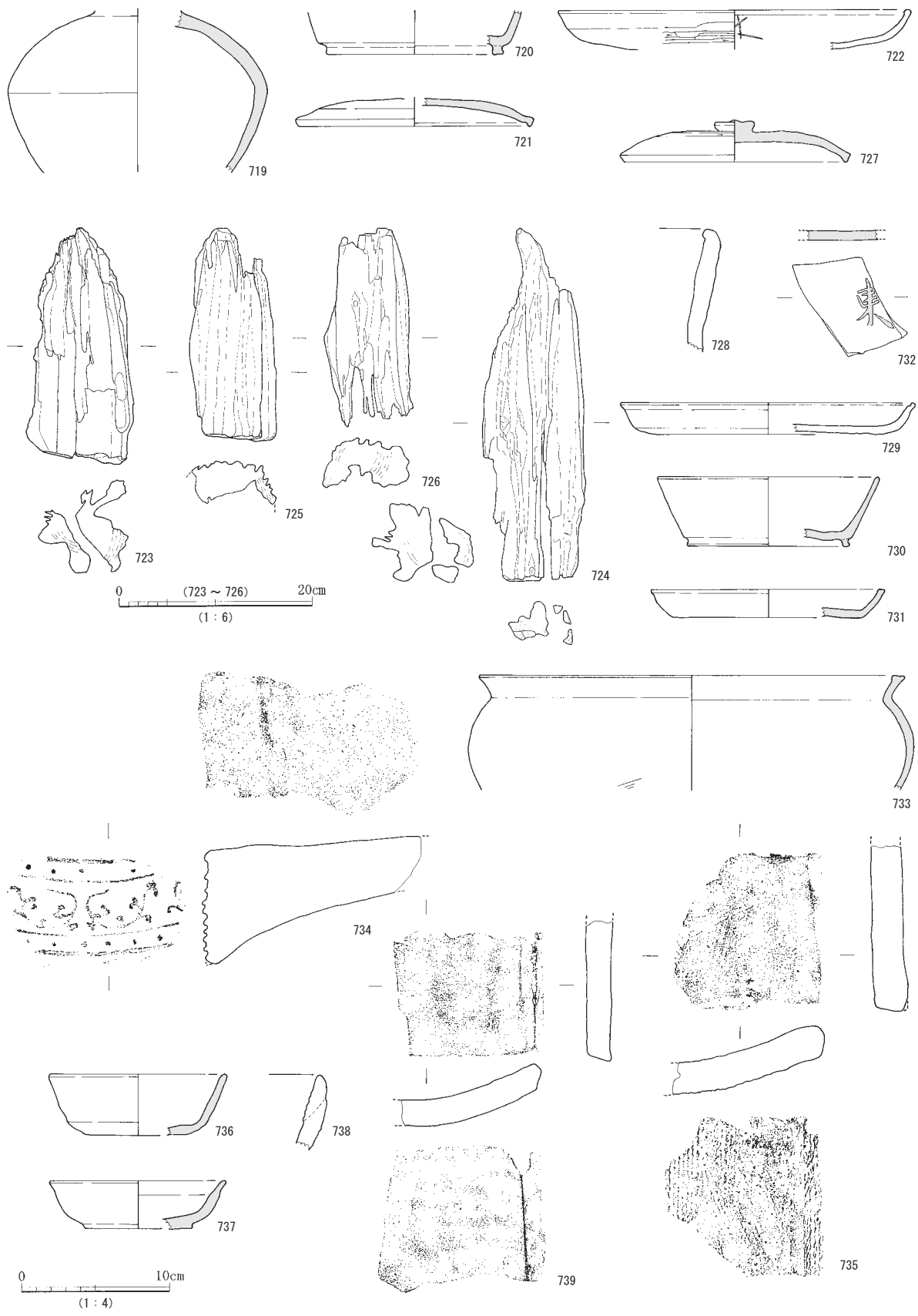


图 163 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (4)

(第 4・5 面掘立柱建物 9、第 4 面掘立柱建物 10、第 4・5 面掘立柱建物 11・12 出土)

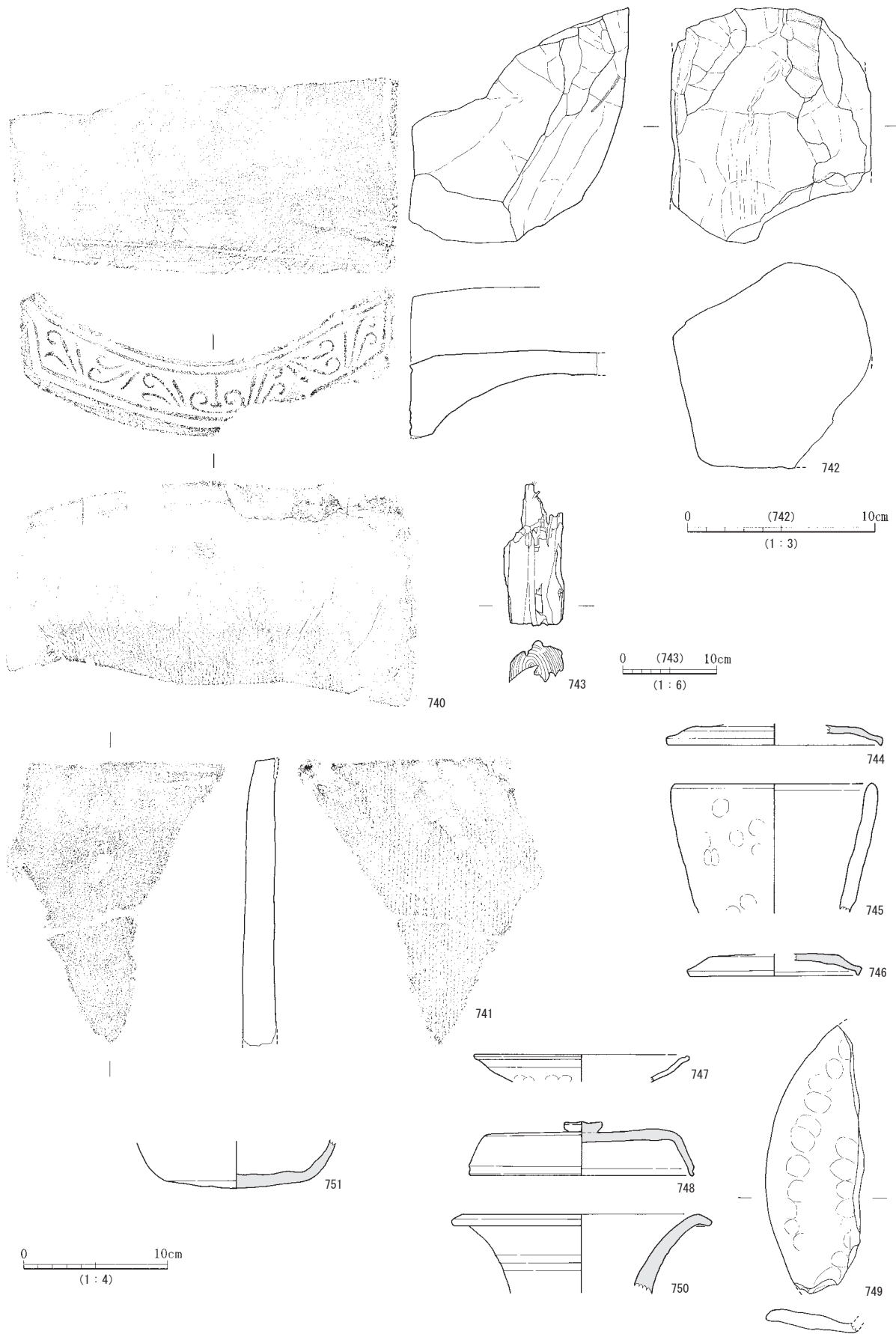


图 164 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (5)

(第 4・5 面掘立柱建物 12・13・14・19 出土)

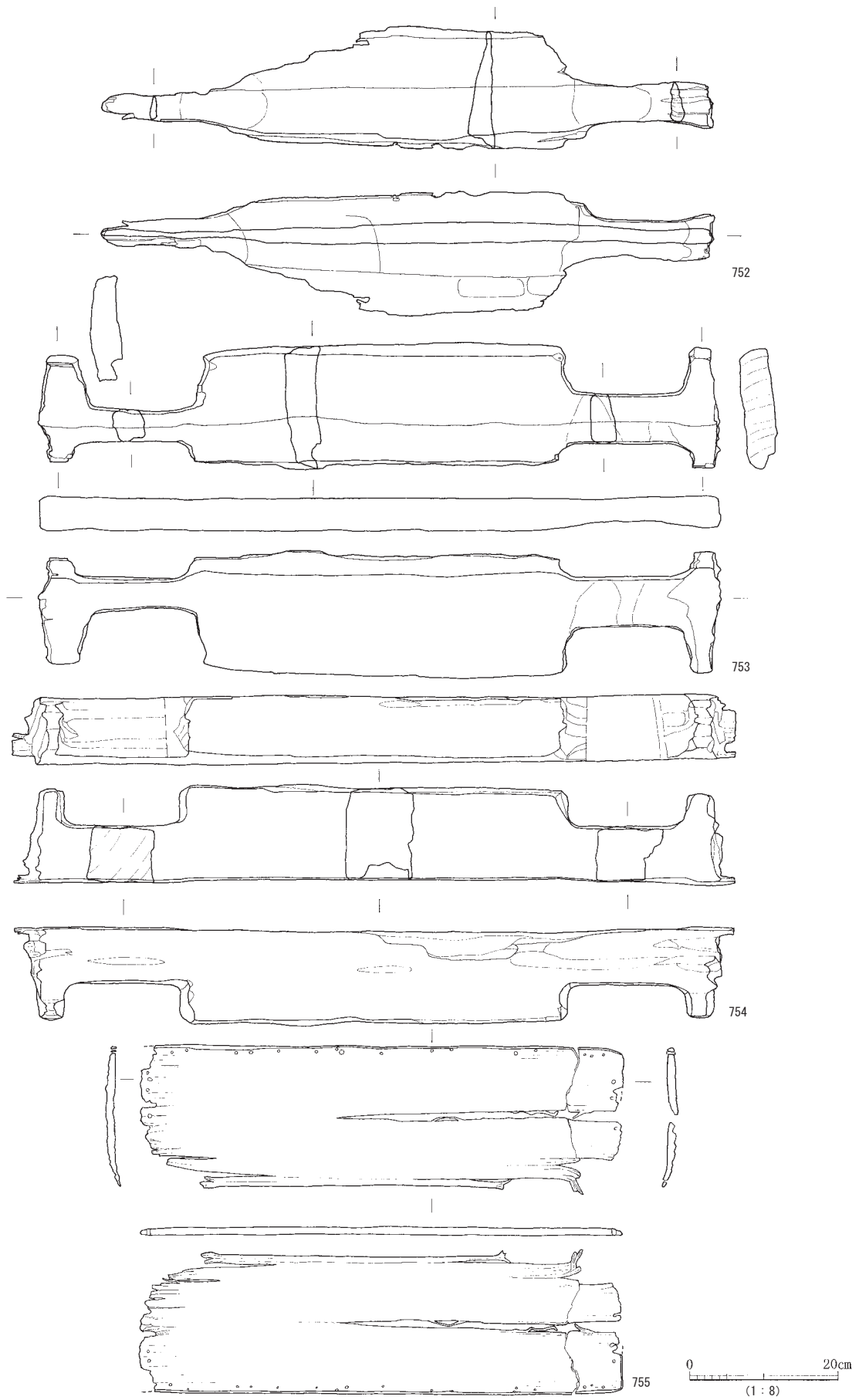


图 165 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (6)

(第 4 面 353 井戸出土)

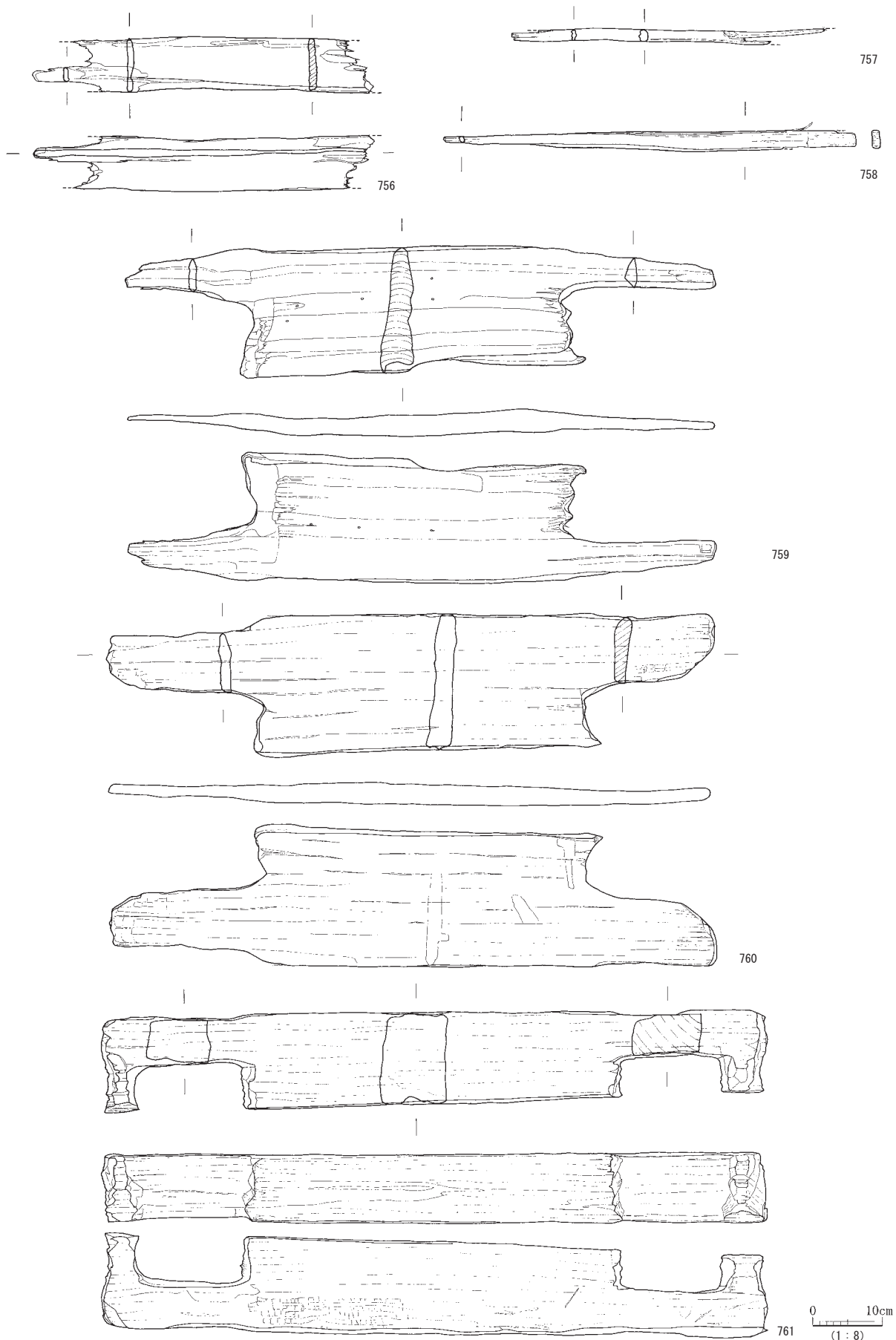


图 166 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (7)

(第 4 面 353 井戸出土)

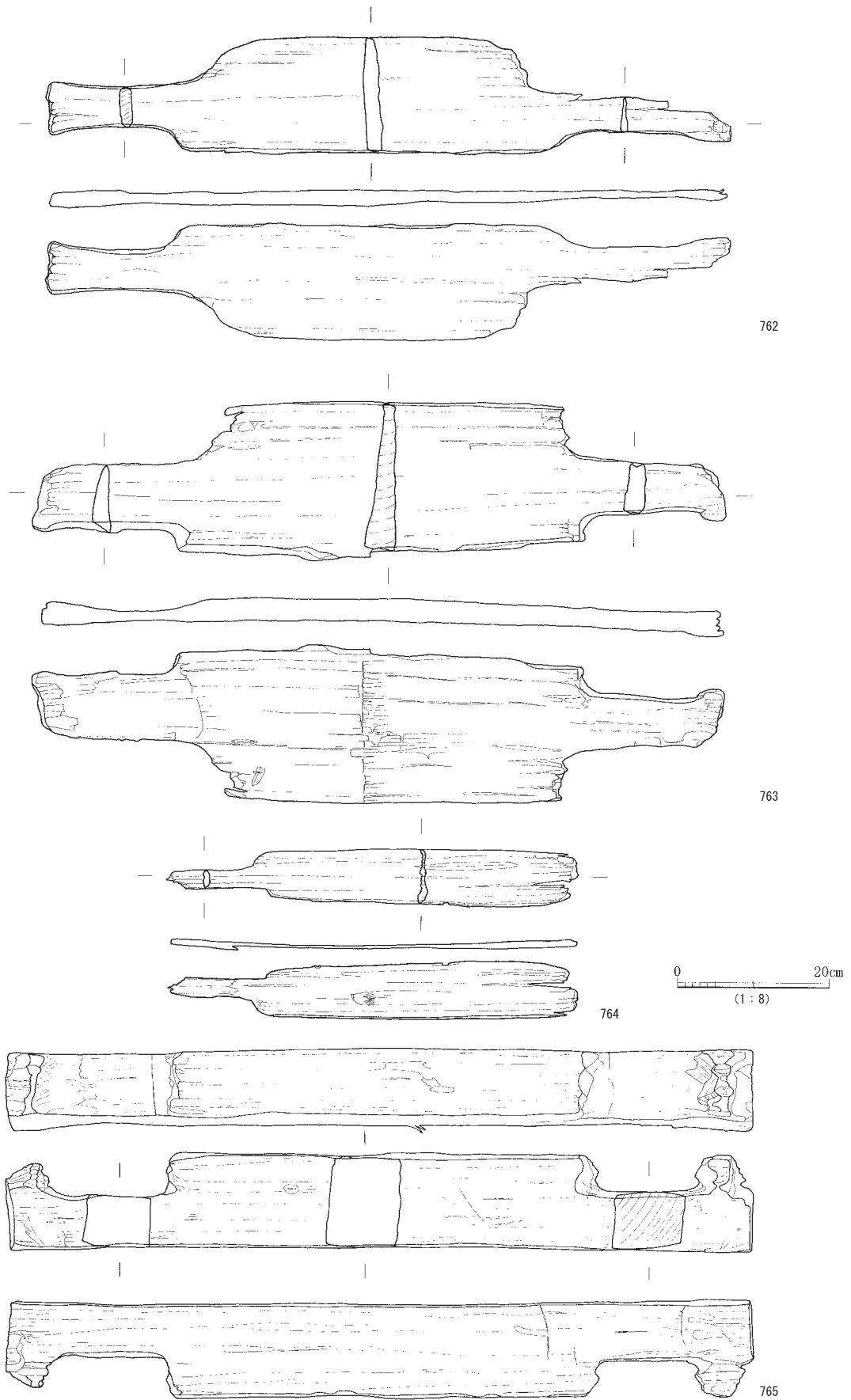


图 167 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (8)

(第 4 面 353 井戸出土)

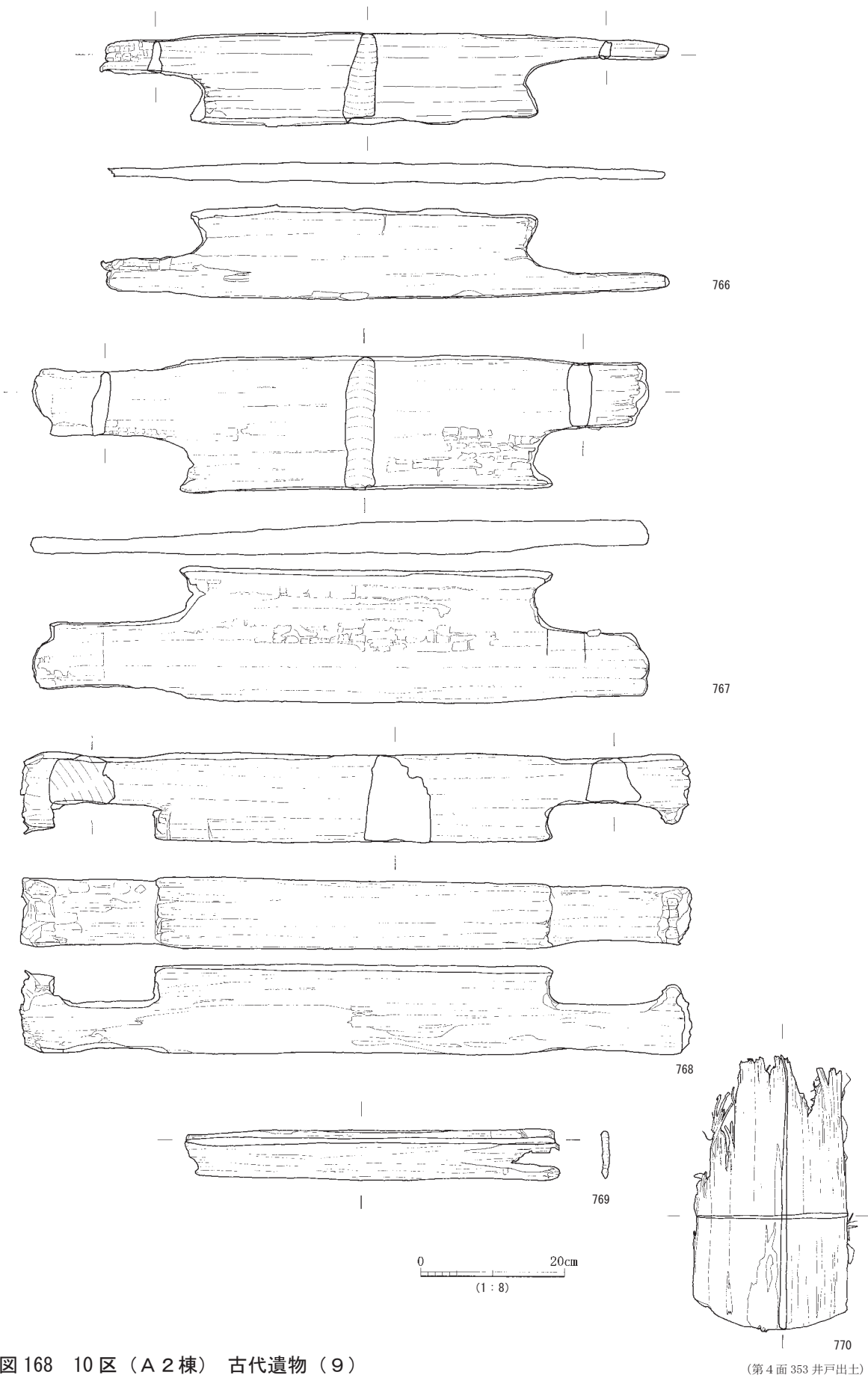


图 168 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (9)

770  
(第 4 面 353 井戸出土)

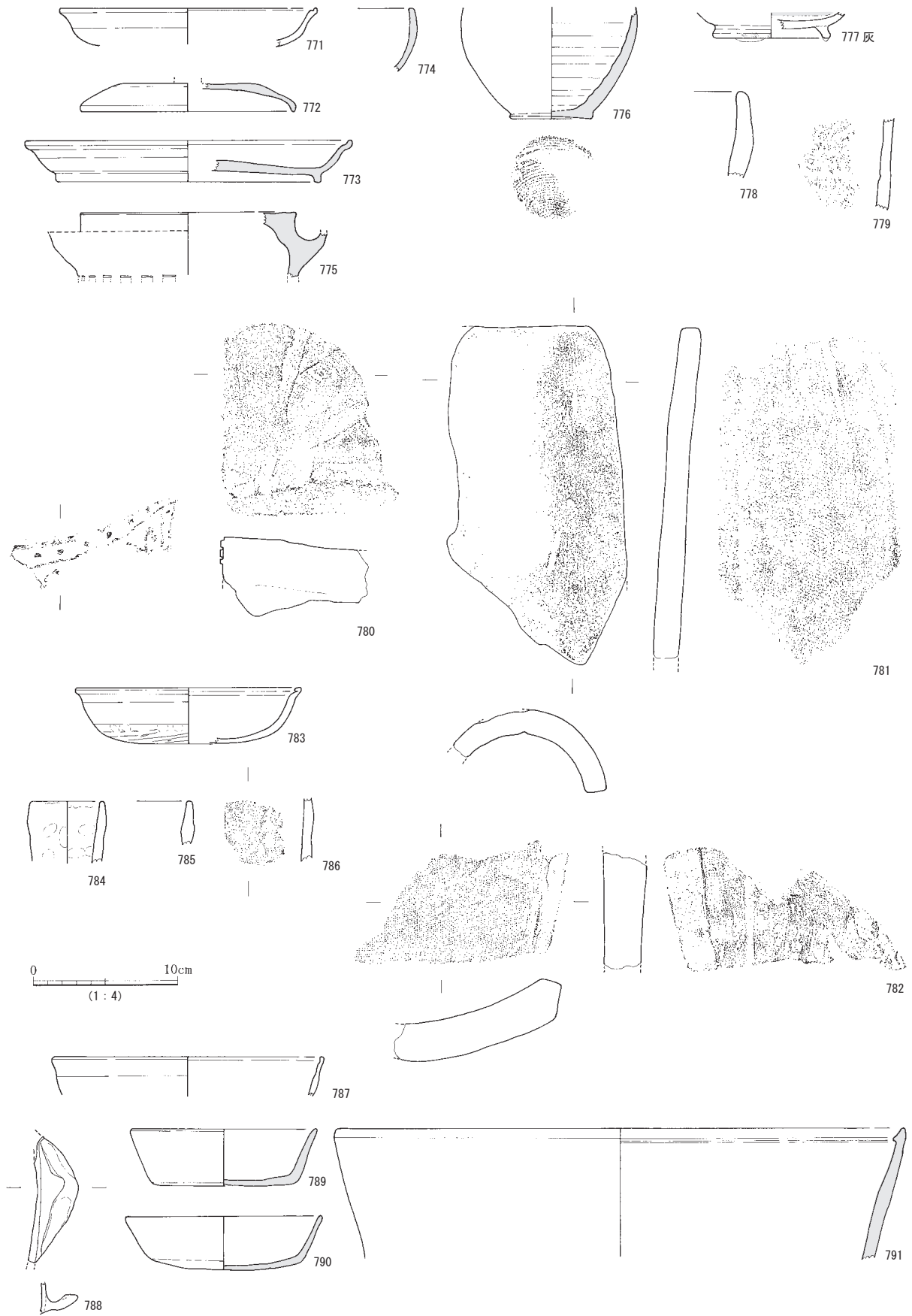


图 169 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (10)

(第 4 面 353・357 井戸、第 5 面 630 井戸出土)

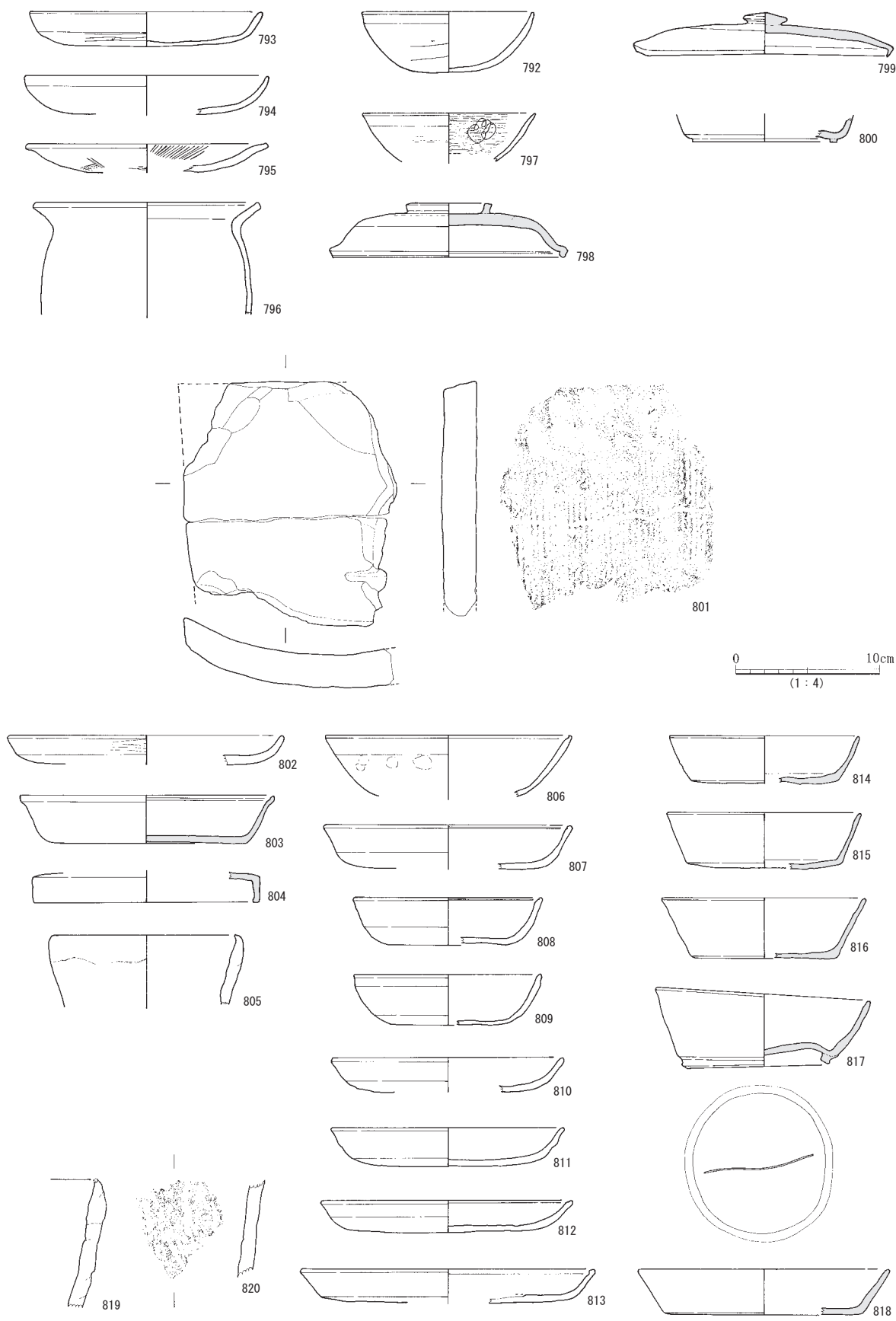


図 170 10区 (A 2棟) 古代遺物 (11)

(第4面 297・299・300・325・335・356 ビット出土)



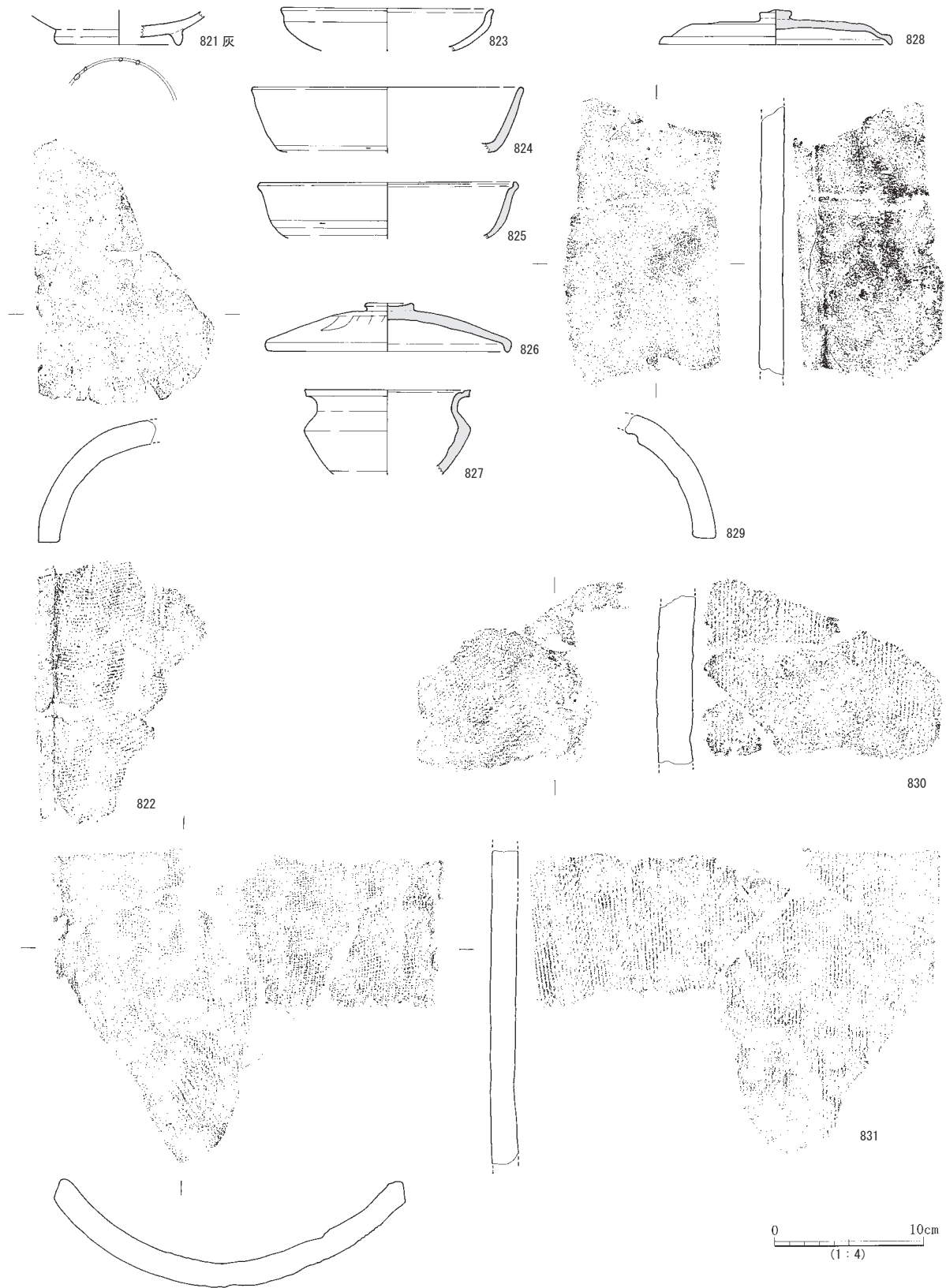


図 171 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (12)

(第 4 面 391・392・403・(434・435)・445 ビット出土)



图 172 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (13) (第 5 面 470・471・486・553・559・564・574・617・619・632・633・973 ビット、第 4 面 289 土坑出土)

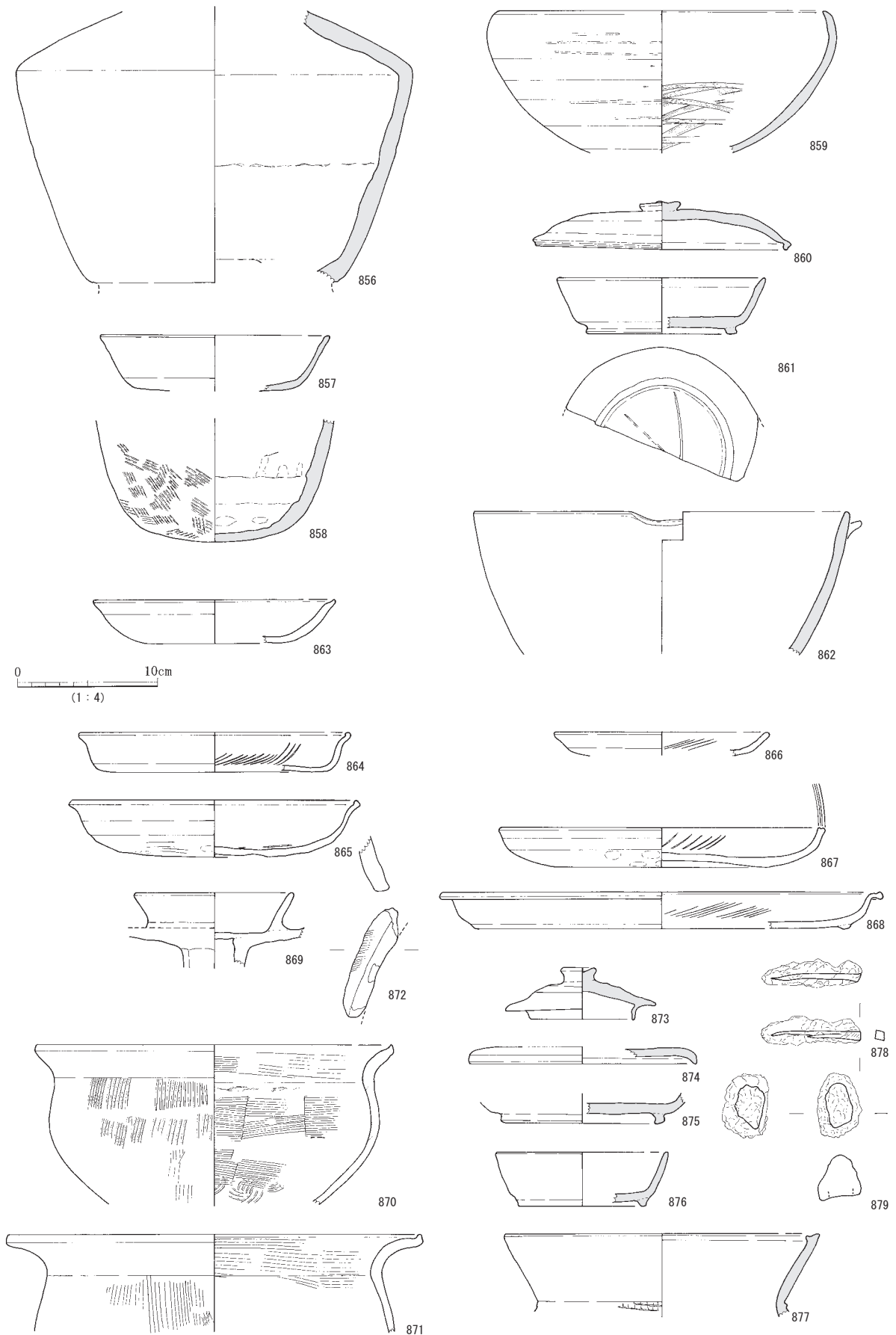


图 173 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (14)

(第 4 面 352・354・431・504・685 土坑、329 溝出土)

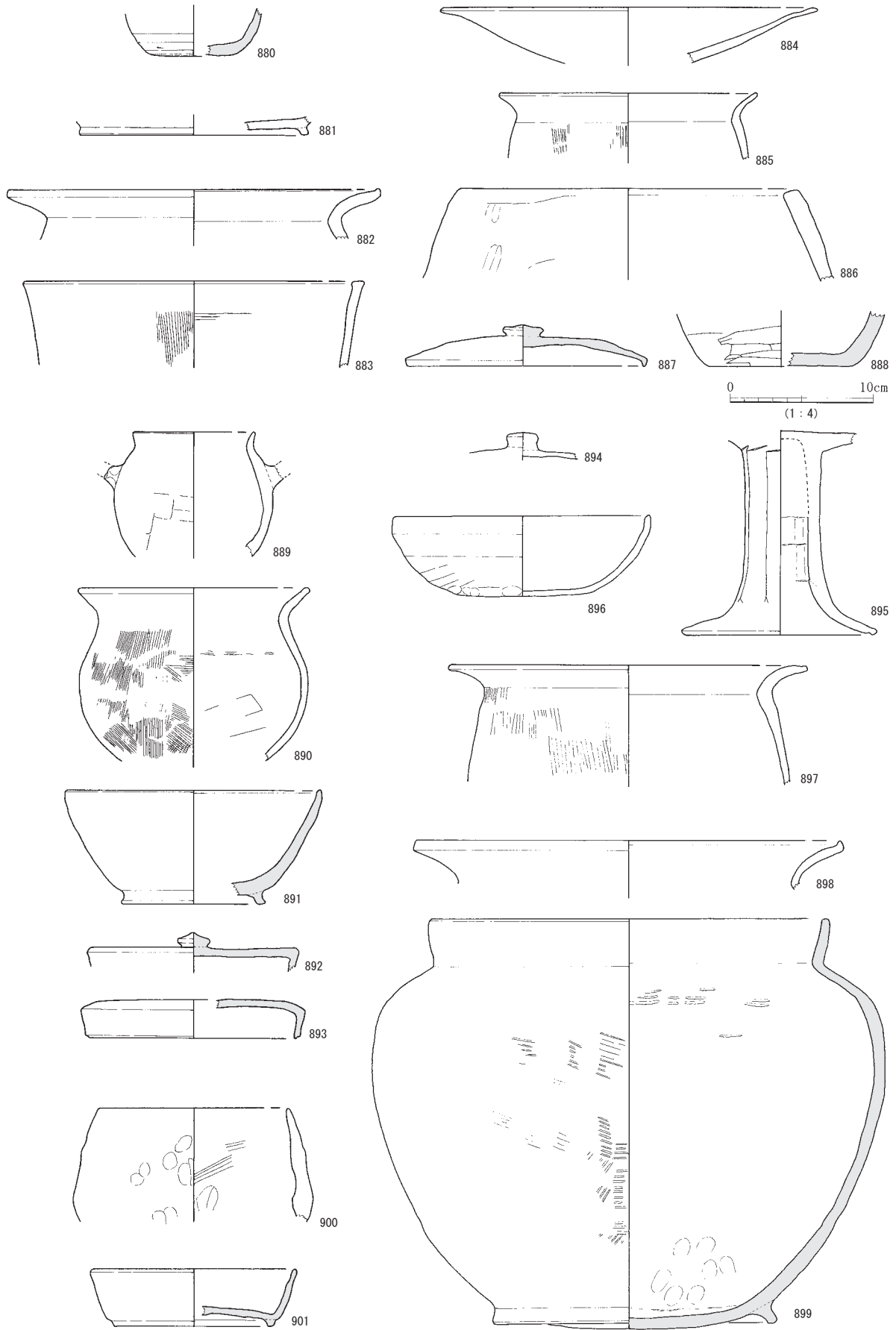


图 174 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (15)

(第 5 面 457・464・482・588・600 溝、538 落ち込み、第 4 面 298・351・446・447 土器群出土)

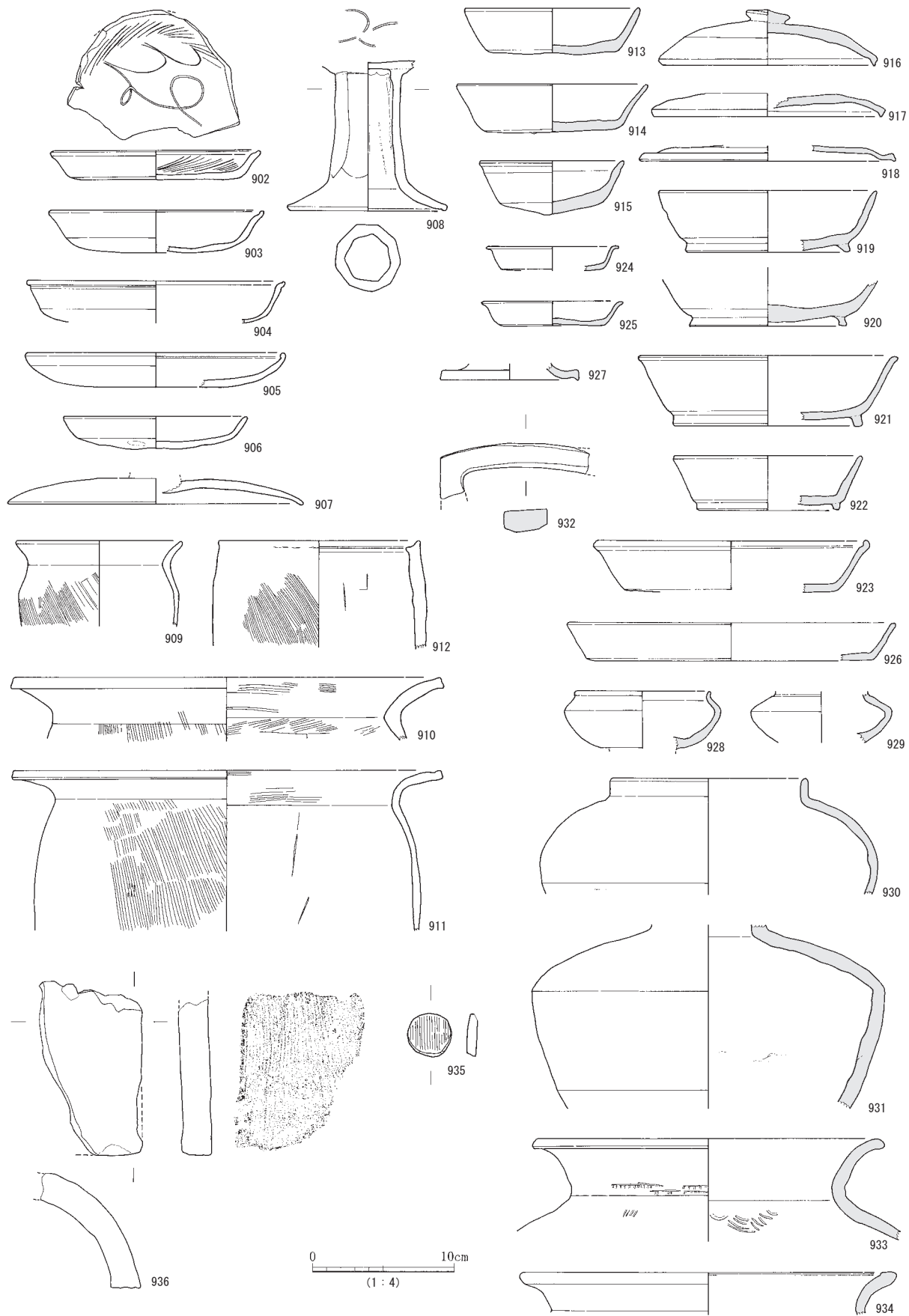


图 175 10 区 (A 2 棟) 古代遺物 (16)

(第 4 層出土)

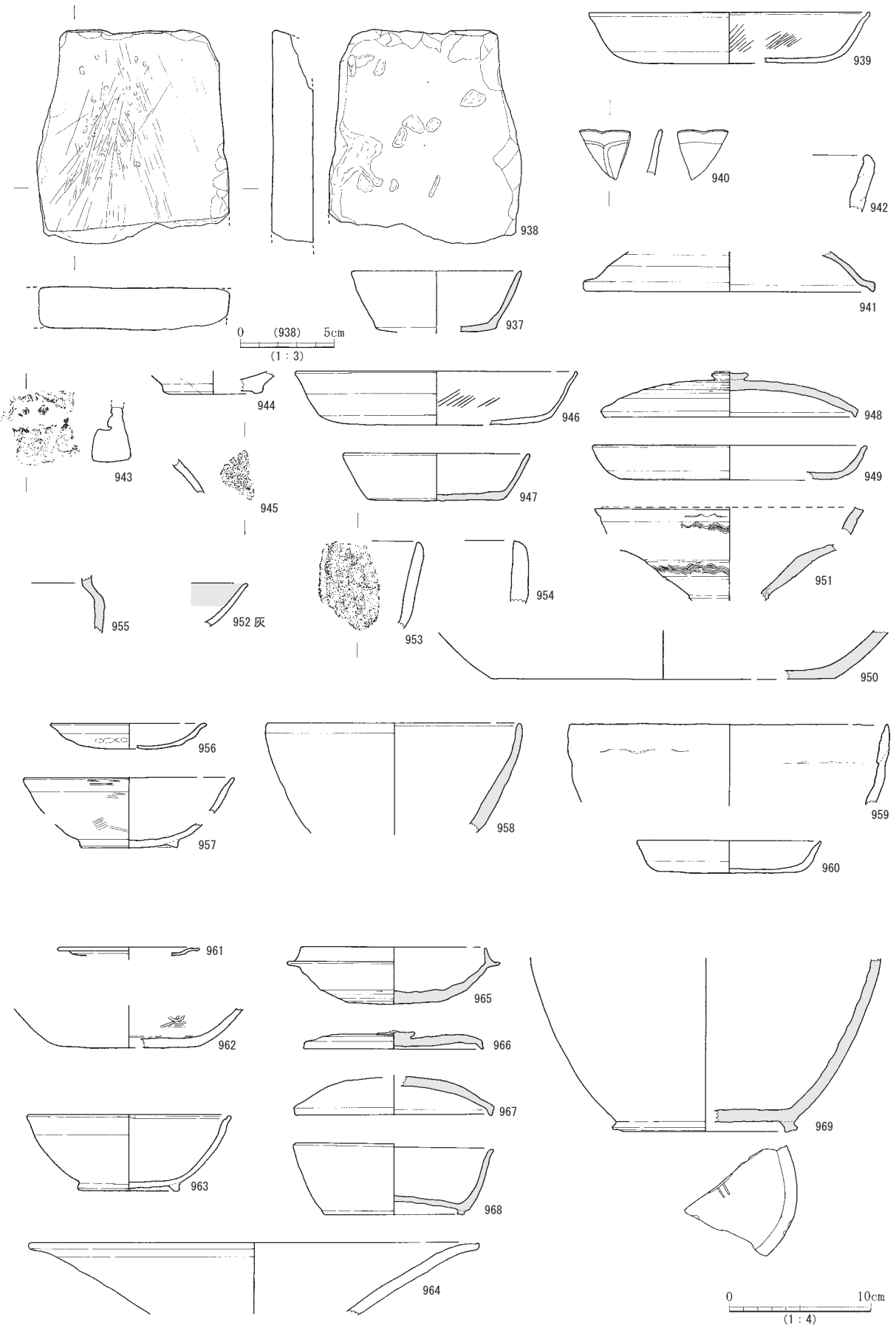


図 176 11 区 中世・古代遺物

(第3層下部、第3層以下、第4面291ピット、277土坑、279溝、第4層上部、第4層、第4層下部、第5面377・537・539ピット、568土坑、第5層出土)

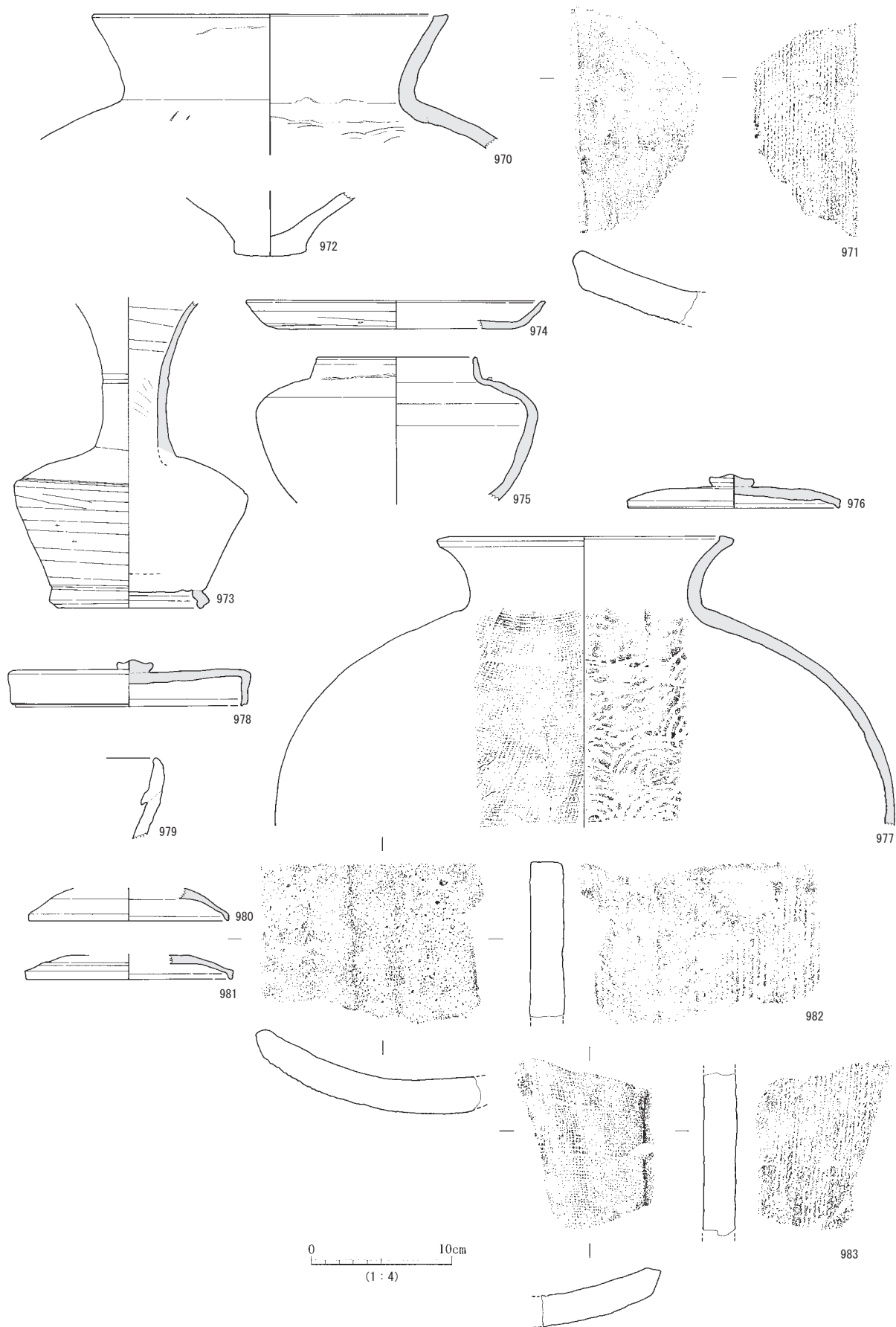


図 177 11 区 古代遺物 (1) (第5層、第6面掘立柱建物1・3・525・526・(603 or 604)・605・696・840・844 ビット出土) \*972は弥生土器

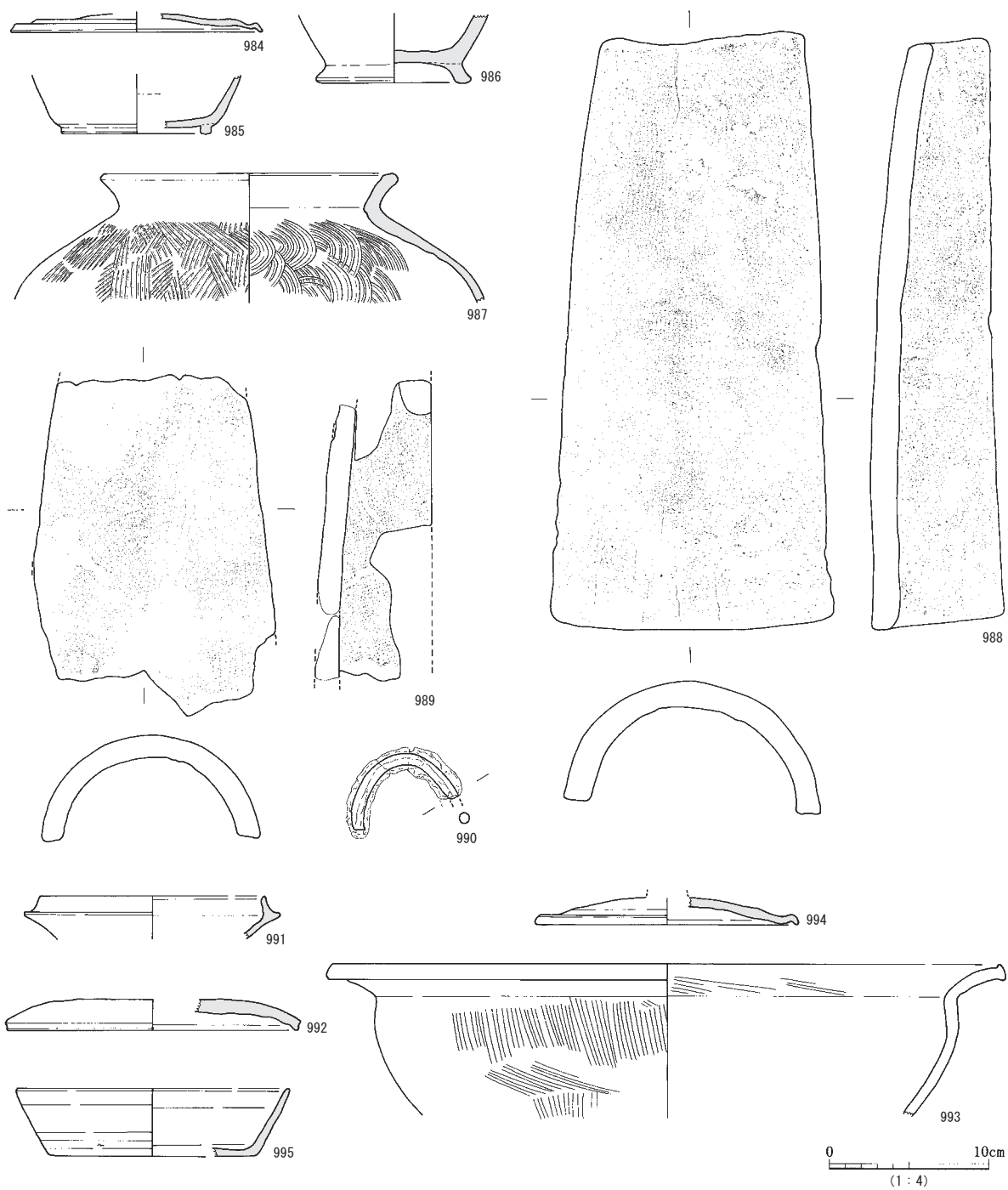


图 178 11 区 古代遺物 (2)

(第 6 面 674・803 土坑、426・652・802 溝出土)



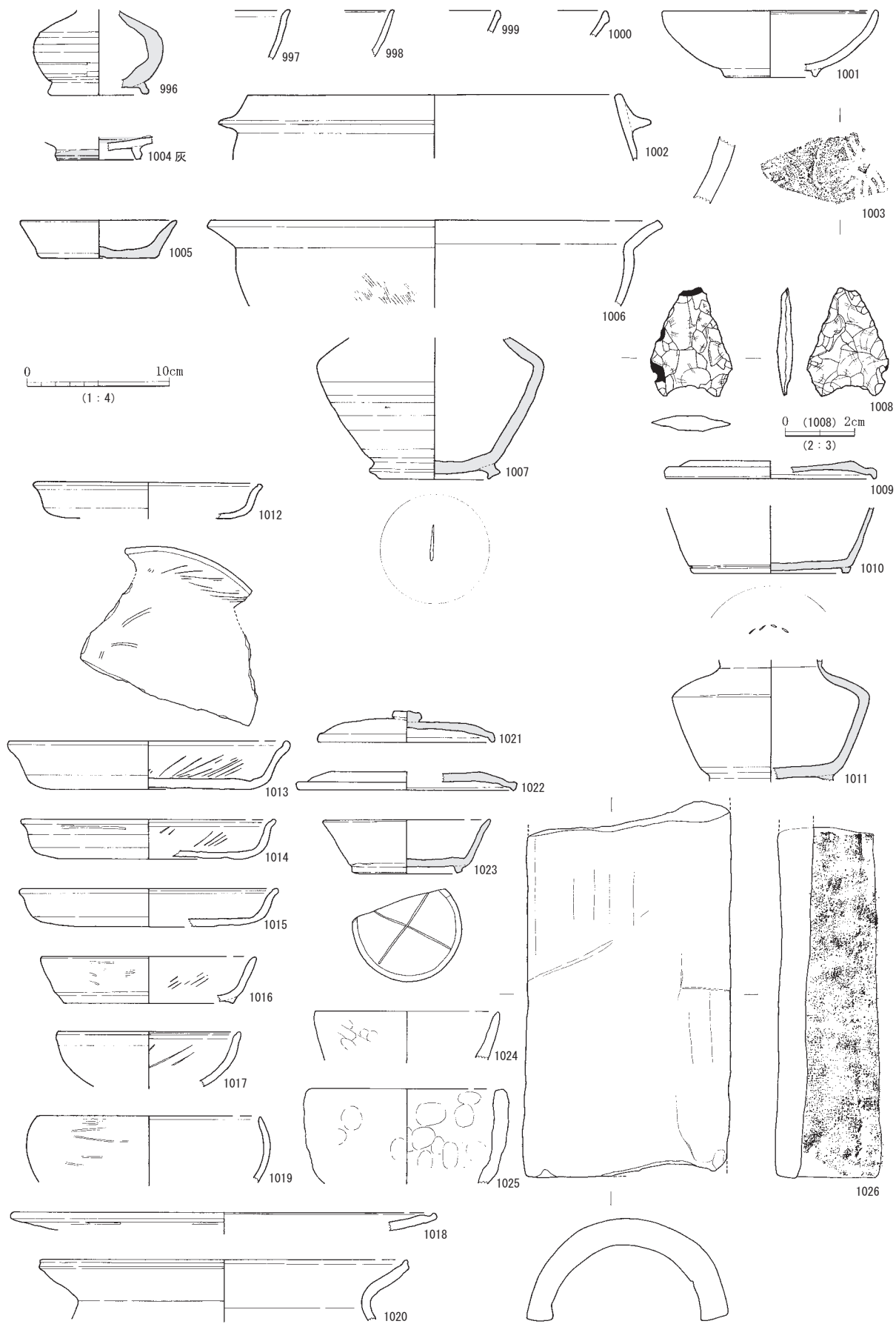


图 179 12 区 中世・古代遺物 (1)

(第0層、第2層最下部、第3面33溝、48土坑、第3層、第4面89竪穴建物出土)  
\*1008は縄文~弥生時代



図 180 12区 中世・古代遺物（2）

（第4面掘立柱建物2、57・72・124・125・126・130・150・174・179・211・217・235 ビット出土）

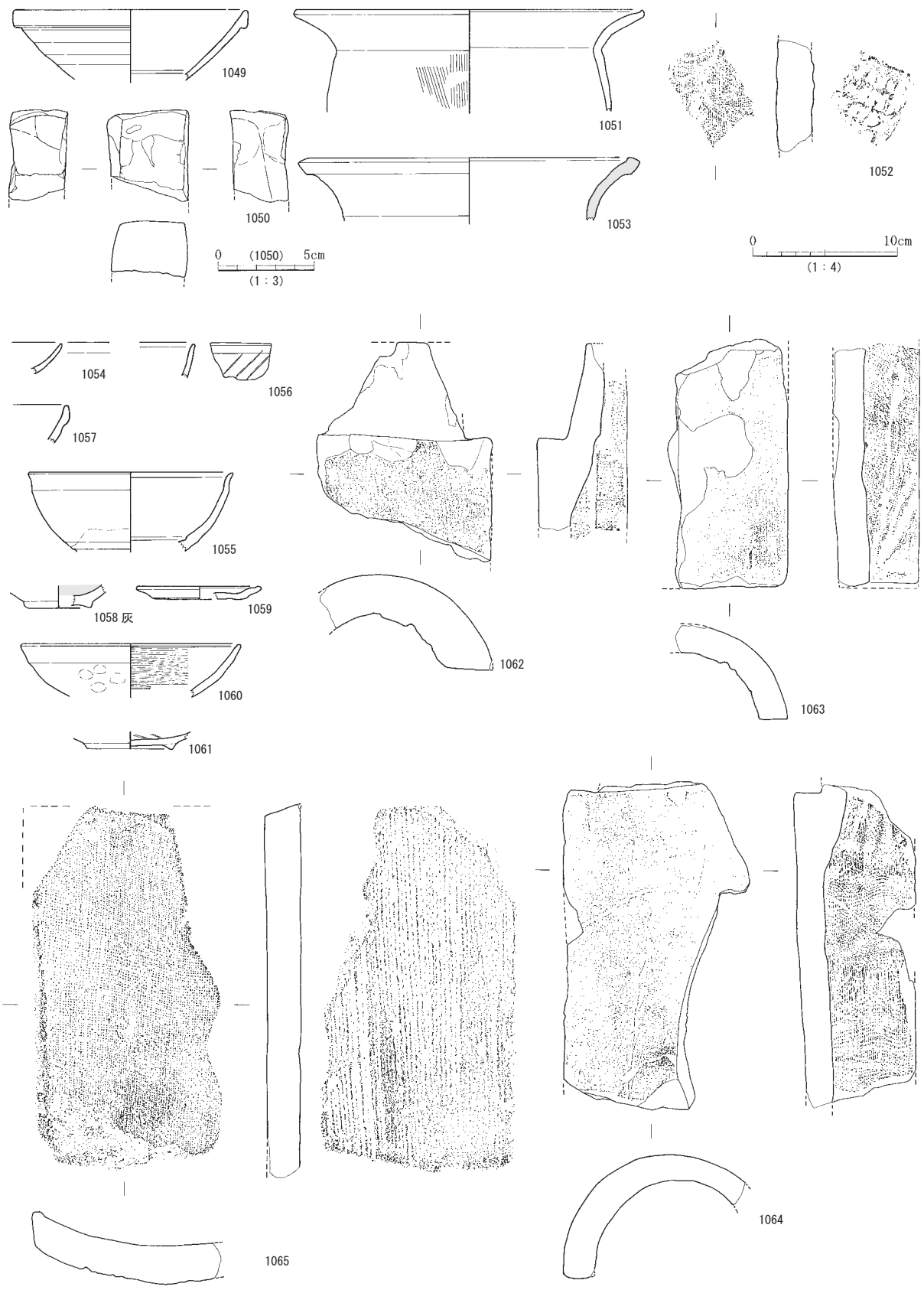


図 181 12 区 中世・古代遺物 (3)

(第 4 面 249・277・279・289 ビット、85 土坑出土)

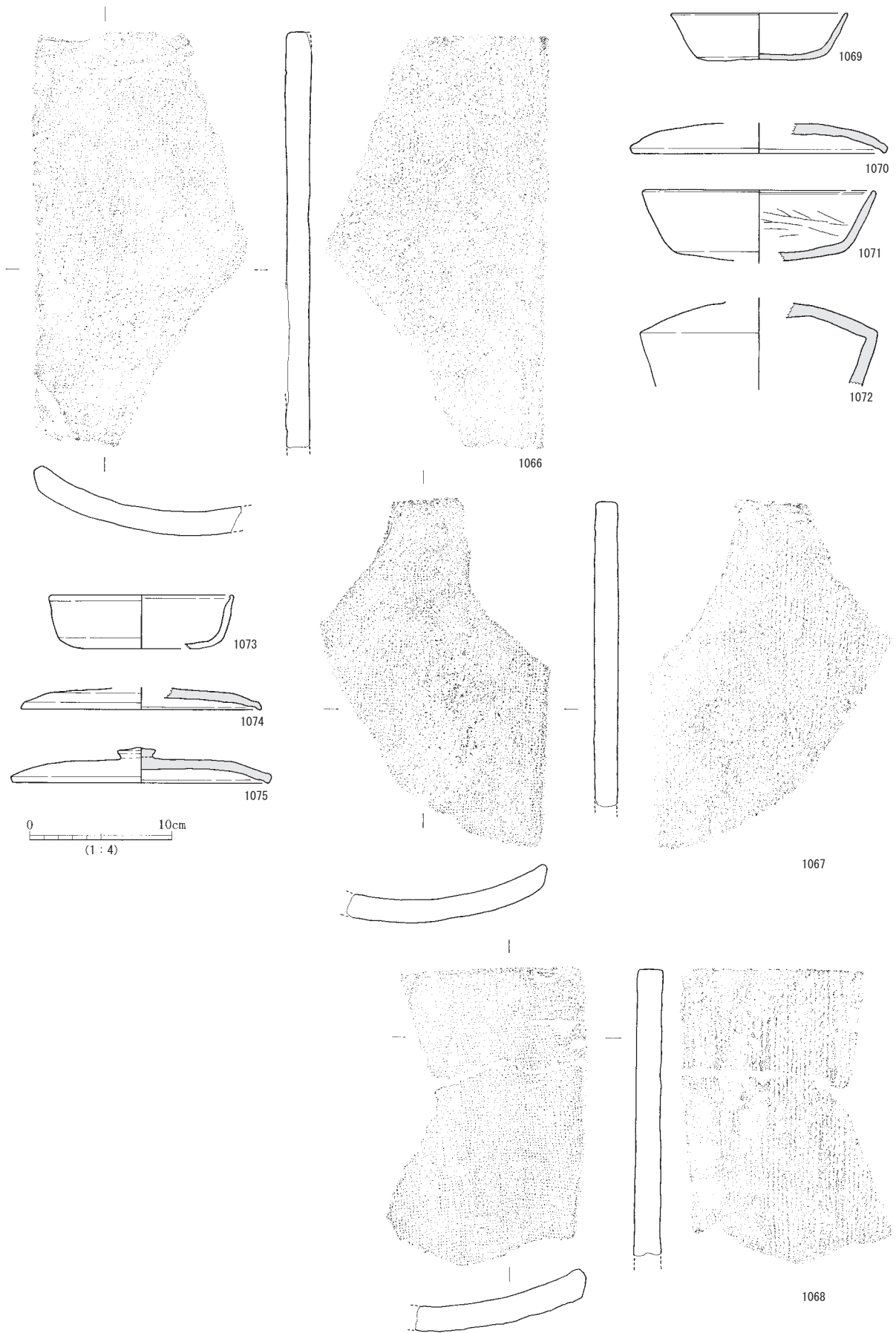


图 182 12 区 古代遺物 (1)

(第 4 面 85・86・88・90 土坑出土)

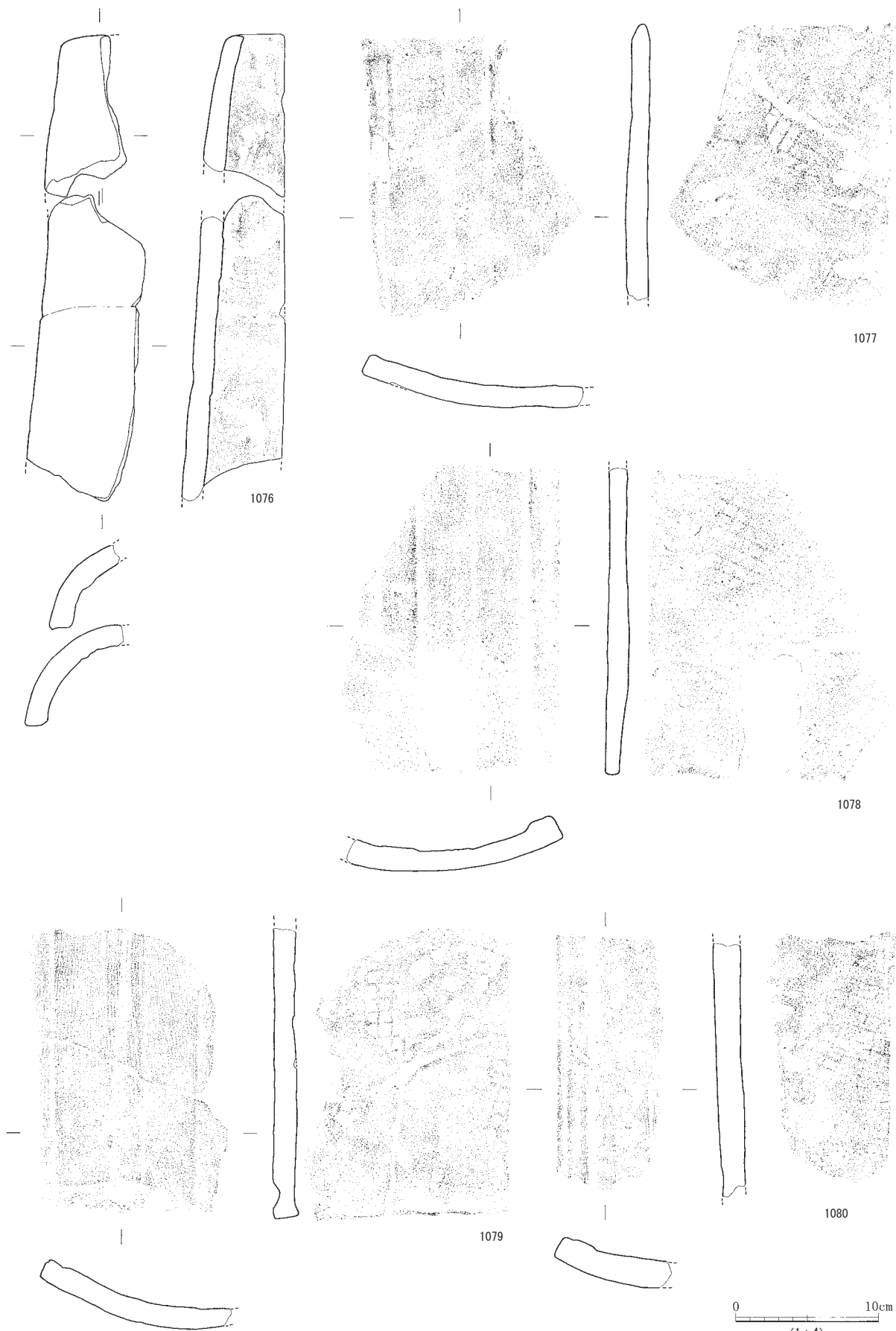


图 183 12 区 古代遺物 (2)

(第 4 面 78 土坑出土)

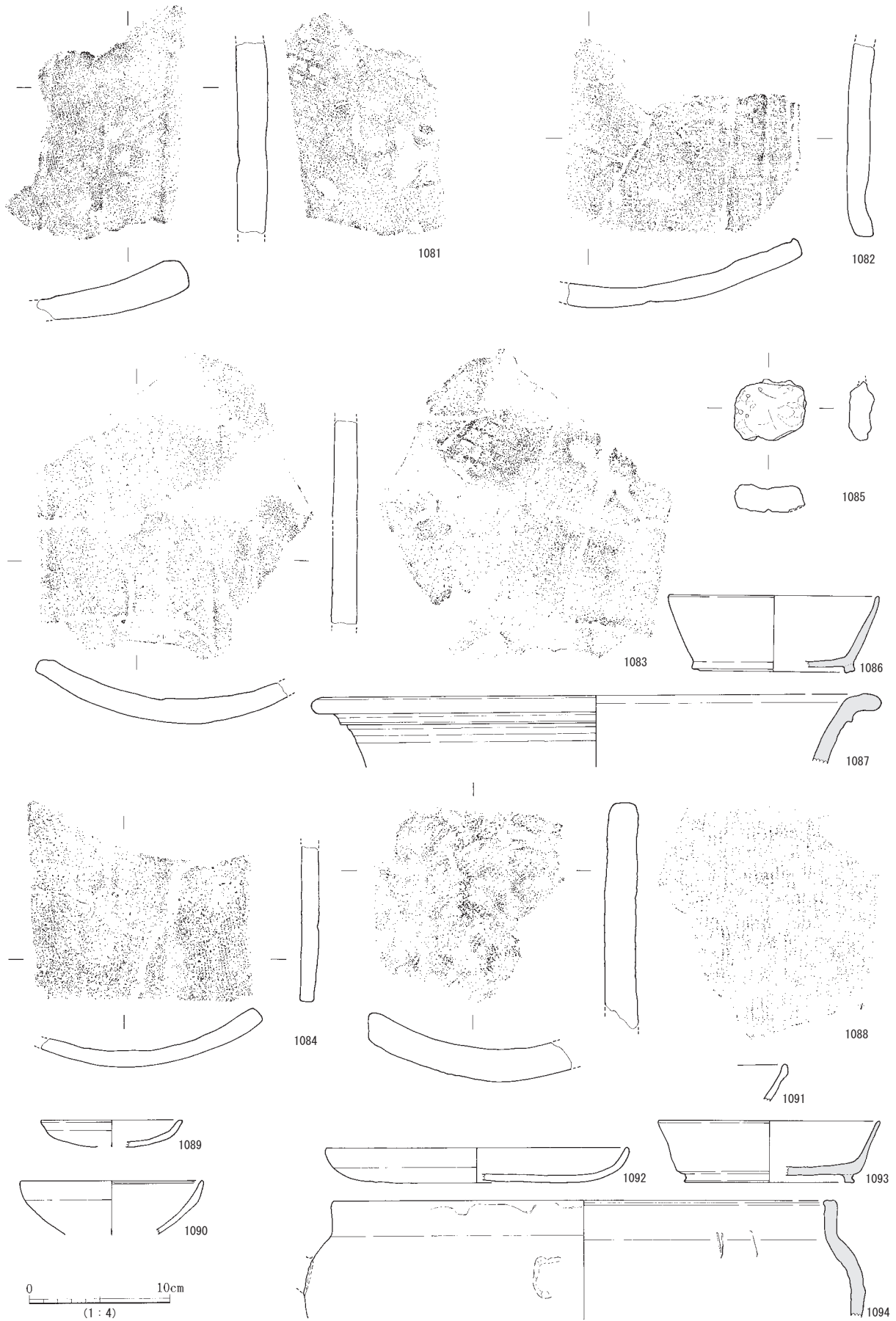


图 184 12区 古代遺物(3)

(第4面78土坑、80・81溝、74落ち込み出土)

## 第6章 禁野本町遺跡出土の動物遺存体

大阪市立大学 大学院 医学研究科器官構築形態学（解剖学第2） 安部みき子

本遺跡から出土した動物遺存体は17点で、このうち9区334ピット（第6面掘立柱建物1東辺8世紀中頃前後か）から出土した3点は骨の表面の緻密質がはがれたものである可能性が高い。

11区5便槽（第2面男廁 昭和14～20年）の西半から出土した骨は、イヌの左肩甲骨と7点の左肋骨、左右不明の肋骨片が11点で、骨の状態からいずれも幼体である。

同じく5便槽の東半からはイヌの左右の下顎骨と乳臼歯、歯の破片の4点が出土しており、左右の下顎骨には第3乳臼歯が遺存しており、後臼歯は全て未萌出であった。これらの下顎骨は同一個体であり、永久歯が未萌出であることや乳犬歯の歯槽が深いことなどから、生後6カ月未満と推定される。

さらに5便槽内埋土の西半と東半の骨片も、同一個体の可能性が高い。

表7 禁野本町遺跡の動物遺存体

出土遺構	種名	出土部位		詳細および計測値 (mm)	資料
		左右	部位名		
9区 第6面 334ピット	不明	不明	不明	3点 骨の緻密質の層のみ?	
11区 第2面 5便槽 (西半)	イヌ	左	肩甲骨	幼体. 関節窩未骨化	資料B
	イヌ	左	肋骨	最大長 52.20	
	イヌ	左	肋骨	最大長 42.14	
	イヌ	左	肋骨	最大長 50.81	
	イヌ	左	肋骨	最大長 51.79	
	イヌ	左	肋骨	最大長 49.25	
	イヌ	左	肋骨	最大長 45.60	
	イヌ	左	第1肋骨	最大長 29.21	
11区 第2面 5便槽 (東半)	イヌ	不明	肋骨	6点 肋骨頭～骨体中央まで遺存	
	イヌ	不明	肋骨	5点 骨体中央～胸骨端まで遺存	
	イヌ	右	下顎骨	左右ともに第3乳臼歯遺存. 後臼歯は全て未萌出. 乳犬歯の歯槽あり. 生後6カ月未満	資料A
	イヌ	左	下顎骨		
	イヌ	不明	乳臼歯	1点	
	イヌ	不明	歯	1点 破片	

表8 イヌの下顎骨の計測値

資料番号	A	
	右	左
下顎骨全長 (1) id - goc	61.36	61.38
下顎骨全長 (2) id - Cm	62.79	62.80
下顎枝長 M 後縁より goc	14.94	14.89
goc より Pm 2 前縁まで	47.47	47.28
歯槽最大長 id - M 後縁	48.58	46.10
頬臼歯長 (1) Pm 1 - M 後縁	37.58	37.08
頬臼歯長 (2) Pm 2 - M 後縁	34.31	35.17
小白歯長 (1) Pm 1 - Pm 4	25.83	25.11
小白歯長 (2) Pm 2 - Pm 4	22.71	23.33
大白歯長 M 1 - M 後縁	12.63	11.38
顎高 gov - 4	11.31	11.25
下顎枝高 gov - Cr	21.06	21.47
下顎体高 (1) M 後縁	13.89	14.25
下顎体高 (2) M 1 - Pm 4	11.37	11.83
下顎体高 (3) Pm 2 の前	10.60	11.17
下顎体厚 M 1 - M 2	6.95	7.07

表9 イヌの肩甲骨の計測値

資料番号	B
	左
肩甲骨長 (肩甲棘に平行な脊椎縁から肩甲関節窩前縁間の距離)	38.96
棘長	30.65
関節窩最大高	13.56
関節窩最大幅	8.55
関節面高	未骨化のため計測不可
頸部最小幅	11.40
頸部最小高	7.23

## 第7章 禁野本町遺跡の植物遺体

### 1. はじめに

禁野本町遺跡（10 - 1 調査）8区第6面249井戸（奈良時代）出土の植物遺体について報告する。同定分類した植物遺体は、以下のとおりである。

[ 被子植物（単子葉植物） ] （ ）…植生環境を示す。

- |                            |   |
|----------------------------|---|
| 1. イバラモ科 Najadaceae        | イバラモ属 <i>Najas</i> sp. (池沼)             |
| 2. イネ科 Gramineae           | イネ <i>Oryza sativa</i>                  |
| 3. カヤツリグサ科 Cyperaceae (湿地) |   |
| 4. ツククサ科 Commelinaceae     | イボクサ <i>Aneilema keisak</i> (一年草 水湿地)   |
| 5. ミズアオイ科 Pontederiaceae   | コナギ <i>Monochoria vaginalis</i> (池中 水田) |

[ 被子植物（離弁花類） ]

- |                       |  |
|-----------------------|--|
| 6. ヒユ科 Amaranthaceae  | ヒユ属 <i>Amaranthus</i> sp. (草本)                                       |
| 7. バラ科 Rosaceae       | モモ <i>Prunus persica</i>   |
| 8. カタバミ科 Oxalidaceae  | カタバミ <i>Oxalis corniculata</i> (平地)                                  |
| 9. ブドウ科 Vitidaceae    | ブドウ属 <i>Vitis</i> sp.<br>ノブドウ <i>Ampelosis brevipedunculata</i> (山野) |
| 10. ウリ科 Cucurbitaceae | ヒョウタンの仲間 <i>Lagenaria</i> sp.  |

[ 被子植物（合弁花類） ]

- |                  |                               |
|------------------|-------------------------------|
| 11. シソ科 Labiatae | イヌコウジュ属 <i>Mosla</i> sp. (草地) |
|------------------|-------------------------------|

[ 珪藻綱 Bacillaniophyceae（羽状目 Pennales） ] （ ）…生息環境を示す。

- |                           |  |
|---------------------------|--|
| 1. フナガタケイソウ科 Naviculaceae | <i>Pinnularia viridis</i> (湖沼沿岸性)<br><i>Pinnularia borealis</i> (湖沼) |
| 2. ニッチア科 Nitzschiaceae    | <i>Hantzschia amphioxys</i> (湖沼)                                     |
| 3. イチモンジケイソウ科 Eunotiaceae | <i>Eunotia arcus</i> (広域)<br><i>Eunotia pectinalis</i> (湿地)          |
| 4. オビケイソウ科 Fragilariaceae | <i>Synedra ulna</i>  |

#### (1) 植物遺体についての調査方法

禁野本町遺跡（10 - 1）の井戸遺構から取り上げられたブロック土を水洗ふるいわけをして、植物遺体を拾い出す。これらの植物遺体は乾燥すると変形して同定調査ができなくなるためサンプル瓶に水浸けで保管する。これらの植物遺体の同定は、現生種の知識に基づいて標本と比較対照して行った。

#### (2) 珪藻分析

珪藻は主として水域に生息する珪酸の被殻を持つ単細胞植物であり、海水域から淡水域のほぼすべて



の水域に生活し、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息する。塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じてそれぞれの種類が固有にまたは許容範囲をもって多様な環境要因に生育する。珪藻の被殻は死後、堆積粒子として堆積物中に残存する。堆積物より検出した珪藻遺体の種類構成や組成は当時の堆積環境を反映し水域の環境を主とする古環境の復元に利用できる。

#### 珪藻分析の方法

1. 土壌を約 10g 程度ビーカーに採取して 30%過酸化水素水を加えて、有機物の分解と土壌粒子の分散を行う。
2. 化学反応終了後水を加え一昼夜放置してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を上澄み液が透明になるまで繰り返す。
3. ビーカーに残った残渣は、遠心分離器により細粒土を回収する。
4. 回収した細粒の適量を取りマウントメディア（封入剤）を用いて、プレパラートを作成する。プレパラートは生物顕微鏡 400 ～ 1000 倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。計数は、珪藻被殻が 100 個体以上になるまで行いプレパラート全面について精査した。

#### 2. 結果

植物遺体と珪藻分析の結果については、以下に示した。

#### 植物遺体同定結果

ヒョウタン 果皮片	6 個
コナギ 種子	1 個
カヤツリグサ科 種子	4 個
ブドウ属 種子	1 個
モモ核半分	1 個
カタバミ	7 個
イネ科 苞穎	61 個
イネ科 籾殻	2 個
ヒユ属 種子	15 個
イバラモ属 種子	3 個
イヌコウジュ属 種子	1 個
イボクサ 種子	2 個
ノブドウ属 種子	1 個
計	105 個

#### 珪藻分析結果

<i>Eunotia arcus</i>	4 個
<i>Eunotia pectinalis</i>	4 個

<i>Hantzschia amphioxys</i>	3 個
<i>Pinnularia borealis</i>	1 個
<i>Pinnularia subgibba</i>	2 個
<i>Pinnularia viridis</i>	22 個
<i>Synedra ulna</i>	2 個
珪藻 遺殻片	5 個
計	43 個

井戸遺構の堆積環境は、ハネケイソウ属 (*Pinnularia* sp.)、イチモンジケイソウ属 (*Eunotia* sp.) が優占している湿地環境であり、ハリケイソウ属 (*Synedra* sp.) は、一般的に淡水に多く含まれる種類である。これらの種は、通常単独で浮遊生活などが考えられ、これらの生息環境から古環境を推定した。

さて、遺跡から検出される珪藻種に関して、小杉 (1986) が陸生珪藻種と水生種に大きく分類している。今回検出した珪藻種は、この分類群から考えると水生種が高率で検出していると同時に、水生植物も優占することから沼沢地の古環境も復元できる。

同時に、井戸から採取した堆積物を観察した結果、その堆積物から検出した珪藻群の特徴から、詳しく分析すればもっと環境変遷を推定できるが、その詳しい解析は珪藻研究者との共同研究が必要なので、局地的な古環境の復元に留めている。

井戸から検出した植物遺体の同定結果水生植物が多く、遺跡周辺の湿地環境を物語ることと近くの丘陵地に、ノブドウなどや雑草類が植生していたとも想像できる。イネ、モモ、ヒョウタンなど人間活動が盛んなこと、水田農耕など生産活動も盛んであったことも示唆できる。

今回検出した淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区分している。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群である。水生珪藻と陸生珪藻の比率は、本試料では水生珪藻が多くを占めており、陸生珪藻は 9% 以下と極めて低率にしか確認できなかった。

#### 参考文献

1. 大井次三郎, 北川政夫(1983) 新日本植物誌 顕花編. 至文堂
2. 安藤一男(1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境への応用. 東北地理 42, p73 ~ 88
3. 伊東吉永・堀内誠示(1987) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. Diatom6, p23 ~ 44
4. 小杉正人(1989) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究 27, p 1 ~ 20
5. 小杉正人(1986) 陸生珪藻による古環境の解析とその意義—わが国への導入とその展望—. 植生史研究 1, p29 ~ 44
6. K.Kramer,H. Lange-Bertalot(1997) Susswasserflora von Mitteleuropa 1.Teil:Naviculaceae,Gustav Fischer
7. K.Kramer,H. Lange-Bertalot(1997)  
Susswasserflora von Mitteleuropa 2.Teil: Bacillariaceae,Epithemiaceae,Surirellaceae, Gustav Fischer
8. Asai & Watanabe T. 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophyllous and saproxenous taxa. Diatom 10. 35-47

## 第8章 まとめ

### 第1節 概要

禁野本町遺跡は、淀川を見下ろす台地上に立地する。今回の10-1調査では、15の調査区において、縄文ないし弥生時代から近代までの遺物と古代から近代までの遺構を検出した。

**縄文時代～古墳時代** 今回の調査で最も古い遺物は、縄文時代～弥生時代と考えられる石鏃（図179-1008）である。弥生時代前期～中期の遺構・遺物は見つからなかった。弥生時代後期後半～庄内式頃と考えられる土器（図177-972）が、少量ながら出土した。今回の調査ではこの時期の遺構は検出できなかったが、平成15・16年度調査では竪穴建物が確認されている。

古墳時代中期の遺構・遺物は見当たらず、古墳時代後期～7世紀前半頃までの土器（図146-244・266～268、147-297～299、149-367・370・371ほか）が出土した。

**古代** 調査範囲のほぼ全域で、掘立柱建物、竪穴建物、溝、土坑、ピットなどの遺構群を検出した。出土遺物には、土師器や須恵器（図153・174・175ほか多数）に加えて、百済寺と同範関係がみられる軒丸瓦（図147-295、150-382）・軒平瓦（図164-740）や長岡京内の鞆岡廃寺出土瓦と同範の軒平瓦（図147-280、163-734、169-780）、製塩土器（図155-515・516・518～520・522・529、158-593・594、161-685～689、169-778・779・784～786、179-1024・1025ほか）、緑釉陶器（図147-283・309、150-374・375・391・397・398、153-473～477、156-553、161-682、162-712ほか）や灰釉陶器（図147-284・285・294・310・311、150-377・378・399・400、153-478・479、158-591・592、161-683・684、169-777ほか）などもある。墨書土器（図163-732）や陶硯（図147-304、150-390ほか）は検出できたが、木簡は出土しなかった。遺構・遺物を時期的にみると、7世紀中頃～8世紀初頭は希薄だが、8世紀前半～中頃には一定量存在し、8世紀後半～9世紀初頭が主体を占め、9世紀前半～10世紀にも掘立柱建物などがみられる。この傾向は既往の調査とほぼ同様である。

**中世** 遺構・遺物は、12区中央部にまとまって分布する。遺構には、掘立柱建物、溝、土坑、ピット、落ち込みがある。出土遺物は、瓦器（図179-1001、180-1044・1046、181-1060・1061ほか）や土師器（図180-1038・1041～1043、181-1059、184-1089ほか）が主体で、白磁（図179-997～1000、181-1049・1054～1057、184-1091ほか）などもある。

**近代** 禁野火薬庫（正式には時期によって出張所、弾薬庫、倉庫、兵器補給廠分廠）の火工場、倉庫、石組溝、土塁、軽便軌道、厠、貯水池などの遺構を検出できた。これらは、諸記録と符合するものが多くあり、実年代の特定や構造物配置の変遷を検証することが可能な資料である。また、砲弾（図139-144～152）、薬莢（図140-160～174）、信管類（図140-175～188）、弾丸を保持する木製品（図141-203～142-208）などの軍事関連遺物や、便槽として用いられた鉢（図128-19～129-25）、土管（図129-26～131-45）、瓦（図131-46～133-63）、煉瓦（図134-64～135-78）、各種金属製品（図136-79～137-125、137-127～138-142）などの建築関連遺物、犬釘（図143-209～226）、枕木（図143-227～144-235、145-238～243）、レール（図144-237）、といった軽便鉄道関連遺物も、近代遺跡ならではの貴重なものである。

以下に、今回の中心的な調査対象となった**古代の建物**と明治時代後葉から太平洋戦争終結までの**禁野火薬庫**の変遷をまとめる。

## 第2節 古代集落の変遷

今回の発掘調査では、主に最終遺構面において重複関係の著しい掘立柱建物群、竪穴建物、溝、井戸、土坑、ピットなどの遺構と、須恵器や土師器といった一般的な土器はもちろん、長岡京内の遺跡出土瓦と同范関係にある軒瓦、緑釉陶器や灰釉陶器などの遺物を検出した。

今回の調査で検出した古代（一部中世を含む）の遺構の全容を付図1と図185に掲げ、掘立柱建物、竪穴建物、井戸、その他主要な遺構の変遷を図186・187に示した。

**10区（A2棟）の掘立柱建物・柱列** 10区（A2棟）第4・5面では、今回の調査で最も密度高く遺構が検出できた。調査地全域の古代集落の変遷をたどる前に、それらを簡潔に整理しておく。

10区（A2棟）第4・5面で検出した掘立柱建物・柱列のうち、ほぼ全てのピットにおいて柱根または柱痕跡が認められたものは**掘立柱建物1・2・4・6・8・9・10**と柱列**5・7**である。**掘立柱建物3・11・18**でも一部のピットで柱痕跡が見つかった。**掘立柱建物12・13・14・17・19**と柱列**15・16**についてはピットの平面分布からその存在を推定復元したが、断面観察では柱痕跡は認められなかった。

10区（A2棟）の掘立柱建物自体やそれを構成する個々のピットの重複関係と出土遺物の時期を照合すると、おおむね古→新への変遷が追認できるとともに、**掘立柱建物10(古代)→掘立柱建物3**（9世紀前半）→**掘立柱建物18**（10世紀）の変遷も導かれる。**掘立柱建物1**（8世紀中頃～末）と**掘立柱建物6**（古代）と**掘立柱建物8**（8世紀中頃～後半）と**掘立柱建物19**（古代）などが重複関係にあることから、10区（A2棟）第4・5面では、8世紀中頃～末に数回の建物群の変遷があったことも確認できる。

**建物の主軸方位** 古代集落の研究においては、建物の主軸方位の検討が大きな比重を占めている。禁野本町遺跡の既往の調査でも、とくに南方約500mに位置する百済寺跡の中軸線（N4°30′W）との関係に着目して、掘立柱建物の主軸方位が検討されている。

ここでは、平成15・16年度調査でのA～Cグループ（に若干の幅をもたせた）にDグループ（N8°～14°W・N76°～82°E）とその他（「他」）を追加し、表10の主軸方位欄に記号で示した。

Aグループ〔北でわずかに東偏（N3°～5°E）またはこれに直交する〕は、各時期に散発的に存在する。

Bグループ〔北でわずかに西偏（N2°～5°W）またはこれに直交する〕は百済寺跡の中軸線であるN4°30′Wとほぼ同様な主軸方位で、8世紀中頃～末に位置づけられる11棟の掘立柱建物のうち8棟を占める。

Cグループ〔ほぼ東方向（E1°～2°N）を向く〕の**10区掘立柱建物20・柱列5**は出土遺物からは時期が特定できないが、Bグループの南北建物と主軸方位が直交する東西建物として大きな違和感はない。

**10区掘立柱建物19**を時期不詳の柱列**7・15・16**とともにDグループとしたが、それらはBグループよりもさらに北で西偏するものである。

A～Dグループに該当しない掘立柱建物のうち、11区掘立柱建物3は柱穴からの出土土器に年代幅があり、10区掘立柱建物11は建物北東部のみの検出で全体像が判明しないものである。8世紀末～9世紀初頭の5区掘立柱建物2や10世紀後半の10区掘立柱建物14が8世紀に類例の多いBグループと主軸方位が異なることは、時期差を表す傍証ともなりうる。

**集落の変遷** 以上の整理を踏まえ、遺構の状況、出土遺物、重複関係などを勘案すると、今回の調査地における古代を主体とする集落は次のように変遷したと考えられる(図186・187)。

**6世紀後半** 今回の調査地における集落の初現である。5区第3面竪穴建物1・2がある。その他、この時期の土器を含む土坑やピットも調査地に散在する。

これに続く7世紀～8世紀初頭の遺構・遺物は希薄である。

**8世紀前半～中頃** 建物では9区掘立柱建物2、10区掘立柱建物2、11区掘立柱建物3が出現する。それらのうち10区掘立柱建物2は総柱建物である。さらに、8区第6面249井戸、12区第4面78土坑をはじめ、多くの溝、土坑、ピットもこの時期に存在する。

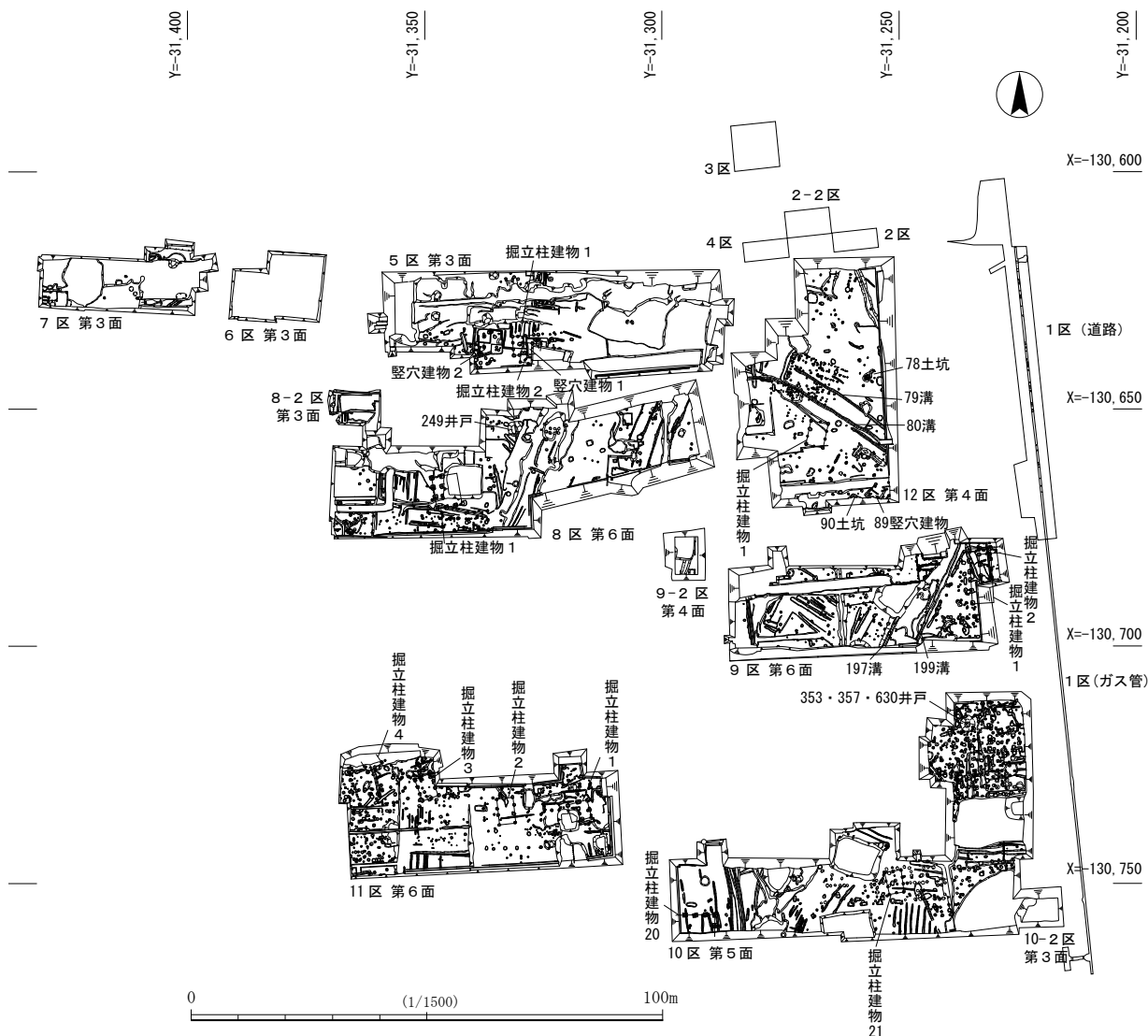
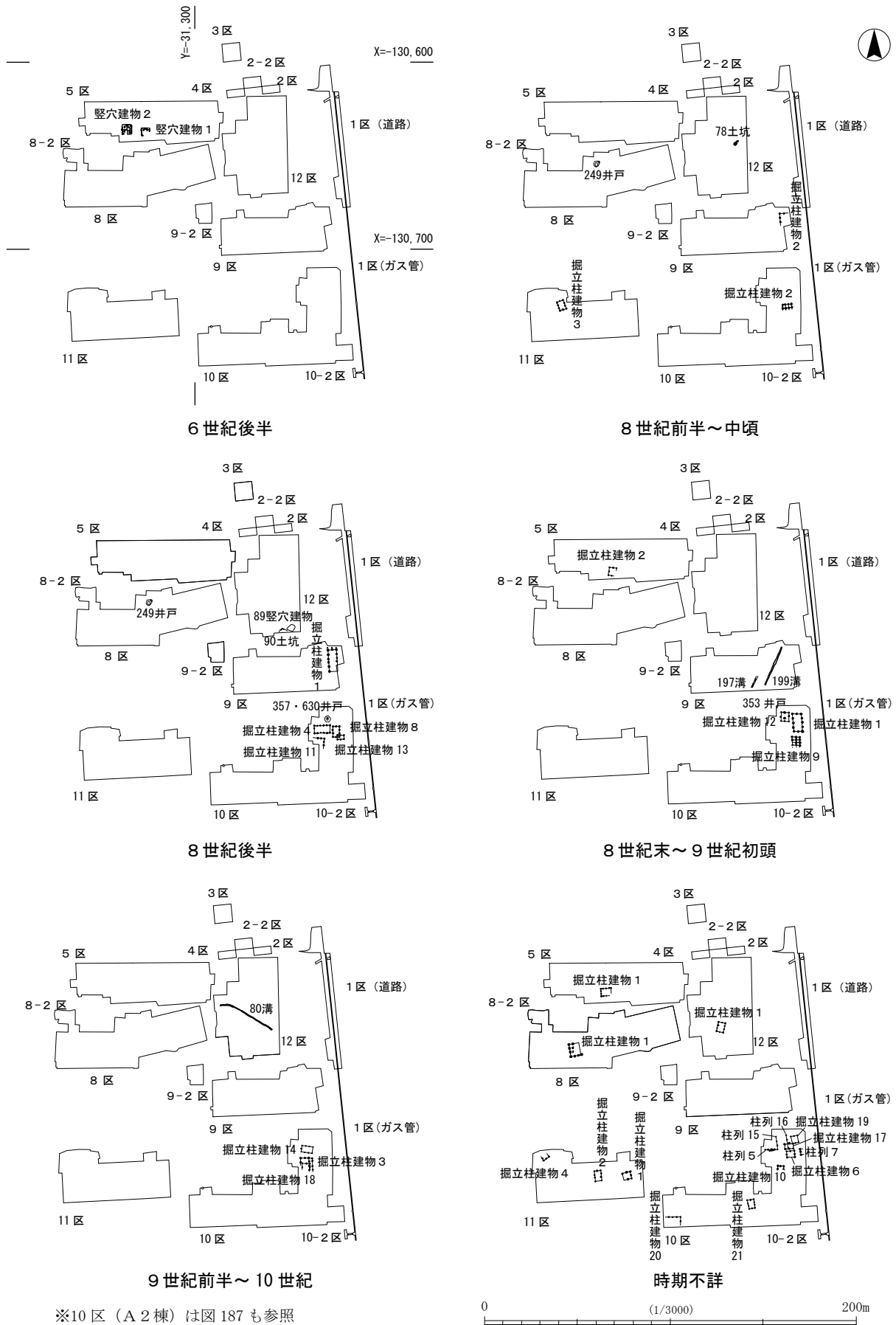


図185 古代の主要遺構



※10区 (A2棟) は図187も参照

図186 古代の建物等の変遷 (全体)

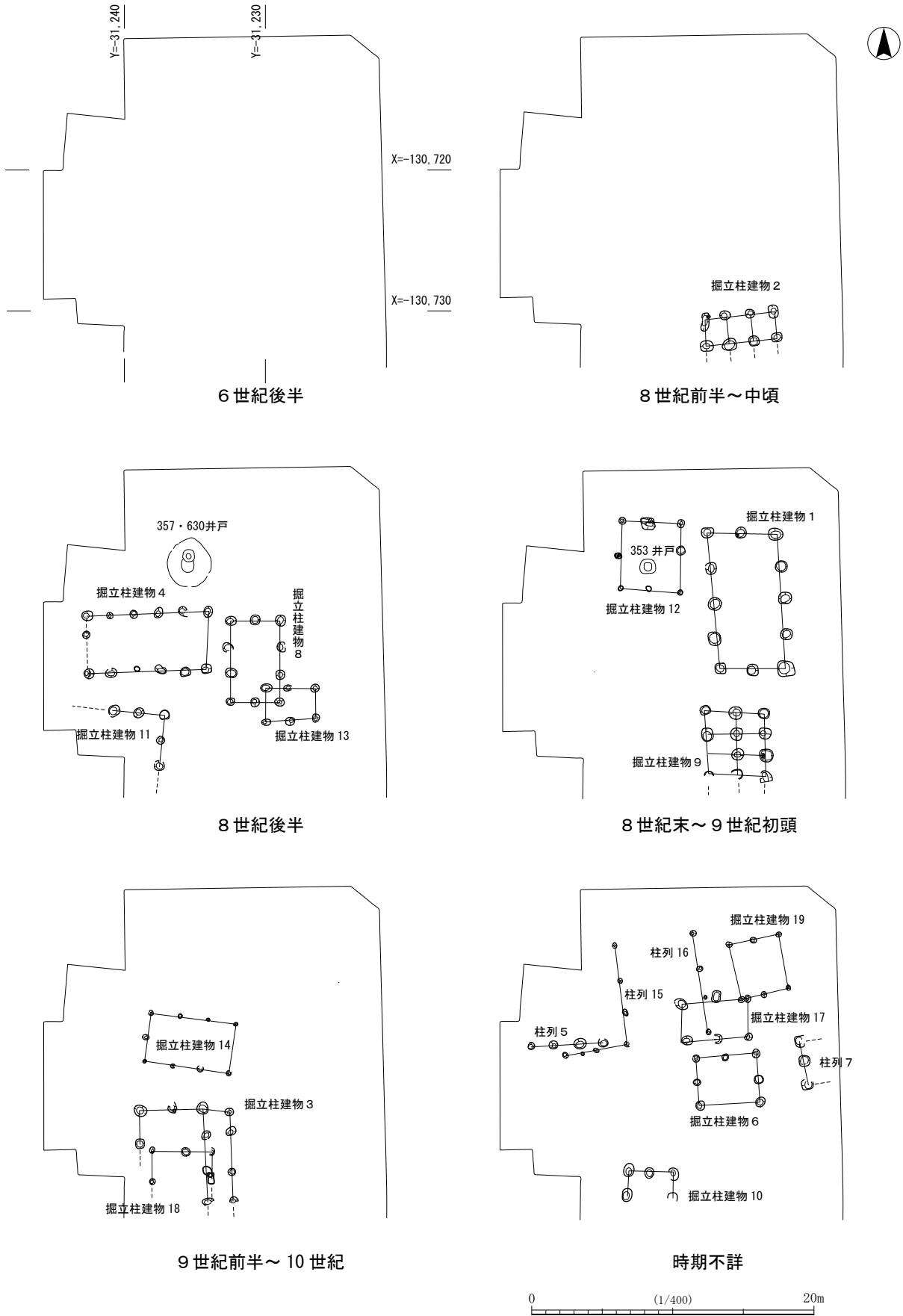


図187 古代の建物等の変遷 [10区 (A 2棟)]

**8世紀後半** この時期は、百済王氏がこの付近に居住していたと考えられている。遺構・遺物は多く、**9区掘立柱建物1**や**10区掘立柱建物4・8**のように、百済寺と主軸方位の近似した南北または東西方向の掘立柱建物（Bグループ）が目立つ。これに加えて、表10に掲げるように、今回検出した8世紀前半～末の11棟の掘立柱建物のうち8棟を百済寺跡の主軸であるN4°30'Wに近いBグループが占める。時期不詳の掘立柱建物のうち主軸方位Bグループもこの時期に属する可能性が高い。なお、禁野本町遺跡における既往の調査で検出された8世紀代の建物も、同様の主軸方位であるものが多い。

**12区第4面89 竪穴建物**は竪穴としては比較的小規模で、隣接する**90 土坑**も竪穴建物の一部である可能性が高い。住居というよりは工房的な性格の建物とも考えられる。

**10区（A2棟）**北西部に位置し3基の井戸が重複関係にあるうち、古い方の**630・357 井戸**もこの時期の所産である。その他、溝、土坑、ピットなどの遺構も多い。

**8世紀末～9世紀初頭** **10区**では、南北に長い**掘立柱建物1**、その南に総柱の**掘立柱建物9**、西に横板井籠組構造の**353 井戸**とその井戸屋形と考えられる**掘立柱建物12**が、それぞれ近接しながら重複なく存在する景観が想定できる。**5区掘立柱建物2**もこの時期の可能性が高い。

**9区199 溝**からはこの時期の土器が出土し、それと対になる**197 溝**とともに、道路側溝であると考えられるが、百済寺中軸線を基準とした方形区画とは主軸方位が異なる。

なお、**10区第4面西部**の一段低い部分（**第5面934 溝**よりも西の部分）は、南に隣接する財団法人枚方市文化財研究調査会による禁野本町遺跡第172次調査（『禁野本町遺跡第172次調査 第2回現地説明会資料』2011年8月6日）や奈良時代型方形地割復元モデルなどと対照すると、南北方向の道路部分に該当する可能性もある。

**9世紀前半～10世紀** **10区掘立柱建物3**には8世紀の土器とともに9世紀前半の土師器や緑釉陶器が、**10区掘立柱建物18**には細片だが黒色土器A類が、**10区掘立柱建物14**には10世紀前半と考えられる土師器がそれぞれ伴っている。ことに掘立柱建物14は、柱穴が小規模な円形であることや主軸方位がこの遺跡の8世紀前後の掘立柱建物と異なる。ほかにこの時期の土師器や黒色土器A類を含む遺構もあるが、その数は少ない。

**12区80 溝**（と無遺物だがそれと対になる**79 溝**）も、前出の**9区第6面197・199 溝**と同様に道路側溝である可能性が高い。時期の違いによるものかあるいは地形的な制約によるものかは不詳だが、両者とも百済寺中軸線とは主軸方位が異なりながらも直交しない。

**時期不詳** 時期不詳の掘立柱建物などについても、既往の調査成果、建物の新旧関係、建物の配置、出土土器の時期、柱間寸法などを含めて時期を検討した。しかし、**10区（A2棟）**にみられるように、主軸方位が共通していても重複関係があり同時存在ではない掘立柱建物同士の例も多く、主軸方位のみでその変遷を跡づけることは難しい。ただし、遺構の出現頻度と細片ではあるが出土土器の時期から、8世紀中頃～9世紀の遺構が主体であると推定できる。

他の建物に比べて正方位からの傾きの大きい**10区掘立柱建物19**や**柱列7・15・16**は、配置や類似した主軸方位からみて、この一群が同時期の可能性があろう。

また、**12区**では中世のピット群も正方位ではなく8世紀の溝と若干は角度を違えながらも西北西-東南東に並ぶことから、この場所ではおそらく地形的な条件により西北西-東南東方向の土地利用がなされていた可能性もある。

禁野本町遺跡の南方数百mに百済寺跡が存在する。百済寺が百済王氏の建立になるもので、禁野本町



表 10 古代の掘立柱建物・柱列

推定時期	掘立柱建物・柱列								
	区	検出面	遺構名	構造	主軸方位		桁行 (m)	梁行 (m)	面積㎡
8 世紀前半～中頃	9 区	第 6 面	掘立柱建物 2	側柱 ?	N5W	B	2 間以上	1 間以上	
	11 区	第 6 面	掘立柱建物 3	側柱	N20W	他	3 間 (4.8)	2 間 (3.6)	17.3
8 世紀中頃	10 区	第 4・5 面	掘立柱建物 2	総柱	N5W?	B	2 間以上	3 間 (4.8)	
8 世紀中頃～後半	9 区	第 6 面	掘立柱建物 1	側柱	N5W	B	5 間 (11.5)	2 間 (4.5)	51.8
	10 区	第 4・5 面	掘立柱建物 8	側柱	N1W	B	3 間 (5.8)	2 間 (3.6)	20.9
8 世紀後半	10 区	第 4・5 面	掘立柱建物 4	側柱	N87E	B	5 間 (8.6) 以上	2 間 (4.1)	34.8 以上
	10 区	第 4・5 面	掘立柱建物 11		N4E?	A	2 間以上	2 間以上	
	10 区	第 4・5 面	掘立柱建物 13	側柱	N85E	B	2 間 (3.5)	1 間 (2.3)	8.1
8 世紀中頃～末	10 区	第 4 面	掘立柱建物 1	側柱	N4W	B	4 間 (9.6)	2 間 (4.8)	46.1
	10 区	第 4・5 面	掘立柱建物 9	総柱	N3W	B	3 間 (4.3) 以上	2 間 (4.0)	17.2 以上
8 世紀後半～末	10 区	第 4・5 面	掘立柱建物 12	側柱	N1E	A	2 間 (4.9)	2 間 (4.2)	20.6
8 世紀末～9 世紀初頭	5 区	第 3 面	掘立柱建物 2		N8E	他	2 間 (4.2)	2 間 (3.9)	16.4
9 世紀前半	10 区	第 4・5 面	掘立柱建物 3	側柱	N3W	B	3 間 (6.5) 以上	2 間 (4.5)	29.3 以上
10 世紀前半	10 区	第 4・5 面	掘立柱建物 14	側柱	N82W	他	3 間 (6.0)	2 間 (3.5)	21.0
10 世紀	10 区	第 4・5 面	掘立柱建物 18	側柱	N1E	A	2 間 (3.7) 以上	2 間 (3.5)	13.0 以上
古 代	5 区	第 3 面	掘立柱建物 1	側柱	N86E	B	4 間 (5.6)	3 間 (4.0)	22.4
	8 区	第 6 面	掘立柱建物 1	総柱	N10W	D	3 間 (6.7)	3 間 (5.9)	39.5
	10 区	第 4・5 面	柱列 5		N89E	C	3 間 (5.1) 以上		
	10 区	第 5 面	掘立柱建物 6	側柱	N87E	B	2 間 (4.2)	2 間 (3.3)	13.9
	10 区	第 5 面	柱列 7		N12W	D		2 間 (3.3)	
	10 区	第 4 面	掘立柱建物 10	側柱	N1E	A	2 間以上	2 間 (3.1)	
	10 区	第 5 面	柱列 15		N8W N80E	D	3 間 (7.1)	2 間 (4.5)	
	10 区	第 5 面	柱列 16		N10W	D	3 間 (7.0)		
	10 区	第 4・5 面	掘立柱建物 17	側柱	N85E	B	2 間 (4.9)	1 間 (2.7)	13.2
	10 区	第 5 面	掘立柱建物 19	側柱 ?	N12W	D	2 間 (3.8)	2 間 (3.4)	12.9
	10 区	第 4 面	掘立柱建物 20	側柱	N89E	C	3 間 (6.3) 以上	2 間以上	
	10 区	第 5 面	掘立柱建物 21	側柱	N9W	D	3 間 (4.8)	2 間 (3.4)	15.9
	11 区	第 6 面	掘立柱建物 1	総柱 ?	N76E	D	2 間 (4.2)	2 間 (3.9)	16.4
	11 区	第 6 面	掘立柱建物 2	側柱	N6W	B	3 間 (5.5)	2 間 (3.4)	18.7
	11 区	第 6 面	掘立柱建物 4		N55W?	他		2 間 (3.7)	
12 区	第 4 面	掘立柱建物 1	側柱	N9E	他	3 間 (5.3)	2 間 (3.8)	19.7	

遺跡がその居住域であるとする見解が今日一般的である。

今回の調査地における集落は、時期的にみると、6世紀末頃から10世紀にいたる期間の掘立柱建物などが展開するが、百済寺が創建された8世紀後半から9世紀初頭にかけての数十年間が盛行期であった。

位置的には、百済寺を基準に想定されている方形区画復元案ではその北西端から外方にあたる。百済寺の主軸方位であるN4°30'Wに近い掘立柱建物が多いが、やや遠方にあたるためか主軸方位の異なる掘立柱建物や方位の異なる道路側溝と思しき溝も検出された。既往の調査成果でも台地西端部では主軸方位の異なるものもあり、自然地形の制約や百済寺との距離に反比例する形で、計画的な地割りは徹底されていなかったと考えられる。

### 第3節 禁野火薬庫の変遷

禁野火薬庫（正式には時期によって出張所、弾薬庫、倉庫、兵器補給廠分廠）は、明治30（1897）年から昭和20（1945）年まで存続した。交野台地の北西端部にあたる平成15・16年度調査地は、主に明治29（1896）年に用地買収された部分であり、明治30（1897）年の禁野火薬庫（当時は禁野出張所）開設当初からの遺構が検出された。それに対し、その北から東に隣接する今回の禁野本町遺跡10-1の調査地は、明治39（1906）年から明治43（1910）年にかけて用地が買収され、それ以降に施設の設置が行われた範囲を中心とする。

発掘調査により、多数の砲弾、薬莢、薬包などの軍事関連遺物や、瓦、煉瓦、枕木、レール、犬釘といった建築・鉄道関連遺物とともに、火工場、倉庫、石組溝、土塁、軽便軌道、厠、貯水池といった禁野火薬庫の諸施設を検出した。

一方、図面など禁野火薬庫の記録も残されている。表11に掲げるように、開設から大正12（1923）年までについては現存する図面類は少ないが、大正13（1924）年から昭和14（1939）年の爆発にいたるまでは『大阪陸軍兵器補給廠歴史』所収の「大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図」や「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」などによりほぼ毎年の状況が判明する。爆発後も、その直後、太平洋戦争中の昭和17（1942）年、昭和20（1945）年の終戦後の状況が記録されている。図面などの記録によると、施設の建築、施設の造作や用途の変更、あるいは名称の変化などが著しい。

検出できた遺構と図面などの記録を対比しながら、禁野火薬庫の構造物の実年代の特定や配置の変遷を簡潔にたどる。平成15・16年度と今回の調査で検出した禁野火薬庫関係の遺構の全容を付図2と図188に掲げ、変遷を表12と図189～197に示した。各図に示した建物などの規模・形状には一部想定復元を含む。また、その時点よりも古い施設を薄く表示した。

なお、各年の配置図では範囲外になるので付図2にのみ掲げるが、平成15・16年度調査地の南西端でわずかに検出された建物がある。これは、明治30年の火薬庫創設以来、手入場とされていた部分に、昭和11（1936）年に雑物庫として建てられ、昭和12年から昭和14年3月1日の爆発まで第1号雑器庫と呼称されていたものである。

「大阪兵器支廠禁野弾薬庫一般配置図」[明治42（1909）年]との対比（図189）

土塁や軽便軌道の設置は進んでいる。しかし、火工場や火薬庫といった建物はあまり設けられていな

表 11 禁野火薬庫の配置図等

西暦	和暦	月	日	図 面	所収文書・備考
1897	明治 30				「開設当時ノ主ナル建造物調」
1898	明治 31				
1899	明治 32				
1900	明治 33				
1901	明治 34				
1902	明治 35				
1903	明治 36				
1904	明治 37				
1905	明治 38				
1906	明治 39				
1907	明治 40				
1908	明治 41			陸軍測量部 1/20000 正式図 (高槻)	→『シンポ 2011』82 頁に掲載
1909	明治 42			大阪兵器支廠禁野弾薬庫一般配置図	「禁野弾薬庫変災概況」『明治 42 年 陸軍兵器本廠歴史』 →『セ 140 集』6 頁 (図 5) に掲載
					「被害状況調査 (新築及模様替諸建築物)」 菊池侃二「禁野火薬庫爆発事件調査報告書」
1910	明治 43				
1911	明治 44				
1912	明治 45				
1913	大正 2			大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図	『大阪陸軍兵器補給廠歴史』→『禁野火薬庫資料集』 →『セ 140 集』7 頁 (図 6) に掲載
1914	大正 3				
1915	大正 4				
1916	大正 5				「禁野弾薬庫道路拡張ノ件」
1917	大正 6				
1918	大正 7				
1919	大正 8				
1920	大正 9				
1921	大正 10				
1922	大正 11				
1923	大正 12				
1924	大正 13	11	1	大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図	『大阪陸軍兵器補給廠歴史』
1925	大正 14	12	30	大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図	『大阪陸軍兵器補給廠歴史』
					『禁野火薬庫ノ沿革』
1926	大正 15				
1927	昭和 2				
1928	昭和 3?			大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図	『大阪陸軍兵器補給廠歴史』
1929	昭和 4	9	1	大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図	『大阪陸軍兵器補給廠歴史』(大正?年の図を日付改訂)
1930	昭和 5	12	31	大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図	『大阪陸軍兵器補給廠歴史』
1931	昭和 6	12	31	大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図	『大阪陸軍兵器補給廠歴史』
1932	昭和 7	12	31	大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図	『大阪陸軍兵器補給廠歴史』(紙を貼って日付を 12 月 31 日に改訂)
1933	昭和 8	8	1	秘 土地買収要図 大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図	『大阪陸軍兵器補給廠歴史』→『シンポ 2011』8 頁に掲載
		12	31	大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図	『大阪陸軍兵器補給廠歴史』(日付を 8 月 1 日から 12 月 31 日に改訂)
1934	昭和 9	12	31	大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫要図	『大阪陸軍兵器補給廠歴史』
1935	昭和 10	12	31	大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫要図	『大阪陸軍兵器補給廠歴史』(紙を貼って日付を 12 月 31 日に改訂)
1936	昭和 11	12	31	大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図	『大阪陸軍兵器補給廠歴史』(日付を 2 月から 12 月 31 日に改訂)
		2		大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図	『大阪陸軍兵器補給廠歴史』→『セ 140 集』8 頁 (図 7) に掲載
1937	昭和 12	12	31	大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図 (朱書ハ軍需動員ニ伴フ臨時構築物ヲ示ス)	『大阪陸軍兵器補給廠歴史』(日付を 2 月から 12 月 31 日に改訂)
1938	昭和 13	12		大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図	「禁野倉庫災害関係書類綴」
1939	昭和 14	10		大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫配置図 禁野倉庫大阪工廠移管要図	『昭和 14 年度大阪陸軍兵器補給支廠歴史』
				事故発生直前ニ於ケル弾薬調製作業班ノ配置及 完成弾薬格納状況要図	
1940	昭和 15	頃?			「大阪陸軍兵器補給廠災害予防規定案」豊田家文書
1941	昭和 16				
1942	昭和 17	夏?		大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠新築増築概要図	『昭和 17 年度大阪陸軍兵器補給支廠歴史』 →『セ 140 集』9 頁 (図 8) に掲載
1943	昭和 18	頃?			『分廠歴史』
1944	昭和 19				
1945	昭和 20	12	25	大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠構内図	豊田家文書→『資料集』→『セ 140 集』10 頁 (図 9) に掲載

ゴシック体は、図 189～197 の参考とした図面

豊田家文書: 終戦時に禁野火薬庫勤務の技術(兵技)中尉であった豊田環氏が保管されていた禁野火薬庫関係の文書類。その一部が枚方市より『禁野火薬庫資料集』として公開されている。

『分廠歴史』明治 29 年 10 月～昭和 18 年 9 月 30 日 豊田環氏編纂か→『禁野火薬庫資料集』所収

『資料集』: 『禁野火薬庫資料集』枚方市 1989 年

『大阪陸軍兵器補給廠歴史』明治 29 年～昭和 18 年 1989 年関係者が防衛研究所に寄贈

『セ 140 集』: 駒井正明編『禁野本町遺跡』(財)大阪府文化財センター調査報告書第 140 集 2006 年 (図を再トレース)

『シンポ 2011』: 財団法人大阪府文化財センター『いま、よみがえる 枚方の 20 世紀』2011 年 (図を再トレース)

い。調査範囲内では在来建築物としてワ号手入庫がすでに存在し、他には火工場や火薬取扱所が土塁に囲まれた部分に工事未着手として記されている程度である。

なお、明治42（1909）年8月20日に爆発した、2号清涼火薬庫（第2号爆発ダイナマイト格納倉庫）や1号（後の2号）乾燥火薬庫（第1号誘発砵山火薬格納庫）は、各図の左上方（北西）欄外に位置する。

#### 「大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図」〔大正2（1913）年〕との対比（図190）

徐々に施設の設置が進む。主要施設である火工場や火薬庫に加えて、調査地中央部の職工厠（8区第1面10職工厠）や、南部のレール（軽便軌道）（11区第3面8～45枕木土坑）とその横に建つ仮建物（11区第3面仮建物）も設置されている。

平成15・16年度調査区で、ガス管・水道管の埋設による攪乱が著しく調査不要とされた部分は、禁野火薬庫の正門からまっすぐに北に向かう道路に該当する。その道路のすぐ東側に、東西に長い建物が4棟描かれているが、それらは平成15・16年度調査で掘立柱建物として検出された。

#### 「大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図」〔昭和8（1933）年12月31日〕との対比（図191）

大正2（1913）年の図と比較すると、調査地南部にあった4棟の東西に長い建物がなくなり、北西-南東方向のレールに沿った仮建物がその北東側に十五榴榴散弾完成場（11区第3面十五榴榴散弾完成場）として移転している。さらにその東側に荷造場（11区第3面第2荷造場）と弾薬筒完成場及熔填場（10区第2面弾薬筒完成場及熔填場）とそれに伴うレール（軽便軌道）が設けられている。

大正13（1924）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫図」から昭和10（1935）年の「大阪兵器支廠禁野弾薬庫要図」までの各年の配置図には、十五榴破甲弾完成場と十五榴薬筒完成場という2棟の建物が描かれている。それらは東西方向に長い仮建物（あるいは仮建築物）で、西辺は正門から北上する道路に面している。発掘調査では、その位置・規模の建物は確認できなかった。

しかし、それらと重複する位置にあたる11区西部から平成15・16年度調査区にかけて、道路よりも東に20m弱離れた位置を西辺とする2棟の掘立柱建物を検出できた。各年の配置図と比較すると、それらは昭和14（1939）年の爆発後いち早く設けられた人夫（男女）休憩所（11区第3面男休憩所・女休憩所）であったと考えられる。

#### 「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」〔昭和11（1936）年12月31日〕との対比（図192）

調査地北東部に土塁（9区第2面55～57土塁基礎 12区第2面3・4土塁ほか）とそれに囲まれた第4師団兵器部保管建物と3棟の火工場などが設けられている。これらの施設は、昭和9（1934）年の図にはなく、昭和10（1935）年の図には南半の7号火工場（9-2区第2面1建物基礎）と8号火工場（12区第2面1建物）とその周囲の土塁（8区第1面19土塁 9区第2面55～57土塁基礎 12区第2面3土塁ほか）が描かれている。一方、北半の第4師団兵器部保管建物（8区第1面20建物）と9号火工場（12区第2面2建物）の北と東西を囲む土塁（12区第2面4土塁）は、昭和11（1936）年の図に初出だが、以後昭和13（1938）年の図までは、他の土塁よりも幅が狭く、かつ、両建物の中間にも土塁がないように表現されている。この北半の土塁では、発掘調査によりコンクリート基礎が土塁構築後にその盛土を切りこんで設置されたことが判明したので、この昭和11年頃には土盛

土地買収の時期	調査区	調査時の遺構名 (「」は施設名称)	斜体字は図面に						
			施設全体の名称		明治42(1909)年	大正2(1913)年	昭和8(1933)年	昭和11(1936)年	昭和12(1937)年
			図面		昭和11年頃から大阪				
			レール(軌道)の表現		あり	あり	あり	あり	あり
明治29年	平成15・16年度調査区	「土壘」	大阪兵器支廠禁野 弾薬庫一般配置図	大阪陸軍兵器支廠 禁野弾薬庫図	大阪陸軍兵器支廠 禁野弾薬庫図	大阪陸軍兵器支廠 禁野倉庫要図	大阪陸軍兵器支廠 禁野倉庫要図		
	8区(D棟)	第1面18土壘	土壘	土壘	土壘	土壘	土壘		
	平成15・16年度調査区	「軽便軌道」							
	7区(E棟)	第2面3~16枕木土坑	東西方向レール	東西方向レール	東西方向レール	東西方向レール	東西方向レール		
	7区(E棟)	第2面17~20枕木土坑	南北方向レール	南北方向レール	南北方向レール	南北方向レール	南北方向レール		
	7区(E棟)	第2面21石組溝	北東・南西方向レール	北東・南西方向レール	北東・南西方向レール	北東・南西方向レール	北東・南西方向レール		
	8区(D棟)	第1面8石組溝							
	平成15・16年度調査区	「手入場及塗蠟場」	ワ号手入庫	手入場及塗蠟場	2号兵器庫				
	平成15・16年度調査区	「1号火工場」	に号(工事未着手)	火工場	1号火工場	1号火工場	1号火工場		
	平成15・16年度調査区	「2号火工場」	ろ号(工事未着手)	火工場	2号火工場	2号火工場	2号火工場		
	平成15・16年度調査区	「3号火工場」	は号(工事未着手)	火工場	4号火工場	3号火工場	3号火工場		
	平成15・16年度調査区	「4号火工場」	い号(工事未着手)	火工場	5号火工場	4号火工場	4号火工場		
	5区(調整池)	第1面「建物基礎」	ヒ号(工事未着手)	火工場	7号火工場	6号火工場	第4師団兵器部保管建物		
	8区(D棟)	第1面7建物	セ号(工事未着手)	火工場	6号火工場	5号火工場	5号火工場		
	平成15・16年度調査区	「火薬試験場」	ヌ号(工事未着手)	火薬試験場	火薬取扱所	火薬取扱所	火薬試験所		
	平成15・16年度調査区	「1号未填薬弾丸庫」		弾丸庫	4号未填薬弾丸庫	1号未填薬弾丸庫	1号未填薬弾丸庫		
	平成15・16年度調査区	「1号乾燥火薬庫」		乾燥火薬庫	1号乾燥火薬庫	1号乾燥火薬庫	1号乾燥火薬庫		
	8区(D棟)	第1面10職工厩		職工厩					
	平成15・16年度調査区	掘立柱建物		建物4棟					
	平成15・16年度調査区	「第1号雑器庫」				雑器庫	第1号雑器庫		
平成15・16年度調査区	「材料庫」				荷造材料庫	材料庫			
平成15・16年度調査区	掘立柱建物					人夫休憩所			
平成15・16年度調査区	「貯水池」								
平成15・16年度調査区	「貯水池」								
8区(D棟)	第1面9貯水池								
明治40年	11区(B棟)	第3面8~45枕木土坑		北西・南東方向レール	北西・南東方向レール				
	11区(B棟)	第3面「仮建物」		仮建物	十五榴榴散弾完成場				
	11区(B棟)	第3面「男休憩所」			十五榴榴甲弾完成場?				
	11区(B棟)	第3面「女休憩所」			十五榴榴筒完成場?				
	11区(B棟)	第3面「第2荷造場」			荷造場	荷造場	第2荷造場		
	10区(A棟)	第2面「弾薬筒完成場及熔填場」			弾薬筒完成場及熔填場	弾薬筒完成場及熔填場	弾薬筒完成場及熔填場		
	10区(A棟)	第2面「汽罐室」			キカン室				
	10区(A棟)	第2面「熔填場」			熔填場	熔填場	熔填場		
	10区(A棟)	第2面「箱詰作業場」(西)					箱詰作業場		
	10区(A棟)	第2面「熔填作業場」(西)					熔填作業場		
	11区(B棟)	第2面3~6便槽							
	明治43年	9区(C棟)	第1・2面1~4枕木土坑				南北方向レール	南北方向レール	
8区(D棟)		第1面21軽便軌道				南北方向レール	南北方向レール		
9区(C棟)		第1・2面5~40枕木土坑				東西方向レール	東西方向レール		
9-2区(防火水槽C)		第2面2・3枕木				東西方向レール	東西方向レール		
9-2区(防火水槽C)		第1・2面1建物基礎				7号火工場	7号火工場		
12区(立体駐車場)		第1・2面1建物				8号火工場	8号火工場		
12区(立体駐車場)		第1・2面2建物				9号火工場	9号火工場		
9区(C棟)		第1・2面55~57土壘基礎				土壘	土壘		
12区(立体駐車場)		第1・2面3土壘				土壘	土壘		
10区(A棟)		第2面「第3号雑器庫」				雑器庫	第3号雑器庫		
8区(D棟)		第1面20建物				第4師団兵器部保管建物	第4師団兵器部保管建物		
9区(C棟)		第1・2面コンクリート土間				道路及側溝	道路及側溝		
5区(調整池)		第1面「土壘基礎」				土壘	土壘		
8区(D棟)		第1面19土壘				土壘	土壘		
12区(立体駐車場)		第1・2面4土壘				土壘	土壘		
13区(管路・人孔)		第1面「土壘」				土壘	土壘		
14区(管路・人孔)		第1面「土壘」				土壘	土壘		
15区(管路・人孔)		第1面「土壘」				土壘	土壘		
10区(A棟)		第2面「熔填作業場」(東)					熔填作業場		
10区(A棟)		第2面「箱詰作業場」(東)					箱詰作業場		
12区(立体駐車場)		第2面5軌道					東西方向レール		
12区(立体駐車場)		第1・2面6軌道					東西方向レール		
14区(管路・人孔)		第1面「軽便軌条」					東西方向レール		
1区(道路・ガス管)							第12号火工場		
1区(道路・ガス管)							第11号火工場		
1区(道路・ガス管)							第10号火工場		
10区(A棟)		第1面1建物							
10区(A棟)		第1面2建物							
10区(A棟)	第1面3建物								
10区(A棟)	第1面コンクリート枕木								

## 禁野火薬庫の主要施設

表現はあるが個々の施設名のないもの				遺構・施設名	年代・備考
昭和14(1939)年	昭和17(1942)年	昭和20(1945)年			
陸軍兵器支廠禁野倉庫	昭和15年5月から大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠				
事故発生直前に於ける弾薬調製作業班ノ配置及完成弾薬格納状況要図	大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫配置図	大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠新築増築概要図	大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠構内図		
爆発	禁野倉庫大阪工廠移管要図				
なし	なし	あり	なし		
土塁	土塁	土塁	土塁	土塁	
土塁	土塁	土塁	土塁	18土塁	明治42年頃
				軽便軌道	
				3～16枕木土坑	明治42年以前～昭和14年
				17～20枕木土坑	
				21石組溝	明治42年頃～昭和14年 レールは未検出
				8石組溝	明治43年頃～昭和14年
				手入場及塗場	
1号火工場		第29号倉庫	第17号倉庫	1号火工場	明治42～44年建築物 昭和14年の爆発後に増改築
2号火工場				2号火工場	
4号火工場		第30号倉庫	第18号倉庫	3号火工場	
5号火工場				4号火工場	
6号火工場		第30号倉庫	第18号倉庫	建物基礎	明治42～44年建築物 断面でのみ確認
				7建物	明治42～44年建築物 昭和14年の爆発後に増改築
				火薬試験場	明治45年以前竣工～昭和14年以前
1号未填薬弾丸庫				1号未填薬弾丸庫	明治45年以前竣工～昭和14年
1号乾燥火薬庫		軽油庫	軽油庫	1号乾燥火薬庫	明治45年以前竣工 軽油庫は昭和16年授受
				10職工厠	大正時代頃
				掘立柱建物	
第1号雑器庫				第1号雑器庫	昭和9年授受か
材料庫				材料庫	昭和11年竣工
				掘立柱建物	昭和12～13年竣工 軍需動員に伴う臨時構築物
		貯水池	貯水池	貯水池	昭和16年授受
		貯水池	貯水池	貯水池	
		貯水池		9貯水池	
				8～45枕木土坑	大正2年頃～昭和8年
				仮建物	
	人夫休憩所	男休憩所		男休憩所	完成場は大正13年以前～昭和10年
	人夫休憩所	女休憩所		女休憩所	人夫休憩所は昭和14年4月授受
建物				第2荷造場	昭和8年頃設置～昭和14年
建物				弾薬筒完成場・燻填場	昭和9年授受
				汽罐室	昭和9年～昭和11年?
				燻填場	昭和9年～昭和14年以前
建物				箱詰作業場(西)	昭和12年竣工 軍需動員に伴う臨時構築物
建物				燻填作業場(西)	
	建物	厠	厠	3～6便槽	男休憩所に付属 昭和14年授受
		軽便軌条		1～4枕木土坑	昭和7年以降
		軽便軌条		21軽便軌道	昭和9年以降か(昭和7年の図にもあるが)
		軽便軌条		5～40枕木土坑	昭和10年には存在
				2・3枕木	複線部分 昭和10年には存在～昭和14年
7号火工場		第27号倉庫	第15号倉庫	1建物基礎	昭和10年授受
8号火工場		第25号倉庫	第13号倉庫	1建物	昭和10年授受 昭和14年の爆発後東西に拡張
9号火工場		第26号倉庫	第14号倉庫	2建物	
土塁	土塁	土塁	土塁	55～57土塁基礎	昭和10年以降
土塁	土塁	土塁	土塁	3土塁	
建物				第3号雑器庫	昭和11年には存在～昭和14年
建物		第28号倉庫	第16号倉庫	20建物	昭和11年授受
道路	舗装道路	舗装道路		コンクリート土間	
土塁	土塁	土塁	土塁	土塁基礎	
土塁	土塁	土塁	土塁	19土塁	
土塁	土塁	土塁	土塁	4土塁	
土塁	土塁	土塁	土塁	土塁	
土塁	土塁	土塁	土塁	土塁	
土塁	土塁	土塁	土塁	土塁	
土塁	土塁	土塁	土塁	土塁	
建物				燻填作業場(東)	
建物				箱詰作業場(東)	
		軽便軌条		5軌道	昭和12年敷設
				6軌道	複線部分 昭和12年敷設～昭和14年
		軽便軌条		軽便軌条	昭和12年以降
火工場	建物?	第4号雨覆庫	建物		火工場は昭和12年竣工 軍需動員に伴う臨時構築物
火工場		第24号倉庫	建物		
火工場	建物?	第3号雨覆庫	建物		
		第16号倉庫		1建物	昭和16年竣工 各倉庫西部の土地は明治40年買収
		第17号倉庫	第7号倉庫	2建物	
		第18号倉庫		3建物	
		軽便軌条		コンクリート枕木	

を主とした簡易な構造であったと推定できる。

これらの土塁の南側にある道路部分は、この年に**舗装道路**（9区第2面コンクリート土間）として授受され、昭和14年の爆発後も機能していた。

調査地南西部では、かつて2号兵器庫があった位置に、昭和11年に平面規模の大きな**荷造材料庫**が設けられ、それに伴い**軽便軌道**も変更されている。

**弾薬筒完成場竝熔填場**（10区第2面弾薬筒完成場及熔填場）の東辺に付属する**熔填場**と**キカン室**は図面に描かれているが、残念ながら発掘調査では判然としなかった。

「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図（朱書ハ軍需動員二伴フ臨時構築物ヲ示ス）」[昭和12（1937）年12月31日]との対比（図193）

表題の図に、さらに**建物**や**レール（軽便軌道）**が朱色で追記されている。

戦時体制の強化とともに禁野火薬庫（当時は禁野倉庫）の施設も拡充されてきたが、この年の臨時動員に伴ってさらに調査地東部に**火工場**や**熔填作業場**が設けられた。

調査地南東部に位置する**箱詰作業場**2棟（10区第2面箱詰作業場（東）・（西））、**熔填作業場（西）**（10区第2面熔填作業場（西））、**弾薬筒完成場竝熔填場**（10区第2面弾薬筒完成場及熔填場）の間には木製枕木を用いた仮設的な**軽便軌道**（10区第2面軽便軌道）が敷設されていた模様である。これら4棟は、その北側にある**舗装道路**（9区第2面コンクリート土間）に規制され、北辺がほぼ並んでいた可能性が高い。**熔填作業場（東）**（10区第2面熔填作業場（東））は、『昭和12年度大阪陸軍兵器支廠歴史』に面積は378㎡と記されており、東西が約9m（5間）なので、南北約42m（23間）と考えられる。

正門から北上する道路の東に面した南北に長い掘立柱建物は、この図に追記された構築物のうち、**人夫休憩所**に該当すると考えられる。昭和12年・13年の図によると、この建物の南の調査範囲外に同様な建物がもう1棟存在した模様である。

なお、この図では、**火薬試験所**の西隣にそれよりも一回り大きな**火薬取扱所**があり、その北側でレールが屈曲したように（追記ではなく）印刷されている。翌昭和13（1938）年の「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫要図」にも**火薬試験所**と**火薬取扱所**が描かれているが、その図では火薬試験所のほうが大きく、レールも昭和11年以前と同様に北東 - 南西方向に直線的に描かれている。

「事故発生直以前ニ於ケル弾薬調製作業班ノ配置及完成弾薬格納状況要図」[昭和14（1939）年]との対比（図194）

3月1日の爆発時点は、禁野火薬庫（当時は禁野倉庫）の最盛期であったともいえる。爆発の発火点は、今回の調査範囲の北東端から東へ約250mも離れた15号未填薬弾丸庫であったが、従来の火工場などの施設に加えて昭和12年頃からの**臨時構築物**も多数立ち並んでいた今回の調査範囲も爆発により灰燼に帰した。

この図面には表題のとおり、爆発直前にどの施設に何がいくつあったかが詳細に記録されている。「作業実施中ノ場所」も明示され、今回の調査範囲ではその南東部の**熔填作業場（東）（西）**（10区第2面熔填作業場（東）・（西））、**弾薬筒完成場竝熔填場**（10区第2面弾薬筒完成場及熔填場）、**第2荷造場**（11区第3面第2荷造場）に作業中の丸印が付けられている。実際にそれらの建物では、発掘調査によ

って「爆発ニ依り生シタル漏斗孔」を検出した。

ただし、この図にはその趣旨からか、軽便軌道が記入されていない。また、細部の状況からみて、爆発当日よりも新しい時期の状況を下敷きにして描いた可能性もある。図 194 には、それらを勘案して軽便軌道と土塁の状況などを推定復元した。

「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫配置図 禁野倉庫大阪工廠移管要図」[昭和 14（1939）年 10 月]との対比（図 195）

元々の表題を二重線で消し、その下方にやや小振りな字で「禁野倉庫大阪工廠移管要図」と書かれている。

爆発の約半年後の状況である。建物の表現がほとんどなく、わずかに 2 棟の**人夫休憩所**（11 区第 3 面男休憩所・女休憩所）とその東側の**厠**（11 区第 2 面 3～6 便槽）と考えられる建物などが描かれている。軽便軌道の表現は一切なく、その復旧状況は不明である。

他方、土塁はほとんど表現されている。仔細にみると、かつての 4 号火工場西側の土塁はその西半部が欠損したように描かれている。また、爆発前の図では、**9 号火工場**（12 区第 1 面 2 建物）と**第 4 師団兵器部保管建物**（8 区第 1 面 20 建物）を囲む土塁（12 区第 2 面 4 土塁）は他の土塁よりも簡略に表現されており、発掘調査ではこの土塁の北辺にはコンクリート製の基礎が築かれていなかったことが判明した。これらの土塁は構造的に弱いことから、爆発により崩壊したのであろうか。

ただし、発掘調査の成果と諸記録によると、この土塁（12 区第 2 面 4 土塁）は、おそらく爆発後から昭和 17 年までの間に、コンクリート基礎は設置されなかったもののさらに北に拡張されて、結果的にその北西部で在来の土塁に接するようになった。さらに、土塁で囲まれた内部でも、**9 号火工場**とその西隣の建物との間にも軽便軌道部分を除いた部分に、コンクリート基礎をもつ土塁（12 区第 2 面 4 土塁）が新たに築かれた模様である。

「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠新築増築概要図」[昭和 17（1942）年夏頃]との対比（図 196）

新築建物として、7 棟の倉庫が図示されている。それらのうち、**第 26 号倉庫**（12 区第 1 面 2 建物）と**第 28 号倉庫**（8 区第 1 面 20 建物）では、昭和 14 年の爆発前の建物の基礎を東西に各 1 m ほど拡張して倉庫を新築していることが今回の調査で確かめられた。**第 25 号倉庫**（12 区第 1 面 1 建物）・**第 27 号倉庫**（9 - 2 区第 1 面 1 建物基礎）も同様に基礎が再利用された可能性が高い。**第 29 号倉庫**・**第 30 号倉庫**は、平成 15・16 年度調査と 8 区第 1 面 7 建物の調査の結果、各々爆発前の 3 棟の火工場とその間の土塁を撤去して、3 棟の火工場を連ねたような東西に長い倉庫として新築されたことが判明した。**第 24 号倉庫**は 1 区において、基礎と推定されるコンクリート構造物がごくわずかに検出できたにとどまるため、新築状況は不詳である。

また、爆発後に設けられた 2 棟の**人夫休憩所**は、北が**男休憩所**（11 区第 3 面男休憩所）、南が**女休憩所**（11 区第 3 面女休憩所）と男女別になっている。

昭和 14 年の爆発前まで乾燥火薬庫があった位置には**軽油庫**が描かれている。軽油庫はこの図と昭和 20 年図にともにやや南北に長く、昭和 20 年の図に 20 坪と注記されていることから、南北 5 間（約 9 m）・東西 4 間（約 7.2 m）と推定して図示した。

軽便軌道が、昭和 14 年の爆発以前と比べてかなり少なくなっているのが目に付く。



「大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠構内図」〔昭和 20（1945）年 12 月 25 日〕との対比（図 197）

8 月 15 日の終戦により、禁野火薬庫（当時は枚方分廠）の機能も停止した。

終戦から 4 か月後のこの図によると、調査地の南東部では、昭和 16 年に建てられた倉庫のうち第 16 号倉庫と第 18 号倉庫が撤去され、第 17 号倉庫から改称された第 7 号倉庫（10 区第 1 面 2 建物）のみになっている。第 7 号倉庫の規模は 280 坪（924 m<sup>2</sup>）と記されており、南北 6 間強（約 11 m）なので、東西約 46.5 間（84 ～ 85 m）と推定できる。その他の倉庫も、番号が改められている。男女の休憩所もなくなり、それらに付属していた厠（11 区第 2 面 3 ～ 6 便槽）だけが残っている。軽便軌道はこの図には表示がなく、その状況は不明である。

いわゆる禁野火薬庫は、明治 30（1897）年 4 月に砲兵第二方面本署禁野出張所として開設され、同年 9 月に大阪陸軍兵器本廠禁野弾薬庫、次いで明治 36（1903）年に大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫と改称され、明治時代後葉から昭和時代初期にわたって文字どおり弾薬庫として徐々に整備されてきた。建物基礎や側溝などの使用材料は、明治時代には煉瓦や石材が、昭和時代にはコンクリートが多用される傾向がある。

1936（昭和 11）年頃に大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫と改称された頃からは、戦闘的な「弾薬庫」から一見非戦闘的な「倉庫」への名称変更とは裏腹に、日中戦争から太平洋戦争に至る軍備拡張につれて火薬庫としての機能が急激に拡充された。しかし、昭和 14（1939）年 3 月 1 日の爆発で機能が崩壊した。復旧にあたって、その大部分が枚方製造所に移管され、昭和 15（1940）年以降は大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠として主に倉庫を擁する補給組織として機能していた。それらの変遷が施設の消長にも明確に反映されている。

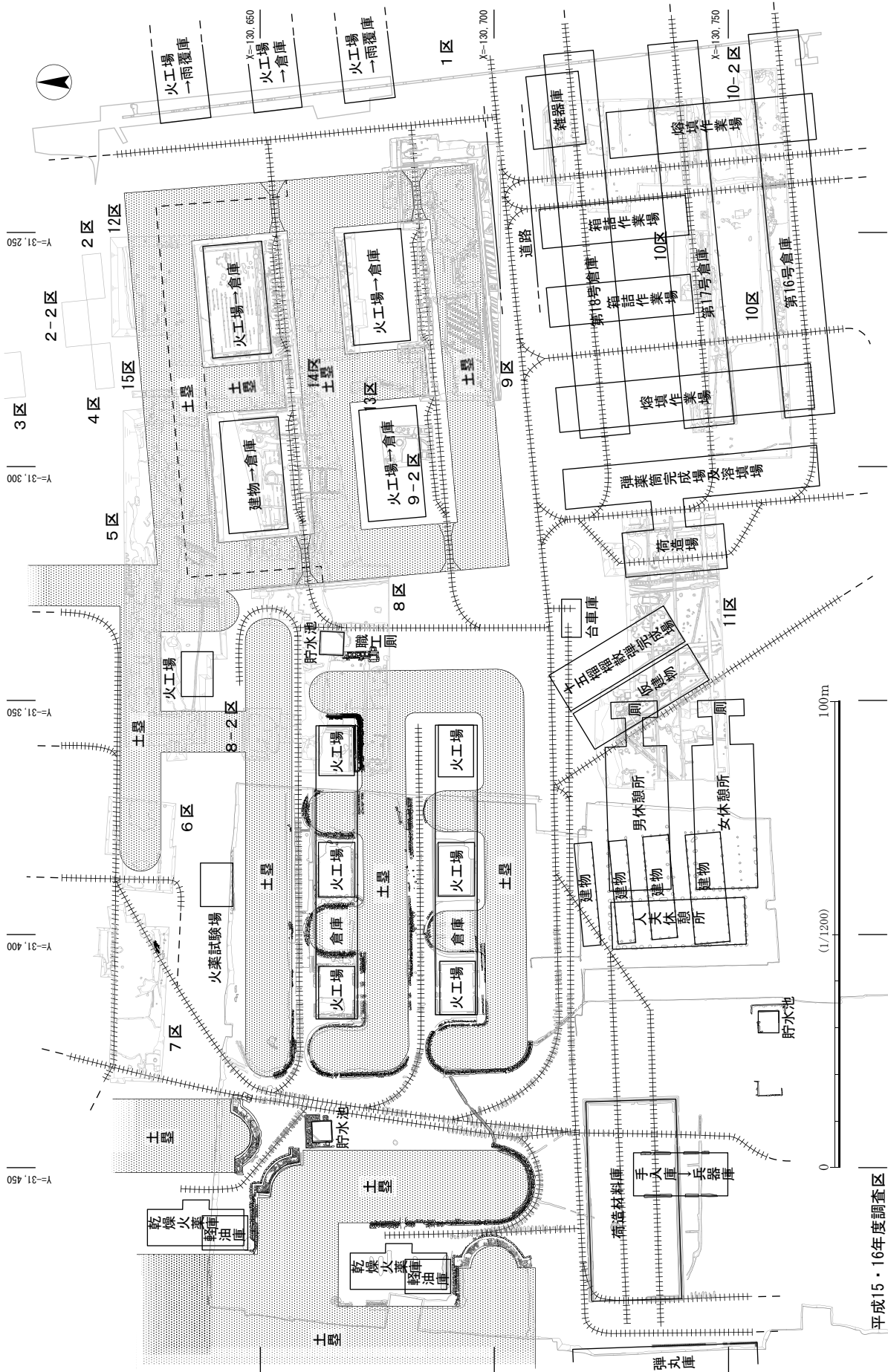


図188 禁野火薬庫の主要施設

平成15・16年度調査区

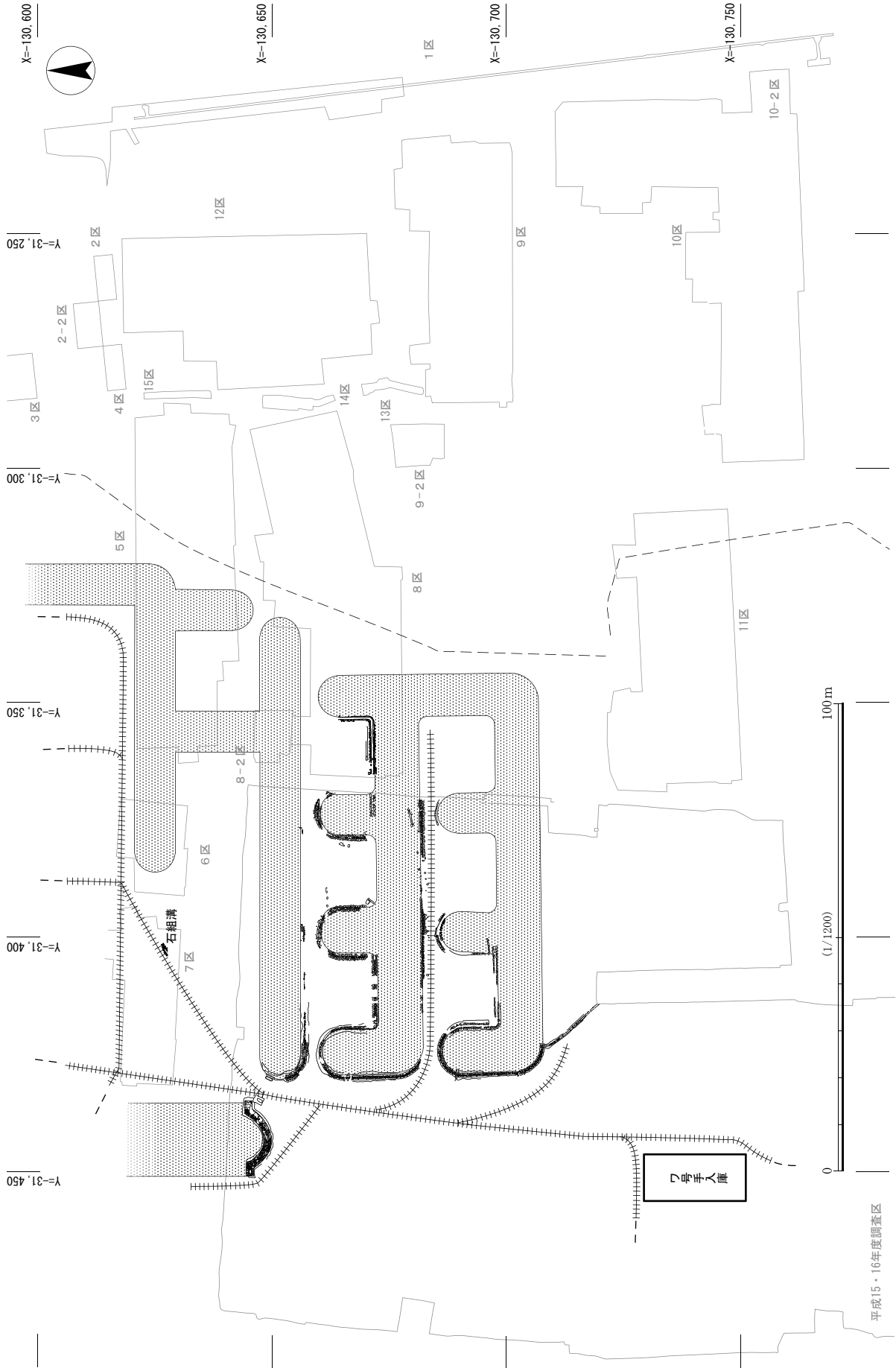


図189 明治42（1909）年の大阪陸軍兵器支廠禁野彈庫

平成15・16年度調査区

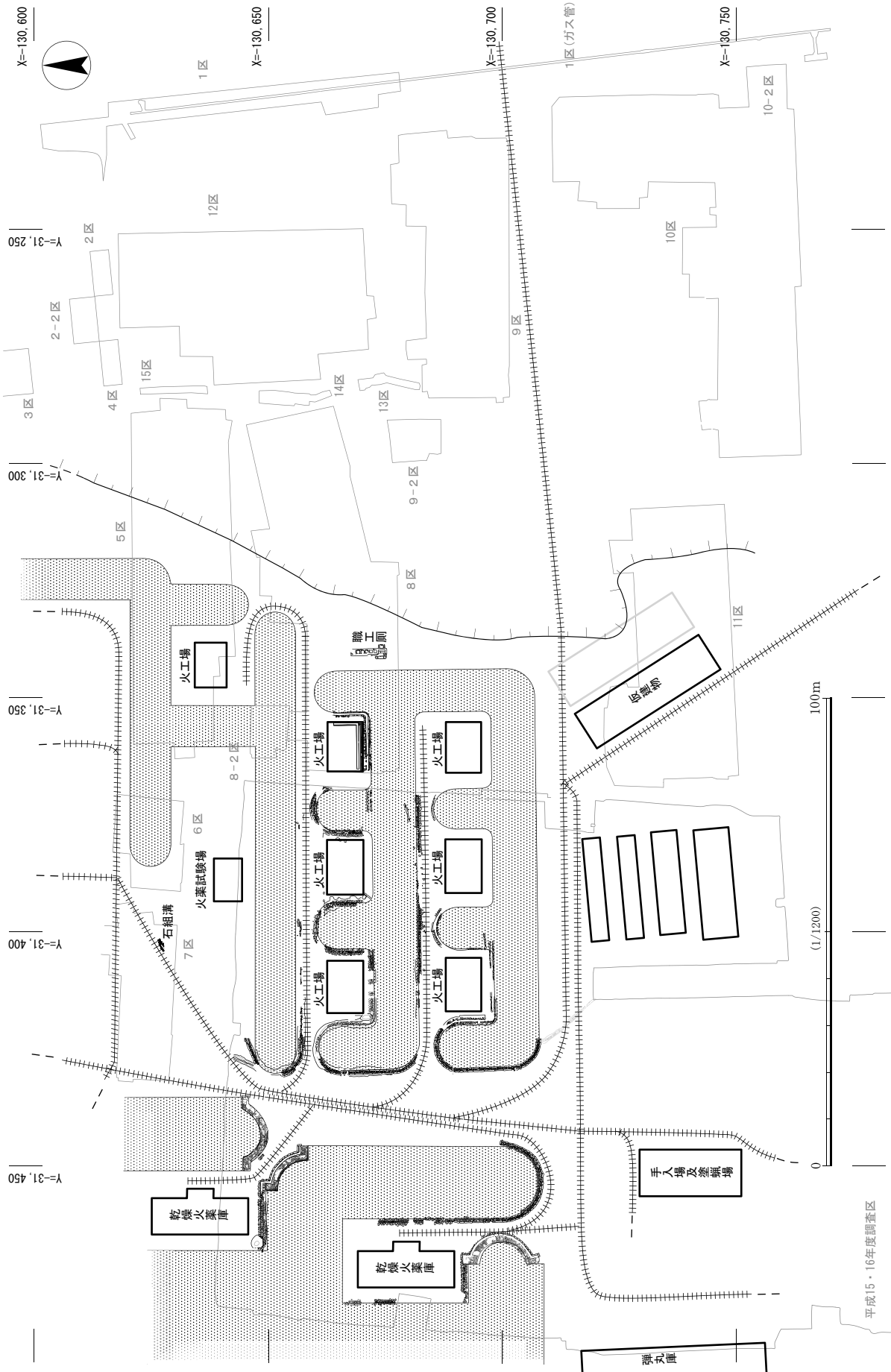


図190 大正2 (1913) 年の大阪陸軍兵器支廠禁野彈庫

平成15・16年度調査区

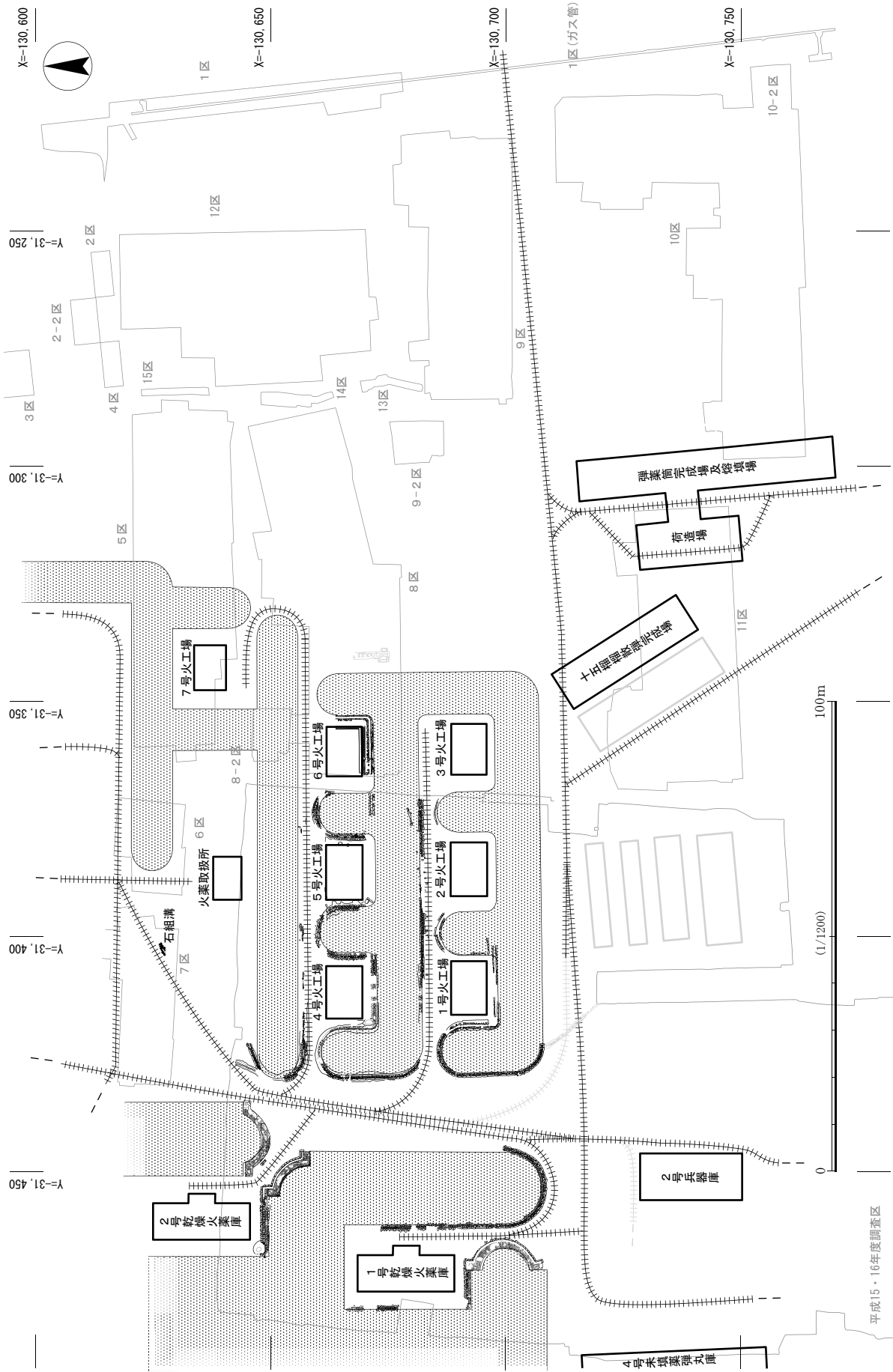


図191 昭和8（1933）年の大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫

平成15・16年度調査区

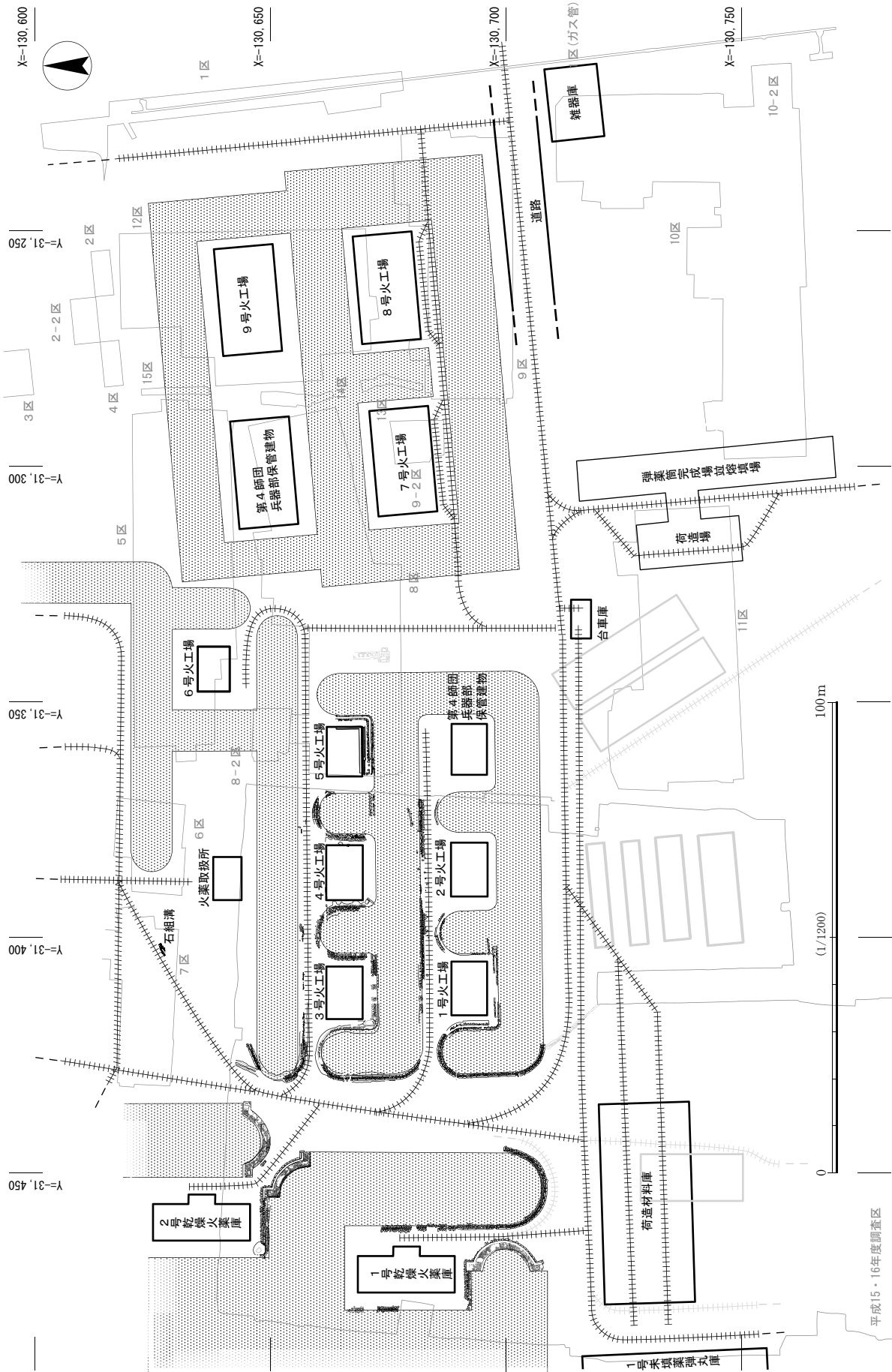


図192 昭和11(1936)年の大阪陸軍兵器支廠禁野彈藥庫

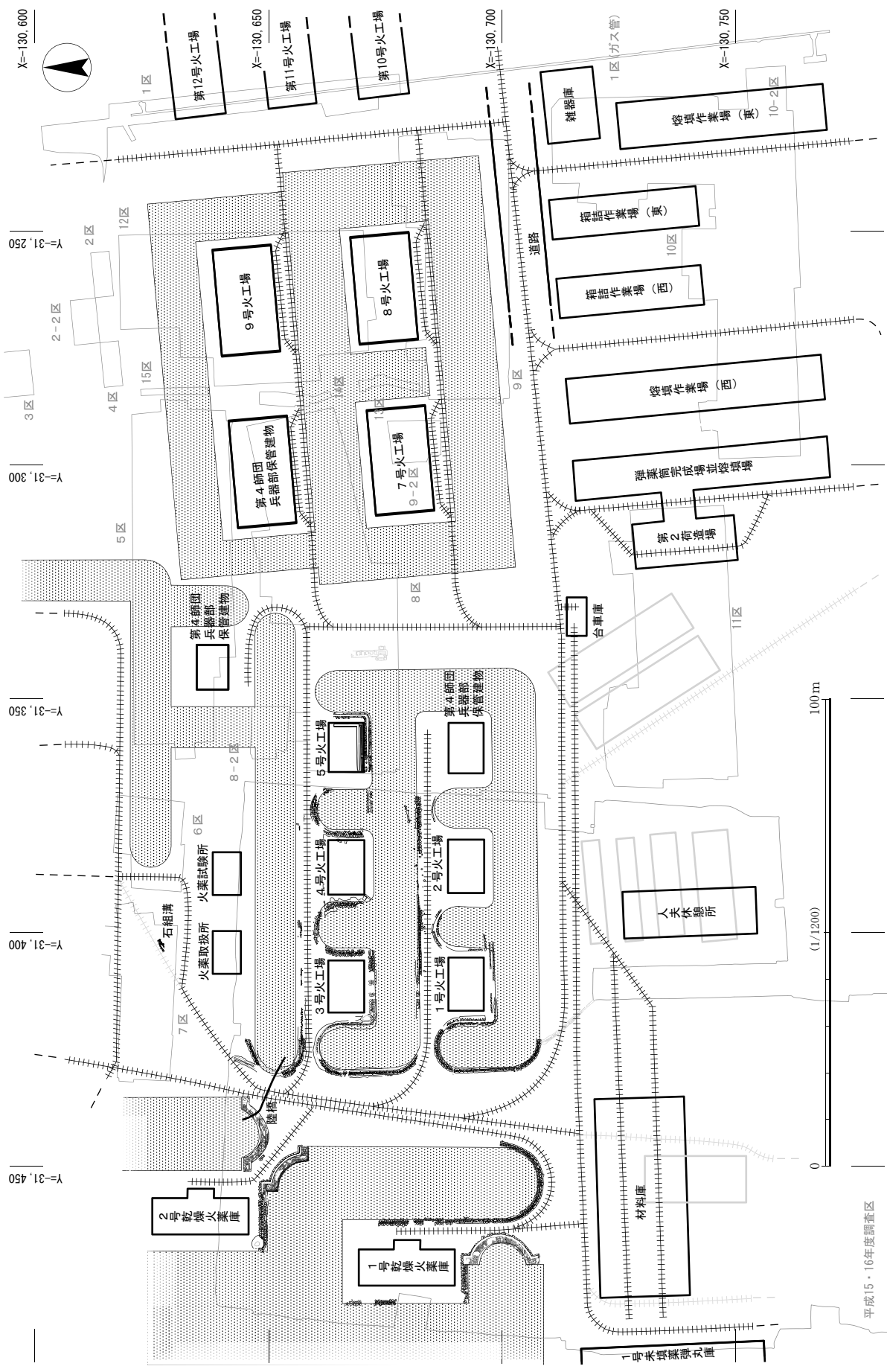


図193 昭和12（1937）年の大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫

平成15・16年度調査区

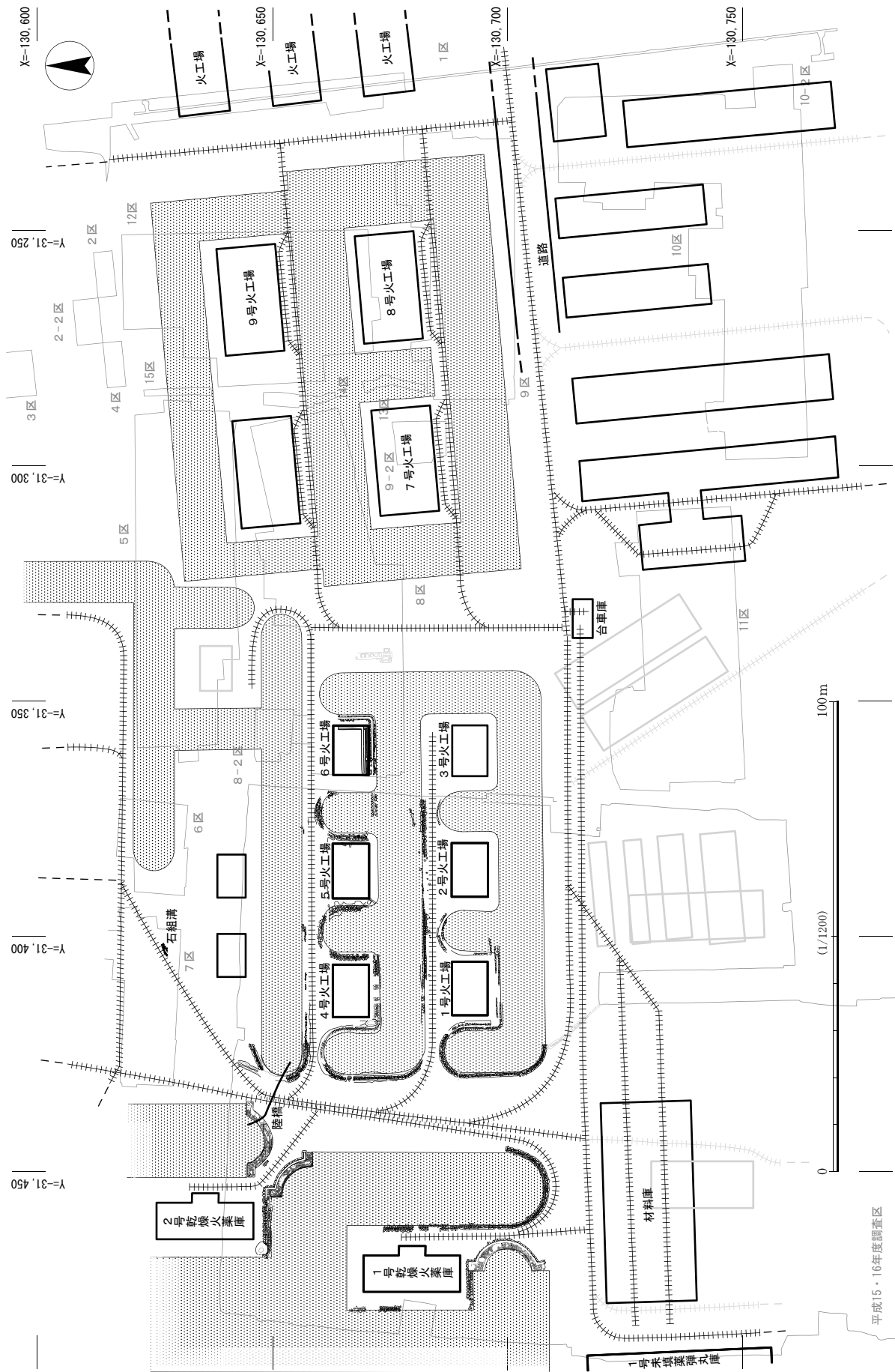


図194 昭和14（1939）年爆発前の大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫





図195 昭和14（1939）年爆発後の大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫



図196 昭和17（1942）年の大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠

平成15・16年度調査区



図197 昭和20（1945）年の大阪陸軍兵器補給廠枚方分廠

平成15・16年度調査区

掲載遺物観察表(1)

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) ( )内は残存率	調整等 (ヨコナデ、回転ナデは省略) (砂→は、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考	
128	1		11区		第1層	磁器	染付碗	近代以降	口径:11.3(若干のみ) 高台径:3.6(1/2強) 器高:4.9	外面:印判染付文、施釉(高台端部露胎) 内面:印判染付文、施釉、重ね焼痕、トチン跡?あり	7.5GY8/1 明緑灰		
128	2		11区		第3層下部	磁器	染付碗	近代以降	口径:11.4(2/5) 高台径:4.7(1/2弱) 器高:5.8	外面:印判染付文、施釉(高台端部露胎) 内面:印判染付文、施釉	7.5GY7/1 明緑灰		
128	3		11区		第1層	磁器	染付皿	近代以降	口径:14.4(1/6弱) 高台径:8.9(3/4) 器高:3.9	外面:印判染付文、施釉、輪花口縁、蛇の目凹形高台 内面:印判染付文、施釉、トチン跡あり	5GY8/1 灰白、(釉)青		
128	4		6区		第1層	ガラス製品	栓	近代以降	最大幅:2.0	つまみ以外すりガラス状、両側からの型枠線あり	5Y5/6 オリーブ		
128	5		6区		第1層	ガラス製品	瓶	近代以降	底径:6.0	内面:口縁すりガラス状、外底部気泡のざらつきあり	7.5YR3/3 暗褐		
128	6	81	10区(A2)	第2面	62土坑	金属製品	分銅	近代以降	長:3.35 幅:2.57 重さ:99.4g	刻印「大版(?)Y 虚 100g」		非鉄	
128	7	81	10区(A2)	第2面	62土坑	金属製品	分銅	近代以降	長:3.36 幅:2.54 重さ:99.1g	刻印「大版 虚 100g」		非鉄	
128	8	81	11区	第3面	166ピット	金属製品	銭貨	1668~1683年	径:2.5 郭径:0.6 厚:0.12 重さ:1.6g	寛永通寶 文銭 2期		銅	
128	9		12区		第0層	磁器	シーリングローゼット	近代以降	口径:6.8(完)	外面:施釉 内面:ネジ切り、施釉	N8/ 灰白		
128	10		11区		第1層	磁器	二重碍子	近代以降	下部稜径:6.0 (1/4)	外面:施釉 内面:ネジ切り、施釉	N8/ 灰白		
128	11		11区		第2層	磁器	茶台碍子	近代以降	口径:4.8 口縁内径:2.1 底径:4.2 器高:8.6	外面:施釉(上部露胎) 内面:施釉、螺旋状の沈線あり	N8/ 灰白		
128	12		11区		第3面	147ピット	磁器	玉碍子	近代以降	孔径:1.6	外面:施釉 内面:施釉	2.5YR4/4 にぶい赤褐	
128	13		11区		第3面	264土坑	金属製品	口輪と押さえ金具	近代以降	現長:5.0 現幅:4.0 厚:1.3			非鉄
128	14		10区(A1)		第1層	金属製品	戸車	近代以降	現長:4.2 現幅:5.1 厚:1.8				鉄
128	15		11区		第3面	243溝	金属製品	樋受金具	近代以降	現長:20.6 現幅:12.7 厚:0.6	蝶番2		鉄、豎とり控金具
128	16		10区(A1)	第2面	162土坑	金属製品	樋受金具	近代以降	現長:34.5 現幅:9.7 厚:0.6	針金が巻きついている、孔1、全体にニス?付着、全体にスス付着			鉄、軒とり金具
128	17		11区		第2層	金属製品	排水目皿	近代以降	径:18.0 厚:1.0				鉄
128	18		10区(A2)		第1層	金属製品	閉止フランジ	近代以降	径:13.2 孔径:1.6 厚:0.9	孔4			鉄
128	19		8区		第1面	10職工圃(12便槽)	陶器	鉢	近代以降	口径:57.6(一部欠) 底径:27.4(完) 器高:37.2	外面:凸線2、指押えナデ、施釉(底部露胎)、底部に成形時の砂粒付着、墨書あり 内面:施釉	2.5YR5/3 にぶい赤褐(釉)2.5YR2/3 極暗赤褐	
128	20	76	8区		第1面	10職工圃(11便槽)	陶器	鉢	近代以降	口径:57.0(一部欠) 底径:27.0(完) 器高:37	外面:凸線2、施釉(底部露胎)、底部にナデ、周縁に成形時の砂粒付着、墨書?あり 内面:施釉	5YR3/6 暗赤褐	
129	21		8区		第1面	10職工圃(13便槽)	陶器	鉢	近代以降	口径:57.2(一部欠) 底径:28.3(完) 器高:36.2	外面:凸線2、記号「O」あり、指押えナデ、施釉(底部露胎)、底部に成形時の砂粒付着、墨書?あり 内面:施釉	5YR4/2 灰褐(釉)2.5YR2/2 極暗赤褐、5YR3/2 暗赤褐	
129	22		8区		第1面	10職工圃(17便槽)	陶器	鉢	近代以降	口径:57.0(3/4) 底径:27.0(完) 器高:36.6	外面:凸線2、底部に成形時の砂粒付着、施釉(底部露胎) 内面:施釉	2.5YR2/4 極暗赤褐	
129	23	76	11区		第2面	3便槽	陶器	鉢	近代以降	口径:57.8~60.5(一部欠) 底径:27.1(一部欠) 器高:33.2	外面:施釉(底部一部露胎) 内面:施釉	2.5YR3/2 暗赤褐	
129	24		11区		第2面	4便槽	陶器	鉢	近代以降	口径:58.4(1/2強) 底径:29.1(完) 器高:31.7	外面:凸線2、施釉(底部露胎) 内面:施釉	2.5YR 5/3 にぶい赤褐(釉)2.5YR2/2 極暗赤褐	
129	25		11区		第2面	5便槽	陶器	鉢	近代以降	口径:59.3(1/3) 底径:29.0(完) 器高:32.9~33.7	外面:凸線2、指押え、底部に墨書あり、施釉(底部露胎) 内面:施釉	2.5YR6/6 橙(釉)2.5YR2/2 極暗赤褐	
129	26		5区		第1面	9土管溝	陶器	土管	近代以降	口径:61.8(2/3) 底径:50.2(1/2弱) 器高:68.6	外面:櫛目(6条)、刻印あり、底部に砂粒・接合した土管片の一部付着、施釉 内面:櫛目(6条)、施釉	2.5YR5/3 にぶい赤褐(釉)10R2/1 赤黒	
129	27		9区		第2面	347土管列	陶器	土管	近代以降	口径:20.0(完) 底径:14.6(完) 器高:64.8	外面:対称に2つの突起あり 内面:櫛目(3~5条)、土管との接合の痕跡あり	10YR1.7/1 黒	
129	28	76	9区		第2面	348土管列	陶器	土管	近代以降	口径:19.6(完) 底径:14.8(完) 器高:64.6	外面:対称に2つの突起あり、施釉 内面:砂粒付着、接合したような凹みあり、施釉	N1.5/ 黒	
130	29		9区		第2面	349土管列	陶器	土管	近代以降	口径:36.2(完) 底径:27.8~28.5(一部欠) 器高:65.5~66.5	外面:櫛目(5条)、底部に砂粒付着 内面:櫛目(5条)、砂粒付着	N1.5/ 黒	
130	30		9区		第2面	350土管列	陶器	土管	近代以降	口径:30.0(1/3) 底径:25(1/3) 器高:66.5	外面:櫛目(5~6条)、施釉 内面:櫛目(3~4条)、施釉	2.5YR2/1 赤黒	
130	31	76	9区		第2面	351土管列	陶器	土管	近代以降	口径:80.0(完) 底径:70.8(完) 器高:71.0	外面:櫛目(7条)、施釉 内面:ナデによる幅広の凹線(5条)、施釉	2.5YR2/1 赤黒、2.5YR6/6 橙	
130	32		10区(A1)		第1面	1建物	陶器	L字形土管	近代以降	口径:20(1/3) 底径:15.8(1/2弱)	外面:施釉 内面:櫛目(6条)、施釉	N2/ 黒	昭和16年竣工
130	33		10区(A1)		第1面	1建物北出入口C付近	陶器	土管	近代以降	口径:16.0~18.8(1/2強) 底径:15.0(一部欠) 器高:60.7~63.8	内面:櫛目(4条)、土管と接合していた痕跡あり	10YR2/1 黒	
130	34		10区(A2)		第1面	42土管溝	陶器	L字形土管	近代以降	底径:15.6 (完)	外面:施釉 内面:施釉	N1.5/ 黒	
130	35	76	10区(A2)		第1面	43土管溝	陶器	土管	近代以降	口径:23.5(一部欠) 底径:18.8(一部欠) 器高:64.2~65.8	外面:底部に砂付着 内面:薄く一部モルタル?付着	7.5YR2/1 黒	

掲載遺物観察表(2)

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量(cm) ()内は残存率	調整等(ヨコナデ、回転ナデは省略)(砂へは、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
130	36		10区(A2)	第1面	43土管溝	陶器	土管	近代以降	口径:24.4(完) 底径:17.4(3/4) 器高:65.0~65.9	外面:施釉、底部に一部接合していた土管片が付着 内面:施釉、モルタル付着	5YR1.7/1 黒	
130	37	76	11区	第3面	1土管溝	陶器	土管	近代以降	口径:33.2(完) 底径:25.5~26(完) 器高:66.6~68.2	外面:櫛目(7条)、底部に砂粒付着 内面:櫛目(5条)	2.5YR2/1 赤黒	
131	38		11区	第3面	2 橋	陶器	土管	近代以降	口径:18.8(1/7) 底径:15~16 器高:64.8	外面:施釉、底部に砂粒付着 内面:施釉	7.5YR2/1 黒	
131	39		11区	第3面	240土管溝	陶器	土管	近代以降	口径:34.4(一部欠) 底径:28.0(一部欠) 器高:67.1	外面:櫛目(7条)、底部に砂粒付着、施釉 内面:櫛目(6~7条)、砂粒付着、施釉	N1.5/ 黒	
131	40		11区	第3面	240土管溝	陶器	土管	近代以降	口径:35.5~36.0(完) 底径:29.2(若干のみ) 器高:66.5	外面:櫛目(5条)、底部に砂粒付着、施釉 内面:櫛目(6条)、砂粒付着、施釉	2.5YR3/1 暗赤灰	
131	41		11区	第3面	240土管溝	陶器	土管	近代以降	口径:36.3(一部欠) 底径:29.0(4/5) 器高:67.0	外面:櫛目(8条)、施釉 内面:櫛目(5条)、砂粒付着、施釉	2.5YR5/6 明赤褐	
131	42		11区	第3面	244土管溝	陶器	土管	近代以降	口径:23.6(1/2) 底径:18.0(1/3) 器高:65.9	外面:施釉 内面:施釉	10YR2/1 黒	
131	43		11区	第3面	246土管溝	陶器	土管	近代以降	口径:25.0(1/2弱) 底径:18.6(2/3) 器高:65.4	外面:施釉、モルタル付着、底部に砂粒付着 内面:砂粒付着、施釉	2.5YR3/1 暗赤灰	
131	44		12区	第2面	21土管列	陶器	土管	近代以降	口径:27.0(完) 底径:21.4(完) 器高:64.3	外面:櫛目(6~7条)、砂粒付着、施釉 内面:櫛目(5条)、砂粒付着、施釉	10YR2/1 黒	
131	45		12区	第2面	24土管列	陶器	土管	近代以降	口径:19.5(1/2強) 底径:14.5(一部欠) 器高:63.8~65.1	外面:施釉、モルタル付着、底部に砂粒付着 内面:施釉、砂粒付着	10R3/1 暗赤灰	
131	46		5区	第1面		瓦	軒瓦	近代以降	現長:10.1 現幅:29.1 平瓦前面幅:3.7 軒丸径:9.6~9.8	凸面:ナデ、ヘラナデ 凹面:板ナデ、ナデ、指ナデ、ヘラナデ	N3/ 暗灰	
131	47		11区	第2層		瓦	紐丸瓦	近代以降	器高:5.8	凸面:ナデ、ヘラナデ 凹面:ナデ、ヘラナデ	N3/ 暗灰	
132	48		10区(A2)	第2層		瓦	平瓦	近代以降	現長:29.3 現幅:26.2 狭端面厚:1.5 広端面厚:1.5	凸面:ナデ 凹面:ナデ	N3/ 暗灰	
132	49		10区(A2)	第2層		瓦	棧瓦	近代以降	現長:29.0 現幅:28.2 狭端面厚:1.6 広端面厚:1.7	凸面:ナデ 凹面:ナデ	N2/ 黒	
132	50		11区	第3面	238鉄管溝	瓦	引掛付棧瓦	近代以降	現長:27.9 狭端面厚:1.6 広端面厚:1.4	凸面:孔1、型跡?あり 凹面:櫛目(16条)、櫛目(15条)、櫛目(16条)	N3/ 暗灰	
132	51		11区	第3面	1土管溝	瓦	袖瓦(左)	近代以降	袖幅:18.5	凸面:ナデ 凹面:ナデ	5Y7/1 灰白	
132	52		11区	第3面	1土管溝	瓦	伏間瓦	近代以降	器高:5.4	凸面:ヘラ痕あり、型跡か	N4/ 灰	
133	53	77	11区	第2層		瓦	軒瓦	近代以降	現長:15.0 軒丸径:9.6~10.0 軒平幅:4.6(推定)	凸面:ナデ、ヘラナデ 凹面:ナデ、ヘラナデ 刻印「村瓦米」	N3/ 暗灰	
133	54	77	9区	第0層		瓦	棧瓦	近代以降	現長:28.5 狭端面厚:1.4 広端面厚:1.3	凸面:ナデ 凹面:ヘラナデ、櫛目、型跡か 刻印「三州」	N4/ 灰	
133	55	77	11区	第2層		瓦		近代以降	端部厚:1.8 側面部厚:1.7	凸面:ナデ、ヘラナデ 凹面:ナデ、ヘラナデ 刻印「淡路 阿萬 〇〇組(?)合 谷」	7.5YR6/3 にぶい褐	
133	56	77	9区	第1面	56土壘基礎 東辺側溝	瓦	平瓦	近代以降	側面部厚:2.1 狭端面厚:1.0~2.1	凸面:型押し痕跡、ナデ 凹面:ヘラナデ、ナデ、刻印「一」	N4/ 灰	
133	57	77	11区	第2層		瓦	引掛付平瓦	近代以降	広端面厚:2.5 端部厚:1.5	凸面:ヘラナデ、ナデ、櫛目(19条)、刻印「K」杏、櫛目 凹面:ヘラナデ、ナデ、孔1(未貫通)	N4/ 灰	
133	58	77	11区	第3面	205ピット	瓦	引掛付平瓦	近代以降	広端面厚:2.3	凸面:ヘラナデ、ナデ、櫛目(19条)、刻印「S」、櫛目(19条)、ナデ 凹面:ヘラナデ、ナデ、孔1(未貫通)	N4/ 灰	
133	59	77	11区	第2層		瓦	引掛付平瓦	近代以降	側面部厚:1.5 広端面厚:1.4 引掛部厚:2.5	凸面:ヘラナデ、ナデ、櫛目(20条)、刻印「ト」、櫛目 凹面:ナデ、型押し痕跡?	N4/ 灰	
133	60	77	11区	第2層		瓦		近代以降	体部厚:1.6	凸面:櫛目、ナデ、刻印「隆」、櫛目 凹面:ナデ	N4/ 灰	
133	61	77	11区	第3面	88土坑	瓦		近代以降	端部厚:1.8 側面部厚:2.1	凸面:ヘラナデ、型押し痕跡?、ナデ 凹面:ヘラナデ、型押し痕跡?、ナデ、刻印「製」?	2.5Y7/2 灰黄	
133	62	77	10区(A2)	第2面	59溝	瓦		近代以降	側部厚:2.1	凸面:ヘラナデ、ナデ 凹面:ヘラナデ、型押し痕跡?、ナデ、刻印「MARK」「分式瓦」	N4/ 灰	
133	63	77	10区(A2)	第2面	59溝	瓦		近代以降	側部厚:2.3	凸面:ヘラナデ、ナデ 凹面:ヘラナデ、ナデ、刻印「RK」「森分式」	N4/ 灰	
134	64	78	8区			煉瓦		近代以降	長:22.8 幅:11.0 厚:6.5	手形成 上面:板ナデ、線状凹みあり、乾燥時の凹みあり 下面:板ナデ、刻印あり 小口面:ナデか 長手面:ナデ、指押え?、凹み、小さな段あり	10R5/6 赤、10YR5/2 灰黄褐	[岸和田煉瓦]
134	65	78	11区	第1層		煉瓦		近代以降	長:22.0 幅:11.0 厚:6.1	機械成形 上面:刻印あり(二重押し)、モルタル付着 下面:刻印あり 小口面:ナデ? 長手面:ナデ?乾燥時の段あり、ヘラ痕?あり	10R5/4 赤褐	[岸和田煉瓦]
135	66	78	11区	第2層		煉瓦		近代以降	長:22.7 幅:11.3 厚:6.5	手成形 上面:指押えナデ後板ナデ、線状凹みあり、刻印あり 下面:板ナデ、刻印あり、モルタル付着 小口面:未調整?、薄くモルタル付着 長手面:ナデ、モルタル薄く付着	10R5/6 赤	[岸和田煉瓦]
134	67	78	9区			煉瓦		近代以降	長:23.2 幅:11.2 厚:6.5	手成形 上面:線状凹みあり、板ナデ、刻印あり(二重押し)、モルタル付着 下面:板ナデ、指押え、刻印あり 小口面:ナデ、スス付着 長手面:ナデか	2.5YR6/6 橙	[大阪窯業]
134	68	78	9区	第0層		煉瓦		近代以降	長:22.8 幅:10.9 厚:6.2	手形成 上面:板ナデ、線状凹み、刻印あり 下面:板ナデ、刻印あり 小口面:ナデ?モルタル薄く付着 長手面:ナデか、線状痕跡あり	2.5YR5/6 明赤褐	

掲載遺物観察表 (3)

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) ( )内は残存率	調整等 (ヨコナデ、回転ナデは省略) (砂→は、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
134	69	78	9区			煉瓦		近代以降	長:22.3 幅:11.0 厚:6.5	手成形 上面:板ナデ、線状凹みあり、モルタル付着 下面:板ナデ、スス?付着、乾燥時の凹みあり、刻印あり 小口面:ナデ? 長手面:線状の痕跡あり、モルタル付着、他の煉瓦が接合	10R4/2 灰赤	[堺煉瓦]
134	70	78	9区			煉瓦		近代以降	長:23.0 幅:11.5 厚:6.5	手成形 上面:板ナデ、一部線状凹みあり、刻印あり 下面:板ナデ、モルタル付着、刻印あり 小口面:ナデ 長手面:ナデ、モルタル付着	10R6/8 赤橙	[大阪窯業]
135	71	78	7区		機械掘削	煉瓦		近代以降	長:21.0 幅:10.6 厚:6.4	手成形 上面:指押えナデ後板ナデ、線状凹みあり、刻印あり 下面:板ナデ、一部欠損 小口面:ナデ? 長手面:ナデ	2.5YR6/8 橙	[日本煉瓦]
135	72	78	10区 (A2)			煉瓦		近代以降	長:23.4 幅:11.3 厚:6.5	手成形 上面:板ナデ、線状凹み、刻印あり、モルタル付着 下面:板ナデ、モルタル付着、刻印あり 小口面:ナデ? 長手面:線状の痕跡あり、ナデか	10R5/6 赤	[日本煉瓦]
135	73	78	7区		機械掘削	煉瓦		近代以降	長:22.8 幅:11.5 厚:6.5	手成形 上面:指押えナデ一部板ナデ、線状凹みあり、刻印あり(二重押し) 下面:指押え、板ナデ、モルタル付着、刻印あり 小口面:ナデ 長手面:ナデ	2.5YR5/4 にぶい赤褐	[岸和田煉瓦]
135	74	78	1区			煉瓦		近代以降	長:23.3 幅:11.6 厚:6.8	手成形 上面:線状凹みあり、板ナデ、刻印あり 下面:刻印あり(二重押し) 小口面:一部指ナデ 長手面:ナデ	10R5/6 赤	[大阪窯業]
135	75	78	9区			煉瓦		近代以降	長:22.6 幅:11.2 厚:6.1	手成形 上面:指押えナデ?後板ナデ、線状凹みあり、刻印あり 下面:板ナデ、モルタル付着、刻印あり 小口面:ナデか(モルタル薄く付着) 長手面:ナデか、乾燥時の凹みあり	10R4/3 赤褐	[大阪窯業]
135	76	78	9区			煉瓦		近代以降	長:22.5 幅:11.0 厚:5.6	手成形 上面:板ナデ、線状凹みあり、刻印あり、モルタル付着 下面:板ナデ、モルタル付着、刻印あり 小口面:ナデか 長手面:線状の痕跡あり、モルタル薄く付着	10R4/4 赤褐	[大阪窯業]
135	77	78	9区			煉瓦		近代以降	長:22.6 幅:11.1 厚:6.1	手成形 上面:指押えナデ後板ナデ、線状凹みあり、刻印あり 下面:板ナデ、刻印あり 小口面:ナデ?一部モルタル付着 長手面:ナデ?	2.5YR6/4 にぶい橙	
135	78	78	8区	第1面		煉瓦		近代以降	長:10.3 幅:10.7 厚:5.4	手成形 上面:指押えナデ後板ナデ?、刻印あり 下面:板ナデ、刻印あり(二重押し) 小口面:指押えナデか 長手面:ナデか、乾燥時の段あり	2.5YR3/3 明赤褐	
136	79	79	7区	第2面	2ピット	金属製品	錠	近代以降	現長:3.1 現幅:5.9 厚:0.3			鉄
136	80	79	12区	第1・2面	2建物	金属製品	錠	近代以降	現長:1.8 現幅:10.0 厚:0.5			鉄
136	81	79	10区 (A1)		第1層	金属製品	錠	近代以降	現長:3.3 現幅:10.0 厚:0.3			鉄
136	82		10区 (A1)		第1層	金属製品	錠	近代以降	現長:4.4 現幅:12.8 厚:0.9			鉄
136	83	79	11区		第1層下部 (1号荷造場)	金属製品	錠	近代以降	現長:4.4 現幅:13.0 厚:0.6			鉄
136	84	79	10区 (A1)		第1層	金属製品	錠	近代以降	現長:2.9 現幅:13.3 厚:0.5			鉄
136	85	79	11区		第1層下部 (1号荷造場)	金属製品	錠	近代以降	現長:4.7 現幅:16.2 厚:1.1			鉄
136	86	79	7区	第2面	2ピット	金属製品	錠	近代以降	現長:6.1 現幅:39.1 厚:1.9			鉄
136	87	79	10区 (A1)		第1層	金属製品	手違い	近代以降	現長:4.9 現幅:11.5 厚:0.9			鉄
136	88	79	10区 (A1)		第1層	金属製品	手違い	近代以降	現長:5.2 現幅:12.8 厚:1.0	全体にニス?付着		鉄
136	89		11区		第2層下部	金属製品	手違い	近代以降	現長:4.2 現幅:12.2 厚:0.8(サビなし)			鉄
136	90		10区 (A1)	第2面	189ピット	金属製品	手違い	近代以降	現長:5.1 現幅:12.9 厚:1.0			鉄
136	91	79	7区		第1層	金属製品	手違い	近代以降	現長:6.7 現幅:16.0 厚:1.2			鉄
136	92	79	10区 (A2)		第1層	金属製品	ボルト	近代以降	現長:23.5 直径:1.3	円形ワッシャー(径:4.0)、丸頭、ネジ切り(9条+α)、軸部断面:上方は四角、下方は丸		鉄
136	93		10区 (A1)		第1層	金属製品	ボルト	近代以降	現長:22.5(ナット間17.9) 直径:1.3	方形ワッシャー3枚(径:4.5×4.5、厚:0.25)、六角形ナット、ネジ切り(6条+α)		鉄
136	94	79	10区 (A1)		第1層	金属製品	ボルト	近代以降	現長:23.8(ナット間20.5) 直径:1.6	方形ワッシャー2枚(径:4.0・4.5×4.5、厚:0.45)、六角形ナット2、ネジ切り(14条)		鉄
136	95	79	11区		第1層	金属製品	ボルト	近代以降	長:42.6(ナット間39.1) 直径:1.9	台形ワッシャー?2枚(下辺:10、高さ:6.3、厚:1.1)、方形ワッシャー1枚(径:5.1×5.0、厚:0.2)、方形ナット3、ネジ切り(18条、34条?)		鉄
136	96	80	10区 (A2)		第1層	金属製品	ボルト?	近代以降	長:11.4 頭部径:2.0 軸部径:1.2 孔径:0.6~0.8	頭部:六角形、孔1、軸部断面:上方丸、下端四角		鉄
136	97	80	9区	第2面	20枕木土坑	金属製品	ワッシャー	近代以降	直径:2.5 孔径:0.7 厚:0.2	丸		鉄
136	98	80	11区	第1面		金属製品	ワッシャー	近代以降	4.1×3.9 孔径:1.5 厚:0.3~0.4	四角		鉄
136	99		11区		第2層	金属製品	鑿	近代以降	現長:9.9 現幅:1.7 現厚:1.3			鉄
136	100		10区 (A2)	第2面	62土坑	金属製品	やっこ	近代以降	現長:18.0 現幅:3.9 厚:1.5			鉄
136	101		11区	第1層		金属製品	とび口	近代以降	長:57.4 幅:19.5 柄厚:3.4	柄ととび頭 とび頭に記号?		鉄・木

掲載遺物観察表(4)

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量(cm) ( )内は残存率	調整等(ヨコナデ、回転ナデは省略)(砂-は、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
137	102	80	9区	第2面	20枕木土坑	金属製品	木ネジ	近代以降	長:7.7 頭部径:1.1 軸部径:0.5	丸頭、ネジ切り(15条)		鉄
137	103		10区(A2)	第2面	56土坑	金属製品	木ネジ?	近代以降	長:6.7 頭部径:1.9 軸部径:1.0	丸頭、ネジ切り(9条)、軸部断面:上方丸、下方四角		鉄
137	104		10区(A2)	第2面	37溝	金属製品	木ネジ	近代以降	長:4.8 頭部径:1.2 軸部径:0.6	皿頭にすり切り、ネジ切り(11条)		真鍮
137	105	80	10区(A2)	第2面	37溝	金属製品	木ネジ	近代以降	長:7.2(さびなし) 頭部径:2.0 軸部径:1.0	皿頭にすり切り、ネジ切り(21条)		鉄
137	106	80	11区		第1層下部(1号荷造場)	金属製品	木ネジとワッシャー	近代以降	長:7.9 頭部径:1.1 軸部径:0.6 ワッシャー径:2.2	丸頭、ネジ切り12条		鉄
137	107	80	11区		第1層下部(1号荷造場)	金属製品	木ネジとワッシャー	近代以降	長:7.9 頭部径:0.9 軸部径:0.6 ワッシャー径:2.3	丸頭、ネジ切り16条?		鉄
137	108	80	11区		第1層下部(1号荷造場)	金属製品	木ネジ?	近代以降	長:4.0 頭部径:0.8~0.9 軸部径:0.5	皿頭に木質?付着、ネジ切りの痕跡		鉄
137	109		11区		第1層下部(1号荷造場)	金属製品	木ネジ	近代以降	長:5.0 頭部径:1.2 軸部径:0.7	皿頭にすり切り、ネジ切り13条		非鉄
137	110	80	11区	第3面	191落ち込み	金属製品	木ネジ	近代以降	長:4.9 頭部径:1.2 軸部径:0.6	皿頭にすり切り、ネジ切り10条		非鉄
137	111		11区	第3面	191落ち込み	金属製品	木ネジ	近代以降	長:5.1 頭部径:1.2 軸部径:0.6	皿頭部にすり切り、ネジ切り11条		非鉄
137	112	80	11区		第1層下部(1号荷造場)	金属製品	木ネジ?	近代以降	長:15.1 頭部径:1.1 軸部径:0.7	皿頭、さびにネジ切りのような凹凸あり		鉄
137	113		11区		第2層	金属製品	釘	近代以降	長:3.9 頭部径:0.4 軸部径:0.2			非鉄
137	114		11区		第1層下部(1号荷造場)	金属製品	釘	近代以降	長:5.3 頭部径:0.7 軸部径:0.4	折れ曲がる		鉄
137	115	80	12区	第1・2面	2建物	金属製品	釘	近代以降	長:4.4 頭部径:0.5 軸部径:0.3	頭部に斜格子模様、軸部一部にスジ切り		鉄
137	116	80	12区	第1・2面	2建物	金属製品	釘	近代以降	長:4.5 頭部径:0.5 軸部径:0.3	頭部に斜格子模様、軸部一部にスジ切り(4条)		鉄
137	117	80	12区	第1・2面	2建物	金属製品	釘	近代以降	長:5.1 頭部径:0.5 軸部径:0.3			鉄
137	118	80	12区	第1・2面	2建物	金属製品	釘	近代以降	長:5.0 頭部径:0.7 軸部径:0.3	頭部に斜格子模様、軸部一部にスジ切り(8条)		鉄
137	119	80	12区	第1・2面	2建物	金属製品	釘	近代以降	長:6.1 頭部径:0.7 軸部径:0.3			鉄
137	120	80	12区	第1・2面	2建物	金属製品	釘	近代以降	長:6.6 頭部径:0.7 軸部径:0.3	頭部に斜格子模様、軸部一部にスジ切り(4条)		鉄
137	121	80	12区	第1・2面	2建物	金属製品	釘	近代以降	長:5.0 頭部径:0.7 軸部径:0.3	頭部に斜格子模様		鉄
137	122	80	12区	第1・2面	2建物	金属製品	釘	近代以降	長:7.4 頭部径:0.9 軸部径:0.5	曲がる		鉄
137	123	80	12区	第1・2面	2建物	金属製品	釘	近代以降	長:7.8 頭部径:0.8 軸部径:0.4	頭部に格子模様、頭部と軸部の境に型どりのほみ出しあり		鉄
137	124	80	12区	第1・2面	2建物	金属製品	釘	近代以降	長:12.6 頭部径:1.0 軸部径:0.5			鉄
137	125	80	12区	第1・2面	2建物	金属製品	釘	近代以降	長:12.4 頭部径:1.1 軸部径:0.5	スジ切り(9条)		鉄
137	126	103	11区	第3面	2枘	木製品	建築部材	近代以降	長:57.7 幅:9.5 厚:9.5 ホソ孔:11.0×2.0	スギ材、ホソ孔1、小孔1、側面に加工痕かと思われる擦痕あり		
137	127		10区(A1)		第1層	金属製品	?	近代以降	長:4.9 幅:7.6 奥行:4.4 孔径:1.1-0.6	止めるためと思われる孔2(内1は半分のみ貫通)		鉄
137	128	79	10区(A1)		第1層	金属製品	止め具	近代以降	直径:(上)3.2(下)1.7 現高:2.1	大小の鉄製円板の間にコルク?をはさみ針金で閉じている		鉄
137	129		10区(A1)	第2面	196土坑	金属製品	かぶせ?	近代以降	直径:3.0 現高:1.8 厚:0.1			真鍮
137	130	79	10区(A1)		第1層	金属製品	コートフック?	近代以降	現長:10.5 現幅:7 厚:0.4(土台)			鉄
137	131		10区(A2)	第2面	77土坑	金属製品	?	近代以降	現長:8.3 現幅:4.1 厚:1.0	二股に分かれた先端部の断面が違う、上面の表面に浅い凹み		鉄
137	132		7区	第2面	2ピット	金属製品	楔状金具	近代以降	長:25.2 幅:4.6 厚:0.6 孔径:0.8(0.5)	孔2		鉄
137	133	86	7区	第2面	2ピット	金属製品	幅広短冊金物	近代以降	現長:20.0 現幅:6.6 厚:0.6 孔径:0.6	孔6(内4半載)		鉄
137	134	86	12区	第1・2面	2建物	金属製品	建築部材	近代以降	長:20.3 幅:5.3 厚:0.6	両端に突起		鉄
137	135	86	10区(A1)	第2面	250構造物	金属製品	裏当金?	近代以降	27.2×9.2 高さ:2.6 厚:0.6 孔径:0.7	側面に孔7		鉄
138	136		8区	第1面	8石組溝	金属製品	?	近代以降	現長:39.8 現幅:16.0 厚:0.6	二股に分かれた先端に同形の附属するもの(小孔2)があるが、付き方が反対		鉄
138	137		11区	第2層		金属製品	建築部材	近代以降	現長:20.7 現幅:2.2 厚:1.5(高い所)0.4(縁) 孔径:0.5	釘状の突出1、孔2		非鉄
138	138	79	10区(A2)	第2面	7ピット	金属製品	建築部材	近代以降	現長:12.0(板の)幅:2.6(板の)厚:0.6	木ネジ4		鉄
138	139	79	12区	第1・2面	2建物	金属製品	建築部材	近代以降	現長:11.7 現幅:4.3 厚:2.6(重なった所)	蝶番を挟み板状の重なり、釘2		鉄
138	140	79	10区(A1)		第1層	金属製品	建築部材	近代以降	現長:19.2 現幅:4.0 厚:2.6(重なった所)	蝶番を挟んだ幅狭の薄板に鉄輪(直径:4.0cm)をブリッジ状の薄板ではさむ、丸ワッシャー(径:2.0cm)2、六角形ナット(径:1.2cm)2、孔1(径:0.5cm)		鉄
138	141		10区(A1)		第1層	金属製品	?	近代以降	現長:39.4 現幅:4.0 厚:2.1(凸出含む)	断面十字状		鉄





掲載遺物観察表(6)

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量(cm) ( )内は残存率	調整等(ヨコナデ、回転ナデは省略)(砂→は、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
140	174	84	10区(A1)	第2面	162土坑	金属製品	葉莢	近代以降	底径:13.5(ゆがみあり) 現高:13.5 厚:0.2~0.6	切れて折れ曲がる、底部中心に円形の凹み(使用済みの印)、刻印「F 昭十四 2 〆ヤ版 (昭十3 〆版)」		真鍮
140	175		11区		機械掘削中	金属製品	?	近代以降	上径:1.6(完) 下径:2.8(完) 高さ:2.7 厚:0.45~0.6	上端と下端に細かい刻み、ネジ切り9条		非鉄
140	176		10区(A2)		第1層	金属製品	啄螺	近代以降	上径:2.0(完) 下径:3.1(完) 高さ:1.7 厚:0.2~0.8	上端に切り込み2、ネジ切り(3条、12条)		鉄
140	177		10区(A1)		第1層	金属製品	啄螺	近代以降	上径:3.1 下径:3.7 高さ:1.8 厚:0.8	切り込み2、ネジ切り(3条、5条)		鉄
140	178	85	12区		第1層	金属製品	信管	近代以降	底径:2.25~2.3(楕円形にゆがむ) 現高:6.0	中は詰まっており、針金が回っている、沈線1、切り込み2、ネジ切り(5条)、小孔1		非鉄?、八八式瞬発信管か
140	179	85	10区(A1)	第2面	179ピット	金属製品	啄螺	近代以降	上径:3.1(完) 下径:4.5(完) 高さ:5.1 厚:0.5~0.8	切り込み2、ネジ切り(7条、14条)		鉄
140	180	85	10区(A1)		第1層	金属製品	(乙種)信管 接続筒	近代以降	上径:3.3(一部欠) 下径:5.5(一部欠) 高さ:7.1 厚:0.5~2.3	上端と中央に切り込み2個ずつ、沈線1、ネジ切り(5条、1+3条)、刻印「C?、0か0、c?」		鉄
140	181	85	10区(A1)		第1層	金属製品	?	近代以降	上径:3.2~3.3 現高:9.1	圧力でひしゃげる、上端に切り込み2、ネジ切り(4条、7条)		鉄
140	182	85	10区(A1)		第1層	金属製品	伝火薬筒室	近代以降	上径(内):2.8 高さ:6.55	上端部に刻印「D」、小孔2、ネジ切り(5条)		非鉄
140	183		8区	第1面	8石組溝	金属製品	伝火薬筒室	近代以降	上径:3.35~3.65(ほぼ完) 高さ:7.7 厚:0.25	上端部に小孔2、ネジ切り(5条)		鉄
140	184		10区(A1)		第1層	金属製品	伝火薬筒室	近代以降	上径:3.0(一部欠) 高さ:7.3 厚:0.15	ネジ切り(13条)		鉄
140	185		11区		第1層	金属製品	?	近代以降	下径:5.3 現高:5.1 厚:0.1	折れ曲がる、針金中に入り込む、突出部分を十字に金属板が覆う		真鍮
140	186		9区	第2面	14枕木土坑	金属製品	?	近代以降	下径:0.8(完) 現高:2.6	上部に炭化物付着、ネジ切り(4条)		ベークライト?
140	187		12区		第1層	金属製品	?	近代以降	下径:2.4~3.3(へしゃげる) 現高:4.1	中が詰まっている、ネジ切り(7条)		鉄
140	188		10区(A2)	第2面	62土坑	金属製品	?	近代以降	上径:1.7(完) 下径:2.4(完) 高さ:8.9~9.0	底面に小孔2、筒部に小孔1・3、ネジ切り(2条)		鉄
140	189		12区		第1層	金属製品	榴散弾の弾	近代以降	直径:1.5 重さ:16.3g	型つくりの段が残る		非鉄
140	190		11区		第2層	金属製品	?	近代以降	上径:2.5(3/4) 下径:1.0(完) 高さ:2.6 厚:0.4~0.9	中央凸帯に切り込み2、底部突出部に十字状の覆い(中央に孔)、スジ切り(5条、4条、4条)		非鉄
140	191	83	10区(A1)		第1層	金属製品	演習弾?	近代以降	底径:5.0(ゆがみあり) 高さ:9.5 厚:0.35	上部に木片付着、ネジ切り(3条)		鉄?
140	192	86	9区		第2層	金属製品	榴散弾内部の弾子と炸薬を隔てるもの	近代以降	直径:6.0 厚:1.2 孔径:1.15~1.3	孔1、凹み18(径:1.0~1.1)		鉄
141	193		11区		機械掘削中	金属製品	爆管	近代以降	上径:1.0(完) 下径:1.8(完) 高さ:1.8	中が詰まっている、底部に切り込み3、刻印「六式」、ネジ切り(4条)		非鉄
141	194	86	11区		第1層	金属製品	爆管	近代以降	上径:2.4(完) 下径:3.2(完) 高さ:1.9	ドイツ式 内上面に布付着?、底部に切り込み3、刻印「民國廿四年 徳式十二号 39」		非鉄
141	195	86	11区		第1層下部(1号荷造場)	金属製品	爆管	近代以降	上径:2.4(完) 下径:3.2(完) 高さ:1.9	内面に布と布を覆う銅、底面に切り込み3、刻印「16」		非鉄
141	196	86	11区		第1層下部(1号荷造場)	金属製品	?	近代以降	上径:1.45(完) 下径:2.4 高さ:2.2	切り込み2、底面に鉄線?、内底面にネジ返し切り込み、ネジ切り(2条)		非鉄
141	197		11区		第1層下部(1号荷造場)	金属製品	?	近代以降	上径:3.7(完) 高さ:0.5 厚:0.3	未貫通孔2		非鉄
141	198	85	11区	第2面		金属製品	弾頭螺塞	近代以降	上径:3.9(完) 下径:2.9(完) 高さ:2.5	底面にねじ回し切り込み、浮き彫り印「手ス左 ス」、ネジ切り(5条)		ベークライト
141	199	85	11区		第1層	金属製品	弾頭螺塞	近代以降	上径:5.2(完) 下径:4.4(完) 高さ:2.25	底面にねじ回し切り込み、ネジ切り(4条)		ベークライト
141	200	85	7区	第2面	6枕木土坑	金属製品	?	近代以降	上径:5.4~7.3(ゆがむ) 下径:5.9~6.3 高さ:3.0	底面にねじ回し切り込み、ネジ切り(5条)		鉄
141	201	85	12区		第1層	金属製品	?	近代以降	上径:4.1(完) 下径:6.0(完) 高さ:2.3	底面にねじ回し切り込み、ネジ切り(3条)、ネジ?2本が挿入、違う素材を合体している		鉄・非鉄
141	202		10区(A1)		第1層	金属製品	?	近代以降	上径:5.1 下径:6.7 高さ:1.7	孔1、底面に未貫通孔2、ネジ切り(4条、3条)、ネジ1挿入		鉄
141	203					木製品	托板	近代以降	長:19.4 高さ:7.3 厚:3.0	スギ材 全体に火を受けてゆがむ、山の部分に釘1本ずつ有		
141	204	103	10区(A1)	第2面	83土坑か122土坑	木製品	托板	近代以降	長:31.0 高さ:6.7 厚:5.3	スギ材 全体に火を受けている、山の部分に釘1本ずつ有		
141	205		10区(A1)		第1層	木製品	托板	近代以降	長:32.4 高さ:6.7 厚:3.3~3.8	スギ材 全体に炭化、山部分に釘1本ずつ有、側面に釘1・3残		
141	206					木製品	托板	近代以降	長:50 幅:38.5 厚:4.4	スギ材 穴9残(径:約9cm)、釘10残		
142	207	103	10-2区			木製品	托板	近代以降	長:50.5 幅:38.5 厚:7.0	スギ材 穴12(径:8cm)、釘23残		
142	208		10-2区			木製品	托板	近代以降	長:49.55 幅:38.2 厚:6.4	スギ材 穴12(径:8.5cm)、釘21残		
143	209	80	10区(A1)	第1面	1建物	金属製品	犬釘	近代以降	現長:8.5 頭部径:1.7×1.4 軸部径:0.9	犬形 枕木の木が付着		鉄
143	210		10区(A1)	第1面	1建物	金属製品	犬釘	近代以降	現長:9.9 頭部径:2.1×1.7 軸部径:0.9×1.0	亀甲形 刻み?		鉄

掲載遺物観察表（7）

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) ( )内は残存率	調整等 (ヨコナデ、回転ナデは省略) (砂→は、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
143	211	80	10区 (A 1)	第1面	1建物	金属製品	犬釘	近代以降	現長:8.7 頭部径:2.2×1.8 軸部径:0.8	亀甲形 枕木の木が付着		鉄
143	212		10区 (A 1)	第1面	1建物	金属製品	犬釘	近代以降	現長:8.7 頭部径:2.4×1.9 軸部径:0.8×0.9	亀甲形		鉄
143	213	80	11区		第1層	金属製品	犬釘	近代以降	現長:3.8 頭部径:1.8×1.9 軸部径:1.0	犬形 曲がっている		鉄
143	214		11区		第1層	金属製品	犬釘	近代以降	現長:6.3 頭部径:1.6×1.7 軸部径:1.0	犬形		鉄
143	215		11区		第2層	金属製品	犬釘	近代以降	現長:6.6 頭部径:1.7×1.8 軸部径:0.9	犬形		鉄
143	216	80	11区		第2層	金属製品	犬釘	近代以降	現長:6.3 頭部径:1.8×2.0 軸部径:0.9	犬形		鉄
143	217		12区	第1・2面	5軌道	金属製品	犬釘	近代以降	現長:8.0 頭部径:1.9×2.4 軸部径:1.0	亀甲形 枕木の木が付着		鉄
143	218	80	12区	第1・2面	5軌道	金属製品	犬釘	近代以降	現長:7.9 頭部径:1.7×2.3 軸部径:1.1×1.2	亀甲形 枕木の木が付着		鉄
143	219		12区	第1・2面	5軌道	金属製品	犬釘	近代以降	現長:7.7 頭部径:1.9×2.4 軸部径:0.9×1.0	亀甲形		鉄
143	220	80	12区	第1・2面	5軌道	金属製品	犬釘	近代以降	現長:7.9 頭部径:1.8×2.2 軸部径:0.8×0.9	亀甲形		鉄
143	221	80	12区	第1・2面	5軌道	金属製品	犬釘	近代以降	現長:7.8 頭部径:1.7×2.3 軸部径:0.8	亀甲形 枕木の木が付着		鉄
143	222		12区	第2面	6軌道	金属製品	犬釘	近代以降	現長:7.7 頭部径:1.8×2.3 軸部径:0.9	亀甲形 枕木の木が付着		鉄
143	223	80	12区	第2面	6軌道	金属製品	犬釘	近代以降	現長:7.5 頭部径:1.9×2.4 軸部径:0.7×0.9	亀甲形		鉄
143	224		12区	第2面	6軌道	金属製品	犬釘	近代以降	現長:7.8 頭部径:1.4×1.9 軸部径:0.9×0.8	亀甲形		鉄
143	225		12区	第2面	6軌道	金属製品	犬釘	近代以降	現長:7.6 頭部径:2.2×1.9 軸部径:0.7	亀甲形		鉄
143	226		12区	第2面	6軌道	金属製品	犬釘	近代以降	現長:7.9 頭部径:1.7×2.4 軸部径:0.8×0.9	亀甲形 枕木の木が付着		鉄
143	227	103	10区 (A 2)	第1面		木製品	枕木	近代以降	長:95.8 幅:5.9(枝と枝の間:10.2) 厚:6.0(釘と枝の厚み:11.9)	スギ材 孔1、未貫通孔1、犬釘1、節や枝が目立つ		
143	228		8区	第1面	21軽便軌道	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:104.5 幅:15.2 厚:11.5 孔径:4.3×1.5	孔4、裏面に段あり		
143	229		8区	第1面	21軽便軌道	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:104.5 幅:14.8 厚:11.3 器高:孔:4.3×1.5	孔4、裏面に段あり		
144	230	87	9区	第2面	35枕木土坑	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:105.0 幅:15.0 厚:11.0 孔径:4.1×1.5	孔4、裏面に鉄筋露出		
144	231	89	10区 (A 1)	第2面	219枕木群	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:96.0 幅:10.0~12.5 厚:12.0 孔(最大):4.0×2.0	新聞記事転写、孔4(内2木が充填、犬釘2残)		
144	232	88	10区 (A 1)	第2面	219枕木群	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:95~96.0 幅:12.6~13.0 厚:10.7~11.0 器高:孔3.6×1.7	新聞記事転写、孔4(木が充填しているものあり、犬釘1残)		
144	233		10区 (A 1)	第2面	219枕木群	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:105.5 幅:14.7 厚:11.5 孔径:4.2×1.7	孔4(木が充填している、釘1残)、裏面に段あり		
144	234	87	14区	第1面		コンクリート製品	枕木	近代以降	長:137.4 幅:14.5~14.8 厚:8.6~11.0 孔(最大)2.0×1.5	孔3(犬釘2残)、裏面の凹みに木が付着、裏面に段あり		
144	235	87	14区	第1面		コンクリート製品	枕木	近代以降	長:158.8 幅:14.5~15.3 厚:8.3~11.4 孔(最大)22.8×1.8	孔11、裏面に段あり、一部表面が欠損して鉄筋が露出		
144	236	86	12区	第2面		金属製品	継ぎ目板	近代以降	長:39.4 幅:4.0 厚:0.8 孔径:1.6~1.9	孔4		鉄
144	237	87	10区		第0層	金属製品	レール	近代以降	現長:約300(断面)底部幅:6.2~6.3 頭部幅:3.2 高さ:6.4~6.5	継ぎ目板(幅約3cm)を六角形ナットとネジで止めている		鉄
145	238	87	12区	第1・2面	5軌道	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:126.3 幅:14.8~15.0 厚:8.6~11.7 孔(最大):6.6×1.6	孔5(犬釘3残)、裏面に凹み2、段あり		
145	239	87	12区	第1・2面	5軌道	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:138.0 幅:15.2 厚:8.3~11.0 孔(最大):12.5×1.5	孔8(犬釘2残)、裏面に凹み2、段あり		
145	240	87	12区	第1・2面	5軌道	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:150.6 幅:14.5~15.0 厚:8.2~11.0 孔(最大):30.5×1.8	孔7(犬釘6残、木が充填しているものとモルタルで塗り固めているものあり)、裏面に凹み1、凹凸状突起1、突起1、段あり		
145	241	87	12区	第1・2面	5軌道	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:158.6 幅:15.0 厚:8.5~11.0 孔(最大):14.7×1.8	孔5(木が充填しているものとモルタルで塗り固めているものあり)、表・裏面の表面一部が欠損して鉄筋が露出、裏面に凹み2、凹凸状の突起1、突起1、段あり		
145	242	87	12区	第1・2面	5軌道	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:177.4 幅:15.1~15.9 厚:8.4~11.2 孔(最大):19.2×1.8	孔9(木が充填しているものとモルタルで塗り固めているものあり、犬釘2残)、裏面に凹み2、段あり		
145	243	87	12区	第1・2面	5軌道	コンクリート製品	枕木	近代以降	長:177.2 幅:14.8~15.0 厚:8.3~11.3 孔(最大):16.4×1.7	孔8(犬釘1残、木が充填しているものとモルタルで塗り固めているものあり)、裏面に凹み2、段あり		
146	244		5区		第2層	須恵器	杯	6世紀末~7世紀初頭か	口径:11.4(1/6)	外面:回転ヘラケズリ	N6/ 灰、N8/ 灰白	
146	245		5区		第2層	須恵器	壺	7世紀後半	口径:18.0(1/7)	外面:平行タタキ後回転ナデ、沈線?1	N6/ 灰	
146	246		5区		第2層下部	須恵器	高杯	8世紀前半	脚裾部径:11.2(一部欠)	外面:摩擦 内面:摩擦、脚部内面はナデ	5Y8/1 灰白、2.5Y8/3 淡黄	

掲載遺物観察表 (8)

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量(cm) ()内は残存率	調整等(ヨコナデ、回転ナデは省略) (砂→は、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
146	247	90	5区	第3面	竪穴建物1	土師器	杯A	8世紀前半	口径:17.5(1/8弱) 器高:4.2	外面:摩滅 内面:摩滅	5YR6/6 橙	
146	248		5区	第3面	竪穴建物1	土師器	壺	8世紀前半か	口径:10.6(1/6弱) 頸部径:9.0(1/6弱) 最大腹径:12.0	図上復元 外面:摩滅、一部ハケメ残る 内面:摩滅、一部板ナデの痕跡あり	7.5YR7/3、 2.5YR6/4 にぶ い橙	
146	249		5区	第3面	竪穴建物1	土師器	壺	8世紀前半か	口径:18.8(若干のみ) 頸部径:16.0(1/6)	外面:指押えナデ一部ハケメ 内面:摩滅	10YR5/4 にぶ い黄褐、2.5Y4/1 黄灰	
146	250		5区	第3面	竪穴建物1	須恵器	杯蓋	6世紀後半	内面口径:8.6(1/6)	外面:回転ヘラケズリ(砂:←)、一部自然釉付着	10Y6/1~5/1 灰、(釉)N3/ 暗 灰~N2/ 黒	
146	251		5区	第3面	竪穴建物1	須恵器	皿A?	8世紀前半	口径:14.0(3/8)		7.5Y6/1 灰	
146	252	90	5区	第3面	竪穴建物1	須恵器	鉢	8世紀前半	口径:17.0(3/8) 高台径:9.8(一部欠) 器高:9.7	外面:高台の胎土が違う 内面:回転ナデ後ナデ	2.5Y8/1 灰白、 7.5Y6/1~5/1 灰	土師器鉢C の模倣か
146	253		5区	第3面	竪穴建物1	須恵器	平瓶	8世紀前半		把手部分 外面:把手はヘラケズリ後一部はナデによる成形、沈線1 内面:ナデ	5Y6/1 灰、N3/ 暗灰	
146	254		5区	第3面	竪穴建物1	土師器	皿A	8世紀後半	口径:11.9(1/4弱) 器高:2.6	外面:指押え、表面剥離 内面:表面剥離	7.5YR7/6 橙、 7.5YR7/4 にぶ い橙	
146	255		5区	第3面	竪穴建物1	土師器	壺	8世紀後半	口径:30.0(若干のみ) 頸部径:25.0	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR7/3 にぶ い黄橙	
146	256	90	5区	第3面	竪穴建物2	土師器	壺	6世紀後半	口径:15.0(ほぼ完)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR6/3 にぶ い黄	カマドの支 脚に転用か
146	257		5区	第3面	竪穴建物2	須恵器	杯蓋	6世紀後半	径径:11.0(1/4)	外面:回転ヘラケズリ(砂:→)、稜の名残の凹み1、一部溶着あり、全体に灰かぶり 内面:ナデ	N4/ 灰、5B6/1 青灰	
146	258		5区	第3面	竪穴建物2	須恵器	杯蓋	6世紀後半	口径:14.6(若干のみ) 径径:11.0(3/8)	外面:回転ヘラケズリ(砂:→)	N6/~5/ 灰	
146	259		5区	第3面	掘立柱建物2 (102ピット)	土師器	杯	8世紀末~9世紀初頭	口径:推定13(端部欠)	外面:指押えナデ 内面:ナデ	10YR7/4 にぶ い黄橙	
146	260		5区	第3面	掘立柱建物2 (102ピット)	須恵器	杯B	8世紀末~9世紀初頭	高台径:11.0(1/13)		N6/~5/ 灰	
146	261		5区	第3面	掘立柱建物2 (135ピット)	須恵器	杯B	8世紀末~9世紀初頭	高台径:11.2(1/6)		5B6G/1 青灰	
146	262		5区	第3面	掘立柱建物2 (136ピット)	須恵器	杯A	8世紀末~9世紀初頭	口径:若干のみ 底径:10.0(1/3) 器高:2.5	外面:摩滅 内面:摩滅	2.5Y7/3 浅黄	
146	263		5区	第3面	14ピット	須恵器	高杯	7世紀前半	脚基部径:3.9(1/2弱)	外面:回転ヘラケズリ	5B6/1~1/5 青 灰	
146	264		5区	第3面	31ピット	須恵器	杯	8世紀中頃	口径:13.0(1/10)		10Y6/1~5/1 灰	
146	265		5区	第3面	32ピット	土師器	壺?	8世紀		把手片 外面:把手部分指による成形、摩滅 内面:摩滅	7.5YR7/3~7/4 にぶ い橙	
146	266	90	5区	第3面	32ピット	須恵器	杯蓋	6世紀後半	口径:14.0(1/4) 器高:5.0	外面:回転ヘラケズリ(砂:←)	7.5Y7/1 灰白~ 7.5Y6/1 灰	
146	267		5区	第3面	32ピット	須恵器	杯	6世紀後半	受部径:15.0(1/4)	外面:回転ヘラケズリ(砂:←)	10Y6/1 灰	
146	268		5区	第3面	119ピット	須恵器	杯蓋	6世紀後半	口径:14.8(1/10)	外面:回転ヘラケズリ(砂:→)	N6/ 灰	
146	269		5区	第3面	134ピット	須恵器	高杯	7世紀後半	脚柱部径:4.8(1/2)	外面:沈線2?、灰かぶり 内面:ナデ、脚部内面工具痕?	N4/ 灰	
146	270		5区	第3面	17土坑	土師器	壺	7世紀後半	口径:16.0(1/4弱)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR7/2~7/3 にぶ い黄橙	
146	271	90	5区	第3面	20土坑	土師器	杯C	8世紀中頃	口径:13.0(1/6) 器高:2.9	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR6/6~6/8 橙	
146	272		5区	第3面	20土坑	須恵器	杯蓋	7世紀初頭	口径:12.8(1/13)	外面:稜の名残の凹線1	10Y5/1 灰	
146	273		5区	第3面	20土坑	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:20.0(1/13)		5Y6/1 灰、 5Y5/2~4/2 灰 オリーブ	
146	274		5区	第3面	21溝	須恵器	杯	8世紀中頃	口径:16.0(1/6弱)	外面:自然釉付着	N6/~5/ 灰、 (釉)5Y2/1 黒	
146	275		5区	第3面	21溝	須恵器	杯	8世紀中頃	口径:18.4(1/13)		N5/~4/ 灰	
146	276		5区	第3面	21溝	須恵器	杯B	8世紀中頃	高台径:11.0(1/6弱)		N6/~5/ 灰	
146	277		5区	第3面	21溝	須恵器	杯B	8世紀中頃	高台径:11.4(1/4強)	外面:ナデ	5B5/1 青灰	
146	278		5区	第3面	44溝	須恵器	杯	8世紀中頃	底径:8.5(3/4)	外面:ヘラ切り(摩滅)	2.5Y8/2 灰白	
146	279		5区	第3面	44溝	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:16.0(1/4弱) 器高:3.1	外面:つまみ部分の貼り付けは指による成形 内面:回転ナデ後ナデ	10B63/1 暗青 灰、N6/~N5/ 灰、2.5Y7/2 灰 黄	
147	280	98	8区	第2層以下	瓦	軒平瓦		8世紀後半か		均整唐草文、額岡庵寺T-60型式と同范	2.5Y8/2 灰白	第140集図 69-198
147	281		8区	第3層	須恵器	壺		8世紀前半	高台内径:8.0(1/4弱)	外面:ヘラケズリ?、ナデ、高台に焼成前穿孔1 内面:新しい?付着物あり	N6/ 灰	
147	282		8区	第3層	須恵器	壺		9世紀	底径:3.4	外面:摩滅、底部に焼成前に何らかの台に載せたような凹みの痕跡あり 内面:ナデ	N8/ 灰白	
147	283		8区	第3層	緑釉陶器	水注		9世紀		外面:ナデ、ヘラケズリ、所々に緑釉が残る 内面:一部緑釉が垂れる	N7/ 灰白	K90? 東 濃の製品 の可能 性ある?
147	284		8区	第3層	灰釉陶器	椀		9世紀前半	高台径:7.4(1/4弱)	外面:ナデ 内面:施釉	5Y7/1 灰白	
147	285		8区	第3層	灰釉陶器	椀		9世紀前半	高台径:9.0(1/4弱)	内面:施釉	N8/ 灰白	
147	286	98	8区	第3層	瓦	軒丸瓦		8世紀後半		単弁10弁蓮華文 平城宮6133A型式を祖型とする	10YR7/3 にぶ い黄橙	第140集図 97-565
147	287	102	8区	第3層	金属製品	鉢滓			現長:4.1 現幅:4.1 厚:1.6			
147	288		8区	第4層	土師器	杯A		8世紀中頃	口径:20.0(1/7)	外面:摩滅 内面:摩滅	5YR6/6 橙	

掲載遺物観察表（9）

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) ( )内は残存率	調整等 (ヨコナデ、回転ナデは省略) (砂→は、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
147	289		8区		第4層	須恵器	杯B蓋	8世紀前半	口径:16.0(1/3) 器高:3.0	外面:ナデ、回転ヘラケズリ(砂:→) 内面:ナデ	N6/ 灰	
147	290		8区		第4層	須恵器	壺	9世紀前半か	口径:3.6(1/4)	片口?	N7/ 灰白	口縁部ゆがみあり
147	291		8区		第4層	須恵器	壺	7世紀か	口径:14.0(1/4弱)	外面:平行タタキ後ナデ(?) 内面:同心円文当て具痕	N7/ 灰白	
147	292		8区		第4層?	須恵器	壺C?	7世紀か	口径:14.4(2/5)	外面:凹線2(退化)、一部自然釉付着、摩滅 内面:同心円文タタキ、一部自然釉付着	N6/ 灰、(釉) 10Y4/2 灰オリーブ	
147	293	91	8区		第4層	緑釉陶器(二彩)	皿	9世紀	高台径:8.0(1/4弱)	外面:ヘラミガキ、施釉(貫入あり) 内面:ヘラミガキ、施釉(貫入あり)	7.5GY5/1 緑灰、2.5GY7/1 明オリーブ灰(釉) 濃緑と薄緑	
147	294		8区		第4層	灰釉陶器	段皿	9世紀中頃か		内面:施釉	N8/ 灰白	
147	295	98	8区		第4層	瓦	軒丸瓦	8世紀後半	直径:約15(1/3)	複弁8弁蓮華文(鋸歯文) 平城宮6291B型式を祖型とする 凸面:板ナデ 凹面:縦ヘラケズリ後一部ハケメ痕あり	10YR6/1 褐灰	第140集団 97-559
147	296	98	8区		第4層	瓦	軒平瓦	8世紀後半か		均整唐草文 古志部瓦窯産か	N5/ 灰	第140集団 97-569
147	297		8区		第5層	須恵器	杯蓋	6世紀後半～7世紀初	口径:15.0(1/8)	外面:回転ヘラケズリ(砂:←)	N5/ 灰	
147	298		8区		第5層	須恵器	杯蓋	7世紀初頭	口径:13.6(1/8)	外面:回転ヘラケズリ	N4/ 灰	
147	299		8区		第5層	須恵器	杯	6世紀後半～7世紀初	口径:13.0(1/8) 受部径:15.5	外面:回転ヘラケズリ(砂:←)	N6/ 灰	
147	300		8区		第5層	須恵器	杯A	8世紀後半	口径:14.0(1/5) 底径:10.2 器高:3.2	外面:ヘラ切り	7.5GY5/1 緑灰、2.5GY7/1 明オリーブ灰	
147	301		8区		第5層	須恵器	杯A	8世紀後半	口径:12.8(1/4弱) 底径:10.3 器高:3.2	外面:ヘラ切り、火ダスキあり 内面:火ダスキあり	N5/ 灰	
147	302		8区		第5層	須恵器	杯B	8世紀後半	高台径:11.4(1/8)	外面:底部にヘラ痕あり 内面:ナデ	N5/ 灰	
147	303		8区		第5層	須恵器	杯B	8世紀後半	口径:若干のみ 高台径:11.8(1/4強) 器高:5.5	外面:ヘラ切り 内面:ナデ	N6/ 灰	
147	304	91	8区		第5層	須恵器	円面硯	8世紀か	稜径:15.0(1/4弱)	外面:陸部は使い込んで磨耗 内面:自然釉付着	N6/ 灰	
147	305		8区		第5層	須恵器	壺	8世紀	頸部径:5.8(1/3)	外面:沈線1	2.5Y6/1黄灰	
147	306		8区		第5層	須恵器	壺L	9世紀前半	高台径:8.4(4/5)	外面:糸切り底 内面:底部に一部粘土が付着	N7/ 灰白	
147	307		8区		第5層	須恵器	壺	7世紀後半か	口径:18.0(1/4弱)	外面:カキ目 内面:同心円文当て具痕、スス付着	2.5Y7/1 灰白	
147	308		8区		第5層	須恵器	?			外面:自然釉付着 内面:絞り目	7.5Y4/3 暗オリーブ	
147	309		8区		第5層	緑釉陶器	皿?	9世紀	底径:5.2(5/6)	外面:摩滅 内面:摩滅	2.5Y8/2 灰白	
147	310	91	8区		第5層	灰釉陶器	皿	9世紀前半か	口径:15.3(1/11強) 高台径:7.5 器高:2.4	内面:わずかに施釉	2.5Y8/1 灰白	
147	311		8区		第5層	灰釉陶器	長頸瓶	9世紀後半	底径:6.8	外面:糸きり底、施釉	5Y7/1 灰白	
147	312	91	8区		第5層	土製品	土馬	8世紀		鞍を表現、前足・後足が接合面から欠損	10YR6/4 にぶい黄橙	
147	313		8区		第5層	瓦	平瓦	8～9世紀	広端面幅:2.0 側面幅:1.9	凸面:細目タタキ後指押え 凹面:布目痕後板ナデ、ナデ	N6/ 灰、2.5Y5/1 黄灰	
147	314	102	8区		第5層	金属製品	不明鉄製品		現長:3.25 現幅:(サビ含)1.1 厚:0.2～0.5			
147	315	102	8区		第5層	金属製品	鉛滓?		現長:2.6 現幅:3.3 厚:1.4			鉄
148	316	102	8区	第6面	掘立柱建物1(126ピット)	金属製品	不明青銅製品		現幅:3.8 厚:0.05～0.35	楕円形、上縁端部は玉縁状		
148	317		8区	第6面	249井戸	土師器	杯A	8世紀前半	口径:15.7(1/8強) 器高:3.9	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR7/6 橙	
148	318	90	8区	第6面	249井戸	土師器	杯A	8世紀前半	口径:15.8(1/2) 器高:3.4	外面:ヨコナデ・ナデ後一部ヘラミガキ、指押えナデ 内面:放射状暗文、ナデ?	7.5YR6/6 橙	
148	319		8区	第6面	249井戸	土師器	杯A	8世紀前半	口径:15.8(1/4)	外面:一部ヘラミガキ残る	5YR6/6 橙	
148	320	90	8区	第6面	249井戸	土師器	杯A	8世紀前半	口径:16.1(1/3強) 器高:3.2	外面:一部ヘラミガキ、指押えナデ 内面:連結輪状暗文、放射状暗文、連結輪状暗文	5YR6/6 橙	
148	321		8区	第6面	249井戸	土師器	杯A	8世紀前半	口径:18.8(1/4弱) 器高:3.9	外面:ヘラケズリ 内面:放射状暗文、底面摩滅	5YR6/6 橙	
148	322		8区	第6面	249井戸	土師器	杯A	8世紀前半	口径:23.0(1/7) (端部欠)	外面:一部ヘラミガキ、ヘラケズリ? 内面:放射状暗文	10YR4/2 灰黄褐	
148	323		8区	第6面	249井戸	土師器	杯B	8世紀後半か	底径:12.8(1/5弱)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR6/6 橙	
148	324		8区	第6面	249井戸	土師器	皿A	8世紀前半	口径:19.0(1/8) 器高:2.3	外面:底部摩滅 内面:放射状暗文、連結輪状暗文	5YR6/6 橙	
148	325	90	8区	第6面	249井戸	土師器	皿A	8世紀後半	口径:21.3(1/3) 器高:2.2	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR7/4 にぶい黄橙	
148	326		8区	第6面	249井戸	土師器	把手付壺A	8世紀	口径:14.0(1/8)	外面:把手痕、摩滅 内面:摩滅	5YR6/6 橙	
148	327		8区	第6面	249井戸	土師器	壺C	8世紀か	口径:27.6(1/8)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR7/4 にぶい黄橙	
148	328		8区	第6面	249井戸	土師器	壺	8世紀か	頸部径:22.6(1/4)	外面:摩滅、一部ハケメ残る 内面:ハケメ、摩滅	10YR7/3 にぶい黄橙	
148	329		8区	第6面	249井戸	土師器	把手付壺	8世紀		外面:ハケメ、指押え、ナデ 内面:指押えナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	
148	330		8区	第6面	249井戸	土師器	竈			脚部 外面:ハケメ 内面:指押え、ナデ	5YR6/6 橙、2.5Y8/1 灰白	
148	331		8区	第6面	249井戸	土師器	製塩土器	8世紀前半か	口径:14.0(1/8弱)	積山分類5a類 外面:指押えナデ 内面:ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	

掲載遺物観察表 (10)

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) ()内は残存率	調整等(ヨコナデ、回転ナデは省略) (砂→は、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
148	332		8区	第6面	249井戸	須恵器	杯	6世紀末～7世紀初頭	口径:11.0(1/7弱)	外面:回転ヘラケズリ	N4/ 灰, N7/灰白	
148	333		8区	第6面	249井戸	須恵器	杯G	7世紀前半か	口径:12.8(1/8) 底径:9.4 器高:3.7	外面:ヘラ切り	N6/ 灰	ゆがみあり
148	334		8区	第6面	249井戸	須恵器	杯A	8世紀前半	底径:12.1(1/9)	外面:回転ヘラケズリ(砂:→) 内面:ナデ	N6/ 灰	
148	335		8区	第6面	249井戸	須恵器	杯A	8世紀後半	口径:12.25(1/10) 器高:3.4	外面:ヘラ切り 内面:摩滅	7.5YR6/6 橙	
148	336		8区	第6面	249井戸	須恵器	杯A	8世紀後半	口径:13.4(1/14) 底径:9.0(1/2弱) 器高:4.0	図上復元 外面:ヘラ切り痕	5YR7/4 にぶい橙	
148	337		8区	第6面	249井戸	須恵器	杯A	8世紀後半	口径:12.2 底径:9.0(1/2) 器高:4.5	外面:ヘラ切り?	2.5Y8/2 灰白	
148	338	90	8区	第6面	249井戸	須恵器	杯B蓋	8世紀前半	口径:13.7(7/12) つまみ径:2.8(完) 器高:2.9	外面:回転ヘラケズリ(砂:→) 内面:ナデ	N7/ 灰白	
148	339		8区	第6面	249井戸	須恵器	杯B蓋	8世紀前半	口径:18.0(1/6弱) つまみ径:3.9(2/3) 器高:2.9	内面:ナデ	2.5Y8/2 灰白	
148	340		8区	第6面	249井戸	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:15.4(1/7弱) 高台径:11.8 器高:3.6	外面:底部ナデ、ヘラ痕あり	N5/ 灰	
148	341	90	8区	第6面	249井戸	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:15.2(1/2弱) 高台径:10.4(1/2弱) 器高:3.9	外面:粘土紐を貼り付けた様な高台、底部未調整	N6/ 灰	
148	342		8区	第6面	249井戸	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:15.0(1/6弱) 高台径:12.1 器高:3.8	外面:ヘラ切り、底面にヘラ痕あり 内面:ナデ	N6/ 灰	
148	343		8区	第6面	249井戸	須恵器	杯B	8世紀中頃	高台径:12.5(3/5)	外面:底部未調整 内面:ナデ	N6/ 灰	
148	344		8区	第6面	249井戸	須恵器	高杯	6世紀後半	脚柱径:4.5(1/2)	外面:カキ目、凹線2、透孔3(2段) 内面:絞り目、ナデ	N6/ 灰	
148	345		8区	第6面	249井戸	須恵器	高杯	7世紀前半か	脚柱径:4.5(4/5)	内面:ナデ	N3/ 暗灰	
148	346		8区	第6面	249井戸	須恵器	平瓶	8世紀前半	口径:11.2(1/4)		5Y7/1 灰白	
148	347	90	8区	第6面	249井戸	須恵器	壺L?	8世紀後半	最大腹径:16.0(完)	外面:回転ヘラケズリ(砂:→) 内面:底部に一部自然釉付着	N6/ 灰	
148	348		8区	第6面	249井戸	須恵器	壺	8世紀前半	高台径:9.7(1/4)		2.5Y7/1 灰白	
148	349	91	8区	第6面	249井戸	須恵器	壺	8世紀前半	口径:12.6(1/7弱) 器高:20.7	外面:カキメ、カキメ後指ナデ、ヘラケズリ 内面:指ナデ、ナデ	5PB4/ 暗青灰	
148	350		8区	第6面	249井戸	須恵器	壺	8世紀か	口径:19.0(1/5)	火ぶくれが著しい	N4/ 灰	
148	351		8区	第6面	249井戸	須恵器	壺	8世紀後半	口径:22.9(1/5)	外面:自然釉付着	5Y5/2 灰オリーブ	
149	352	104	8区	第6面	249井戸	木製品	拵の一辺		長:13.9 幅:4.5 厚:0.9	スギ材 小孔2(木釘)、小孔?1		
149	353	104	8区	第6面	249井戸	木製品	曲物底板		長:12.8 幅:7.0 厚:0.6	スギ材 内面に線刻あり		
149	354	104	8区	第6面	249井戸	木製品	火付け棒		長:10.7 幅:1.4 厚:1.0	ヒノキ材 先端部炭化		
149	355	104	8区	第6面	249井戸	木製品	火付け棒		長:11.6 幅:1.9 厚:1.0	ヒノキ材 先端部炭化		
149	356	102	8区	第6面	249井戸	金属製品	不明鉄製品		現長:(サビ含)15.0 現幅:(本体)1.6~3.3 厚:(本体)0.4~1.1	断面Y字状		
149	357		8区	第6面	98ビット	須恵器	壺	7世紀後半	口径:24.0(1/9)		N5/ 灰	
149	358		8区	第6面	156ビット	土師器	製塩土器	8世紀	口径:10.0(1/12)	外面:摩滅 内面:摩滅	5Y6/1 灰	
149	359		8区	第6面	160ビット	須恵器	壺	9世紀か	口径:25.0(1/11)		10YR5/2 灰黄褐	
149	360		8区	第6面	162ビット	瓦	平瓦	8~9世紀	側面幅:2.0	凸面:縄目タタキ 凹面:布目痕	2.5Y6/3 にぶい黄	
149	361		8区	第6面	163ビット	須恵器	杯	8世紀後半か	口径:14.0(1/9)		N6/ 灰	
149	362		8区	第6面	163ビット	須恵器	杯B	8世紀後半か	高台径:10.0(1/8)	外面:底部ナデ?	10Y6/1 灰	
149	363	102	8区	第6面	176ビット	金属製品	鉋滓		現長:5.1 現幅:7.0 厚:2.9			鉄
149	364		8区	第6面	226ビット	土師器	壺	7世紀か	頸部径:17.0(1/4)	外面:タタキ?後ハケメ? 内面:ヘラナデか	10YR7/4 にぶい黄橙	
149	365	90	8区	第6面	238ビット	須恵器	杯	6世紀後半	口径:13.0(1/8) 器高:4.0	外面:回転ヘラケズリ(砂:→) 内面:ナデ	2.5Y7/2 灰黄	
149	366		8区	第6面	248ビット	須恵器	杯B	8世紀後半か	高台径:7.0(3/4)	外面:ヘラ切り 内面:ナデ	7.5Y5/1 灰	
149	367		8区	第6面	248ビット	須恵器	壺	6世紀末～7世紀初頭	径径:14.0(1/6)	外面:カキ目、沈線1、列点文1、沈線1、カキ目	2.5Y7/1 灰白	
149	368		8区	第6面	84土坑	須恵器	壺	7世紀後半か	口径:22.0(1/11)		5Y5/1 灰	
149	369		8区	第6面	113土坑	須恵器	壺L	8世紀後半か	頸部径:5.3(完)	外面:自然釉付着	5Y6/2 灰オリーブ	
149	370	90	8区	第6面	134土坑	須恵器	杯	6世紀後半～7世紀初	口径:13.0(2/5) 器高:4.3	外面:回転ヘラケズリ(砂:→) 内面:ナデ	5Y6/1 灰	
149	371	90	8区	第6面	220土坑	須恵器	杯蓋	6世紀後半～7世紀初	口径:13.8(一部欠) 器高:3.5	外面:回転ヘラケズリ(砂:→)、ハケ状刻目 内面:ナデ	N6/ 灰	
149	372		8区	第6面	116溝	須恵器	杯B	8世紀末	口径:15.0(1/4弱) 器高:3.8~4.1	外面:底部ヘラケズリ? 内面:ナデ	7.5Y6/1 灰	
150	373		9区	第2層		瓦質土器	土筒	15~16世紀	口径:12.6(若干のみ) 底径:11.4(1/3) 器高:22.9	外面:摩滅 内面:摩滅	N4/ 灰	
150	374	91	9区	第3層		緑釉陶器	椀か皿	9世紀中	高台径:6.5(1/4)	軟質 外面:削り出し蛇の目高台、施釉 内面:ヘラミガキ、重ね焼痕あり、施釉	7.5Y6/1 灰、2.5Y7/3~7/4 浅黄(釉)淡緑	京都産
150	375	91	9区	第3層		緑釉陶器	椀か皿	9世紀後半	高台径:8.6(1/8)	硬質 外面:ヘラミガキ、削り出し輪高台(幅広)、施釉 内面:ヘラミガキ、重ね焼痕あり、施釉	N6/~5/ 灰(釉)濃緑	京都産
150	376	91	9区	第3層		緑釉陶器(二彩?)	華瓶?	9世紀	胴下部径:5.4(1/3)	外面:沈線1、施釉(二彩か) 内面:施釉	5Y6/4 オリーブ黄、5Y5/2 灰オリーブ(釉)濃緑と薄緑の彩色	東海か?

掲載遺物観察表 (11)

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) ( )内は残存率	調整等 (ヨコナデ、回転ナデは省略) (砂→は、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
150	377		9区		第3層	灰釉陶器	椀	9世紀前半	高台径:6.8(1/5)	内面:摩滅、施釉(自然釉?)	2.5Y7/1 灰白、5R5/1 赤灰(釉)淡緑	K14(猿投窯)
150	378		9区		第3層	灰釉陶器	長頸壺	9世紀前~中	高台径:9.6(1/6)	外面:糸切り痕か?、施釉 内面:施釉	5Y8/1~7/1 灰白(釉)淡緑	K14~90(猿投窯)
150	379		9区		第3層	土師器	製塩土器	8~9世紀	口縁直下径:11.0(1/4弱)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR4/5 にぶい黄褐	
150	380		9区		第3層	土師器	製塩土器	8~9世紀	口径:15.0(1/8)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR5/3 にぶい黄褐	
150	381		9区		第3層	土師器	製塩土器	8~9世紀	口径:14.6(1/11)	外面:指押えナデ 内面:ナデ?	5YR5/6 明赤褐、2.5Y7/2 灰黄	
150	382	98	9区		第3層	瓦	軒丸瓦	8世紀後半		単弁10弁蓮華文 平城宮6133A型式を祖形とする	2.5Y8/2 灰白、N4/ 灰	第140集図 97-565
150	383		9区		第3層	瓦	丸瓦	8~9世紀	広端面幅:1.4 側面幅:1.7	凸面:ナデ 凹面:布目痕後一部板ナデ	N5/ 灰	
150	384		9区		第3層	瓦	平瓦	12~13世紀か		1枚つくり 凸面:大きい格子状タタキ 凹面:布目痕	10YR6/4 にぶい黄橙、5Y7/1 灰白	
150	385		9区		第3層以下	土師器	杯A?	8世紀後半	口径:13.0(1/12) 器高:1.8	外面:赤色顔料塗布 内面:底部摩滅	2.5Y7/2 灰黄	
150	386		9区		第3層以下	須恵器	壺	7世紀後半	口径:36.0(1/8)	外面:波状文(4条)、凹線1、波状文(3条+α)	7.5Y5/1 灰	
150	387		9区	第4面	104ピット	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:12.8(1/4強) つまみ径:2.5(2/3)	外面:ヘラケズリ(砂:→) 内面:ナデ	5Y7/1 灰白	
150	388		9区	第4面	110ピット	土製品	土錘		径:1.1		10YR6/2 灰黄褐	
150	389		9区	第4面	342ピット	須恵器	杯B	8世紀末	高台径:11.4(1/4弱)	内面:ナデ	7.5Y8/1 灰白	
150	390		9区	第4面	90溝状落ち込み	須恵器	円面硯	8世紀末~9世紀初頭か		外面:陸部磨耗、ヘラ痕?あり 内面:ナデ?	2.5Y7/1 灰白	
150	391		9区	第4面	90溝状落ち込み	緑釉陶器	皿?	9世紀後半か		外面:施釉 内面:施釉	5Y4/1 灰	
150	392		9区		第4層	土師器	椀C	8世紀後半	口径:14.1(1/7)	外面:摩滅 内面:ナデ	5YR6/6 橙	
150	393		9区		第4層	土師器	皿	8世紀後半	口径:15.0(1/5) 器高:2.3	外面:摩滅 内面:摩滅	2.5Y7/2 灰黄、5YR7/6 橙	
150	394		9区		第4層	土師器	皿B	8世紀前半	口径:32.0(若干のみ) 高台径:24.0(1/9) 器高:3.6	外面:底部ナデ 内面:放射状暗文、連結輪状暗文、ナデ	5YR6/6 橙	
150	395		9区		第4層	須恵器	壺	9世紀前半か	口径:4.0(2/3)	外面:一部灰をかぶる 内面:回転ナデの後工具痕	2.5Y6/1 黄灰	
150	396		9区		第4層	須恵器	壺	9世紀中頃か	口径:19.0(1/6)	外面:ナデ、平行タタキ	N4/ 灰	
150	397		9区		第4層	緑釉陶器	椀	9世紀前半か	底径:7.0(1/8)	外面:摩滅、施釉 内面:摩滅	2.5Y6/1 黄灰	
150	398		9区		第4層	緑釉陶器	椀	9世紀後半か		外面:高台内面施釉 内面:ナデ	2.5Y8/2 灰白	
150	399		9区		第4層	灰釉陶器	椀	9世紀後半	高台径:6.0(1/7)	内面:施釉	2.5Y7/1 灰白	
150	400		9区		第4層	灰釉陶器	壺	9世紀中頃か	高台径:8.5(一部欠)	外面:回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ、施釉	5Y7/1 灰白	
150	401		9区		第4層	土師器	製塩土器	8世紀	口径:12.9(1/6)	外面:指押えナデ 内面:指押えナデ	10YR7/2 にぶい黄橙	
150	402		9区		第4層	土師器	製塩土器	8世紀	口径:21.7(1/6)	外面:指押えナデ、一部スス付着 内面:指押えナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	
150	403	91	9区		第4層	土製品	土錘		幅:1.9 孔径:0.5 重さ:19.6g		2.5Y7/2 灰黄	
150	404		9区		第4層	土製品	?			方形の角か 外面:摩滅 内面:ナデ	2.5Y8/2 灰白	
150	405	98	9区		第4層	瓦	軒平瓦	8世紀後半		重彫文 平城宮6572A型式を祖形とする 凹面:ナデ	2.5Y7/1 灰白	第140集図 69-192
150	406		9区		第4層	瓦	丸瓦	8~9世紀	玉縁端面幅:1.1 側面幅:1.8	凸面:縄目タタキ後ナデ 凹面:布目痕	10YR6/3 にぶい黄橙	
151	407		9区		第4層	瓦	平瓦	8~9世紀	広端面幅:1.8 側面幅:1.0	凸面:縄目タタキ 凹面:布目痕後板ナデ	N4/ 灰	
150	408		9区		第4層	瓦	平瓦	8~9世紀	広端面幅:2.2 側面幅:1.8	凸面:縄目タタキ 凹面:ナデ、布目痕	5Y7/1 灰白	
151	409		9区		第4層以下	土師器	杯A	8世紀中頃	口径:15.0(1/7) 器高:2.3	外面:指押え後ヘラケズリ? 内面:放射状暗文、連結輪状暗文?	5YR6/6 橙	
151	410		9区		第4層以下	須恵器	杯A	8世紀中頃	口径:14.1(1/6)	外面:ナデ、ヘラ切り?	N7/ 灰白	
151	411		9区		第4層以下	土師器	製塩土器	8~9世紀	口径:13.8(1/7)		2.5YR6/6 橙、7.5YR7/4 にぶい橙	
151	412	102	9区		第4層以下	金属製品	不明鉄製品		現長:4.7 現幅:5.3 厚:0.7~0.8	板状、脆い		
151	413		9区	第5面	182ピット	須恵器	壺	8世紀か	口径:13.5(1/4弱)	内面:自然釉付着	5Y4/1 灰	
151	414		9区	第5面	185ピット	土師器	杯C	8世紀後半	口径:15.0(1/5)	外面:指押えナデ? 内面:沈線1、(ハケ状)ナデ?	5YR6/6 橙	
151	415		9区	第5面	187ピット	瓦	丸瓦	8~9世紀	連結面幅:1.7 玉縁端面幅:1.9 玉縁凸面側縁幅:1~1.7	凸面:ナデ、縄目タタキ後ナデ 凹面:布目痕	2.5Y7/1 灰白	
151	416		9区	第5面	187ピット	瓦	平瓦	8~9世紀	広端面幅:2.0 側面幅:1.1~1.5	凸面:縄目タタキ 凹面:布目痕	N4/ 灰、N8/ 灰白	
151	417		9区	第5面	189ピット	瓦	丸瓦	8~9世紀	端面幅:1.2 側面幅:1.1	凸面:ナデ 凹面:布目痕	10YR7/2 にぶい黄橙	
151	418		9区	第5面	189ピット	瓦	平瓦	8~9世紀	端面幅:2.0	凸面:縄目タタキ後指押えナデ 凹面:布目痕後一部板ナデ、ナデ	N4/ 灰	
152	419		9区	第5面	190ピット	須恵器	杯A	9世紀	底径:9.0(1/3)	外面:底部ナデ?	N8/ 灰白、N4/ 灰	

掲載遺物観察表 (12)

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) ( )内は残存率	調整等(ヨコナデ、回転ナデは省略) (砂→は、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
152	420	91	9区	第5面	196ピット	黒色土器	水滴	9世紀か	口径:1.6(完) 底径:2.3(完) 器高:4.2	外面:指押えナデ後ヘラミガキ、底部ヘラミガキ	10YR4/1 褐灰	
152	421		9区	第5面	191土坑	土師器	皿A	8世紀中頃	口径:20.0(1/12)	外面:ヘラケズリ 内面:放射状暗文	5YR7/6 橙	
152	422		9区		第5層	土師器	杯A	8世紀前半	口径:20.0(1/10) 器高:5.0	外面:一部ヘラミガキ、ナデ、ナデ後一部ヘラケズリ 内面:放射状暗文、連結輪状暗文	5YR6/6 橙	
152	423		9区		第5層	土師器	杯A	8世紀後半	口径:15.0(1/4弱)	外面:摩滅 内面:摩滅	5YR6/6 橙	
152	424		9区		第5層	土師器	杯A	8世紀後半	口径:17.6(1/12) 器高:3.4	外面:ナデ、指押えナデ後一部ヘラケズリ? 内面:摩滅	5YR6/8 橙	
152	425		9区		第5層	土師器	碗C	8世紀中頃	口径:15.0(1/8)	外面:摩滅	7.5YR7/3 にぶい橙	
152	426	92	9区		第5層	土師器	碗A	8世紀末~9世紀初頭か	口径:13.8(1/3) 器高:3.5	外面:指押えナデ 内面:摩滅	7.5YR7/4 にぶい橙、N4/灰	
152	427		9区		第5層	土師器	皿A	8世紀後半	口径:17.4(若干のみ) 器高:2.5	外面:ヘラケズリ、ナデ 内面:ナデ	5YR6/6 橙	
152	428	92	9区		第5層	土師器	高杯	8世紀前半	口径:27.6(1/16) 脚部径:12.5(1/2) 器高:9.7	粘土紐巻上げ成形 外面:分割ヘラミガキ、脚部面取り(9面) 内面:凹線1、放射状暗文、連結輪状暗文、脚部内面はヘラケズリ、指押えナデ	5YR6/6 橙	
152	429	92	9区		第5層	土師器	高杯	8世紀前半	底径:12.7(4/5)	粘土紐巻上げ成形 外面:ヘラミガキ、脚部面取り(10面) 内面:連結輪状暗文、脚部内面はナデ、ヘラケズリ	7.5YR7/6 橙	
152	430		9区		第5層	土師器	高杯	8世紀前半	脚部径:10.9~11.0(1/5)	粘土紐巻上げ成形 外面:脚部面取り(10面) 内面:ナデ、脚部内面は指ナデ	5YR7/6 橙	
152	431		9区		第5層	土師器	高杯	8世紀前半	脚部径:5.7(完)	外面:脚部面取り(13面) 内面:摩滅	5YR6/6 橙	
152	432		9区		第5層	土師器	鉢B	8世紀前半	口径:21.0(1/8弱)	外面:部分的ヘラミガキ 内面:ナデ	7.5YR6/6 橙	
152	433		9区		第5層	土師器	鍋B	8世紀	口径:22.0(1/9) 頸部径:18.0(1/6)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR7/6 橙	
152	434		9区		第5層	土師器	鍋	8世紀	口径:42.0(1/6)	外面:ハケ、指押え、一部スス付着 内面:ナデ	5YR6/6 橙	
152	435		9区		第5層	土師器	壺C	8世紀	口径:22.0(1/4弱)	外面:ハケメ 内面:摩滅	7.5YR6/6 橙	
152	436		9区		第5層	土師器	壺A	8世紀	口径:25.0(1/9)	外面:ハケメ 内面:炭化物付着	5YR6/6 橙	
152	437		9区		第5層	須恵器	杯A	8世紀中頃	口径:13.0(1/8弱) 底径:8.5(1/2) 器高:4.3	外面:ヘラ切り	N5/ 灰	
152	438		9区		第5層	須恵器	杯A	8世紀中頃	口径:14.0(1/2弱) 器高:3.9	内面:ナデ	7.5Y8/1~7/1 灰白	ゆがみあり
152	439		9区		第5層	須恵器	杯A	8世紀中頃	口径:13.0(1/5) 器高:3.2	外面:ヘラ切り	N5/ 灰	
152	440		9区		第5層	須恵器	杯	8世紀中頃	口径:18.0(1/7)		N6/ 灰	
152	441		9区		第5層	須恵器	杯A	8世紀中頃	口径:15.1(若干のみ) 底径:10.8(2/5) 器高:3.6	外面:ヘラ切り 内面:ナデ	5YR7/4 にぶい橙、N5/ 灰	
152	442		9区		第5層	須恵器	杯A	8世紀中頃	底径:9.0(一部欠)	外面:ヘラ切り	N6/ 灰	
152	443		9区		第5層	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:10.4(1/4)		2.5Y6/1黄灰	
152	444		9区		第5層	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:11.3(1/4)	外面:ヘラ切り	N6/ 灰	
152	445		9区		第5層	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:15.5(1/4)	外面:回転ヘラケズリ	N6/ 灰	
152	446		9区		第5層	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	つまみ径:2.8(完)	外面:回転ヘラケズリ?(砂:→)	N6/ 灰	
152	447		9区		第5層	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:19.8(1/2弱)	外面:自然釉厚く付着 内面:ナデ	7.5Y6/3 オリーブ黄	
152	448		9区		第5層	須恵器	皿B蓋	8世紀中頃	口径:26.0(1/9)	外面:自然釉付着	5Y6/1 灰	
152	449		9区		第5層	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:15.2(若干のみ) 器高:3.1	外面:回転ヘラケズリ(砂:→)、凹線1	N5/ 灰	
152	450		9区		第5層	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:15.3(1/6弱) つまみ径:2.5(完) 器高:2.4	外面:灰かぶり	N6/ 灰	
152	451		9区		第5層	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:15.0(1/7) 器高:4.0		N5/ 灰	
152	452		9区		第5層	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:15.0(1/6弱) 高台径:10.2(1/2) 器高:3.6	外面:ヘラ切り	N6/ 灰	
152	453		9区		第5層	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:16.0(1/5) 高台径:12.0(1/4) 器高:3.5	外面:ヘラ切り?	N8/ 灰白	
152	454		9区		第5層	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:16.1(1/8) 高台径:12.1(完) 器高:3.5	外面:ヘラ切り	N6/ 灰	
153	455		9区		第5層	須恵器	皿C	8世紀中頃	口径:21.0(1/11) 器高:2.3	外面:ナデ 内面:ナデ	N6/、N6/ 灰白	
153	456		9区		第5層	須恵器	碗?	9世紀か	口径:19.0(1/8)		5Y6/1 灰	
153	457		9区		第5層	須恵器	高杯	8世紀後半か	脚部径:6.0(完)	内面:ナデ	N6/ 灰	
153	458		9区		第5層	須恵器	壺蓋	8世紀中頃	口径:12.2(1/7) 器高:3.4	外面:ヘラ切り?、ヘラナデ、自然釉付着	N6/ 灰	
153	459		9区		第5層	須恵器	壺K	8世紀中頃	口径:9.0(1/7) 頸部径:5.0	外面:一部自然釉付着	2.5Y6/1 黄灰	
153	460		9区		第5層	須恵器	台付長頸壺	8世紀前半	高台径:9.5(1/2)	外面:洗線1、回転ヘラケズリ(砂:→)、肩部に自然釉付着 内面:底部付近灰かぶり	5Y6/1 灰	
153	461		9区		第5層	須恵器	壺Q	8世紀後半か	頸部径:13.0(1/7) 最大腹径:18.0(1/4弱)	外面:ヘラケズリ?	N4/ 灰	
153	462		9区		第5層	須恵器	壺	8世紀後半	高台径:9.8(完)	外面:高台内面に須恵器破片が溶着	N6/ 灰	
153	463		9区		第5層	須恵器	壺	8世紀後半	高台径:9.8(1/2強)	外面:回転ヘラケズリ(砂:→)、指押えナデ	N7/ 灰白	
153	464		9区		第5層	須恵器	壺H?	8世紀末か	高台径:5.9(1/4)	外面:ナデ 内面:ナデ	N5/ 灰	
153	465		9区		第5層	須恵器	壺	9世紀前半か	底径:7.6(1/2弱)	外面:ヘラナデ、糸切り底	5Y5/2 灰オリーブ、10YR7/3 にぶい黄橙	
153	466	92	9区		第5層	須恵器	小型壺P?	9世紀か	口径:4.9(1/4) 底径:7.6(完) 器高:10.3	外面:底部未調整、部分的に手で押えた所あり	N7/ 灰白	
153	467		9区		第5層	須恵器	鉢D	8世紀	口径:25.0(1/7)		7.5YR6/2 灰褐	
153	468		9区		第5層	須恵器	平瓶	8世紀後半	高台径:15.4(1/3)	外面:ナデ	7.5Y5/1 灰	
153	469		9区		第5層	須恵器	平瓶	8世紀中頃	底径:23.0(1/10)	内面:底部に付着物あり	N7/ 灰白	
153	470		9区		第5層	須恵器	壺C	8世紀中頃	口径:19.0(1/3)	外面:洗線2、円形浮文、平行タタキ後カキメ 内面:同心円文当て具痕	N6/ 灰	

掲載遺物観察表 (13)

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) ( )内は残存率	調整等 (ヨコナデ、回転ナデは省略) (砂→は、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
153	471		9区		第5層	須恵器	甕底部	9世紀か	底径:15.0(1/4弱)	外面:平行タタキ、ナデ 内面:同心円文当て具痕後ナデ、ナデ	N7/ 灰白	
153	472		9区		第5層	須恵器	鉢	10世紀中頃か		篠窯	5Y7/1 灰白	
153	473		9区		第5層	緑釉陶器	碗か皿	9世紀前～中	底径:6.2(1/5)	軟質 外面:ヘラミガキ?、円盤高台、施釉 内面:ヘラミガキ?、施釉	5Y8/1～7/1 灰白(釉)淡黄緑	洛北
153	474		9区		第5層	緑釉陶器	碗	9世紀中頃か	底径:9.0(1/4強)	緑釉は痕跡なし 外面:摩滅 内面:摩滅	10YR8/4 浅黄橙	
153	475	91	9区		第5層	緑釉陶器	皿?	9世紀後半	高台径:8.6(1/5)	硬質 外面:ヘラミガキ、ナデ、施釉、底部にトチン跡あり、貼付輪高台 内面:ヘラミガキ、施釉	5Y6/1 灰(釉)淡緑	猿投窯
153	476	91	9区		第5層	緑釉陶器	大型碗?	9世紀か	高台基部径:9.4(1/3)	硬質 外面:ヘラミガキ、高台内面回転ヘラケズリ、施釉 内面:ヘラミガキ、施釉	5Y7/1 灰白～5Y6/1 灰(釉)淡緑	K14～90?(猿投窯)
153	477		9区		第5層	緑釉陶器(二彩?)	短頸壺	9世紀	口径:14.0(1/12) 肩部径:16.0	外面:ヘラミガキ?、ヘラケズリ、施釉 内面:ヘラミガキ?、施釉	7.5Y7/2 灰白	
153	478		9区		第5層	灰釉陶器	皿	9世紀前半	高台径:8.2(1/9)	外面:回転ヘラケズリ?、ヘラミガキ?、貼付輪高台 内面:施釉 調整不明	5Y7/1 灰白(釉)淡緑	K14(猿投)
153	479	91	9区		第5層	灰釉陶器	皿	9世紀末～10世紀前半?	高台径:6.0(2/3)	外面:ヘラミガキ、三日月高台 内面:ヘラミガキ、重ね焼痕あり、施釉	N7/灰白(釉)濃緑、黄緑	K90(猿投窯)
153	480		9区		第5層	土師器	?		内面底部径:14.0(1/9) 器高:7.0	外面:摩滅 内面:摩滅	5Y7/1 灰白、10YR7/3 にぶい黄橙	
153	481		9区		第5層	土師器	製塩土器	8世紀	口径:10.2(若干のみ)	外面:指押えナデ 内面:ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	
153	482	92	9区		第5層	土師器	製塩土器	8世紀	口径:15.4(若干のみ)	外面:指押えナデ 内面:指押えナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	
153	483		9区		第5層	土師器	製塩土器	8世紀	口径:14.8(若干のみ)	外面:指押えナデ 内面:指押えナデ	2.5Y7/1 灰白	
153	484		9区		第5層	土師器	製塩土器	8世紀	口径:19.0(1/15)	外面:指押えナデ、赤色化 内面:ナデ、赤色化	7.5YR7/4 にぶい橙	
153	485		9区		第5層	土師器	製塩土器	8世紀	最大腹径:16.0(1/6)	外面:指押えナデ 内面:指押えナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	
153	486		9区		第5層	土師器	製塩土器	8世紀		外面:指押えナデ 内面:摩滅	10YR7/3 にぶい黄橙	
153	487		9区		第5層	土師器	製塩土器	8世紀		外面:指押えナデ 内面:指押えナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	
153	488		9区		第5層	土師器	製塩土器	8世紀		外面:指押えナデ 内面:布目痕	2.5Y5/3 黄褐	
153	489		9区		第5層	土製品	?			上面に段と突帯がはがれた跡あり、下方に一部突出、下面にも突帯がはがれた跡あり	10YR7/3 にぶい黄橙	
154	490	99	9区		第5層	埴			幅:15.3	外面:ヘラ痕(ヘラナデ?)、板ナデ	2.5Y7/1 灰白	
154	491	99	9区		第5層	瓦	丸瓦	8～9世紀	玉縁端面幅:1.1 側面幅:1.6 玉縁幅:10.8 胴部幅:15.0	外面:摩滅 内面:布目痕(摩滅)、絞り目、ヘラナデ	5Y5/1, 6/1 灰	
154	492		9区		第5層	瓦	平瓦	8～9世紀	狭端面幅:1.4	凸面:摩滅、縄目タタキ? 凹面:ナデ、ヘラケズリ	N7/ 灰白	
154	493		9区		第5層	瓦	平瓦	8～9世紀	端面幅:1.5+α 狭端面幅:1.7	凸面:縄目タタキ、摩滅 凹面:布目痕、摩滅	2.5Y7/2 灰黄	
154	494		9区		第5層	瓦	平瓦	8～9世紀	狭端面幅:1.6 側面幅:1.3	凸面:縄目タタキ 凹面:摩滅	2.5Y8/1 灰白	
154	495		9区		第5層	瓦	平瓦	8～9世紀	狭端面幅:1.9	凸面:縄目タタキ 凹面:布目痕後板ナデ	7.5Y5/1 灰	
154	496		9区		第5層	瓦	平瓦	8～9世紀	側面幅:1.4	凸面:縄目タタキ 凹面:布目痕後板ナデ	N7/ 灰白	
155	497	101	9区		第5層	石製品	砥石		現長:9.8 現幅:9.3 現厚:4.7	砂岩 外面:砥面3+1?		
155	498		9区	第6面	掘立柱建物1(322ピット)	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:14.0(1/5)	内面:回転ナデ後ナデ	7.5Y8/1～7/1 灰白	
155	499		9区	第6面	掘立柱建物1(322ピット)	須恵器	杯B	8世紀後半	口径:16.0(1/6)		N4/ 灰	
155	500		9区	第6面	掘立柱建物1(324ピット)	土師器	杯A	8世紀中頃	口径:16.6(1/12)	外面:一部スス付着 内面:放射状暗文、連結輪状暗文か、一部スス付着	2.5Y8/2 灰白～2.5Y8/3 淡黄、2.5Y4/1 黄灰	
155	501		9区	第6面	掘立柱建物1(324ピット)	土師器	杯A	8世紀中頃	口径:18.2(1/11)	外面:ヘラケズリ、一部スス付着 内面:放射状暗文、スス付着	10YR6/2 灰黄褐	
155	502		9区	第6面	掘立柱建物1(324ピット)	土師器	杯A	8世紀中頃	口径:19.5(1/10)	外面:一部スス付着 内面:放射状暗文、スス付着	10YR6/2 灰黄褐	
155	503		9区	第6面	掘立柱建物1(324ピット)	土師器	杯B	8世紀中頃	高台径:12.6(1/7)	外面:回転ナデ後ヘラミガキ、底部ナデ後ヘラミガキ、一部スス付着 内面:放射状暗文、一部スス付着	5YR7/6～6/6 橙、7.5YR4/1 褐灰	
155	504		9区	第6面	掘立柱建物1(324ピット)	土師器	皿A	8世紀後半	口径:20.7(1/12) 器高:3.4	外面:ヘラケズリ、指押えナデ 内面:摩滅	5YR7/4 にぶい橙～5YR7/6 橙、5YR8/4 淡橙、7.5YR8/4～8/6 浅黄橙	
155	505		9区	第6面	掘立柱建物1(324ピット)	土師器	高杯	8世紀中頃	口径:17.0(1/9)	粘土紐巻上げ成形 外面:分割ヘラミガキ 内面:摩滅	2.5Y7/3 浅黄	
155	506		9区	第6面	掘立柱建物1(324ピット)	須恵器	杯A	8世紀後半	口径:15.0(1/9)	外面:ヘラ切り痕か	N6/ 灰	
155	507		9区	第6面	掘立柱建物1(324ピット)	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	つまみ径:2.3～2.5(完)	外面:回転ヘラケズリ後ナデか、指押え 内面:ナデ	5Y6/1～5/1 灰	
155	508		9区	第6面	掘立柱建物1(324ピット)	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:16.0(1/8)		5B5/1 青灰	
155	509		9区	第6面	掘立柱建物1(324ピット)	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:19.0(1/9) 高台径:14.4(1/8) 器高:5.7～5.8	内面:口縁部一部スス付着	N5/ 灰	
155	510		9区	第6面	掘立柱建物1(324ピット)	土師器	製塩土器	8世紀		外面:摩滅 内面:指押えナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	



掲載遺物観察表 (14)

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) ()内は残存率	調整等(ヨコナデ、回転ナデは省略) (砂→は、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
155	511		9区	第6面	掘立柱建物1 (325ピット)	土師器	杯A	8世紀中頃	口径:19.0(1/13)	外面:摩滅 内面:放射状暗文、ナデ	5YR 6/6 橙	
155	512		9区	第6面	掘立柱建物1 (325ピット)	須恵器	杯	8世紀か	口径:17.0(若干のみ) 体部下 部径:13.0	外面:ヘラケズリ? 内面:ハケ状ナデ	N5/ 灰	
155	513		9区	第6面	掘立柱建物1 (325ピット)	土師器	壺A	8世紀	口径:23.0(1/5)	外面:ハケメ、スス付着 内面:ハケメ、ナ デ、スス付着	2.5Y7/3 浅黄、 10YR5/3 にぶい 黄褐	
155	514		9区	第6面	掘立柱建物1 (325ピット)	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:18.0(1/11)	外面:ヘラケズリ	N5/ 灰	
155	515		9区	第6面	掘立柱建物1 (325ピット)	土師器	製塩土器	8世紀		外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR7/4 にぶ い橙	
155	516		9区	第6面	掘立柱建物1 (325ピット)	土師器	製塩土器	8世紀		外面:指押えナデ 内面:ナデ	N5/ 灰	
155	517		9区	第6面	掘立柱建物1 (326ピット)	土師器	皿A	8世紀後半	口径:20.0(1/11)	外面:ヘラケズリ	5YR6/6 橙	
155	518	92	9区	第6面	掘立柱建物1 (326ピット)	土師器	製塩土器	8世紀		外面:指押えナデ 内面:摩滅	10YR8/3 浅黄橙	
155	519	92	9区	第6面	掘立柱建物1 (326ピット)	土師器	製塩土器	8世紀		外面:指押えナデ 内面:ナデ	5YR6/6 橙	
155	520	92	9区	第6面	掘立柱建物1 (326ピット)	土師器	製塩土器	8世紀		外面:指押えナデ 内面:ナデ	10YR7/4 にぶい 黄橙	
155	521		9区	第6面	掘立柱建物1 (327ピット)	土師器	壺C	8世紀	口径:24.0(1/11)	外面:ハケメ 内面:ハケメ	10YR7/3 にぶい 黄橙	
155	522		9区	第6面	掘立柱建物1 (328ピット)	土師器	製塩土器	8世紀		外面:指押えナデ 内面:ナデ、赤色化	5YR8/1 灰白	
155	523		9区	第6面	掘立柱建物1 (332ピット)	須恵器	皿	8世紀中頃	口径:17.8(1/2弱) 器高:2.1	外面:回転ヘラケズリ(砂:→) 内面:回 転ナデ後ナデ	5Y8/1 灰白	
155	524		9区	第6面	掘立柱建物1 (332ピット)	木製品	柱根		長:45.0 幅:11.8 厚:12.6	ヒノキ材		
155	525		9区	第6面	掘立柱建物1 (334ピット)	土師器	壺	8世紀後半か	口径:16.0(1/8)	外面:ハケメ(摩滅により一部のみ残る) 内面:摩滅	7.5YR6/4 にぶい 橙	
155	526		9区	第6面	掘立柱建物1 (334ピット)	土師器	壺C	8世紀	口径:31.0(1/9)	外面:ハケメ(摩滅により一部のみ残る) 内面:摩滅、薄くスス付着	10YR8/3 浅黄 橙、5YR6/6 橙	
155	527		9区	第6面	掘立柱建物1 (334ピット)	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:21.0(若干のみ)	外面:回転ヘラケズリ(砂:→) 内面:ナ デ	5Y7/1 灰白	
155	528	92	9区	第6面	掘立柱建物1 (335ピット)	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:14.2(3/5)	外面:回転ヘラケズリ(砂:→) 内面:ナ デ	N6/ 灰	
155	529		9区	第6面	掘立柱建物1 (335ピット)	土師器	製塩土器	8世紀		外面:棒状の凹みあり	10YR7/3 にぶい 黄橙	
155	530	104	9区	第6面	掘立柱建物1 (335ピット)	木製品	柱根		長:57.6 幅:17.9 厚:13.7	スギ材 底面に加工痕あり		
156	531	104	9区	第6面	掘立柱建物1 (336ピット)	木製品	柱根		長:57.6 幅:25.5 厚:19.6	スギ材 底面に加工痕あり		
155	532		9区	第6面	掘立柱建物2 (331ピット)	須恵器	杯A	8世紀前半~ 中頃	口径:12.2(1/4) 器高:3.1	外面:ヘラ切り	N5/~N4/ 灰	
156	533		9区	第6面	掘立柱建物2 (331ピット)	木製品	柱根		長:33.1 幅:11.9 厚:9.3	スギ材、2分割になっている		
156	534		9区	第6面	214ピット	土師器	鍋B	8世紀	口径:31.0(1/8)	外面:ハケメ(摩滅により一部のみ残る) 内面:ハケメ(摩滅により一部のみ残る)	5YR6/8 橙	
156	535		9区	第6面	216ピット	須恵器	杯A	8世紀中頃	口径:13.8(1/8)	外面:ナデ	5Y8/1~7/1 灰 白	
156	536		9区	第6面	241ピット	須恵器	杯A	8世紀前半	口径:14.6(若干のみ)	外面:回転ヘラケズリ(砂:←) 内面:回 転ナデ後ナデ	10Y7/1 灰白~ 10Y6/1 灰	
156	537		9区	第6面	241ピット	須恵器	杯B蓋	8世紀前半	口径:14.2(若干のみ) つまみ 径:2.6 器高:2.4	内面:回転ナデ後ナデ	N6/ 灰	
156	538		9区	第6面	241ピット	須恵器	杯B蓋	8世紀前半	口径:14.2(1/4)		N7/ 灰白	
155	539		9区	第6面	283ピット	土師器	高杯	8世紀中頃	口径:28.0(1/8)	粘土紐巻上げ成形 外面:ヘラケズリ後 部分的に分割ヘラミガキ 内面:細い放 射状暗文、連結輪状暗文	5YR5/6 明赤褐	
156	540		9区	第6面	294ピット	木製品	柱根		長:17.6 幅:8.8 厚:5.1	スギ材、腐食著しい		
156	541		9区	第6面	197溝	土師器	皿A	8世紀中頃	口径:16.0(端部欠)(1/8) 器 高:2.3	外面:指押えナデ 内面:ナデ、まばらな 放射状暗文	5YR6/6 橙	
156	542		9区	第6面	197溝	土師器	碗C	8世紀中頃	口径:14.0(1/5) 器高:3.5	外面:摩滅、指押えナデ? 内面:摩滅	7.5YR7/4 にぶ い橙	
156	543		9区	第6面	197溝	土師器	壺A	8世紀	頸部径:14.0(1/5)	外面:ヘラミガキ、摩滅、把手痕 内面:指 押え、一部スス付着	7.5YR6/4 にぶ い橙	
156	544		9区	第6面	197溝	須恵器	杯B蓋	8世紀前半	口径:15.0(1/12)	外面:回転ヘラケズリ(砂:→)	N5/ 灰	
156	545		9区	第6面	197溝	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:14.9(1/4弱) 高台径: 11.2(1/4) 器高:4.4	内面:回転ナデ後ナデ	N4/~6/ 灰	
156	546	92	9区	第6面	197溝	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:14.8(1/2強) 高台径: 10.0(完) 器高:4.2	外面:底部墨付着 内面:回転ナデ後ナデ	5Y7/1 灰白	
156	547		9区	第6面	197溝	須恵器	壺	6世紀後半か	口径:13.0(1/8)	外面:沈線1、自然釉付着 内面:自然釉 付着	5Y7/1 灰白、 7.5Y5/3 灰オ リーブ	
156	548		9区	第6面	197溝	須恵器	壺Q	8世紀	頸部径:10.0(1/4強) 肩部 径:17.0(1/5)		N6/~N4/ 灰	
156	549		9区	第6面	198溝	須恵器	杯B	8世紀末	高台径:7.0(1/4)	外面:ナデ	N6/ 灰	
156	550		9区	第6面	198溝	須恵器	鉢A	8世紀末		外面:ヘラミガキ	N5/ 灰	
156	551		9区	第6面	198溝	須恵器	壺	8世紀	底径:11.0(1/4強)	外面:回転ヘラケズリ(砂:←)、底部 に溶着あり	N6/ 灰	
156	552		9区	第6面	198溝	須恵器	壺	8世紀末	高台径:9.0(1/4)	外面:ナデ	N4/ 灰	
156	553		9区	第6面	198溝	緑釉 陶器	碗小皿	9世紀後半	高台径:7.2(1/12)	軟質 外面:ヘラミガキ、施釉、高台端 部ヘラケズリ、貼り付け輪高台 内面: ヘラミガキ、施釉	5Y7/1 灰白~ 5Y6/1 灰(釉) 淡緑	猿投窯

掲載遺物観察表 (15)

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) ()内は残存率	調整等(ヨコナデ、回転ナデは省略) (砂→は、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
156	554		9区	第6面	199溝	須恵器	杯B	8世紀末	口径:14.0(若干のみ) 高台径:10.0(1/4) 器高:4.3	外面:ナデ 内面:ナデ	N5/ 灰、2.5Y8/1 灰白	
156	555		9区	第6面	199溝	須恵器	杯B	8世紀末	口径:17.0(若干のみ) 高台径:14.0(1/7) 器高:4.1	外面:ヘラ切りか 内面:ナデ	10Y7/1 灰白	
156	556		9区	第6面	199溝	須恵器	壺C	8世紀末	底径:15.0(1/4)	外面:格子状タタキ後一部板ナデ、底部ヘラケズリ? 内面:同心円文当て具痕、板ナデ、ナデ	N5/ 灰	
156	557		9区	第6面	199溝	緑釉陶器	椀か皿	9世紀中頃か	高台径:6.4(若干のみ)	磨減、軟質 外面:ヘラミガキ、ヘラケズリ、削り出し蛇の目高台、施釉 内面:ヘラミガキ	2.5Y7/2 灰黄(釉) 淡黄緑	京都産
156	558		9区	第6面	199溝	瓦	丸瓦	8~9世紀	側面幅:1.1	無段式? 凸面:ナデ、ヘラケズリ 凹面:布目痕	N4/ 灰	
156	559		9区	第6面	199溝	瓦	平瓦	8~9世紀	狭端幅:2.4 側面幅:1.1	凸面:縄目タタキ一部指押えナデ 凹面:布目痕	N4/ 灰	
156	560		9区	第6面	208溝	灰釉陶器	壺or小型壺	9世紀		外面:施釉 内面:施釉(薄い)	10Y6/2 オリーブ灰	
156	561		9区	第6面	271落ち込み	瓦	平瓦	8~9世紀	側面幅:1.7	凸面:縄目タタキ後一部ナデ 凹面:布目痕後板ナデ、ナデ	N4/ 灰	
157	562		10区(A1)		第3層	土師器	高杯	8世紀後半	脚基部径:6.0(1/2)	外面:磨減、脚部面取り(8面) 内面:磨減、脚部内面は絞り目	7.5YR7/6 橙	
157	563		10区(A1)		第3層	土師器	壺B	8世紀後半	口径:12.0(1/8弱)	外面:沈線1、ナデ? 内面:ナデ?	7.5YR6/6 橙	
157	564		10区(A1)		第3層	土師器	羽釜	8世紀後半か	口径:28.0(1/5)	外面:磨減 内面:磨減、一部ハケメ、指押え	7.5YR5/4 にぶい橘	
157	565		10区(A1)		第3層	須恵器	杯A	8世紀後半	口径:12.8(若干のみ) 底径:10.0(1/4) 器高:3.2	外面:ナデ 内面:ナデ	N6/ 灰	
157	566		10区(A1)		第3層	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:10.8(2/5) つまみ径:1.6(完) 器高:1.2	外面:回転ヘラケズリ?	N6/ 灰	
157	567		10区(A1)		第3層	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:13.6(1/4弱) 器高:2.0	外面:ナデ 内面:ナデ	N6/ 灰	
157	568		10区(A1)		第3層	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:14.4(1/4) つまみ径:2.3(完) 器高:2.0	内面:ナデ	N6/ 灰	
157	569		10区(A1)		第3層	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:16.0(1/4)	内面:ナデ	7.5Y7/1 灰白	
157	570		10区(A1)		第3層	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:18.8(1/9) つまみ径:6.8(1/10) 器高:2.9	外面:ナデ 内面:ナデ	N7/ 灰白	
157	571		10区(A1)		第3層	須恵器	杯B	8世紀後半	口径:14.2(1/3) 高台径:10.4(1/3) 器高:4.5	外面:ナデ 内面:ナデ	5Y7/1 灰白	
157	572		10区(A1)		第3層	須恵器	杯B	8世紀後半	口径:14.0(1/9) 器高:3.9		N7/ 灰白	
157	573		10区(A1)		第3層	須恵器	杯B	8世紀後半	口径:15.7(若干のみ) 高台径:12.0(1/4) 器高:4.4	外面:ナデ	N7/ 灰白	
157	574		10区(A1)		第3層	須恵器	椀?	9世紀前半か	高台径:6.2(2/3)	外面:磨減 内面:磨減	N8/ 灰白	
157	575		10区(A1)		第3層	須恵器	椀	9世紀末か	口径:7.6(1/2)	外面:ナデ 内面:ナデ	N8/ 灰白	
157	576		10区(A1)		第3層	須恵器	鉢A	8世紀中頃		外面:ヘラミガキ 内面:ナデ?	N5/ 灰	
157	577		10区(A1)		第3層	須恵器	鉢	9世紀中~後半	口径:23.0(1/7)		N7/ 灰白	
157	578		10区(A1)		第3層	須恵器	播鉢	9世紀中~後半か	体部下径:8.4(1/3)	外面:磨減、底部に小孔?多数 内面:磨減	5Y8/1 灰白	
157	579		10区(A1)		第3層	須恵器	円面硯	8世紀後半か	脚基部内径:7.0(1/4)	外面:透孔(7個か) 内面:磨耗(使用痕か)	N4/ 灰	
157	580		10区(A1)		第3層	須恵器	壺L	8世紀後半	頸部径:5.5(完)	外面:沈線1、頸部自然釉付着	10YR5/1 褐灰	
157	581		10区(A1)		第3層	須恵器	壺Q	8世紀後半か	高台径:11.7(1/2強)	図上復元 外面:回転ヘラケズリ(-)、ナデ、底部未調整、肩部に自然釉薄く付着 内面:ナデ	5Y7/1 灰白	
157	582		10区(A1)		第3層	須恵器	壺N	8世紀中頃	底径:11.0(1/3)	外面:回転ヘラケズリ?、ナデ 内面:ナデ	N5/ 灰	
157	583	92	10区(A1)		第3層	須恵器	壺M	8世紀末	口径:3.6(4/5) 高台径:4.0(完) 器高:8.3	外面:回転ヘラケズリ(砂:-)	N6/ 灰	
157	584		10区(A1)		第3層	須恵器	壺M	8世紀末	高台径:4.3(ほぼ完)	外面:回転ヘラケズリ(砂:-)	N4/ 灰	
157	585		10区(A1)		第3層	須恵器	壺M	9世紀前半	高台径:4.8(3/4)	外面:回転ヘラケズリ(砂:-) 内面:一部自然釉付着	2.5Y8/1 灰白	
157	586	92	10区(A1)		第3層	須恵器	壺G	8世紀末	口径:7.0(1/4) 底径:5.9(1/6)	外面:糸切り底 内面:絞り目、ナデ	5P5/1 紫灰	
157	587		10区(A1)		第3層	須恵器	壺C	8世紀前半	口径:11.6(1/3)	外面:平行タタキ? 内面:同心円文当て具痕	N6/ 灰	
157	588		10区(A1)		第3層	須恵器	壺B	8世紀末	口径:19.6 頸部径:16.0(1/5)	外面:平行タタキ後カキ目 内面:同心円文当て具痕	5Y7/1 灰白	
157	589		10区(A1)		第3層	須恵器	壺	8世紀中頃	口径:42.0(1/8)	外面:平行タタキ(木目の痕跡見える) 内面:同心円文当て具痕後ナデ	N6/ 灰	
157	590		10区(A1)		第3層	須恵器	壺N?	8世紀後半か	最大腹径:19.6(1/6)	外面:平行タタキ後ナデ、ヘラナデ? 内面:絞り目のような痕跡	N5/ 灰	
158	591		10区(A1)		第3層	灰釉陶器	壺	9世紀	径径:15.0(1/4)	外面:一部溶着あり、施釉	7.5Y6/2 灰オリーブ	592と同一個体か
158	592		10区(A1)		第3層	灰釉陶器	壺	9世紀		外面:ヘラナデ?、溶着あり、施釉 内面:一部施釉	7.5Y6/2 灰オリーブ	591と同一個体か

掲載遺物観察表 (16)

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) ( )内は残存率	調整等 (ヨコナデ、回転ナデは省略) (砂→は、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
158	593		10区 (A1)		第3層	土師器	製塩土器	8世紀後半～9世紀前半	最大腹径:10.0(1/5)	外面:指押えナデ 内面:摩滅	5YR6/6 橙	
158	594		10区 (A1)		第3層	土師器	製塩土器	8世紀後半～9世紀前半		外面:指押えナデ 内面:指押えナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	
158	595	92	10区 (A1)		第3層	土製品	輪の羽口			外面:黒色化、発泡 内面:赤色化	N2/ 黒	
158	596	98	10区 (A1)		第3層	瓦	軒丸瓦	8世紀後半	中房径:約1.0	複弁8弁蓮華文 平城宮6291B型式か6282型式を祖型とする	N5/ 灰	第140集図 97-559-557
158	597	98	10区 (A1)		第3層	瓦	軒丸瓦	8世紀後半	直径:17.0(1/11) 瓦当厚:3.6	重圏文 平城宮6012型式を祖型とする 凸面:摩滅 凹面:摩滅	N3/ 灰白	第140集図 97-573
158	598	98	10区 (A1)		第3層	瓦	軒平瓦	8世紀後半	側面幅:1.7 瓦当厚:1.7	均整唐草文 平城宮6702G型式を祖型とする 凸面:板ナデ 凹面:ヘラケズリ	N5/ 灰	第140集図 69-194
158	599		10区 (A1)		第3層	瓦	丸瓦	8～9世紀	狭端部幅:1.5 側面幅:1.5	無段式 凸面:縄目タタキ後ナデ 凹面:布目痕	5Y7/1 灰白、N4/ 灰	
158	600		10区 (A1)		第3層	瓦	平瓦	8～9世紀	狭端部幅:2.1 側面幅:1.6	凸面:縄目タタキ 凹面:布目痕後ナデ	N7/ 灰白、N5/ 灰	
158	601	101	10区 (A1)		第3層	石製品	砥石		現長:8.6 現幅:5.5 現厚:4.7	砂岩 砥面3		
158	602		10区 (A1)		第3・4層	瓦	平瓦		側面幅:2.0	1枚作り 凸面:布目痕 凹面:縄目タタキ後指押えナデ?		
158	603	101	10区 (A1)		第3・4層	石製品	敲き石		現長:6.8 現幅:7.7 現厚:5.2	砂岩 両面が2次的に火を受けている		
158	604	102	10区 (A1)		第3・4層	金属製品	不明鉄製品		現長:(サビ含)3.4 現幅:(本体)2.9 厚:(本体)0.5			
158	605		10区 (A1)	第5面	789ピット	須恵器	杯A	8世紀後半	口径:12.6(1/10) 器高:3.0	外面:摩滅 内面:摩滅	N8/ 灰白	
158	606		10区 (A1)	第5面	819ピット	須恵器	壺B	8世紀中頃	口径:22.4(1/4)	外面:平行タタキ 内面:ナデの上工具痕あり、同心円文当て具痕	10YR7/1 灰白、10YR7/3 にぶい黄橙	生焼け
158	607		10区 (A1)	第5面	888ピット	土師器	杯A	8世紀中頃	口径:19.4(1/13) 器高:3.0	外面:摩滅 内面:摩滅、まばらな放射状暗文	5YR6/6 橙	
158	608	92	10区 (A1)	第5面	888ピット	土師器	皿A	8世紀後半	口径:17.6(3/5) 器高:3.5	外面:ヘラケズリ、摩滅 内面:摩滅	5YR5/6 明赤褐	
158	609		10区 (A1)	第5面	888ピット	須恵器	杯B	8世紀後半	口径:20.0(2/5) 器高:5.7		5Y6/1 灰	
158	610		10区 (A1)	第5面	888ピット	須恵器	杯B	8世紀後半	高台径:12.2(1/3)	外面:ナデ 内面:ナデ(部分的に磨耗した所あり)	N6/ 灰	
158	611		10区 (A1)	第5面	888ピット	須恵器	杯B	8世紀後半	高台径:15.0(1/2弱)	外面:ヘラ切り 内面:一部ヘラミガキ?	5Y7/1 灰白	
158	612	92	10区 (A1)	第5面	888ピット	須恵器	杯E	8世紀後半	口径:15.4(2/5) 器高:5.5	外面:ナデ、ヘラ切り 内面:ナデ	N7/ 灰白	
158	613		10区 (A1)	第5面	929ピット	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:14.9(若干のみ)	内面:ナデ	5Y7/1 灰白	
158	614	98	10区 (A1)	第5面	929ピット	瓦	軒平瓦	8世紀後半	瓦当厚:5.6 外縁厚:0.7 頸凸面厚:5.2	均整唐草文 平城宮6667A型式を祖型とする 凸面:ナデ、縄目タタキ 凹面:板ナデ	N6/ 灰、5Y8/1 灰白	
158	615		10区 (A1)	第5面	827土坑	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	つまみ径:1.6(完)	外面:ナデ 内面:ナデ	N/5 灰、5GY5/1 オリーブ灰	
158	616		10区 (A1)	第5面	827土坑	須恵器	壺蓋	8世紀後半	稜径:13.0(若干のみ) つまみ径:2.6	外面:回転ヘラケズリ?	N7/ 灰白	
158	617		10区 (A1)	第5面	856土坑	須恵器	杯	6世紀末～7世紀初頭	口径:14.0(1/13)	内面:回転ヘラケズリ	N5/ 灰	
158	618		10区 (A1)	第5面	928土坑	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:17.0(1/4)	外面:ナデ?、部分的に自然釉付着 内面:ナデ	N5/ 灰	
158	619		10区 (A1)	第5面	928土坑	須恵器	皿B蓋	8世紀中頃	口径:28.0(1/9)	内面:ナデ	N5/ 灰	
159	620		10区 (A1)	第5面	776溝	土師器	杯A	8世紀中頃	口径:13.0(1/3) 器高:2.3	外面:摩滅 内面:摩滅	5YR7/8 橙	
159	621		10区 (A1)	第5面	776溝	土師器	杯A	8世紀中頃	口径:18.0(1/5)	外面:摩滅、ヘラケズリ? 内面:摩滅、放射状暗文	5YR6/6 橙	
159	622		10区 (A1)	第5面	776溝	土師器	鉢F	8世紀中頃	高台径:12.3	外面:摩滅、底部に円形に3本線あり(高台をつける時の印か)、低い高台 内面:摩滅	2.5Y7/2 灰黄、2.5Y2/1 黒	
159	623		10区 (A1)	第5面	776溝	土師器	壺	8世紀	口径:16.0(1/6)	外面:摩滅、頸部に工具痕?あり 内面:摩滅、一部ナデ	2.5Y8/1 灰白	
159	624		10区 (A1)	第5面	776溝	土師器	壺	8世紀前半か	頸部径:24.0(1/5)	外面:摩滅、一部ハケ残る、スス付着 内面:摩滅	7.5YR7/4 にぶい橙	
159	625		10区 (A1)	第5面	776溝	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:16.4(1/5)		N5/ 灰	
159	626		10区 (A1)	第5面	776溝	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:15.0(1/8) 高台径:10.0(1/2) 器高:4.0	外面:ナデ、底部にヘラ痕あり 内面:ナデ	N5/ 灰	
159	627		10区 (A1)	第5面	776溝	須恵器	杯B	8世紀中頃	高台径:13.6(1/2弱)	外面:底部ナデ、回転ヘラケズリ? 内面:ナデ	N6/ 灰	
159	628		10区 (A1)	第5面	776溝	須恵器	皿B蓋	8世紀中頃	口径:29.4(1/8) つまみ径:4.3(一部欠) 器高:3.7	内面:ナデ	2.5Y7/1 灰白	
159	629	93	10区 (A1)	第5面	776溝	須恵器	壺K	8世紀前半	高台径:8.4(端部欠損多い) 最大腹径:16.9(一部欠)	外面:沈線2、自然釉付着、溶着あり、底部発泡している 内面:底面に自然釉一部付着	2.5Y7/1 灰白、7.5Y5/3 灰オリーブ	
159	630	93	10区 (A1)	第5面	781溝	土師器	杯A	8世紀前半	口径:18.8(1/4) 器高:3.9	外面:ヘラケズリ、摩滅 内面:底部に暗文あり、摩滅	5YR6/6 橙	
159	631		10区 (A1)	第5面	781溝	土師器	壺	8世紀後半か	口径:13.0(1/4)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR6/4 にぶい橙	

掲載遺物観察表 (17)

挿図 番号	図番 号	図版 番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) ()内は残存率	調整等(ヨコナデ、回転ナデは省略) (砂→は、ヘラケズリで砂が動いた 方向を示す)	外面色調	備考
159	632	93	10区 (A 1)	第5面	781溝	須恵器	杯A	8世紀中頃	口径:13.2~13.4(一部欠) 器高:3.7	外面:ヘラ切り、口縁端部変色(重ね 焼の証拠か) 内面:ナデ	N6/ 灰	
159	633	93	10区 (A 1)	第5面	781溝	須恵器	杯A	8世紀中頃	口径:11.7~11.9(完) 器 高:3.6	外面:ヘラ切り 内面:ナデ	5Y7/1 灰白, 5Y6/1 灰	
159	634	93	10区 (A 1)	第5面	781溝	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:16.0(1/2弱) つまみ 径:2.7(完) 器高:3.1	外面:回転ヘラケズリ後ナデ 内面: ナデ	5Y5/1 灰	
159	635	93	10区 (A 1)	第5面	781溝	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:16.2(4/5) つまみ 径:2.8(完) 器高:2.2	内面:ナデ	7.5Y5/1 灰	
159	636		10区 (A 1)	第5面	781溝	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:16.0(2/5)	外面:回転ヘラナデ	N5/ 灰	
159	637		10区 (A 1)	第5面	781溝	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:17.2(1/3)	外面:回転ヘラナデ? 内面:ナデ	7.5Y6/1 灰	
159	638		10区 (A 1)	第5面	781溝	須恵器	杯B	8世紀後半	口径:13.0(1/7) 高台径: 9(2/5) 器高:4.7	外面:ナデ 内面:ナデ	10YR3/2 黒褐	
159	639		10区 (A 1)	第5面	781溝	須恵器	杯B	8世紀後半	高台径:15.0(1/4)	外面:底部にヘラ痕あり(ヘラナデ ?)	N6/ 灰	
159	640	93	10区 (A 1)	第5面	781溝	須恵器	皿B	8世紀後半	口径:28~28.2(1/2) 底 径:25~25.2(1/2) 器高: 5.4	外面:摩滅 内面:摩滅	2.5Y7/4 浅黄, 2.5Y7/1 灰白	
159	641		10区 (A 1)	第5面	930溝	須恵器	壺	8世紀後半	高台径:9.4(完)	外面:ナデ 内面:指押えナデ	N4/ 灰	
159	642		10区 (A 1)	第5面	935溝	土師器	杯A	8世紀中頃	口径:19.0(1/10)	外面:ヘラケズリ 内面:放射状暗文 、ナデ?	7.5YR7/4 にぶ い橙	
160	643		10区 (A 2)		第2層	緑釉陶 器(二 彩)	椀	9世紀前半か	高台径:9.0(1/6)	外面:ヘラケズリ、底部ヘラケズリ、 施釉 内面:圏線1、施釉	5Y7/1 灰白, N4/ 灰	
160	644		10区 (A 2)		第2層 最下部	磁器	青磁椀	中世	体部下径:8.1(1/5)	外面:施釉 内面:施釉	5Y6/2 灰オ リーブ	
160	645		10区 (A 2)		第2層 最下部	緑釉 陶器	椀	9世紀後半	口径:8.2(若干のみ)	外面:施釉 内面:施釉	5Y6/2 灰オ リーブ	
160	646		10区 (A 2)		第2層 最下部	灰釉 陶器	椀	9世紀後半	高台径:8.8(若干のみ) 高 台基部径:9.0(1/8)	外面:施釉(高台内面露胎) 内面:施 釉、重ね焼痕あり	7.5Y6/2 灰オ リーブ	
160	647		10区 (A 2)		第3層	磁器	龍泉窯系青 磁椀	14世紀か		外面:凹みあり(連弁か)、施釉 内面 :施釉	10Y5/2 灰オ リーブ	
160	648		10区 (A 2)		第3層	土師器	杯A	8世紀中頃	口径:16.0(1/8) 器高:2.2	外面:口縁端部沈線1、ナデ、底部ヘ ラケズリ 内面:ナデ後放射状暗文、 連結輪状暗文	10YR7/3 に ぶい黄橙, 5YR7/6 橙	
160	649		10区 (A 2)		第3層	土師器	杯A	8世紀中頃	口径:19.0(1/8)	外面:ヘラケズリ 内面:放射状暗文	5YR6/6 橙	
160	650		10区 (A 2)		第3層	土師器	杯A	8世紀後半	口径:14.0(若干のみ) 底 径:9.5(1/2) 器高:3.75	外面:指押えナデ 内面:ナデ	2.5Y7/2 灰黄	
160	651		10区 (A 2)		第3層	土師器	杯C	8世紀後半	口径:17.0(1/6) 器高:2.1	外面:摩滅 内面:沈線1、ナデ	7.5YR6/6 橙	
160	652		10区 (A 2)		第3層	土師器	杯B	8世紀末	口径:12.0(1/7) 高台径: 10.0(1/6) 器高:3.3	外面:摩滅 内面:摩滅	5YR6/6 橙	
160	653	93	10区 (A 2)		第3層	土師器	杯B	8世紀末	口径:10.1(2/3) 高台径: 6.4(完) 器高:3	外面:摩滅 内面:摩滅	2.5Y7/4 浅黄, 5YR6/6 橙	
160	654		10区 (A 2)		第3層	土師器	皿A	8世紀後半	口径:17.0(2/5) 器高:2.4	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR6/4 にぶ い橙, 10YR7/3 にぶい黄橙	
160	655		10区 (A 2)		第3層	土師器	高杯	8世紀中頃	脚柱基部径:5.0	心棒成形 外面:ナデ?、脚部面取り (9~10面) 内面:ハケメ後連結輪 状暗文、脚部内面はヘラケズリ	5YR6/6 橙	
160	656		10区 (A 2)		第3層	土師器	高杯	8世紀中頃	脚柱基部径:6.2(完)	粘土紐巻上げ成形 外面:ナデ、脚部 面取り(9~10面) 内面:ハケメ後 連結輪状暗文、脚部内面はナデ	2.5YR6/6 橙	
161	657		10区 (A 2)		第3層	土師器	高杯	8世紀末	口径:16.0(1/4)	粘土紐巻上げ成形 外面:摩滅 内面 :摩滅	5YR6/6 橙	
160	658		10区 (A 2)		第3層	土師器	鉢F?	8世紀後半	口径:24.4(1/9)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR7/4 にぶ い橙	
160	659		10区 (A 2)		第3層	土師器	壺	8世紀後半か	口径:16.0(1/7)	外面:ハケメ 内面:ハケメ、摩滅(工 具痕あり)	10YR7/3 にぶ い黄橙	
160	660		10区 (A 2)		第3層	土師器	壺A	8世紀	口径:23.0(1/8)	外面:ハケメ(摩滅により一部のみ残 る) 内面:板ナデ?、一部ハケメ残る	10YR7/4 にぶ い黄橙	
160	661		10区 (A 2)		第3層	土師器	甌	8世紀後半か		外面:摩滅 内面:板ナデ?	10YR7/3 にぶ い黄橙	
160	662	93	10区 (A 2)		第3層	土師器	竈		口径:26.0(1/9) 底径: 22.9	図上復元 外面:ハケメ、ナデ、底部 板ナデ? 内面:指押ナデ、ハケメ、 スス付着	10YR7/3 にぶ い黄橙	
160	663		10区 (A 2)		第3層	須恵器	杯B	8世紀後半	口径:13.8(1/4) 高台径: 10.0(1/3) 器高:3.8~4.0	外面:ヘラ切り? 内面:ナデ	5Y7/1 灰白	
160	664		10区 (A 2)		第3層	須恵器	杯B	8世紀後半	口径:14.6~14.8(1/2弱) 高台径:11(2/5) 器高:3.9 ~4.0	外面:ナデ 内面:ナデ	7.5Y5/1 灰	
160	665		10区 (A 2)		第3層	須恵器	杯B	8世紀後半	口径:14~14.6(1/2弱) 高台径:10.6(3/5) 器高: 3.8~4.0	外面:底部に重ね焼痕あり 内面:ナ デ	N6/ 灰	
160	666		10区 (A 2)		第3層	須恵器	杯B	8世紀後半	口径:15.2(1/4強) 高台 径:10.2(1/3) 器高:4.9~ 5.2	外面:ナデ 内面:一部ナデ	N6/ 灰	
160	667		10区 (A 2)		第3層	須恵器	杯B	8世紀後半	口径:13(1/3) 高台径:8.6 ~9.2(1/3) 器高:3.6~ 3.7	外面:ヘラ切り? 内面:ナデ	N6/ 灰	
160	668		10区 (A 2)		第3層	須恵器	杯B	8世紀後半	口径:16.2~16.8(1/11) 高台径:12.0(3/4) 器高: 5.7	外面:ヘラ切り? 内面:ナデ	N2/ 黒, 5Y6/1 灰	

掲載遺物観察表 (18)

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) ()内は残存率	調整等(ヨコナデ、回転ナデは省略) (砂→は、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
161	669		10区 (A2)		第3層	須恵器	杯B	8世紀後半	口径:21.4(1/9) 高台径:16.0(1/6) 器高:5.9~6.0	外面:ナデ、底部にヘラ痕あり 内面:ナデ	7.5Y6/1 灰	
161	670		10区 (A2)		第3層	須恵器	杯B	8世紀後半	口径:11(1/6) 高台径:8.0~8.2(1/5) 器高:4.0	外面:ナデ	N6/ 灰	
161	671		10区 (A2)		第3層	須恵器	杯B	8世紀後半	口径:13.0(1/11) 高台径:9.6(1/2弱) 器高:3.7~3.8	外面:ヘラ切り?	7.5Y7/1 灰白	
161	672		10区 (A2)		第3層	須恵器	杯B	8世紀後半	口径:15~15.4(1/3) 高台径:10.6(1/2弱) 器高:5.4	外面:ナデ 内面:ナデ	N5/ 灰	口縁部ゆがみ有り
161	673		10区 (A2)		第3層	須恵器	皿C	8世紀後半	口径:22.0(1/10) 器高:2.5	外面:摩滅 内面:摩滅	5Y8/1 灰白	
161	674		10区 (A2)		第3層	須恵器	皿C	8世紀後半	口径:17.6(若干のみ) 底径:14.4(1/6) 器高:1.8	外面:ナデ、ヘラ切り、底部に火ダスキ痕あり 内面:底部に火ダスキ痕あり	5Y8/1 灰白	
161	675		10区 (A2)		第3層	須恵器	壺C	8世紀中頃	口径:5.0(1/5)		7.5Y5/1 灰	
161	676		10区 (A2)		第3層	須恵器	壺M	8世紀末~9世紀初頭	高台径:4.0~4.1(完)	外面:糸切り	7.5Y6/1 灰	
161	677		10区 (A2)		第3層	須恵器	壺	8世紀末~9世紀初頭	高台径:6.7(一部欠)	外面:糸切り	5Y7/1 灰白	
161	678	93	10区 (A2)		第3層	須恵器	壺G	8世紀末~9世紀初頭	底径:4.2(1/4)	外面:回転ヘラケズリ、糸切り	5Y7/1 灰白	
161	679		10区 (A2)		第3層	須恵器	壺B	8世紀後半か	口径:23.4(1/6)	外面:平行タタキ	5Y7/1 灰白	
161	680		10区 (A2)		第3層	須恵器	壺C	8世紀後半	口径:26.0(1/8)	外面:平行タタキ後ナデ 内面:同心円文当て具痕後ナデ	N5/ 灰	
161	681		10区 (A2)		第3層	須恵器	甌	9世紀か	口径:若干のみ 底径:18.0(1/6)	図上復元 外面:ナデ、底部蒸気孔2残、把手痕あり 内面:ナデ、ヘラケズリ	5Y7/1 灰白	
161	682	93	10区 (A2)		第3層	緑釉陶器	椀	9世紀前半か	底径:6.3(3/4)	外面:回転ヘラケズリ、施釉 内面:「×」のヘラ記号あり、施釉	10Y6/2 灰オリーブ、10YR7/3 にぶい黄橙	
161	683		10区 (A2)		第3層	灰釉陶器	椀	9世紀後半か	高台径:7.0(1/5)	外面:施釉 内面:灰釉?のほげた跡?	5Y7/1, 7/2 灰白	
161	684		10区 (A2)		第3層	灰釉陶器	皿	9世紀前半か	高台径:8.0(1/5)	外面:底部回転ヘラケズリ 内面:施釉(一部剥離)	5Y7/1 灰白	
161	685	93	10区 (A2)		第3層以下	土師器	製塩土器	8~9世紀	口径:12.0(1/4)	二次焼成で赤色化 外面:口縁部に棒で押えたような凹みあり、指押えナデ 内面:指押えナデ	7.5YR7/2 明褐灰	
161	686	93	10区 (A2)		第3層	土師器	製塩土器	8~9世紀	内径:12.2(1/6弱)	外面:指押え 内面:板ナデ?	7.5YR5/3 にぶい褐	
161	687	93	10区 (A2)		第3層	土師器	製塩土器	8~9世紀	口縁直下径:8.0(1/6)	外面:指押え 内面:指押え	7.5YR7/6 橙	
161	688	93	10区 (A2)		第3層	土師器	製塩土器	8~9世紀	内径:10.0(1/6)	外面:指押えナデ 内面:ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙、10YR7/1 灰白	
161	689		10区 (A2)		第3層	土師器	製塩土器	8~9世紀	口縁直下径:15.6(1/5)	外面:摩滅 内面:摩滅	2.5Y6/3 にぶい黄	
161	690		10区 (A2)		第3層	瓦	平瓦	8~9世紀	広端幅:1.5~1.8 側面幅:2.1	凸面:縄目タタキ 凹面:ナデ、布目痕	2.5Y8/2 灰白	
161	691	101	10区 (A2)		第3層	石製品	砥石		現長:9.3 現幅:3.6 現厚:1.8	砂岩 砥面2		
161	692	102	10区 (A2)		第3層	金属製品	小柄?		現長:5.2 現幅:(サビ含)5.2(本体)0.8~1.0 厚:0.2~0.5			鉄
162	693		10区 (A2)	第4面	掘立柱建物1 (257ピット)	土師器	杯A	8世紀末	口径:9.2(1/4) 器高:2.2	外面:摩滅 内面:沈線1、摩滅	7.5YR6/6 橙	
162	694		10区 (A2)	第4面	掘立柱建物1 (257ピット)	土師器	杯A	8世紀末	口径:16(1/6) 器高:2.4	外面:摩滅、指押えナデ? 内面:沈線1、摩滅	7.5YR6/6 橙	
162	695		10区 (A2)	第4面	掘立柱建物1 (257ピット)	土師器	羽釜	8世紀末	口径:27.2(若干のみ) 銜径:31.0(1/8)	外面:摩滅 内面:ハケメ、指押え	7.5YR5/3 にぶい褐	
162	696		10区 (A2)	第4面	掘立柱建物1 (257ピット)	須恵器	杯B	8世紀中頃	高台径:12.0(1/8)	外面:ヘラ切り?	N/4 灰	
162	697		10区 (A2)	第4面	掘立柱建物1 (259ピット)	土師器	製塩土器	8世紀後半		外面:摩滅、指押えナデ 内面:摩滅、指押えナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	
162	698	104	10区 (A2)	第4面	掘立柱建物1 (259ピット)	木製品	柱根		長:38.5+α 幅:13.7 厚:12.7	スギ材 底面に加工痕?		
162	699	104	10区 (A2)	第4面	掘立柱建物1 (260ピット)	木製品	柱根		長:33.3 幅:18.4 厚:16.0	スギ材 底面に加工痕?		
162	700		10区 (A2)	第4面	掘立柱建物1 (261ピット)	土師器	高杯	8世紀中頃	口径:28(1/12)	外面:ヘラケズリ 内面:放射状暗文、連結輪状暗文	5YR6/6 橙	
162	701		10区 (A2)	第4面	掘立柱建物1 (262ピット)	土師器	杯B	8世紀中頃	口径:15~15.6(1/4弱) 高台径:11.0(1/4強) 器高:2.8~2.9	外面:一部ヘラミガキ、底部ナデ、剥離 内面:連丸状暗文、放射状暗文、剥離	7.5YR6/6 橙	
162	702		10区 (A2)	第4面	掘立柱建物1 (264ピット)	土師器	皿C	8世紀中頃	口径:9.4(1/4弱)	外面:口縁部一部スス附着、摩滅 内面:口縁部一部スス附着、指押えナデ	2.5Y6/2 灰黄	
162	703	94	10区 (A2)	第4面	掘立柱建物1 (264ピット)	須恵器	杯B	8世紀末	口径:15.6(2/5) 高台径:10.8(1/2弱) 器高:5.0~5.1	外面:ヘラナデ 内面:ナデ	N6/ 灰	
162	704		10区 (A2)	第4面	掘立柱建物1 (265ピット)	木製品	柱根		長:13.2 幅:8.7 厚:6.6	スギ材 底面に加工痕?		
162	705		10区 (A2)	第4面	掘立柱建物1 (267ピット)	木製品	柱根		長:16.7 幅:7.7 厚:6.0	スギ材		

掲載遺物観察表 (19)

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) ()内は残存率	調整等(ヨコナデ、回転ナデは省略) (砂→は、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
162	706		10区(A2)	第4面	掘立柱建物1(268ピット)	瓦	丸瓦	8~9世紀	広端面幅:2.1 側面幅:1.8	有段式 凸面:ナデ? 凹面:布目痕	2.5Y5/1 黄灰	
162	707		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物2(276ピット)	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:14.0(1/4) 高台径:8.6 器高:3.7	外面:ナデ? 内面:ナデ	N8/ 灰白	
162	708		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物2(279ピット)	須恵器	杯B	8世紀中頃	高台径:12(1/6)	外面:摩滅 内面:摩滅	2.5Y7/2 灰黄	
162	709	94	10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物3(387ピット)	土師器	杯A	8世紀中頃	口径:17.6(1/4強) 器高:3.5	外面:摩滅 内面:摩滅	5YR6/6 橙	
162	710		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物3(387ピット)	土師器	壺	9世紀	口径:12.2(1/4)	図上復元 外面:指押え、全体にスス付着 内面:ヘラナデ?ヘラ痕あり	5YR6/4 にぶい橙	
162	711		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物3(387ピット)	須恵器	壺B?	8世紀中頃	口径:14.0(1/8)	外面:平行タタキ 内面:工具痕あり	N6/ 灰	
162	712	94	10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物3(387ピット)	緑釉陶器	碗	9世紀前半か	底径:9.0(1/6)	外面:ヘラミガキ、ヘラ切り、施釉 内面:ヘラミガキ、圈線1、施釉	7.5Y7/3 浅黄	近江系?
162	713		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物3(387ピット)	瓦	平瓦	8~9世紀	広端面幅:2.4 狭端面幅:1.0	凸面:縄目タタキ 凹面:ナデ、布目痕	N5/ 灰	
162	714		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物4(663ピット)	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:12.0(1/10)	外面:ヘラ切り?	N5/ 灰	
162	715		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物8(273ピット)	土師器	製塩土器	8世紀後半	口径:12.0(1/11)	外面:指押えナデ、スス付着 内面:ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	
162	716		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物8(324ピット)	須恵器	杯A	8世紀中頃~後半	口径:15.0(1/6) 器高:3.7	外面:ヘラ切り?	7.5Y6/1 灰	
162	717		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物8(324ピット)	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃~後半	口径:17.0(1/8)	外面:ナデ?、ヘラナデ? 内面:ナデ	N5/ 灰	
162	718		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物8(581ピット)	土師器	壺	8世紀	口径:19.0(1/11)	外面:摩滅 内面:ハケメ、スス付着	5YR6/4 にぶい橙	
163	719		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物9(330ピット)	須恵器	壺L	8世紀後半	最大腹径:17.8(1/4)		N7/ 灰白	
163	720		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物9(332ピット)	須恵器	杯B	8世紀中頃	高台径:12.0(1/10)		N5/ 灰	
163	721		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物9(527ピット)	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:16.0(1/4弱)		2.5Y8/1 灰白	
163	722		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物9(566ピット)	土師器	皿A	8世紀末	口径:24.0(1/15)	外面:ヘラケズリ 内面:ヘラ記号?、摩滅	5YR5/6 明赤褐	
163	723	105	10区(A2)	第4面	掘立柱建物10(282ピット)	木製品	柱根		長:23.8 幅:8.9 厚:9.3	スギ材 全体に腐食著しい		
163	724	105	10区(A2)	第4面	掘立柱建物10(283ピット)	木製品	柱根		長:35.5 幅:10.1 厚:8.0	スギ材 2分割になっている		
163	725	105	10区(A2)	第4面	掘立柱建物10(284ピット)	木製品	柱根		長:21.3 幅:8.7 厚:4.5	スギ材		
163	726	105	10区(A2)	第4面	掘立柱建物10(425ピット)	木製品	柱根		長:19.9 幅:8.6 厚:4.9	スギ材		
163	727		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物11(706ピット)	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:15.4(1/8) つまみ径:2.8(完) 器高:2.9	外面:ヘラケズリ(砂→) 内面:ナデ	7.5Y6/1 灰	
163	728		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物12(307ピット)	土師器	製塩土器	8~9世紀		外面:指押えナデ、摩滅 内面:摩滅	2.5Y5/1 黄灰	
163	729		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物12(308ピット)	土師器	皿A	8世紀末	口径:20.0(1/7) 器高:2.1	外面:摩滅 内面:摩滅、底面スス?付着	5YR6/6 橙 10YR7/4 にぶい黄橙	
163	730		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物12(308ピット)	須恵器	杯B	8世紀末	口径:15.0(1/10) 高台径:11.0(1/3) 器高:4.7	外面:ヘラ切り? 内面:ナデ	N5/ 灰	
163	731		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物12(308ピット)	須恵器	皿C	8世紀末	口径:16.0(若干のみ) 底径:13.0(1/6) 器高:1.9	外面:ヘラ切り 内面:ナデ	5Y7/1 灰白	
163	732		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物12(308ピット)	須恵器	杯or皿			外面:ヘラ切り? 内面:ナデ、墨書「東」	N7/ 灰白	
163	733		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物12(308ピット)	須恵器	鉢D	8世紀末	口径:29.0(1/5)		N8/ 灰白	
163	734	98	10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物12(308ピット)	瓦	軒平瓦	8世紀後半	瓦当厚:7.8 上外縁厚:0.3	均整唐草文 鞆岡庵寺出土T-60型式と同范 凸面:摩滅、布目痕後板ナデ 凹面:摩滅	N4/ 灰	第140集団 69-198
163	735		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物12(308ピット)	瓦	平瓦	8~9世紀	側面幅:1.2 狭端面幅:1.6	凸面:縄目タタキ後指押え・板ナデ 凹面:布目痕後板ナデ・ナデ	N4/ 灰、7.5Y7/1 灰白	
163	736		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物12(309ピット)	須恵器	杯A	8世紀後半	口径:12.0(1/7) 器高:4.1	外面:ヘラ切り? 内面:ナデ	7.5Y7/1 灰白	
163	737		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物12(309ピット)	須恵器	杯A	9世紀か	口径:12.0(1/7) 底径:7.2(1/3) 器高:3.3	外面:ヘラ切り?	7.5Y6/1 灰	
163	738		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物12(309ピット)	土師器	製塩土器	8世紀		二次焼成で赤色化 外面:摩滅、指押えナデ 内面:摩滅	7.5YR8/3 浅黄橙	
163	739		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物12(309ピット)	瓦	平瓦	8~9世紀	狭端面幅:1.6 側面幅:1.3	凸面:縄目タタキ後ナデ 凹面:布目痕後ナデ	N6/ 灰	
164	740		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物12(370ピット)	瓦	軒平瓦	8世紀後半	上弦幅:26.7 瓦当厚:5.3 額凸面厚:1.4	均整唐草文 平城宮6702G型式を相型とする 凸面:板ナデ、縄目タタキ 凹面:板ナデ、布目痕後一部ナデ	2.5Y7/2 灰黄	第140集団 97-562
164	741		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物12(370ピット)	瓦	平瓦	8~9世紀	広端面幅:1.5	凸面:指押えナデ、縄目タタキ 凹面:板ナデ、布目痕後ナデ	10YR5/2 灰黄褐	
164	742	101	10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物12(370ピット)	石製品	砥石?		現長:12.5 現幅:10.7 現厚:10.8	砂岩、表面に3箇所凹みがあり、擦った跡あり		
164	743		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物12(603ピット)	木製品	柱根		長:14.8 幅:6.5 厚:4.2	コウヤマキ材		
164	744		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物13(302ピット)	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:15.0(1/6)	外面:ヘラ切り?、ヘラナデ 内面:ナデ	N6/ 灰	
164	745		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物13(569ピット)	土師器	製塩土器	8~9世紀	口径:14.0(1/9)	外面:指押えナデ 内面:ナデ	10YR8/3 浅黄橙	

掲載遺物観察表 (20)

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量(cm) ( )内は残存率	調整等(ヨコナデ、回転ナデは省略) (砂へは、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
164	746		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物13(570ピット)	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:12.0(1/7)	外面:ヘラナデか 内面:ナデ	7.5Y6/1 灰	
164	747		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物14(314ピット)	土師器	皿	10世紀前半か	口径:15.0(1/8)	外面:指押えナデ 内面:摩滅	7.5YR7/6 橙	
164	748	94	10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物14(318ピット)	須恵器	壺蓋	8世紀後半	口径:15.6(1/7) つまみ径:2.7(完) 器高:3.8	外面:回転ヘラナデ?、ヘラ切り? 内面:ナデ	N5/ 灰、N7/ 灰白	
164	749		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物14か(318ピット周辺)	土師器	竈			底 外面:指押え	10YR8/3 浅黄橙	
164	750		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物14か(318ピット周辺)	須恵器	壺	8世紀後半	口径:18.0(1/7)		10Y6/1 灰	
164	751		10区(A2)	第4・5面	掘立柱建物19(479ピット)	須恵器	杯A	8世紀	底径:10.0(3/5)	外面:ヘラ切り 内面:ナデ	7.5Y6/1 灰	
165	752	105	10区(A2)	第4面	353井戸	木製品	井戸枠		長:84.2 幅:16.9 厚:3.7	ヒノキ材		北側上
165	753	105	10区(A2)	第4面	353井戸	木製品	井戸枠		長:93.7 幅:16.7 厚:4.8	ヒノキ材		北側中
165	754	105	10区(A2)	第4面	353井戸	木製品	井戸枠		長:100.0 幅:9.4 厚:13.2	ヒノキ材		北側下
165	755	105	10区(A2)	第4面	353井戸	木製品	不明品		長:66.5 幅:19.0 厚:1.15 孔径:0.6	ヒノキ材 周縁部に小孔25残(内18に木釘残)		
166	756	106	10区(A2)	第4面	353井戸	木製品	板状不明品		長:48.8 幅:7.6 厚:1.0	ヒノキ材		
166	757	106	10区(A2)	第4面	353井戸	木製品	木片		長:44.5 幅:1.6 厚:1.1	ヒノキ材		
166	758	106	10区(A2)	第4面	353井戸	木製品	木片		長:58.8 幅:2.8 厚:1.4	ヒノキ材		
166	759	106	10区(A2)	第4面	353井戸	木製品	井戸枠		長:84.2 幅:17.7 厚:4.8	ヒノキ材		東側上
166	760	106	10区(A2)	第4面	353井戸	木製品	井戸枠		長:85.9 幅:20.2 厚:4.3	ヒノキ材		東側中
166	761	106	10区(A2)	第4面	353井戸	木製品	井戸枠		長:95.3 幅:9.8 厚:13.2	ヒノキ材		東側下
167	762	107	10区(A2)	第4面	353井戸	木製品	井戸枠		長:91.8 幅:15.2 厚:2.0	ヒノキ材		南側上
167	763	107	10区(A2)	第4面	353井戸	木製品	井戸枠		長:91.5 幅:22.0 厚:3.0	ヒノキ材		南側中
167	764	107	10区(A2)	第4面	353井戸	木製品	板状不明品		長:55.0 幅:7.6 厚:0.9	ヒノキ材		
167	765	107	10区(A2)	第4面	353井戸	木製品	井戸枠		長:100.1 幅:10.3 厚:11.4	ヒノキ材 凹部に重なり痕あり		南側下
168	766	108	10区(A2)	第4面	353井戸	木製品	井戸枠		長:80.7 幅:13.0 厚:2.8	ヒノキ材		西側上
168	767	108	10区(A2)	第4面	353井戸	木製品	井戸枠		長:87.5 幅:18.9 厚:4.2	ヒノキ材		西側中
168	768	108	10区(A2)	第4面	353井戸	木製品	井戸枠		長:94.4 幅:9.2 厚:11.5	ヒノキ材		西側下
168	769	108	10区(A2)	第4面	353井戸	木製品	板状不明品		長:53.2 幅:7.1 厚:1.1	ヒノキ材		
168	770	108	10区(A2)	第4面	353井戸	木製品	不明品		長:39.0 幅:21.0 厚:0.8	ヒノキ材 底板か		
169	771		10区(A2)	第4面	353井戸	土師器	皿A	8世紀後半	口径:18.0(1/8)	外面:剥離 内面:剥離	7.5YR6/4 にぶい橙	
169	772		10区(A2)	第4面	353井戸	須恵器	杯B蓋	8世紀末	口径:15.0(1/6)	外面:ナデ、ヘラナデ? 内面:ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	
169	773		10区(A2)	第4面	353井戸	須恵器	皿	8世紀後半	口径:23.0(1/5) 高台径:18.6(1/5) 器高:2.9~3.0	外面:底部ヘラナデ 内面:ナデ	5Y7/1 灰白	
169	774		10区(A2)	第4面	353井戸	須恵器	鉢A	8世紀後半		外面:ヘラミガキ	N6/、N5/ 灰	
169	775	95	10区(A2)	第4面	353井戸	須恵器	円面硯	8世紀後半か	口径:15.0(1/8)	外面:表面磨耗(使用痕か)、透孔あり	5Y6/1 灰	
169	776		10区(A2)	第4面	353井戸	須恵器	壺	9世紀前半	底径:5.6(3/4強)	外面:糸切り	5Y5/1 灰	
169	777		10区(A2)	第4面	353井戸	灰釉陶器	椀	9世紀後半か	高台径:8.2(1/4)	外面:底部溶着あり、施釉 内面:施釉	2.5Y7/1 灰白	
169	778	96	10区(A2)	第4面	353井戸	土師器	製塩土器	8~9世紀		外面:摩滅 内面:摩滅	10YR7/3 にぶい黄橙、5Y5/1 灰	
169	779	96	10区(A2)	第4面	353井戸	土師器	製塩土器	8世紀		外面:摩滅 内面:布目痕	10YR6/2 灰黄褐	
169	780	98	10区(A2)	第4面	353井戸	瓦	軒平瓦	8世紀後半	外縁厚:0.5	均整唐草文 蕨岡鹿寺出土T-60型と同范 凹面:板ナデ、布目痕後ナデ、スス付着	5Y6/2 灰オリーブ	
169	781		10区(A2)	第4面	353井戸	瓦	丸瓦	8~9世紀	側面幅:1.5 狭端面幅:1.2	無段式 凸面:縄目タタキ後ナデ 凹面:布目痕	2.5Y7/3 浅黄	
169	782		10区(A2)	第4面	353井戸	瓦	平瓦	8~9世紀	側面幅:2.2~2.7	凸面:板ナデ 凹面:布目痕、スス付着	2.5Y7/3 浅黄、N4/ 灰	
169	783		10区(A2)	第4面	357井戸	土師器	杯A	8世紀後半	口径:15.8(1/4弱) 器高:3.9	外面:指押えナデ、ヘラケズリ 内面:ナデ	5YR6/6 橙	
169	784	96	10区(A2)	第4面	357井戸	土師器	製塩土器	8世紀後半	口径:5~6.0(1/4)	外面:指押えナデ 内面:指押えナデ	10YR6/6 明黄褐	
169	785	96	10区(A2)	第4面	357井戸	土師器	製塩土器	8世紀後半		外面:摩滅 内面:ナデ	2.5Y7/3 浅黄、2.5Y8/1 灰白	

掲載遺物観察表 (21)

挿図 番号	図番 号	図版 番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) ()内は残存率	調整等(ヨコナデ、回転ナデは省略) (砂→は、ヘラケズリで砂が動いた 方向を示す)	外面色調	備考
169	786	96	10区 (A2)	第4面	357井戸	土師器	製塩土器	8世紀後半		外面:指押えナデ 内面:布目痕	7.5YR7/4 にぶ い橙	
169	787		10区 (A2)	第5面	630井戸	土師器	皿A	8世紀後半	口径:19.0(1/9)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR7/3 にぶ い黄橙	
169	788		10区 (A2)	第5面	630井戸	土師器	壺	8世紀後半		外面:ハケメ、指ナデ 内面:指押えナデ	7.5YR6/6 橙	
169	789		10区 (A2)	第5面	630井戸	須恵器	杯A	8世紀後半	口径:13.0(1/4) 器高:4.0	外面:ヘラ切り	2.5Y7/3 浅黄	
169	790	96	10区 (A2)	第5面	630井戸	須恵器	杯A	8世紀後半	口径:13.8(2/5) 器高:3.9	外面:ヘラ切り? 内面:ナデ?	5Y8/1 灰白	
169	791		10区 (A2)	第5面	630井戸	須恵器	盤	8世紀後半	口径:40.0(1/11)		5Y7/1 灰白	
170	792	94	10区 (A2)	第4面	297ピット	土師器	碗A	8世紀末	口径:11.8(2/3) 器高:4.2	外面:指押え後ヘラケズリ 内面:摩滅	5YR5/6 明赤褐	
170	793	94	10区 (A2)	第4面	297ピット	土師器	皿A	8世紀末	口径:16~16.5(一部欠) 器 高:2.4	外面:ヘラケズリ 内面:摩滅	10YR7/3 にぶ い黄橙	
170	794		10区 (A2)	第4面	297ピット	土師器	皿A	8世紀末	口径:17.0(1/6)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR7/4 にぶ い黄橙	
170	795		10区 (A2)	第4面	297ピット	土師器	高杯	8世紀後半	口径:16.6(1/3)	粘土紐巻上げ成形 外面:分割ヘラミガ キ 内面:放射状暗文	7.5YR6/6 橙	
170	796		10区 (A2)	第4面	297ピット	土師器	壺	8世紀後半か	口径:15.6(1/3)	外面:摩滅、一部ハケメ、口縁部スス付着 内面:摩滅	10YR7/3 にぶ い黄橙	
170	797		10区 (A2)	第4面	297ピット	黒色土 器A類	杯?	9世紀前半	口径:12.0(1/8)	外面:一部ヘラミガキ 内面:横方向ヘラ ミガキ後暗文	2.5Y5/2 暗灰黄	
170	798		10区 (A2)	第4面	297ピット	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:16.0(1/5) つまみ径: 6.0(1/5) 器高:3.7	外面:ナデ 内面:ナデ	N6/ 灰	
170	799	94	10区 (A2)	第4面	299ピット	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:17.4(7/8) つまみ径: 3.0(完) 器高:3.0	外面:ナデ、回転ヘラナデ 内面:ナデ	N5/ 灰	口縁部若干 のゆがみ有 り
170	800		10区 (A2)	第4面	300ピット	須恵器	杯B	8世紀後半	高台径:10.0(1/5)	外面:ヘラ切り? 内面:ナデ	N5/ 灰	
170	801		10区 (A2)	第4面	325ピット	瓦	平瓦	8~9世紀	広端面幅:2.1 側面幅:1.8	凸面:指押えナデ、縄目タタキ 凹面:摩 滅	2.5Y8/1 灰白	
170	802		10区 (A2)	第4面	355ピット	土師器	皿A?	8世紀末	口径:19.0(1/9)	外面:ヨコナデ後一部ヘラミガキ、指押 えナデ	10YR6/2 灰黄褐	
170	803	94	10区 (A2)	第4面	355ピット	須恵器	杯C	8世紀後半	口径:17.5(1/4) 器高:3.3	外面:摩滅、ヘラケズリ 内面:摩滅	10YR8/1 灰白	
170	804		10区 (A2)	第4面	355ピット	須恵器	壺蓋	8世紀末	口径:15.0(1/6)	外面:ナデ? 内面:ナデ	2.5Y7/1 灰白	
170	805		10区 (A2)	第4面	355ピット	土師器	製塩土器	8世紀	口径:13.0(1/6)	外面:指押えナデ、摩滅 内面:指押えナ デ、摩滅	5YR7/6 橙	
170	806		10区 (A2)	第4面	356ピット	土師器	杯A	8世紀末	口径:17.0(1/4弱)	外面:指押えナデ	7.5YR6/4 にぶ い橙	
170	807		10区 (A2)	第4面	356ピット	土師器	杯Cか	8世紀末	口径:17.0(1/9)	外面:指押えナデ、摩滅 内面:沈線1、ナ デ、摩滅	5YR6/6 橙	
170	808		10区 (A2)	第4面	356ピット	土師器	碗C	8世紀末	口径:13.0(1/3) 器高:3.3	外面:摩滅 内面:沈線1、摩滅	10YR7/2 にぶ い黄橙	0.8cmの チャート含
170	809	94	10区 (A2)	第4面	356ピット	土師器	碗C	8世紀末	口径:13.0(1/2弱) 器高:3.5	外面:摩滅(指押えナデか) 内面:摩滅	2.5Y7/3 浅黄	胎土粗い
170	810		10区 (A2)	第4面	356ピット	土師器	皿A	8世紀末	口径:16.0(1/5弱)	外面:ヘラケズリ(摩滅) 内面:摩滅	10YR7/3 にぶ い黄橙	
170	811		10区 (A2)	第4面	356ピット	土師器	皿A	8世紀末	口径:16.0(2/5) 器高:2.7	外面:摩滅 内面:摩滅(ナデ?)	7.5YR7/4 にぶ い橙	
170	812	94	10区 (A2)	第4面	356ピット	土師器	皿A	8世紀末	口径:17.4(1/2) 器高:2.3	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR7/3 にぶ い黄橙	
170	813		10区 (A2)	第4面	356ピット	土師器	皿A	8世紀末	口径:20.3(1/4)	外面:摩滅、ナデ?、指押えナデ? 内面: 摩滅	7.5YR7/6 橙	
170	814	94	10区 (A2)	第4面	356ピット	須恵器	杯A	8世紀末	口径:13.1(1/2弱) 器高:3.3	外面:ヘラ切り 内面:ナデ	5Y8/1 灰白	焼成甘い
170	815		10区 (A2)	第4面	356ピット	須恵器	杯A	8世紀末	口径:13.4(1/2弱) 器高:3.8	外面:ナデ、ヘラ切り痕 内面:ナデ	5Y7/1 灰白	
170	816	94	10区 (A2)	第4面	356ピット	須恵器	杯A	8世紀末	口径:14.1(1/3) 器高:4.2	外面:ヘラ切り? 底部に粘土の柔らか い時に置かれた痕跡あり 内面:ナデ	2.5Y8/1 灰白	焼成甘い
170	817	95	10区 (A2)	第4面	356ピット	須恵器	杯B	8世紀末	口径:14.7(4/5) 高台径: 10.2(完) 器高:5.6	外面:ヘラ切り、底部にヘラ記号あり	N6/ 灰	高台部ゆが み有り
170	818		10区 (A2)	第4面	356ピット	須恵器	皿A	8世紀末	口径:17.4(若干のみ) 底径: 13.8(1/3) 器高:3.1	外面:ヘラ切り? 内面:ナデ	5Y8/1 灰白	
170	819		10区 (A2)	第4面	356ピット	土師器	製塩土器	8世紀後半か		外面:指押えナデ 内面:指押えナデ	2.5Y7/2 灰黄	
170	820		10区 (A2)	第4面	356ピット	土師器	製塩土器	8世紀後半か		外面:指押えナデ 内面:細かい布目痕	7.5YR7/3 にぶ い橙	
171	821		10区 (A2)	第4面	391ピット	灰釉 陶器	碗	9世紀後半か	口径:8.2(1/3)	外面:ヘラケズリ、高台端部凹み(ヘラ痕 ?)あり 内面:ナデ?	5Y7/1 灰白	
171	822		10区 (A2)	第4面	392ピット	瓦	丸瓦	8~9世紀	側面幅:1.3	凸面:縄目タタキ後ナデ 凹面:布面痕	N5/ 灰、7.5Y8/1 灰白	
171	823		10区 (A2)	第4面	403ピット	土師器	碗C?	8世紀中頃	口径:14.0(1/10)	外面:摩滅 内面:摩滅	5YR5/6 明赤褐	
171	824		10区 (A2)	第4面	403ピット	須恵器	杯A	8世紀前半	口径:18.0(1/8)	外面:ヘラケズリ(砂:←)	5Y8/1 灰白	
171	825		10区 (A2)	第4面	403ピット	須恵器	杯C	8世紀前半	口径:17.0(1/9)	外面:ヘラケズリ(砂:←)	5Y8/1 灰白、 5Y6/1 灰	
171	826		10区 (A2)	第4面	434・435 ピット	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:16.2(1/4) つまみ径: 3.2(完) 器高:3.2	外面:回転ヘラナデ?、板ナデ 内面:ナ デ	N7/ 灰白	



掲載遺物観察表 (22)

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) ()内は残存率	調整等(ヨコナデ、回転ナデは省略)(砂→は、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
171	827		10区(A2)	第4面	434-435ビット	須恵器	壺H	8世紀後半	口径:11.0(1/8)	内面:口縁部に凹みあり、ナデ	N6/ 灰	
171	828	95	10区(A2)	第4面	445ビット	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:15.5(一部欠) つまみ径:2.1(完) 器高:2.3	外面:回転ヘラ切り?	N6/ 灰	口縁部ゆがみ有り
171	829		10区(A2)	第4面	445ビット	瓦	丸瓦	8~9世紀	側面幅:1.4	無段式か 凸面:縄目タタキ 凹面:布目痕	7.5YR7/4 にぶい橙, 2.5Y5/1 黄灰	
171	830		10区(A2)	第4面	445ビット	瓦	平瓦	8~9世紀		凸面:縄目タタキ 凹面:布目痕	10YR6/2 灰黄褐	
171	831	99	10区(A2)	第4面	445ビット	瓦	平瓦	8~9世紀	側面幅:1.5 胴部幅:23.6以上	凸面:縄目タタキ後一部板ナデ、指押え 凹面:布目痕後一部板ナデ、ヘラナデ	10Y7/1 灰白	
172	832		10区(A2)	第5面	470ビット	須恵器	杯B	8世紀中頃	高台径:13.0(1/7)	外面:ヘラ切り? 内面:ナデ	5Y4/1 灰	
172	833		10区(A2)	第5面	471ビット	須恵器	杯B蓋	8世紀前半	口径:17.0(1/6)	外面:ヘラナデ?	N4/ 灰	
172	834		10区(A2)	第5面	486ビット	須恵器	杯A	8世紀前半	口径:20.6(若干のみ) 高台径:15.0(1/8) 器高:7.8	内面:ナデ	2.5Y4/1 黄灰	
172	835		10区(A2)	第5面	553ビット	須恵器	壺L	8世紀前半	口径:10.6(1/5)	外面:自然釉付着 内面:自然釉付着	N6/ 灰, N3/ 暗灰	
172	836		10区(A2)	第5面	559ビット	須恵器	杯B	8世紀後半	高台径:10.0(1/5)	内面:ナデ	N7/ 灰白	
172	837		10区(A2)	第5面	564ビット	土師器	壺C	8世紀中頃	口径:27.0(1/8)	外面:ハケメ?(摩滅のため不明瞭) 内面:ハケメ	2.5Y8/2 灰白	
172	838		10区(A2)	第5面	564ビット	土師器	壺C	8世紀	頸部径:25.0(1/10)	外面:ハケメ 内面:板ナデ、ハケメ、指押え	10YR8/2 灰白, 7.5YR7/6 橙	
172	839		10区(A2)	第5面	564ビット	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:14.0(1/9)	外面:ヘラ切り? 内面:ナデ	N6/ 灰	
172	840	102	10区(A2)	第5面	574ビット	金属製品	不明鉄製品		現長:(本体)2.1 現幅:(本体)1.6 厚:(サビ含)1.0			
172	841	95	10区(A2)	第5面	617ビット	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:16.2(2/3) 高台径:11.4(完) 器高:4.6	外面:底部回転ヘラケズリ(砂:→)、ヘラ痕あり 内面:ナデ	N6/ 灰	
172	842		10区(A2)	第5面	617ビット	須恵器	壺Q	8世紀中頃	高台径:9.8(端部は殆ど欠) 稜径:18.0(1/2)	外面:沈線1、ヘラナデ?、ナデ、自然釉付着 内面:黒い付着物あり	N7/ 灰白	
172	843	95	10区(A2)	第5面	617ビット	須恵器	壺C?	8世紀	口径:27.0(1/4)	外面:ヘラケズリ 内面:把手を付けた時の指押え	5Y7/1 灰白, 5Y6/1 灰	
172	844		10区(A2)	第5面	619ビット	土師器	高杯	8世紀後半	脚柱部径:5.1(3/4)	外面:ヘラケズリ(9面)、縦ハケメ後ヨコナデ 内面:摩滅、脚部内面はナデ、ハケメ	5YR6/6 橙	
172	845		10区(A2)	第5面	632ビット	土師器	製塩土器	8~9世紀	口径:若干のみ	外面:指押えナデ 内面:摩滅	10YR7/3 にぶい黄橙	
172	846	95	10区(A2)	第5面	633ビット	須恵器	杯A	8世紀後半	口径:13.0(3/4) 器高:3.4	外面:ナデ、ヘラ切り	5Y8/1 灰白	
172	847		10区(A2)	第5面	973ビット	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:18.0(1/10)		5P5/1 紫灰	
172	848		10区(A2)	第4面	289土坑	土師器	杯C	8世紀中頃	口径:14.0(1/4弱)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR7/3 にぶい黄橙	
172	849		10区(A2)	第4面	289土坑	土師器	椀C	8世紀中頃	口径:12.0(1/7)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR7/3 にぶい黄橙	
172	850		10区(A2)	第4面	289土坑	土師器	壺C	8世紀中頃	口径:28.0(1/11)	外面:ハケメ、口縁部二次焼成のため赤色化 内面:摩滅	10YR8/4 浅黄橙	
172	851		10区(A2)	第4面	289土坑	土師器	壺B	8世紀中頃		外面:ハケメ、指押えナデ、ナデ 内面:指押えナデ	7.5YR 7/6 橙	
172	852		10区(A2)	第4面	289土坑	土師器	羽釜	8世紀中頃	体部径:21.0(1/7)	外面:ハケメ、摩滅、一部スス付着 内面:摩滅、一部スス付着	10YR7/4 にぶい黄橙	
172	853		10区(A2)	第4面	289土坑	須恵器	杯A	8世紀中頃	口径:12.0(1/4) 器高:3.9	外面:ナデ、ヘラ切り	N6/ 灰	
172	854	94	10区(A2)	第4面	289土坑	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:16.0(1/2弱) 高台径:11.6(1/2弱) 器高:4.3~4.6	外面:ヘラ切り 内面:ナデ	5Y6/1 灰	
172	855		10区(A2)	第4面	289土坑	須恵器	壺	8世紀中頃	頸部径:21.0(1/6)	外面:波状文、ナデ、平行タタキ、自然釉付着 内面:同心円文当て具痕	N6/ 灰, 2.5GY6/1 オリーブ灰	
173	856		10区(A2)	第4面	352土坑	須恵器	壺Q	8世紀後半	稜径:28.0(1/3)	外面:自然釉付着	7.5Y7/1 灰白	
173	857		10区(A2)	第4面	354土坑	須恵器	杯A	8世紀中頃	口径:16.0(1/8)	外面:ナデ	N5/ 灰	
173	858		10区(A2)	第4面	354土坑	須恵器	壺	8世紀後半か	体部下部径:13.0(1/3弱)	外面:平行タタキ後ナデ 内面:指押えナデ	N6/ 灰	
173	859		10区(A2)	第4面	431土坑	須恵器	鉢A	8世紀前半	口径:23.0(1/7)	外面:部分的にヘラミガキ、ヘラケズリ後(砂:→)一部ヘラミガキ 内面:ハケメ状ナデ	7.5Y8/1 灰白, N5/ 灰	
173	860	95	10区(A2)	第5面	504土坑	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:17.6(3/4) つまみ径:3.0 器高:3.4	内面:ナデ	7.5Y6/1 灰	口縁部ゆがみ有り
173	861	95	10区(A2)	第5面	504土坑	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:14.6(1/2弱) 高台径:10.4(1/2弱) 器高:3.9	外面:ヘラ切り、ヘラ記号 内面:ナデ	N5/ 灰	
173	862		10区(A2)	第5面	504土坑	須恵器	鉢B	8世紀前半	口径:26.2(若干) 口縁直下径:25.0(1/9)	片口 外面:回転ナデ後ナデ 内面:回転ナデ後ナデ	N6/ 灰	
173	863		10区(A2)	第5面	685土坑	土師器	杯C	8世紀中頃	口径:17.0(1/11) 器高:3.1	外面:ナデ 内面:摩滅	10YR8/3 浅黄橙	
173	864		10区(A2)	第4面	329溝	土師器	杯A	8世紀中頃	口径:19.0(1/9) 器高:2.8	外面:摩滅 内面:放射状暗文	5YR6/4 にぶい橙	
173	865		10区(A2)	第4面	329溝	土師器	杯A	8世紀中頃	口径:20.1(1/4弱) 器高:4.0	外面:指押えナデ後ヘラケズリ 内面:摩滅(暗文あるが不明瞭)	5YR7/6 橙	
173	866		10区(A2)	第4面	329溝	土師器	皿A	8世紀中頃	口径:15.0(1/7)	外面:ナデ 内面:放射状暗文	10YR7/3 にぶい黄橙	

掲載遺物観察表 (23)

挿図 番号	図番 号	図版 番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) ()内は残存率	調整等(ヨコナデ、回転ナデは省略) (砂→は、ヘラケズリで砂が動いた 方向を示す)	外面色調	備考
173	867	96	10区 (A2)	第4面	329溝	土師器	皿A	8世紀中頃	口径:22.6(1/2弱) 器高:2.8	外面:沈線1、放射状暗文 内面:指押えナデ	10YR7/2 にぶい 黄橙	
173	868		10区 (A2)	第4面	329溝	土師器	皿B	8世紀中頃	口径:30.8(若干のみ) 高台 径:26.0(1/8) 器高:2.6	外面:ヘラケズリ 内面:放射状暗文	5YR6/4 にぶい 橙	
173	869	96	10区 (A2)	第4面	329溝	土師器	高杯	8世紀	口径:11.05(5/6)	外面:摩滅、脚部面取り(8面) 内面:摩 滅	10YR7/4 にぶい 黄橙	
173	870		10区 (A2)	第4面	329溝	土師器	鍋B	8世紀	口径:25.0(1/10)	外面:平行タタキ、ナデ後一部ハケメ 内面:同心円文当て具痕後ハケメ	2.5Y8/2 灰白	
173	871		10区 (A2)	第4面	329溝	土師器	壺C	8世紀中頃	口径:29.0(1/6)	外面:ハケメ、スス薄く付着 内面:ハケ メ、ナデ	2.5Y7/2 灰黄、 10YR5/1 褐灰	
173	872		10区 (A2)	第4面	329溝	土師器	竈			外面:板ナデ、底部に一部スス付着 内 面:ハケメ、ナデ	7.5YR6/4 にぶ い橙	
173	873	96	10区 (A2)	第4面	329溝	須恵器	壺蓋	6世紀末～7 世紀初頭	口径:7.2(1/4強) つまみ径: 2.4 器高:3.6	外面:回転ヘラケズリ、一部自然釉付着 、溶着あり 内面:ナデ	5Y6/1 灰白	
173	874		10区 (A2)	第4面	329溝	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:16.0(1/4弱)	外面:ヘラ切り? 内面:ナデ	7.5Y6/1 灰	
173	875		10区 (A2)	第4面	329溝	須恵器	杯B	8世紀後半	高台径:11.6(1/2弱)	外面:ヘラ切り 内面:ナデ	N5/ 灰	
173	876		10区 (A2)	第4面	329溝	須恵器	杯B	8世紀末	口径:12.0(若干のみ) 高台 径:8.8(1/7) 器高:3.8	内面:ナデ	N6/ 灰	
173	877		10区 (A2)	第4面	329溝	須恵器	壺B	8世紀後半	口径:22.0(1/9)	外面:櫛目?	N4/ 灰	
173	878	102	10区 (A2)	第4面	329溝	金属 製品	不明鉄製品		現長:(本体)6.3 現幅:(本 体)0.6 厚:0.6×0.6			
173	879	102	10区 (A2)	第4面	329溝	金属 製品	不明鉄製品		現長:(本体)8.2 現幅:(本 体)1.9~2.2 厚:(サビ含)3.3			
174	880		10区 (A2)	第5面	457溝	須恵器	壺C?	8世紀中頃	底径:6.0(1/5)	外面:ヘラケズリ 内面:ナデ	N5/ 灰	
174	881		10区 (A2)	第5面	464溝	土師器	杯B	8世紀後半	高台径:16.0(1/8)	外面:摩滅(ナデ?) 内面:摩滅	5YR6/6 橙	
174	882		10区 (A2)	第5面	482溝	土師器	壺C	8世紀中頃	口径:26.0(1/8)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR7/4 にぶ い橙	
174	883		10区 (A2)	第5面	588溝	土師器	瓶	8世紀後半か	口径:24.0(1/13)	外面:ハケメ 内面:ハケメ	5YR8/1 灰白	
174	884		10区 (A2)	第5面	600溝	土師器	高杯	8世紀後半	口径:26.0(1/11)	外面:摩滅 内面:摩滅	5YR5/4 にぶい 赤褐	
174	885		10区 (A2)	第5面	600溝	土師器	壺	8世紀後半か	口径:18.0(1/9)	外面:ハケメ 内面:摩滅	10YR7/3 にぶ い黄橙	
174	886		10区 (A2)	第5面	600溝	土師器	竈		口径:24.0(1/9)	内面:スス付着	7.5YR6/4 にぶ い橙	
174	887		10区 (A2)	第5面	600溝	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:16.3(1/8) つまみ径: 2.9(完) 器高:1.9	内面:摩滅	5Y7/1 灰白	
174	888		10区 (A2)	第5面	600溝	須恵器	壺	8世紀中頃	底径:10.1(1/3)	外面:ナデ、ヘラケズリ?、ナデ 内面: ナデ	N7/ 灰白	
174	889	95	10区 (A2)	第5面	538落ち込み	土師器	壺Aか 小型壺	8世紀中頃	口径:若干のみ 最大体部径: 11.4(1/4)	外面:指押えナデ一部板ナデ?、把手痕 、スス付着 内面:ナデ	5YR7/4 にぶい 橙、10YR7/3 に ぶい黄橙	
174	890		10区 (A2)	第5面	538落ち込み	土師器	壺	8世紀後半か	口径:16.0(1/10) 体部下 部径:15.0(1/6)	外面:タタキ?後ハケメ、薄くスス付着 内面:指押えナデ、板ナデ	7.5YR6/4 にぶ い橙	
172	891		10区 (A2)	第5面	538落ち込み	須恵器	鉢	8世紀中頃	口径:18.0(1/12) 高台径: 10.0(1/6) 器高:8.0		N8/ 灰白	
164	892		10区 (A2)	第5面	538落ち込み	須恵器	壺A蓋	8世紀中頃	稜径:15.0(1/8) つまみ径: 2.4	外面:自然釉付着	N7/ 灰白	
163	893		10区 (A2)	第5面	538落ち込み	須恵器	壺A蓋	8世紀中頃	口径:14.6(1/4弱)	外面:ヘラナデ? 内面:ナデ	N5/ 灰	
174	894		10区 (A2)	第4面	298土器群	土師器	杯B蓋	8世紀後半	つまみ径:2.2(完)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR8/4 浅黄 橙	
174	895	96	10区 (A2)	第4面	298土器群	土師器	高杯	8世紀後半	脚部部径:13.3(1/2)	粘土紐巻上げ成形 外面:脚部面取り(9 面)、摩滅 内面:摩滅	7.5YR7/4 にぶ い橙	
174	896	96	10区 (A2)	第4面	298土器群	土師器	鉢B	8世紀後半	口径:18.1(3/4) 器高:5.7	外面:指押え後ヨコナデ、指押え後ヘラ ケズリ 内面:沈線1、ナデ	10YR7/4 にぶ い黄橙	
174	897		10区 (A2)	第4面	298土器群	土師器	壺C	8世紀後半	口径:25.2(1/10)	外面:ハケメ 内面:摩滅	7.5YR6/4 にぶ い橙	
174	898		10区 (A2)	第4面	351土器群	土師器	壺C	8世紀後半	口径:30.0(1/8)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR7/4 にぶ い橙	
174	899	96	10区 (A2)	第4面	351土器群	須恵器	壺C	8世紀後半	口径:28.0(1/3) 高台径: 20.0(1/3) 器高:29.0	外面:平行タタキ、底部ナデ 内面:同心 円文当て具痕?、指押えナデ	5YR5/4 にぶい赤 褐、7.5YR6/6 橙、 2.5Y7/1 灰白	
174	900		10区 (A2)	第4面	446土器群	土師器	製塩土器	8世紀	体部径:16.0(1/5)	外面:指押えナデ 内面:指押え後板ナ デ?	5YR7/6 橙、10YR7/4 にぶい黄橙	
174	901		10区 (A2)	第4面	447土器群	須恵器	杯B	8世紀末	口径:14.4(1/4) 高台径: 11.0(1/2弱) 器高:4.0	外面:ヘラ切り?	N6/ 灰	
175	902		10区 (A2)	第4層		土師器	杯A	8世紀前半	口径:14.6(若干のみ) 底径: 12.0(1/4) 器高:2.0	外面:指押え後一部ヘラケズリ 内面: 放射状暗文、連結輪状暗文	7.5YR6/4 にぶ い橙	
175	903		10区 (A2)	第4層		土師器	杯A	8世紀中頃	口径:15.0(1/7) 器高:2.9	外面:摩滅 内面:摩滅	5YR7/6 橙	
175	904		10区 (A2)	第4層		土師器	杯A	8世紀後半	口径:18.0(1/7)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR8/3 浅黄 橙	
175	905		10区 (A2)	第4層		土師器	皿A	8世紀後半	口径:18.1(1/8) 器高:2.4	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR6/3 にぶ い褐	
175	906		10区 (A2)	第4層		土師器	皿C?	8世紀末	口径:13.0(1/10) 器高:2.3	外面:指押えナデ、摩滅 内面:摩滅	7.5YR6/4 にぶ い橙	
175	907		10区 (A2)	第4層		土師器	杯B蓋	8世紀後半	口径:20.6(若干のみ)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR7/6 橙	
175	908		10区 (A2)	第4層		土師器	高杯	8世紀後半	脚部部径:11.0(1/10)	外面:脚部面取り(9面) 内面:連結輪 状暗文、脚部内面は絞り目	5YR6/6 橙	
175	909		10区 (A2)	第4層		土師器	壺	8世紀中頃	口径:11.6(1/4)	外面:ハケメ 内面:摩滅、口縁部スス付 着	10YR4/1 褐灰	

掲載遺物観察表 (24)

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) ()内は残存率	調整等(ヨコナデ、回転ナデは省略) (砂→は、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
175	910		10区 (A2)		第4層	土師器	壺A	8世紀中頃	口径:30.0(1/7)	外面:ハケメ 内面:ハケメ、板ナデ?	10YR7/3 にぶい 黄橙	
175	911		10区 (A2)		第4層	土師器	壺C	8世紀中頃	口径:30.0(1/11)	外面:ハケメ 内面:ハケメ、指押え後板 ナデか	7.5YR7/4 にぶい 橙	
175	912		10区 (A2)		第4層	土師器	甔?	8世紀か	口径:14.0(若干のみ)	外面:ハケメ 内面:板ナデ、ナデ	10YR7/3 にぶい 黄橙	
175	913		10区 (A2)		第4層	須恵器	杯A	8世紀中頃	口径:12.2(1/2) 器高:3.3	外面:ヘラ切り 内面:ナデ	N6/ 灰	
175	914		10区 (A2)		第4層	須恵器	杯A	8世紀中頃	口径:13.3(1/2弱) 器高:3.5	外面:ヘラ切り?	2.5Y8/1 灰白	
175	915		10区 (A2)		第4層	須恵器	杯A	8世紀末	口径:10.0(1/7) 器高:3.6	外面:底部未調整	N6/ 灰	ゆがみ有り
175	916		10区 (A2)		第4層	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:14.9(1/4強) つまみ径: 3.0(完) 器高:3.9	外面:一部自然釉付着 内面:ナデ	N7/ 灰白	ゆがみ有り
175	917		10区 (A2)		第4層	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:16.0(1/8)	内面:ナデ	N6/ 灰	
175	918		10区 (A2)		第4層	須恵器	杯B蓋	8世紀末	口径:18.0(1/7)	外面:ナデ 内面:ナデ	N5/ 灰	
175	919		10区 (A2)		第4層	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:15.3(若干のみ) 高台 径:11.4(1/3) 器高:4.3	外面:ヘラ切り? 内面:ナデ	5Y6/1 灰	
175	920		10区 (A2)		第4層	須恵器	杯B	8世紀中頃	高台径:11.0(1/6)	外面:ナデ 内面:ナデ	2.5Y6/1黄灰	
175	921		10区 (A2)		第4層	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:17.8(若干のみ) 高台 径:13.0(1/3) 器高:4.9	外面:摩滅 内面:摩滅	5Y8/1 灰白	
175	922		10区 (A2)		第4層	須恵器	杯B	8世紀末	口径:13.0(1/7) 高台径: 9.9(1/4強) 器高:3.8	外面:ナデ 高台楕円形か 内面:ナデ	N6/ 灰	
175	923		10区 (A2)		第4層	須恵器	杯C	8世紀後半	口径:19.0(1/12)		5Y7/1 灰白	
175	924		10区 (A2)		第4層	須恵器	杯?	8世紀後半か	口径:9.0(1/7)	外面:ナデ	5Y7/1 灰白	
175	925		10区 (A2)		第4層	須恵器	杯?	8世紀後半か	口径:9.6(若干のみ) 底径: 7.6(1/4) 器高:1.7	外面:ヘラ切り?	5Y7/1 灰白	
175	926		10区 (A2)		第4層	須恵器	皿C	8世紀後半	口径:23.0(1/9) 器高:2.6	外面:摩滅 内面:摩滅	N8/ 灰白	
175	927		10区 (A2)		第4層	須恵器	高杯	8世紀後半	底径:9.6(1/5)		N5/ 灰	
175	928		10区 (A2)		第4層	須恵器	壺C	8世紀中頃	口径:9.4(1/14) 稜径: 11.0(1/10)		10YR6/1 褐灰	
175	929		10区 (A2)		第4層	須恵器	壺C	8世紀中頃	最大腹径:10.0(1/6)	外面:灰かぶり	N8/ 灰白, N4/ 灰	
175	930		10区 (A2)		第4層	須恵器	壺A	8世紀中頃	頸部径:14.0(1/11)	外面:回転ヘラケズリ(砂:→)、自然釉一 部付着	N6/ 灰	
175	931		10区 (A2)		第4層	須恵器	壺Q	8世紀後半	稜径:24.8(1/6)	外面:回転ヘラケズリ、自然釉付着	2.5Y7/1 灰白	
175	932		10区 (A2)		第4層	須恵器	平瓶	8世紀後半		外面:ナデ、ヘラケズリ 内面:ヘラケズ リ	N6/ 灰	
175	933		10区 (A2)		第4層	須恵器	壺	8世紀後半か	口径:24.0(1/6)	外面:平行タタキ 内面:同心円文当て具 痕	N5/ 灰	
175	934		10区 (A2)		第4層	須恵器	壺	8世紀か	口径:26.0(1/7)		N7/灰白	
175	935	93	10区 (A2)		第4層	土製品	転用円板		径:3.1	外面:摩滅 内面:ハケメ	10YR7/2 にぶい 黄橙	
175	936		10区 (A2)		第4層	瓦	丸瓦	8~9世紀	側面幅:2.0	凸面:ナデ 凹面:布目痕後板ナデ	7.5YR7/4 にぶい 橙	
176	937		11区		第3層下部	須恵器	杯A	8世紀後半	口径:12.0(1/5) 底径: 8.6(1/3)	外面:ヘラ切り? 内面:ナデ	5Y7/1 灰白	
176	938	101	11区		第3層以下	石製品	砥石		現長:11.5 現幅:10.3 現厚: 2.3	砂岩、砥面1、表面に擦痕		
176	939		11区	第4面	291ピット	土師器	杯A	8世紀中頃	口径:20.0(1/9) 器高:3.6	外面:摩滅、薄くスス付着 内面:放射状 暗文、薄くスス付着、摩滅	5YR6/6 橙	
176	940	96	11区	第4面	277土坑	磁器	龍泉窯系青 磁小碗片	13世紀か		I2類 外面:施釉 内面:施釉	10Y6/2 灰オ リーブ	
176	941		11区	第4面	279溝	須恵器	杯B蓋	8世紀前半	口径:20.6(1/4弱)	外面:ヘラナデ?	N6/ 灰	
176	942		11区	第4面	279溝	土師器	製塩土器	8世紀		外面:指押えナデ 内面:指押えナデ	N6/ 灰	
176	943	98	11区		第4層上部	瓦	軒丸瓦	12~13世紀	瓦当厚:1.0 外縁高:1.3		5Y7/1 灰白	
176	944	96	11区		第4層	磁器	白磁碗	10世紀後半~ 11世紀中頃か	高台径:7.0(1/4強)	XI1類か 外面:施釉(底部露胎)、高台 端部磨耗 内面:施釉	7.5Y8/1 灰白	
176	945	96	11区		第4層		新羅系土器	7~8世紀		外面:列点文1、竹管文、列点文? 内 面:ナデ	N5/ 灰	
176	946		11区		第4層	土師器	杯A	8世紀前半	口径:20.0(1/7) 器高:3.8	外面:剥離 内面:放射状暗文、剥離	7.5YR6/6 橙	
176	947		11区		第4層	須恵器	杯A	8世紀後半	口径:13.2(1/4弱) 器高:3.4	外面:ヘラ切り 内面:ナデ	N6/、N5/ 灰	
176	948		11区		第4層	須恵器	杯B蓋	8世紀前半	口径:18.0(1/4) つまみ径: 2.8(3/4) 器高:3.2	外面:ヘラケズリ(砂:→)、灰かぶり、つ まみに溶着あり 内面:ナデ	2.5Y7/3 浅黄	

掲載遺物観察表 (25)

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) ()内は残存率	調整等(ヨコナデ、回転ナデは省略) (砂→は、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
176	949		11区		第4層	須恵器	皿C	8世紀前半	口径:19.6(1/15) 底径:15.6(1/7) 器高:2.4	外面:ヘラケズリ(砂:→) 内面:ナデ	5Y8/1 灰白	
176	950		11区		第4層	須恵器	盤	8世紀後半	底径:24.6(1/8)		N6/ 灰	
176	951		11区		第4層	須恵器	甗	6世紀後半		図上復元 外面:波状文(6条)、沈線文1、波状文(8条か)、沈線文1、凸線1 内面:絞り目	5Y7/1 灰白	
176	952		11区		第4層	灰釉陶器	椀	10世紀前半		外面:ヘラケズリ、施釉 内面:施釉	5Y7/1 灰白、(釉)5Y7/3 浅黄	
176	953		11区		第4層	土師器	製塩土器	8世紀後半か		外面:指押エナデ 内面:布目痕	10YR6/3 にぶい黄橙	
176	954		11区		第4層	土師器	製塩土器	8世紀後半か		外面:摩滅 内面:摩滅	10YR7/2 にぶい黄橙	
176	955		11区		第4層下部	須恵器	小型壺?	9世紀か		外面:ナデ 内面:絞り目後回転ナデ、ナデ	5Y7/1 灰白	
176	956		11区	第5面	377ビット	土師器	皿	10世紀後半か	口径:11.0(1/8) 器高:1.8	外面:指押エナデ 内面:摩滅	10YR8/4 浅黄橙	
176	957		11区	第5面	377ビット	黒色土器A類?	椀	10世紀後半か	口径:15.0(若干のみ) 高台径:6.8(3/5)	図上復元 外面:摩滅(一部ヘラミガキ残る) 内面:摩滅	2.5Y4/1 黄灰、10YR4/1 褐灰	
176	958		11区	第5面	537ビット	須恵器	鉢	8世紀中頃	口径:18.0(1/9)		2.5YR8/1 灰白	
176	959		11区	第5面	539ビット	土師器	製塩土器	8世紀	内径:21.0(1/8)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR7/6 明黄褐	
176	960		11区	第5面	568土坑	土師器	皿A	8世紀中頃	口径:13.0(1/6) 器高:2.3	外面:摩滅 内面:摩滅	5YR6/8 橙、10YR7/3 にぶい黄橙	
176	961		11区		第5層	土師器	小皿	10世紀末か	口径:10.0(1/5)	て字状 外面:指押エナデ	2.5Y8/2 灰白	
176	962		11区		第5層	黒色土器A類	杯	9世紀中頃か	底径:10.0(1/4)	外面:摩滅 内面:ヘラミガキ後一部暗文	2.5Y7/3 浅黄	
176	963	97	11区		第5層	黒色土器B類	椀	10世紀後半か	口径:14.5(1/10) 高台径:7 器高:5.4	外面:摩滅、底部指押エナデ 内面:沈線1、摩滅	N3/ 暗灰	
176	964		11区		第5層	土師器	高杯	9世紀前半か	口径:32.0(1/12)	外面:摩滅	5YR7/4 にぶい橙	
176	965		11区		第5層	須恵器	杯	6世紀末~7世紀初頭	口径:13.2(若干のみ) 受部直下径:12.8(1/6) 器高:4	外面:ヘラケズリ(砂:→)	2.5Y7/1 灰白	
176	966	97	11区		第5層	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:12.9(3/4) つまみ径:2.8(完) 器高:1.2	外面:回転ヘラケズリ(砂:→)	N7/ 灰白	
176	967		11区		第5層	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:14.0(1/4弱)	外面:ヘラナデ 内面:ナデ	N5/ 灰	
176	968	97	11区		第5層	須恵器	杯B	8世紀末	口径:14.3(3/4) 高台径:10.1(完) 器高:4.7~5.3	内面:回転ナデ後ナデ	5B6/1~5/1 青灰	全体的に焼け歪み
176	969		11区		第5層	須恵器	壺	8世紀後半	高台径:13.0(1/5)	外面:指押エナデ、底部にヘラ記号あり 内面:ナデ	N4/ 灰	
177	970		11区		第5層	須恵器	壺B	8世紀末	口径:25.0(1/8)	外面:平行タタキ?後ナデ 内面:同心円文当て具痕	N6/ 灰	
177	971		11区		第5層	瓦	平瓦	8~9世紀	側面幅:1.8	凸面:縄目タタキ 凹面:布目痕後ナデ	10Y5/1 灰	
177	972		11区	第6面	掘立柱建物1(579ビット)	弥生土器	壺底部	弥VI~庄内	底径:5.1(3/4)	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR7/6 橙、2.5YR6/6 橙	
177	973	97	11区	第6面	掘立柱建物3(337ビット)	須恵器	台付長頸壺	8世紀前半~中頃	高台径:10.0(完)	外面:頸部沈線1、肩部沈線1、回転ヘラケズリ(砂:→)、底部ヘラケズリ(砂:→)、頸部から肩部一部に自然釉付着	5B5/1 青灰~5B4/1 暗青灰(釉)10Y3/2 オリーブ黒	
177	974		11区	第6面	掘立柱建物3(722ビット)	須恵器	皿A	8世紀前半~中頃	口径:21.0(1/4) 器高:2.0	外面:回転ヘラケズリ(砂:→) 内面:ナデ	5Y7/1 灰白	
177	975		11区	第6面	掘立柱建物3(722ビット)	須恵器	壺A	8世紀前半~中頃	口径:11.4(1/4)	外面:頸部に蓋片付着(重ね焼き痕跡)、自然釉付着、細い幅のヘラケズリ後ナデか	7.5Y6/1 灰、N3/ 暗灰	
177	976		11区	第6面	526ビット	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:15.0(1/4) つまみ径:3.2(完) 器高:2.4		N6/ 灰	
177	977		11区	第6面	525-526ビット	須恵器	壺	8世紀末か	口径:21.0(1/2弱)	外面:平行タタキ後カキ目 内面:同心円文当て具痕	N6/ 灰	
177	978		11区	第6面	603or604ビット	須恵器	壺A蓋	8世紀後半	口径:16.0(1/8) つまみ径:2.6(完) 器高:3.3	内面:ナデ	N6/ 灰	
177	979		11区	第6面	605ビット	土師器	製塩土器	8世紀		外面:指押エナデ 内面:指押エナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	
177	980		11区	第6面	696ビット	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:14.2(1/4弱)	外面:回転ヘラケズリ後ナデ?、口縁部自然釉付着	5B6/1~5/1 青灰、10BG4/1 暗青灰	
177	981		11区	第6面	696ビット	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:14.6(1/10)	外面:回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ後ナデ	5B6/1~5/1 青灰	
177	982		11区	第6面	840ビット	瓦	平瓦	8~9世紀	側面幅:1.7 広端面幅:2.0	凸面:縄目タタキ 凹面:布目痕	2.5Y8/2 灰白、5YR7/6 橙	
177	983		11区	第6面	844ビット	瓦	平瓦	8~9世紀	側面幅:1.7	凸面:縄目タタキ 凹面:布面痕	N7/ 灰白	
178	984		11区	第6面	674土坑	須恵器	杯B蓋	8世紀末	口径:15.5(1/7)	外面:ナデ	N6/ 灰	
178	985		11区	第6面	674土坑	須恵器	杯B	8世紀末	高台径:9.0(1/3)	外面:ナデ 内面:ナデ	N6/ 灰	
178	986		11区	第6面	674土坑	須恵器	壺	8世紀末	高台径:9.6(1/2)	外面:ナデ	7.5Y7/1 灰白	
178	987		11区	第6面	674土坑	須恵器	壺	8世紀後半か	口径:18.0(1/4)	外面:平行タタキ 内面:同心円文当て具痕	N5/ 灰、10YR6/1 褐灰	
178	988	99	11区	第6面	674土坑	瓦	丸瓦	8~9世紀	広端面幅:17.5 広端面厚:1.4 狭端面幅:12.7 狭端面厚:1.5 側面厚:1.6	無段式 凸面:縄目タタキ後ナデ 凹面:布目痕	2.5Y8/2 灰白	
178	989		11区	第6面	674土坑	瓦	丸瓦	8~9世紀	側面幅:1.3	無段式 凸面:縄目タタキ(摩滅) 凹面:布目痕(摩滅)	7.5Y7/2 灰白	
178	990	102	11区	第6面	674土坑	金属製品	不明鉄製品		現長:(本体)4.7 現幅:(本体)6.7 径:0.6~0.7			
178	991		11区	第6面	803土坑	須恵器	杯	6世紀末~7世紀初頭	口径:14.0(1/14)		N5/ 灰	
178	992		11区	第6面	426溝	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:18.0(1/5)	外面:ナデ	N7/ 灰白	

掲載遺物観察表 (26)

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) ()内は残存率	調整等(ヨコナデ、回転ナデは省略) (砂→は、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
178	993		11区	第6面	652溝	土師器	鉢	8世紀	口径:41.4(1/7)	外面:粗いハケメ(4条/cm)、スス付着 内面:粗いハケメ後ヨコナデ、ナデ、指押エナデ	7.5YR5/2 灰褐	
178	994		11区	第6面	652溝	須恵器	杯B蓋	8世紀末か	口径:16.2(1/4)	外面:ナデ 内面:ナデ	N6/ 灰	
178	995		11区	第6面	802溝	須恵器	杯A	8世紀前半	口径:17.0(1/8) 器高:4.2	外面:粗いヘラケズリ(砂:←)	5Y6/1 灰	
179	996		12区		第0層	須恵器	壺C?	8世紀前半	高台径:7.0(1/3)	外面:沈線の退化した凹み1、ヘラケズリ	N6/ 灰	
179	997		12区		第2層最下部	磁器	白磁碗	12世紀前半か		V3a類か 外面:施釉 内面:施釉	5Y7/2 灰白	
179	998		12区		第2層最下部	磁器	白磁碗	12世紀後半か		VIII-3?類 外面:施釉 内面:施釉	10Y8/1 灰白	
179	999		12区		第2層最下部	磁器	白磁碗	12世紀		III類 外面:施釉(貫入あり) 内面:施釉(貫入あり)	2.5Y8/2 灰白	
179	1000		12区		第2層最下部	磁器	白磁碗	12世紀後半か		IV1b類 外面:施釉 内面:施釉	N6/ 灰白	
179	1001		12区		第2層最下部	瓦器	椀	12世紀末~13世紀初頭	口径:15.2(1/7) 高台径:6.4(若干のみ) 器高:4.7	楠葉型 外面:摩滅 内面:沈線1、摩滅	N5/ 灰	
179	1002		12区		第2層最下部	土師器	羽釜	12世紀か	口径:26.0(1/5)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR7/3 にぶい黄橙	
179	1003		12区		第2層最下部	瓦質土器	浅鉢か	14~15世紀か		外面:スタンプ(菊花文) 内面:ナデ	N5/ 灰	
179	1004		12区		第2層最下部	灰釉陶器	椀	9世紀後半か	高台径:6.0(1/7) 高台基部径:6.0(1/4)	外面:高台一部施釉 内面:厚く施釉、重ね焼痕あり	N8/ 灰白	
179	1005		12区	第3面	33溝	須恵器	杯A	8世紀末	口径:11.0(1/6) 器高:2.7	外面:底部未調整	N5/ 灰	
179	1006		12区	第3面	48土坑	土師器	鍋A	8世紀前半~中頃	口径:31.8(1/12)	外面:ハケメ 内面:ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙、5YR7/4 にぶい橙	
179	1007		12区	第3面	48土坑	須恵器	壺Q	8世紀前半~中頃	高台内径:7.7(一部欠) 稜径:16.2(1/2強)	外面:回転ヘラケズリ(砂:←)、底部にヘラ記号あり 内面:ナデ	N4/ 灰、N7/ 灰白	
179	1008	102	12区	第3層	石製品	石鏃	縄文~弥生	現長:2.9 現幅:2.2 現厚:0.4		サヌカイト 凹基式	N5/ 灰	
179	1009		12区	第3層	須恵器	杯B蓋	8世紀末	口径:15.0(1/4)			N5/ 灰	
179	1010		12区	第3層	須恵器	杯B	8世紀末	高台径:11.0(1/4)		外面:ナデ、底部にヘラ痕あり 内面:ナデ	7.5Y6/1 灰	
179	1011		12区	第3層	須恵器	壺Q	8世紀後半か	稜径:14.0(1/3) 高台基部径:8.8~10.0(1/4)		外面:ナデ 内面:ナデ	N5/ 灰	
179	1012		12区	第4面	89竪穴建物	土師器	杯A	8世紀中頃	口径:16.0(1/6)	外面:摩滅 内面:ナデ?	5YR6/6 橙	
179	1013		12区	第4面	89竪穴建物	土師器	杯A	8世紀中頃	口径:20.0(1/7) 器高:3.4	外面:指押エナデ後ヘラケズリ 内面:放射状暗文、連結輪状暗文	7.5YR7/6 橙	
179	1014		12区	第4面	89竪穴建物	土師器	杯C	8世紀中頃	口径:18.0(1/11) 器高:2.8	外面:ヨコナデ一部ヘラミガキ、ナデ? 薄くスス?付着、底部摩滅 内面:放射状暗文、底部摩滅	5YR5/4 にぶい赤褐	
179	1015		12区	第4面	89竪穴建物	土師器	杯C	8世紀中頃	口径:18.2(1/4) 器高:2.7	外面:ヨコナデ後一部ヘラミガキ、ヘラケズリ? 内面:底部摩滅	5YR6/6 橙	
179	1016		12区	第4面	89竪穴建物	土師器	杯B	8世紀中頃	口径:15.2(若干のみ) 高台径:12.0(1/8) 器高:3.3	外面:摩滅(一部ヘラミガキ残る) 内面:放射状暗文	5YR6/6 橙	
179	1017		12区	第4面	89竪穴建物	土師器	椀C	8世紀中頃	口径:13.0(1/5)	外面:摩滅 内面:沈線1、摩滅、工具痕あり	5YR6/6 橙	
179	1018		12区	第4面	89竪穴建物	土師器	高杯	8世紀中頃	口径:30.0(1/7)	外面:ヘラミガキ 内面:摩滅	5YR6/6 橙、10YR7/3 にぶい黄橙	
179	1019		12区	第4面	89竪穴建物	土師器	鉢B	8世紀中頃	口径:16.0(1/8)	外面:ヘラミガキ 内面:摩滅	7.5YR7/4 にぶい橙	
179	1020		12区	第4面	89竪穴建物	土師器	壺A	8世紀中頃	口径:26.0(1/10)	外面:スス一部付着	10YR7/4 にぶい黄橙	
179	1021		12区	第4面	89竪穴建物	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:12.4(1/5) つまみ径:2.1(完) 器高:2.2	内面:ナデ	N6/ 灰	
179	1022		12区	第4面	89竪穴建物	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:15.4(2/5)	外面:ヘラナデ? 内面:ナデ	N6/ 灰	
179	1023		12区	第4面	89竪穴建物	須恵器	杯B	8世紀中頃	口径:11.8(1/7) 高台径:7.8(2/3) 器高:3.8	外面:底部にヘラ記号あり	N5/ 灰	
179	1024		12区	第4面	89竪穴建物	土師器	製塩土器	8世紀	口径:13.0(1/7)	外面:指押エナデ 内面:ナデ	7.5YR7/6 橙	
179	1025		12区	第4面	89竪穴建物	土師器	製塩土器	8世紀	口径:13.8(1/7)	外面:指押エナデ 内面:指押エナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	
179	1026		12区	第4面	89竪穴建物	瓦	丸瓦	8~9世紀	広端部幅:14.6 側面幅:1.5 側面幅:2.2	有段式 凸面:摩滅、ナデか 内面:布目痕	N7/ 灰白、N6/ 灰	
180	1027	97	12区	第4面	掘立柱建物2(153ピット)	磁器	白磁碗	12世紀第4四半期か	高台径:6.0(1/2強)	V1a類か 外面:凹凸のある文様のようなものあり、ヘラケズリ、施釉(貫入あり)、高台端部磨耗 内面:圏線1、施釉(貫入あり)	2.5Y8/2 灰白(釉)5Y8/2 灰白	
180	1028		12区	第4面	掘立柱建物2(178ピット)	土師器	小皿	12世紀後半か	口径:9.0(1/4強) 器高:1.6	外面:指押エナデ、摩滅 内面:摩滅	10YR8/3 浅黄橙	
180	1029		12区	第4面	掘立柱建物2(178ピット)	土師器	小皿	12世紀後半か	口径:9.0(1/5)	外面:摩滅(指押エナデか) 内面:摩滅	2.5Y8/3 淡黄	
180	1030		12区	第4面	掘立柱建物2(232ピット)	土師器	皿	12世紀後半か	口径:15.6(1/4)	外面:指押エナデ 内面:摩滅	10YR6/4 にぶい黄橙	
180	1031		12区	第4面	掘立柱建物2(232ピット)	瓦器	椀	12世紀後半か	口径:15.0(1/3)	楠葉型 外面:摩滅 内面:沈線1、摩滅	10Y5/1 灰	
180	1032	99	12区	第4面	掘立柱建物2(226ピット)	瓦	平瓦	8~9世紀	側面厚:1.7 広端面厚:1.9	凸面:縄目タタキ 凹面:ナデ、布目痕	7.5Y5/1 灰	
180	1033	100	12区	第4面	掘立柱建物2(226ピット)	瓦	平瓦	8~9世紀	広端面幅:29.0 側面厚:2.1 側面厚:1.7	凸面:縄目タタキ 凹面:布目痕後一部板ナデ	7.5Y6/1 灰	
180	1034		12区	第4面	57ピット	須恵器	杯A	8世紀末~9世紀初頭か	口径:11.2(若干のみ) 底径:7.0(1/4) 器高:3.2	外面:ヘラ切り	7.5Y5/1 灰	
180	1035		12区	第4面	57ピット	須恵器	杯B	8世紀末	口径:16.0(1/11) 高台径:13.1(1/4) 器高:4.1		2.5Y7/3 浅黄	生焼け
180	1036		12区	第4面	72ピット	須恵器	杯A	8世紀末	口径:9.4(1/4弱)	外面:ナデ、ヘラ切り 内面:ナデ	N5/ 灰	

掲載遺物観察表 (27)

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) ()内は残存率	調整等(ヨコナデ、回転ナデは省略) (砂→は、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
180	1037	102	12区	第4面	72ピット	金属製品	鉄釘?		現長:1.1 現幅:(サビ含)0.5(本体)0.4 厚:0.4			
180	1038		12区	第4面	124ピット	土師器	皿	11世紀後半~12世紀初頭か	高台径:8.4(1/2弱)	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR8/3 浅黄橙	
180	1039		12区	第4面	125ピット	瓦器	小皿	13世紀前半か	口径:10.0(1/6) 器高:1.5	外面:摩滅、スス付着 内面:摩滅、スス付着	N3/ 暗灰	
180	1040		12区	第4面	126ピット	瓦器	椀	12世紀か	口径:16.0(1/4弱)	大和型か 外面:摩滅 内面:沈線1、摩滅	7.5Y4/1 灰	
180	1041		12区	第4面	130ピット	土師器	小皿	13世紀か	口径:8.0(1/4) 器高:1.5	外面:摩滅、指押えナデ 内面:摩滅	7.5YR8/4 浅黄橙	
180	1042		12区	第4面	150ピット	土師器	皿	11世紀後半~12世紀初頭か	高台径:6.6(1/2弱)	外面:ナデ? 内面:ナデ?	2.5Y7/3 浅黄	
180	1043		12区	第4面	174ピット	土師器	皿	12世紀前半か	口径:14.5(1/7) 器高:2.3	外面:摩滅 内面:摩滅	2.5Y7/3 浅黄	
180	1044		12区	第4面	174ピット	瓦器	椀	12世紀	口径:14.8(1/10) 高台径:5.8(1/3) 器高:5.8	楠葉型 外面:摩滅 内面:沈線1、摩滅	7.5Y6/1 灰	
180	1045	97	12区	第4面	179ピット	磁器	白磁碗	12世紀中頃~13世紀前半か		Ⅲ3類か 外面:施釉(貫入あり) 内面:圏線1、施釉	5Y8/2 灰白	
180	1046		12区	第4面	211ピット	瓦器	椀	12世紀前半か	口径:16.0(1/6)	楠葉型 外面:摩滅 内面:沈線1、摩滅	7.5Y4/1 灰	
180	1047		12区	第4面	217ピット	土師器	皿	12世紀後半か	口径:15.0(1/3) 器高:2.8	外面:指押えナデ、摩滅 内面:摩滅	7.5YR7/6 橙	
180	1048		12区	第4面	235ピット	瓦器	小皿	12世紀後半か	口径:11.0(1/5弱) 器高:1.6	外面:摩滅 内面:摩滅	10Y5/1 灰	
181	1049	97	12区	第4面	249ピット	磁器	白磁碗	12世紀第4四半期	口径:16.0(1/10)	Ⅳ1a類 外面:施釉(貫入あり) 内面:圏線1、施釉(貫入あり)	7.5Y7/2 灰白	
181	1050	102	12区	第4面	249ピット	石製品	砥石		現長:4.8 現幅:4.2 現厚:2.9	凝灰岩 砥面3		
181	1051		12区	第4面	277ピット	土師器	壺C	8世紀	口径:24.0(1/8)	外面:ハケメ、摩滅 内面:摩滅	7.5YR7/6 橙	
181	1052		12区	第4面	279ピット	瓦	平瓦	8世紀		凸面:格子状タタキ 凹面:布目痕(凹凸あり)	7.5YR6/6 橙	
181	1053		12区	第4面	289ピット	須恵器	壺	8世紀後半か	口径:22.0(1/9)	内面:自然釉付着	5Y6/1 灰	
181	1054	97	12区	第4面	85土坑	磁器	白磁皿	12世紀後半~13世紀前半か		Ⅴ類 外面:施釉(貫入あり) 内面:圏線1、施釉(貫入あり)	5Y7/2 灰白	
181	1055	97	12区	第4面	85土坑	磁器	白磁碗	12世紀後半か	口径:14.0(1/6)	XⅡ1類か 外面:回転ヘラケズリ、施釉 内面:太い深い圏線1、施釉	2.5GY8/1, 5Y8/1 灰白	
181	1056	97	12区	第4面	85土坑	磁器	白磁碗	12世紀後半か		Ⅵb類か 外面:ヘラ描き、施釉 内面:施釉	5Y7/2 灰白	
181	1057	97	12区	第4面	85土坑	磁器	白磁碗	13世紀第1四半期		Ⅳ2類 外面:薄い施釉 内面:薄い施釉	5Y7/2 灰白	
181	1058		12区	第4面	85土坑	灰釉陶器	小皿	12世紀前半か	高台径:4.2(1/4)	内面:施釉	2.5Y8/1 灰白	
181	1059		12区	第4面	85土坑か	土師器	小皿	11世紀後半か	口径:8.4(1/6) 器高:0.9	て字状 外面:指押えナデ 内面:ナデ	10YR8/4 浅黄橙	
181	1060	97	12区	第4面	85土坑	瓦器	椀	12世紀後半	口径:15.0(1/11)	楠葉型 外面:指押え 内面:沈線1、ヘラミガキ	N5/ 灰	
181	1061	97	12区	第4面	85土坑	瓦器	椀	12世紀後半か	口径:5.8(一部欠)	外面:摩滅 内面:摩滅、平行線状暗文	N6/ 灰	
181	1062		12区	第4面	85土坑	瓦	丸瓦	8~9世紀	連結面幅:1.8 側面幅:2.3	凸面:縄目タタキ後ナデ 凹面:布目痕	5Y7/1 灰白	
181	1063		12区	第4面	85土坑	瓦	丸瓦	8~9世紀	広端面幅:1.8 側面幅:1.9	凸面:縄目タタキ後板ナデ 凹面:布目痕後一部板ナデ、指押え	N5/ 灰	
181	1064	100	12区	第4面	85土坑	瓦	丸瓦	8~9世紀		凸面:縄目タタキ後ナデ 凹面:布目痕、布目痕後ハケメ?	5Y6/1 灰	
181	1065		12区	第4面	85土坑	瓦	平瓦	8~9世紀	広端面幅:2.5 側面幅:2.0	凸面:縄目タタキ 凹面:ナデ、布目痕後一部板ナデ	2.5Y8/1 灰白	
181	1066	100	12区	第4面	85土坑	瓦	平瓦	8~9世紀		凸面:縄目タタキ 凹面:板ナデ、布目痕	5Y8/1 灰白	
182	1067		12区	第4面	85土坑	瓦	平瓦	8~9世紀	広端面幅:1.4 側面幅:1.4	凸面:縄目タタキ(摩滅) 凹面:布目痕(摩滅)	2.5Y8/1 灰白	
182	1068		12区	第4面	85土坑	瓦	平瓦	8~9世紀	広端面幅:1.7 側面幅:1.4	凸面:縄目タタキ後一部指押え 凹面:布目痕後一部ナデ	2.5Y7/1 灰白	
182	1069		12区	第4面	86土坑	須恵器	杯A	8世紀中頃	口径:12.4(1/6) 底径:9.2 器高:3.4	外面:ヘラ切り 内面:ナデ	2.5Y7/3 浅黄	生焼け
182	1070		12区	第4面	88土坑	須恵器	杯B蓋	8世紀中頃	口径:18.0(1/5)	内面:ナデ	N5/ 灰	
182	1071		12区	第4面	88土坑	須恵器	杯C	8世紀中頃	口径:16.4(1/8) 器高:5.0	外面:ナデ、ヘラ切りかヘラナデ 内面:沈線1、回転ナデ後板ナデ?、ナデ	N6/ 灰	
182	1072		12区	第4面	88土坑	須恵器	壺Q	8世紀後半	稜径:17.0(1/2強)	外面:自然釉付着	5Y7/1 灰白(釉) 5Y6/2 灰オリーブ	
182	1073		12区	第4面	90土坑	土師器	杯A	8世紀後半	口径:13.0(1/6) 器高:3.8	外面:摩滅 内面:摩滅	7.5YR6/6 橙	
182	1074		12区	第4面	90土坑	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:17.0(1/6)	外面:回転ヘラナデ?	N7/ 灰白	
182	1075	97	12区	第4面	90土坑	須恵器	杯B蓋	8世紀後半	口径:18.2(3/5) つまみ径:2.7(一部欠) 器高:2.5	内面:ナデ	5Y7/1 灰白	
183	1076	100	12区	第4面	78土坑	瓦	丸瓦	8世紀初頭	側面厚:1.4 狭端部厚:1.3	無段式 凸面:ナデ 凹面:布目痕	7.5Y3/1 オリーブ黒	
183	1077		12区	第4面	78土坑	瓦	平瓦	8世紀初頭	狭端面幅:1.0 側端面幅:1.3	凸面:ナデ一部格子状タタキ 凹面:布目痕後一部板ナデ、楠巻の痕跡あり	7.5Y3/1 オリーブ黒	
183	1078	100	12区	第4面	78土坑	瓦	平瓦	8世紀初頭	側面厚:1.4 狭端部厚:1.0	凸面:摩滅、一部格子状タタキ残 凹面:布目痕、楠巻の痕跡あり	7.5Y4/1 灰	
183	1079	100	12区	第4面	78土坑	瓦	平瓦	8世紀初頭	側面厚:1.4 狭端部厚:1.3	凸面:一部格子状タタキ 凹面:布目痕、楠巻の痕跡あり	5Y3/1 オリーブ黒	

掲載遺物観察表 (28)

挿図番号	図番号	図版番号	地区	遺構面	遺構・層名	種類	器種	時期	法量 (cm) ()内は残存率	調整等(ヨコナデ、回転ナデは省略)(砂→は、ヘラケズリで砂が動いた方向を示す)	外面色調	備考
183	1080		12区	第4面	78土坑	瓦	平瓦	8世紀初頭	側端面幅:1.5	凸面:格子状タタキ、ナデ? 凹面:布目痕	10YR6/4 にぶい黄橙	
184	1081		12区	第4面	78土坑	瓦	平瓦	8世紀初頭	側端面幅:1.8	凸面:ナデ一部格子状タタキ 凹面:布目痕、桶巻の痕跡あり	2.5Y8/3 淡黄、N4/ 灰	
184	1082	100	12区	第4面	78土坑	瓦	平瓦	8世紀初頭	広端面厚:1.1 側面厚:1.4	凸面:摩滅 凹面:布目痕、桶巻の痕跡あり	7.5Y5/1 灰	
184	1083		12区	第4面	78土坑	瓦	平瓦	8世紀初頭	側端面幅:1.1	凸面:一部格子状タタキ 凹面:布目痕、桶巻の痕跡あり	N4/ 灰	
184	1084		12区	第4面	78土坑	瓦	平瓦	8世紀初頭	側端面幅:1.1 広端面幅:1.0	凸面:摩滅(ナデか) 凹面:布目痕、桶巻の痕跡あり	N4/ 灰、7.5Y7/1 灰白	
184	1085	102	12区	第4面	78土坑	金属製品	鋳滓		現長:4.4 現幅:5.1 厚:1.9			鉄
184	1086		12区	第4面	80溝	須恵器	杯B	8世紀末~9世紀初頭	口径:15.0(1/4) 高台径:11.6(1/4) 器高:5.4	外面:ナデ	N6/ 灰	
184	1087		12区	第4面	80溝か	須恵器	壺	8世紀か	口径:40.0(1/11)	外面:凸帯	N7/ 灰白、N3/ 暗灰	
184	1088		12区	第4面	80溝・85土坑	瓦	平瓦	8~9世紀	広端面幅:1.6 側面幅:1.8	凸面:縄目タタキ 凹面:布目痕後板ナデ	2.5Y6/1黄灰	
184	1089		12区	第4面	81溝	土師器	小皿	12世紀末~13世紀初頭か	口径:10.0(1/4弱) 器高:1.9	外面:摩滅 内面:摩滅	10YR7/2 にぶい黄橙	
184	1090		12区	第4面	81溝	瓦器	椀	13世紀前半か	口径:13.0(1/6)	桶葉型 外面:摩滅 内面:沈線1、摩滅	N3/ 暗灰	
184	1091	97	12区	第4面	74落ち込み	磁器	白磁碗	12世紀前半		IV20類 外面:施釉 内面:施釉	7.5Y7/2 灰白	
184	1092		12区	第4面	74落ち込み	土師器	皿A	8世紀末	口径:21.6(1/4弱) 器高:2.5	外面:摩滅 内面:摩滅	2.5YR6/8 橙	
184	1093		12区	第4面	74落ち込み	須恵器	杯B	8世紀後半	口径:15.8(1/8) 高台径:12.0(1/4) 器高:4.4	外面:ヘラ切り 内面:ナデ	N6/ 灰	
184	1094		12区	第4面	74落ち込み	須恵器	壺C	8世紀	口径:36.0(1/10)	外面:把手痕あり(4箇所)、摩滅 内面:摩滅、工具痕?あり	N7/ 灰白	
写のみ	1095	75	10区(A2)	第2面	1014ピット	紙製品	用紙	近代以降	長:24.0 幅:32.0	「株式会社 神戸米穀株式取引所仲買人 売買元帳」B4判		
写のみ	1096	75	10区(A2)	第2面	1014ピット	紙製品	用紙	近代以降	長:17.0 幅:12.0	「株式会社 神戸米穀株式取引所仲買人 売買元帳」		
写のみ	1097	75	10区(A2)	第2面	1014ピット	紙製品	外箱	近代以降	長:9.0 幅:8.5	ゼネラルマスク		
写のみ	1098	75	10区(A2)	第2面	1014ピット	紙製品	外箱	近代以降	長:8.0 幅:7.5	エーワンマスク		
写のみ	1099	75	10区(A2)	第2面	1014ピット	紙製品	外箱	近代以降	長:8.0 幅:7.5	墨で何かが書かれている		
写のみ	1100	80	12区	第1・2面	2建物	金属製品	木ネジ・釘	近代以降		木ネジ:35mm・40mm・45mm・50mm・60mm・65mm・70mm・75mm・80mm・90mm・100mm・105mm・125mm・130mmの釘、ワッシャー付釘		
写のみ	1101	81	11区	第3面	2枳	スレート製品	波板	近代以降	現長:約45 現幅:約50			
写のみ	1102	81	8区	第1面	8石組溝	スレート製品	瓦	近代以降	現長:約16 現幅:10 高さ:約5	袖付		
写のみ	1103	81	11区	第2層		スレート製品	瓦	近代以降	現長:約13.5 現幅:約9.5			
写のみ	1104	81	12区	第1面	2建物	コンクリート製品	床下換気口	近代以降	現長:約21.5 現幅:約27.5 厚:約1.5			
写のみ	1105	81	11区	第2層		コンクリート製品	?	近代以降	現長:約14 現幅:約27.5 厚:約1.5	斜格子状の網目が残る		
写のみ	1106	82	12区	第1層		コンクリート製品・瓦	堅瓦壁	近代以降	現長:約55 現幅:約40 厚:約10	平瓦がコンクリートの中に埋められている		
写のみ	1107	82	12区	第1層		コンクリート製品・瓦	堅瓦壁	近代以降	現長:約47 現幅:約22 厚:約12.5	平瓦がコンクリートの中に埋められている		
写のみ	1108	82	12区	第1層		コンクリート製品・瓦	堅瓦壁	近代以降	現長:約66 現幅:約22 厚:約16	平瓦がコンクリートの中に埋められている		
写のみ	1109	82	12区	第1層		コンクリート製品・瓦	堅瓦壁	近代以降	現長:約32 現幅:約25 厚:約10.5	平瓦がコンクリートの中に埋められている		
写のみ	1110	82	12区	第1層		コンクリート製品・瓦	堅瓦壁	近代以降	現長:約30 現幅:約23 厚:約9	平瓦がコンクリートの中に埋められている		
写のみ	1111	82	10区	第1面	2建物	金属製品	引戸下枠	近代以降	現長:約73 幅:6.5 高さ:約2			鉄
写のみ	1112	85	10区(A2)	第1層		布製品	葉包	近代以降	現長:約6.6 現幅:約8.1	緑色		
写のみ	1113	85	10区(A2)	第1層		布製品	葉包	近代以降	現長:約7.3 現幅:約7.3	緑色		
写のみ	1114	85	10区(A2)	第1層		布製品	葉包	近代以降	現長:約6.2 現幅:約7.1	「昭十三 11 〽九二式歩砲(乙)甲4」		
写のみ	1115	85	10区(A2)	第1層		布製品	葉包	近代以降	現長:約5.0 現幅:約7.2	「昭十三 12 〽九二式4」		
写のみ	1116	85	10区(A2)	第1層		布製品	葉包	近代以降	現長:約7.3 現幅:約5.1	一番上にあった		
写のみ	1117	85	10区(A2)	第1層		布製品	葉包	近代以降	現長:約4.3 現幅:約7.3	上から2番目にあった「昭十三? 〽九二」		
写のみ	1118	85	10区(A2)	第1層		布製品	葉包	近代以降	現長:約5.9 現幅:約7.3	上から3番目にあった「九二式砲(乙)丁3」		
写のみ	1119	85	10区(A2)	第1層		布製品	葉包	近代以降	現長:約7.6 現幅:約4.8	上から4番目にあった「十三 〽九二式歩砲(乙)4」		
写のみ	1120	85	10区(A2)	第2面	37溝	布製品	葉包	近代以降	現長:約7.2 現幅:約25.5(ひも含まず)	麻状		